
その力の先にあるもの

TR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その力の先にあるもの

【Nコード】

N2721Q

【作者名】

TR

【あらすじ】

違う過去を持つ魔法使い。

一人は過ちから学び新たな夢を持ち、もう一人は過ちにより本当の心を失い冷酷な魔法使いとなった。

この物語は、そんな真反対の魔法使い達が描くお話です。

本作は作中で残酷的な描写があります。

また、メアリース（チート）も少なからず存在しておりますので、

そう言った物が苦手な方は、ご覧にならない事をお勧めします。

*誤字脱字、アドバイス等ございましたら、遠慮なくお知らせください。

本小説は自サイトからの転載です

プロローグ（前書き）

本作は作中で残酷的な描写があります。

また、メアリース（チート）も少なからず存在しておりますので、
そう言った物が苦手な方は、ご覧にならない事をお勧めします。

* 誤字脱字、アドバイス等ございましたら、遠慮なくお知らせくだ
さい。*

プロローグ

時はいつでも流れ続ける。

例え悲しい事が起きたとしても。

Introduce 『過ちから決意へ』

ここは、瑞穂坂にある公園。

そこには3人の少年に囲まれていじめられている少女を、庇うようにして立っている少年がいた。

少年達の囁し立てる言葉に耐えていた少年が次の一言を聞いた途端、我慢の限界になった。

「僕の親せきには魔法使いがいるんだ。お前なんて一瞬で倒すんだからな!!」

当時、母親に魔法は人を幸せにするためのものだ、教えられてきた少年にとってこの言葉は許せないものだった。

「エル・アムダルト・リ・エルス……」

だからこそ、その言葉を紡いでしまったのだ。

その直後に広がるのは、地面に大きく開いた穴やまるでかまいたちが起きたかのように木が裂けている、とても残酷なものだった。

もしかしたら、少女にも怪我を負わせたかもしれない。

しかし、少女は少年にお礼を言ったのだ。

それで分かった。

（魔法が悪いんじゃない。僕がまだ魔法を使えないからいけないんだ）

そして、少年は一つの夢を持った。

それは、『皆を幸せにする魔法使いになる』だった。

しかし、それから数日後、少年は友人の人に預けられた。

「また、会いましょう」

だが、その時の一言は母親の罪悪感から出た言葉なのか、それとも……。

そして、少年は数年後に母親と再開することになる。

それは少年が魔法使いへと歩み始めた始まりに過ぎなかった。

I n t r o d u c e 『 過 ち か ら 決 意 へ 』 E n d

Introduce 『幼き心に残る罪』

「先生、先生!!!」

とある場所で、少年が男性を揺すっていた。

声だけを聞いたなら、普通の光景かもしれないが。

その男性のふくらはぎから出血していた。

それが、少年が犯した罪だった。

「那津音さん……ごめんなさい……那津音さん」

時間がたち、少年は神秘的な空間で横たわる女性の横で涙を流しながら謝罪していた。

女性は二度と目を開けることはなかった。

それが、少年が犯した二つ目の罪だった。

いくつもの傷により、彼は誰も信じようとしない冷血な魔法使いになった。

Introduce 『幼き心に残る罪』 End

新たな決意をした少年と、過去の犯した罪の傷から誰も信じようとしない冷血な魔法使いとなった少年の物語が今、始まる。

第1話「始まりを促す出会い」

俺 小日向雄真 がそいつと出会ったのは俺が中学2年の時だった。

「今日からホームステイする事になった二人よ」

かーさんが突然連れてきたのは、黒髪で背丈は俺と同じくらいの少年と、隣にいる少年と変わらない背丈をした黒髪の少女の二人だった。

「……大森浩介だ」

「大森久美子です。よろしくお願いします」

名前から二人は兄弟と言う事が分かった。

兄の方は赤い瞳に冴囲気から冷血な感じがした。

妹の方は兄とは正反対で赤い瞳に冴囲気は明るかった。

「ありがとうございます、すももさん」

「……どうも」

それから二人は小日向家の一員になった。

しかし、明るい感じの妹とは変わり、兄の方は口数も少なく俺たちとも話そうとしない。

その力の先にあるもの 第1話「始まりを促す出会い」

「浩介、紹介するよ。俺の親友の準と八子だ」

それは、俺と同じ学校にいる時も同じだった。

「渡良瀬準よ、よろしくね、大森君に大森さん」

「高溝八輔っす ああ、こいつは八子と呼べばいいから って、雄真勝手に言うなよ!!」

「よろしくお願いします。準さんに八子さんそれと私の事は久美って呼んでください」

浩介と一緒にいた久美の方はすぐに二人と打ち解けた。

「気安く呼ぶな。それに僕は変態達とは話したくない。僕には関わるな」

浩介の言った言葉に準たちが傷ついた様子だった。

八子の変態……は否定しきれないが、準は変態ではない。

確かに準は男なのに女子の制服を着ているが。

(だけど、一発で準が男と言う事を見破ったなんて、浩介は何者だ？)

俺は心の底でそう疑問に思う事にした。

それから数日後。

「おい」

「何だ？ 浩介」

リビングでテレビを見ていた俺は突然声を掛けた人物に驚いた。

それは、今まで俺達に声を掛けなかった浩介だったからだ。

「お前はなぜ魔法を使う？」

突然の質問だった。

「俺……は」

まるで、俺が魔法を使えることを見破っているような発言だった。

「俺は、みんなを幸せにする魔法使いになるために使っている」

「ふん……！ ばかばかしい」

浩介は俺の答えをそう言うと、立ち上がった。

「……………っ!」

俺は我慢の限界だった。

「しかし、嫌いじゃないぜ。そんなばかばかしい所も」

「え!？」

突然振り向いて言われた言葉に俺は驚いた。

その言葉が、浩介がはじめて俺を評価した言葉だという事に気付いたのはそれからすぐだった。

その次の日。

「おはよう雄真」

「ああ、おはよう……………って浩介、一体何をやってるんだ?」

朝、いつものように起きてリビングに入ると、浩介が台所にいた。

「何って、お弁当を作ってるんだが?」

ごく自然に答える浩介に俺は茫然としていた。

その日の昼休み。

「準さん、ハチそれと雄真。今日お弁当作ったんだが、一緒に食べる？」

「もちろんよ、ね？ハチ」

今までの浩介からは、想像もできない言葉が飛んできた。

「おお、俺も食べさせて貰うぜ」

「右に同じく」

こうして俺達は机をくつつけて昼食を食べることにした。

「一つだけ、勘違いしないで欲しいが、僕はまだあんた達を認めたくてではない。ただ、雄真の気持ちをくんでこれくらいはしてやろうと思っただけだ」

浩介はそう言うと、自分で作った弁当を食べ始めた。

「うーん、この卵焼きおいしい!!」

「どうも」

俺や準は少しずつ浩介の変化に気が付いていた。

それから、浩介は俺達と行動を共にすることが多くなった。

「準さん、この前は変態と言って申し訳なかった」

それが、顕著だったのは、この一言だった。

浩介は準に土下座して謝罪したのだ。

「こ、浩介君、頭を上げて。その気持ちだけで十分だから」

準に促らされて浩介は立ち上がった。

「改めて、僕は太森浩介。よろしく」

「私もよろしくね、浩介君」

二人は握手を交わしていた。

「あの〜、俺が変態だという事は？」

「え？だって、八ちは本当に変態だから謝る必要ないでしょ？」

八ちの言葉に浩介が痛い一言を言い放った。

「そう言われれば、そうよね〜」

さらに準が追い打ちをかける。

八ちはその攻撃に石化していた。

それから数日後。

「雄真、準備はいいか？」

「ああ、いつでも」

誰もいない静かな公園で、俺と浩介は魔法練習をしていた。

「レティア・マルセイーン・ラオールド・ブラスト・セム！！」

浩介から放たれた10発の魔法弾。

「行くぞ、ラジア！！」

俺は、昔からいる相棒に声を掛けた。

『了解です。マスター！！』

俺は呪文を詠唱した。

「……………デイ・ラティル・アムレスト！！」

俺の前に現れた青い防御壁によって魔法弾は防がれた。

「うむ、大体性能は上がってきたようだ。次は少しハードに行くぞ
！！」

浩介との魔法練習はとても面白く、有意義なものだった。

銀色の杖の先端に宝石のようなものを付けているのが、俺のマジッ

クワンド、ラジアだ。

マジッククワンドは魔法使いの証であり、魔法の補助をしてくれる万能補助機でもある。

浩介が持っているのは、水晶玉だった。

そして、中学2年の3月。

それは唐突だった。

「瑞穂坂学園って、八チ本気か？」

「ああ、やってやるんだ！！そして、俺のユーロピアが！！」

発端は、八チの瑞穂坂学園を受験するというものだった。

「まあ、いいんじゃないの。そうだ！！雄真達も受けてみたらどうだ？」

さらに浩介も便乗した。

その後俺は浩介に言いくるめられて、瑞穂坂学園に志望したのだが。

それからは、浩介の勉強会の連続だった。

そして、合格発表日……。

「よっしゃ〜！！受かってるぜ！！！！」

俺と準そして、浩介が合格しているのはいいとして、八子が合格している事に俺達は衝撃を覚えた。

なんせ、直前の模擬試験で判定Dを貰っていたのだから。

こうして、俺達は瑞穂坂学園の生徒となる事になった。

そして、俺達の物語は幕を開ける事になった。

第1話「始まりを促す出会い」（後書き）

ということでした、第1話になりましたが、いかがでしたでしょうか？

早速のお気に入り登録を、ありがとうございました。

第2話「悲劇のバレンタイン前日」(前書き)

今回は少し短めです。

それでは、どうぞ。

第2話「悲劇のバレンタイン前日」

2月13日

ピピピピピピ……

「あれ？準からだ」

今日は日曜の時刻はお昼時。

そろそろお昼にでもしようかと思っていた時、俺の携帯の着信音が響き渡った。

そして、発信者を見て行った言葉が今のだったりする。

「もしもし」

『あ、もしもし。雄真の恋人の準よ』

電話口から聞きなれた女性の声がする。

「気味悪い事を言うな。で、用件は日にち的にまたあれか？」

すでに俺は準の用件が分かっていた。

いや、覚えるようにしているのだ、バレンタインデー前日の『魔の日』(俺と浩介と八手が命名)という地獄の日を。

『あたりよ。さっすが雄真。話が早くて助かるわ』

「それよりも、浩介や八子とかを連れていけばいいじゃないか」

これは俺のいつものやり方だ。

大概は八子が避雷針になつてくれるのだ。

『それがね。浩介君は大事な用があつて行けないっていうし、八子とは連絡が取れないのよ』

(八子の野郎わざとだな……)

浩介はともかく八子はわざと連絡が取れないようにしてるに違いない。

「は？。分かったよ、で何処に行けばいいんだ？」

これ以上抵抗するとロクな目に合わないことぐらいよく分かっていました。

なので、ここはすんなりと従う事にした。

『ありがとう、雄真。それで、場所はとりあえずオブジェ前で10分以内ね』

「は？10分!？」

俺は準のとんでもない言葉に半場固まった。

俺の家からオブジェの方まではどんなに頑張っても15分はかかる。

『あ、それと遅れたら皆の前でケーキを雄真に渡しながら告白するからね』

最後に爆弾発言を言い放つと、一方的に電話を切った。

その力の先にあるもの 第2話「悲劇のバレンタイン前日」

「……………」

これがよく言う開いた口が塞がらないと言つことが。

『変な事を考えてないで、早く行かないと間に合いませんよ?』

「分かってる」

すると、首にかけてある首飾りが淡い光を放つとそうやってきた。

俺は、その声にそう答えると、急いで玄関に向かった。

今日は義理の妹のすももは出掛けていない。

鍵はすももが持っているだろうし、鍵は掛けたまま出ても問題は無い。

「あまり、無駄遣いはしたくないけど、仕方ないよな」

俺は靴をはくと、懐から装置を取り出した。

『そもも言ってられない状態でしょ』

俺は首飾りから青い杖に形状を変えると、装置に魔力を込めながら呪文を唱える。

「エルアムダルト・リ・エルス……」

それは、俺が魔法使いであるという証拠の呪文。

「……カルティエ・フォン・ルクリシア……」

呪文を唱え終わると、俺の脳裏にとある風景が浮かんでくる。

そこは人通りも少ない路地で、俺の希望にピッタリの場所だ。

そして、俺はその場所に転送された。

その場所は予想通り、人気のない路地だった。

俺は、杖 ラジア を首飾りに戻して首に掛けると、若干早歩きでオブジェの前に向かった。

「あ、雄真。早かったんだね。5分で来るなんて、もしかして……あれ？」

今日の前にいる紫色の髪をした一見女に見える奴こそが、渡良瀬準なのだ。

しかし、騙されてはいけない。

こいつはれっきとした男なのだ。

そう、男なのだ（大事な事なので二度言ったぞ？）

毎年、女だと勘違いした者が告白などをしては玉砕している。

その準は俺が魔法を使えるという事を知っている、数少ない奴の人だ。

そんな準が、魔法という言葉を使わないでくれる心遣いが、嬉しく思う俺だった。

「まあ、そんな所だ。それよりも、地獄は早く終わらせたいんだ。とっとと用事を済ませるぞ」

「あ、待ってよ雄真！！」

突然歩き出した俺を慌てて追いかけてくる準。

しかしそんな準に構ってはいられないのだ。

俺は、一刻も早くあの、地獄を終わらせたいのだから。

そして、俺は地獄に突っ込んだ。

第3話「出会い」（前書き）

【注意】本話で残虐的な描写があります。

そう言った物が苦手な方、嫌悪感を持っている方はお読みにならない事をお勧めします。

第3話「出会い」

「……」

「あゝ大漁大漁」

あれから1時間、俺は地獄の中を闊歩していた。

ちなみに目の前にいる奴はものすごく嬉しそうだったが。

まあ、地獄の理由としては、チョコレート売り場で周りは女だらけの中に一人だけ男が紛れているのだから、視線やらなんやらが微妙に痛いのだ。

「あれ？どうしたの、雄真」

「いや、生きてて良かったな」と

俺がげんなりしているのに気づいたのか、準が聞いて来たので、若干嫌味を言うように言い返した。

「そんな雄真だって、女の子にもみくちやにされて幸せだったでしょ？」

「ハチじゃあるまい、そんなことあるわけねえよ」

その力の先にあるもの

第3話「出会い」

そんなやり取りをしていると、準が前方を指さしながら言った。

「あれ、小雪さんじゃない？」

「あ、ほんとだ」

前を見ると、確かにどこかで見た事のある長い黒髪の少女がいた。

「小雪さ〜ん！〜！」

「あら？雄真さんに渡良瀬さん」

準が少しだけ大きな声で小雪さんを呼ぶと、小雪さんは俺達に気付いたのか、俺達の方に向かってくる。

「こんにちは、小雪さん」

今俺達が話しているサラサラの黒髪の少女の名前は高峰小雪と言って、知るものぞ知る名家の娘だ。

なぜ、名家なのかと言えば、高峰家は『先見』の力が優れているのだ。

ちなみに小雪さんの占いは的中率が高く、不幸の的中率は100%というある意味恐ろしい存在なのだ。

そんな彼女に、不幸の予言をされた日には死んでも死にきれない思いをする事になる。

「それにしても、たくさん買い込みましたね。」

小雪さんに軽くからかわれた後俺と準は、小雪さんの持っていたビニール袋に視線を向けた。

しかも中が全てチョコというある意味準を越す量だ。

しかも理由が。

「ここ最近、どんなチョコをプレゼントすればいいのかという内容が多かったの。」

ということだった。

いや、問題はそこではなかった。

小雪さんはバレンタインデーという物を知らなかったのだ。

「それじゃ、どうして他の人があんなに必死になってチョコを買っているって思ったんですか？」

「……巷で大ブーム？」

試しにと聞いてみた問いかけに、珍回答が返ってきた。

その後、俺と準がバレンタインデーについて色々と教える事にした。

「そうですね。これで次から聞かれても大丈夫ですね。それでは、失礼します。」

小雪さんは終始納得した様子で俺達の元から歩いて行った。

(いや、そもそも明日からは聞かれないだろ)

本当に分かったのかが不安になる俺だった。

「それで、この後はどうする?」

「そうだな、とりあえず帰るか」

準の問いかけに俺はそう答える。

そんな中、俺は聞き捨てならない声を聞いたような気がした。

「返してよー!!」

「ん?」

俺は、声が聞こえた方を見た。

そこには女の子を取り囲んで箱のような物　おそらくチョコだろ
うを少年達が投げ合っていた。

「……ちよつと行ってくる」

俺は、そう言うと少年達の元に歩き出した。

その光景があ那时的物と重なって居心地が悪かったのだ。

「雄真なら大丈夫だと思うけど、相手は子供だからね?」

準が釘をさすように言った言葉を聞きながら俺は、少年達の元に向かう。

「そこまでにしたら?」

「え?」

しかし、俺が少年たちに声を掛ける前に、俺とは別の少女の声が聞こえた。

声のした方には栗色の髪をした少女がいた。

「あれ?神坂春姫ちゃんじゃない?」

すると、いつの間にか俺の隣に来ていた準が俺にそう言った。

(なるほど、彼女が……)

俺は前に鈴莉母さんから聞いていた少女だと理解した。

俺達の通う『瑞穂坂学園』の魔法科でClass Bを取得している魔法使い。

それが俺が知っている目の前の『神坂春姫』という少女だ。

「うるせえよ、ババア」

「あら、ずいぶん口が悪いのね。女の子をいじめるとモテないぞ

「？」

少年の一番言っただけにはいけない言葉にも動じずに、神坂さんは物やわらかな口調で注意をしている。

しかし、このままでは埒が明かない。

「おい、もういい加減にしたらどうだ？弱い者いじめなんて男の恥だぞ」

俺は、少年達にそう言いながら近寄った。

一瞬神坂さんが驚いたような顔をしたが、それは気にしないようにした。

「ジジイは引っ込んでろよ！！」

「あっ！！」

少年は、俺の言葉にそう言つと、箱を地面にたたきつけた。

それを見て女の子は悲しげな表情をした。

そして、少年達は走って逃げて行った。

だが、逃げられないだろう。

だって、あそこにはあいつがいるんだから。

俺はそっちから視線を外すと、潰れている箱を涙を流しながら持つ

ている女の子の方を見た。

どうやって慰めてあげようかと考えていると、神坂さんが女の子に声を掛けて何かを言った。

「おまじない？」

「そう、おまじない。お姉ちゃんがいいよって言うまで目を閉じててね」

女の子は神坂さんの言葉を信じたのか、箱を渡すと目を閉じた。

「ソプラノ……」

神坂さんは壊れた箱に向けて、マジックワンドを掲げた。

「エル・アムダルト・リ・エルス……」

神坂さんの呪文に反応して、箱は淡い光に包まれる。

それは、とても優しい光に感じられた。

「デイ・アムンマルサス……」

そして、その言葉が合図となり、次の瞬間には壊れていた箱は元通りに修復されていた。

(すごい……修復魔法を無駄なく制御できてる)

俺は、神坂さんが行使した修復魔法の精密さに感心していた。

「わあ！！ありがとう、お姉ちゃん」

神坂さんが、女の子に箱を渡すと嬉しそうにお礼を言った。

「大切な人にあげるの？」

「うん……」

神坂さんは、女の子と何かを話している。

「ごめんなさい」

「え！？」

すると、いきなり少年たちが女の子に謝ってきた。

その突然の行動に女の子は仰天した。

しかし、その少年たちは全員が、怯えていた。

「「「うわ！！」「」」

その瞬間、少年達に掛けられていた魔法が解除されて、若干浮かんでいたためか軽く落ちた。

そして少年たちは蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

だが、俺は見過ごさなかった。

その中に俺の良く知る人物が交じっているのを。

「かゝみさゝかさん!!」

「え!？」

すると、後方の方から良く知った声が聞こえてきた。

「あなた、神坂春姫さんでしょ?」

「ええそうですけど……初めましてですよね?」

まあ、普通は知らない人に名前を呼ばれたら驚くよな。

「私は渡良瀬準よ。よろしくね」

「神坂春姫です」

二人は自己紹介をしていた。

いつも思うが準は溶け込むのが早い。

「ほら、雄真も挨拶、挨拶」

「俺もか!?!……小日向雄真です」

俺は、準に半場強引に自己紹介をさせられた。

「それよりも、今の魔法よね?とてもよかったよね」

準が魔法の事に話題を変える。

それと同時に、神坂さんが申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「あの、その事なんですけど、魔法を使った事は秘密にして貰っても良いですか？本当は使っちゃいけないんです」

確かに、そう言う校則がある。

まあ、一部例外もあるがやたらに使ったりすると後が怖いのだ。

「そう言う事なら、秘密っていうことで、ね？雄真」

「ああ、秘密だな」

準の言葉に俺も頷いた。

「それでは、私はこれで失礼しますね。先生を待たせているんで

良く見れば、神坂さんは俺達の学園の制服だった。

「そう？残念だね。せつかくならお茶でもと思ってたんだけど」

「それはまた次の機会という事で、それにお二人のデートを邪魔してはいけませんし……」

準の言葉にそう言った神坂さんの言葉に、俺は一瞬固まってしまった。

「神坂さん。違うんだ、こいつは ふうー!!」

俺は、誤解を解こうとしたが準に鳩尾を殴られてそれは失敗に終わった。

「小日向君？どうしたんですか？」

「ううん。なんでもないの、彼つてとても恥ずかしがり屋だから」

俺の事を心配そうに聞いている神坂さんに準はそう言った。

(このままだと、俺は神坂さんに誤解されっぱなしになるのか？)

それだけはとても避けたかった。

しかし、神は俺を見逃してはいなかった。

「???え〜!!」

突然、上空から降ってきた紙を見た神坂さんが、突然大声を上げた。

「ど、どうしたの？春姫ちゃん」

準は、そんな彼女に心配そうに尋ねた。

「準さんは、男なんですか？」

「え？」

神坂さんの突然の問いかけに、準が固まった。

「どうして、それを？」

「あの、この紙にそう書かれていたので」

神坂さんは、準に手にしていた紙を渡した。

「……っ!」

それを見た準が、言葉を詰まらせた。

俺も、その紙を見た。

そこには、こう書かれていた。

『嘘はいけないな、準さん by 浩介』

どうやら、浩介には完全にお見通しのようだ。

「えっと、実は男なのよ」

そして、俺への誤解は一瞬に氷解した。

浩介には感謝しないと。

「さて、疲れたから飲み物でも ストオオオオオッ！ おわあ！ かーさん？」

家に帰ってきて、台所に向かった俺は、いきなりかーさんに防がれた。

何を隠そう、目の前にいる一見女子高生と言われてもおかしくない風貌の女性が、小日向音羽と言って俺の義理のかーさんだ。

「警告！ ！これ以上先に進んだら、いけません！ ！」

どうやら、何かをしているらしく俺はかーさんの言う事に従った。

「冷たい飲み物を飲みたいんだけど」

「それなら、後で運んで行ってあげる」

かーさんの言葉を聞いて、俺は自室に戻る事にした。

『それが、最善の行動でしょうね。あのままだとマスターに危険が及んでいたと思います』

その最中ラジアからそんな言葉を掛けられた。

「で、浩介は何をやってるんだ？」

俺は自室に入るなり、まるで自分の部屋の用に、居座っていた人物に声を掛けた。

「いやな、しばらくはここで休もうと思ってな」

その人物はそう言うと、立ち上がった。

今日の前にいる長身で短く切り揃えられた黒髪に、赤い瞳が特徴の青年は大森浩介と言う。

なんでも、外国からここの魔法を学ぶためにやって来たとか。

「休もうって……もしかして、またダメだったのか？」

「まあ、そんな所だよ。これで3回目だ」

俺は、何が原因か分かっていたので、浩介にそう言うと浩介は何処からか一枚の紙を取り出した。

『魔法能力試験不可』

それだけが書かれていた。

浩介は、今までクラス試験の申請をしていたのだが、何度もこの結果なのだ。

だからこそ、今浩介のClasssはないのだ。

「マジックワンドがないっていうが、あるんだけどな。クリエイトと言う相棒が」

浩介はそう言いながら、懐から水晶玉を取り出した。

それが、浩介の持つマジックワンドだった。

俺の持つワンドのラジアのように話さないが、列記としたワンドである。

「さて、僕はひとりで休むとするよ」

浩介はそう言うと、天井に向けてジャンプして消えた。

(いつもだが、あの魔法には驚かされるな)

来たときからだが、浩介の部屋へと続くドアは、俺の部屋の天井とリビングの天井に設けられていて、浩介はそこから出入りしている。

最初のころは、突然上空から降ってくるので、驚いたが。

「さて、魔導書でも読みますか」

俺は、そう言うと、漫画に偽装した魔導書を読み始めた。

Introduce 『狂気之力』

浩介はぶらぶらと、町の中を歩いていった。

「ん？」

すると、浩介は誰かの声が聞こえた様な気がして、歩くのを止めた。

声が聞こえた方向には、数人の少年たちが、女の子を囲んでいじめている物だった。

『成績が優秀だからって、えばるな！！この化け物が！！』

「……………！！」

浩介は一瞬脳裏に浮かんできた、あの言葉を必死にもぎ消した。

気づくと、少年たちが、走ってこっちに向かってきた。

(逃げるとはいい度胸だ！！)

浩介はそう心の中で言うと、すぐに水晶玉である、浩介の頼れる相棒 クリエイト を手にして、呪文を構築する。

「愚かなるものを拘束せよ！！儀流・第3幕、罪の十字架」

「うわ！！！」

浩介の言葉が魔法となり、少年たちを拘束した。

「悪い事をしたら、謝るのが普通だよな？」

浩介は少年たちに殺気を込めながら言う。

浩介は、少年が相手だろうが容赦はしない。

「謝れ……」

浩介は、最後にそう言う少年たちを操り女の子の前まで移動させた。

そして、浩介は女の子に謝ったのを確認してかけていた魔法を解いた。

それと同時に少年たちはこっちに向かって逃げるように走ってきた。

「……………！！！」

しかし、少年の一人が浩介に目掛けて石を投げつけた。

それで、浩介の怒りは限界を迎えたのだ。

「裁きの時は、きた。……………ジャッジ！！！」

だからこそ、浩介は石を投げつけた少年に呪いを掛けた。

それから数分後、とある場所で。

「おい、野球でもしようぜ!」

「それはいい」

少年たちは会話をしていたようだが、それは長くも続かなかった。

突然、猛スピードで走る赤い車が左端の少年を轢いたのだ。

周りの人たちは救急車を呼べなどと、慌ただしく動いていた。

しかし、少年は助からないだろう。

だって……

少年からは赤い液体が流れていたのだから……

これが、浩介の使った力。

最悪な呪いの力。

浩介の呪いから救われた者は一人もいないのだ。

そして、呪いを掛けられて死んだ少年の魂は、浩介に純粹な“力”
となって還される。

これが、人を恨んで作り上げた魔法だった。

「さて、あとはこれを送れば、終わりだな」

すると、浩介は手にしていた紙に魔法を掛けた。

それは、読む人に的確にメッセージを伝える物だった。

そして、彼はその場から姿を消した。

I n t r o d u c e 『狂気之力』 E n d

第3話「出会い」（後書き）

と云うことでして、最後の最後でかなりきつい内容になりました。ここから先もそう言った内容が含まれる事があるので、ご了承ください。

第4話「悲劇のバレンタインデー」(前書き)

今回は、多少ですが、説教成分が含まれていますので、ご注意ください。
さい。

第4話「悲劇のバレンタインデー」

2月14日

「ふふふ……これで連敗記録は終わりだ」

『何変な事を考えているんですか?』

朝、優越感にしたっている所に、ラジアの突っ込みが来た。

「さて、早めに下に降りて、すももでも驚かしますか」

俺はそう言つと、素早く制服に着替えてリビングへと向かった。

その力の先にあるもの 第4話「悲劇のバレンタインデー」

「うわ!!何だ、この匂いは?」

部屋を出た途端、甘ったるいチヨコの匂いが漂っていた。

その匂いを嗅ぐだけで、昨日の地獄を思い出しそうだ。

「発信源は、ここか……」

俺はリビングのドアの前に立つとそう言った。

嫌な予感がすごくなる。

まさかドアを開けたら、酔っぱらっているすももがいたりして。

そんなことを思いながら俺は、慎重にドアを開けた。

「なんだ、これは!？」

リビングを見た俺の第一声はそれだった。

テーブルの上にはブランデーが置いてあり、台所にはチョコが散乱していた。

「なんで、ブランデーが?しかも空だし」

確かこのブランデーは父さんのお気に入りだったはずで口は開いていなかったはずだが。

『マスター。テーブルにメモ書きに置いてあります』

ラジアに言われてみると、確かにテーブルの上に紙が置いてあった。

「これって浩介が書いたものか」

そのメモ書きは、浩介が俺に宛てて書いたものらしい。

そこにはこう書かれていた。

突然で済まないが、後片付けを頼む。

おそらくだが、チョコレートボンボンを作ろうとしていて、その失敗した物を食べているうちに酔ったらのだろう。

今は眠らせてあるから、台所の片付けとか色々をやっておいてくれ。

本当は僕がやるべきだが今日は急用があるため、先に行かして貰う。

この借りは必ず返す。

追伸：音羽かーさんは僕がリビングに入る前に逃げるようにして家を飛び出した。

それとお酒の入っていないチョコを分けておいたからそれを食べると良い。

それでは、健闘を祈る

大森浩介

「色々突っ込みどころ満載だが、とりあえず急ごう!」

俺は急いで後片付けを始めた。

すももを部屋に運んだり、学校に体調が悪いので休むという連絡をしたり、台所の後片付けをしたりするなど。

それが終わった時の時間が8時25分だったのを見て、全速ダッシュ。

HRには間に合ったが、散々な朝だった。

「雄真、今日は男の価値を示す日だ!!」

そして、今は目の前で騒いでいる男子学生の話、へとへとになりながら聞いているのだ。

ちなみにこいつの名前は高溝八輔、通称八チ。

一言で言うと馬鹿。

「誰が馬鹿だ!!」

「おや、聞こえたか？」

そんな突っ込みもさなか八チは再び本題に戻る。

「良いか、今日はバレンタインデーだ、そんな日に遅刻ギリギリとは。雄真お前は間違っている!!」朝を制する物はバレンタインデーを制する』この格言を知らないのか？」

なんだよ、その格言。

(相変わらず、馬鹿ですね)

ラジアも八チだけには毒舌だ。

「あゝ俺はパス。それと、八チへのチョコはないぞ」

俺は、八チの話を流しながら、先に言いそうな事を先回りして言うておいた。

さもないと暴走しそうだし。

まあ、今ので石化したんだが。

「おはよう雄真。どうしたの疲れた顔をして」

すると、俺の所に準がやってきた。

「ああ、実はすももがな」

俺は、今朝あった事を話した。

「それは、大変だったわね……という事で、はい。今年は愛情をこめて作ったわ」

俺の話を聞き終わると同情の言葉を掛けながら、俺にチョコを二つ渡した。

「それはどうでもいいんだが、なんで二つだ？」

「ああ、それね。八チが男からのチョコは入らないって言ってたから雄真にあげるわ」

俺の疑問に準が答えた。

八子も自ら墓穴を掘ったな。

「じゃあね〜」

準はと言えば、ごく機嫌な様子で教室を後にした。

「そう言えば、八子はいくつ貰ったんだ？」

「ふつ。それは野暮 ああ、そうだったな ちくしょう、まだだ〜俺には昼の天王山が〜」

俺の問いかけに答える八子を見て何となく察した俺は、八子の言葉を遮るように言うと、八子は泣きながらそう言っていた。

それよりも『朝を制する者は』とか言っていたのは誰だ？

そんなこんなで、授業開始を告げるチャイムが鳴り響いた。

「雄真、今日はオアシス？」

昼休みになり、席を立ちあがった俺に聞いて来たのは、準だった。

「ああ、ちょっと喧嘩しに行ってくる」

そう、すももを放ったらかしにしたあの人に文句を言わないとね。

「ちょっと物騒ね。まあ、ほどほどにね」

俺は準の言葉を聞き流しながらオアシスに向かった。

さて、話しに上がったオアシスと言うのは学食のようなものだ。

カフェテリア『オアシス』は味よし出す速さもよしそして安いというのが売りの場所だ。

そしてかーさんはそのチーフをやっているのだ。

「えっと、かーさんは……いたいた」

俺は、オアシスに入るとかーさんの姿を探したが、以外とすぐに見つかった。

と言うより、男子学生に責められていた。

「そもそも実の娘にお酒を使わせるなんて、何を考えているんですか!?!」

「いや〜その……」

「お〜い、浩介。ずいぶんとご立腹だな」

俺は、男子学生……浩介に声を掛けた。

「雄真か、雄真からもなんか言っつてやれ!!」

「そうか? だったら、どうしてすももを放ったらかしたのかな?」

浩介に言われるがまま、俺は怒りを込めた笑みを出しながら、かーさんを問い詰めた。

「え? それは間に合わなかったから……」

かーさんは浩介に責められていて疲れていた様子だった。

「それよりも、すももちゃんは?」

「すももなら部屋に寝かせて学校の方にも休むって連絡しておいた」

かーさんの問いかけに俺はそう答えた。

「さっすが、雄真君。気がきくね」

「はあ。それよりも朝食を食べ損ねているから何か作ってくれ」

かーさんの言葉にため息をつきながら俺はそう言った。

「分かったわ。二人とも、迷惑をかけてごめんね」

かーさんはそう言うと、厨房に走って行った。

「迷惑だなんて……」

俺は、かーさんの言葉にそう呟いた。

俺を育ててくれたのに、迷惑だなんて贅沢だからな。

「ところで浩介は、なんで怒ってたんだ？」

俺は気になっていた事を浩介に聞いた。

「ああ。朝起きたらすももが酔っぱらっていたからそれを止めようとしたら、久美まで酔っぱらったんだよ」

浩介がため息をつきながら答えた。

なんだか、一瞬で想像が出来そうな答えだった。

その後、俺達は昼食を食べ終わると、教室に戻った。

Introduce 『酔いの悲劇』

「おはよ〜」

いつもどおりに朝早くに浩介と久美はリビングに入った。

そんな彼らを待っていたのは。

「あ〜浩介さ〜ん。おはよう………」ざいます!〜!ゴロゴロ〜」

「こら!〜スリスリするな!〜というより酒臭いぞ!〜?」

酔っぱらったすももだった。

「おろろ〜」

「『おろろ〜』ではない!〜?ああ、もう!〜!久美、援護を!〜!」

浩介は、久美に援護を頼もうとしたが……。

「あはは〜。このチョコ食べると楽しいです〜」

「は?このチョコがどうした久美?……ってこのチョコお酒が入ってるじゃないか!〜!」

それだけで、浩介は全てを察した。

ここで何があったのかを。

「何を酔っぱらってんだ！！この馬鹿ものが！！」

「良いじゃないですか」

浩介の喝も久美には全く通じない。

「だ〜！！ 貴様ら、頭を冷やしやがれ！！ティレント・ブレスレ
ン！！」

「「あれ……きゆう〜」

浩介の魔法ですももと久美は眠らされた。

「音羽かーさんがいないという事は……逃げたな〜」

その後浩介は久美を部屋まで運ぶと学校に休むと連絡を入れて学校
の方に向かった。

ちなみにこの時にメモ書きをしていたのだ。

Introduce 『酔いの悲劇』 End

「……」

「なあ、準」

「何？」

俺は、教室に戻ってから感じていた事を言う事にした。

「さっきから思ってたんだがこれ邪魔ハチじゃないか？」

俺の視線の先には石化したハチが立っていた。

理由なんて簡単に想像がつく。

天王山だか何だかで、チョコをもらえなかった事だろう。

「そうね、端にでも除けときましょ」

準はそう言つと引きづるよつに隅にどかした。

「鬼塚め、なんで俺が罰掃除をしなければいけないんだ？」

放課後、俺は一人で罰掃除をしながら愚痴をこぼしていた。

『それはマスターが余計な事を言ったからですよ』

ラジアから適切な突っ込みが入った。

「確かに古傷を抉ったのは悪かったが、それは寛大な心で許すべきだろ」

俺は、愚痴を言いながらも掃除を続ける。

「もういいや、適当にやっちゃおう!!」

周りにゴミなんてないし、そんなもんで良いだろ。

「よし、これで終わりっ」と

「あら、雄真さん。奇遇ですね」

「全く、ズボンが汚れでもしたらすももに怒られるからな」

俺は、再び愚痴を言いながらズボンを払った。

「……雄真さん。奇遇ですね」

「すももの説教は大変なんだぞ。変な所でループするし」

「……タマちゃん、Go!!」

『あいあいさ〜』

愚痴をこぼしていると、どこかで聞いた事がある関西弁が聞こえてきた。

「うわ!!」

俺は声のした方を向くと、緑色の球体が迫ってきていた。

それを俺はとっさに避けた。

ちなみに緑色の球体は、俺のいた所の少し先にある大木に直撃した。

そして、緑色の球体はそのまま戻って行き、その先にいたのは黒髪の女子生徒と言つよりも小雪さんだった。

うわ〜、あんなに太い木がメキメキと……

「小雪さん。何してるんですか？」

俺は転がって行った緑色の球体　タマちゃん　を追いかけている、小雪さんに声を掛けた。

「あら、雄真さん。奇遇ですね」

「小日向の兄さん、おひさしゆ〜」

それと同時にタマちゃんも軽い感じで話した。

小雪さんの持っているワンドは少し特殊で、スフィアタムと言う。

まあ、特殊な事と言えば量産できるあたりだが。

「実は、雄真さんに声を掛けても気づかれなかったので、困っているとなぜかタマちゃんが突然暴走を……」

「それじゃあ、『GO』という声は？」

なぜタマちゃんを撃ってきたのかを聞くと、小雪さんはそう言った。

と言うより絶対それは嘘だから。

「それはともかく、今日も雄真さんには不幸の相が見えますね」

「……」

今一瞬地獄に落とされるような言葉を聞いたような気がした。

「でも、これを食べればそれは免れますよ。と言う事で、どうぞ」

「これって……チョコ？」

小雪さんが突然取り出した物を見ると、それは何度目かに見るチョコだった。

「ええ。厄除けですので、早めに食べてくださいね」

小雪さんは笑顔でそう言った。

「なんで、笑顔何ですか？」

「いえ、人の不幸を救う事が出来たのでその喜びです。それでは、失礼しますね」

俺は、笑顔の小雪さんに疑問を投げかけると、そう言いながらワンドに乗ってどこかに飛んで行った。

「雄真は本当にチヨコをもらえるよな」

「ほんとよね」

すると、俺の後ろから聞きなれた声が聞こえてきた。

「浩介に、準か」

俺はその人物を確認するとそう言った。

「それじゃ、ぼちぼちと帰りますか」

浩介がそう言って歩き出そうとした瞬間だった。

「……っ!!」

俺は突然起きた魔力の乱れに、足を止めた。

それは浩介も同じことだったみたいだ。

「どうしたの？二人とも」

準は何があったのかが、さっぱり分からなかったようだ。

『マスター、前方から魔法弾が来ます！！』

そして、ラジアの方も感知したのか、俺に情報を送ってきた。

前方を見ると確かに、金色の魔法弾がこっちに向かって来てる。

このままだったら、準に怪我をさせる事になる。

「っちー！雄真、とりあえず防ぐぞー！僕も援護するー！！ルスティア・ゼダンテスー！！」

浩介が前方に、防御壁を張り巡らす。

(ラジア、簡易防御魔法を展開してくれ)

『了解しました。ディ・アムレストー！！』

俺の念話での指示にラジアがそう言うと、浩介が展開した防御魔法を覆うように防御魔法が現れた。

浩介の防御魔法と俺の防御魔法で、何とか防げるだろう。

ドカアアンー！！

防御魔法に当たった瞬間爆音が鳴り響いたが、俺達には怪我がなか

った。

「一体誰が……」

「すみませ〜ん!!」

すると、そんな声と共に金髪のツインテールの髪型をした女子生徒と、栗色の髪的女子生徒が走りながらやってきた。

「あなたは昨日の……」

「あれ、神坂さん？」

栗色の髪をした女子学生……神坂さんが驚いた顔で俺を見た。

「ところで、さっきの魔法は一体……」

「ごめん!!本っ当にごめん!!」

俺は、さっきの魔法の事を神坂さんに聞くともう一人の女子生徒が謝りながら頭を下げた。

「ま、まあ怪我はしてないだし」

ものすごい勢いで頭を下げている女子学生に俺はフォローした。

「それにしても、春姫と彼が知り合いだったなんてね〜」

「い、いや、私たちは杏璃ちゃんが考えているような関係じゃ……」

女子学生に神坂さんは慌てて訂正しようとするが、それは聞き入れて貰えなかったようだ。

「それにしても、彼に一目ぼれなんて、どこがタイプなの？」

柊さんが神坂さんに聞いた。だした。

「だから、違うんだってば。小日向君とは、昨日たまたま会ったんだってば」

「それを一目ぼれって、言うんじゃない」

どうやら、柊さんは俺の事を神坂さんの恋人だとも勘違いしているようだ。

「神坂さんの言う通りだよ。俺と神坂さんは昨日たまたま会っただけだよ」

俺は、神坂さんをフォローするべく、女子生徒にそう言った。

「ふうん。あたしは柊杏璃、さっきは本当にごめんね。お詫びにこれを受け取ってよ」

納得したのかしてないのか微妙だが、柊さんから箱を受け取った。

もう今日で何度目か分からない、チヨコだった。

「ほら、春姫も……」

「え!？」

柊さんは、神坂さんを急かすように言った。

「春姫も、彼に渡すんでしょ、その鞆の中に大事にしまつてあるチヨコを」

「ち、違うよ杏璃ちゃん。これは渡す宛てのない物だよ」

ニヤニヤしながら催促している柊さんに、慌てた様子で神坂さんが反論する。

「よかつたら、受け取つてくれる？」

しばらく反論していた神坂さんだが、結局反論する事が出来ずに俺に小箱を差し出した。

「え、いいのか?だってこれ……」

俺は差し出された小箱を見ながら神坂さんに聞いた。

これは、誰かに渡す人がいるんじゃないのか?

「いえ、良いんです。元々渡す人もいませんでしたから」

俺の問いかけに神坂さんは答えた。

「分かった、それじゃありがたく受け取っておくよ」

俺はいくつか疑問に思っていたが、考えるのをやめて、俺は素直に

受け取る事にした。

「それより、なんでここまで魔法が来たのかを説明してくれるか？」

と、今まで黙って事態を静観していた浩介が女子学生に聞いた。ただし、

「それは春姫がフィールドなしでできるのに、あたしだけが出来ないなんて悔しいじゃない!!」

フィールドと言うのは、一種の保護膜のようなものだ。

普通では、魔法使いの生徒はフィールドを張ることを義務付けられている。

フィールドには次の利点がある。

まず魔法制御率の上昇で、もう一つが万が一の時にフィールド内だけの被害に済ませる事が出来、外部の者に被害を出さない事が出来るものだ。

まあ、一部の生徒ではフィールドを張らなくても、魔法行使を許可されている生徒もいるんだがな。

「それよりも、あなたは誰よ？」

「大森浩介だ」

柊さんの問いかけに浩介は一言で答えた。

「それじゃ春姫、もっと付き合っつて貰うよ!!」

柊さんが神坂さんにそう言いだした。

「え!? まだやるの?」

それに対して神坂さんが驚いたように言った。

「当たり前じゃない」

さつきから浩介の目つきが冷たくなってる事に気づいていないのか、神坂さんに柊さんはそう言った。

「それだと怪我人が出ちゃう」

柊さんの言葉に神坂さんはそう言った。

確かに神坂さんの言うとおりでろう。

フィールドを張らずにまた魔法を暴走させでもしたら……。

「つべこべ言わずに付き合っつもの、いいわね?」

俺の言葉を聞かずに二人は歩いて行こうとした。

「ちょっと待て……」

だが、それを止める者がいた。

それは、ほかならぬ浩介だった。

「何よ？」

柊さんは浩介を怪訝な様子で見ながら、先を促した。

「さつきから、聞いていて思ったんだがあんた本当に反省しているのか？」

「反省してるわよ！！」

浩介の言葉に柊さんが噛みついた。

「いや、反省しているようには見えないね。反省しているんなら、同じ過ちを繰り返そうとはしないからな。そうだろ？」

「だったら、浩介はなんて言いたいのよ」

今、さりげなく浩介の名前を言ったような気がしたが、今突っ込む所はそこではない。

それよりも、このままにしていたらちよつとまずい事が。

「つまり、あんたは反省しているどころか同じ過ちを繰り返すバカだと言ってるんだ！！」

「バカですって〜！！」

浩介の言葉に柊さんがついに沸点が越えたのか怒り始めた。

「ちょっと二人とも、抑えて 神坂さんは黙ってて（春姫は黙ってなさい）！！」

止めようにも二人で同時に遮られているから、もうノンストップだろう。

「ああ、バカも馬鹿大馬鹿だ！！お前見たいのがいるから……お前見たいのがいるから、周りが絶望するんだ！！これ以上やるのであれば、こっちにも考えがある！！」

とうとう浩介の怒りが爆発したようだ。

いや、静観している場合じゃない。

「言ったわね！！これでも喰らいなさい！！オン・エルメサス・ルク・アルサス」

「やってやるつもりじゃないか……裁きの時は……！！」

柊さんの魔法に立ち向かうべく、浩介が何かをしようとした途端、浩介の様子が変わった。

まるで、怒りと言う感情が消されたように。

「エリートラス・レオラ ……！！」

しかし、そんな浩介に柊さんの魔法弾が放たれた。

「……………！！」

浩介はその魔法弾に気付いたのか、何かを呟いた。

ドカァァン！！

あたりに爆音が響き渡る。

「もういい。返る」

煙が晴れると、全く無傷の浩介がそう言って去って行った。

「き！！春姫、行くわよ！！」

柊さんも叫びながら歩いて行った。

「準、とりあえず俺達も帰るか」

「え……ええ」

突然の展開に固まっていた準に、声を掛けると俺と準もその場を後にした。

Introduce 『感情を抑えし者』

「久美か、僕の感情をコントロールしたのは」

「うん。だってあのままだったら兄さん、呪いを使いそうだったんだもん」

そのあとしばらく歩いた所にいた、少女 久美 は浩介の言葉にそう言った。

「そうだな、感情をコントロールできなくなるくせは直さない」と

「そうだよ。確かにあの人に魔法を使う資格なんてないけど」

二人はそう言いながら夕日の照らしだす通学路を歩いて行った。

「って、そもそもお前は、酔っていなかったか？」

浩介の言葉だけが空しく響いた。

Introduce 『感情を抑えし者』 End

第4話「悲劇のバレンタインデー」(後書き)

ちよつと間が空いてしまいましたが、第4話になりました。

次回はいつ投稿できるかは分かりませんが、よろしくお願ひします。

それでは、これにて失礼します。

第5話「始まりを告げる事件」(前書き)

投稿が遅れて申し訳ありません。

PCがとうとう壊れてしまい、買い換えました。

第5話「始まりを告げる事件」

ドカアアアン!!!

「な、なんだ!?!」

自室で魔導書を呼んでいると、突然爆音が聞こえてきた。

『マスター学園の方です!?!』

「ちょっと行ってみよう!?!」

ラジアの言葉に俺は軽くコートを羽織ると、学園の方に向かった。

その力の先にあるもの 第5話「始まりを告げる事件」

「これは酷いな」

学園に着くと俺はその光景に、思わず目をそむけた。

見事に魔法科の校舎が、倒壊していたのだ。

『魔力反応もあります。おそらく人為的でしょう』

ラジアの言葉で俺の仮説は実証された。

「とにかく、明日にでも母さんの所に行くか」

『それが賢明ですね』

俺とラジアはそう言うと、飛行魔法で空を飛んで自室に戻った。

遠くの方からサイレンの音が聞こえていたからだ。

2月15日

「まったくすももの奴は……」

俺は愚痴をこぼしながら学園に向かっていった。

「あんな所で、超人的な聴力を発揮しなくても良いだろうに」

朝、ニュースで学園の爆発事件を知ったすももは、大慌てで俺を起こそうと部屋をノックしたのだが。

俺が二度寝をしようとする、また大きな声で俺に起きるようになら、ドアをノックしたのだ。

そのおかげで俺は完全に目が覚めたという事だ。

ちなみに、すもも曰く。

「だって『ぐう』って聞こえたから」

という言い分だった。

「さて、やっぱり裏から入った方がベストだな」

俺は前に母さんから教えて貰った裏口を通って、学園内にある母さんの研究室前に辿り着いた。

「すみません。小日向ですけど」

「どうぞ〜」

入る前にノックをしておく事を忘れない。

前にこれを忘れて酷い目に合った事があるからだ。

「おはよう、母さん」

「うん、おはよう雄真君」

俺は、ドアを開けて研究室に入った。

そして今日の前にいる教師こそが、俺の生みの親でもある御薙鈴莉なのだ。

「雄真君、何の用かしら？」

「母さん。一体これは……」

俺は母さんの問いかけに本題を切り出した。

「……そうね。式守家って知ってるかしら？」

「知ってるも何も名家中の名家だから知ってるけど。まさか……」

俺は、母さんの言葉に答えると、一つの予感が脳裏をよぎった。

それは、式守家が今回の事件を起こした犯人ではないかというものだ。

「うーん、少し惜しいわね。正確に言うと式守家の次期当主である、式守伊吹さんが起こした事件なのよね」

母さんの言葉に俺は愕然とした。

「母さん、一体何の目的でこんな事を？」

俺は母さんに疑問を投げかけた。

「そうね……今は秘密と言う事で。それよりも……」

俺は内心ずっこけたい所をこらえて母さんの言葉を聞くことにした。

「春先の方から私たち教師は、この校舎の修復とかをしなければい

けないの。だから」

「俺に警備をして貰いたい？」

俺は母さんの言いそうな事を理解して、そう続けた。

確かに校舎の修復に教師たちは手が離せなくなり、警備が出来なくなるのは当然だろう。

「そう言う事よ。警備して欲しい場所は森の方なの。私の方でもとりあえず神坂さんをお願いはしておくから、雄真君は彼女に見つからないように警備をお願いできるかしら」

「ああ、任せてよ、母さん」

俺は、母さんを安心させるためそう言った。

それにしても神坂さんだけではなく周りに見つからないように、警備するのは大変だろうな……。

その後俺は、母さんと少しだけ話してから研究室を後にするのだった。

「あ、雄真！どこに行ってたのよ？携帯に連絡してもつながらないし……」

校門前に行くところには、若干不機嫌な準といつも以上に興奮している八チがいた。

「悪い。ちょっと携帯切ってたな」

そう言えば、母さんと話している最中に、携帯に着信が来ていた事を思い出した。

「それよりも雄真。ビッグニュースだ！！」

「今日は臨時休校で、新年度から魔法科との合同授業になる以外のニュースだったら聞くが？」

俺は、ここに来る前に母さんから聞いていた事を念のために言うておいた。

「……」

「凶星だったか」

俺は、石化する八チを見てそう呟いた。

「雄真って、意外にひどい事をやるわね」

準が俺に向かって苦笑いをしながらそう言った。

準の話だとさつきも浩介達に話そうとした八子が、校内放送と通りすがりの男子生徒によって先に言われたらしい。

相も変わらず哀れである。

とりあえず俺達はいつもとおり、ゲーセンに行ったりして遊ぶ事にした。

第6話「新たな日常」(前書き)

注意：今回の話では説教成分が含まれております。

また残酷的な描写も少々含まれておりますので、ご注意ください。

それでは、第6話をどうぞ

第6話「新たな日常」

4月5日

「おはよう、ラジア」

『おはようございます。マスター』

あれから約2カ月がたった。

式守家の起こした、校舎爆破事件の影響は予想以上に大きく、俺達
はいつもならば2週間程度の休みが2ヶ月ほどに、大増量というお
まけまでついて来たのだ。

感謝していいのか悪いやら。

そんな事を考えつつも制服に着替えると、リビングに向かった。

その力の先にあるもの 第6話「新たな日常（前編）」

「おはよう、かーさんに浩介、久美」

俺はリビングにいたかーさん達に、朝の挨拶をした。

「おはよう、雄真君」

「うん、おはよう雄真。寝坊しないだけでも、いい神秘だな」

「おはよう雄真さん。それと兄さん、それを言うなら”進歩”ね？」

それぞれが俺に挨拶を返してくるが、一部に若干変な物が交じって
いた様な気がしたが、気にしない事にした。

「あれ？そう言えばすももは寝坊か？」

周りを見渡すと、すももの姿が無かった。

「そんなことあるわけないでしょ」

「そうそう、すももはどこぞの誰かさんみたいに寝坊介じゃないかな」

俺の言葉にかーさんと浩介が否定した。

まあ、俺でもそれは無いと思ったが。

「誰が寝坊介だ！！」

「だって……なあ？」

俺の問い詰めに浩介は、じととした目つきで俺を見た。

俺もこれ以上の追及を、諦めざるを得なかった。

「もうダメよ雄真君。女の子の心を知らないとモテないわよ？」

「女の子って……」

「音羽かーさんは……」

俺と浩介はかーさんの言った言葉で思わず反論したが、それは最後まで続かなかった。

それは、目の前にいる人物から発せられる殺気のせいだ。

「どうしたの、雄真君に浩介くん？かーさんはなあに？」

「な、何でもありません！！」

俺と浩介は声を揃えてそう答えた。

死ぬかと思った。

そんな事を思っていると、後ろから誰かがリビングに入ってくる音がした。

「おはよう、すも……も」

俺はいつもどおりに挨拶をしようと、振り向いた瞬間俺は目の前にいた少女に、見とれてしまった。

その少女は確かにすももだったが、まるで別人のような感じだった。

「あ、あの似合ってますか？」

「あ、ああ似合ってるぞ」

すももの問いかけに、俺は何とかすももにそう答えた。

「ありがとうございます！！兄さん！！」

すももは顔をパツと明るくすると、俺に嬉しそうに抱きついて来た。

「こら、抱きつくな！！」

「うふふ……」

とまあそんな感じで俺とすもも、浩介と久美は学園に向かうのだった。

「そう言えば、すももと一緒に登校するのって久しぶりじゃないか？」

そんな中、浩介はふとそう呟いた。

「確かにそうよね、中学の時からだもん」

浩介の言葉に久美が相槌を打った。

「だから、すももがこんなに嬉しそうなのか」

「くくく」

さつきから鼻歌交じりに歩くすももを見ながらそう呟いた。ちなみにすももの鼻歌は、八子達と合流するまで続いた。

「おつす、準に八子」

「おはようございます。準さんに八輔さん」

俺達は、いつもの合流地点に立っていた二人に声を掛けた。

「遅すぎだ！！今日はな キャー すももちゃん、制服姿可愛いわよ」
「グハ！！」

八子が何かを言おうとした瞬間準によって弾き飛ばされた。相も変わらず本当に哀れだ。

「あ、ありがとうございます、準さん。準さんも可愛いですよ？」

「ムすももちゃんは手ごわいわ」

二人のそんな会話をよそに、俺は弾き飛ばされた八子に声を掛ける事にした。

「それで、今日は何だ？」

「おい、それ本気で言ってるのか雄真？本気だったら絶交だ！！」
俺の言葉に八子がそう言った。

「あ、そう。それじゃこれからは他人同士という事で」
「え？」

俺はそう言つと八子から離れた。

「あ、それなら私は雄真につくから」

「はい？」

「八輔さん、ごめんなさい」

「へ？」

「僕、変態嫌いだから」

「お？」

「兄さんがそう言うなら私も」

「へ？」

とうとう八子は一人になった。

「……………いいもんね、いいもんね。俺は今日からバラ色の学園生活を送るんだもんね。そうなったら絶対に自慢してやるからな！！雄真」

俺は、負け犬の遠吠えをしている八子を置いて、歩いて行つた。

「雄真？」

「じゃ〜ね〜八子〜」

今頃になつて俺達がない事に気付いた八子に、準がそう言った。

「ま、待つてくれえ〜俺も雄真につく〜!!」
「気持ち悪い事を言うな!!」

俺は叫びながら近寄る八チにそう言った。

「付き合いきれん。雄真僕と久美は一足先に教室に行く事にする」
「あ、おい!!」

浩介はため息をつきながらそう言うと、俺の制止を振り切り歩いて行った。

「八チ、あつたか？」

「雄真、もう少し右に行つてくれるか？」

あの後、学園に到着してすももと別れると、クラスの確認をするために掲示板の方に向かったのだが、そこには大勢の人ばかりが出来ていて見る事が出来ない状態だった。

そこで準が思いついたのが肩車だったという訳で、惜しくも俺はじやんけんで負けたために、八チを担いでいるのだ。
もしこれが、準だったら……。

「……………」

準は万弁の笑顔だった。

「うおおおお!!すっげええ!!!!」
「おい、暴れんな!!」

掲示板を見た八チが大声で叫びながら大暴れしたので俺は八チに注

意した。

「雄真、俺のクラスの女子がすごい事になってるぞ!!」
「……落とすぞ?」

八子が叫ぶのは構わないが、俺の上で暴れられるのはたまったもんじゃないので、そう言う事にした。

「はい、すみません」

「で、俺達は?」

「そうよ、重要なのは雄真と同じクラスかどうかなのよ!!」

俺と準は一番聞きたかった事を聞いた。

「さりげなくひどいな………俺と同じクラスだよ」
「やったわ、これでまた同じクラスだわ」

八子の言葉を聞いた途端、準が俺に抱きついて来た。

「でも、すげえぜ。神坂春姫ちゃんや柊杏璃ちゃんと同じクラスとは」

「八ちは放っておいて行きましょ」

八子の言葉に呆れながらそう言うと、準は先に歩き出した。

「おい待てよ、準!!」

俺は先に歩き出した準を追いかけた。

「そうだ!! 抜け駆けは許さないぞ!!」

「お前もいい加減に、降りろ!!」

俺は上に乗っている鬱陶しい奴を、降り落とした。

「げは!!」

Introduce 『勉優の友』

「ここで、間違いないな?久美」

「うん、間違いないよ。兄さんに言われたとおり、ちゃんと1000回確認したから」

2・Mの教室前で、浩介と久美はそう言っていた。どうして雄真よりも先に行ったのか。

それは、浩介自身の問題だった。

「兄さん、大丈夫?」

「ああ、何とか衝動は落ち着いたから平気だ」

二人の会話から予想できるように、浩介はあの時に衝動に駆られたのだ。

その衝動は、全てを破壊したい……殺したいという危険極まりない

物だった。

彼に秘められた力の影響が、時たまこうした衝動で現れるのだ。

「それじゃ、久美は向こうを……僕はこっち側の人に挨拶をする」

そして二人は手分けして挨拶をした。

なぜこうするかと言えば、これも浩介の人付き合いを良くする為の、方法の一つだったりするからだ。

最初に挨拶をしておけば、万が一の時に思わぬ楯になる事があるという、なんとも腹黒い浩介の考えでもあるが。

まあその是非はともかく、二人は自分の席の近くにいる生徒達に挨拶をして言った。

「初めまして、今日から同じクラスになる大森浩介です。お見知り置きを」

挨拶の仕方も改善の余地があるものだったりもする。

「こちらこそ……って、大森君!？」

「へ!？」

予想外の言葉に浩介は、声を掛けた女子生徒の顔を見た。

その生徒にはよく見覚えがあった。

「神坂さん!？あなたもこのクラスだったのか？」

浩介が驚いたように話した。

「ええ。見慣れた文字があったので、もしかしたらとは思ったので

すが、知っている人が同じクラスでよかったです」
「……………」

この間の事もあり、気まずく視線を逸らした浩介は、ある者を見て表情を一変する。

「こ、これは!？」

「あ、この本知っていましたか？」

彼女がそう言いながら手にしたのは、一冊の魔導書だった。

それは、今では絶版となってしまった幻の1冊。

その手のマニアならば、1冊100万円以上で取引される物だ。

「もちろんだよ、いや〜この本に巡り合えるなんて奇跡だな〜」

「あ、よかつたら後で貸してあげましょうか？」

浩介の目が輝いているのを、苦笑いを浮かべながらそう言った。

「い、良いのか？」

「もちろんですよ。読み終わったらぜひ感想が聞きたいです」

こうして春姫と浩介は一瞬で友人となった。

まあ、魔導書という共通点を持った友人だが。

「僕のお勧めの魔導書は『時間魔法定理』を扱っている本になるな」

「あ、その本でしたら私も知っています。あれはとてもいい物でした」

二人の会話の内容に、周りがドン引きしている。

それほどこの二人の会話の内容は難しい物なのだ。しかも、その魔法理論について論議をし合うという、高レベルな物も披露された。

「この本を知らないのは、魔導書を読んだ気であることを、恥じないといけないぞ」

「確かにそうですけど、それは言いすぎですよ」

さらにヒートアップする二人の魔導書トーク。

ちなみに今の一言で、絶望した魔法科の生徒が出ました。

「それにしても、この学園でこれほどまでに魔導書の話を出来た人は、神坂さんが初めてだ」

「ふふ。私もです」

一通り、話し終えた二人は、そう言って一息ついていた時だった。

「パトリオット・ミサイルキック!!」

二人の背後から聞こえてくる、必殺の技の名前が聞こえてきたのだ。

I n t r o d u c e 『 勉 優 の 友 』 E n d

「うひょ〜 姫が、俺のクラスに姫がいるぞ」

小声でドアの前を占領して呟くのはハチだった。
正直言つて邪魔以外の何物でもない。

「プリントミスつていう落ちは無いんだよな？」

「そうだけどつて、なんでさっきから小声何だ？」

俺は、ハチからの問いかけにそう答えた。

教室では、浩介と神坂さんが話していた。

「大きな声で話したら聞こえちまうだろ？」

俺の問いかけに、ハチはそう返してくる。

「さては、いたずら電話でもして声を覚えられているのか？」

ハチならやりそうだ。

「やるわけないだろ。電話番号知らないんだから……」

（知ってたらやるのかよ）

そんな事を思っていると、準が後ずさりを始めた。

「パトリオット・ミサイルキックー!!」

「ぐはあ!!」

準の必殺技によってハチは、廊下の向こう側に弾き飛ばされた。

「なんで自分の教室の前でこそこそしてないといけないのよ。さ、入りましょ」

俺は準に言われるように中に入った。

「あれ？小日向君に渡良瀬さん？」

「久しぶりね。やっぱり同じクラスだったんだね」

入ってきた俺達に気付いたのか、浩介と神坂さんがこっちの方を振り向いた。

「あ、私は渡良瀬準。準って呼んでね、春姫ちゃん」

「そ、それじゃ準さんで……」

準の言葉に苦笑いを浮かべながらも、神坂さんはそう言った。

「ほら、雄真も自己紹介」

「お、押すな」

そして、準は俺の背中を押して神坂さんの前に、無理やり立たせた。

「小日向雄真ですよろしく」

「……よろしくお願いします。小日向君」

俺の言葉に神坂さんが、笑顔で言った。

「ところで、一人忘れてない？」

座る場所を確認して荷物を置いた俺に、準が声を掛けてきた。ちなみに座る席は神坂さんの横だった。

「……………誰だっけ」

「ほ、本当に忘れてるのね……………例えば、一步で遅れて床にのの字を書いている人とか」

俺は準の視線を辿った。

そこにいたのは。

「しくしく……………いいのさいいのさ、俺は名もなき男子学生のように背景になつてれば」

ものすごくいじけているハチだった。

いや、しかも本当にのの字を書いている。

「ほら、紹介してやるから。そんな所でいじけるな」

俺はハチにそう声を掛けると、神坂さんに紹介する事にした。

「そう言えば、あの金髪の子はどうしたんだ？」

俺はふと気になった事を、神坂さんに聞いた。

「えっと、それって杏璃ちゃんですか？」

「そうそう」

神坂さんの言葉を聞いた時、視線の端で浩介が顔をしかめたのが見えた。

「杏璃ちゃんなら、すぐに戻って たっだいま〜 来ましたね」

そして戻ってきた、柊さんによって俺は、大変な目に合う事になるうとは全く思ってもいなかった。

さて、現在どういう状態なのかを説明しよう。

柊さんによる『どっちのチヨコが美味しかった?』という爆弾発言によって、八チが暴走。

そして……。

「裏切り者には死を、幸せ者には疫病神を」

八チのゾンビ化した声が俺を襲っていた。

正直に言えばものすごく怖い。

だから、俺はつい禁断の言葉を言ってしまった。

「たかがチヨコくらいで、大げさだろ」

「たかがだと? 雄真お前は悲劇の”0214”を知っているか? それを思い出してもまだその事が言えるのか!？」

俺の一言で、八チはさらに言い迫ってきた。

「う……」

八チの言葉に俺は何も言い返せなくなった。

0214事件。

それはいつも以上に貰えた俺に対して、八チが貰えたチヨコの数は

0個だった。

お　ではなく0だ。

いつもは準の1個でプライドは守られていた八チが、ついに0個という数字を出してしまっただの。

あの日八チが流した、血のにじむような涙は今でも俺達の鮮明な記憶に残っている。

だからこそ、その苦しみを知っている俺が一番言っではいけないことだった。

「すまん、八チ」

「うるさい！！おまえの一言で俺は古傷を抉られたんだ。こうなったら、貴様の血肉を喰らうまでだ！！」

「痛たたた！！噛みつくな、八チ！！」

準に助けを求めようとしたが、準は端っこの方に逃げていた。

「エル・アムダルト・リ・エルス……」

神坂さんが唱えた呪文と同時に、まるで森林にいるような爽快な感じで、心が落ち着くような気がした。

「デイ・アムンマルサス」

それが魔法だと理解するのに時間はかからなかった。

「高溝君、落ち着いてください」

「ふあい」

呪文を唱え終わった神坂さんが、八チに落ち着いて言った。

「私が小日向君にチョコを上げたのは、偶然なんです」
「俺も最初からそう思っていました」

神坂さんの言葉に八ちはそう答えた。
調子の良い奴め。

「雄真、今日の所は神坂さんに免じて許してやる。だが、次は無い」
「分かった。悪かったな」

八ちを本気で怒らせると後が怖いので、俺は素直に謝る事にした。

「ねえ、今の魔法よね」
「ええ、心を落ち着かせる魔法を。ソプラノのおかげでうまく行ったので、良かったです」

準の言葉に神坂さんが、ほっとしたように答えた。

『いいえ、全ては春姫の実力ですよ』

神坂さんの言葉に彼女の背中にあつたワンドが、切り返した。

「うわ！！ワンドがしゃべったよ」

普通科の生徒は魔法と触れ合う事があまりないため、準のように驚く人もいる。

「彼女は、ソプラノです。私にとってはお姉さんのようなものですね」

『ソプラノです。春姫とも度もよろしくお願いします』

神坂さんの言葉に続いて、ワンド ソプラノ が自己紹介をした。

「私は渡良瀬準。よろしくね、ソプラノちゃん」

『ソプラノ……ちゃん？』

準の言葉にソプラノが人間だったら、首を傾げているように答えた。

「ソプラノ？」

そんな相棒に、神坂さんは尋ねるように名前を呼んだ。

『あ、いえ。こちらこそよろしくお願ひします……ソプラノちゃん……ですか』

余程”ちゃん”付けに違和感があるのかソプラノは小さな声で呟いていた。

「それにしても今の魔法はすごかったわ」

「い、いえそんなことは……」

準はワンドから、神坂さんの魔法へと話題を変えた。

「またまた、ご謙遜を。魔法科の2年で春姫ちゃんが一番だという事は、普通科でも有名なんだから」

「そうそう。1年の時にたった一人だけ『Class B』の試験をパスしたって言うのが、普通科でも話題になってたんだぜ」

準に続いてハチが神坂さんに称賛の声を上げた。

しかし、それを言われている神坂さんはどこかしらか慌てていた。

「どうしたんだ？神坂さん」

だからこそ俺は、神坂さんに聞いていた。

「いえ、こういう事は杏璃ちゃんの前ではなるべく」

「春姫が見せたのなら、あたしも見せないかね」

神坂さんの言葉を遮るようにして、さっき俺の中では天然の危険人物となった柊がワンドを構えた。

（なるほど、こういう事になるわけか）

俺は、それを見て一瞬で理解してしまった。

「どんな魔法を見せてくれるの？」

「もっちろん、あたしの得意な魔法よ！！」

俺の心を知らない準達普通科の生徒は、柊を囁し立てた。

「ち、ちよつと杏璃ちゃん！？得意な魔法って」

「春姫は黙って、あたしの魔法が成功するのを見ていなさい！！」

神坂さんの言葉にも耳を貸さずに、柊は魔力を放出し始めた。

神坂さんは、柊の魔法を消去しようとしていた。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス……」

しかし、柊は魔法の詠唱を始めた。

はつきり言えば、魔力量が高いが、魔法を使う際に非常に重要な力を握る魔方式が、とてつもないほどに粗かった。もし、この魔法が失敗したら……。行き着く先はたった一つ。

(こつなったら俺も)

俺は、リスクを覚悟でキャンセルしようとした。

「おいおい、魔法使いだつてことが知られても良いのか？」

浩介の言葉で、俺はそれが出来なくなった。

そつだ、俺には鈴莉母さんから頼まれた事もあつたんだ。なのに今ここで魔法を使えば色々とまずい事になる。

「それじゃ、悪いけど浩介、キャンセル魔法頼めるか？」

だからこそ俺は浩介に頼んだ。

「分かったよ、本来であればチーズケーキ1個分と言いたところだけど、今回はただにしておく」

浩介はそう言うと、神坂さんの斜め後ろに立った。

はつきり言えば、浩介の実力は全く分からない。

しかし、心の底では何とかしてくれるのではないかと言う期待もあった。

まず浩介がやったのは、水晶玉の形をしたワンド クリエイト を柀の間後ろに浮かべた。

俺は、浩介のやっている事が理解できなかったが、様子を見る事にした。

「……………」

浩介は何かを呟いているようだが、小声のためにそれを聞き取ることはできなかった。

「エリートラス・レオラ　!!!」

そして、柊の魔法が完成して閃光が走……らなかった。

「な、なんで!? …… ってまさか!!!」

その現象に驚いていた柊だったが、すぐに何があったのかを理解すると、神坂さんの方を睨みつけた。

「杏璃ちゃん、こんな所で魔法を使うのはいけないと思うの」

どうやら神坂さんと浩介の、二人掛かりでのキャンセル魔法は成功したようだった。

「き　!!!今度はそうはいかないんだから!!!」

「杏璃ちゃん　」

神坂さんの言葉に、柊は癪癢を起して再び魔法を行使しようとする。

しかし、神坂さんの制止は、ある人物によって遮られる事になった。

そう、さっきから恐ろしいほどの殺気を放ったている人物に。

「いい加減にしたらどうだ」

「……………っ!？」

柊は背後からした浩介の冷酷な声に、慌てて振り返った。そして、柊と神坂さんは浩介の表情を見た瞬間、固まった。なぜなら、浩介の顔は全くの無表情。

しかし浩介から放たれる殺気が、二人を恐怖の心で埋め尽くそうとする。

「柊杏璃、貴様はよほど僕を怒らせたみたいだな」

「そ、そんなわけじゃ」

今まで強気だった柊が、後ずさりをしながら言い返した。

「言い訳など聞きたくはない。とつとと僕の前から消える!! 貴様の顔や声なんぞ、今は聞きたくもない!!」

「……………ッ!!」

浩介の殺気全開での怒鳴り声に、柊は逃げるようにして教室を飛び出して行った。

「神坂春姫」

「は……………はひ!!」

「あいつが罰を受ける時が来たら、お前も受けて貰う」

浩介の殺気ははまだ衰えず、その矛先を神坂さんに向けた。

「そうだろ? だって、あいつはお前の“友人”……………何だからな」

俺は、浩介の今の一言に違和感を覚えた。

“友人”という単語を出した時、一瞬だが寂しげな表情を浮かべた

のだ。

「浩介く久美ちゃんを一日借りても良いか」

話は終わりとばかりに、無表情のまま俺達の所に戻ってきた浩介に、八チが冗談なのかそう頼んだ。

「は、八チさん。今の兄さんにはそんな冗談は

」

それを聞いていた久美が、慌てた様子で八チに言った。
しかし、それは一步遅かった。

シュン！！

突然風を切るような音が聞こえた。

「ゲハあ！！！」

「は、八チ！？」

何が起こったのかが、俺には全く分からなかった。

見えたのは、浩介が八チに向けて手刀で横に薙ぎ払った所だけだった。
た。

だが、八チはまるで蹴り飛ばされたかのように吹っ飛ばされた。

「八チ、良い事を教えてやる。今の僕はねものすごく機嫌が悪いんだ」

浩介の冷酷な言葉が無情にも、気絶している八チに降り注がれた。

「雄真、僕ちよっと屋上に行ってくる。あの女の顔を見たら魔法を

乱発しそうだから」

浩介は俺達にそう言うと、ドアに向かって歩き出した。

「あ、始業式が終わったなら、八チのようになりたくないのであれば、HRに遅れないように戻ってこいよ？」

浩介は、最後に一言そう言うと、教室を後にした。

教室にいた者が全員言葉を失っていた。

「ごめんね、春姫ちゃん。兄さんあれでも本当はいい人なんだよ。でも、魔法に関係になると……」

久美は固まっていた神坂さんに頭を下げて謝っていた。

「あ、いいえ。良いんです、私も杏璃ちゃんを止められなかったんですし」

久美の謝罪に、神坂さんは快くそう言った。

『全校生徒に連絡します。これより入学式を行いますので、体育館の方へ移動してください。繰り返します』

その放送を聞いた俺達は、始業式に出るべく教室を後にするのだった。

第6話「新たな日常」（後書き）

今回の第6話はいかがでしたでしょうか？

今回から文章形式を変えてみました。

一部の例外を除いて会話文または地の文が連続する際には、行間隔を開けないようにしました。

問題がありそうでしたら、元に戻します。

それでは、第7話で

第7話「狙いし物」(前書き)

注意：今回は、前半部分で若干残酷な表現があります。
そついったものが苦手な方はご注意ください。

それでは、第7話をご覧ください。

第7話「狙いし物」

Introduce 『闇に翻弄されし魔法使い』

この世界には3種類の魔法使いがいる。

人を守る事に長けている守護魔法使い。

秩序の光を纏う、光の魔法使い。

そして、人の負の心でもある闇を纏う、闇の魔法使い。

ここにもその闇の魔法使いがいた。

始業式が行われている中、誰もいない屋上で浩介が胸を押さえて、苦しそうにうずくまっていた。

「う……つく……！」

その理由は、簡単だった。

(くそ……！収まったと思っていた衝動が……)

そう、あの衝動が再び彼を襲ったのだ。

「うわ……ッ……！」

それと同時に、浩介の体の周りに紫色のオーラが漂う。

それは浩介が身に秘めていた”闇”だった。

「かはっ！？……闇が……抑えられない」

その一言が浩介がどういう状態なのかを、一発で説明していた。

闇の衝動というのはかなりつらいもので、それはまるで体中をナイ

フで刺されるぐらいの痛みが襲うようなものだ。

(柊杏璃……何て恐ろしい奴だ)

浩介は心の中でそう思った。

浩介は、闇が暴走した原因は彼女だと確信していた。

それは、浩介が彼女から自分と“同類”のような感覚を、感じたからだった。

「あの小娘……殺してやる……」

そして、浩介の口から出たのはとんでもない言葉だった。

もちろん、これは浩介の本心ではない。

彼の闇が暴走を起こして、思想を乗っ取り始めているのだ。

衝動を抑えることはできない。

抑えようとすれば、浩介自身が壊れてしまうのだ。

(もっ……駄目)

そして、ついに闇が暴走すると思われた瞬間だった。

「気分はどう？兄さん」

その声は始業式を終えて、ただならぬ雰囲気を感じた浩介の妹の久美の物だった。

「すごいぶる最悪だ」

浩介と言えば、久美が声を掛けた事によって、何とか意識を保って答える。

しかし、表情はとても苦しげだ。

「すぐに闇を抜くね」

「すまない」

そして、久美は浩介の頭に手を載せると呪文を呟いた。

「秘められし闇を浄化せよ……ジャツジメント!!」

その言葉と同時に久美の手から、黄緑色の優しい光が発せられる。

そして、その光は浩介の体を包み込んだ。

「……つぐ!？」

その瞬間、浩介の体中に痛みが襲いかかった。

その原因は、闇を浄化している事だ。

闇は浩介の魔法の一部のため、それを無理やり抜こうとすれば体中が痛むのは当然だった。

「……」

それは、魔法を行使している久美も同じことだった。

浄化する闇がそうはさせまじと反抗するため、彼女にも少なからず
に苦痛を与える。

「ふう……これで終了」

数分後、闇を浄化し終えた久美が、一息つきながらそう言った。

「かつこ悪いよな。自分の落とし前を自分で出来ないなんて」

浩介とは言えば、今まで座っていたベンチから立ち上がると、悲しげに言った。

浩介にはすでに漏れ出ていた闇は、無くなっていた。

「そんなことはないよ。私の中では兄さんは一番かっこいいんだよ？あのとときだつて……」

久美は浩介に反論すると、遠い目をしながら呟いた。

「それよりも、兄さんの闇がここまで増加したのは、やっぱり……」

「一つが魔法を思い通りに行使していなかった事と、柊杏璃だな」

久美の言葉に浩介が頷きながら答えた。

「ここじゃ、闇魔法なんて毎日使えないもんね」

久美はため息をつきながら言った。

闇の魔法使いは、何をしなくても闇が増えていくため、定期的に抜かなければいけない。

その一番効率がいいのが、闇魔法の行使なのだ。

実際、浩介の故郷では、毎日闇魔法を行使していた。

しかしここでは闇魔法を扱う機会がなく、そのため闇は溜まって行く一方なのだ。

そして、それが臨界点を超えると、先ほどの様に暴走するのだ。

「兄さん、私ね杏璃さんは危険だと思うわ」

「……」

久美の言葉に浩介は何も言わない。

「だって、杏璃さんと少しだけ話しただけでも、闇が大量に生じ始めたんだよ？」

「そんなの言われなくても分かってるさ」

久美の言葉に浩介が振り向きながら答えた。

「だからこそ、暴走した時はあいつに全責任を取って貰うさ」

「……うん。それが良いかもしれないね。彼女一人の命で何億の人間の命と世界を救えるのなら」

浩介の物騒な言葉に久美が賛同した。

「まあ、そうならないのが一番なんだけどな」

「……そうね」

二人はそう言って締めくくると、屋上を後にした。

Introduce 『闇に翻弄されし魔法使い』 End

その力の先にあるもの 第7話「狙いし物」

「ふう〜。校長の話はいつもいつも長いのよね〜貧血で倒れるかと思っただわ」

始業式が終わり、教室に戻っている途中に準がため息をつきながら言った。

準が倒れる姿……中身を知らなければかなりの絵になるだろう。

「あれ、小雪さん？」

ふと廊下の窓から外を見ると、校舎裏に向かう小雪さんの姿があった。

「どうしたの？雄真」

「ああ、小雪さんがいるんだ」

俺は、表を指差しながら言った。

「あ、本当だわ。でももうすぐにHRが始まるのに、どこに行くつもりなんだろう？」

「さあ？」

準の疑問の声に俺は疑問形で返した。

本当は様子を見に行きたいのだが、もし行ったら八手の二の舞になるだろう。

「あ、そろそろHRが始まるわ。行きましょ」

「ああ」

俺は、後ろ髪を引かれる様な感じがしたが、足早に教室に向かった。

（あ、そう言えば浩介にブツ飛ばされた八手はどうしたんだろう？）

よく考えれば、誰も八手を保健室に連れて行っていなかったような

……
俺の心の中に合った疑問は、それだけだった。

「おら、席に着け。HRを始めるぞ」

教室についてしばらくすると、担任の教師が入ってきた。
俺は、すぐさま自分の席に座った。

「早速だが、転入生を紹介する」

担任が、そう言つと教室の女子生徒と男子生徒の二人が入ってきた。

「え、では、2人とも自己紹介を」

「上条信哉だ。よろしく頼む」

教師に促らされるように男子学生が名前を言った。

「……………終わりかね？」

「あまり己を語るのには得意ではない故」

(なんだか、古代風な奴だな)

たった一言で説明を終えた上条兄に、俺はそんな印象を持った。

「上条沙耶です。兄共々よろしくお願いします」

もう一人の方が頭を下げた時、さっきとは打って変わって、男子から歓声が沸き上がった。

彼女の礼儀の良さから、大和撫子を連想させたのだろう。

「え〜二人は本日より魔法科に転入してきた。分からない事もあるだろうから、面倒を見てやるように」

結局この日のHRは、自己紹介に費やされる事になった。

「くそ〜、俺のアピールタイムが!」

放課後、げた箱に向かいながら復活した八ちにHRの事を話していた。

「良いじゃないか。何も焦ってあほをアピールする事はないだろ？」

「どづい意味じゃ!」

そんなこんなのをやり取りをしつつ、俺達は昇降口に向かったのだが……。

「あ〜っ!!見たかったな〜」

ちなみに今のは、上条さんの事を話した時の言葉だ。

「上条さんにとって八ちは劇薬かもしれないな」

「目に触れないように隔離しておいた方がいいかもしれないわね」

そんな事を話していると、八ちが一角を指差して言った。

「お、あそこに可愛い子がいるぞ」

「あ〜遅かったみたいだ」

八チが指し示した方を見て俺はそう呟いた。
そこには、今日転入してきた上条さんがいた。

「へ〜それじゃあ、あの子が沙耶ちゃんか。これはアピールタイムだ」

八チは言うが早いか、ものすごい速度で上条さんの方に向かった。

「あの馬鹿、本当に行きやがった」

俺も思わずため息がこぼれそつた。

「お待たせえ〜、同じクラスの高溝八輔ですう〜。よろしくう」
「え？え？」

上条さんは突然の事に何が起きたかを理解していないようだった。
いや、そもそも後ずさりしている所から見て、怯えられているとでも言つたところか。

「さあ、俺と一緒に帰ろうか」

「あの、その……私は……」

「準……」

「照準、OKよ」

俺はそんな茶番をいつまでも見ていられるほど、バカではないので、準に呼び掛けた。

「今すぐ発射」

「パトリオット・ミサイルキックー!!」

俺の言葉が合図となり、準の必殺技が炸裂した。

「ぐはあー!!」

準の必殺級のキックが命中して、八ちは横に吹っ飛んだ。結局、この後準と浩介によって八ちがトドメを刺されるという図が完成した。

俺はというと、上条さんを取りあえず表に連れて行った。

「驚かしてごめんな」

「いえ……その……申し訳ありません」

あゝあ、完全に怯えちゃってるな。

いつもなら、準が何とかしてくれるんだが、今回ばかりは望めそうにもないし。

「あの……私、得意ではないんです。男の方とお話するのが……不快に思われましたか？」

どうやら、上条さんはあまり積極的ではないらしい。

まあ、怯えられていないだけでも良かったか……。

「い、いやいや、全然。あ、一応HRで挨拶したと思うけど、俺は小日向雄真っていうんだ」

俺は上条さんにそう答えると、自己紹介をした。

「小日向……様」

「さ、様あ? 『様』なんて付けずに普通に呼んでくれよ」

上条さんの『様』に多少驚きつつも俺は普通に呼ぶように言った。

様なんで付けられる身分じゃないしな。

「分かりました。では、小日向さん……で。私は上条沙耶と申します」

「ああ、よろしくな上条さん」

と、そんな時だった。

「くおら雄真！！人を差し置いて、何仲良くなってるんだよ！！」

「うわ！！」

「きゃ！！」

いきなり八チが大声で叫びながら登場するので、上条さんもそうだが俺も驚いた。

いや、上条さんの場合はちよつと違うか。

「猛獣八チから、美女を守る雄真の凶ね」

「え？い、いえ……私はそんなつもりでは……」

上条さんは俺の背中に身を隠していた。

ちなみに準の視線は、とどめを刺し損ねちゃった と言っていた。

「私は渡良瀬準よ。これからもよろしくね」

「高溝八輔です。これからもよろしくっていう事で」

「大森浩介だ。ちなみにこの馬鹿は妹の久美だ。まあ、よろしくと言ふ事で」

しばらくして、上条さんが落ち着いたので見計らって、準たちは自己紹介した。

「は、はい。上条沙耶と申します。不束者ですが、よろしくお願
い
します」

「ところで上条さんは、あそこで何をしていたんだ？」

上条さんの言葉に、大声を上げそうになった八手を浩介が抑えてい
るのを見ながら、聞いた。

「はい、兄様をお待ちしていたのですが……」

どうやら、上条さんの兄である、上条信哉を待っていたらしい。

「兄様って？」

HRの時に保健室にいた八手には、意味不明な単語だったらしく、
準は分からない八手に説明をしていたのだが……。

「貴様らあ！！！！」

「な、なんだあ！？」

突然の叫び声に俺は驚いて、辺りを見回した。
そして、俺が見たのは、上条さんの兄だった。

「あら、噂のお兄様登場よ」

「に、睨んでるぞ」

確かに八手の言うとおりである。

まるで親の敵とも言えるような敵意の視線で睨みつけているのだ。

「貴様らあ！！沙耶に何をしている！！沙耶から離れる！！」

さらには、こっちにまで突進をしてくる。
すると、上条さんが俺達の前に出た。
ワンドと思われる、ヴァイオリンを手にして……。

「し、仕方ありません。お許しください、兄様。……えい!!」

上条さんはそう言うと、ヴァイオリンを、兄に向けて振りおろした。

「ぐはあああ!!」

上条兄は、ものすごい音と共に悲鳴を上げて倒れた。

「だ、大丈夫なのか？」

「峰打ちです」

心配になって聞いた俺の言葉に、上条さんが答えたが……。

「鼻血吹いてぶっ倒れちゃってるんだけど……」

よく見れば、上条兄は鼻血を吹いて倒れていた。

「あ……少々手元が、狂ってしまったようです」

「「「……………」」」

上条さんの言葉に俺達は、苦笑いを浮かべることしかできなかった。

兄には容赦がないんだな。

それからしばらくして、意識を取り戻した上条兄の言葉に上条さんが、慌ててワンドを振り下ろすという場面が続く事になった。

「申し訳なかった」

「いや、そんなに大事なら一人で待たさない方がいいぞ」

しかし、ようやく事の経緯を知ることが出来た上条兄は、俺達に頭を下げて謝っていた。

まあ、明らかに原因の発端は、確実にさっき気にするなって言っていた八手何だがな。

「しかし、君は実に良い人だ。君のような御仁と同じクラスであれば俺達も心強い」

そして、いきなり俺の事を評価し始めた。

自己紹介はさっき済まっていた。

「でも仲間と言えば、雄真と浩介もじゃない？」

「「どっという意味だ？」」

準の言葉に俺と浩介が同時に準に聞き返した。

いや、浩介は殺気を加えて。

「同じシスコン仲間としてね」

「俺は、シスコンではない!!」

「死にたい?」

準の言葉に俺は反論した。

浩介は……ある意味恐ろしい。

「ふむ、そのしすこんとやらは何だ?」

「うん、それはね それよりもだ!!二人とも今日学校に転入してきたようだけど、感想はどうだ?」

上条兄の問いかけに準が答えようとするのを、浩介が妨害した。

「ナイスだ、浩介!!」

「うむ、非常に良い学び舎だ」

「はい、クラスのみなさんが親切にしてくださるので、安心です」

浩介の問いかけに上条兄弟は答えた。

「それでは、私達はこれで」

浩介の妨害が功を奏し、上条さんがそう切り出した。

「しからは」

「ごきげんよう」

時代の掛った言葉を残して、二人は坂道を下って行った。

「さてと……ゲーセンにでも行かないか?」

「あゝ俺は用事があるから。代わりに浩介でも連れて行ってくれ」

八千の提案を俺は断ると、俺は浩介を指差して言った。

「こらゝ！！僕を物の様に扱うな！！」

俺の言葉に浩介が反論するが、効かなかった事にした。
俺は、鈴莉母さんに用があるのだ。

「分かったわ。それじゃ浩介君で我慢しましょうか」

「じゃあな、雄真」

そう言うと4人は歩いて行った。

「お前ら、僕を物扱いするな！！雄真、お前帰ったら覚えてる！！」

「……」

『マスター行きますよ？』

分かってる。

ただ、浩介の死刑宣告が聞こえたような気がしたから固まってるんだ。

俺は気を取り直して、母さんの所に向かった。

「それで、何の用かしら？雄真君」

研究室についた俺はイスに腰掛けて、鈴莉母さんに聞こえろと思っていた事を話す事にした。

「母さん。その式守伊吹が狙っている物って言うのは一体何なんだ

「？」

「そうね、それを話さないといけないわね」

それは、前に聞けなかった内容だ。

「式守家の秘宝って知ってるかしら？」

「あゝ知らないかな」

母さんの問いかけに俺は思いだそうとして見るも、その言葉に聞き覚えはなかった。

「簡単に言ってしまうと死後の魂を、集める装置なの。この土地は霊脈が強くて時々魔力の量が不安定になったりした事があったの。それを抑えるのが、式守家の秘宝なのよ」
「なるほど」

俺は母さんの言葉を聞いて納得した。

「それで、式守伊吹と言う奴が、何らかの理由で狙っているという訳か」

「そう言う事になるのよ。だからこそ、雄真君と神坂さんには何が何でもそれを阻止して貰いたい。神坂さんの方はすでに森の方に、探知魔法を張り巡らす作業を始めているわ」

母さんの話を聞いて俺は、一度整理をする事にした。

まず式守伊吹と言う人物が何だかの目的で秘宝を狙っている。

そして、母さんはそれを何が何でも防ぎたい。

神坂さんは森の方に探知魔法を張り巡らせている。

となると、残る疑問は……。

「ところで、俺は具体的に何をすればいいんだ？」

俺の行動の仕方だ。

「そうね……誰にも見つからないように、森で探知魔法を張り巡らせている神坂さんの、サポートをしてあげて欲しいの」
「なるほどね……」

母さんの言葉に俺はそう呟いた。

俺のやることは意外と簡単だった。

要するに、神坂さんを陰で支えろという事だ。

「あ、神坂さんなら探知魔法をある程度張り終えたので、すでに帰ったわ。とりあえず明日からお願いね」

「ああ、分かった。それじゃあ」

そして、俺は研究室を後にした。

(とりあえず明日の放課後からだな)

俺はそう考えつつ、家に戻るのだった。

第7話「狙いし物」(後書き)

ということ、第7話となりましたがいかがでしたでしょうか？
執筆速度を少しずつ上げていきたいと思えます。

それでは、第8話でお会いしましょう。

第8話「夕食時にて」（前書き）

今回はそれほど重くはない内容です。
少し間が空きましたが第8話をどうぞ

第8話「夕食時にて」

「……いただきます」「」

「ところで、すももちゃん。学園の方はどう？」

夜、俺とすももは夕食（すももの入学祝で豪華なものだった）を食べていた。

その力の先にあるもの 第8話「夕食時にて」

「はい。兄さんとお母さんがいるので、不安はありません。それと、魔法使いの女の子とお話をしたんですよ。その子ね、可愛い声で、『私に話しかけるな』って言うんですよ」

どうやら、すももには不安がないらしいが、後半で若干俺の方が不安を覚えた。

すももの友達の作り方は少しだけ強引な所があるからだ。なんだか、その女の子の事がかわいそうに思えてきた。

「私登校初日にして、目標が出来たんです!!」

「どんな、目標だ？」

俺は、嫌な予感がしたので、聞いてみることにした。

「いつか、伊吹ちゃんの頭を撫でてあげることです」

やっぱり、その子がかわいそうに思えてきた。

(伊吹?)

俺は、すももの言葉がものすごく気になった。
いや、俺は前にもこの言葉を聞いていた。

「なあ、すもも。その”伊吹”というのは、銀髪に赤い目をしていなかったか?」

しかし、一番に口を開いたのは浩介だった。

「はい。そうですよ。でもどうして浩介さんが、その事を?」

「あゝ、式守家と言えば僕達魔法使いにとっては、とても有名なんだ。だからだな」

浩介の言葉にすももは納得した様子だった。

「あ、そうそう。新しいクラスに『姫』がいるんだって?」

「……!!ゲホツゲホ!!」

「に、兄さん!!大丈夫ですか!?!」

かーさんが突然変な事を言ったので、俺は思わずむせ返した。

「ど、何処でその事を」

「さあね〜」

俺の問いかけにかーさんは笑顔ではぐらかした。

結局、その後神坂さんの事でいじられることになった。
しかし……。

「神坂……春姫さん」

「だあ〜！！もう終わりだって！！」

すももは神坂さんの名前を、不思議そうに呟いていたのが気になった。

（式守伊吹か……）

俺は自室で考えに耽っていた。

彼女が学園に来たのは偶然ではないだろう。

おそらく目的は……。

（式守家の秘室）

だとすれば、俺はどうするべきか……

「バカがいつちよ前に、何を悩んでいるんだ？」

そんな中俺に掛けられた声によって俺の考察は途切れた。

「浩介……それってどういう意味だ？」

「そのままの意味だけど。まあ考えるにしてもあまり気を詰め過ぎるな。雄真は雄真らしく動くのが一番いい」

(俺らしく……か)

浩介のアドバイス(?)を聞いてようやく考えがまとまった。どうせ動くのならいつもの俺らしく、やるのが一番だ。

「サンキュ、浩介」

「別に礼を言われる様な事はしていないが」

俺のお礼に浩介はそう答えると、俺の部屋の天井から浩介達の部屋に行こうとした。

「ちょっと待て、浩介」

「ん？」

しかし俺は一つだけ気になった事があった。

「浩介……お前」

そして俺の言葉で、浩介の表情は一変する事になった。

「お前2月13日に何人殺した？」

「……なぜわかる」

「あの日、浩介の目が異常なまでに紅かった。まるであの時のようにな」

俺の答えに浩介は、俺に背を向けたまま聞いていた。

浩介が人を殺したのは、これが初めてではない。

俺が中学の時にも、浩介は人を殺したのだ。
あの時の光景は、今でも俺の脳裏に残っている。
その時の浩介の目は、とても紅かった。

「……降参だ。あの時女の子をからかっていた少年がいただろ？」
「ああ、そう言えばいたな……ってまさか!!」

俺は浩介の言葉で嫌な予感がした。
まさか、浩介が子供に手をかけるなんてことはしないはずだ。

「ああその通りだ。けんじ……って言ったか。そいつだけをな、理由は僕の心をかき乱した事と石を投げつけた事」

「浩介、てめえ!!!」

俺は気づくと、淡々と答える浩介の胸ぐらをつかんでいた。
俺は許せなかったのだ。

浩介が人をまるで虫のように殺していく……それは俺の夢 みんなを幸せにする魔法使いになる を冒瀆する様なものだったからだ。

「離せ」

「……………っ!!」

浩介の感情のこもらない冷酷な声に俺は、反射的に手を離れた。
その時の浩介の眼は全てに絶望した、どす黒い何かが見えたような気がした。

「お前が人を幸せにする魔法使いになりたいといっているのであれば、
っただけ問おう」

浩介が冷酷な口調のまま、口を開いた。

「もし人を殺す事が僕の生きがい……幸せな一時ならば……雄真は僕のやる事を見逃すのか？」

「そ……それは」

俺は浩介の問いかけに答えられなかった。

「幸せの定義は人それぞれだ。好きな人と一緒にいる、好きな食べ物を食べる……だったら僕の幸せは、愚かな生きる価値のない屑を殺す事だ。雄真、お前は僕の”幸せ”を奪えるのか？」

「……」

俺は浩介の言葉に、何も答えられなかった。

「こんなことにも答えられないレベルで、僕の行動に口を挟むな。次やったら……お前”たち”を殺す。雄真、もう一度言う。今雄真が聞いたのはタブーの問いだ。命が欲しければ聞かない方がいいな」

「……悪かった」

俺は浩介に頭を下げた。

確かに俺は余計な事に首を挟んだのだから。

「いや、僕も言いすぎた。すまない……それじゃ、お休み」

「ああ、お休み」

浩介の言葉に一安心しながら、浩介が天井に向かってジャンプするのを見ていた。

「なあ、雄真」

「何だ？浩介」

天井に空いた穴に手を掛けてぶら下がりながら、浩介は俺に問いかけてきた。

「ああ言ったけどさ。僕、人を殺すのが好きなわけじゃないんだ。でももう誰もこの衝動を止める事が出来ないんだ。もし僕が人を殺す事を辞めたら、その時は確実に雄真達に危害を加える」
「……………」

「ねえ雄真。もし雄真に何とかできる力を手にしたらさ……………。僕をその呪縛から解き放ってくれるか？友として家族として」

浩介の悲痛な言葉は、俺の心を揺すった。

今のが浩介の本心だ。

浩介の言う衝動が何なのかは俺にもよく分からない。

「もちろんだ。その時は俺がお前を助けて見せるさ！！」

だからこそ俺は浩介にそう告げた。

これで少しでも浩介の心が楽になるのなら。

「ありがとう。……………それじゃあ、お休み」

そして浩介は天井の穴に入って行った。

今日から数日後に、再び“あれ”を見る羽目になるとは、俺は予想もしていなかった。

第9話 予期せぬ朝の教室にて（前書き）

あとがきにて、ちょっとした試みをやっていますので、もしよければご覧ください。

それでは、第9話をどうぞ

第9話 予期せぬ朝の教室にて

4月6日

「きゃあああああああー!」

俺が目を覚ましたのはすももの悲鳴と、時折何かが割れるような音だった。

「何だよ、朝っぱらから」

俺は眠い目をこすりながら起きるとそう言った。

『おはようございます。マスター』

「ああ、おはよう。ラジア」

俺はラジアに朝の挨拶をすると、制服に着替えようとした。

「雄真、一体何の騒ぎだ？」

「浩介か、たぶんいつもの“あれ”だろう」

すると天井からひよっこりと姿を現した浩介の問いかけに、俺はそう返した。

どう見ても浩介は不機嫌そうだ。

「全く、こつちにもかなり響くからやめて貰いたいんだけどな」

浩介はため息をつきながら言った。

俺はその言葉を聞き流して、制服に着替えた。

「どうしたんだ、そんなに慌てて」

「あ、兄さん。遅刻ですよ早く朝ごはんを食べてください！……！」

「少しは落ち着いて昨日出た時間を思い出せ」

ものすごくあわてているすももに浩介がため息交じりにそう言つと、すももは少しだけだが落ち着きを取り戻した。

「えっと、8時です」

「それじゃ、今の時間は」

「7時です……あれ？」

すももの言葉に俺は再びそう聞くと、すももは首を傾げていた。

これがすももが時々陥る、独特の時間感覚である。

俺達は“すもも時間”と呼んでいる。

その力の先にあるもの 第9話「予期せぬ朝の教室にて」

「んで、誰もいない廊下をどうして歩かなければいけないんだ？」

「それは……」

浩介の疑問に俺はあの時を思い出した。

あの後、ようやく勘違いに気付いたすももはとりあえずとばかりに、朝食を食べるように言つと俺達はちよつと早めの朝食を摂った。

その後すももは俺達に学校に行きましようと言い出した。もちろん俺は反論した。

「何事も余裕を持ってですよ？兄さん」

「……………」

だが、すもものその一言に撃沈して今に至る。

「「はあ〜」「」

俺と浩介は同時にため息をついた。

「小日向君？早いですね」

「おはよう、神坂さん」

誰もいないと思っていた教室に入ると、そこにいたのは神坂さんだった。

「あれ？神坂さんもこんなに朝が早いのか？」

「あ、いえ。読みたかった本が今朝届いたみたいなので、気になつて早く学校に来たんです」

俺の疑問に神坂さんが答えると、俺に本を渡した。

俺はその本が魔導書だとすぐに分かった。

そして俺は、それじゃちよつとだけと言うと魔導書を読み始めた。

（お、これは”魔法の効率化を促進する方法”かお、これもすごい）

気づけば、俺は魔導書を熟読していた。

それほどこの魔導書に書かれている内容は、すごかったのだ。

（マスター、神坂さんがいることをお忘れですか？）

（あ……………）

俺は適当に読みながら、神坂さんに分からないやと言いながら返した。

「あの、小日向君は魔法が使えたりしますか？」

「あゝ神坂さん」

神坂さんの問いかけに、浩介が答えた。

「雄真は僕が魔導書を読んでいる時に、無理やりに内容を教えていたりするから、知識だけは豊富なんだ。まあ魔法は使えないがな」

「そうなんですか」

浩介のフォローは何とかうまく行ったみたいで、神坂さんは納得したようだった。

「そうそう……」

そして俺は別の話題に切り替えた。

「そうなんですか、すごいんですね」

「すごいなんてものじゃないよ。あれは」

ちなみに今話しているのは、今朝発生したすもも時間についてだ。

「でも、真夜中に発動するよりはましだろ？」

浩介の突っ込みが入った。

あの時は本当につらかった。

そんな話をしているうちに、よく見知った顔が何人か入ってきた。

そのクラスメイト達は俺を見ると、驚いたような表情をしていた。そう、特にひどいのはこいつらだ!!!

「おっはよ〜って雄真がいる!? 待ち合わせの時間になっても来なかったから今日はぜつ〜〜〜〜〜体遅刻だと思っただのに!!!」
「おはようつていやだ〜!! 死にたくない〜!!!」

八チの世界が終わるような叫び声に、俺はため息が出た。

「二人の中で俺はどういう存在なんだよ」

「え〜と、有名な予言書に書かれているような存在」

ある意味すごい存在だと思ったのは、ここだけの秘密だ。

そして俺は浩介と神坂さんと一緒に外の空気を吸っていた。
理由?

……特にない。

「それじゃ、そろそろ窓でも閉め し〜め〜る〜な〜 へ?」

浩介が窓を閉めようとした時、何処からともなく女子生徒の叫び声が聞こえてきた。

「ま〜に〜あ〜え〜!」

「……? ゲブラー!」

チャイムと共に浩介を押しつぶして登場したのは……。

「ふう〜間に合った〜」

柊杏璃だった。

「あの、杏璃ちゃん。窓から入ってくるのは駄目だと思うの」

神坂さんが間に合った余韻に浸っている柊に、注意した。

「だって、間に合わなかったんだもん。それに窓の前に変な障害物が立っていたから着地に失敗しちゃったんだよね」

柊の言葉に、俺達は呆れるしかなかった。

ヒュウウウウウウ

「「「……………！！」「」

次の瞬間、教室中の空気が氷点下まで下がったような気がした。そして、俺は背中に冷や汗をかいていた。

「あれ？どうしたの、そんなに怯えた表情をして？」

柊はいまだにそれが分からないのか、俺達を不思議そうに見ていた。

「その障害物としては、今すぐどいて欲しいんだが？」

「あれ？浩介どうしたの？そんな所に寝そべって」

教室の空気を下げた張本人に対して、柊は果敢にもそんな言葉を掛けていた。

しかし、浩介から放たれる殺気は、さらに俺達を怯えさせる者だった。

「あ、あたし席につきなくちゃ……」

ガシー!!

柘は浩介の殺気に気付いたのか、その場を逃げようとしたが、それは浩介によって阻まれた。

「ちょっと向こうで話をしようか？杏璃」

「え、ち、ちよっと!？」

「大丈夫。お茶菓子も出してあ・げ・る・か・ら」

「み、皆助けて!!あ、あたし死にたく」

柘はクラスの皆に救いを求めるが、全員が目を逸らした。

何せ、今浩介に声をかけようものなら、とばっちりを喰らうことは、目に見えているからだ。

無事に帰ってこいよと言ってそんな目で全員が、浩介に引きずられていった柘を見ていた。

「小日向殿、先ほど妙な殺気を感じたが何事だ？」

「信哉、人には触れてはいけない領域があるんだよ」

遅れて教室に入ってきた信哉の問いかけに俺はそう答えた。

信哉は何の事が理解できていなかったようだ。

ちなみに、これは余談だが……。

「それでは、出席を取る」

HRで担任が出席を取っている時のことだった。

「ひいら ドカアアアン!!! …… 欠席だな」

突然響いた爆音に担任はひるむことなく、欠席にしていた。

ちなみにこの後戻ってきた柊は、しばらくの間体を震わせていた。

第9話 予期せぬ朝の教室にて（後書き）

T「ということでも第9話となったが」

浩「それはわかるがなんだ？この妙なコーナーのようなものは」

T「いや、最近こういう形式のものを見かけるからただ試してみただけだけど……やっぱり合わないかな？」

浩「……………ノーコメントだ」

T「妙に引つかかる言い方だな」

浩「で、話題とかはあるのか？」

T「それがないんだよ」

浩「そうか（だったら最初からやるなよ）だったらこれでお開きにするか？」

T「そうだね。それじゃ、お別れの言葉を言ってお開きとしましよー！！」

T・浩「次回もお楽しみに」

～おまけ～

T「そういえば、さっき心の中で言っていたことの意味を聞きたいんだけど」

浩「っげ！？心を読んでやがったのかよ！？こっとなったら」

T「あ、こらー！！逃げるなー！！！！」

第10話 占い(前書き)

今回は、浩介についての謎が一つだけ明らかになります。

それでは、第10話をどうぞー！

第10話 占い

「小日向くお客さんだぞ」

「ん？誰だ」

昼休みになってしばらくするとクラスの一人から、そんな声が掛けられた。

「ささ、そんな所に立っていないで中にどうぞ」

「は、はい失礼し」

俺はすももの声を聞いた瞬間に体が動いた。猛スピードですもものを廊下に連れて行った。

その時間約1.75秒。

スポーツ選手もビックリの記録だった。

「ど、どうしたんですか？そんなに慌てて」

「あのなあ……ちょっとはあの騒動を見て反省しろ」

俺は分かっているのではないのか、首を傾げているすもものに教室の方を指さしながら言った。

そこには……。

「「妹さくん!!」「」

男子生徒がすもみに手を振っていた。

「こんにちは」

「うお~~~~!!……」

「手を振るな〜!!!」

俺は野次馬に手を振るすももに突っ込んだ。

そして俺は足早にすももを引きずりながらもその場を離れるのだった。

ちなみに教室まで来た理由は、オアシスに案内してくれる約束をしていたから……らしい。

その力の先にあるもの 第10話「占い」

「来たわね、二人とも!」

「あ、お母さん」

オアシスに向かうと、まるで待ち構えていたようにかーさんが立っていた。

「それでどう?はじめてのオアシスの感想は?」

「思ってたよりずっと大きくて、それに……制服がかわいいです」

「ありがとう、すももちゃん」

すももの感想にかーさんはそう言うと、何かを思い出したように俺を見た。

「そうそう、雄真くんに嬉しいニュースがあるのよ」

俺は、かーさんの言葉に一瞬嫌な予感がした。

「実はね、明日から新しいバイトの人が入る事になったのよ」

「よかったじゃない？カーさんの苦勞も減るだろうし……でもそれってどっちかっていうとカーさんにとっての嬉しいニュースじゃないか？」

「そうなのよ。それで、雄真くんに今度会わせてあげるね」

俺はカーさんの言葉にため息が漏れそうになった。

その瞬間、俺の背筋が凍るような殺気を感じた。

(き、気のせいかな？)

「カーさん、いい加減に新しいバイトの人が来る度に、お見合いみたいのをさせるのはやめて貰いたいんだけど」

カーさんはいつも新しいバイトの子が入ると、俺と合わせてお見合いみたいのをさせようとする。

前も、そんなことをしている最中に、彼氏の人に来て死ぬかと思っただけだ。

あの時は、何とか許して貰ったわけだが、出来れば……いや絶対にそんな思いはしたくない。

「む。まるで私がやりてババアじゃないの」

「お母さん！！そんなことをしていたんですか！！」

すると、いきなり今まで静かだったすももが、カーさんに詰め寄った。

「え！？何ですももちゃんはそのなに怒るの？」

一瞬で驚いたカーさんだったが、やはり一枚上手のようですぐさまカウンターをした。

「え……それは……その」

かーさんのカウンター攻撃に、すももはさっきまでの勢いが嘘のようになくなっていった。

「とりあえず、かーさん。注文していいか？」

「何よ〜雄真君、ノリが悪いわよ〜」

「ここは本来食事をしたり、お茶したりする所だろ？」

「その通りっ」

俺の確認の言葉にかーさんは胸を張って答えた。

「だったら、さっさと本道に戻る!!」

「は〜い」

俺の言葉にかーさんは渋々だが返事をした。

「あ、それと向こうで浩介君が待ってるわよ。……かなり不機嫌そうだから早く行ってね」

かーさんが指し示したテーブルを見ると、俺達（正確に言えば俺達が）を睨みつけながら、チーズケーキを食べている浩介の姿があった。

（もしかして、さっきの殺気って……）

俺は、地獄に向かうような足取りで、浩介のいるテーブルに向かった。

「兄さん、このコロツケはですね、スパイスが決め手何ですよ」
「分かったからさっさと食べ」

その後何を頼むかを悩んでいたすももは、俺と同じA定食を注文した。

「一口食べるごとに分析してたら日が暮れるだろ……」

浩介の呟きが空しく聞こえた。

その浩介の手元には現在、俺達が来てから12個目のチーズケーキがあった。

ちなみに浩介が不機嫌だった理由が……。

『オアシスに行くっていつから素早くオアシスに来たのに、雄真達が全く来ないから』

とのことだった。

ちなみに浩介から、久美が何処に行ったのかと問いかけられた時だが。

『久美なら、準と一緒に八ちに餌付けしてたぞ』

『何をやってんだ？あいつは……』

と、溜息をつきながら6個目のチーズケーキを、一気に頬張った。

「あの、兄さん……あれは何ですか？」

すももが指差したのは、人だかりができていた所だった。

俺はすぐにそこが何なのか理解できた。

「ああ、先見……小雪さんだな。僕はあまり知らないがああやって、時たま占いをするらしい」

「ふふ、占いですか」

浩介の言葉にすももの目が光った。

俺は浩介の言葉に疑問を持った。

(何で浩介は、名称を言うんだろう)

浩介はいつもそうで、小雪さんの場合はいつも『先見』を付ける。

本人も気づいているのか、すぐに言いなおすが……。

ちなみにすもものは占いが好きな方で、よく週刊誌やテレビの占いコーナーで運勢チェックをしていたりする。

そして頼んでもいないのに俺の運勢までもを調べる。

ちなみに、一回浩介の運勢を調べた事があったが、

『で？いくら払えばいいんだ？』

『は、はい？』

『何をすつとボケてる！！靈感商法に引っかかると思ったたら大間違いだ！！！！！！』

と大激怒していたことから、やらないようにしている。

「兄さん、ちょっと占って貰いましょうよ」

「う……俺はあの人の占いはちょっと……」

「どうしてですか？私は一度小雪さんに、占って貰いたかったんです」

俺の嫌そうな表情にすもものがそう言うが、すももは小雪さんの占いの恐ろしさを知らないんだ。

小雪さんの占いはよく当たる事で有名で、しかも不幸の予言の的中率は100%なのだ。

小雪さんに不幸の予言をされた日には……まさに地獄絵図。結局俺は、すももに根負けをして占ってもらった事になった。

「あ、雄真さん。いらしゃいませ」

小雪さんの元に向かった時に俺を出迎えたのは、含みのある恐ろしい笑みを浮かべた小雪さんだった。

「あの、初めまして」

「あら雄真さん。もう新入生の女の子に手を出されたんですか？見かけによらず手が早いんですね」

「そんなわけないじゃないですか！い、妹ですよ、俺の！！」

俺は変な誤解を解こうと必死に説明をした。

「まあ、妹さんなんですか。初めまして、私は高峰小雪です」

「こ、小日向すももです」

「あの小雪さん、じつは……」

自己紹介を終えたところを見計らって、俺は事情を説明した。

小雪さんは俺のお願いを、快く了承してくれた

「では、そこへおかけください」

「はい、お願いします」

小雪さんは七芒星の魔法陣が描かれた布をテーブルの上に広げ、さらにその中央にローソクを置き火を付けた。

「つて、火はまずいんじゃない」

「大丈夫です。バースデーケーキだってろうそくを立てるじゃないですか」

「いいの？本当に。」

これ以上深入りをすると、ロクな事になりそうになかったので、俺はとりあえずスル した。

そして、最後に決められた一に石 ルーンストーン を置いていった

「では、始めましょう。目を閉じて、あなたの知りたい未来を念じてみてください」

「……」

すももは小雪さんに言われたとおりに目を閉じた。

「ちゃんとイメージできましたか？」

「はい」

「エル・アルカイル・ミザ・ノ・クエロ……」

小雪さんは静かに呪文を紡ぎ始める。

そしてそれと呼応するように、ルーンストーンが輝き始め、動き出す。

「……カルナ・デイ・アムクロス」

「目を開けてください」

「は、はい」

すももは小雪さんに言われたとおりに目を開ける。

「過去……支え合う人と人の姿。良い形で依存し合う、心安らかな生活」

それって俺とかーさん、浩介、久美の事を示しているんじゃないのか？

「現在……。遠くにある何かへの渴望。新しい状況への変化を求める暗示です」

「……」

「未来……。それを打ち破るのは、覚醒を促す出会い。その出会いによって、すもさんの周囲に大きな変化が訪れます」

「出会い……ですか？」

「ええ、そう遠くないうちに……いえ、もしかするともう既に出会っているかもしれませんね」

「……」

占いの結果を聞いたすももは、何かを考えているような表情だった。

「まあ、そんなに悪くはないんじゃないか？雄真はいきなり『不幸な相をお持ちですね』って言われたんだから」

浩介の言葉を聞いてすももはほっとした様子だった。

「さ、次は雄真さんですね」

「………分かりました」

俺は、腹をくくって占いを受ける事にした。

(絶対に、悪い結果が出ませんように)

そんな風に祈っている俺も俺だが……。

「それでは、始めます。エル・アムカイル・ミザ・ノ・クエロ……」

小雪さんの呪文が紡がれると同時に、俺は浮遊感を感じた。

「ル・キアノ……リフ・ベラ・ルナ……」

その理由は、小雪さんいわく俺の体内にある魔力のために、全力を通さないといけないという理由らしい。

「ラグ・フレイア……ラグ・シルティア……」

オアシスの喧騒は、何も聞こえず俺には小雪さんの詠唱だけが聞こえていた。

「カル・ナ・デイ……」

時間にしてはほんの数秒が俺には数十分にも感じられる。

「アム……クロス……」

そして終結のワードと共に、今まで俺にかかっていた圧迫感は無くなった。

「ところで小雪さん、結果は？」

俺は気になる結果を聞く事にした。

「……………気を付けてください。以上です」
「……………」

なぜだろう。

ものすごく虚しく感じるのは。

「ところで、浩介さん、あなたも占ってみますか？」

そんな俺を気にせず、小雪さんはいきなり浩介に聞いた。

「そうですね。せっかくなので、お願いします」

「では、始めましょう。目を閉じて、あなたの知りたい未来を念じてください……………」

「……………」

浩介は目を閉じて何かを念じ始めた。

「ちゃんとイメージできましたか？」

「はい」

「それでは、始めましょう」

「エル・アムカイル・ミザ・ノ・クエロ……………」

小雪さんの詠唱が再び始まった。

「ル・キアノ……………リフ・ベラ・ルナ……………」

浩介の様子に全くの変化もない。

「……カルナ・デイ・アムクロス」

そして、ルーンストーンは俺の時と同じ輝きを放った。

「過去……」

浩介は詠唱が終わると同時に目を開け、それを見ていた小雪さんは、占いの結果を話し始めた。

「幼くしてのしかかる重圧と罪。後悔による自らへの閉じこもり」

俺はこの意味がよく分からなかった。

「現在……偽りの自分。駒のように動く人たちを見下す虚しい日々

……現在の状態に焦りが出ている兆候です」

「……」

浩介は小雪さんの占いの結果を、静かに聞いていた。

「未来……壊れかけた歯車、そしていずれは止まる時。その瞬間に動き始める歯車」

もはや俺には、意味が分からなかった。

「ありがとうございます。色々と参考になりました」

「お役に立てたのなら何よりです」

小雪さんはそう言うと、時間を見て俺達に一礼すると、オアシスを後にした。

俺達も、その後に続くようにオアシスを後にするのだった。

Introduce 『衝撃の事実』

「これが雄真さんの運命……」

誰もいない廊下で小雪は、一つのルーンストーンを見ていた。それは『ハガル』と言う物だった。

主に災いなどのアクセントを示していた。

「元気出してな、姐さん」

「……そうですね」

タマちゃん言葉に、小雪は再び歩き出した。

(ですが、浩介さんを占っている時に見えたあれは……)

だが、小雪の悩みの種はそれだけではなく、浩介自身だった。小雪は、浩介を占っている時に“視た”のだ。

(神々しく浮かぶ月……まさか)

この時、小雪は誰よりも早く大森浩介の『正体』が分かってしまっ

ただ。

I n t r o d u c e

『衝撃の事実』

E n d

第10話 占い（後書き）

T「ということで第10話となりましたが……」

浩「つち、あの先見やるうまた余計なことを いたつ！」

T「次からそんな風に変な名称で呼んだらたらいを落とす」

浩「わ、分かったから!!」

T「それで、ぶっちゃけ浩介は何者なんだい？」

浩「……さて、今回はそこその長さだったが、僕が何者かを色々想像してもらいたい」

T「私の言葉はスルーですかい!？」

浩「答えたらネタバレになるし、それに無駄な時間は省きたいんだ」
T「うぐ!？」

浩「それにしても、今回は意外と速かったな」

T「そりゃもう、執筆時間は運次第ですから」

浩「一月間が開くこともあれば連日更新がきたりもするということか？」

T「まあ、そういうことになるな。どう、いいでしょ？」

浩「逆だ逆!!じれったいしライラするし、定期更新にしろ!!」

T「それも考えたんだが、大量に小説を書いているし、そんなことをしたらほかの作品の執筆時間関係で難しいんです」

浩「作者の気まぐれの投稿……伸びないわけがよくわかった」

T「そんなことはないぞ!!こんなんでも、ちゃんと見てくれる人はいるんだい!!」

浩「なぜになまる」

T「現時点でPV7439、ユニーク1224人です」

浩「本当に見てくれてありがとう!!」

T「それでは、次回予告をしてお別れとしましょう」

浩「永遠と繰り広げられる茶番、それを見る者の怒りが最高潮に達したとき、それは起こる」

T・浩「次回、第11話 茶番劇開幕 お楽しみに〜!」

第11話 茶番劇開幕

「はあ……」

気が重い……教室に入るのが怖い。

教室ですももの事が騒ぎになってないと思いたいんだが、それは甘い考えだよな。

できるだけ目立たないようにして教室に入ろう。

そうだ……空気のように気配を消して。

気づかれたら……それはその時だ。

浩介流に消してやるのかな？

たとえクラス中を敵に回しても……。

その力の先にあるもの

第11話「茶番劇開幕」

「おい、さすがにそれは怖いんだが……まあいい、協力する」

浩介がそう言った時だった。

「……グヘヘエ、すももオ、おとなしくワシの前に生まれた姿を晒すのじゃーっ……！」

「ああっ、いや……カニンシしてっ。おにいさまっ……！」

「……」

何だ……この騒ぎは……？

「とにかく入ってみよう」

そうやって、教室に入る。

「そこで俺は叫んだわけだ!!」

「雄真っ!! 貴様の思い通りにはさせないぞっ!!」

そこにあつたのはハチと久美による茶番劇だった。

黒板いっぱいには、小日向家の相関図が書きなぐられている。
しかも脚色が入りまくってるし……

「なあ雄真？」

「何だ？ 浩介」

俺を呼ぶ浩介の表情は、怒りを必死に堪えているようなものだった。

「なんで僕は雄真とすももの子供になってるんだ？」

「さあ？」

黒板の相関図にはなぜか浩介が、俺とすももの息子にされていた。
まあ、筆跡から見ても書いたのは久美ぐらいだが。

「ぐえへへへ… 兄は妹を自由にする権利があるのよ」

「悔しいか、悔しいかあ？ ハチい!!」

「おのれっ!! 雄真っ!!」

「馬鹿めっ!!」

「怪光線ビビビ」 っ！ 吹っ飛ぶ俺、うわああああっ、ドグッシュ
ーーン!!」

それでも続くこの茶番劇。

俺も怒りが抑えられなくなってきたぞ。

「八輔さん!!」

「くくく……もう終わりか、勇者八チよ？」

ふと俺は気になって隣にいる浩介を見た。

浩介は笑っていた。

いや、笑っているが目が怖い。

「フツ!!」

そんなにすもも役を、久美がやっている事に怒りを感じているのか。

しかもそんなことはお構いなしに、茶番劇は続いているし……。

「く……!!」

「八輔さんっ!!もう充分です……私の事はもういいから逃げてください!!」

「すももさん、俺は逃げないさ……だって俺には君への愛があるから!!」

「ずいぶんおもしろい芸だなあ……ゆ・う・ま？」

浩介がかなり怒ってる、いや既にキレてる。

「私も!!私もずっと八輔さんの事が!!」

「くわっかつか!!そんな事をワシが認めると思っか!!」

「勝ち取って見せるさ!!この胸に燃えたぎる愛の力で!!」

「な、何っ!?なぜ、立ち上げれるっ!!」

「雄真、貴様を倒す!!砕け散れええっ!!」

「砕け散るのはお前だ!!」

ドスー!!

「ぐはっ!!」

俺は見えていられず八手に一発殴った。

ちなみに、ツッコミを入れながら殴ったのは浩介だ

「人をダシに何をやっとするか!!」

「き、貴様は大魔王雄真っ!!」

それで俺の我慢の限界を超えた。

「ほほう……俺は大魔王か。なら、それらしく振舞わないとな……」

「い、痛い……ギブアップ、ギブアップ!!」

「このくらいで音を上げるような勇者様じゃないだろ？」

「くっくっく……」

「ま、まで……雄真、目がマジ……」

「死ね!!」

「ぎゃふっ、げへっ、ぐぼっ!!!!」

「ふう……ゴミは片付いた……」

黒板の落書きを消して席に着く。

クラス中のおびえた視線が少し気になるが、これですももの事をか
らかってくるやつもいなくなるだろう。

そう言えば、八手の遙が彼方に飛んで行く久美の姿を見た気がした
が……。

浩介曰く、すぐに戻ってくるから心配なし。
とのことだった。

「お花見？」

「そうよ。まあ八チが計画したんだけどね、明後日にやろうと思っただけど、どうかな？」

あれからしばらくすると、準がそんな話を持ちかけてきた。

「随分と急だな。場所とかは決まってるのか？」

「もちろんですよ。浩介君がいい場所を教えてくれたのよ。あ、関係ないけど春姫ちゃん達も参加するって。さっき聞いておいたのよ」

準の答えを聞いて俺は参加すると答えた。

まあ、花見も良いかな〜という考えだったからだが。

「そして雄真にはもう一つ重大な役目がある！！」

「何だ？その役目って」

準の横にいた八チが、俺に役目について口を開いた。

「すももちゃんを連れてくる事　ゲブラー！！」

「お前はまだ懲りないか！！」

俺は八手の言葉を遮ってぶん殴った。

さっき窓から投げられたのに全く懲りないあたり、ハチらしいと言えなくもないが。

「まあ、ハチは置いといて、すももちやんでも誘ってみたら？」

「そうだな。それじゃ今夜あたりにでも聞いておく」

「決まりね」

そして、俺達は買い出しの日を決めて花見というイベントが、完成したのだった。

第11話 茶番劇開幕（後書き）

T「ということで第11話でしたが、今日はちょっと違う方をお招きしています」

久「どうも、みんなのアイドルの大森久美子です」

T「アイドルかどうかはさておき、兄はどうした？」

久「兄さんだったら、さつき縛り付けてきたから大丈夫」

T「それ、かなりやばいような……」

久「でも、いつも男の人よりは、このキュートな私が来た方が作者的に嬉しいでしょ？」

T「……さて、ちよつと聞きたいんだが」

久「華麗に話題を変えたね」

T「久美と浩介はいつもあんなふうに行っているようだけど、よく仲が悪くなったりしないよな」

久「それは当然だよ。だってあれはいわば兄妹のスキンシップのようなものだし」

T「今確実にこんな兄妹は嫌だと思う人が大勢いると思うぞ」

久「どう思おうがそれはその人の自由でしょ？でも、別に私は暴力を振るわれているという感覚はないわ」

T「なぜ、それを言いきれる？」

久「だって、もし本気だったら校舎なんて一瞬で瓦礫と化すからね」

T「……さあ、次回は浩介の視点でのお話です……」

久「今日は、やけに話題転換されるわね」

T「それでは、次回もお楽しみに……」

久「ちよつと！？終わらせない 久美！！ ゲツ！？兄さん……」

浩「貴様よくも僕を縛り付けてくれたな……」

久「た、助けてえー……」

第12話 魔法実習の授業にて

浩介Side

僕達魔法科の生徒には、普通科の授業とは別に特殊な授業がある。その一つが魔法実習だ。

前半は先生に与えられた課題を二人ひと組でこなし、後半は各個人で模擬戦をすると云った物になっている。

しかし、今日はどこか違った。

それは御薙鈴莉のその一言から始まった。

「今日は模擬戦をやりたいと思います」

別段普通とも思つかもかもしれないが違う。

普通は各個人でペアの人同士で、好きな方法で模擬戦をするのだ。

例えば、片方は防御魔法を、もう片方は攻撃魔法を放ち、防御魔法を貫いたらその人の勝ちなど様々だ。

つまり今の言葉の真意は、本格的な模擬戦だという事だ。

「やりたい人はいますか？」

御薙鈴莉 ここでは敬称を付けた方がいいか 御薙先生の言葉と同時に金髪のツインテールの髪型の少女、柊杏璃が手を上げる。

「はい、あたしがやります」

「それでは、他には？」

彼女はあんななんでも一応、学園のNo.2の実力だ。

誰も手を上げようともしない。

(ここは差を見せてやるべきか……それに)

僕は心の中で腹黒い考えをまとめると、手を上げた。

「僕が、やります」

この時、僕と久美を除く生徒達が驚きの声を上げた。
まあ理由は分かる。

僕はそんなに本気を出した事がないからだ。

「浩介が相手だったら、あたしの勝利は確実ね。ま、精々がんばりなさいな」

奥は柊の挑発には乗らずに、御薙先生特製のフィールドに入った。

「それでは、始め!!」

魔法科生徒が見つめる中、俺達の模擬戦は始まりを告げた。

その力の先にあるもの 第12話「魔法実習の授業にて」

「僕を甘く見ていた事を後悔させてやる」

「ふん、強がりもそこまでよ!! まずはこっちから行くわよ!! オ
ン・エルメサス・ルク・アルサス……」

柊は僕の言葉に反論すると、呪文を唱え始めた。

(なるほど、魔力はいいが、制御がなっていない。最低レベルだな)

僕は心の中で笑うと、布陣を展開する事にした。

「クリエイト、DSYを3消費してキャプチャリング準備を!!」
『了解』

僕の言葉に皆が分からないのか、首を傾げていた。

「エスタリアス・アウク・エルートラス・レオラ　!!!!!!」

突如柊から放たれる魔法弾。

それが僕に直撃すると誰しもが思った瞬間だった。

「キャプチャリング!!」

左手を迫りくる魔法弾に向けてかざすと、高らかに宣言した。

次の瞬間、左手を中心に僕の前方に魔法陣が展開される。

「そんな防御魔法なんて、貫いてやるんだから!!」

柊はこの魔法陣を、防御魔法と思ったらしいが、それは勘違いだ!
!

そして柊の魔法弾が、僕の魔法陣に触れた瞬間だった。

「……な!?」「」「」

柊だけではなく、クラスの全員が驚きの声を上げた。

その理由は僕の魔法陣に柊の魔法弾が触れた瞬間、それは跡形もな

く消えたからだった。

「終わりか？では今度はこっちから行くぞ！！」

そして次の瞬間には、再びクラスの皆から驚きの声が聞こえた。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス……」

「それ、あたしの呪文！？」

柊の言葉が、その理由を物語っていた。

僕が今唱えているのはさつき柊から習得した、魔法の呪文だった。

「エスタリアス・アウク・エルートラス・レオラ　！！」

そして、僕はさつきと同じ魔法弾を放った。

「つく！！アムファイ！！」

柊は上空に避難する。

すると、今まで柊が立っていた所に魔法弾が着弾する。

しかしそれはただの魔法弾ではない。

着弾するたびに、壮絶な爆音が響き渡る。

それが、この魔法弾の威力がどれだけ高いかを示していた。

これが僕の特異能力『キャプチャリング』だった。

自分の防御力を代償として、任意の範囲に蒐集用の魔法陣を展開する。

これにあたった魔法はその魔法の仕組みや、情報が解析され、僕の物となる。

威力も僕に合わさるので、これは柊の魔法と言うよりは柊の魔法から”創り”だした、僕の魔法と言った方がいいかもしれない。

さて、さっきの魔法弾で上空に逃げた柊。でも、それは僕の予想通り。

だからこそ、僕はわざと上空に避難するように、魔法弾を放ったのだから。

僕は、高速移動で地面に降り立とうとする、柊の背後に立った。

「……！！！」

僕の気配に気付いた柊だが、振り向くよりも早く僕は左手に発動させていた魔法を柊にくらわせる。

「きゃああああ！！！」

僕の攻撃魔法が直撃した柊は、地面にたたきつけられる。

「そこまで！！柊さんが戦闘不能になったため、この勝負を大森君の勝利とします」

御薙先生の言葉と同時に、僕に拍手が浴びせられる。

柊？

柊は、僕に弾き飛ばされたフィールドの外で気を失っている。人を軽く見ていた罰だ。

「それじゃ、今日はここまで」

「「「「「ありがとうございます！！！！」」」」」

御雑先生の終了の合図で、全員はお礼を言うと、実習室を後にした。

「あ、大森君。ちょっと待ってくれるかしら？」

僕もクラスの人と一緒に、実習室を後にしようと思っている所に、御雑先生が呼びとめた。

「悪いんだけど、柊さんを、保健室に運んで貰えないかしら？」

「……構いませんよ。こうなった責任は僕にありますから」

「ありがとね。それじゃ運んだら一応、報告のために私の研究室に寄ってくれるかしら？」

「分かりました」

僕は柊に浮遊魔法を掛けると、そのまま保健室に運んで行った。

実習室を後にする時の御雑先生の呟き声は、僕の耳にはしっかり聞こえていた。

「それにしても、大森君のあの力……一体」

（ちょっと、鎌を掛けるか）

僕はそう考えると、保健室に向かうのだった。

第12話 魔法実習の授業にて（後書き）

T「どうも、TRです」

杏「春姫の永遠のライバルの柊杏璃よ」

T「浩介はどうした？」

杏「ああ、あいつなら久美ちゃんを追い掛け回していたけど」

T「あの二人、まだやってたのか」

杏「ほんと兄妹仲がいいわよね」

T「おや？嫉妬ですか？」

杏「誰が・よ！！」

T「バルム！？」

杏「次言ったらたらいを落とすわよ」

T「サ、サーイエツサー」

杏「わかればよろしい。にしても、今日は2話連続投稿なんて、どうしたのよ」

T「いや、今までの更新の遅れのお詫びということで、ちょっと張り切ってみました」

杏「まったく、それをするくらいなら、定期更新にすればいいのに」

T「それができないから辛いんだ」

杏「それって結局は作者のわがままじゃない。少しでも時間をさけるはずよ」

T「私に寝るなど？」

杏「そうよ！そしてあたしの逆転劇を」

T「さあ、次回は水面下での情報戦を取り上げる予定です」

杏「ちよっと！あたしのセリフを」

T「さようなら！！！！」

杏「だから、あたしのセリフを」

第13話 水面下の情報戦（前書き）

今回は、雄真たちの行動が主です。

それでは、第13話をどうぞ

第13話 水面下の情報戦

コンコン

「普通科の小日向です」

「どござ〜」

放課後、俺は母さんに今日の事について色々と聞くために、研究室の前にいた。

「母さん、今日だけど、特に注意しないといけない事とかあるかな？」

俺は研究室内に入ると、さっそく本題を口にした。

「そうね……特には無いわね。それよりも雄真君に見て貰いたい物があるの」

母さんは俺の疑問にそう答えると、徐に引き出しを開け、何かを探し始めた。

「母さん？何かな、見て貰いたい物って」

「これよ」

俺の言葉に母さんは目的の物なのか、一枚のディスクを俺に見せた。

「あれ？これって……」

小さいテレビに映し出されたのは、浩介と柊が待遇する所だった。

「今日、魔法実習の授業で模擬戦をやったのよ、その様子よ」
「なるほど」

母さんの言葉を聞いた俺は、そう頷くと模擬戦での映像を見た。

その力の先にあるもの 第13話「水面下の情報戦」

俺が見ているのは浩介と、柊との模擬戦の様子だった。

（お、柊が攻撃魔法を放ったか、浩介は……）

『キャプチャリング!!』

浩介が左手を前方にかざすと、左手を中心に魔法陣が展開された。
俺は次の瞬間、目を疑う事になった。

（な、魔法が……消えた!?!）

柊の魔法弾が浩介の魔法陣に直撃すると、それはまるでなかったかのように魔法弾を呑みこんだ。

そして次の瞬間には、柊の魔法を浩介が行使していた。

「それで、どう?これを見た感想は」

「うーん、柊は何か必要なものが欠けているような気が、するな」

俺は思った事をそのまま口にした。

「そしてもう一つが、大森君のあの魔法よ」

「ああ、あれはすごい一言では片付けられないな」

母さんの言葉に俺はそう答えた。

柀の時に見せた『キャプチャリング』と言う魔法。

あれは確実に魔法を解析して、習得している。

「その通りなのよ。でも彼の力に心当たりがないという訳でもないわ」

「浩介のあの力は一体何なんだ？」

「……………私の口からは言えないわ。一番なのは、雄真君が直接大森君に聞く事よ」

俺の問いかけに母さんは、青ざめながら答えた。

「そしてもう一つ。今日大森君に関して有力な手掛かりを見つけたわ」

母さんはそう言つと、俺の前に手帳のような物を差し出した。

「こ、これは!!」

「そう、それ明らかに連盟の紋章よ」

俺は手帳のような物を開いてみると、そこにはMと言う字の周りに二羽の鳥が描かれている紋章があった。

それは魔法使いの問題の対処をする”魔法連盟”の物だった。

「これさっきここに来た時に、浩介君が落として行ったのよ」

「なるほど……………あれ?これ認識番号があるな」

母さんの言葉を聞きながらいろいろと眺めていると、紋章の下あたりに、うっすらと番号が書いてあるのを見つけた。

「魔法連盟のデータベースには、連盟の職員の名簿もあつたはずだよな？それを使えば一発だよな」

魔法連盟には魔法使いとして登録した者の登録データを見る事が出来るのだ。

さらにはその職員も認識番号で調べることできるので、俺が持っている紋章に書かれている番号で調べれば浩介の正体が分かるのだ。

「それが、でなかったのよ」

「どういう事だ？」

「どうやら、その番号自体が偽造らしくて全く出てこなかったのよ。でももしかしたらこれは、私達をミスリードさせるための物かもしれない」

俺は母さんの言葉に何も言えなくなった。

「そんな、浩介がその職員だともいうのか！？」

「分からないわ。だから聞いて欲しいのよ、大森君自身に」

母さんの言葉を聞いた、俺の言葉に母さんはそう言った。

「……分かった。今日にでも聞いてみる」

俺はそう言つと、母さんから紋章の入った手帳を預かり、研究室を後にした。

浩介には不審な点が多い。

俺が見た模擬戦の様子。

あれは確実に、戦いなれていなければ出来ない芸当だ。

(切り替えていきますか!!)

『そうですね。いつまでも引きずると良くない結果になります』

俺は一旦浩介についておいとくと、森に向けて歩き出した。

Introduce 『戦いから得た情報』

「……はぐはぐはぐ!!」

「……はぁ」

オアシスにただひたすらにチーズケーキを食べる浩介と、それを見てため息をつく久美の姿があった。

「はぁ〜模擬戦で勝った後のチーズケーキは美味しい。もしかして兄さん。チーズケーキを食べるために模擬戦をしたの? ……………そんなわけないだろ」

久美の言葉に答える前の間が気になるが、久美はそれを無視した。

(チーズケーキを前にした浩介に、何を言っても無駄)

今の浩介はまるで、子供のように無邪気だった

「それで、二人はどう？」

「はぐはぐ……どうって……ねえ？」

しかし久美も黙ってはいられずに、模擬戦での事を聞いた。

久美の問いかけに浩介は、意味深な言葉を返した。

「柀についてはまず論外。魔方式もなっていないければ、応用力も全くないし考え方が安直過ぎるから、戦っていて楽しめなかった。それに魔法使いとしての“核”もない。厳しく言えば魔法使い失格の一步手前だな」

「あ、はははは……」

浩介の辛口な評価に、久美は思わず苦笑いを浮かべた。

「それで、結論を言うとなんか？ 私達の敵かな？」

浩介の評価を聞いて久美が浩介に聞いた。

「全くだ。あの二人が組んでも僕と久美なら10秒で倒せる……悪い、先に帰る」

「どうしたの兄さん？」

浩介はすごい事を宣言すると、窓の外に何かを見つけたらしく、久美の問いかけにも答えずにオアシスを後にした。

Introduce 『戦いから得た情報』 End

『マスターから3時の方向に柁さんの魔力反応です』

「柁か？」

森に入っただけでしばらくすると、俺はラジアからそんな情報を聞いた。

（もしかしたら、犯人かもしれないし、行ってみるか）

俺はそう思うと、木を伝って反応のあった場所まで移動した。

（あれか）

そして柁の姿を見つけた俺は、しばらくそこで見る事にした。
なぜなら……。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス……」

柁はそこで魔法の練習をしていたからだ。

ダーツの矢や、その先の木に付けられている的を見るからに、どうやらシューティングの練習をしているのだろう。

シューティングと言うのは、簡単に言えば、矢を魔法で放ちそれ的に正確に命中させることだ。

これは命中率や制御力を鍛える事が出来る。

「エスタリアス・エル・トラス・レオラ　！！」

柁の魔法が完成すると同時に、とてつもない速度で放たれる。
これはただ単に矢に掛けた魔力が、高いための物だ。

(……はずれた)

しかし放たれた矢は見当違いの所にささった。

「つく!? もう一回」

そしてそれから柎は何度も、矢を放っては回収して再び矢を放つの繰り返しだった。

(これで100回連続失敗か)

律儀に数を数える俺もどうかと思うが……

「今度こそ 無理だ え!?!」

「それ以上やっても魔力の無駄だ。それと……」

突然現れたのは浩介だった。

浩介は柎にそう言っと、木の枝の方 俺がいる場所だが を睨みつけた。

(……!?)

俺はとてつもない殺気により、動く事が出来なくなった。

「そこにいるのは分かってるんだ。出て来い!!」

「……!! (やばい!!)」

俺は浩介の事に急いで逃げた。

本能的にもそうした方がよいと、告げていたからだ。

そして俺はその後も森の警戒を続けるのだった。

「ちよつといいか？ 浩介」

「ああ、良いけど」

夜、夕食を済ませた俺はリビングでくつろいでいる浩介に声を掛けた。

「浩介さ、これ落とさなかった？」

「あゝそれはこの間買ったおもちゃだな」

「おもちゃ？」

俺は母さんから預かった、紋章の入った手帳のような物を見せると、浩介はそう言った。

「そうだよ。これで連盟ごっこをするんだってさ。僕はね、連盟にあこがれてるから、こつ言つのを持ってるんだ。いつか本物を手にできるよつにっつね」

「そうか。それじゃ、これは返すな」

俺は浩介の言葉を聞いて手帳のような物を返した。

「所でさ、浩介。前から聞こうと思ってたんだが、浩介の力って何だ？」

「……さあね。それについてなら答えたくない」

俺の疑問に浩介はそう言うと、リビングを後にした。

(やっぱり、教えてくれないか……)

俺はため息をつきながらテレビを見るのだった。

第13話 水面下の情報戦（後書き）

ということでした、第13話となりましたが、いかがでしたでしょうか？

次回は浩介の視点となりますので、楽しみに。

それでは、これにて失礼します。

第14話 魔法の行き先（前書き）

今回は、終盤の部分で少々ブラックな展開となっております。

それでは、第14話をどうぞ

第14話 魔法の行き先

浩介 Side

「確かこっち、だったよな」

僕は、さっきオアシスから見えた後姿を追って、森の中に入っていた。

「クリエイト、半径10キロ圏内の生命体反応を調べて」
「分かりました」

俺は、クリエイトに索敵を頼むと、勘に任せたさらに奥に進んだ。

その力の先にあるもの 第14話「魔法の行き先」

「マスター、見つけました」

「それで、どっちだ？」

「はい、マスターから3時の方向に2名です」

「2名？一人は柊としてもう一人は誰だ？」

俺はクリエイトの言った結果に悩みながらも、探知した方に向かった。

(やっぱり柊だったか。それにもう一人は……何で雄真がこんな所に)

僕は柊が見える草むらに辿り着くと、僕はさらに疑問が増えた。

『恐らくは、彼につながっている人が、この森の警護をさせているのでしょ』』

(御薙鈴莉か?)

僕はクリエイトの予想に、瞬時にその人物の名前を言った。
雄真の実の母親で、魔法パターンまで同じだ。

『断言はできませんが、ほぼそうだと。マスターが仕掛けた罠に引つかかったかで判断しましょう。それよりも今は……』

クリエイトの言葉に僕は、目の前の事に意識した。

(あれは初歩のシューティング練習か?にしては制御もなってない)

「今度こそ 無理だ え!?!」

これで何度目か、もう一度魔法を行使しようとした柊を止めた。

「それ以上やっても魔力の無駄だ。それと……」

僕はそう言うと、一本の木の枝に向けて殺気を送った。

「そこにいるのは分かってるんだ。出て来い!!」

僕の言葉により、そこにいた“何者か”は逃げて言った。

「狐だったようだ。と、話を戻すがあなたはさつきから集中力と、制御力がめちゃくちゃだ。もっとしっかりと集中して、制御するんだ」

「な、何よ！？あたしに塩を送ろうとでも あはははははは！！！！
！ 何がおかしいのよ！！！」

僕の言葉に柊は反論するが、あまりにおかしかったので僕は笑ってしまった。

「いや。あなたは全く立場と言う物を分かっていないようだからな。あんたさっきの模擬戦で技を盗まれただけではなく、一発KOも喰らっている。あのレベルの物に塩を送っても逆に塩が腐っちゃう」「何ですって！！！！」

「論より、証拠だ。ちよつと、見てろ」

僕は激怒する柊にそう言うと、懐から取り出した矢を100本地面に置いた。

「ち、ちよつと浩介。まさか！？」

「そのまさかだ。これが僕の力だ。良く見るといい」

僕は柊にそう言うと、地面に置いた100本の矢を、一斉に上空に浮かべた。

「我が纏いし闇よ。我が願いを聞き入れたまえ。ここに浮かび上がりし矢を、的に当てよ！！！」

僕の言葉は魔法となって形成される。

「我は、闇の魔法使いなり！！闇よ、今こそその力を解き放て！！」

「ディベンザライト!!」

僕の最後の言葉を受けて、矢は動き出した。

シュツ（矢が一斉に放たれる音）……トトトトトトトトトトトト（矢が的に当たる音）……パキ!!（的が折れる音）

「う、嘘!？」

僕の魔法を見て柊は言葉を失っていた。

僕が放った矢は、全て一直線に突き刺さり、その衝撃で的が割れた。

「力が強いのが僕の魔法のデメリット。これを見て、柊がどう思うのかは任せる」
「……………」

柊は僕の言葉にも何も答ええない。

（ちょっとやりすぎたかな？）

僕は心の中で後悔した。

しかし、魔法では妥協は許されない。

魔法は便利な反面ちょっとしたミスで、重い罪を背負う事になるからだ。

そう、僕のように……。

もう僕みたいな魔法使いを生み出さない。

それが僕の目標だった。

そのためならば、たとえ僕が傷ついてでも……

「ねえ浩介？」

「なんだ？」

そんな事を考えていると、柊が口を開けた。

「あたしはどうしたら春姫よりも強くなるんだろう？」

「教えてやろうか？」

そして、僕は柊に今まで以上に厳しい言葉を口にした。

「今のお前ではそんなことはできない。制御も駄目、技術も駄目さらには重要な何かもない」

「……っ！」

柊が息をのむのが聞こえた。

正直に言えば心苦しかった

「はっきり言うけど、柊お前このままだと魔法使いで居られなくなる」

そして、僕は口にした。

ああ、神よ。

今この時だけ、僕から“悲しみ”を抜いてくれれば、僕は心を痛めなくても済むのに。

僕はこの時初めて、運命を呪った。

浩介 Side End

「はつきり言うけど、柘お前このままだと魔法使いで居られなくなる」

あたしは、浩介からその言葉を聞いた瞬間、意識が遠のいた。

(嘘よね?)

あたしはただ、1番になりたかったただけなのに。

あたしは昔から何をすることも不器用だった。

そんな中あたしは“魔法”に出会ったのだ。

魔法はあたしが努力をすればするほど答えてくれた。

それが嬉しくて、一生懸命努力した。

そうすればいつしか、初恋の“あの人”に会えるような気がしたからだ。

でも、現実はとても冷たかった。

あたしの前に神坂春姫と言う人物が現れてからは特にだった。

彼女はあたし以上に魔法を扱っていた。

そして次には浩介まで。

そして今の言葉だ。

もうあたしは駄目かもしれない。

「それで諦めるのならいいけど。お前の気持ちはそんなに薄っぺらな物なのか？」

「……」

浩介の言葉に、あたしはハンマーで頭を叩かれたような衝撃を感じ

た。
そうよ、これからだって努力をすれば、強くなれる。
だったらやっつてやるうじゃないの！！

「でもいくら頑張っても出来ない物は出来ないんだけど」

あたしは浩介の一言を聞きそびれていた。

それが、あたしの今後を分けた道だった事にまだ気づいていなかった。

杏璃 Side End

浩介 Side

「どうかしちやっつたかな？僕も」

僕は柊のいた場所から引き返しながらそう呟いた。

そうだ。

いつもならああいう奴に情を入れることなんてできない。

『いいえ。きっとそれがマスターの本心だと思いますよ』

「そうだな」

僕は今まで柊は、何もせずに偉そうなことを言っていた愚か者だと思っていた。

しかし今日の柊の様子を見て、それは間違っていた。

彼女は精一杯努力をしてたんだ。

”決して得にもならない努力”を。

(何にしても彼女自身に足りない物が見つからない限り、あれ以上力が出るとは言えないし、このままなら……)

出来ればこの先の言葉通りに、ならないようにしたい。

「帰りましょっか」

『そうですね』

僕はそれ以上考えずに、小日向家に戻る事にした。

しかし、その途中だった。

「悪いけど、退いてくれないか」

森を抜けてすぐに僕は、3人の男子学生に行く手を遮られた。

左端にいるのが、黒髪の偉そうなやつで、右端にいるのが呑気にポケットに手をつっ込んでる男だ。

(あれで格好いいと思ってるのか?)

そして、真ん中にいるリーダー格の男は金髪だった。
その男は僕の事を見下すように見ていた。

「お前、今日の模擬戦で柊さんをぼこぼこにしたらしいな」

「よくもやってくれたな。たっぷりと礼をしてやるぜ」

金髪男と端にいた男が、僕にそう言ってくる。

(なるほどな)

柊杏璃はアイドル的存在だ。

そんな彼女のファンの一人か何かだろう。

「やるも何も、あれは模擬戦だ。模擬戦で手を抜く事はそれこそ失礼だし。そもそも文句を言うのであればお前らではなく、柊杏璃本人じゃないのか？」

だからこそ、僕は言い返した。

「お前、闇の魔法使い何だってな」

リーダー格の男が僕にそう言った。

「それがどうした？」

「うおお怖えな。そのまま俺達を殺すのか？」

その後浴びせられるのは、暴言の嵐だった。

お前はこの世のごみ
死んでしまえばいいんだ

そのような言葉、僕に言わせれば……

「あははははははははは！！！！」

「何だあ？いきなり笑い出して。壊れたのか」

「お前は一つ勘違いしているようだ。闇の魔法使いは、お前らの尻拭いをしているにすぎん。それに光と闇がなければ、この世界も終わるのだよ。そんな事も知らないで、闇を非難するなんてな、愚かなことだ。お前らの腐った脳みそを洗い直すんだな」

僕は3人にそう言うと、男達をすり抜けて、歩いた。

「よくも馬鹿にしたな！！覚えておけ！！お前に地獄を見せてやるからな！！」

僕はその声を聞きながらも、再び笑っていた。

（やれやれ、カモがネギをしよつてきたな）

そう、あいつが例え実力を行使したとしても、僕には勝つことはできないし行使した時点で僕は、あいつらを殺す。

（まあ、行動次第だな）

本当に僕は変わった。

全ては雄真達のおかげだ。

……今度お礼で高級なお肉でも使って、ハンバーグを作ろうかな。まあ、高級なのじゃなくても、心を込めればいいんだけどな。そして、夕食が終わり、僕が寛いでいる時だった。

「ちよつといいか？浩介」

「ああ、良いけど」

「浩介さ、これ落とさなかった？」

雄真はそう言いながら僕に差し出した物は、僕が御薙先生の研究室でわざと落とした物だった。

「あゝそれはこの間買ったおもちゃだな」

「おもちゃ？」

僕の答えに雄真は驚いたように返した。

「そつだよ。これで連盟ごっこをするんだつてさ。僕はね、連盟にあこがれてるから、こつ言つのを持つてるんだ。いつか本物を手にできるよつにつてね」

「そつか。それじゃ、これは返すな」

僕は雄真から身分証明用の手帳を返してもらつた。

「所でさ、浩介。前から聞こつと思つてたんだが、浩介の力つて何だ？」

「……さあね。それについてなら答えたくない」

雄真の疑問にそう答えると、僕はリビングを後にした。

(どつやら、雄真は御薙鈴莉と繋がつてゐるよつだな)

そんな確信を胸に抱いて……。

続く。

第14話 魔法の行き先（後書き）

というわけでした、第14話となりましたが、最後のほうで雲行きが悪くなったような……。

そして例によって次回は閲覧注意です。

それでは、これにて失礼します。

第15話 お花見前日物語

4月7日

「おはよう、かーさん、浩介」

「おはよう雄真君」

「おはよう、雄真」

朝、俺はいつもどおりにリビングに降りると、浩介とかーさんに挨拶をした。

「あれ？すももは」

「すももちゃんなら、ト・イ・レ・よ」

「!?!?」

かーさんの答えに俺は思わず、せき込んだ。

「ちょっと、かーさん!!変なこと言わないでくれ!!」

「変なことってなんですか?」

「だから、すももがトイ あれ?兄さん起きていたんですか? む

ごじ!!」

かーさんに聞かれた俺が、答えようとすると、すももが入ってきた。

しかし、そこは浩介。

俺の口を塞いで何も言えないようにした。

でも、息もできないが……。

「どうしたんですか?兄さん」

「なんでもないから、気にするな」

浩介はそれだけ答えると、俺の口から手を話した。

その力の先にあるもの 第15話「お花見前日物語」

ちなみに、これを通学路で話すと……。

「俺も分かるぜ！！女の子のトイレにドキドキする気持ち」
「……………」

俺達は、八手の言葉に後ずさりした。

「なんで離れるんだよ？みんな」

「寄るな変態」

「は、八子さん、こっちに来ないでください」

「俺から10m離れる」

「近寄ったら燃やす」

俺達は八手に対してそう言い放った。

それよりも八手、相当浩介に恨まれてるな。

「って、おい！！てめえ何ちゃっかりと 燃える ゲファ！？」

俺に詰め寄ってきた八手が、一瞬にして灰になった。

「あの、浩介？一体何を？」

「言ったでしょ。来たら殺すって」

俺の問いかけに浩介は冷酷に答えた。

「でも、さすがに燃やすのは……」

「だったら、冷やす？」

そして、今度は八手に目がけて水流を放つ。

「いや、そうじゃないから!!」

「八チさん、気絶してますよ!？」

俺は浩介に突っ込んだ。

すると、浩介は鬱陶しそうにしながら、電撃を放った。
見事な、3属性の攻撃だった。

「……息がない。ただの屍のようだ」

「俺は生きてる!!」

浩介の言葉に八チが立ちあがって言った。
全身真っ黒な状態で。

「……………つち」

「今舌打ちしたよな!!浩介絶対に俺を殺す気だろ!!」

「……………そんなことないじゃないか」

「今の間は何だ!!」

なんだから、浩介と八チのやり取りを見てみると、漫才のように感じ
てきた。

「はいはい。八チさん。ちょっと痛いけど我慢してね」

「うひょ〜久美ちゃんの手の感触いいな〜」

心配そうに言いながら、治癒魔法を行使するために久美が八チの手を握ると、八チはそんな事を呟いた。

「やっぱり、ロリっ子は違うぜ」

「……………」

そして、浩介は無表情になった。

「永遠に、地獄に堕ちろ!!」

「ゲボファ!!」

八チは浩介の逆鱗に触れ、吹っ飛ばされた。

あれ？今久美の手から、八チに向けて魔法弾が放たれたような……。

そんなこんなで、俺達は学校に向かうのだった。

「ね〜伊吹ちゃん。お花見に行きましょうよ〜」

「行かぬと言っている!?!」

「ん?」

休み時間、廊下を歩いていると、そんな声がした。

「あ、兄さん。どうしたんですか？」

「ん？ちよつとな」

俺に聞いて来たすももの隣には、さっきまで言い争っていたであろう、背の低い銀髪の女子生徒がいた。

「すもも、用がそれだけなのなら、私は戻るぞ」

「あ、待ってください。兄さんの事を紹介しますね」

教室に入ろうとする女子生徒を、すももが食い止めた。

「この人が私の兄さんで、その隣にいる人が私と兄さんと一緒に住んでいる人です」

「小日向雄真だ。よろしく」

「大森浩介だ」

「大森久美子よ。久美って呼んでね」

「式守伊吹だ」

俺達は自己紹介をする事にした。

「それよりも、伊吹ちゃん。一緒にお花見に行きましょうよ」

「だから行かぬと言っている。それと、私をちゃん付けで呼ぶでない！ー！」

どうやら、伊吹『ちゃん』と呼ばれる事に抵抗があるみたいだ。

「ところで伊吹ちゃん」

「お主も、ちゃん付けで呼ぶでない！！ちゃん付けされるくらいなら、さん付けか呼び捨てにされた方がまだ」

本当に抵抗があるみたいだな。

これ以上からかうと何をされるか恐ろしいので、素直に従う事にしたのだが……。

「……………」

「こんなちびっ子にさん付けってどうよ……などと、不屈きな事を考えたのではあるまいな？」

見事に凶星を突かれた。

「まあ良い。すももそなたもだ」

「えゝ、可愛いじゃないですかゝ」

しかし、素直に従うすももではなかった。

「まあ、こいつも悪い奴じゃないから、よろしくな」

これ以上見てもいいのだが、被害がこっちまで来るので、俺は離れることにした。

「兄としての責務を全うせよゝ！！」

「雄真、貴様後で覚えてろゝ！！」

伊吹から何かを叫ばれた様な気がした。

ついでに浩介の殺気付きの叫び声も聞こえた。

（難儀な子だな……………）

そして、俺は教室に戻るのだった。

「申し訳ありません」

教室に入ると、上条さんが八手に頭を下げて謝っていた。
ちなみに八手は石化していた。

「八手、早くも玉砕か？」

「違うわい！！」

石化した八手に話しかけると、八手がものすごい速さで回復して、
反論してきた。

その後八手の話を聞くに、上条さんを花見に誘おうとしたらしい。

「それで、上条さんに断られたと」

「何をしているのだ？沙耶」

八手から説明に頷いていると、上条兄がこちらの様子を伺いにきた。

「いや、お花見に行こうと言っていたんだけど、上条兄もどうだ？」

「小日向殿、その上条兄と言うのはやめてくれないか？俺の事は信哉で良い」

「どうやら、上条兄という言葉は抵抗があったらしい。」

「分かった。それで、どうなんだ」

「うむ。申し訳ないが俺達には用がある故、行く事が出来ぬのだ。桜も見ごろであるうが、残念だ」

信哉と上条さんはとても申し訳なさそうな表情をしていた。

「まあ、また来年にでも一緒にやろうぜ」

俺は、申し訳なさそうにしている信哉にそう言った。

「かたじけない」

「ところで、これからは沙耶ちゃんの事は沙耶チャンで、俺の事はダーリンと呼んでくれ」

話を変えようとした八チが、いきなりとんでもない事を上条さんに言った。

「うむ。高溝殿の事は、ダーリンと呼べばよいのだな」

そんな八チに、信哉が怒涛の一言を言った。

今わかったが、信哉には冗談は通じなそうだ。

「八チと呼んでください」

「アホ」

ハチは意気消沈したように訂正した。
それからしばらくして、授業が始まった。

「よし、花見メンバー集合」

放課後、ハチの呼びかけで神坂さん達が集められたのだが……。

「なぜに、俺の机に集まる」

「細かいことはいいじゃない」

俺の疑問に準が答えた。

「そう言えば、柊はどうしたんだ？」

「杏璃ちゃん是用があって行けないらしいので、私から後で伝えておきますね」

神坂さんが俺の疑問に答えた。

「そう言えば、浩介の姿も見えないな」

「あ、本当だ。さっきまでいたはずなんだけど……」

俺は、いつもいるはずの浩介の姿がない事に、妙な胸騒ぎを感じた。

「それじゃ、今日はお花見でいる物を買いましょ」

「お皿とかは必要ですね」

準の提案で、それぞれが、必要な物を言っていく。

「おい！！なんでお前が仕切ってるんだよ」
「とりあえず、必要な物はこれで決まったわね」

八子の抗議を準はスル　しながら話をまとめた。

「スル　ですか……」

そして、八子は頂垂れた。

「ところで、ちょっとお腹すいてない？」

「あ、実はちよつとだけ……」

そんな中準が神坂さんに尋ねた。

「それじゃあ、今日のお昼は、オアシスにでも行かない？」

「あ、いいですね」

神坂さんが賛同したことで、俺達はオアシスに向かう事になったのだが……。

「……！？悪い、俺ちよつと先に帰る！！」

「おい、どうしたんだよ雄真！？」

俺は、ふと廊下の窓から森に連れていかれる人物を見たのだ。
なので、俺は八子達に言ったのだ。

「悪い、その代わり明日の場所取りは俺がやるから！！」

「……？なんだかよく分からねえけど、気をつけるよ」

俺は八子の声を聞きながら、ただひたすらに走っていた。

(間に合ってくれよ!!)

俺は心の中でそう願っていた。

Introduce 『オアシスにて』

カフェテリア”オアシス”に来た春姫達が見たのは……

「ね〜ね〜、式はいつにするの?」

「え?え!?!」

雄真の母親の、音羽による質問攻めだった。

しかもそれが数分間続いた。

「そう言えば、雄真君は?」

「ああ、雄真なら用事があるって言って先に帰りましたけど」

音羽の疑問に準が答えた。

準の言葉に音羽は納得すると、注文を厨房に伝えにいった。

「それにしても、すごい込みようね」

「まあ、たぶん杏璃ちゃんが原因だと思うけど」

準の呟きに、ハチがそう言った。

準たちは、杏璃がオアシスのウエイトレスをやっていたことに驚い

ていた。

そのために、オアシスは男女比が9：1になっていた。

「邪魔しちゃ悪いし、私達も買い出しに行きましょうか」

準の提案に全員が頷くと、オアシスを後にした。

「敵は、本能寺に、あり〜!!」

大丈夫なのかと聞きたくなるような叫び声を聞きながら。

I n t r o d u c e 『オアシスにて』 E n d

俺は、ただひたすらに走り続けていた。

『ラジア、浩介の魔力を探してくれ!!』

(分かりました……マスターの正面です)

森に入った俺は、ラジアに浩介の居場所を確かめて貰うと、ひたすらに走り続けた。

(頼むから、”あの時”のような事にはならないでくれよ!!)

それは、昔の惨劇を繰り返さないためだった。

「浩介！！」

そして、俺は浩介の姿を見つけた。
男子生徒二人に拘束されている久美と、浩介の横にいる男子学生の
3人も一緒にだった。

第15話 お花見前日物語（後書き）

すみません、前回のあとがきで、今回は閲覧注意と書きましたが、まだグリーンでした。

しかし本当に次回からが閲覧注意です。

デッドゾーンが4話ぐらい続きます。

ということですので、第16話にてお会いしましょう。

【閲覧注意】第16話 鎌首をもたげた死神（前書き）

今回はかなり残酷な描写があります。

閲覧注意レベルは【4】（最大値は5）です。

読まれる際にはご注意ください。

それでは、どうぞ。

【閲覧注意】第16話 鎌首をもたげた死神

それは俺が中学2年の、3月の時だった。
浩介への印象を変えたのは……。

「雄真、八子はどうした？」

「ああ、八子なら今日勉強会がある事が分かると、逃げてったけど」

このころ、瑞穂坂学園への試験勉強という事で、俺と準八子の3人は浩介との勉強会を週に数回行っていた。

「全く、あいつは大丈夫なのか？この間の模擬試験でE判定を貰ってただろ」

ため息交じりに浩介が言った。

浩介の苦勞がこの時初めて分かった俺だった。
そんな時だった。

「あれ？」

「どうした？雄真」

俺はふと廊下の窓から外を眺めると、一か所に目をとめた。

「あれって、すももじゃないか？」

「あ、本当だなんて、首根っこ捕まえてるじゃないか！！」

俺の言葉に浩介は目を凝らして見ると、そう叫んだ。
それから導き出されるのは いじめ だった。

「雄真、行くぞ!!」

「当たり前だ!!」

そして、俺達は体育館裏へと向かった。

そう、全ての悲劇はこの時に始まったんだ。

その力の先にあるもの

第16話「鎌首をもたげた死神」

「きゃあ!!」

体育館裏に辿り着いた俺達が見たのは、一人の女子生徒がすももを後ろから、蹴り飛ばしている所だった。

「死んでくださーい」

「やめる!!」

俺はいてもたっても居られなくなり、女子生徒を止めようとするが、俺の制止を聞かない。

「一人じゃ何もできない人間の、クズ」

そして、女子生徒は再びすももを蹴ると、暴言を吐いた。

「いい加減にしたらどうだ？」

そんな中冷ややかな声を出したのは、浩介だった。

「あれ〜浩介君〜。あの人がね〜私に暴力をふるうんですよ〜助けて〜」

女子生徒は浩介を見つけると、浩介に気分が悪くなるような声で、ありもしない事を言いながら近寄った。

俺は我慢の限界に達していた。

だからこそ分からなかった。

浩介の表情に感情が無くなり始めている事を……。

そして、女子生徒が浩介の体に触れた瞬間だった。

「話しかけるな、ごみくず」

「きゃ!?!」

「「え!?!」」

俺とすももは何が起こったのかが全く理解できなかった。

浩介は女子生徒の左手を振り払うと、思いつき回転キックを喰らわせ、弾き飛ばしたのだ。

「うわあ〜ん!?!」

弾き飛ばされた女子生徒は泣いていた。

その瞬間怒り狂っていた俺の中で、怒りと言う物はなくなった。

しかし、浩介はそれだけでは終わらせなかった。

その女子生徒の背中に足を乗せて踏みつけたのだ。

「こ、浩介!?!」

「浩介さん!?!」

俺とすももは驚いた。

「はん。さつきまですももを蹴り飛ばして偉そうにしていたら、自分がされたら泣くか……。どうしようもない屑だな」
「!?!?」

浩介の暴言に女子生徒の鳴き声がやんだ。

「所詮お前は雌豚だ。生きる価値などないんだよ!!お前が生きるだけで不愉快なんだ!!いっそのこと死んでくれ!と言うよりは死ね!!」

「浩介!!いくらなんでも てめえらは黙ってる!! !!」

浩介が初めて見せた怒りの言葉。

俺の制止も全く効かなかった。

もう浩介の眼には女子生徒は人として認識していないのだろう。

「そつだ……。だったら今殺してやるよ……。ふふ、光栄に思いな。

お前は我が力の一部になるのだからな。すもも、お前は家に帰り、今日会った事は全て忘れるんだ。良いな?」

「は、はい!?!」

この後何が起こるかを理解したすももは、慌ててその場から立ち去った。

そして俺は怖いもの見たさで、ここに残ってしまった。

「そつか、雄真は見るか。まあ良い、それほど見たくば見せてやるう。我がもう一つの顔を、な」

そして見せた浩介の顔は、一言で言えば死神だった。

それほど、浩介の表情は恐ろしかった。

「ほら、立てよ屑」

「ごめんなさい！！謝りますから、殺さないで！！」

浩介の冷酷な言葉で立ちあがった女子生徒は、浩介に命乞いをして
いた。

「無駄だ。お前は死ぬのだ。……裁きの時よ、ジャッジ！！」

そして、浩介は左手を女子生徒にかざすとそう呟いた。

俺は一瞬今のが何なのかが、よく分からなかった。

「何をしたの？」

「お前に呪いを掛けただけだ。逃れられる者は一人もない」

女子生徒の問いかけに、浩介は答えた。

「予言してやるよ。お前は今から30分以内に死ぬ。……そうだな、

理由は圧迫死とでもしておくか」

「嫌〜〜〜！！！！！！！！！！」

浩介の言葉を聞いた瞬間、女子生徒は慌てて走り去って行った。
だが、そのあとすぐだった。

グシャ！！

何かが倒れる音が聞こえた。

俺と浩介は急いでその場に駆け寄った。

そこには……。

学校に備え付けられているバスケットゴールが柱ごと折れ、さっき
の女子生徒がその下敷きになっている所だった。

そして、女子生徒の頭からはおびただしい血液が流れだしていた。

「うえー!!」

俺はそれを見て、吐き気がした。

「バスケットゴールに押しつぶされて死んだか」

しかし浩介は平然とそう呟くと、女子生徒に手を翳して、光の玉を取り出しそれを体内へと吸収した。

まるで、目の前の光景が普通かのように。

そして、浩介は倒れた。

その後駆け付けた先生達の話だと、このバスケットゴールはかなり前からあったらしく、老朽化して強度が弱くなっていたために、いつ折れてもおかしくなくなっていたらしい。

この時俺は理解した。

浩介がやったのは、”殺した”のではなく”死ぬ可能性があった事の一つを強引に起こした”という事に。

人には生きていれればいくつもの、命を落とす可能性がある。

例えば、交通事故にあったり今のように不慮の事故にあったりなど……。

浩介はそのうちの一つを強引に起こさせたにすぎないのだ。

しかしそれは俺の中での、浩介と言う人物の恐ろしさを理解するのに十分な物だった。

この後家に帰った時、すももはいつも通りにしていた。

まるで、今日の事を忘れようとしているかのようだ。

だからこそ俺は、もう二度とこんな悲惨な事を起こさないうつにしようと思ったのだ。

だが、それから浩介はたびたびあの時と同じ感覚で人を殺して行った。

そして、今まさにその惨劇が起ころうとしていた。

【閲覧注意】第16話 鎌首をもたげた死神（後書き）

ということ、第16話になりました。

今回の話で浩介の性格の異常さがわかったと思います。

大森浩介とはこういう人物だと理解していただければ幸いです。
ちなみに次回も閲覧注意ですので、ご注意ください。

【閲覧注意】第17話 呪いという名の裁き（前書き）

今回も残酷な描写があります。

レベルは5です。

読まれる場合は気を付けてください。

それでは、第17話、始まります。

【閲覧注意】第17話 呪いという名の裁き

浩介 Side

「放課後か……たしか今日は買い出しとかだったよな」

今日は半ドンのためいつもなら昼休みと言ったところだろう。
今日は準さん達に、買い出しに行くという事を聞いていた。

「と言う訳で、久美。変な物とか買っなよ？」

僕は釘をさすように久美がいるであろう、後ろの席に向けて言った。

「……久美？」

いつもなら帰ってくる反論がないため、僕は久美の席を見ると、鞆はあるが姿が見えなかった。

(鞆を残しているという事を考えると、逃げたわけじゃないよな……まさか……！)

僕は心の中で、一つの仮説を立てた時だった。

「おい。大森」

「……！！お前は」

背後から声を掛けたのは、この間森で会った愚か者の一人だった。

「お前の妹さんを預かった。彼女を返して欲しければ、俺達についてくるんだな」

「……………分かった」

男の言葉に僕は溢れだそうとする闇を抑えて言うと、男について行った。

その力の先にあるもの

第17話「呪いと言つ名の裁き」

「親分、連れてきたツすよ」

「御苦労だな」

僕が連れていかれたのは、森の中だった。

そして僕の目に見えたのは、リーダー格の男子学生と仲間の男子学生によって拘束されている久美の姿だった。

「兄さん!! きゃ!!」

「てめえは黙ってるや!!」

(落ちつけ…………”あれ”はどうしようもない時だけ使っんだ)

僕は自分の中で暴れ狂う殺気を、抑え込んだ。

「浩介!!」

そんな時だった。

僕の背後で居てはいけない人物の声が聞こえたのは。

「あん。なんだてめえ。こいつの仲間か？」

「こいつは関係ない。それよりも用件を聞かせて貰おうか？」

浩介が冷たい声でリーダーなのだろうか、金髪の男子学生に言い放った。

「まあまあ、落ち着けや。死に損ないの魔法使いさんよ」

金髪の男子学生は、浩介を指差して不快な笑みを浮かべた。

「……何が目的だ？」

「そうだな、この女を殺すと言うのも、いいだろうな」
「何!？」

俺は金髪の男子学生の言葉に、思わず叫んだ。
しかし、俺以上に殺気をまきちらす者がいた。

「久美に怪我でも負わせてみる。……………その瞬間にお前の腕をもぎ取るぞ、江西!!」

「な!?! 貴様いつの間に俺の姓を」

今までにない低い声に金髪の男……江西は慌てていた。

「お前の事なんぞすべてお見通しだ。久美を久美を話して貰おうか

「……わあつたよ」

江西は顔をしかめると、久美を解放した。

「っ！？伏せろ、久美！！」

「え？きゃ！！」

突然久美に向かって叫んだかと思うと、浩介は久美を横になぎ倒した。

「なにを」

俺が言葉を発しようとした瞬間だった。

ズバン！！

「……ぐ！？」

「何！？」

突然魔法弾の、着弾音が響いた。

それが表す意味は簡単だった。

江西が久美に向かって放った魔法弾を、浩介が身代わりになったのだ。

(やばいな)

俺は心の中でそう呟いた。

今の魔法弾で浩介の怒りは、爆発するだろう。

浩介 Side

「…………わあつたよ」

江西が久美を開放し、久美がこっちに走って向かってくる。
しかし、僕には見えた。

久美の後ろで、江西が久美に目がけて、殺すことを前提にした魔法弾を放とうとしている所が……。

「っ！？伏せろ、久美！！」

「え？きゃ！！」

次の瞬間には、久美に叫ぶと僕は、久美を横になぎ倒した。

「なにを」

雄真が言葉を発しようとした瞬間だった。

ズバン！！

「…………ぐ！？」

「何！？」

久美に目がけていた魔法弾が、僕に命中した。
かなりのダメージは入ったが、重症と言うほどではない。

「なぜだ！！あの魔法を魔法服も無しで被弾して、無事のはずが！」

屑が僕に向けて何かを喚いていた。
答える必要はない。

ゴミに何を言っても、時間の無駄だ。
そう、時間の無駄。

命の無駄。

「お前らを殺す」

「な!?!」

「駄目だ!!! 浩介!!!」

僕は屑どもに宣言した。

誰かの声が聞こえたけど、関係ない。

「裁きの時よ……ジャッジ!!!」

そして僕は呟いた。

呪いの言葉を……楽しい踊りの始まりを告げる言葉を。
全ては……生きる価値のない者どもを消すために。

浩介 Side End

「お前らを殺す」

「な!?!」

「駄目だ！！浩介！！」

俺は浩介の言葉に制止をしようとするが、浩介自身は全く聞いていない。

「裁きの時よ……ジャッジ！！」

そして、ついに浩介がああ呪いの呪文を、口にしてしまった。

「てめえ！！何しやがった」

「生きる価値のない屑どもよ。我がお前らの命……消して差し上げよう」

江西達の言葉さえも、浩介には全く動じない。

「ふん……おもしれえじゃねえか。もし俺らが死ななかつたらその時は僕の首をお前らに差し出そう 良いだろう」

「では予言しよう。まずおまえ。お前は電信柱に押しつぶされて死ぬ」

江西の言葉に、浩介は予言を始めた。

最初は江西の横にいた学生だった。足が震えていたが……。

「次はお前……お前は車にひかれて死ぬ。しかもひき逃げだ」

次に浩介は江西の左隣にいる学生を、指差して告げる。

「最後が江西……お前だ。お前は見ず知らずの女性に刺される。三人合わせて、3時間以内には全員が死ぬ」

最後に浩介は、江西を指差すと言いつつ放った。

「さて、もう放課後だ。それぞれの家に帰るとしよう。まあ僕達もついて行くがな」

浩介の言葉がきつかけとなり、江西達は歩き出した。

そして俺達も歩き出す。

俺はこの時、浩介について行った事に、後悔する事になるとは理解していなかった。

校門を出て数分後、いつもは通らない通学路を俺達は歩いていった。

「はん。電信柱が倒れてくるわけないだろ」

学生の一人が粹がっていた。

そんな時だった。

目を閉じて歩くという器用な事をしていた浩介が、目を開いた。

「裁きの時は訪れた……ジャッジ!!」

ドシャンー!!

「「「な!?!」」」

浩介の言葉に呼応するかのように、突然電信柱が学生の元に倒れてきて、それは学生に命中し押しつぶされていた。地面に流れれる赤い液体から、死んだ事が伺えた。

「電信柱に押しつぶされて死んだ」

浩介はそう呟くと、死んだ学生から何かを吸収した。

「裁きの時は訪れた……ジャッジ!!」

「う、うわあああああああああああああ……!!!!!!!!!!」

浩介の言葉を聞いた瞬間、車にひかれると予言された学生が狂乱した様子で、走って行った。

グシャー!!

次の瞬間には、猛スピードで走ってきた車が学生を惹いた。しかしその車はそのまま走り去って行った。所謂ひき逃げだ。

「車にひかれて、死んだか……」

浩介は、そう呟くと再び何かを吸収した。

「う、嘘だろ……あいつは……何なんだ」

それを見ていた江西が、後ずさりしながら呟いた。

「最後はお前だな」

浩介は江西に向けてそう言い放った。

「ほう。人目の多い商店街にしたのか」

「そうさ。ここなら誰かが取り押さえるさ」

江西は商店街を歩きながら言った。

「裁きの時は訪れた……ジャッジ!!」

「……………なんだよ、何も起きねえ ブス!!」

浩介の言葉で数分間立ち止まるが、何も起こらないのを確認すると、勝ち誇ったような顔をして浩介に言った瞬間だった。

突然何かを貫く音が聞こえた。

そして逃げ惑う人々の姿が見えた。

江西は背後から女性に包丁で刺されていた。

そして刺した女性はそのまま走り去った。

「な、なんだよ。死んでねえじゃねえか。俺の勝ちだな いや、お前の負けだ どういう意」

意識が残っていた江西は浩介に勝利宣告をしようとするが、浩介はそれを遮り江西を蹴り飛ばして、地面に倒した。

「お前をそう簡単に殺すわけねえだろ？お前をいたぶってから殺す。そつだなまずはこれで、お前の両腕両足を斬り落としてから首を切り落とすか」

浩介は江西に馬乗りになりながら言うと、その手に刀を取り出した。

「ヒ！？ごめんなさいごめんなさい！！もう二度と悪いことはしませんから、許してください！！」

江西はそれを見た瞬間、今までの余裕な表情は何処へやら、浩介に涙ながらに謝罪していた。
でも、それを許す浩介じゃ……。

「分かったよ。僕も鬼ではない。許してやる」

「ありがとうございます！！」

許したあ！？

あの浩介が！！

(俺浩介の事を誤解していた。すまない！！)

後でお詫びにチーズケーキでも奢ろうかと思った時だった。

ザクー！！

「……………え？」

俺は突然の事に固まった。

それは今まで静観していた久美も同じだった。

浩介は立ち上がった江西目がげて、女性が刺した包丁を一振りして、両足を切り落としたのだ。

「ぐああああああああ！！なぜだ！！なぜだ！！！！許す
つて……………」

江西は立ち上がる事が出来なくなり、地面でもがいていた。

「確かに言ったが、僕は“殺す”ことを許すとは一言も言ってないぞ？ただ、“刀で殺す”ことは許すと言ったんだ。久美をいたぶった罪……………死を持って償え」

浩介はそう言うと、包丁を構えた。

「お、おいやめてくれええええええええええええ！！！！！」

俺は目を閉じた。

そして聞こえてきたのは、何かを貫く音……………そして江西の断末魔。しばらくすれば、それらの音は聞こえなくなった。

そして俺は目を開けた。

「……………！！！！？」

目に入ってきた光景は、まさに地獄絵図だった。
首を切り落とされた江西と、それを見て万弁の笑みを浮かべる浩介
だった。

浩介はそのまま俺達に向かって歩き出した。

「……………軽蔑すれば？」

「……………な!？」

そして俺の横をすれ違う瞬間、浩介はそう呟いた。

俺は後ろを見たが、そこにはなぜか寂しげな後姿が見えた。

(何だろう……………あの悲しい声)

俺は浩介の悲しい声が、耳から離れないでいた。

【閲覧注意】第17話 呪いという名の裁き（後書き）

ということでも17話になりましたが、あと1、2話程度で閲覧注意
範囲から外れると思います。

それでは、これにて失礼します。

第18話 死神の本性（前書き）

今回は少々残酷な描写があります。
お読みになる際はご注意ください。

それでは、第18話をどうぞ

第18話 死神の本性

「それで話って何かな？」

あの後俺は、久美に話があると言われ、近くの公園に行き、そこにあったベンチに腰掛けていた。

「雄真から見て、さっきの兄さんはどう見える？」

「俺から見れば、殺人鬼……いや死神に見える」

久美からの問いかけに、俺は思った事を答えた。

あの3人を殺している浩介の姿は、死神その物だった。

「そうだよな。でもねそれをしなければ今の何千倍の人々が死ぬ事になってるんだよ」

「どういう意味だ？」

「兄さんが闇の魔法使いだという事は知ってるよね？」

「ああ、前に浩介から聞いた」

俺は久美の問いかけに答えると、答えを聞いた久美は、話を始めた。

「闇の魔法使いは、普通の魔法はもちろん極限属性と言われる、闇魔法を使う事が出来るの。でもその元になる“闇”の制御はとても厳しくて、つらい物なの」

俺は久美の話を黙って聞いていた。

「魔法を使うときじゃなくて、闇を使わない時が一番つらいはずよ。」

闇は人の心や体を蝕むから闇を使わないと……」

「使わないとどうなるんだ？」

「闇に飲み込まれて、破壊の衝動に駆られるわ。兄さんはそれをさせないために……雄真達に危害が加わらないためにあの呪いを使っているの。もちろん兄さんは生きる価値のない人だけに行使しているよ」

「でもそれって偽善じゃないか？俺達が無事でも人は死んでいるわけだろ」

俺がそう言った瞬間、久美の様子が一変した。

「雄真さん、それ本気で言ってる？兄さんの気持ちを考えてもそれを言えるの？いつも呪いで人を殺しては毎晩毎晩懺悔をしている兄さんを見てもそれが言えるの!？」

久美がいつもでは考えられないほど声を荒げた。

「兄さんはとても苦しんでいるのよ。この間も、懺悔をしている最中に言ってたんだよ……『死にたい』って」
「な!？」

俺は久美の言葉に驚いた。

そしてさっきの俺の言葉を後悔した。

「それだけじゃないよ。兄さん前に死のうとしていた……その時兄さん涙ぐんでいたの……兄さんをどう思おうがそれは雄真さんの自由だよ。でもね……」

久美は握り拳を作りながら、俺に言い放った。

「もし兄さんを追い詰めたりしたら、私が許さない！！正直言っ
て雄真さんには失望したわ」

久美は怒りをあらわにしながら去って行った。

『マスター、私もさっきの言葉は酷い物だと思います。それでどう
するかはマスター次第です』

「俺次第……か」

俺はしばらくそこで考えを巡らしていた。

その力の先にあるもの 第18話「死神の本性」

久美子Side

『マスター良かったのですか？』

雄真さんを怒鳴って公園から出た私に、背中に装着しているワンド
のルミナスが声を掛けてきました。

「良いの。兄さんは私が守るって決めてるんだから。例え世界中を
敵に回しても兄さんは私が絶対に守るの。だってそれが、守護魔法
使いである私の使命なんだから」

私はルミナスにそう告げると、昔のことを思い起こしました。

「お帰り〜兄さん」

「……………ただいま」

それは今から数年くらい前の事でした。

いつも通りに帰ってきた兄さんでしたが、その声はまるで魂の抜け殻のような声でした。

「久美……………実はね」

驚いた様子の私に、お母さんが話してくれました。

兄さんは仕事で、人を抹殺したらしいのです。

「……………私兄さんに会ってくる」

私はそう言つと、兄さんの部屋に向かいました。

私の中で急いでいかなければいけないという、勘が告げていました。

「兄さん、い……………」

私は目の前の光景を見て思わず、時間が止まったような感覚になりました。

兄さんは、虚ろな眼で自分に向けて、包丁を突き刺そうとしていたのです。

「何をやってるの！！兄さん」

「久……美？」

包丁を風圧で弾き飛ばすと、兄さんは私がいる事に気付きました。

「兄さん。もし人を殺したことで、死のうとしていているなら、兄さんはやるべきじゃないよ。だってそれは仕事だったんでしょ？」

「……………たとえそれが仕事でも、僕は人殺しだ。僕は疫病神何だよ、だから……………僕は……………は」

私の言葉に答える兄さんの表情は分かりませんが、とても悲しげでそして涙声になっていました。

「兄さん。泣きたいときはたくさん泣いて……………そして全部話そう」「う……………うう、うわああああああ！！！」

私の言葉に兄さんは私に抱きつくと、涙を流して泣きました。

「僕……………もう耐えられないよ……………死にたい」

（兄さんはやつぱり……………）

私は心の中で兄さんが普通の人だと理解しました。

それまで私は兄さんはとても強い、無敵な人だと思っていました。でも今の私の前にいる兄さんは、まるで子供でそしてガラスのように壊れてしまいそうな人でした。

「だったら、兄さん。神様に懺悔をすればいいんだよ!！」

兄さんが泣きやんだ時、私は兄さんにそう言いました。神様なら、兄さんに救いの手を差し伸べてくれるはず。

そして私はこの時、兄さんを全力で守ろうと決意したのです。

それは戦力でもずし、精神的にもです。

私がいつもふざけているのは、兄さんの精神をリラックスさせてあげるためです。

兄さんもその事に気づいています。

だから、毎日制裁の時、私に防御魔法を掛けてから制裁するのです。

「あれ？兄さんからだ」

私の考えを止めたのは、兄さんからの電話でした。私はその電話に出ました。

久美 S i d e E n d

浩介 S i d e

「神よ……我が起こした罪をお許してください」

僕は家に戻ると、自室に入って懺悔をしていた。

これをやれば、少しでもこの罪悪感をなくせると思ったからだ。

(やっぱり駄目……か)

僕はもう到底これだけではなくせなくなっていた。
もう良く分かるのだ。

「この呪い……どんどん強度が強くなってる」

今までは人一人を始末するので精いっぱいだったこの呪いが、今は
3人まで増えている。

元々僕の使う呪いは、死ぬ時間と状況を予言して、相手に恐怖を植
え付ける物だ。

それがもし、一斉に何千人に出来るようになったら？

そしてもし僕が“自”を失っていたら？

僕は本当に“死神”になってしまう。

(僕は、いつまで人を殺せばいいんだ？)

それを止めるのは、“自ら死ぬ”ことが一番だという事は分かって
いるのに……。

それが出来ない、このもどかしさ。

(せめて、これに肩をつけるまでは……)

僕はそう思うと、携帯で久美に電話をした。

『もしもし、兄さん。どうしたの？』

「ちよつと江西家の裏情報を全て調べて欲しいんだけど、頼めるか
？」

『お安い御用よ。それじゃ、夕食までには帰るね』

久美はそう言うと、電話を切った。
久美は諜報、情報収集には長けている。

「さて、保険はこれでいいかな」

僕はそう言うと魔導書を読み始めた。

浩介 Side End

「……………」

俺はリビングで、浩介が来るのを待っていた。

今は夕食時、俺は浩介がリビングに来た時に話をするつもりだ。

「今日のご飯はな〜にかな〜?」

浩介が入ってきた。

とても機嫌が良い様子で。

「浩介」

「何? 雄真」

俺が浩介を呼び止めると、浩介はいつも通りに俺に聞いてくる。

「さっきの事は本当にすまなかった!!」

「ゆ、雄真!?!」

俺は浩介に頭を下げた。
これは浩介に対する謝罪だ。
俺は浩介の心を理解していなかった。

「頭を上げてくれ」

「浩介、俺さ久美に全てを聞いたんだ。浩介の本心を」

「……それで？」

浩介は俺の言葉に先を促してきた。

「少しだけでも良いから、俺は浩介の負担を減らしたいんだ。だから浩介俺にも手伝わせてくれ。浩介は一人じゃないんだ、いつでも俺を頼ってくれ」

「それは雄真の本心か？」

俺の言葉に浩介が聞き返してきた。

「ああ、その通りだ」

「……………」

浩介は俺の答えを聞くと、顔を下に向けた。

（よかった。これで少しでも浩介の力になれる）

俺はほっと一安心していた。

「……………よく分かった」

パンー！！

リビングに殴る音が響いたと思うと、俺の頬に鋭い痛みが走った。それでようやく俺は、殴られた事に気付いた。

「何すんだよ！！浩介」

「お前も随分とお偉くなつたなあ？」

俺の抗議の言葉に浩介は、怒りをにじませて返した。

「僕の負担を減らしたい？お前のようなひよ子がどうやって負担を減らすというんだ？俺にも手伝わせる？」お前何様のつもりだ？闇の事をなにも理解していない奴が手伝わせるなんて、上等な事を言うんじゃないか！」

「……っ！！」

俺は浩介に言われて初めて、自分の言った意味を理解した。今のは確実に浩介を見下す言い方だ。

「まあ、それ以外に関しては雄真の心遣いが見えたから、それで許す。でも次同じ事を言ったら今度は命はないと思え。お前はお前の成すべき事をやればいい。……まあしいて言うならチーズケーキをおごってくれた方が、僕としてはもう嬉しいんだけどな」

浩介はそう言うのと椅子にすわり、全員が揃うのを待っていた。俺もそれにならって座るのだった。

第18話 死神の本性（後書き）

ということ、第18話になりましたが、これにて残酷描写ラッシュは終了となります。

第19話は今までの暗い雰囲気を一変できると思います。

それでは、第19話でお会いしましょう

第19話 花見（前書き）

久しぶりのコメディ調の物語です。

数日前の大地震ですが、皆さんは大丈夫だったでしょうか？
そんな心配をしつつ第19話をどうぞ！！

第19話 花見

4月8日

「この分なら、場所取りなんて必要ないだろ」

桜が咲き、花弁がきれいに散る中、俺は一人ポツンとシートの上に座りながら呟いた。

その手に大量のお菓子入りのバッグを持って。

「なあ、ラジア。暇だから話相手になって 何ですか？マスター
イエナンデモアリマセン」

俺はラジアから発せられるオーラに謝った。

「それよりも、神坂さんが近づいていますか？」

そんな中、ラジアからそんな言葉が聞こえた。

「あ、本当だな」

「おはようございます。場所取りごくりうさまです。小日向君」

俺達を見つけた神坂さんはこっちの方に来て労いの言葉を掛けてくれた。

「ありがとう。それよりも、神坂さんはどうしてこんなに早くに？」

「えっと、実はちょっと早くに目が覚めちゃったので。えっと、お邪魔でしたか？」

「い、いや、そんなことはない！！」

俺の必死な様子に神坂さんが笑った。

「とりあえず、立ち話もなんだから座ったらどうかかな？」

「そうですね。それじゃ失礼します」

神坂さんは俺の提案を聞くと、靴を脱いでシートの上に座った。その後俺達は、世間話で盛り上がったのだが。

「まさか神坂さんがイチゴ好きだなんて思いもよらなかったよ」

「変……ですか？」

「いや変じゃないけど」

気を紛らわすために出したイチゴ味のお菓子（すべてすももが選んだ）を見た途端、神坂さんの目が輝いた。

とまあ、神坂さんがイチゴが好物という事が分かったという事だ。

「そうですね。あ、皆来たようですよ」

神坂さんが見ている方を見ると、そこには八子達が歩いて来てた。

その力の先にあるもの 第19話「花見」

「雄真、貴様！！何姬ちゃんと仲良くしてるんだよ！！何をした？
集合時間が変わったとか言っておびき寄せたのか！？」

俺に詰め寄ってくる八子だが、もちろん俺は何もしてない。

「顔が近いし、何もしてない!!」

俺はそう言いながら、八子を弾き飛ばした。

「酷いわ、雄真さん」

「気持ち悪いわ!!」

俺の直下型拳骨（浩介の直伝だ）を喰らわせ、八子はその場で気絶した。

「すもも、荷物渡してくれ」

「あ、はい」

後ろの方に見るからに重そうな重箱を持ったすももに俺はそう言つと、その荷物を受け取った。

「ちょっと!!あたしの荷物も持ってよ!!」

すると、柊が理不尽な事を言い出した。

「申し訳ありません。予約なので」

俺は敬語を使ってからかうように返した。

まあ、柊の荷物は重そうなのは分かってるがな。

「だったら、次を予約するわ!!」

「生憎、100年先までいっぱいです」

「全部キャンセルしなさい」

柊からものすごいオーラが漂っている。

「それは出来ません」

「ほほお〜。妹の前だからって、強がってんじゃないの」

何かこめかみが引きついてるし。

「私は脅迫には負けません」

でも俺も負けるわけにはいかない。

「……………兄さん。やっぱり私が持ちます」

その光景を見ていたすももが俺から荷物を半場ひったくる様にして持って行った。

「あた!!」

俺は突然のすももの行動に茫然としている柊のわき腹を小突いた。

「なにすんのよ!!」

「柊のせいだからな」

「あんたが荷物を持たないせいでしょ!!」

そして本格的な言い合いになった。

「……………」

「準、何をした?」

しかし、突然シャッター音が聞こえた。

見れば、準が携帯を構えているし。

「何って、記念撮影？そうね、題名をつけるとしたら……」ケ
ンカするほど仲がいい？」

「な！！準ちゃん、データを消しなさい！！」

「どうしようかな」

「あ！！待ちなさい！！」

そして、柊と準の追いかけてこになったわけだが……。

あ、八チが踏まれた。

まあ、半分自業自得だから何も言えないが。

それから数分後。

「え、それでは新たな仲間……」

ようやく落ち着いた俺は、八チが乾杯の音頭を取るのを見ていた。
一番驚きだったのは、すももと神坂さんが知り合いだったという事
だ。

なんでも、昔は一緒に遊んでいたのだからか。

「しつこい男は嫌われたわよ」

すると、柊が八チに向かって野次を飛ばした。

「嫌われた！？って過去形!？」

柊の言葉に固まった八チは気を取り直して、乾杯の音頭をとる。

「それでは カンパ〜イ!!!」

「『カンパ〜イ!!!』」

八チの言葉を遮って小雪さんが音頭を取った。

八チはと言えば、石化していた。

「あ〜。また先を越された〜」

八チが本気で涙を流していた。

ちなみに一度目は準にやられたのだ。

それと一つ言い忘れたが、どうして小雪さんがいるのかと言えば、記念撮影の時にひょっこりと姿を現したのだ。

その後、エプロンのポッケからカニや冷蔵庫などを取り出すという、ミステリーワールドが展開された。

「う〜ん!!! すももちゃん作った卵焼きおいしい」

「ありがとうございます」

卵焼きを口にした柊は感想を言っていた。

「はいどうぞ。ウーロン茶ですよ」

すると、小雪さんが飲み物をすももが持っているコップに次ぎ始めた。

「あなたはすももに平然と、酒を飲ませないでください!!」

すると、何処からか飛び込んできた浩介が、ウーロン茶が入った容器を破壊した。

「ばれちゃいましたか……」

「小雪さん、すももに酒を盛らないでください」

いつしかのバレンタインデーの悲劇を思い出した。

俺の言葉に小雪さんは首を縦に振った。

これでひと段落と思ったのだが。

俺は気づいていなかった。

この時すでにもう手遅れだったのを。

「雄真さん」

「何ですか？小雪さん」

俺は小雪さんに呼ばれて振り返った。

「頑張ってくださいね」

「へ？」

俺は小雪さんの言葉に何の事かが分からなくなり、小雪さんが指し示す方を見た。

そこには……。

「あはゝ にゝさん。一杯いかがですか」

酔っぱらっているすももがいた。
浩介は用事があるとのことで、遅れてくる。
つまり、ストッパーがないという事だ
こうして、俺は地獄へと足を踏み入れたのだった。

「ゆうまゝ、勝負よゝー!!」

「雄真君、どうぞ」

「ああゝ!! 神坂さんそれ以上注いだらこぼれる!!」

あれからどれくらい時間が経ったのかは、全く分からなかった。
今俺の前に繰り広げられる地獄は語りたくもない。
でも、少しだけ語りたと思う。

「それじゃ、小日向君が飲ませてくれますか？」

俺の制止の言葉に神坂さんが、目を潤ませて俺を見つめた。

「うッー!!」

「何よ』うッ』って?」

「何ですか?』うッ』って?」

俺の横でなぜか酒の飲み比べをしている柊と、俺の首にもたれかかるすももがじと目で聞いて来た。

「な、なんでもない!!」

俺はそう言いながら酒を仰ぐ。

「きゃはははは!!!!ゆーま、モテモテねえ」

するとお酒に酔った久美が、俺の横に座った。

「んふふ。なんだったらこの私の魅力で落としてみせましようか？
ふふふ」

久美が俺を誘惑する。

「ダメ ……!!!!!!!!」

すももの叫び声で助けられた半面、耳をやられたのが半面。
もし誘惑に乗っていたら、浩介によって悶絶超絶地獄行きは決定だろう。

お酒を飲むのは20歳以上です。

あゝ酔い過ぎて変な電波が……

「倒れます」

そして、俺は首にもたれかかっているすももが倒れるのと同時に、

ひっくり返った。

神坂さん達も一緒に。

そして、修羅は突然訪れた。

「……………」

突然の声に俺は、声のした方を見ると、そこには……

浩介が震えながら何かを呟いた。

そして、顔を上げた。

「貴様ら！！いったい何をやってるんだ！！この馬鹿もの！！！！！！

！！！！！！！！」

「きゃー！！」

「うおー！！」

浩介の一喝によって、俺達は一気に酔いがさめた。

「こ、浩介！？こ、これはだな……………」

「まったく。酔っぱらうのなら、ちゃんとしなくちゃらへらほ」

「ねえ、浩介君の様子おかしくない？」

浩介のろれつが回っていない事に気付いたのは、準だった。

「そう言えば、兄さんアルコールのにおいをかいだだけで酔っぱらうほど、お酒には弱かったんだっけ……………」

久美の言葉に俺達の背中に、いやな汗が流れた。

「つまり、今の浩介は酔っぱらっているということか？」

「そう言う……………ことになるね」

浩介が酔っぱらう＝魔法使用に關してのリミッタ が弱くなる。
つまり俺が言いたいのは、浩介が酔っているときに魔法でも使われ
たら、本当に危ないという事だ。

「うわあゝ、蝶々だ。赤くてきれいな蝶々がいるよゝ。あははゝ」
散っていく桜の花びらを捕まえたいのか手を振りながら、追いか
けていた

「……」

それを見た俺達は、凍りついた。

そして、浩介を壊したのが俺達だという事実に、今さら気付いた。

「早く、浩介を正気に戻すぞ……!!」

「……」(コクコク)「……」

俺の言葉に全員が無言で頷くと、浩介を止めに入った。
結局浩介を正気に戻すのに5時間はかかった。

その後、正気に戻った浩介による、超絶悶絶な説教会が行われた。それが全て終わったのは、空に夕日が掛って来た時だった。俺達は後片付けをすると、よれよれになりながら、帰路に着いた。

(まあ、こんな花見もありかな)

俺は心の中でそう思うと、家に戻るのだった。

第19話 花見（後書き）

本日より始まります計画停電のために、第19話を繰り下げ更新しました。

この停電によって執筆速度は大幅にダウンしますが……。

それでは、これにて失礼します。

第20話 審判（前書き）

【注意】今回も、内容に残酷的な描写を含んでおります。そういったものに嫌悪感や苦手意識をお持ちの方は、お読みにならないことをお勧めします。

第20話 審判

ピピピピピピ……

神坂さん達と合流した僕と久美は、お花見の場所に向かっていた。そんな中に掛つてきたのが今の電話だ。

「誰からだ？……ちよつと失礼」

「あ、気にしないで」

僕はとりあえず神坂さん達から少し離れると、電話に出た。

「はい、大森です」

『もしもし、理事長の高峰ゆずはです』

電話の相手は瑞穂坂学園の理事長だった。

「どうしたんですか？」

『ええつと……今江西さんの親御さんが来ていまして、あなたを呼べと言っているので……』

僕の問いかけに理事長が答えた。

「一つだけ条件をいいですか？」

『はい。どうぞ』

「江西家の方達が不穏な動きをした際の、始末をする許可をいただきたいのですが」

僕の言葉に理事長が押し黙った。

まあ、学園のトップが、殺人を容認するなんてできないよな。

『それは、個人的な物ですか？それとも”家”ですか？』
「後者です」

理事長の問いかけに、僕は即決で答えた。

『……………分かりました。許可します』
「ありがとうございます。それでは今すぐに向かいます」

僕は理事長にお礼を言うと、電話を切った。

その力の先にあるもの 第20話「審判」

「誰から？兄さん」
「ああ、理事長先生から。何でも会いたいと言う奴が来ているんだ
つてさ」

皆の所に戻った僕に疑問を投げかけた久美に、僕はそう答えた。

『もしかして、江西家？』
「と言う訳で、みんな悪いんだけど、お花見には少し遅れちゃうけど
どいいかな？」
『その通りだ』

久美と念話しつつ、皆に謝る。

「まあいいわ。その代り、早く戻ってきなさいよ」

「柊に言われるとは思わなかったが、そのつもりだ」

僕の言葉に柊はそっぽを向く。

最近は何かと衝動に駆られなくなった。

もしかしたら、彼女の魔法に対する精神を知ったからかもしれないが。

「それじゃ、僕はここで!!」

『とりあえず、穏便にね?』

僕は皆と別れながらも、頻繁に聞こえる久美の念話に、言葉を返した。

『分かってる。一応は和解してみる、でも駄目だったら……』

『破門……でしょ』

僕の言葉に続くように久美が悲しげに答えた。

『これはしょうがない事だ。あのような家系を僕達のような存在が許すと思うか?』

『それはそうだけど……私は兄さんに殺人鬼になって欲しくないの』

久美の言葉に僕はため息が漏れた。

『大丈夫だ。僕は殺人鬼にはなりはしないさ。ただ単に、降りかかる火の粉を払うだけさ』

『……分かった。気を付けてね』

僕の言葉に久美はそう言うと、念話を切った。

それと同時に、理事長室の前に到着した。

「大森です」

「どうぞ」

僕はドアをノックして、入るように促されたので、中に入った。

「失礼します」

理事長室の内装は、社長室と変わらない物だった。

「とりあえず、座ってください」

僕は理事長に促され、江西家の者たちの反対側のソファーに腰掛けた。

僕の前にいる江西家の両親と言うのは、見るのもいやな醜い魂を感じた。

外見は物を言う……それは本当だったみたいだ。

「それで、ご用件は？」

「よくも、私の子供を殺しましたわね！！！！」

僕の言葉に女性が喚く。

「何を言っていますか？私は殺していませんよ。ただ呪いを掛けただけです」

僕はそんな女性に笑顔で告げた。

そう、あれは呪い。

「何と白々しい……あなた！！警察に電話を、こんな奴逮捕して貰いましょう！！！」

「愚かですね。私は逮捕できませんよ？」

いきり立つ女性に、僕は鼻笑いをしながら言い放った。

「ああ、江西だ。今殺人犯といるんだ。とっとと捕まえろ、場所は……」

男性は携帯で警察に電話しているようだ。

本当に愚かだ。

「ふふふ。江西家をなめて貰っては困りますわねえ。わたくし達のがあればあなたを死刑にする事だって可能ですのよ」

「……………」

女の言葉に僕はキレた。

もう我慢の限界だ。

この者には死、あるのみだ。

「黙りな。愚かなるもの達よ」

「気配が……変わった？」

僕の様子に女が慌てる。

そんな時だった。

「瑞穂坂警察だ！！殺し……し、失礼しましたあ！！！」

理事長室に入ってきた警察官たちは、僕の顔を見た途端、血相を変えて出て行った。

なるほど、彼らも知っていたのか……僕らの“家系”の存在を。

「な、どうして逃げるのだ!?!」

「お前ら、これをみな」

僕はそう言つと、テーブルに書類のコピーを叩きつけた。

「これは?」

「分かりませんか?あなた方の負の記録です」

そう、それは僕が掴んだ彼らの弱み。

「詐欺横領に、暴力団との関係……次から出てくるので驚きましたよ」

「小僧……これをどうやって炙り出した!?!」

僕に向かって血相を変えて聞いてくる男に僕は、見下しながら言うてやった。

「なに、僕には優秀な”S”がいますのでね。その人に頼んだのですよ」

S……情報屋のことだが、はまあ間違いではない。

これは久美のスパイ活動で得た情報だ。

本当に情報に関しては一流だ。

「さて、ここで和解と行きましようか?」

「和解……だと?」

そして僕は本題を切り出した。

「ええ、この書類をばらまかれたらさぞかしまずいでしょうね。そこで和解ですよ。今回の事を不問とし、今後は私に手出しをしないと誓約書にサインして頂ければ、この書類は燃やしましょう」
「……それは脅しか？」

僕の取引を聞いた男は、僕にそう言ってくるがそんなの関係ない。

「いいえ。脅した所で損しますからね。逆にあなた達を潰した方が得なんですよ」

そう言いながら、僕は身分証明書を見せる。

「な！？あ、あなたがあの“名家殺し”と呼ばれた家系にいる、血も涙もない殺し屋と呼ばれた！！」

やっぱり変な通り名が流行っていたか。

まあ、あながち間違いではないのだがな。

「それで、呑むんですか？呑まないんですか？」

「く、くそ！！！！」

「……っ！！！！」

そう言って取り出したのは、拳銃だった。

「それは呑まないと受け取っても構いませんね？」

僕の言葉に返ってきたのは、銃声だった。

「な、あ……あんたは化け物か！！！！」

銃が命中したにもかかわらず、いまだ健在の僕を見た男は怯えていた。
あんな物で僕の命を狩ることはできない。

「さて、高峰ゆずはよ。あんた死体とか見たか？」

「い、いえ」

「だったら目と耳をふさいで起きな……言っておくが見た後の事は責任取らないぞ」

僕の言葉に理事長が目と耳をふさいだ。

さて、始めようか、懺悔の時を。

「さて、お前らはもう存在する価値もない。だから、今すぐ死ね」

僕はそう言つと、何処からともなく刀を取り出した。

「ヒ！？す、すみませんでした！！この度の不届きな行いは謝罪します！！だから、どうか命だけは！！！！」

そう言つて土下座をする二人を僕は見下していた。

「無様だな……わが家系に喧嘩を売った事……地獄の底で後悔しろ！！！！！！」

僕はそう言い放つと二人に魔法を掛け、無理やり立たせた。

「破門！！！！」

「「ぎゃああああああ！！！！！！！！！！」」

理事長室に断末魔が響き渡った。
僕は、二人を斬り捨てた。
これが破門だ。

我らが成すべき事の一つだ。

「もう、いいですよ」

「あ、あの……二人は？」

理事長が僕に疑問を投げかける。
それもそのはずだ。

「あの二人は蒸発させました」

なぜなら、そこには誰もいなかったのだから。

僕の使った刀は蒸発剣と言って、どんな物でも斬った物を全て蒸発させる事が出来る優れ物だ。

これで死体は上がらない。

一応この行為は合法何だが、わざわざ屑のために、血税を使うのはもったいないので、このやり方だ。

「そう……ですか」

「今回は、お見苦しいところをお見せしてしまい申し訳ありません」

「いいえ。気にしていませんので」

僕の謝罪に理事長はそう言った。

「あとこの事はどうか……」

「分かっています。スーちゃん……御雑先生には秘密にしておきます」

僕の頼みが分かったのか、僕の言葉を遮って先に言った。

「それにしても助かりました。いきなり私の素性を言われた時はどうなるかと思いましたよ」

「あの時は本当にすみませんでした。小雪に言われた時は、私も疑っていたんです」

僕と理事長との身分は、こっちが上だ。

でも一応はこの生徒、敬語を使うのは忘れない。

それは、今日から数日前、突然かかってきた高峰ゆずはからの電話だった。

電話に出た僕に、開口一番に言ったのは、僕の本名だった。

「それでは、僕はこれで失礼します」

「はい。ゆっくり休んでくださいね」

僕はゆずはの言葉を聞きながら、理事長室を後にした。

そして僕は花見の場所に向かったのだが……。

「んふ〜。なんだったらこの私の魅力で落としてみせましようか？

ふふふ」

久美が雄真を誘惑する所だった。

(あの野郎……顔を赤くしやがって)

僕は怒りのほのうに燃えていた。

そして、彼らは倒れた。

もうそれで勘忍ぶくろの緒が切れた。

「……ら」

僕はわなわなとふるえながら声を出した。

「貴様ら……！ いったい何をやってるんだ……！ この馬鹿もの……！！

！！……！！

「ぎゃ……！！

「うお……！！

僕の一喝で、雄真達の酔いがさめたようだ。

「こ、浩介……？ こ、これはだな……」

僕は雄真の命乞いを遮って怒鳴ろうとした。

「まったく。酔っぱらうのなら、ちゃんとしなくちゃらへらほ

(あれ？)

僕は思ってもいない事を言い始めた。
って、まさかお酒の匂いに!?

(も、もう……駄目)

そして僕は意識を失った。

あの後正気に戻った僕は、雄真達に何があったのかを聞き、怒りの
余り雄真達に説教を喰らわせた。
これが、僕にとってのお花見だった。

第20話 審判（後書き）

今回の内容は時期が時期名だけにかなり不謹慎だと思いましたが、投稿することになりました。

ここからしばらくは残酷な描写はないと思います。

それでは、第21話でお会いしましょう。

第21話 動き出した事件（前書き）

今回は少々短めです。

ようやく事件に進展します。

それでは、第21話をどうぞ！

第21話 動き出した事件

4月15日

「おつす雄真、すももちゃん、浩介、久美ちゃん」

「おはよう雄真、すももちゃんそれと浩介君と久美ちゃん」

朝、いつもの通学路で俺とすももと、久美と浩介は準と八子と合流した。

「おはようございます、準さん八子さん」

「おはよう八子、準さん」

「おはよう準さんに八子」

「おはよう八子、準」

俺とすももと浩介と久美は準と八子に挨拶をして、学校へ向かった。

その力の先にあるもの

第21話「動き出した事件」

「そう言えばさ、見たか？あのニュース」

突然話題を切り出したのは八子だった。

「何？まさか八子、あんた盗撮とかで捕まった？」

準が冗談半分本気半分で八子に言った。

八チならやりかねないから恐ろしい。

「違うわい!! 今朝『江西ブランド』が倒産したんだよ!!」
「う、嘘!? 『江西ブランド』と言えば、日本きつての大企業じゃない!!」

「それがな、裏で暴力団との繋がりがあったり、詐欺やら横領やらをしていたらしいんだってさ」

八チ達がニュースの事で話していくさなか、俺は嫌な予感を感じていた。

(江西ブランドって、あの男の親の会社だよな?)

まさかな、浩介が江西ブランドをつぶしたりはしてないよな

「そうそう。だがな、なんでも江西家の人達がごっそりと消えたらしいんだってさ」

「……………」

浩介が無表情なのも気になった。

本当に、やってないよな?

俺は、そんな不安に駆られた。

「おはようございます。小日向君に大森君」

「ああ、おはよう。神坂さん」

「おはよう。神坂さん」

教室に着いた俺と浩介は神坂さんと挨拶を交わす。

花見から1週間。

色々な事があった。

学級委員決めで、神坂さんのパートナーの座を掛けた醜い戦いとか。結局、準が学級委員になる事で収まったが。

「そう言えば、小日向君に大森君。このボールペン落とさなかった？」

神坂さんが俺達に渡したのは、『2-H』と刻みこまれたボールペンだった。

これは、準が毎年クラスの人に配っている物だ。

「いや、俺は落としてないが、浩介は？」

「当たり前だ。共からもらった物……そう簡単に失くすか。しっかりと魔法を掛けてあるから、落とせばすぐに分かる」

神坂さんの問いかけに俺達は答えた。

(しかし、浩介それはやりすぎだ)

どうも、浩介は“友人”と言う物には執着がある様な気がする。

「そうなんですか。ごめんなさい」

「いやいいんだが、それどこで見つけたんだ？」

「えっと、森の方です」

浩介の問いかけに神坂さんが答えるが、俺は心の中で驚いていた。これが意味するのは、何者かが動き出したと言う事だ。そして、その犯人候補はすぐに見つかる事になった。

「兄様、後でもう一度探してみましよう」

教室に入りながら、上条さんのそんな声が聞こえた。いやそれだけじゃない、信哉がものすごく申し訳なさそうにしている。

「上条君。このボールペンだけど……」

「こ、これはまさしく俺のボールペン！！ありがとう神坂殿！！貴女のおかげで俺はこのクラスに顔向けが出来る！！」

本当に嬉しいのか嬉し涙まで流しながら、感謝の言葉を言っていた。

「でも、これが落ちていたのが、立ち入り禁止区間よ。あそこは特によろがない限り入ってはいけない所だから、気をつけてね」

神坂さんが注意をする中、俺は二人が怪しいと思うようになった。そして、それは次の日だった。

放課後、俺はいつも通り木の上を器用に走りながら、警備をしていた。

「まあ、昨日の今日だから、もしかした……っ！！」

俺がそこまで言い欠けた瞬間、辺りでおぞましい魔力を感じた。ちなみに爆音もだ。

(とにかく行ってみるか……)

『マスター、この先で敵との接触の危険性があります。気を付けてください！』

「わかつてる」

俺はスピードを上げて、木を伝いながら音のした方に向かった。

「うわ……これは酷いな」

俺は木刀のような物で切り落とされた木を見て、思わずそう呟いた。

285

(あれは……信哉か?)

俺は一瞬だが、信哉の姿を見ることができた。

「とりあえず戻ろう」

俺はこの後のリスクのことを考え、引き返すことにした。今はまだ敵に関しての情報が少ないのだ。

式守邸

「沙耶、信哉はどれくらいで回復する？」

「はい。日常生活に差し障りはありませんが、3日ほどはかかるかと」

伊吹の問いかけに、沙耶はすぐさま答えた。

「そうか、では3日後に動くとするか」

そして伊吹が今後の方針を決めた時だった。

「ム！？誰だ！！」

「失礼しました伊吹様。お茶が出来ましたので、お届けに」

外に誰かがいる事を感じ取った伊吹が、外に向けて怒鳴ると襖をあけて、若い女性の家政婦が入ってきた。

「そ、そうか……」

伊吹はバツが悪そうに言うと、置かれたお茶に手を付けた。

「それでは失礼します」

そして家政婦は伊吹の部屋から出て行った。

一方、誰もいない公園。

そこにいたのは、先ほど伊吹にお茶を届けた家政婦だった。

「ふふふ。良い情報を聞き出せたわ」

家政婦はそう言うと、自らが来ている服を脱ぎ捨てた。

「後はこれを伝えるだけね。フフフフ」

服を脱いだ事によって女性だと思われた家政婦は、一気に女子高生のような姿になった。

そして、服装は白い巫女服のような物を着込んでいた。その少女はそう呟くと、静かに歩いて行った。

I n t r o d u c e 『黒幕の計画』 E n d

第21話 動き出した事件（後書き）

第21話いかがでしたでしょうか？

今回終盤で現れた謎の人物の正体は、分かる人にはわかるかと思いません。

それでは、第22話でお会いしましょう。

第22話 策略という名の”時” (前書き)

今回から事件は新たな局面へと向かいます。
それでは、第22話をどうぞ

第22話 策略という名の”時”

4月18日

放課後になり、いつも通りに森の警備に行こうとした俺だったが、それは浩介に呼びとめられる事で遮られた。

「雄真、御薙先生が研究室に来てほしいって言ってたぞ？」

「御薙先生が？なんだろう」

俺は浩介からの伝言を聞くと、用件について疑問に思いながら、母さんの研究室に向かった。

俺は魔法科校舎に向かうと、母さんの研究室のドアをノックしてから中に入った。

突然開けると、転移魔法が働く仕掛けになっているからだ。

「失礼します」

そして、俺は聞いてはならない声を聞いてしまう。

浩介 S i d e

「神坂さん、御薙先生が緊急の用があるから急いできて欲しいって
言ってたよ」

「緊急の用？ありがとうございます」

僕は、神坂さんに声を掛けて慌てて教室を後にするのを、見届けた。

何かおまけみたいに、柊まで出て行ったけどまあいいか。

そのあと僕は雄真にも声を掛けた。

もちろんだが、御薙先生が呼んでいるなんて全くの嘘だ。

僕が雄真と神坂さん達とを出食わさせ、魔法使いである事を教える
ために仕組んだのだ。

全ては、固まってしまった“時”を動かすため。

「兄さん。二人とも研究室に行ったよ」

「そうか……では行くか」

久美の言葉を聞き、僕はついに行動を起こした。

さあ、時を動かそう。

浩介 S i d e E n d

「二人とも、落ち着いた？」

「は、はい」

あれから数分後、ようやく落ち着いた二人に母さんが聞いた。

「にしても雄真、魔法使いだったのね。」

柊がしみじみとしながら言う。

ちなみに柊がここにいる理由だが、神坂さんの様子を不審に思ってから後をつけてきたらしい。

柊は神坂さんと協力するとの一点張りだったらしく、手伝う事になったのだとか。

「そう言えば、二人とも揃って用件を聞いて来たけど、どうしたの？」

「ああ、実は……。」

俺はここに来た経緯を話した。

「そう、大森君が……。」

「私も同じ事を言われました。」

俺の話聞き終わると、母さんはふとつぶやいた。

そして神坂さんも、浩介に俺と同じようなことを言われて、ここに来たようだ。

「恐らく、大森君は神坂さんと雄真君を引き合わせようとしていたのね。」

「なんで、浩介がそんな事を。」

母さんの仮定に、俺は疑問を投げかけた。

そんな時だった。

『春姫!!!』

「……………!?!」

ソプラノが神坂さんに慌てたように、声を掛けた。

『森の探知魔法に反応が出ました』

「二人とも、行くわよ!!!」

神坂さんの言葉に柊は、一人で研究室を飛び出して行った。

「それじゃ、俺達も行ってくる!!!」

「ええ、気を付けてね二人とも」

そして、俺達は森の方へと向かった。

第22話 策略という名の”時”（後書き）

はたして浩介はどのような行動をとるのか？

そして雄真たちの前に立ちはだかる人物とは？

そんな次回です。

次回も短めになりそうです。

それでは、これにて失礼します。

第23話 魔法（前書き）

全話の最後に探知魔法に引っかけた人物とは？

第23話 魔法

「なあ、神坂さん」

俺は走りながら、隣にいる神坂さんに声を掛けた。

「何かな？小日向君」

顔をこつちに向けずに答えた。

「どうも俺は誘いこまれているように感じるんだが」

俺は今まで思っていた事を口にした。

その力の先にあるもの 第23話「魔法」

「どづいうことよ？誘いこまれているって」

俺達は走るのをやめた。

そして、柊が不思議そうに聞いて来た。

「つまり、小日向君は、私たちをここにおびき寄せさせるためにわざと探知魔法に反応したと言いたいなの？」

神坂さんが確認するように聞いて来た。

俺はそれに頷いた。

「しかし、そこまでするのは何処のどいつなのよ」

柊が呆れながらそう言った。

「それは僕だよ」

突如帰ってきた言葉に俺達は驚き、声のした方を見た。

そこには俺達の良く知る人物が立っていた。

「これはこれは、雄真ではないか。相変わらずのご活躍結構、結構」

その人物は、浩介だった。

浩介はそう言いながらも、背中にある剣状のマジックワンドを手にする。

「なんであんたが、ここにいるのよ!!」

柊が浩介に怒鳴るように言う。

「それを答える義理はない」

浩介は薄らと笑いを浮かべながらそう言った。

「なんですって!! だったら力づくにでも聞かせてもらおうよ!!」

「お、おい柊!!」

柊は俺達の制止を無視して、魔法の詠唱に入った。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタリアス・アウク……」

浩介の實力はいまだに不明なのだ。

浩介の方を見るとうすら笑いを浮かべていた。

「悪いのだが、答える義理も無ければ、ここにいる理由もないんで帰らせてもらおうよ」

浩介はそう言うと、立ち去ろうとする。
だが。

「エルトラス・レオラ！！」

柊から黄緑色の魔法弾が放たれた。

浩介は振り向くと右手を自分に迫ってくる魔法弾に掲げた。

「無限烈火！！」

浩介のたったそれだけの言葉で、右手から黒い霧が放たれた。
そして、それは柊の魔法と相殺……するはずだった。

「な！？」

俺は驚愕の声を上げた。

柊の魔法とぶつかった瞬間柊の魔法が消えたのだ。
しかし問題は俺達に向かってくる黒い霧だった。

「エル・アダファルス！！」

威力無視の速度重視の魔法を放った。

しかし、俺の魔法も黒い霧とぶつかると消えてしまった。

そして俺がもうだめかと思った時だった。

俺達に命中する寸前に黒い霧は、シュンという音と共に跡形もなく消えてしまった。

慌てて俺は浩介の姿を探したが、どこにも見当たらなかった。

「なるほど……大森君が」

その後俺達は鈴莉母さんの研究室に戻って事情を説明した。

「母さん、前にも聞いたけど浩介の魔法はいつたい何なの？」

俺は数週間前に聞いたことと同じことを聞いた。

それというのも浩介の魔法の力はかなりすごく、浩介の使っている魔法も不思議に思っていたからだ。

「そうね……マジックワンドを生成するときには魔法陣に魔力を込めるんだけど、それはしているわよね？」

鈴莉母さんの問いかけに対し、俺達は頷いた。
マジックワンドの生成は特殊な魔法陣に魔力を込め、そして媒体に
名前を付けて完成となる。

「それで、あなた達がマジックワンドを生成した時にその魔法陣が
ある生徒の魔力を受け切れずに爆発してしまったのよ」

「ど、どういうことですか!？」

俺はこの話を聞いたことがあった。

ちなみにこの話を聞いたのは浩介からだった。

マジックワンド生成の際に使う魔法陣はどんな量の魔力でも耐えら
れるようになっていた。

俺も実際にやったことがあるからわかるのだが。

俺が魔力を限界まで込めても魔法陣には全く変化がなかった。

「そして、爆発させた生徒は大森君よ」

鈴莉母さんの言葉に俺達は言葉を失った。

しかし、疑問が出てきた。

浩介はいつたい何者なんだろうというものだ。

「母さん、浩介はいつたい何者なんだ？」

俺が鈴莉母さんに聞いた瞬間だった。

「その質問には僕が答えよう」

俺達の良く知る人物の声が聞こえたのだ。

俺達はその人物の声がした方を見た。

そこにいたのは……。

「どうも」

さっきまで話題が上がっていた浩介本人だった。

「本人が現れたならちようどいいわ。あんたは一体何者よ？」

柊がストレートに浩介に聞く。

「別に言ってもかまわないが、これを言えば、大森浩介は終わることになる。それでもいいか？」

浩介は真剣な表情を浮かべて俺達に聞いて来た。

俺はその言葉に疑問を抱いた。

大森浩介が終わるという意味がわからなかったからだ。

(ラジアは分かるか?)

俺はラジアに、念話で聞いてみた。

『いいえ、私にもわかりません』

しかしラジアから帰ってきたのはそのような答えだった。

「いいわよ、別に」

柊は俺が考えているのをよそにそう言った。

これには神坂さんも苦笑いを浮かべるしかない。

「分かった。なら話そう」

浩介はそう言つと衝撃の事実を口にした。

「僕の本当の名前は……高月浩介だ」

第23話 魔法（後書き）

第23話はいかがでしたでしょうか？

次回は、浩介の真実が明るみになります。

それでは、これにて失礼します。

第24話 高月家（前書き）

今回は魔法に関しての自己解釈がありますので、ご両所いってください。

第24話 高月家

「僕の本当の名前は…高月浩介だ」

その時、全員は固まった。

その力の先にあるもの

第24話「高月家」

「た、高月!?!」

そして、突然神坂さんが驚いたように言った。

「な、なんだ?高月がどうかしたのか?」

俺と言えば、神坂さんが何で驚いているのかが分からなかった。

「あんだ、高月家を知らないの?」

柊が呆れたように言ってきた。

「仕方ないよ、高月家は他3大名家の影みたいな存在だから」

浩介はそう言った。

でも、今の言葉で思い出した事があった。

「もしかして、幻の家系の高月か?」

そう、3大名家である御薙家、高峰家、式守家の影に存在している名家があると聞いたことがある。

その名家が、高月家だ。

高月家がどのような家系かを知る者は少ないことから、”幻”という呼び方をされている。

「幻のという呼び方は気に食わないが、まあそうだな」

「高月家と言えば、泣く子も黙る魔法使いのドンじゃない!」

柊も驚いた様子で言った。

「まずは、高月家の役割から話た方がいいかな」

浩介はそう言うつと高月家について説明を始めた。

「高月家は、4大名家の一つなんだが、それは知ってるな？」

浩介の問いに全員が頷いた。

それを確認して、浩介は話を進めた。

「次に魔法について何だが、僕場合は魔法式を組み立てるが、その工程を簡略化している」

「か、簡略化って……そんな形式の魔法なんてこの世にはないはず」

神坂さんは不思議そうに信じられないとばかりに呟く。

「それもそのはずだ。この魔法こそが高月家独特の魔法だからな」

「独特？」

柊は浩介に聞いた。

そして、浩介は口を開いた。

「あの魔法は簡単に言えば『神魔法』だ」

「しんってもしかして、神様の神？」

柊は浩介にそう質問した。

「そうだ」

もう全員は驚くことすらできなくなっていた。

そのくらい神魔法はすごい魔法なのだ

神魔法、それは俺達が使うような魔法式を組み立てそれに魔力を通して具現化させるという根本的な理論を度返しにさせる魔法だ。

どうやってそれを使うかは全く不明とされているが、魔法行使の速度や威力が尋常ではない程に高いことが特徴だと聞いたのことがあった。

その時の例え話として出てきたのが

『10の魔力を使用して攻撃魔法を放つたとすると普通はコンクリートの壁に当たっても傷が少しだけつく威力だが神魔法は10の魔力でも、コンクリートの壁に当たると粉々に砕くぐらいの威力がある』

というものであった。

「神魔法は威力が高くいろいろな魔法に展開できる。でもここでは

この力は強すぎる」

確かに、神魔法は威力が高い……いや、高すぎるためにこの学園の生徒に向けて、神魔法を使うのはかなり危険なのだ。

「だから、新たに魔法式を作成したんだ。この世界で魔法を使っても威力が高くなりすぎないための魔法式をね」

浩介はさらりととんでもないことを言った。

魔法式を自分の自由自在に変えることが出来るのは、ものすごい技術が必要であり難しいのだ。

「そんなことできるなんて、浩介はいったい何者なのよ？」

そして柊は驚きながら、浩介にそう問いたです。

「そうだな、話がずれてしまったようだ。高月家の役割は『裁き』をすることだ」

「裁き？」

裁きとはそのままの意味で受け取っても良いのか？

「裁きと言っても二つの裁きがある。一つは家そのものに対する破門、二つ目が個人そのものに対する破門」

「……破門……」

「そして僕は、その破門をする際の調査と遂行をしている」

浩介は淡々と高月家の役割について話していた。

「も、もしかして誰かを破門にするために来たの？」

柊は怯えたような表情で、浩介に聞いた。

「いや、今回はそのようなことで来たのではないから安心していいぞ、柊」

「な、何であたしが安心してなくちゃいけないのよ!」

柊は怒ったように浩介に文句を言う

「あれ、忘れた？フィールドも張らずに魔法の練習をして、雄真を吹っ飛ばしたのはどこの誰？」

浩介は少しだけ威圧感を漂わせながら、柊を睨みつけて言った。

「そ、それは…」

浩介の問いかけに柊は答えられなかった。

「……高月家は魔法使いとしてふさわしくないと判断できる者に関しては、魔法を使えなくする事も出来る」

浩介は一歩間違えれば脅迫まがいなことを言っていた。

「そ、それじゃ……」

柊は青ざめた表情で浩介に聞いた。

「まあ安心しろ、柊はぎりぎり大丈夫のはずだから」
「はず、なんだ」

みんなは苦笑いをしていた。

「それじゃ、今回は何が目的でここに？」

神坂さんがそう浩介に聞いた。

「それが今回の軸になる」

浩介はそう言うともみんなは浩介の言葉に耳を傾けた。

「僕はさつきも言ったが、高月家の次期当主だ。ちなみに現当主は高月宋次郎……父さんなんだが。それを兼任するように僕が国際魔法連盟法務課の大臣を、父さんが総理大臣として働いている」

「……こ、国際魔法連盟法務課の大臣！？」「……」

浩介の言葉に全員が驚いていた。

国際魔法連盟と言えば、全国の魔法使いを世界を隔てて監視、調査する所だ。

当たり前だが、魔法連盟よりも権利がある所だ。

しかも、法務課は魔法使い達が起こした、事件などを扱う部署だ。

そのこの大臣って、浩介……一体お前は何才なんだ？

「ん？雄真。今僕が何才とか思わなかったか？」

「………思いました」

今の浩介に嘘は効かないと思いき直に言った。

「と、言うよりなぜわかる？」

そして、俺は前から疑問に思っていた事を浩介に聞いた。

「……………まあそれは置いといて」

やっぱり流された。

「まあ、仕方ないか。僕の年齢は179歳で、人間の年齢だと17歳になるかな」

ひ、百!?

「あと、言っておくけど僕達は魔族だから普通の人と比べて、年をとるのが遅いんだ。決してジジイとか思うなよ？」

う……………先に言われた。

「それが理由で友人がいないんだが……………まあ、いい」

そりゃ、長く生きてれば友人は死んじゃうだろ。

「高月家の者はほぼ全員、神を従えるんだがそれに加えて新たな魔法を作ることが、次期当主になるための条件でもある」

「ちなみにどんな神を従えているんですか？」

「それは俺も気になる」

俺も神坂さんの質問に便乗した。

「確か父さんは、自然界すべてを統括している自然の神『アザベエル』、僕はこの世にあるものを全て破壊する、破壊の神『ラティーヌ』とこの世に混沌をもたらす、闇の神『ザルヴィス』、そしてこ

の世を破滅に導く、破滅の神『ヴェントス』、久美にはこの世に秩序をもたらす、光の神『リヴィウス』を従えていたと思う」

全員（鈴莉母さんを含める）はもう何回目かわからない、驚愕の表情を浮かべて固まっていた。

俺は神にもいろいろな種類があるんだなと思っていた。

「ちょっとそれじゃ、浩介は危険じゃないの！！破滅の神に闇の神を従えている時点で」

大きな声で叫んでいる柊に浩介はなぜかぞっとするような笑いを浮かべながら答えた。

「さあ？危険かどうかはわからないな。もし危険だったらもうすでにこの世界はないはずだし」

確かに浩介は、呪いでしか死人を出していない。

「それに、闇の神だからとかそういうのは偏見だ。少しは個人を見た方がいいのではないか？」

最後に浩介は柊にはつきりと言いつつ放った。

「……………話を戻そう。ある日父さんから、ある任務を託されたんだ」

ある任務？

俺は浩介の話に、さらに耳を傾けた。

「その任務は、式守家が保有する秘宝を封印せよという物だ」
「どうやら核心に迫ってきたみたいだ。」

「そして、僕はすぐにこの世界へ、赴き式守家現当主護国に面会して、秘宝の封印を要求した」

「それじゃ、今ここには浩介はいないんじゃないの？」

柊がそう言った。

確かにそうだ、もし封印をしていれば浩介はここにいる意味がない。しかし……さつきから、鈴莉母さんが動揺しているのは気のせいだろうか？

「普通はそうだが、護国は『秘宝の管理はここではなく御薙鈴莉殿に任せてある、そちらに要求してくれ』と言った」

……なんだか雲行きが怪しくなってきた。

「それで御薙鈴莉に秘宝の封印を要求したら、彼女は『わかりました』と言ったんだ。だから大丈夫だと思ったんだが、1年たっても封印がされなかった」

全員の視線が鈴莉母さんに集まる。
そりゃそうだ。

封印すると言ったのにも関わらず、封印してないのだから。
という事は、まさか……

「だから、秘宝を悪用するんじゃないかと思い、僕はこの瑞穂坂学園に入学したんだ」

俺はこの時やはりと思っていた。

「そして怪しまれないために小日向家には、留学という名目で居候させてもらい、そして魔法科に入ること御薙鈴莉を監視していたんだ」

「そういえば去年は何か誰かに見張られているような気がしたんだけど、それはあなた？」

「へえ、魔法連盟の職員ですら見つける事ができない監視魔法を見つけるとはな」

そう驚いた表情で浩介は答えていた。

「しかし、今回の犯人が伊吹達だとは……まあ、一目で分かったがな」

「な、何でわかったんだ？」

俺はびつくりした。

いくらなんでも一目見ただけで、犯人まで分かっているとは思わなかったからだ。

「ちょっと待って、その前に伊吹って誰？」

柊が慌てたように聞いてきた。

「ああ、式守伊吹と言ってすもものクラスメイトだ」

「「し、式守!？」」

俺の説明に当然のように式守という名を聞いて、神坂さんと柊は驚いていた。

「これが普通の反応なんだよな」

浩介は少し苦笑いをしながら言った。

「でもどうして、一目見て伊吹が犯人ってわかった？」

俺は浩介にそう聞いた。

「理由？そんなものはいらない。ただ単に彼女が抱える邪気があったから。それだけだ」

「邪気？」

浩介の言った邪気とは何だろうか？

「邪気って言うのは、人が心に抱えるマイナスの気の事だ。見えるやつも数人いるみたいだが見えない方が普通だ。そして邪気を見たり、封印したりできる人を邪気払い師と呼んでいる」

色々わからない単語が出てきたんだが、なんだ？

「それで話を戻すが、彼女が抱えている邪気を読み取ると、そろそろ動きだしそうだったから要観察人物にしておいたわけ。まあ、彼女と同じタイプの邪気を持っているやつも二人いたからな」

……それは間違いなく上条さんと信哉の事を言っているのであろう。

あの日から、二人共学校には来ておらず、そして伊吹もすももの話によると無断欠席しているらしい。

「と、言うわけで僕の説明は以上だ、何か質問はあるか？」

浩介がみんなにそう聞くとすぐに柊が手を上げた。

「なんだ柊？」

「あのさ、気になってたんだけどさ、浩介のマジックワンドが擬人化するってのは本当なの？」

柊は、浩介にそう聞いた。

浩介が迷惑そうに『誰が僕のマジックワンドが擬人化が出来ることを漏らしたんだ？』と文句を言っていた。

「ああ、本当だ。なんなら見せてあげようか？」

浩介は柊にそう聞いた。

「で、できるんなら」

柊が答えたと同時に浩介は、マジックワンドであるクリエイトを構えた。

「マイ、お願い」

浩介がそう唱えた瞬間浩介は光に包まれた。

そして光が晴れると、そこにいたのは、浩介にそっくり いや、片方が男で、もう片方には浩介と同じ魔法服を着て、髪の毛をポニーテールに結んでいる少女の姿があった。

その光景に全員が固まった。

「この子はマイ。一応元はクリエイトだ」

浩介はそんな皆をよそに、淡々と説明をしていた。

「マイです。みんなよろしくね!!」

マイという少女は、元気にみんなに挨拶をした。

「本当に擬人化ができるんですね」

神坂さんは感心したように、マイを見ていた。

「初めまして、私は神坂春姫です」

「柊杏璃よ、よろしくね」

「こちらこそよろしくね、春姫ちゃんに杏璃ちゃん」

マイは二人とすでに仲良くなっていた。

「擬人化しても僕は杖を出すことはできるし、マイも魔法が使えるから一石二鳥だな」

そして、浩介は説明を続けていた。

「あ、でも具現化できる魔力が少なくなってきたから、そろそろ元に戻るね」

そんな浩介に、マイはそう言った。

「そうか。それじゃ、またあとで」
「じゃあね〜」

マイはそういうと光り始めて、光が晴れてそこにあったのはクリエイトだった。

「私からも一ついいですか？」

そして、神坂さんは浩介にそう聞いた。
何を聞くつもりなのだろうか？

「いいけど」

浩介は快く了承した。

「杏璃ちゃんの魔法を打ち消したあれは何ですか？」

それは、あの時の黒い霧の事を言っているのだろうか。

「あれは僕が生み出した魔法だ。僕は闇の魔法使だから、自身に込められている闇を利用して、魔法を放つ」

浩介は説明を始めた。

「そして僕が込めた闇もしくは、魔力以上の魔法を放たなければ、霧は消えずに差額は対象者の魔力を削るようになってるんだ」
「つまり、吸収できなかった分の魔力を本人から吸収するってことか？」

俺は浩介が言った事を簡単にまとめた。

「まあ、そんなもんだろ。ほかに質問はないか？」

浩介の問いに誰も何も言わないので、浩介はこれ以上の質問はないと判断してみたのだ。

「とまあ、こんなところだが…そろそろ出てきたらどうだ久美？」

「「「「え!?!」「」」」」

全員がびつくりしていた。

それもそのはず、この部屋には浩介以外にいないのだから。

「やっぱりばれちゃったね」

すると誰もいなかった場所から久美が出てきた。

「でも兄さんすぐには見つけれなかったから私の勝ちね!?!」

久美はにっこりと浩介にそう言った。

ドスっ!!

やっぱり浩介が久美を殴った。

「だれが見つけてないって?いつ出るかと思って言わないでおいただんだ!?!」

「それ、負け押しー」

久美が言いかけてやめた。

というのも浩介がものすごい殺気を含んだ表情で睨みつけているか

らだ。

こんな状態の浩介に「冗談は通じないのは、誰でも（神坂さんたちを除いて）知っている。」

「ところで久美。魔法書が見つからないんだが、知らないか？」

「し、知らないよ」

またか……

「隙あり！！」

浩介は久美が答えた一瞬の隙を狙って、久美が隠し持っていた本を奪った。

それは明らかに……。

「これは僕がなくした本」

やっぱり、浩介の本だった。

という事はいつもの『あれ』が出るわけか。

「この大馬鹿者！！！！」

ドカン！！

「痛い！！」

「まったくいつもいつも、お前というやつは」

説明すると何時も、よく浩介の物がなくなる事があり、そのたびに久美が持っているのだ。

しかも、わざとやっているからたちが悪い。

たまに俺やすももの持ち物がなくなった事があるが、それも久美の仕業だったらしい。

ちなみに、その時は家が壊れるんじゃないかと思われるくらい怒っていた。

本当にあれだけはやめてほしい、心臓に悪いから。

それは去年だった。

「久美！！貴様もとうとう雄真のものまで盗むとは、何たることだ！！貴様の根性を叩き直してくれる！！」

ドカン！！ドカツ、ガチャン！！

「浩介、それ以上やったら家が壊れる！！」

「浩介さんやめてください」

「浩介君お願いだから、テーブルや棚を使って、久美ちゃんを殴るのはやめてー！！」

ちなみにこの時に、浩介の怒りが収まったのは、3時間後だった。

しかもあれだけ、浩介に鉄槌を受けてもピンピンしている久美の方が、すごいと言えはすごいが。

「さて僕たちは、そろそろ帰るな」

「それじゃ、雄真に神坂さん、柊それと先生」

「」「さようなら」「」

浩介は帰ろうとしたが。

「浩介！！」

俺は浩介を呼び止めていた。

「なんだ？」

浩介は少し疑いの目で俺を見てきた。

「高月だろうが浩介は浩介だ、いつもどおりにしていればいいぞ」

浩介の事だ、今言っておかないと自分だけで思いつめるという事はわかりきっていたので、先に言っておくことにした。

「……………っ！？ありがとうございます」

浩介はびっくりした表情をしていたが、お礼を言つと浩介は帰って行った。

「それじゃ、先生。私たちもこれで失礼します。さようなら、小日向くん」

「失礼します。さようなら、雄真」

神坂さんと柊はそういつと研究室を後にした。

「それじゃあ、母さん。俺も帰るよ」

「あら、そう？」

俺は鈴莉母さんにそういつと、鈴莉母さんはびっくりした表情でそ

う言った。

「それじゃ、失礼します」

「気を付けて帰るのよ」

研究室を出る際に鈴莉母さんがそう言った。
そして、俺は家に帰って行くのだった。

第24話 高月家（後書き）

ということで、今回は浩介の正体でした。

かなり長くなったうえにわかりにくかったと思います。

ともあれ、次回も急展開がありますので、楽しみにして頂ければ幸いです。

それでは、これにて失礼します。

第25話 交戦(前) (前書き)

ちょっと長かったので、前後に分けました。

それでは、どうぞ

第25話 交戦（前）

4月19日

「おつす雄真、すももちゃん、浩介、久美ちゃん」

「おはよう雄真、すももちゃんそれと浩介君と久美ちゃん」

朝、いつもの通学路で俺とすももと、久美と浩介は準と八子と合流した。

「おはようございます、準さん八子さん」

「おはよう八子、準さん」

「おはよう準さんに八子」

「おはよう八子、準」

俺とすももと浩介と久美は準と八子に挨拶をして、学校へ向かった。

その力の先にあるもの

第25話「交戦（前編）」

「それにしてもよう、雄真、久美ちゃんって本当にかわいいよな」

学校に向かう途中、八子が突然俺にそんな事を言ってきた。

「そうだな」

まあ、そりゃ久美が可愛い事は、否定はしないが……。

「そうだろ！！ああ、俺も久美ちゃんと一緒に寝たいな」

八チはそんな妄想を言っていた。

「そんなこと、浩介が許さないと思うが……」

「そうなんだよな……あ、あ、浩介がどっかにいなくならないかな」

八チはそう嘆いた。

というよりそれを浩介が聞いたら殺されるぞ、八チ。

浩介はあまり冗談が通じるような相手ではない。

「おい、それは無理だぞ」

「だってよう、浩介がいたら……」

と言いかけた時だった。

「今俺の肩を叩いたか、雄真？」

八チが俺に聞いて来たが、俺は八チの肩など叩いてはいない。

「いや、俺じゃないけど」

「それじゃあ今のは……」

八チは後ろを見た。

そしてそこにいたのは……。

「ねーえ八チい、僕がいたら何なのかな？」

「ヒィー！！！」

そこにいたのは鬼の形相をして八手をにらみつけている浩介だった。

「それに、僕としては、『久美ちゃんと一緒に寝たいな』という事についてもう少し聞きたいんだけどなー」

もはや、浩介は殺気を含んで睨みつけている。
ここで、謝っておけばいいのに八手は、

「で、出たあ！！死神浩介だ」

なんて禁句を言ってしまった。

プチッ

あ、なんかキレた。

「…………たか」

「え？」

浩介はさっきの数倍の殺気を放ちそう呟いた。

「小便是ちゃんと済ましたか？」

そして次の瞬間、浩介は刀を取りだした……って刀！？
しかも準たちは横に逃げているし、周りに歩いていた人もいなくな
ってる。

「神にお祈りは？」

「ガタガタ震えながら命乞いをする心の準備はOK？」

そう言うと浩介は一步前に出た。

「命乞いをしたければ好きなだけしろ、一応聞いてやる」

浩介は両手に持った刀を十字架みたいにクロスさせた。

「だが、手加減はしないからそのつもりでいろよ。貴様の曲がった根性、叩き直してやる！」

浩介怖いぞ……。

もはやだれにも浩介は止める事は出来ない。

「さあ、命乞いはどうした？」

時間切れと言わんばかりに、浩介は八手にそう聞いた。

「ヒ、逃げろー！！」

八ちは逃げだした。

ある意味正しい判断かもしれない。

しかし、それは浩介が普通の人間並みの身体能力ならばの話だが……。

「逃がすか！！この馬鹿者　　！！」

浩介はそういつと逃げた八ちを刀を振り回しながら追いかけて行った。

「と、とりあえず学校へ行こうか？」

俺はいまだに呆然としている3人にそう言った。

「そ、そうね行きましょ……」

準がそう言ったので素直に行くことにした。

ハチよ……生きて帰ってこいよ。

俺は心の中でそう思った。

そしてしばらく歩いた時だった。

ドーン

「うわー!」

いきなり直下型大地震が来たような激しい縦揺れが来たのだ。そしてその揺れはすぐに収まった。

「……」

誰も言葉にはできなかった。

このとき全員が思ったに違いない。

浩介を本気で怒らせると生きて帰れないという事を。

「へえー、そんなにおいしいんだ、そのケーキ屋は」
「そうなのよー、浩介君も行ってみたら？」
「そうだな」

僕たちは学校に向かう途中に、準さんとケーキ屋の話題で話していた。

まあ、ケーキは好きだから……。すると、そこにとんでもない声が聞こえてきた。

「ああ、俺も久美ちゃんと一緒に寝たいな」
「……」

僕にはすぐにその声の主がわかった。

「どうしたの？にいさ……」

久美は何かを聞いてきたようだが僕には全然答えられなかった。そして、久美は聞くのを途中でやめた。きっとわかったんだろう、今自分がやるべき事を

「あ あ、浩介がどっかにいなくならないかな」

そして、八子のそんな言葉が聞こえた。そして僕は、八子の方へ向かった。

「だってよう、浩介がいたら……」

僕は、八子の肩を叩いた。

「今俺肩を叩いたか、雄真？」

八子は雄真が叩いたのと思ったのか雄真に聞いていた。

「いや、俺じゃないけど」

「それじゃあ今は……」

雄真じゃないと分かった八子は後ろにいる僕を見た。

「ねーえ八子い、僕がいたら何なのかな？」

「ヒィー」

八子は恐怖のどん底のような顔をしていた。

「それに、僕としては、『久美ちゃんと一緒に寝たいな』という事についてもう少し聞きたいんだが……」

僕は、殺気を含めた表情で言った。

「で、出たあ！！死神浩介だ」

プチッ

ほう、八子。

言うに事欠いて死神ですか？

いい度胸してるな、貴様

僕は、そう思い刀を両手に持った。

「……たか」

「え？」

「小便はちゃんと済ましたか？」

「神にお祈りは？」

「ガタガタ震えながら命乞いをする心の準備はOK？」

八手の顔は地獄に落ちたような顔だった。

「命乞いをしたければ好きなだけしろ、一応聞いてやる」

僕は、両手に持った刀をクロスさせた。

「だが、手加減はしないからそのつもりでいろよ。貴様の曲がった根性、叩き直してくれろ！！」

よし、猶予は挙げたな

「さあ、命乞いはどうした？」

「ヒ、逃げろー！！」

八手は逃げだした。

「逃がすか！！この馬鹿者　　！！」

逃げるのは正しい判断だったかもしれない。

それは、追いかけるやつが普通のものだったらの話だが。

僕は逃げる八手を、刀を振り回しながら追いかけた。

「あいたっ！！」

そして、しばらく追いかけていたら八手が転んだ。

これで終わりだ！！

「ごめんなさい、ごめんなさい。謝りますから、何でも言う事を聞きますから許して下さい!!」

ハチはいまさら命乞いをしてきた。

普通のやつならこれで許すかもしれないが、僕は違う。

「喰らえ必殺、風の酷使!!」

思いっきりジャンプして、命乞いをしているハチに魔力を通した刀の先を向けて思いっきり、振りおろした。

ドーン

「ギャー!!」

「次はするなよ、ハ・チ?」

そう言っ僕は時間を確認した。

ちよつと急いだ方がいいので僕は気絶しているハチと一緒にクリエイトに乗って学校に行った。

結局学校に着いたのそれから数分後だった。

浩介 Side END

キーンコーンカーンコーン

今日最後の授業終了を知らせるチャイムが鳴り、放課後になった。

「それじゃあ、行くか」

「そうだな」

そして俺たちは森へ向かった。

そして、しばらく森の中を歩いた時だった

「……………!!」

『マスター。前方に上条信哉さんとみられる、魔力パターンを感知しました』

ラジアが俺にそう言った。

神坂さんも反応したので、間違いないだろう
確信した瞬間。

「ふむ、神坂殿に小日向殿に浩介殿、それに久美殿ではないか」

信哉は俺たちの姿を見るなりそう言った。

「俺は火急な用がある故、用がなければどいては貰えぬか？」

「待てよ信哉、もしかしたら、信哉の用事と俺たちの用事が一緒なのかもしれないぜ」

「それはどういう意味だ？」

俺がそう言った途端に、信哉の顔が険しくなった。

「信哉がなぜ、この森にたびたび入り込んでいるのかを話してくれないか？」

俺は理由は知っているが知らないふりをして、信哉に聞いた。

「もし、俺に出来る事だったら御雑先生に話してみるからさ」

「それは御雑方を捨てるという事か？」

「御雑方って……まあ、できる範囲では話してみるさ」

それは嘘ではない。

もし信哉にも何か事情があるのなら、俺は鈴莉母さんに話してみるつもりだ。

「ふむ、小日向殿の誘いも悪くはない。しかしこれは火急なようなのだ。そんなことに費やしている時間などはない」

しかし、信哉は提案を断った。

やはり、相手もかなり焦っているようだ。

「さあ、用がそれだけなのならどいてもらおうか」

「待ちなさい上条君」

俺たちを通り過ぎようとした信哉をに神坂さんが呼び止めた。

「なにようか、神坂殿？」

「簡単にここを通れると思わないでくれるかしら」

神坂さんは真剣な表情でそう言った。

「俺に、立ちはだかるならば、実力を持って排除せよ……との命を受けている」

そんな神坂さんに対して信哉はそう言った。

「……」

神坂さんは信哉を睨んでいる。

二人からは戦意を感じる。

それは最も避けたかったことだ。

魔法の戦いになれば、今の俺達に勝算の見込みはない。

浩介がいれば何とかなるかもしれないが、浩介は信哉や上条さんの前ではあまり魔法を使うのをやめているようだから、神坂さんに協力する可能性は低い。

ともなれば俺と神坂さんの二人で戦うことになる。

俺もよくわからないがこの間あれだけの荒業を成し遂げたのだ。

俺が協力しても勝てる見込みはない。

「お、おい！！ちょっと待てよ二人とも！！」

「小日向殿下がられよ……ここからは俺と神坂殿との戦いだ」

「雄真、こっちだ」

俺は浩介にそう言われて、わきの方に連れて来られた。

そして最も最悪な展開を迎えることになった。

「今、魔法を使える事を言うにはまだ早い。待つのだ、”時”が満ちるのを」

そう言うと浩介は俺の隣に移動した。

やっぱり俺の予想通りに、浩介は協力しないようだった。

そつえば、久美の姿が見えない。

さっきまではいたはずだが、一体どこに行ったのだろうか？

「さあ、行くわよ」

神坂さんがソプラノを構えた。

「音に聞こえた瑞穂坂の才媛、神坂春姫の力……見せてもらおうぞ」

信哉のその言葉によって戦いの火ぶたは切って落とされた。

「エル・アムダルト・リ・エルス……」

神坂さんは詠唱を始めた。

信哉は静かに木刀を手にしたままあえて神坂さんとの距離を詰めようとはしない。

(信哉はあの木刀で魔法をたたき落とす事ができる)

それは、結界を破壊したことから明白だった。

(どうするつもりなんだ……神坂さん)

「デイ・ルテ・エル・アダファルス!!」

そして、出てきたのは炎属性の魔法。

信哉に向かってゴーという音を立てながら向かうが。

「むううん!!」

信哉の気合のこもった声を上げながら、木刀を魔法弾に振りおろした。

シャキーン

爆発音を立てて、神坂さんの魔法弾を打ち消した。

「えっ!!」

神坂さんは驚きの声を上げた。

「いくらでも撃ってくるがいい、すべてこの風神雷神で撃ち碎いてくれる!!」

信哉がそう言った。

「なら、これでどう!? デイ・アストウム・アダファルス!!」

神坂さんが一斉に複数の魔法弾を展開し打ちだす。

「はあああっ!!!!」

シャキーン、シャキーン、シャキーン

「お、おい……嘘だろ!?!」

神坂さんの飛ばした魔法弾を、次々と木刀ではじいていく。

「ふむ、妙だな……神坂殿の力。この程度ではあるまい。小手調べは終わりにして、そろそろ本気で参られよ!!」

神坂さんはソプラノを構えたまま、無言で信哉を睨み据えている。何をするつもりなんだ、神坂さん?

「動かぬか……では、こちらから行くぞ」

そして信哉が動こうとした瞬間。

突如もない空間から魔法弾が放たれた。

「……………!!」

信哉が驚いていた。

そう、誰もその魔法弾を出していないのだから。

それは黒い光を発して一気に信哉に向かった。

シャキーン

ものすごい音と共に、魔法弾は消えた。

どうやら信哉が打ち消したみたいだ。

しかし……一体誰が。

すぐに誰のものかわかった。

「僕の魔法だよ」

隣にいた浩介がまるで俺の心を読んでいるかのように俺の疑問に対して答えた。

「正確に言えば、発動させておいた魔法弾を動かしたただけだけど。久美のおかげで何とか動かせたみたいだ」

さっき放たれた魔法の説明をしているが、俺にはよくわからなかった。

正確に言えば、理論ではなく仕組みの方なのだが。

「簡単にいえば、ここに来る前に発動した魔法弾の出現を遅らせただけ。でもそれには魔力というよりも制御する精神力が、がかなり必要になるから、久美にも協力してもらったというわけ」

浩介は俺がわかっていないと思ったのか、そう説明した。

俺たちがそんな話をしている間にも、信哉たちは膠着状態が続いていた。

そしてその膠着状態を破ったのは、信哉だった。

「神坂さん、来るぞ!!」

俺は神坂さんに向かって叫んだ。

次の瞬間、木刀を構えた信哉の体が低く沈む。

「はあああつ!!!」

信哉が呼号と共に地面をけった。

「エル・アムステリア・ラル・セイレス……」

それと同時に神坂さんは何かの魔法の詠唱をし始めた。

弾丸のようなスピードで信哉が迫る。

その速さは、一瞬で神坂さんを必殺の間合いに捕らえるものだった。

「デイ・ラテイル・アムレスト!!」

信哉の木刀が神坂さんに向けて振りおろされる。

その一撃はぎりぎり間で合った防御魔法によって阻まれた。

「くうっっ!!」
「っ……!!」

そして、それと同時に辺りはまぶしい光によって視界が遮られた。まぶしい光が消えて視界が戻った時の目の前の光景は、さっきの衝撃によって弾き飛ばされたのであろう、信哉と神坂さんは地に伏せていた。

「大丈夫か!! 神坂さん」

俺は助けに入ろうと、したが……、

「出てきちゃだめよ!! 小日向くん!!」

神坂さんに止められた。

しかし、あのマジックワンドは一体……。

『マスター』

そう思っているとラジアが念話で話しかけてきた。

『あのマジックワンドは、上条さんが魔力をこめることで強力なレジスト機能が発揮されます』

そう言ってラジアは、信哉の持つマジックワンドに付いての解説をした。

……というより、いつ解析したんだ？

『しかし、上条さんが魔力をこめていなければマジックワンドは力を発揮しない。結局あれは上条さんの力だったのです』

なるほど……つまりは魔力とマジックワンドがカギだったというわけか。

「御名答名だ神坂殿……しかし、それに気付いたところでどうなるわけでもあるまい」

神坂さんも気づいたのであろう、信哉に俺たちと同じことを話していたらしい。

しかし信哉の言う通りだ、それに気付いたところであのマジックワンドがレジスト機能を持っている代物だったことには、変わらないのだから。

それに近接戦闘になったら、神坂さんの不利は目に見えている。

そして、距離を取って戦うにしてもあの木刀がある限り神坂さんの攻撃は通じない。

どちらにしても状況は苦しい。

「エル・アムダルト・リ・エルス……」

神坂さんは距離を取って詠唱を始めた。

「やはり接近戦は避けるか」

それを見ながら信哉はそう言った。

（でもそれじゃ……）

信哉の木刀でレジストされる。

「ディ・ルテ・アダファルス」

神坂さんの呪文で複数の魔法弾が打ち出された。

「無駄な事だ!!」

信哉はその魔法弾を撃ち返そうとした。

しかし

「アデムント・アス・ルーエント!!」

「ぬっ!？」

神坂さんの詠唱と共に光弾が信哉を捕らえる寸前で角度を変えた。

「デイ・アストウム!!」

神坂さんが追加呪文を詠唱すると、神坂さんが放つ魔法が次々と曲線的な軌道を描き始める。

しかし、一度に複数の光弾を自在にコントロールできるなんて……。

「くっ!!これほどの数を!!かく乱する気か……小癪なり!!」

さすがの信哉からも余裕の表情が消える。

だが……。

「はあああっ!!」

シャキーン

信哉の攻撃で立て続けに光弾が落とされる。

読みにくい軌道を正確にとらえ、ひと薙ぎひと薙ぎで確実に数を減らしていく。

「っ…………はぁ…………う…………」

神坂さんは苦しげな表情を浮かべている。

それもそのはずだ、これだけの魔法をコントロールするにはかなりの集中力と精神力を要するに違いない。

(でも、このままじゃ全部叩き落されるのも時間の問題だ)

「はぁあっ!?!?!」

シャキーン

そしてついに信哉は最後の一つをたたき落とした。

「くっ!?!」

そして、最後の一つをたたき落とすのと同時に、神坂さんが膝をついた。

「これで終わりか、神坂殿？」

「はぁ…………はぁ…………」

神坂さんは、信哉の問いかけにも答えられないほど息が切れているようだ。

「少々驚かされたが奇策はあくまで奇策、という事だ…………」

「では、ここで決着をつけさせてもらっぞ!?!」

そう言うと、信哉は木刀を握り直し、神坂さんに向かって突っ込んでくる。

「……………っ！！」

思わず飛び出ようとしたその瞬間……………。

「……………ディア・ダ・オル・アムギア！！！」

「っ……………！！！」

信哉に向かって、神坂さんが打ち出した、捕縛魔法が走る。

「まだこんな小細工を！！！」

急制動と共に、木刀の一閃が捕縛魔法を打ち消した。

「こんなもので俺を捕らえられるとでも思ったか！！！」

「思っていないわ、足止めができれば十分なもの」

「なっ！？」

神坂さんがそう言った瞬間、周りの木々から一斉に光が発せられ、信哉の動きを完全に封じこめる。

「こ、この魔力……………神坂殿……………まさか」

「そうよ、地下にあった魔法陣から魔力を引かせてもらってるの」

信哉の問いかけに神坂さんはそう答えた。

(ラジア、本当なのか?)

俺はラジアにそう聞いた。

『はい、この魔法から地下の魔法陣の魔力を感じます』

ラジアもそう言った。

「くっ……う、動けね……いつの間にこんな仕掛けを……」
「今朝ちよつとね、おかげでクラスのみんなに心配かけちゃったわ」

信哉の問いかけに神坂さんはそう答えた。

そして、俺は朝、神坂さんが珍しく時間ぎりぎりにやってきた事を思い出した。

それは朝のHRが始まる前の事だった。

あの後浩介と、傷だらけの八子と合流して教室に入った。
傷だらけの八子を見ただけであの後どんな目に遭ったのかがわかってしまった。

まあ、八子に関しては自業自得としか言いようはないが。

そこで気付いたのはいつも、俺が来るといつも俺達より早く来てい

る神坂さんがまだ教室に来ていない事だった。鞆もないことから、何らかの用事でどこかに行ったという線は考えにくい。

「あれ……春姫ちゃんは？」

準が不思議そうに俺に訪ねてくる。

「さあ？」

そして神坂さんが来たのはHRが始まる1分前だった。

ガラー！！

ドアの開く音と共に息を切らしていた神坂さんが教室に入ってきた。

「はあ、はあ……」

「おはよう神坂さん」

「はあ、はあ……おはようございます。小日向くん」

走ってきたためなのか、神坂さんは息切れしていた。そして、息を整えると、俺に挨拶をした。

「珍しいわね、春姫ちゃんが寝坊するなんて」

準も珍しそうにそう言った。

「心配かけてごめんなさい、準さん」

キーンコーンカーンコーン

そしてHRは始まった。

朝遅刻したのはこれが原因だったのか。

「先ほどのかく乱は……これを隠すための布石だったというのか……!!」

「結界の発動から上条君の目をそらしておく必要があったの……気付かれたら、発動システムごと切り捨てられちゃうもの。でも、これで勝負ありかしら……!!」

神坂さんはこれで終わりだと確信したが……。

「フフフ……それはどうかな？」

「えっ!？」

「うおおおおっ!!!!!!」

信哉が雄叫びをあげながら、マジックワンドを振り上げる。それと同時にゴーという地響きも聞こえた。

まさか!!

「う……嘘でしょ……!？」

「はあああああああっ!!!!!!!!」

その瞬間結界が破られた。

神坂さんは信じられないと言った表情で信哉を見ていた。

そのぐらいの荒業なのだ。

どのぐらいの荒業かというとトントトラックを生身の人間で持ち上げるぐらいのものである。

「く……うう……!!」

しかし、結界から脱出するために力を使いきってしまったのか、信哉はよろめく体を支えるので精一杯の様子だ。

「まさか……それほどの力を……」

神坂さんは驚いたようにつぶやいた。

「さすがね……けれど残念ながら、もう力は残っていないでしょう？」

神坂さんがそう言った瞬間だった。

第25話 交戦(前) (後書き)

かなりきわどいところで区切りましたが、続きは続編にて。

それでは後編でお会いしましょう

第25話 交戦（後）（前書き）

というわけで後篇です。

どこまでも原作通りなわけではないです！！

第25話 交戦（後）

「ほう、ここまでやるとはさすがだな」

森の中に声が響き渡った。

「っ……！？」

神坂さんは驚いた表情をした。

まさか、この声は……。

「御苦労であつたな、信哉」

それはよく知っている人物の声だった。

そしてその声を出した人物が、姿を現した。

その力の先にあるもの 第25話「交戦（後編）」

その人物は髪の色は特徴のある銀色で目は赤く、背中には傘のようなマジックワンドがある。

そして頭には白い羽がついた帽子、そしてワンピースタイプの魔法服を着ていた。

「伊吹！！こんなところで何やってるんだ？」

俺はその人物、『式守伊吹』にそう言った。

すると、伊吹は目を細めて俺を見る。

「小日向の兄よ、それはそなたが知る必要のない事だ」
「そりゃそうかもしれないが……でも」

俺にも関係があると言おうとした時だった。

「小日向くん……」

神坂さんが唐突に俺の言葉を遮り、前に出た。

「そなたが……神坂春姫か……？」

そんな神坂さんにも動じずに伊吹は神坂さんに問いかけた。

「ええ、そうよ」

神坂さんがそう答えた。

「その神坂春姫とやらが、どうして邪魔をする？」

そして、伊吹は神坂さんにさらに問いかけてきた。

「どうしてって……、それは、学園の秩序を乱そうとするものを黙
って見過ごすわけにはいかない……」

神坂さんはそうきっぱりと答えた。

「そうか、ならば安心せよ、私は別にこの学園の秩序を乱そうなど
とは思っておらぬ」

しかし神坂さんは食い下がらなかった。

「だけど、実際に魔法科校舎を……」

「残念ながらあれは事故だ。それに校舎を破壊したのは私でもなければそこにいる信哉でもない……」

伊吹は神坂さんにそう言った。

しかし伊吹の言った事には矛盾があった。

「じゃあ一体誰が……?」

そう、伊吹が校舎を破壊したのでなければ一体誰が校舎を破壊したのだろうか?

「私の目的を阻止しようとした学園の関係者だ……。その邪魔さえなければ今頃はこの学園になど用はない」

伊吹は、呆れた口調で神坂さんの問いに答えた。

「……」

そんな伊吹を神坂さんは睨んでいた。

「そのあなたの目的は……一体何なの……?」

神坂さんはこの問題の格である質問をした。

「それはそなたらが知る必要はない……」

伊吹はそんな神坂さんに対しそう言った。

「まあ、だがここまで話したなら教えてやろう。私の目的は式守家に伝わる『秘宝』だ……」

どうやら、ここに秘宝があるのは間違いないらしい。なら……。

「何で式守家に伝わるものが、この学園に……」

そう、通常は式守家の物は式守家の土地で管理するはずだ。だが秘宝はこの学園の敷地にある。

「さあな、だがそんな事はどうでもよい」

伊吹はそう言うと神坂さんを睨みつけた。

そして、伊吹の言った事に俺たちは衝撃を受けた。

「確かなのは神坂春姫……そなたの母親から式守が奪った『秘宝』を奪い返さねばならねという事だ!!」

「ええっ……?」

「神坂さんの……お母さん……?」

神坂さんの母親が秘宝を奪った?

しかし、ここで疑問が一つ浮かんだ。

なぜ浩介はその事を言わなかったんだ?

浩介は秘宝については認知していた。

つまり、浩介は秘宝に関する事柄はすべて知っていたことになる。

しかし浩介はそのようなことを口には出さなかった。

浩介の策略なのか?

それとも別の何かがあるのか?

俺の頭は混乱していた。

「何を惚けた顔をしておる、あの女から何も聞かされておらぬのか？まあ良い……どちらにせよそなたとは戦わねばならぬ運命にあったのだ。ならば今！！この場で相手になってやるとしようぞ！！」

そう言った瞬間伊吹の体から発せられる威圧感が俺たちを襲った。本能的に危険を感じる。

「ちよつ、ちよつと待つて……！！」

そして神坂さんもその威圧感のために弱気になってしまった。

「ふん、怖気づいたか神坂春姫……私を失望させるなよ」

不敵な笑みを浮かべた伊吹が前に歩み出る。

場を圧倒する魔力

その威圧感俺にもはっきりと伝わってくる。

「!?!」

俺はふと周りを見渡してようやく気付く事ができた違和感にさらに混乱させられることになった。

そう、いないのだ。

唯一伊吹を抑えられるかもしれない浩介が。

「ここを通すわけにはいかない……だから、戦うしかないわ……」

格の違う相手……それは俺にも容易に想像できる。

信哉でさえもあれほどの力を見せた。

であればそれを従える伊吹の力は……。

「神坂さん……」

俺は神坂さんを止める意味も含めてそう呟いた。

「わかってる。でも……引くわけにはいかない」

そして聞こえていたのか、神坂さんはそう言ってきた。

「小日向くんは安全な場所において」

「あ、ああ……」

俺は神坂さんに言われたようにした。

今ここで魔法を使っても良いが、相手に全ての切り札を見せると後になって大変なことになる。

という事を昔浩介に教えられた。

そして神坂さんは伊吹に向かってワンドを構える。

「エル・アムダルト・リ・エルス……」

いつもより緊張した面持ちで神坂さんは呪文を唱える。

「デイ・ルテ・エル・アダファルス!!」

ゴーという音を立てながら炎は伊吹に向かって走る。

「……ラ・デイバス」

「えっ？」

伊吹の呟いた一言で、神坂さんの魔法がいきなり消滅してしまった。

「どうした？こんなものなのか、神坂春姫の魔法というのは……」
「くうっ……」

伊吹にはまだ余裕の表情があつた。

「こないのか？ならばこちらから行くぞ……。ア・グナ・ギザ・ラ・
デライド……」

伊吹が呪文を唱え始めた途端に上空に赤みを帯びた球が大きくなり、
そして……。

「ラ・ディーエ」

伊吹の最後の呪文と共に大きい球は、魔法陣へと姿を変え恐ろしい
勢いで光の矢が降り注ぐ。

これはまさか……天蓋魔法か！？

「デイ・ラティル・アムレスト！！」

信哉と闘った時に出した、防御魔法。
それを今度は周囲に張り巡らせる。

「くうっ！！」

ドーンという音とともに光の矢は防御魔法に当たった。
伊吹が力を抜くとともに、神坂さんを襲っていた矢も止んだ。

「……っ！はあっ、はあっ……」

しかし、神坂さんは息が切れていた。

「今を防いだ事、それはほめてやろう。だが、それが精いっぱい
のようだな……」

「くっ……、エル・アフラシア・ラル・セイレス……」

神坂さんは再び詠唱を始めた。

「アデムント・アス・ルーエント！！」

神坂さんは伊吹に向かって魔法弾を打った。
しかし……。

「……ラ・デイバス」

先ほどと同様、神坂さんの放った魔法はあっさりと伊吹に消滅され
てしまった。

「……っ！」

「この程度か……。残念だ、余興にもならぬ」

伊吹は呆れた表情でそう言った。

「ア・グナ・ギザ・ラ・デライド……」

そして再び空に魔法陣が浮かび上がる。
しかし、その魔法陣は前と違っていた。
大きさが先ほどのより一回りに大きく、さらに見た感じでは威力も

倍になっている。
もしこんな物を喰らったら……。

「神坂さん!!」

俺はそう考えた瞬間叫んでいた。

神坂さんは呪文を唱え始める。

その様子を、伊吹は冷ややかに見つめる。

「行くぞ……」

そして……

「ラ・デーエ!!」

最後の呪文で再び光の矢が降り注ぐ。

ドンという音と共に7発の矢が降り注ぐ。

「……っ!!……アデムント・アス・ルーエント!!……くっくっ
!!」

神坂さんは防御魔法を発動させたが……。

「か、神坂さん!!」

しかし、神坂さんを襲う光の矢は一向に止まらない。

神坂さんは伊吹の魔法を防ぐだけで精いっぱいだ。

反撃をする余裕なんて全くない。

このままじゃ……。

「うっうっ……」

神坂さんが苦しそうな表情を浮かべる。

「どうした、このまま終わってしまうのではあまりに味気ないではないか!!」

「止める!!もうやめろ、伊吹!!」

俺は止めようと思い、伊吹に叫んだ。

しかし……。

「まだいたのか、怪我をせぬうちに立ち去った方が身のため……っ!!?」

突然、伊吹の魔法攻撃がやむ

なぜ止んだのかが疑問に思ったがそれはすぐに分かった。

「はあああああ!!」

その声は上空から聞こえた。

次の瞬間……。

シュン

何かが空にある魔法陣を貫いた。

そして……。

ガチャーン

魔法陣がまるでガラスのように割れた。

「な!!!」

伊吹は驚いていた。

それは俺や神坂さんも同じだった。

そして、そこにいた人物に俺たちはさらに驚くことになった。

浩介Side

「っ!!!」

神坂さんに向かおうとする信哉に対して、僕が不意打ちで攻撃魔法を放った事を雄真に伝えた後のこと、僕は何かを感じた。

しかもそれは一歩間違えれば、“時”を破滅に導いてしまう存在だ。

だから僕は誰にも気づかれないうちにその場を離れた。

それからしばらく僕は森の中を歩いた。

ガシヤッ

そして草木を踏んだ時に出る音が聞こえた。

どうやら僕の考えは正しかったらしい。

そして、その人物は姿を現した。

「こ、浩介!?!」

そうその人物とは、柘杏璃であった。

「あなた、一体ここで何やってんのよ!!」

柘は僕にそう言った。

「それはこっちが聞きたい」

そして僕は逆に柘に聞き返した。

「あ、あたしはなんかものすごい魔力を感じてこっちに来ただけ」

どうやら柘は魔力を感じてここに来たみたいだった。

「ところで、浩介は何が起こっているのかを知っているのよね、あたしをそこに案内して!!」

柘は僕にそう言った。

しかし僕は……。

「悪いが柘をここから先に連れて行く事は出来ない」

僕はきつぱりとそう言った。

「な、何でなのよ!!」

予想どおりに、柘はそう叫んできたが、僕はどうしてもここを通すわけにはいかなかった。

「そんなの簡単さ、“時”はまだ柘杏璃が出ることを望んではいな

い

そう、まだ出てきてはいけないのだ。

「時”が満ちるのを待つてから出てきても別に遅くはない」

『時”が満ちぬ時、その事象を起こし時の果ては永遠の破滅なり』

これが僕が今まで見てきた結果だ。

”時”が満ちていないにも関わらずに物事を起こしたため、時は歪みが入りそして破滅した。

この不幸を起こさないようにすることこそが、僕が出来る精一杯のことだった。

だからこそ僕は柊を通すことは出来なかった。

これが僕の理由だった。

「……？わかったわ。あたしは帰るけど、その代わりにあんたは二日後の放課後、森の方に一人で来ることいいわね？」

柊は僕の言った事が理解できなかったようだが何とか引き下がってくれた。

しかし、そのような条件でよいのだろうか？

昔から僕はこんなふうに条件を出された事があつたが、なかには私の奴隷になれや俺の家来になれなど、信じられない要求を出した馬鹿者がいた。

そういう目にあつた僕から見れば柊のこの提案は非常にありがたいものだった。

ちなみにこのような要求をした馬鹿者には、抹し……丁寧に注意し

た。

「わかった」

だから僕は柊の提案を承認した。

しかしこの時の僕にはこの条件が大変なことになるものだとは予想もしていなかった。

もし予想が出生きていればあのようなことにはならなかっただろう。

「それじゃ、気を付けてよね」

「そっちこそ」

そして、柊は帰って行った。

「さて、出てきたらどうだ？そこにいるんだろ、御薙鈴莉」

俺は柊との会話の途中に感じていたもう一つの気配の人物に声をかけた。

「あら、よく私がここにいるのがわかったわね」

「でも今のあなたの立場では、先生というべきでは？」

御薙鈴莉……いや、御薙先生は僕が先生の居場所を突き止めた事を感心していた。

「さて、私はこの先に行きたいのだけど……ダメかしら？」

先生はそう聞いてきた。

さっきの話の流れなら普通ではダメというが……。

「いいですよ」

僕はそう答えた。

「あら、良いのかしら？ 柊さんの時はダメと言っていたのに」

それもそうだ、普通の人から見れば依怙鼻屑に見えるかもしれないがそれは違う。

ちゃんとした理由がある。

「御薙先生は”時”を動かす為の重要な人だからです」

そして僕は続けた。

「神坂さんたちはここから2時の方向に少し歩いたところにいます。今神坂さんは生命的危機にある。僕が特攻して時間を稼ぐので、先生は転移魔法やそのほかの魔法を使わないで、なるべく早く来てくください」

僕は先生に知っている限りの情報を言った。

「なぜ、魔法を使つてはいけないのでしょうか？」

その質問は正しい。

早く行かないといけないのなら、転移魔法を使う方がいいだろう。

「しかし、転移魔法を使えば、数秒の硬直状態が発生します」

そう、転移魔法特有の弱点であるのはほんの数秒間動けなくなつて

しまつ。

しかし、普通ではこの硬直状態はあまり問題にならない。

「僕たちはこれから、戦闘中の真ん中に飛び込むですよ？そんなところに飛び込んだら、僕たちは硬直状態になり敵から攻撃を受けることになります」

今言ったように硬直状態で攻撃を受けるリスクがあるため、危険なのだ。

危険性はそれだけではない。

硬直状態の時に攻撃を受けるとそのダメージが致命的な物になる可能性があるのだ。

「しかし……」

「……突然僕たちが現れた事に驚いて向こうにもこつちを攻撃するまで少しの時間はある」

僕は御薙先生が考えていることを先に言った。

「えっ!？」

僕の言った事が凶星なのか御薙先生は驚いていた。

「そう言いたいのであればそれは間違いです。確かに相手は驚くかもしれませんが、もし相手が天蓋魔法を発動していたら僕たちは前言っていた事と同様になります」

確かに僕たちが急に表れれば敵は驚くかもしれないけど、相手が天蓋魔法を発動していたら、僕たちはその天蓋魔法の餌食になってしまう。

そして御薙先生は少し考えそして……。

「わかったわ。私はなるべく早く行きますから何とか頑張ってくださいね。」

御薙先生は了承してくれた。

「分かりました。御薙先生」

そして僕は思いつきり息を吸い……

「は!!！」

僕は地面を蹴って軽く500mくらいジャンプした。

これが魔族の特殊な力の一つである、身体能力の発達である。

僕は上空に留まりながら敵を探した。

そして、敵はすぐに見つかった。

僕の予想どおりに敵は天蓋魔法を発動していた。

僕は敵が発動している天蓋魔法の上空に移動すると縦に3回転し、その場に留まった。

そして手っ取り早く両腕に破滅系の魔法をかけ、両手を頭上で重ねて、その魔法陣に向かい突撃した。

「はあああああ!!！」

そして、魔法陣を貫いた。

浩介 Side End

「大丈夫か？雄真、神坂さん」

そこにいたのは、浩介だった。

「ああ、俺は大丈夫だ」

「わ、私も……………なんとか」

「さて」

浩介は俺たちの返答を聞くと、伊吹の方を向いた。

「弱い者いじめはダメだと思うぞ、伊吹」

「お、お主は何者だ！！」

伊吹は驚いた様子で浩介にそう言った。

さすがの伊吹も余裕な表情が消えていた。

「僕？僕は普通の魔法使い、大森浩介だよ？」

いや浩介、魔法陣を貫いて普通は通じないぞ。

それに、大森じゃなくて高月なのだが…………。

「魔法陣を貫いて、普通とは言わぬ！！」

「こんなことぐらい普通に伊吹もできるだろ？」

「出来ぬわ！！」

「あはは、まあまあ落ち着いて、伊吹ちゃん」

「伊吹ちゃんと呼ぶでない！！」

なんか伊吹が浩介に遊ばれていると思うのは気のせいかな？

浩介 Side

とりあえず天蓋魔法は破壊したが、僕は正直まずいと思った。相手もこつちの力について気づき始めている。

御薙鈴莉もまだ来ていない。

もはや、絶体絶命。

僕が『高月家』の長男である事を伊吹に知られてはいけないのだ。だから僕は、僕が得意とする破滅系の、『空気ブレイカ』という力を使っているのだ。

この空気ブレイカは何気ない会話で相手に本題を忘れさせ、さらに自分のペースに引き込む心理術だ。

でもこれも長くは続かない。

僕のペースを維持するには、かなりの力がある。

早く御薙鈴莉が来ないと……。

そして僕は、また奮闘するのであった。

浩介 Side End

一体浩介はどのくらいしゃべれば終わるのだろうか？
しかも浩介のやり取りが、すももに似ているし。

でもなんだか、浩介に焦りの色が見え始めた。どうやら浩介は、伊吹の戦意をなくしているらしい。しかし、俺も時間の問題と思っただ時だった。

「そこまでよ!!!」

凜とした女性の声が聞こえてきた。

俺たちはその声の方に振り向くと……。

「先生!!!」

そこには鈴莉母さんがいた。

「何とか間に合ったようね、神坂さんも小日向くんも、浩介君も大丈夫だった?」

そして、伊吹は御薙先生を見ると怪しげに笑った。

「ようやく現れたな、御薙鈴莉よ……。娘の危機を見過ごせなんだか?」

「ええっ!!!」

俺たちは驚いた。

「娘って……神坂さんが……!?!?」

神坂さんが鈴莉母さんの娘?そんなこと初めて聞いた。さっきの伊吹の言葉からすると『秘宝』を奪ったのは鈴莉母さんってことなのか?

「ま、待って！！あなたがどうしてそう思うのかわからないけど、先生は私のお母さんじゃないわ」

神坂さんは驚いた口調でそう言った。

「シラを切る気か？親子にあらねばかほどに魔法は似はしまい。だからこそ私はそなたと手合わせがしたかったのだよ！！」

伊吹は神坂さんが嘘を言っていると思っっているようだ。

「本当なのか、先生と神坂さんが親子なんて……姓だって違っし……」

「そう……誤解よ伊吹さん。私と神坂さんの呪文が似ているのは偶然に近いんだから」

鈴莉母さんはきっぱりとそう言った。

そくだよな、神坂さんの母親が鈴莉母さんだなんてことはあり得ない。

「私の子は、そこにいる小日向雄真くんよ！！」

鈴莉母さんの言葉を聞いた瞬間伊吹は驚愕の表情になった。

「え！？」

俺はあまりの事に自分の耳を疑った。

何で、今それを言うのかが分からなかったからだ。

「私の息子は紛れもなく……今ここにいる雄真くんよ」

そして、鈴莉母さんはなぜか笑顔だし。

「惑わされるものか!!こんなろくに魔法も使えぬ男が、そなたの息子であるはずがなかるう!!」

伊吹は鈴莉母さんが言った事を信じていないみたいだった。

「いいえ、雄真くんは魔法を使えるわ」
「……」

伊吹は黙ったかと思うと、俺を睨みつけた。

「もしそなたの言葉が事実だとすれば……私が討たねばならぬのは神坂春姫ではなく、小日向雄真だという事になるな」

そうだ。

話の流れだと次は俺が狙われることになる。

俺も自分の力がどのくらいかはわからないが、今までのを見るとかなり危険だ。

「もちろん。だけど雄真くんに手出しする事は私が許しませんけど……」

しかし、俺の不安は鈴莉母さんによって何とかなくなった。

「ふッ……面白い、ここで決着を付けるか？」

伊吹は鈴莉母さんを挑発したが……

「私にはあなたと決着をつけなくちゃいけない理由なんて何も無い

「……」

「……」

伊吹は少し考え込む。

「いや……今日はやめておこう、確かめねばならぬ事も出来た事だしな。そなたとの決着はいずれ日を改めてつける事にしようぞ」

そして伊吹の姿は消えた。

「……！！来るわ！二人とも私のそばに来て頂戴！！」

鈴莉母さんは険しい顔になって俺たちに言ってきた。

「小日向くん、こっちに！！」

「分かった」

そして俺が鈴莉母さんのそばに行った時だった。

「ア・デイバ・ダ・ギム・バイド……」

伊吹が呪文の詠唱を始めた。

「ル・サージュー！！」

ドンという音と共にひと固まりの魔法弾が俺たちに向かってきた。そして、鈴莉母さんは手をかざした。

「……デイ・ラティル・アムレスト！！」

防御魔法の呪文を唱えると同時に、伊吹の魔法とぶつかりあい……
つんざくような音と共に両方の魔法は消えた。
そして、伊吹たちは本当に姿を消した。

「ふう、本当に間に合ってよかったわ」

鈴莉母さんは緊張を解いてそう言った。

「それじゃあ、あとは若い者同士で」

そう言うと鈴莉母さんは森から帰って行った。
浩介の姿を探したが、どこにもいなかった。

「とりあえず、帰ろうか」

俺は神坂さんにそう言った。

「そうね」

そして神坂もそう返したので俺たちは帰ることにした。

第25話 交戦（後）（後書き）

今回は少しでも恋愛小説に近づけるのかに挑戦したいと思います。

第1章もいよいよ佳境。

よろしくお願いします。

それでは、第26話でお会いしましょう

第26話 この気持ちをあなたに（前書き）

今回は今までの暗い雰囲気を変えてちょっとぴり甘い感じですよ。

とらににやぶ、やにん。

第26話 この気持ちをあなたに

4月20日

キーンコーンカーンコーン

昼休みになった。

今日はすもも特性のお弁当を食べることにした。

普通の昼食はほんの数分で食べ終わるものだ。

あとは準たちと雑談でもして過ごすのが日課だ。

「そう言えば、今日も春姫ちゃんの様子変だったわね」

と口を開いたのは準だった。

それは今朝のことだった。

朝教室に入って隣の席にいる神坂さんに挨拶をしたところ、目を回しながら後ずさりをしてどこかに逃げてしまった。

しかも今日で二日目だ。

明らかに原因は俺の魔法にあるのだろう。

しかし俺の魔法が原因となることはあまり思い浮かばないのだ。怪我をさせたわけでもない。

それにもし避けるのであれば魔法使いであることが分かった次の日つまり4月19日に今日と同じことをしていなければおかしいのだ。

だが、今日はさらに深刻かもしれない。

教室を出ていった神坂さんはあれつきりまだ戻ってきていない状態だった。

さらには浩介までもその次の休み時間に教室を出たつきり戻ってこないという始末だった。

準たちからは見守っていきましょうと言われた。

あとはなぜ神坂さんが俺を避けるのかを知ればいいのだ。

俺はそう思い昼休みを過ごすのであった。

その力の先にあるもの 第26話「この気持ちをあなたに」

― 浩介 S i d e 1

僕はとある場所に神坂さんを探して来ていた。

本当は彼女が教室を出て行ったときに追いかけたかったのだが、追いかけようとしたら先生が入ってきた。

しょうがないので1限だけ受けて後はこの通りである。

「何をしているんだ？神坂さん」

そして、僕は神坂さんを見つけた。

彼女の魔法波動を調べればすぐにたどり着けてしまうのだが。

「高月君。……ちょっと考え事をね」

やはり、予想していたが濁した回答だった。しょうがないので読心術を使うことにした。

とりあえず神坂さんに許可をもらって（読心術の事は話していないが）横に座って目を閉じた。

そして神坂さんに向けて意識を集中する。

そして、神坂さんの心に入り込むことが出来た。

この読心術は僕が一番使いたくない魔法だった。

高月家の者は常に嘘を見破る力を要求される。

だからこそ読心術を学ばされるのだ。

「神坂さん」

「はい」

僕は会話から、彼女の心の奥底を読む事にした。

「この二日間神坂さんの行動はおかしかった。まるで誰かに近づかないようにするためのように」

「……」

神坂さんは僕の言葉に耳を傾けていた。

「避けていたのは雄真からでしょ？」

「……！！」

神坂さんが息をのんだ。

その瞬間彼女の頭の中に新しい思念体が現れたのを感じた。

僕の方でも一応事情は知っているが、彼女の思いまでは知らないの
で、さらに話を進める事にした。

「なぜ避けているのか、それは神坂さんの初恋の人と関係があるのか？」

「……！！！」

試しに現れた思念体を口にしてみると、神坂さんが息をのむのと同じ時にさらに思念体が入りこんできた。

「その人物に初めて会ったのは公園でその人物が、使っていた魔法の術式も雄真と同じ」

「……！！！」

神坂さんが再び息をのむ。

どうやら今ので全てだったらしい

「どうして分かったの？」

と、今まで口を開かなかった神坂さんが話し始めた。

「申し訳ないがこのままでは埒が明かれないと思ったので読心術で神坂さんの心の中を見させてもらった」

「そう……なの」

彼女は途切れ途切れに返してきた。

そして、彼女が胸に秘めている思いを話し始めた。

どれくらいの時間が過ぎたのだろうか。

何回もチャイムが聞こえた。

時間的に次のチャイムで放課後だろう。

神坂さんの思いは、やはり僕が予想していたものだった。

「神坂さんの知りたい答えは僕がすでに知っている」

僕は神坂さんの話を聞いてそう答えた。

「そ、それは本当なの!？」

神坂さんは驚いたように聞いて来た。

「もちろんだ。僕を誰だと思っている?それに監視をする対象者と繋がっている人物のところには居候でもしたら、ばれてしまう危険性もある。僕はそんな危険なことはいらない」

僕はそこまで言うと一旦区切った。

「それが答えだ。あとは神坂さんが勇気を出して雄真に聞くだけだ」

僕はそれを言うと神坂さんの方を見た。

「でも……」

神坂さんは雄真に聞くことを躊躇っていた。

「僕でよければ手助けをしてもいいが？」

僕はそんな彼女にそう言った。

「本当に？」

神坂さんは僕にそう聞いて来たので僕はそれに頷いて返事をした。
こうして僕たちは動き始めるのであった。

I 浩介 Side End I

キンコーンカーンコーン

6限目の終了を伝えるチャイムが鳴った。
とうとう神坂さんは戻ってこなかった。

「雄真」

そんな時、俺を呼ぶ声があった。

声のした方を向くとそこに真剣な面持ちの浩介がいた。

「浩介、一体今までどこに行ってたんだ？」

俺は浩介にそう聞いた。

「それは置いといて、神坂さんから手紙を預かっている」

俺は浩介の言葉に息をのんだ。

浩介の話だと神坂さんと会ったみたいだ。

「それじゃあ、約束があるので失礼」

浩介はそう言うと教室を出ていった。

その手紙にはこう書かれていた。

『放課後、屋上で待っています』

そして、俺は屋上に続くドアの前にいた。

俺は屋上に続くドアを開いた。

屋上は夕焼けの光で覆われていた。

そして、そこに魔法服を着た神坂さんがいた。

「来てくれたんだ……」

神坂さんがそう言った。

「びつくりしたよ、いきなり行方不明になるもんだから」

「ごめんなさい、心配かけて」

俺の言葉に対して神坂さんが謝った。

神坂さんの表情には何かを決心したような印象を持った。

「それでこんなところに呼び出してどうしたんだ？」

俺はとりあえず春姫にそう切り出した。

「うん……ちょっと見てほしい魔法があるの」

「魔法？」

俺の言葉に神坂さんが無言でうなずくとソプラノを手にとって構えた。

「エル・アムダルト・リ・エルス・デイ・ルテ……」

「え……？」

俺は驚いた。

神坂さんの口から紡ぎだされた呪文は俺の良く知っているものだったからだ。

そしてなぜか今の神坂さんの姿が昔、俺が助けた少女と重なった。

「……カルティエ・エル・アダファルス」

終結の呪文と共に目の前に完全に制御された、優しい光が広がった。

その呪文は元々攻撃魔法だったが、その光には攻撃魔法という実感が持てないほどだった。
やがてその光は膨れ上がりあたりを優しい光が覆った。

「……」

俺達は何も言えなかった。

「今の魔法は？」

「私の初めて見た魔法。そして私が魔法使いを目指すきっかけになった魔法だよ」

俺の疑問に神坂さんが答えてくれた。

「そこに座って話しましょうか？」

「……ああ」

神坂さんがそう言うてきたので俺は頷くことにした。

「ごめん、今は小日向君の顔をまっすぐ見れそうにないの……だからこのままでいい？」

「分かった俺も神坂さんの顔を見ないようにする」

神坂さんのお願いに俺はそう答えた。

背もたれのないベンチに背中を合わせて腰掛けた。

実際、俺も混乱しているから神坂さんの顔をまともに見ることは出来ない。

「うん……ありがとう」

神坂さんはお礼を言うと話し始めた。

「あのね……私、好きな人がいたの。……ずっと。相手はね、私の初恋の人。もう会えるかどうか分からない、でもずっと忘れられない人」

そこまで話すと神坂さんは大きく息を吸い込んだ。

「今はもう無くなっちゃったけど、この近所によく遊びに行っていた公園があるったの。すももちゃんと仲良くなったのもそこなんだよ」

「すももがよく遊んでいた公園ならよく覚えている」

俺は神坂さんにそう言った。

昔、鈴莉母さんの所にいたころはよくその公園ですももと遊んでいた。

そしてその公園で俺の運命を分けたあの事件が起きたのだ。

「うん……ある時ね、近所の男の子たちに絡まれた事があったの。私は一生懸命睨み返していたけど。実際は足がすくんで動けなかった。そこにね、現れたんだ……彼が」

俺は息をのんで神坂さんの話に耳を傾けた。

「歳はちょうど私と同じくらいだった。いきなり飛び出してきて『やめろーっ！』って。でも男の子たちは次々に彼のことを離し立てたわ。それでも彼は私を背中に庇ったまま動じなかった」

神坂さんの言葉で昔のことが脳裏をよぎった。

神坂さんが話しているのは俺が昔体験したことと同じだった。

「相手は大勢だったから、きっとその子も私と同じようにひどい目にあわされる。そして私は怖くて、悔しくて、悲しくて……目を瞑った。そうしたらね、あの言葉が聞こえてきたの」

神坂さんは再び大きく息を吸い込んだ。

「『エル・アムダルト・リ・エルス・ディ・ルテ……』目を開けた私の世界は光でいっぱいになってた……。それが……。私が絶対に忘れることの出来ない……。大切な思い出」

神坂さんの話をすべて聞いた俺はやっぱりあの事件だと思っていた。だとしたら鈴莉母さんと同じ呪文を使ってもおかしくはないのだ。

「小日向君……なの？」

神坂さんが俺に不安そうに聞いてくる。

「あの時私を助けてくれたのは、小日向君だったの……？」
「一つだけ、聞いていいか？」

再び聞いてくる神坂さんに俺はそう言った

「……うん」

「もし俺がその初恋の男の子じゃないのなら、それでも神坂さんは俺の事を」

「好きだと言うのか？」と言おうとしたがそれは神坂さんの一言で

遮られた。

「好きだよ」

「え!?!」

俺は驚いた。

それほど今の言葉は衝撃だったのだ。

「私は思い出の男の子と小日向君を重ねていたから小日向君の事が気になっていたと思ったの」

神坂さんはゆっくりと言葉を紡ぎ出した。

「でもね、高月君のおかげでそれが違うってわかったの」

突然浩介の名前が出てきて俺は正直びっくりした。

そっか、浩介がいなくなったのはこのためだったのか。

俺はようやく浩介の意図が分かった。

浩介は俺達に見えない所でしっかりといくつも線を結んでいたんだ。

「私は初恋の男の子と重ねていたから小日向君の事が気になっていたらじゃないの。小日向君の事が好きだから……だから初恋の人であってほしいの」

春姫の言葉に心を揺すられた。

(俺はなんて馬鹿な奴なんだ)

俺はそう思った。

答えなんてものはもうすでにあったのだ。
だから俺は神坂さんに答えよう。
俺の答えを。

「神坂さん、俺もあなたの事が……ッ！！」

しかしその言葉は、突如感じた魔力によって遮られた。

「デイ・ラテイル・アムレスト！！」

すぐに俺と神坂さんの周りに防御魔法を張り巡らした。
その瞬間。

紫色の魔法弾が俺の張った防御魔法とぶつかった。

もし気づくのが遅かったら……そう思うと身震いがした。

「ちょっと無粋な登場じゃないか？伊吹」

俺はその魔法を放った人物にそう言った。

「ふん、そなたが御薙鈴莉の息子であったとはな、よくも騙してくれたな。それに何だ、そのくだらない茶番は？」

「何……だと？」

俺は伊吹の一言に怒りを覚えた。

神坂さんが俺には予想だにもしないくらいの覚悟と決意を込めて言った事をくだらないと言った伊吹に……。

「伊吹、今のは言いすぎだ」

俺は怒りを抑えてそう言った。

「うるさい。こんな茶番に付き合ってたのだ逆に感謝されたいくらいだ」

その一言で俺は完全にキレた。

俺はラジアを杖の状態に戻して伊吹に向かい構えた。

「ふふふ。私に戦おうとでも言うのか？」

それを伊吹は余裕そうに見ていた。

よく見れば伊吹のそばに信哉と上条さんがいた。

二人はすぐに前に出ようとしたが……。

「よい、小日向雄真ごとき、私一人で十分だ」

「しかし……」

食い下がらない信哉に伊吹はさらに口を開いた。

「女を楯にしていたのだ。所詮弱いに決まっている」

伊吹の挑発にも俺は動じない。

怒りに身を任したらすべてが終わる。

良い結果なんてなかったのだから。

「小日向君、私も戦う」

俺はそう言ってきた神坂さんを手で制した。

「いや、いい。これは俺と伊吹の問題だ」

俺は それに と続けた。

「今の俺は負ける気がしない」

それが俺の思っていたことだった。

さて、伊吹には人の思いを踏みにじろうとしたのだ。
たっぷりと灸を据えなければ。

「行くぞ、伊吹！！」

そして俺と伊吹の戦いは幕を開けた。

俺が今まで気付けなかったこの思いを、神坂さんに伝えるために。
そして俺の譲れぬ思いのために！！

第26話 この気持ちをあなたに（後書き）

最後の最後で戦闘に発展しました。

にしてもやっぱり私には恋愛系は向いていないなと思うのに十分な一話でした。

次回は戦闘&ちょい甘です。

それでは、第27話でお会いしましょう。

第27話 譲れぬ思いのために(前書き)

と言うことで雄真最後の見せ場(おい
伊吹戦です

第27話 譲れぬ思いのために

さて、俺はどうした物かと考える。

ああは言ったが、伊吹は強い。

そこで、俺はある技をやってみようと思ったのだ。

その力の先にあるもの 第27話「譲れぬ思いのために」

浩介が教えてくれた必殺技、それが高月家儀流だ。

もしかしたら、俺も使えるかもしれないと、考えたことから使ってみようと言っ事になった。

この高月家儀流は、浩介の家で代々伝わるもので、発動さえできればどんな相手にでも打ち倒す事が出来ると言う。

ただ、問題は俺がそれを発動させられるかだが。

「星空に浮かびし力よ、今我にその恩益を与えたまえ」

「な！？その詠唱は！！！」

伊吹が何かに気付いたが、俺はさらに呪文を進める。

「我が名の元に星よ、鉄槌の力となり、かの者に降り注げ！！儀流・特幕、星の裁き！！！」

俺の呪文が終わると同時に、上空に魔法陣が浮かび上がる。

これが、高月家儀流の天蓋魔法。

「どうする伊吹？今なら止められるが」

「ふん、天蓋魔法を発動させたくらいで調子に乗るではない」

俺の停戦の提案に伊吹はそう言うと、詠唱を始めた。

「ア・デイバ・ダ・ギム・バイト……」

どうやら伊吹は俺が天蓋魔法に全てを掛けている状態を狙って、攻撃してくるようだ。

だが、そんなことでやられる俺ではない！！

俺はみんなを幸せにする魔法使いになるという夢のために、努力してきたんだ！！

「ファイヤー！！」

俺の呪文が上空で待機している天蓋魔法の作動キーとなり、一斉に100を超える魔法の矢が放たれる。

それは前に見た伊吹の天蓋魔法とは比べ物にはならないほどだった。

「ル・サージュー！！」

伊吹は紫色の魔法弾を天蓋魔法に向けて放つ。

しかしすでに放たれていた、魔法の矢により阻まれる。

魔法の矢は止まることなく降り続ける。

「デ・オルナウム！！」

伊吹は数十発の魔法弾を出現させ、相殺していく。

「デイ・フォン・アダファルス！！」

俺はさらに攻撃魔法を放つ。

「伊吹様!!!」

信哉が前に出て、伊吹に迫る魔法の矢を弾いていく。

しかし今俺が放った魔法は、ただの魔法ではない。

たとえそれがゴルフボールくらいの大きさでも当たれば高ダメージだ。

そして、俺が生み出した魔法技術でもあった。

「フォーティエ!!!」

俺は、今発動している魔法全てに、強制加速の魔法を追加した。

「何!?!」

「く!!!信哉下がれ」

伊吹達にも余裕の表情が消えていた。

上空からは放たれる矢が、そして横からは、魔ほ弾が迫ってくるのだから。

ちなみに、はじかれそうになった際は横に避けて、再び襲撃をするようにしているので、それがさらに信哉に焦りを生ませる。

心理戦と、技術。

それが浩介から教えて貰ったすべての魔法だ。

相手を精神的に追い詰め、技術でさらに圧倒する。

俺は、浩介との練習でそれを得ていた。

確かに伊吹は強い。

でも、伊吹の最大のミスは相手を見破れなかったことだ。

俺の放った魔法が伊吹達に、命中したと思った時だった。

「幻想詩、第1楽章、混迷の森」

上条さんの奏でる音が、伊吹に迫ってきていた攻撃魔法を消し去った。

「小日向さん。私達には戦う気はございません」

「沙耶!？」

突然の行動に伊吹が慌てた。

「申し訳ございません伊吹様」

上条さんは伊吹に対して謝った。

「……っ!! わかった」

伊吹はそう言っているとマジックワンドを下した。

俺も戦う意思がないと思って、上空に待機させてあった天蓋魔法を解除した。

「伊吹がなぜ、鈴莉母さんに嫌っているかはわかった。しかし、それは鈴莉母さんと伊吹の問題だ。できれば、鈴莉母さんと伊吹とで話し合って解決してほしい」

俺は前から思っていた事を言った。

「……よかるっ、ならば小日向雄真、私の質問に答えるのであれば貴様を見逃してやるっ」

伊吹は俺にそう提案してきた。

「ああ、俺で答えられる限りなら」

俺がそう言つと伊吹は聞いて来た。

「さつき発動させた天蓋魔法……あれは明らかに普通の物ではなかったようだが、それは誰に教えてもらった？」

伊吹の質問は俺が思っていたよりも、かなり優しいものだった。

もちろんこの高月家儀流魔法を教えたのではなく見せたのは浩介だ。

俺は勝手にそれを使っただけだ。

「浩介からだ」

だから俺はそう答えた。

しかし、これが俺の犯したミスだった。

このミスが、俺達の運命を全て変えてしまう事になるつとは、今の俺達が知る由もなかった。

「なるほど、一応わかった。約束通りもう二度と私は貴様に御雑鈴莉の息子という事では攻撃しないだろう」

「ありがとう、伊吹」

どうやら俺の答えに満足したのかそう言ってきた。

「……行くぞ、信哉、沙耶」

「はっ」

そして3人とも去って行った。

とりあえずこっちは片付いたが、まだ片付いていないこっちの方を何とかしなければいけないと思い、俺の方に向かってきた神坂さんの方を見た。

「大丈夫！？雄真君」

神坂さんが慌てたように俺に聞いて来た。
というより、すでに呼び方が変わっている。

「怪我はしていないが、疲れた」

魔法を使うとなると魔力と精神力を大量に消費するため、疲れているのだ。

「神坂さん」

「はい」

しかし俺はどうしても伝えなければいけないのだ。
中途半端にされたこの思いを。

「俺はあなたの事が、好きです」

そして俺は伝えたのだ。

自分の思いを。

「私も雄真君の事が好きです」

神坂さんも俺の思いを受け取ってくれた。

「「あははは」

そして二人で笑いあった。

何もおかしいことも無いのに。

それは一言では言いきれないものだったが、今の俺達はとても幸せなのだと思う。

「これからもよろしくな、神坂さん」

俺は神坂さんにそう言った。

「こちらこそ。でもできれば私の事は春姫って呼んでほしいな」

神坂さ……じゃなかった、春姫は俺にそう言ってきた。

「そうだな。それじゃあ改めてよろしく、春姫」

俺は呼び方を変えて再び春姫にそう言つと手を差し出した。

「うん、こちらこそ。雄真君」

そして春姫は万弁の笑みで俺の手を握ってくれた。

浩介の言葉を借りて言つのなら、『止まっていた“時”は再びその“時”を刻みだした』と言つのだろう。

俺はそんなどうでもいいことを思いながら幸せな気分をかみしめていた。

この後に訪れるとんでもない出来事が起こるまでは。

第27話 譲れぬ思いのために（後書き）

ということでも伊吹戦でしたが、前半は戦いで後半がちょい甘なのは
なんだか微妙です。

次回は杏璃ファンの方ごめんなさいの会です。

それでは第28話でお会いしましょう

第28話 魔法使いの資格（前書き）

今回は杏璃ファンの方ごめんなさいの回です。
ちなみに私はアンチではありません。

それでは、どうぞ。

第28話 魔法使いの資格

「!?!」

幸せな気分をかみしめていた時、俺達は一瞬ではあったが、かなりの空間の乱れを感じた。

『マスター森の方で2名の魔法使いが戦闘中です!!』

ラジアが俺にそう伝えてきた。

「何だつて!!」

2名? 一体だれが……

俺は一瞬だが、いやな予感がした。

「行こう!! 春姫!!」

俺は、春姫に声をかけた。

「う、うん」

そして俺たちは急いで森の方へ向かった。

その力の先にあるもの 第28話「魔法使いの資格」

「雄真さんに神坂さん!!」

俺達が森の前までくると鈴莉母さんがいた。

「一体、何が起こっているんですか先生？」

春姫は鈴莉母さんにそう質問した。

「分からないわ。でも今まで感じ取れた魔力量から言っても、片方は危険な状態にあるわ」

鈴莉母さんは、真剣な表情で言った。

「何で片方が危険な状態って思うんだ？」

俺は鈴莉母さんに聞いた。

「それは片方しか魔法を放っていないからよ」

という事は……

「その片方の人は、魔法を受け続けている状態という事ですね」

春姫は俺の考えていた事を鈴莉母さんに言った。

「どうかは分からないけど、とりあえず行った方がいいわね」

そう言うと鈴莉母さんは森の方へ向かって行った。

俺たちも鈴莉母さんの後に続いた。

そして、しばらく森を進むとその二人は見つかった。

しかし、その光景に俺たちは頭を金づちで殴らたような衝撃を受け

た。
そう、そこにいたのは……

「浩介！！柊！！」

そこにいたのは魔法を攻撃し続けている柊と、その攻撃をかわしている浩介だった。

「二人ともやめなさい！！」

鈴莉母さんはそう二人に言ったが、二人とも聞かなかった。そして浩介はおもむろに動くのをやめると何かを呟いた。しかし、俺たちには何も聞こえない。

二人に近づこうとした途端、見えない壁によって遮られた。

「きっと結界が張ってあるのでしょう」

鈴莉母さんはそう言った。

「この結界を張ったのは高月君ですね」

春姫はそう言った。

しかし、ここで疑問がある。

なぜ、二人は戦っているのか？

そして、どうして浩介が結界を張ったのか？

俺たちにはその答えは出せなかった。

しかし、そうしている間にも状況は変わっていた。

浩介に向かって魔法弾を放つ柊、そして魔法弾が近づいているにもかかわらず避ける素振りを見せない浩介。

この場にいる全員、浩介に魔法弾が当たる事を予想した。

しかし……

浩介は魔法弾があたる少し前で何かを呟くと次の瞬間信じられない事が起きた。

何と柎の魔法弾が浩介をすり抜けたのだ。

柎の魔法弾はちゃんと命中したはずが、浩介の体をすり抜けてしまったのだ。

そして浩介は剣の形をしたクリエイトを大きく振ると、クリエイトが一瞬光り剣の形から浩介と同じ長さの杖になった。

浩介は杖になったクリエイト構えて何かを呟くと、クリエイトを柎に向かって投げた。

しかし、柎はそれを撃ち返しクリエイトは浩介の元に戻った。

だがその少しだけできた隙に、浩介の周りには黒いものが大量にできていた。

そして浩介は、何かを言うとその黒い靄を柎に向かって撃った。

おそらく無限烈火だろう。

「……………」

鈴莉母さんと春姫は目の前の光景に啞然としていた。

そして、柎は魔法弾を打ち出し、黒い霧に命中させた。

しかし、その魔法弾は消えてしまい黒い霧だけが近づいて来ていた。

そして、黒い霧は柎に当たり、柎は少しだけ飛ばされて倒れた。

浩介は息を抜いていたが、その時上から浩介に近づく影があった。

その影は浩介の妹の久美だった。

そして、浩介は久美と何かを話していたがその時、柎が立ち上がり何かを言っつて、魔法弾を乱発した。

浩介はその魔法弾をよけたが、久美に当たってしまった。

そして、久美は跳ね飛ばされ、動く素振りを見せない。

そして浩介は久美に近づいて何かを言うと、浩介は柎の方を向いた。

そして、浩介が何かを言うと柊が何かを言った。
そして、浩介はかなりキレた様子で、右手を上げて何かを言った。
次の瞬間、俺達は言葉にできない程の衝撃の光景を目の当たりにした。

何と柊の周りに黒い球体が表れたのだ。

そして、その黒い球体は一つの塊となって柊を飲み込み、次の瞬間にはその球体が爆発して柊は気に叩きつけられた。

その後、浩介が倒れている久美に手をかざして何かを呟くと、久美は動き出して浩介と一緒にこっちに向かって歩いてきた。

そして目の前の壁が消えたことから、結界は消えたのだろう。

「浩介！！」

俺は浩介の方に向かった。

「どうして、柊と戦っていたんだ！！」

俺は浩介を問い詰めた。

「……ここじゃ、まずいから場所を移してもらいたいのだが」

浩介はそう言った。

「分かったわ、じゃあ、私の研究室に来てくれる」

鈴莉母さんが浩介にそう提案した。

「分かりました」

浩介は了承したので俺たちは鈴莉母さんの研究室に向かった。

「それじゃあ、あそこで何があったのかを話して貰えるかしら？」

鈴莉母さんは研究室に入り俺たちがイスに座つたのを確認して話を切り出した。

そして浩介はあの時、森であつた事を話し始めた。

浩介 Side

放課後、僕は一昨日の約束した場所である、森に向かつていた。

「ん？あれは、雄真、それに伊吹！？」

僕は、その途中で屋上で向き合う二人の姿を見つけた。

僕は屋上の二人の会話を傍受する。

すると、とんでもない呪文が聞こえてきた。

「星空に浮かびし力よ、今我にその恩益を与えたまえ」

「この詠唱……まさか！？」

僕は理解した、これは『高月家儀流魔法・特幕、星の裁き』だ。

「何を考えてるんだ、あいつは！！高月家儀流魔法は高月家の者しか使う事が出来ないのに！！」

僕は怒り半分、焦り半分の中しようがないので、共同体を使う事にした。

この共同体と言うのは、高月家儀流魔法を扱う事が出来ない者でも扱えるようにするものだ。

ただし、それには僕が今ここで同じ技を同じタイミングで使う必要がある。

一か八かの賭けだが、僕はそれにかけて、呪文を唱えた。

「星空に浮かびし力よ、今我にその恩益を与えたまえ」

僕の早口の呪文でも、発動されようとしている。

「我が名の元に星よ、鉄槌の力となり、かの者に降り注げ!!」

そして、僕と雄真の詠唱が重なった。

「儀流・特幕、星の裁き!!」

そして同時に技の名前を唱えると、それは無事に発動した。

後は僕がコントロール権を雄真に渡しておくだけなので、簡単だ。

そして、僕は雄真にコントロール権を渡した後、森の指定された場所に着くと、柊を待った。

しばらくすると柊はやってきた。

「遅かったな、なにをしていたんだ？」

「……」

柊は僕の問いかけにもなにも反応しない。

「どっし……」

僕は不審に思い声をかけようとしたがそれは柀によって阻まれた。柀は僕にパエリアを突き付けると、高々にこう言った。

「浩介、勝負よ!!」

「はい?」

僕は一瞬言葉を失った。

「何でいきなり勝負になるんだ?」

僕は思った疑問をそのまま聞いた。

「それはあんたに勝ちたいからよ!!」

「意味が分からない」

僕は無茶苦茶なことを言う柀にそう言った。

「さあ、行くわよ!!オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタ
リアス・アウク……」

というより、もう詠唱を始めているし!!

僕も何かしないとまずい。

「*exitation, bresrein!!* 我を守りし癒しの神よ、
かの地に結界を張り巡らせよ、ダ・ビート!!」

とっさに思いついたのが結界の作成だった。

結界があれば他の人には被害はないはず。

しかし……

「エリートラス・レオラ!!」

単純な動きの割には、かなりの魔力が練りこんである緑色の魔法弾が向かってきた。

僕はそれを避けた。

「くっ!!」

「オン・エルメサス……」

しばらくはこれらの繰り返しだったが。

「もう頭に来た」

僕は体内に掛けているリミッタ を下げた。

これで、僕はいつもの2倍の力を発揮できる。

避けるからいけないのだ。

ならば避けなければいい。

僕はそう思うとその場で止まった。

そして、柵から魔法弾が打ち出された。

でも、僕は避けない。

そして、柵は自分が勝った気になっていた。

そして、魔法弾があたる直前に……。

「存在昇華!!」

僕はそう叫んだ。

その瞬間、魔法弾は僕を通り抜けた。

「存在昇華」

これは自分の体を一時的に実数化にするものだ。魔法とは数学で言えば有理数である。

ちなみに数字で状態の大きさを表すと、虚数 > 実数 > 無理数 > 有理数 > 整数 > 自然数という形である。

しかし、間違っではいけないのは、有理数は無理数になる事は出来ない。

つまり有理数よりも下の存在……つまり、整数と自然数にしか攻撃できないのだ。

この自然界にあるものや、人間を含めたものすべてが自然数となっているために、魔法の攻撃も通じるのだ。

だから、有理数よりも大きい実数化に体を一時的に書き換えれば、魔法攻撃を無効にすることができるのだ。

しかし、これは普通の人では使うことは出来ない。

普通の人間が実数の圧力に耐える事は非常に難しく、成功したのは僕以外には誰もいない。

だから、今の技は最強なのだ。

「う、うそ……」

柊は魔法がすり抜けた事に驚いているようだった。

しかし、ここで驚いていたんじゃない勝てない。

僕はクリエイトを柊に投げた。

その間に僕は自分の体に収めてある闇を集め、それを具現化する。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタリアス・アウク……」

柊は自分に向かってくるクリエイトに向かって詠唱を始める。

「エルートラス・レオラ!!」

さっきと同じ技でクリエイトをこっちに弾き飛ばした。

しかし、柊の魔法は弾き飛ばしていない。

先ほどこっそりと掛けていた、存在昇華中のクリエイトに魔法攻撃は効かないのだ。

僕は柊の魔法がクリエイトに当たると同時にレジストをして、クリエイトをこっちに戻したのだ。

それは僕の作戦が成功した証拠でもあった。

引き戻したクリエイトをキャッチして、キャッチした方の手とは反対の手で柊の方を指差して……。

「無限烈火!!!」

具現化した闇を、柊めがけて打ち出した。

僕の作戦は時間を稼ぐことだった。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタリアス・アウク・エルトラス・レオラー!!!」

柊は攻撃魔法を打ち出したが、僕の出したこの闇にそんなものは通用しない。

それを裏付けるかのように柊の攻撃魔法は黒い闇に飲み込まれた。

そして、柊に命中した。

「くっ!!!」

柊は少し飛ばされて、気を失ったようだ。

そして、僕は上空から久美が近づくのを感じたので、見上げてみるとやっぱり久美がこっちに來ていた。

「兄さん！！なにしているのー！！」

久美は少しだけ追い詰めるように言ってきた。

「あいつがいきなり勝負しろと言ったから、その相手をしてやっただけだ」

僕はありのままそう言った。

「とにかく、杏璃ちゃんは大丈夫なの？」

久美は心配そうな顔でそう言ってきた。

「ああ、今は気絶しているだけだからすぐにさめると……」

僕はそう言いかけて、柊が倒れている方を向いた。
するとそこには、気を失っているはずの柊が立っていた。

「あたしは負けない……負けるものか！！！！！！！！」

そう言うと柊は乱発に近い魔法弾を打ってきた。
僕はそれを何とかよけることが出来た。

「きゃーー！！」

「！！！！」

しかし不運にも久美に命中してしまった。

「久美！！大丈夫か！！久美！！」

久美はかなり飛ばされていたが、気絶しているだけなので安心した。
しかし……。

「なんて事をするんだ柊！！久美は関係ないだろ！！」

僕は柊に怒った。

「あんたが、負けないからいけないんじゃないの！！」

しかし、柊は僕が負けないからいけないと言ってきた。
この一言で僕はキレた。

ドクン！！ ドクン！！

心臓の鼓動が聞こえると同時に、僕は今までののが比ではないくらいの力があふれてきた。

「久美を傷つける者には天罰を下す！！」

僕は父さんからやってはいけないと言われた超強力魔法を展開した。

「深淵に眠りし闇よ、我が言葉に耳を傾けよ。罪を犯したかの者に天罰を下せ。我、高月浩介が命ず。その身をも滅ぼし闇よここに集え！！」

僕の言葉と共に周りが黒い闇で覆われる。

「闇の制裁！！」

そして僕はそれを発動した。
これはいくつもの闇の球体を相手の周りに浮かべ、相手を闇の球体に取り込んだ後に爆発するというものだった。
これを喰らえば破門にはできなくても、多少の痛みを与える事ができる。

そして、柊は闇の球体に飲み込まれてその闇の球体が爆発した。
柊はかなり飛ばされていたので、さすがに動けなくなったようだ。
僕はそんな柊を無視し跳ね飛ばされた久美の方に近寄ると、手をかざして周りに張ってあった結界の癒しの効果を久美に移した。
癒しの神によつて作られたこの結界は用途を変えれば回復魔法になるのだ。

「う……ん」

「目が覚めたか？久美」

僕は久美にそう言った。

「う、うん。大丈夫だった、兄さん？」

久美は心配そうな顔で聞いてきた。

「ああ、大丈夫だよ、柊はあそこに沈めた」

僕はそう言うと柊が倒れている場所を指差した。

「ほつといていいの、兄さん？」

久美がそう聞いてきたので僕は……

「いいんだ、負けたからと言って久美を傷つけるやつに、心配する
優しさなど持ち合わせておらん」

僕はきつぱりとそう言った。

「さて、この戦いを見ていた三人組になんて言おうかな」

僕はそう言って、啞然としていた雄真たちと合流した。

浩介 Side End

「……………」

浩介からあの時に起きていた事を聞いた俺たちは全員無言だった。

「高月君、一体杏璃ちゃんをどうする気？」

春姫が真剣な面持ちで浩介にそう聞いた。

確かに、高月家は魔法使いを破門する権利がある。

もし、柊が破門対象になったら……。

「大丈夫だ、あいつは破門にはならないだろう」

「ど、どうしてなんだ」

俺は浩介に疑問をぶつけた。

「どうしてもなにも、あいつには人を傷つける意思がなかったそれだけだ」

浩介は不機嫌そうに言うと立ち上がった。

「もう話す事はない、帰らせてもらおう!」

そう言って浩介は帰って行った。

そのあと俺達は解散することになった。

俺は春姫を寮に送って行った。

「それじゃあな、春姫」

寮の前で少しだけ話した後に俺はそう言って帰ることにした。

「うん、お休みなさい。雄真くん」

春姫は笑顔でそう言うと寮に入って行った。

そして、俺は家に帰った。

しかし、しばらく家に向かって歩いた時だった。

「雄真……」

そこにいたのは浩介だった。

「なんだ？浩介」

俺は浩介にそう言つと、浩介は明るい顔になり。

「神坂さんと付き合う事になったらいいな」

え、今何て言った？

「な、どうしてそれを！！」

俺は浩介に聞いた。

「ははははは！いいじゃないか、この幸せ者さん！！」

しかし、浩介は笑い飛ばしただけだった。

「まあ、今の内におめでとうと言っておく」

浩介は俺にそう言ってくれた。

「神坂さんを泣かすなよ、泣かしたら承知しないからな」

浩介はものすごい顔で俺に忠告してきた。

「善処するよ」

「それと高月家儀流を使ったようだな」

浩介からおもむろにそんなことを聞かれた。

「あ、ああ天蓋魔法でちょっと」

「一応注意しておくが、あれは高月家の者以外使ってはいけないものだ。もしばれたら、終身刑レベルの罪になるから気をつけるよ？」

「分かった」

浩介の忠告に俺はそう言っていると俺たちは家に帰って行った。

ちなみに、その日の晩御飯はなぜか俺だけがご飯とキャベツの干切りだけで、なぜかすももは不機嫌でありかーさんはそれを見て変な歌を歌っていた以外は普通の小日向家だった。
俺、何かしたか……？

(マスター頑張ってください)

杏璃 Side

あたしは森に向かっていた。

今日は、あいつと決闘をするつもりだ。

春姫から伊吹はかなり強いという事を聞いた。

そしてあいつ、高月浩介が伊吹が展開した魔法を一瞬にして、壊した事も。

だからこそあたしはあいつに勝って春姫を驚かせてやるんだと思っていた。

そして、その場所にはあいつが来ていた。

「遅かったな、なにをしていたんだ？」

「……」

あいつはあたしに不思議そうな顔で聞いてきた。
しかしあたしは答えなかった。

「どっし……」

あいつは不審に思ったのかあたしに声をかけようとしたが、あたしはそれを遮った。

そして、あたしはパエリアを突き付けると、高々にこう言った。

「浩介、勝負よ!!」

「はい?」

あいつは一瞬言葉を失っていた。

「何でいきなり勝負になるんだ?」

あいつはあたしにそう聞いてきた。

「それではあなたに勝ちたいからよ!!」

「意味が分からない」

「さあ、行くわよ!! オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタリアス・アウク……」

あたしは、意味を理解していないあいつを置いておき、詠唱に入った。

「*exition, bresrein!*!! 我を守りし癒しの神よ、かの地に結界を張り巡らせよ、ダ・ビート!!」

あいつは周りに結界を張り巡らしたただけだった。

あたしに負ける気なのか、それとも強さの表れかはわからない、でもあたしはやってみせる。

「エルトラス・レオラ!!」

そして、魔法弾をあいつに放った。

「くっ!!」

そして、あいつは軽々と避けた。

「オン・エルメサス……」

あたしは再び魔法の詠唱に入った。

しばらくはこれらの繰り返しだったが。

「もう頭に来た」

あいつがそう言った。

(ようやく本気を出す気になったのね)

しかし、あたしは知らなかった。

あいつの本気がどのくらいすごいのかを……。

そしてあたしは魔法弾をあいつに向かって打ち出した。

「存在昇華!!」

あいつがそう言った瞬間、魔法弾はあいつを通り抜けた。

何なのよ、あの魔法はどうしてあいつを通り抜けたのか。

あたしにはいろいろな疑問が駆け巡っていたが、それを考える暇はなかった。

「存在昇華!!」

さっきの呪文が聞こえた。
前を見ると、あいつの水晶玉があたしにめがけて迫ってきていた。
あたしはすぐに詠唱体制に入った。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタリアス・アウク・エ
ルトラス・レオラー!!」

そして、あたしは水晶玉をあいつに飛ばすことに成功した。
しかし、あいつは計画していたように水晶玉をキャッチしてもう片
方の手で、あたしを指差す……

「無限烈火!!」

そう言ってあたしにあの時の黒い霧を放った。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタリアス・アウク・エ
ルトラス・レオラー!!」

あたしは今度こそはと思い前よりも大量の魔力を込めて黒い霧に向
けて魔法弾を放った。

しかし黒い霧は、あたしの魔法を難なく飲み込み、あたしの方にス
ピードを落とさずに迫ってきた。

(一体何なのよ、あれは)

あたしはもはや、次の魔法を放つ事ができなかった。
そして、最後に見えたのは絶望を感じるほどの闇だった。

「う……く」

あたしは目が覚めた。

それと同時にあいつともう一人の声が聞こえてきた。

「あいつが……勝負しろ……から、その相手を……ただだ」

「とに……は大丈夫なの？」

どうやら、もう一人はあいつの妹の久美ちゃんだった。

……！！もしかしたら、チャンスかも。

あいつは今、妹との会話に気を取られている。

だったら、今不意打ちで攻撃すれば当たるかも。

「ああ、今は気絶して……らすぐにさめると……」

あいつはそう言いながら、あたしの方を向いた。

あたしはまずいと思ったが詠唱を続けた。

あいつは面食らったような顔をしていたから、もしかしたら成功するかも。

「あたしは負けない……負けるものか！！！！！！！！」

そう言うときあたしは魔法弾を打った。

あいつはそれを何とか避けた。

「きゃあー！！」

「！！！！」

しかし、久美ちゃんに命中してしまった。

「久美！！大丈夫か！！久美！！」

あいつは久美ちゃんに駆け寄り心配そうに声をかけた。久美ちゃんはかなり飛ばされていた。

「なんて事をするんだ柊！！久美は関係ないだろ！！」

あいつはあたしに怒った。

「あんたが、負けないからいけないんじゃないの！！」

あたしはあいつにそう言っただけだ。

あいつがよけなければ妹はけがを負わずに済んだんだ。しかし、そう言った途端あいつは顔を下に向けた。

すると、あいつからかなり強い魔力があふれてきていた。あたしは危険だと直感で思ったが、動かずにいた。

そして、あいつは顔を上げると。

「久美を傷つける者には天罰を下す！！」

あいつは怒った表情でそう言った。

「深淵に眠りし闇よ、我が言葉に耳を傾けよ。罪を犯したかの者に天罰を下せ。我、高月浩介が命ず。」

その身をも滅ぼし闇よここに集え！！」

あいつの言葉と共に周りが黒い闇で覆われる。

「闇の制裁！！」

あいつがそう叫んだ瞬間、周りに黒い球体が現れそれが一つになった。

そして次の瞬間あたしは黒い球体に取り込まれた。

そしてあたしは、再び気を失った。

「うつ……く!!」

あたしが再び目を覚ました時は周りは暗くて誰もいなかった。

あたしは重たい体を引きずりながら、森を出た。

もう夜になっていた。

その間あたしは考えていた。

あいつは人間ではない、あいつは自分を魔族と呼んでいたが、違う。

あれはまるで、生物兵器のようなものだった。

あたしはその心に深い絶望を持ちながら、寮に帰った。

杏璃 Side End

第28話 魔法使いの資格（後書き）

ということ、今回の話も物語には非常に重要なカギとなります。
次回あたりで杏璃が大活躍（？）するかもしれません。

それでは、第29話前半でお会いしましょう

第29話 真の魔法使い（前）（前書き）

ということ、前回の不穏な流れを変えたいと思います。
今回は杏璃が大活躍たぐんの回です

それでは、どうぞ。

第29話 真の魔法使い（前）

4月21日

今日は珍しく準たちがいないので俺とすももの二人で学校に向かうことになった。

「あれ、姫ちゃんじゃないですか？」

すももに言われてみると、そこには春姫の姿があった。

「ほら、兄さん。恥ずかしくてないで挨拶しましょうよ」

すももに促されて校門の前に立っている春姫に声を掛けた。

「おはよう春姫」

「うん、おはよう雄真君」

やっぱり付き合い始めて1日経っても恥ずかしい物は恥ずかしいものだ。

その後すももと別れて俺と春姫は教室に向かった。

その力の先にあるもの 第29話「真の魔法使い（前編）」

そう言えば、昨日の続きを話していなかった。

昨日のあのキャベツの千切り食事のあと、俺は土下座をしてすももに謝った。

どうやら、すももは何の相談もしなかった事に怒っていたみたいだ。しかし、春姫に告白されたのがその日の夕方なのにどうやってすももに相談をするのがよくわからないが、素直に俺は謝ることにした。

そうでもしないと、明日の朝食もキャベツの千切りになりそうだし。しかし、俺の土下座&謝罪が功を奏したのかすももは許してくれて今日の朝食はいつものになっていた。そして教室に着き、ドアを開けた瞬間俺たちを囲むように、人だかりが出来上がった。

「な、なんだ？」

教室に入るなり俺達を大勢の生徒が囲い込んだ。

俺は襲撃かと思いきや身構えたが、予想された襲撃はなかった。

「ほら、やっぱり雄真を待っていたんじゃないの？」

とそんな時俺の方に向かって近づきながら言ってきた人物がいた。

「準、これは何の騒ぎだ？」

俺は準にそう聞いた。

「記者会見よ」

最初俺は準の記者会見と言う意味がわからなかったが、それはすぐに理解することになった。

「雄真、正直に答えろよ。姫ちゃんと一緒に教室に入ってきたのは

偶然なんだよな？二人が付き合っているのはただの噂なんだよな？」

八チが悲願をするように聞いて来た。

正直に殴り飛ばそうと思ったがそれを抑えた。

「まあ……な」

「なぜ言葉を濁す!!」

別に濁した気はなかったのだが、どうやら八チにはそう取れてしまつたらしい。

八チに本当のことを伝えたいのだが、とどめをさすのもちょっとかわいそうだ。

「ごめんね高溝君。本当なの」

そんなことを思っていると春姫がとどめを刺した。

「!!!!!!!!!!!!!!」

八チは石化した。

哀れ八チ。

「ああ、本当だよ。俺と春姫は付き合っている。」

俺も、もうどうにでもなれと言わんばかりにそう言つと生徒の間を通り抜けた。

こりゃ絶対に後でからかわれるなと思ひながら。

しかし、もう一人気になる人物がいた。

それはこの話題に飛びつきそうなるもう一人の奴だ。

「どうしたの、雄真くん？」

春姫はこっちの様子を窺うように聞いてきた

「変じゃないか、春姫」

俺がそう言つと春姫は不思議そうな顔をした。

「……………どこも変じゃないよ」

「いや、柊だよ。いつもなら、あいつはこの話題に飛びつきそうだから」

俺はそう言つと春姫も肯定した。

そう、柊杏璃は普通ならこの話題に必ず飛びついて俺たちをからかうはずだ。

実際、柊からチョコをもらえたのも、春姫が一目ぼれをしたと思いきんでいたからだし。

「俺、ちよつと声掛けてくる」

「あ、私も行くわ」

俺は春姫と一緒に柊のところに向かった。

「おはよう、柊」

「おはよう杏璃ちゃん」

「……………」

しかし柊は俺たちの挨拶に返事をしなかった。
と、そこに。

「柊、朝の挨拶は大事だぞ」

浩介が突然現れて、柊にそう言った。すると、柊はいきなり立ち上がった。

「もう、あたしの事はほっといてよ!!」

柊は大きな声でそう言うどっかに走って行った。

浩介は、呆れたような目つきでドアの方を見て、ため息をつくと自分の席に戻って行った。

そして俺と春姫は、お昼に浩介から事情を聴くことにした。ちなみに柊はHRには戻っていた。

キーンコーンカーンコーン

そして、学生たちには待ちに待った昼休みである。

俺は昼休みになると同時に浩介に声をかけた。

「おい浩介、いつしよに昼飯でも食うか？」

俺は浩介にそう聞いた。

「いや、いいよ。なにせ、彼女との甘い、一時を邪魔したくはないのね」

浩介はなぜか変なところでは気を聞かせてくれるんだよな。しかし、ここは折れるわけにはいかない。

「大森君、あなたに少しだけ聞きたい事があるの」

と、そこに春姫が現れて浩介に言った。

浩介は、一気に険しい表情になり目を細めると。

「……分かった。屋上でいいのか？」

何とか浩介は了承してくれたので、俺たちは屋上へ向かった。屋上に人は全くいなく、貸し切り状態だった。

「さて、二人が聞きたいのは朝の柎の事か？」

俺達がベンチに座ると、浩介は突然本題を切り出した。

「ええ、そうよ。あなた一体、杏璃ちゃんに何をしたの？」

春姫は浩介を睨みつけながらそう聞いた。

「どうやら僕がとどめで使った『闇の制裁』の副作用である、絶望心が出たようだな」

浩介はさらりと、とんでもない事を言った。

「それで杏璃ちゃんが……。何でそんな危険な技を使ったのー!!」

春姫は怒った表情を浮かべ、浩介を問い詰めた。

「勘違いしてほくはないが、絶望心は己の弱い部分だ」

浩介は目をつむったまま淡々と答えた。

「なによ、それ」

春姫は友人を傷つけられたためか、かなり怒っているようだった。

「つまり、弱くなった心を克服すれば強くなるという事」

しかし、浩介は目をつむったまま冷酷な感じに話した。

「ふざけるのもいい加減にして！！すぐに杏璃ちゃんにかかっている変な物を取り除いてあげて！！」

春姫はそう叫んだ。

それを聞いた途端、浩介は目を開けた。

「ふざけてんのはそつちだろ！！じゃあなんだ、あんたはあいつを地獄の底に落とす気が！！」

浩介はおもむろに立って春姫を怒鳴り散らした。
さすがの春姫もたじろいでいた。

「いいか、あいつの弱い心が今出ている。それを克服させれば真の自分がわかるんだ」

「それなのに今僕たちが茶々を入れたらあいつは最悪、魔法使いで入れなくなる。だからあいつ自身が乗り越えるのを待つしかないんだ」

浩介はそう言うと目を閉じた。

「とにかく僕が話せるのはこれだけだ」

浩介は眼を再び開けるとそう言った。

この時浩介がどのような事を思っているのかは俺達にも想像はつか
なかった。

春姫も渋々納得したみたいだった。

「そ、そうだ、浩介いつしよに昼飯を食おうと思ったのは本当だし、
一緒に食おうぜ!!」

そう言っつて俺たちは反場強引に浩介と一緒に昼食を食べた。

「……」

浩介は見るからにげんなりとしていた。

「こ、浩介?」

「本当に、ご・ち・そ・う・さ・ま・で・し・た」

浩介はげんなりとしながら一言一言を区切つて言ってきた。

「本当にアツアツだね、食べさせてもらったり上げたり」

「うっ!!」

なぜ浩介がこんなにげんなりしているのかというと、俺たちが昼飯
を食べさせてあげたり貰ったりしたのを見ていた為らしい。

「まあ、帰るか」

俺は、逃げるようにしてそう言っつと、ドアに向かって歩き出した。
春姫が、慌てたようにドアに何か魔法を掛けていたのが気になった
が、ドアを開けた先にあったのは、ハチや準久美までもが廊下に倒

れ付している惨状だった。

「えっと、春姫さん？」

「そ、その、取っ手に触ろうとすると電撃が走るようなトラップ魔法を……」

俺の言葉に春姫が目をそらせながら言った。

この光景を見ている限り、極力春姫は怒らせないようにしよう心に誓う俺だった。

「盗み聞きをするとはな、クククク……」

そして、一部にもものすごい殺気を飛ばしているものがあるのも、気のせいと言いたい。

「今、神坂さんと同じ属性の魔法を使えばそうそう、ばれないか」

気のせいじゃなかったっていうより。

「浩介、いったい何をしようとしている？」

「え、何でもないよ。クリュスト・ブライト!!」

とたんに久美にめがけて電撃が落ちた。

「アギヤー!!」

そして、久美は気絶した。

「あらま、いきなり雷が落ちた」

浩介はのんきにそんな事を言っていた。
というか。

「久美に電撃を喰らわしたの、浩介でしょうが！」
「違うよ」

浩介は即答した。

「じゃあ、さっきの『クリュスト・ブライト』とは何だ？」

「……………気のせいだ」

「んなわけあるかー！！というより今の間は何？」

そんな漫才のようなやり取りをしていた。

そして、俺たちが教室に戻ったところだった。

俺と春姫は鈴莉母さんに呼び出されたのだ。

そして、それから数分後。

俺はかなり疲れていた。

なぜかと言われれば研究室に入った途端に、鈴莉母さんのものすごい不吉な笑顔にお出迎えされ、その後俺と春姫の惚気話をなどと言われたりと大変だった。

まさかこのままともいかずに俺は鈴莉母さんに今まで気になっていた事を聞いたのだ。

それが、鈴莉母さんはすでに秘宝を封印する方法を知っているんじゃないかと言うことだった。

そうでもなければ、浩介に秘宝を封印するように要請されたときに

「分かりました」とは言わないからだ。
そして今、俺と春姫は鈴莉母さんの答えを待っているのだ。

「確かに方法は見つかったわ。でも、方法が見つかったからと言って、それが実行できるかは別問題なの。秘宝はもはや誰にも操る事ができないくらいにまで、力が大きくなっているわ。

もし、このような状態で封印しようとしたらプリマテリアライズオーバードライブ（原初物質化暴走）もとい、時空崩壊が始まってしまっわ」

鈴莉母さんはそこまで言うと、一旦区切った。

「私が見つけた方法、その成功の鍵を握るのは、高月君なのよ」

そして鈴莉母さんはその方法を話した。

「私が見つけた方法は……秘宝を起動して、無理矢理魔力を自然界に還元するという事だけ」

魔力の還元……それは具現化された魔力を自然界に帰すもので、魔法使いがこの技を使うのは鈴莉母さんでも難しいほどだ。

「……つまり、その起動に必要な存在が浩介ってことか」

そこから制御し、魔力を自然に還元する事ができるのかという問題を無視すれば。

「ええ、でも今のままではヘタをすれば確実に高月君の命が危ない」

今のままというのは、どういう意味だ？

「文献によれば、高月君はかなりの力を秘めているらしいの。でも今はその力が封印されているわ」

「でも、なぜ高月君の魔法は封印されているんでしょうか？」

春姫は母さんにそう聞き返した。

すると母さんはおもむろにデスクの引き出しから一枚のレポートを出した。

「魔法連盟に要求しておいた、高月君の力についてのレポートよ」

俺たちはそのレポートを読んだ。

高月浩介氏の、魔法能力調査結果

保有魔力量：測定不可

魔力濃度：10【最高値】

総魔力量：判別機の故障により判別不可能

能力：魔法の原点の高月家の次期当主に見合う力を所有している。

彼が従えている神は、破滅の神、破壊の神、闇の神の3体と言われ、高月家史上初の異端である。

しかし、その力はあまりにも危険なことから封印されている。

封印されているが彼の力はかなり強くこの封印が解けた場合の、能力が非常に危険であると推測される。

さらに彼に施されている封印はすでに綻びが出ており、封印を解い

てしまうのも時間の問題ともいえる。
彼自身が持ちうる魔法論法は洗礼されており封印が解除されても問題ないという者もいるが未だにその答えは出ていない。

「なんだよ、これ」

俺はこのレポートの内容を見て絶句した。

浩介が能力を封印されそれが解かれたら危険な事が起こると書かれていた。

「これが、彼の実力についてよ。彼の封印を解いてもいいのだけど、魔法連盟の圧力と、彼の危険性からこの計画はできないのよ」

俺たちは初めて知ったのかもしれない。

伊吹の魔法陣を破壊した時、柎を闇の制裁で倒した時。

すでに浩介は封印から解放されつつあったのだ。

その後、俺たちが浩介については話すことはなかった。

キンコーンカーンコーン

放課後、俺たちは森に警備をしに行こうとした瞬間浩介に呼び止められた。

「神坂さんすぐに森に行つて！！あいつらが動き出した。雄真は僕と一緒に柎を連れていくぞ」

「わかったわ」

春姫はそう言うと教室を走って出て行った。

俺達もとりあえず教室を出た。

「雄真とりあえず、柊に電話してくれ」

「わかった」

柊は放課後になるとすぐにどこかに行ってしまったのだ。

俺は柊の番号に電話をかけた。

ブルルルル、ブルルルル。

「もしもし」

どうやら柊が出たようだ。

「柊か、今どこにいるんだ？」

「公園よ、前にみんなと一緒に花見した」

あそこか……

「分かった、ちょっと話したい事があるからそこで待っていてくれ！」

「分かったわ」

俺は電話を切ると浩介にその場所を伝えた。

「急ぐぞ！！雄真」

そして俺たちは公園へと向かった。

そして公園で、柊の姿を探すと金髪のツインテールの人がいた。間違いない柊だ。

「柊!!」

俺たちは柊のいる場所に駆けつけた。

「柊、急いで俺たちと一緒に来てくれ!!伊吹達が動き出したんだ」

「…………!!」

「いやよ、あたしが行っても足手まといになるもの」

しかし、柊は拒否をした。

「ひいら」

俺がそう言いかけた時だった。

「雄真どいて、僕が言う」

浩介は俺を撥ね退けると俯いている柊の前に立った。

「柊、あんたいつまでそんなふうになっているつもりだ?」

「…………!!あんたに何がわかるのよ!!最初から力があるあんたなんか、説得なんかされたくない!!」

柊がそう言った時だ。

パチン!!

「…………!!」

乾いた音が周囲にこだました。

それは間違いなく、浩介が柎を引っ叩いたのだ。

「なにするのよ!」

柎は浩介にそう怒鳴った。

「……けんな」

しかし、浩介は下を向くとそう言った。

そして、顔を上げると、完全に怒っている表情をしていた。

「ふざけるな! 誰だってこんな力欲しくて手に入れていない。この力のせいで、僕が周りからどんな仕打ちをされたのか知っているのか!」

浩介は怒鳴るといふよりは悲痛な叫びだったのかもしれない。

「こんな力があるから僕はいつも周りの人にはおびえられ、唯一信じていた父さんは……すまない」

浩介はそこまで言うのと冷静さを取り戻したようだった。

「魔法使いは壁なんだ。壁を乗り越え、そしてまた壁を乗り越えどんどんと強くなるんだ。柎、あんたは壁を乗り越えるどころか、避けている。杏璃、よく聞け。あんたには今の膠着した状態を崩せる力がある。もし魔法使いとしての心が残っているのなら、もし壁を乗り越えたいと思うのなら屋上に来い。そうすれば柎杏璃の真の力が開花するだろう」

浩介は柁を説得したが、一旦区切ると鋭い目つきで柁を見た。

「もし来ないのなら柁、あんたはこの学校を止め二度と魔法を使いな。行くぞ、雄真」

浩介はそう言うのと突然走り出した。

「お、おい浩介!!」

「急ぐんだ!! 神坂が危ない」

浩介は焦ったように言った。

俺は急いで屋上へと向かった。

「春姫!!」

屋上に付いた時にすぐに見えた光景に俺は驚いた。

伊吹と上条さん、そしてそれと対偶しているのは、小雪さんと春姫だった。

「雄真くん!!」

春姫は希望をもったような表情を浮かべて俺を呼んだ。

「ふん、またそなたか、小日向雄真よ。いやもう一人いるな、大森浩介か」

伊吹は俺たちを目を細めてみるとそう言った。

「怪我をせぬうちにとっとと逃げるが良い」

「誰が、怪我をするんだ?」

伊吹の言葉に浩介は無敵な笑みを浮かべてそう言い、伊吹を挑発した。

「なに？」

伊吹の表情が険しくなった。

「ならば、証明するが良い。貴様が私以上に力があるという証明をな！！」

「みんな、僕には手を出すな！！」

伊吹は詠唱状態に入るが、浩介は一向に防御する様子を見せずに、俺たちに何もするなと言った。

「エル・アムダルト・リ・エルス……」

俺は浩介の言葉を無視して周辺に防御魔法を展開しようとしたが……。

「幻想詩、第4楽章、懺悔の檻」

上条さんが静かにそうつぶやくとともに音を奏でた。

「な！！！」

（マスター！！）

その瞬間、俺の周りに薄い膜が出来たと思うと俺は何か足がすくわれ座り込んでしまった。

「くそ!!」

立ちあがるうとするが、足に力が入らない。

「結界魔法です。申し訳ありませんが小日向さんは、そこでおとなしくしててもらいます。」

上条さんの声が聞こえた。

魔法を使おうとしても、力が張らないために何もできない。

それにもしここを脱出できたとしても上条さんの襲撃にあうだろう。

春姫達も今はフリーだが、伊吹が標的を変える可能性もある。

俺は結界魔法の中で春姫達を見ていることしかできなかった。

俺は伊吹達の方を見た。

浩介は目を瞑ったまま、伊吹の詠唱が終わるのを待っていた。

「ア・デイバ・ダ・ギム・バイド・ル・サージュ!!」

紫色の魔法弾が放たれた途端、突然白い光が洩れて俺たちは目を瞑った。

しかし、なにも聞こえないはずだが、一つだけ聞こえたのがあった。

「オーフェンダム!!」

ものすごい爆音とともに、周りの光が消えた。

「柊!!」

そこにいたのは柊だった。

「まったく無茶しすぎよ、浩介」

柊は浩介にそう注意する。

「悪いな」

浩介も平謝りだ。

しかし、心なしか浩介の顔が若干笑顔になっている。

「ふんっ!! 果たしても雑魚の登場か」

「雑魚かどうかはやってみないと分からない(分からないわ)」「

そして、見事に同時ツッコミ。

しかし、そこでようやく俺たちは気付いた。

この場に足りないピースを。

そう、信哉の姿が見当たらないのだ。

信哉はいつも伊吹の傍にいたはずだ、それなのにいないという事は伊吹たちは、まさか……!!

「伊吹様!!」

その時だった、信哉が現れた。

しかし、信哉が右手に持っているものは、もしかして。

「でかしたぞ、信哉」

「はっ!!」

「ちっ!! やっぱ伊吹たちは囷だったか」

浩介は分が悪い顔をした。

「あれは、秘宝に行きつくための方法が記載されている魔道書です」

小雪さんは冷静にそう言っていた。

「ふふーん、ということなら、話は簡単よ」

柊は笑うとそう言った。

「だったら見せなきゃいいのよ!」

柊はそう言った。

「なんか策でもあるのか?」

浩介は柊にそう聞いた。

「ひとつだけあるわ」

柊は真剣な表情で言う。

「前の柊の言っている事は信じなかった、でも、今の柊は信じる」

浩介はそう言うと、柊の後ろに回り肩に手乗せた。

「こ、浩介!」

柊は慌てていたが、浩介はそれにかまわず話を進めた。

「いいか、魔法使う際は集中力と、自信が必要だ。自分ではできると
いう自信を言魂にし、それを呪文に結び付けられれば、きっと柊は
強くなる」

浩介はそう言うと、柊から離れた。

そして、柊は詠唱を始めた。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタリアス・アウク……」

しかし、ここで、柊に変化が起きた。

いつもバラバラになる魔力は、かなりの高密度になっていたのだ。

「デイ・フェア・ラ・フォーラスト・フェイム・エクス!!!」

そして、打ち出されたのはかなりの密度があるレーザー式の魔法弾
だった。

そして、その魔法が狙う先は……伊吹だ。

「ふん、どこを狙って……」

しかしその魔法が当たったのは、伊吹が持っている魔道書だった。

「な、ま、魔道書が!!!」

伊吹は焦ったように言った。

そして、伊吹は、魔道書の火を消そうとするが……。

「どこを見ている!!」

浩介がそう言った途端、防御魔法を展開しなければただでは済まない威力の魔法を打ち出した。

「くっ!!ラ・デバイス」

伊吹は浩介の魔法を防いだが、火がついた魔道書は刻一刻と燃えているわけ。

「あ、ああ、私の魔道書が」

そして魔道書は、燃えてしまった。ほっと安心したのもつかの間。

「貴様ら、よ、よくも。うおおおおお!!」

とたんに伊吹からものすごい魔力が溢れていた。このままでは危険だと思った、その時。

「そこまでです!!」

屋上に鈴莉母さんの声が響いた。

「鈴莉母さん!!」

「先生!!」

「御難鈴莉!!」

伊吹は鈴莉母さんを睨みつけていた。

「もう終わりにしましょう。あなたは魔道書を失った。それ以上何もできませんよ」

母さんは伊吹を説得する。

「ふふふ、あーはははは」

だが伊吹は、突然笑い出した。

「確かにあれがなければ、秘宝の元へは行けぬ。だったら知っているやつに吐かせればいいのだよ!!」

伊吹はそう言うと、浩介の方を向いた。

「そうだろう。大森浩介……いや、”高月”浩介」
「なっ!!」

伊吹は今確かに浩介の事を高月と呼んだ。

「その証拠はどこにある？」

浩介は伊吹にそう言い返した。

「認めぬのなら、この男の命がどうなってもよいのだな？」

伊吹がそう言ったとたん、結界魔法の空気がどんどん重くなってきたのだ。

(息が……できない!)

このままだと俺は死んでしまうと思った。

「……………！？ ……！！」

浩介が俺の様子に気づいたのか左手をこっちに向けて何かをつぶやいた。

次の瞬間結界魔法が粉々に砕けた。

「ゲホ！！ゲホ！！」

結界魔法がなくなったため、息苦しさがなくなり力が入るようになった。

「誰が、自分のために友を見捨てると言った？……………伊吹の言うとお
りだ。僕が高月家の次期当主、高月浩介だ」

浩介が伊吹にそう宣言した。

すると伊吹の目つきがさらに鋭くなった。

「ほう。ならば、今すぐに秘室の元へ連れてゆけ」

「いやだと言ったら？」

浩介は伊吹にそう聞いた。

「しょうがない、無理やりにも吐いてもらおう」

伊吹はワンドを構えたが、浩介はそれをつまらなそうな表情で見つめると。

「僕は戦う気もないし、教える気もない。今日は御引き取り願おう」

浩介は威圧感を出して言う。

「……………」

伊吹は考え込んだ。

「良からう、この場は引いてやる」

そして、伊吹の姿は消えた。

「だが、やられっぱなしは私のプライドが許さぬのでな!!」

そう言った瞬間浩介めがけ、魔法弾が発射されたが……。

「無限烈火!!」

浩介の黒い霧によってそれはかき消された。

「終わった」

浩介はがそう言つと柊が座り込んだ。

「杏璃ちゃん!!」

「柊!!」

「柊さん!!」

三者三様に叫びながら、柊のところに行った。しかし、浩介は柊の様子を見た。

「どうやら、柊は魔力の使い過ぎみたいだ」

「神坂さんと雄真と小雪さんは御雑先生に事情を話して、この後の行動を聞いてくれ。久美は襲撃や、帰り道にトラップがないかを確認、僕は柊を寮まで送ってく」

浩介はそう言うと柊の肩を持ちながら、屋上を去って行った。

まあ、柊は任せても良いか。

そう思い俺達は、鈴莉母さんの研究室に移動した。

第29話 真の魔法使い（前）（後書き）

というわけで長いようで短い前編は終了しました。
次回は杏璃と浩介が中心です。

ということで、後編にてお会いしましょう

第29話 真の魔法使い（後）（前書き）

それでは後編です。

ここからしばらくはいい雰囲気だと思ったらちょっとd家嫌なフラグを立ててみました。

それでは、どうぞ

第29話 真の魔法使い（後）

「……という事なんです」

春姫は鈴莉母さんが屋上に来るまでの経緯を話した。

「なるほど、ついに柊さんが覚醒したのね」

鈴莉母さんが納得したようにそう言った。

「覚醒って？」

俺は鈴莉母さんが言った事を聞いた。

「あら？話していなかったかしら高月君の能力には、ほかの魔法使いの能力を覚醒させる力があるのよ」

俺たちは驚いた。

まさか、浩介にそんな力があるなんて。

「でも、俺や春姫には何もなかったけど」

俺は気になることを聞いた。

俺と春姫にはそのような兆候は全くなかったのだ。

「それはそうよ。だって、彼の力は魔力の相性がいい人にしか、その効力を発揮しないんだから」

「という事は、杏璃ちゃんは高月君と魔力の相性がいいという事ですか？」

春姫は、鈴莉母さんに確認するように言った。

「ええ、そうよ。でも高月君の素性が式守家に知られてしまった事は非常にまずいわね」

母さんは考え込むように言った。

「でも浩介は強いんだから、伊吹がいくら襲ってきても、大丈夫なんじゃないかな？」

浩介の魔法使いとしての力はかなり強く、この世界の魔法使いに引けを取らない。

だったら、伊吹を余裕で相手にできるんじゃないのか。

「ええ、でも、それをやると、別の意味でまずいわ」

「別の意味？それってどういう事？」

俺は鈴莉母さんに聞いた。

「それについては私からお話しします」

と、話してきたのは、小雪さんだった。

「浩介さんは数日以内に自身に秘められている力が暴走を起こし、この学園の生徒二人を魔法使いとして壊滅的な被害を出す、というのを先日予見しました」

「それってつまり……」

伊吹、力の暴走これから結びつく事は……。

「ええ、その暴走を起こさせるきっかけは式守伊吹さんです」

そして全員が黙ってしまった。

浩介の力が危険な事はもう判明している。

その力が暴走を起こす。

俺は想像しただけでも背筋がぞっとした。

そして、この日は解散となった。

浩介は夕食前に帰ってきた。

その力の先にあるもの 第29話「真の魔法使い（後編）」

浩介 Slide

「本当に馬鹿だな」

僕は寮まで柵をおぶっていた。

なぜかという校舎を出たまでは良かったんだが、出た途端柵は足にまで力が出ないと言ったため、今は僕がおぶっているのだ。

「なによ……」

「魔力すべてをかけて魔法を使うバカがどこにいる！」

そう、あるうことがこいつは、あの魔法を全力で放っていたのだ。

「……」

痛いところを言われたためか、柘は黙ってしまった。
そして寮に着くと、管理室にいるお婆さんに寮に入る許可をもらって寮の中に入った。
その時、お婆さんから変な事を言われたが、あれはどういう意味なんだ？

「到着つと」

僕は寮内の柘の部屋に着くと、ベッドの上に柘を下した。

「ありがとう、浩介」

「いや、困った時はお互いさま……ん？」

僕は柘の部屋を見渡して疑問に思った事があった。

柘の部屋は全体が緑色で自然をモチーフにしている、とてもいい感じだった。

そして、僕は台所にある“それ”を見つけた。

「柘、いつも食事は手作りか？」

「ううん、いつもカップラーメンだけど」

やっぱり、道理でカップラーメンが大量にあるわけだ。

「それに何で、なべが真っ黒なんだ？」

もとは白かったのであろう鍋は、今は真っ黒になっていた。

「そ、それは、料理に失敗して……」

「し、失敗でこんなになるのか？」

「わかんないわよ、でもコロッケを作ろうとしたら、爆発したから

びっくりしたわよ」

コロツケが爆発？

「コロツケって爆発するのか？」

僕は呆れた風に言った。

「柊とにかくお風呂にでも入って疲れを取っとけ、その間に僕が夕飯を作るから」

「え……でも」

柊は、遠慮しているようだ。

「遠慮するな、料理を作るのは趣味みたいなもんだからな」

僕がそう言つと柊は少し考え。

「分かったわ」

と言つて、お風呂に入って行つた。

「さて、僕はこのこびりついたやつを撤去するか」

僕はそう言つて、焦げている部分の撤去を始めた。

「誰が女つぽいだ！！……って、誰もいないんだから言つはずないよな。僕も頭がおかしくなったのか？」

確かにそんな声が聞こえたはずなのだが、僕は深く考えないように

した。

しかし、そんなことを口にした奴は絶対にただじゃおかない。それから数十分後……。

「お風呂上がったわよ」

寝巻を着た柊が僕にそう言った。

「そうか、ちょっと待っていてくれ」

僕は今料理のラストスパートに取り掛かっていた。しかし、あのこびりついたやつを撤去するのに時間を食われるとは、いつか柊には料理を教えようと思う僕なのであった。

「はい、完成!」

そう言うと僕はお皿に取り分けた。

「はい、どうぞ」

「うわぁ、おいしそう」

今回作ったのはお粥と爆発はしないという皮肉を込めて作ったコロッケ、そして薬草で作ったスープだった。

「いただきます……うん、おいしい!」

柊はお粥を食べると笑顔でそう言ってくれた。

「そうか、よかった」

それから数分後、柊は夕食を食べ終えたので僕は食器の後片づけをしていたがそれが終わったので柊の方を見てみると柊はベッドに座っていた。

「ありがとう、浩介」

柊は眠そうにお礼を言ってきた。

「やっぱり眠くなってきたか」

「浩介まさか、料理に何か混ぜたわね」

柊が僕を睨みながら言ってきた。

「いや、魔力を効率的に回復するための薬草をスープに入れたから、飲むと眠くなるのは普通だぞ」

誤解がないように言うておくが、魔力を効率的に回復するには睡眠が一番なのだ。

理由としては、眠っているときに一番魔力の消費量が少ないからだと言つのが、今の有力な説である。

「明日起きた時にはピンピンしているだろう」

僕はそう言つと部屋から出ようとしたが、それは柊の手によって阻まれた。

「お願い、一人にしないで。今一人になると、あたしはずっと一人でいないといけないように、思っちゃおうの」

柊は寂しそうな表情で言ってきた。

だからだろうか、僕は柊が寝付くまで一緒にいる事にした。そして僕は柊が寝たのを確認すると僕は柊に向かってこう言った。

「ならば、約束しよう。決して柊を一人にはしないと。……まあ、守れるかはわからないがな」

僕はそうつぶやくと、床もとにごみが散乱しているのを見つけた。どうやら僕がやってしまったようだ。

僕はそれを片づけていると、その中に一通の手紙を見つけた。

『それは杏璃さまが昨日書かれたものです』

その手紙を見ている僕にパエリアが話しかけてきた。

『あの時の手紙を書いている時の杏璃さまの表情は絶望の淵という感じでした』

僕はその言葉を聞くとこの手紙の内容が気になった。

「そうか。パエリア、この手紙見ていいか？」

『ええ、もちろんですとも。しかし、一つだけ約束してください』

「僕にできる事なら」

『杏璃さまにはこの手紙を見た事はご内密にお願いします』

「どうしてだ？」

僕は思った疑問を言った。

『この事が杏璃さまに知られますとあたしはものすごい仕打ちを…』

…』

パエリアよ、同情するぞ。

「分かった、守るように努力する」

『ありがとうございます』

そして、僕は手紙を開けたのだが、周りが暗くてよく見えない。

いつもは魔眼で夜でも（日によって異なるが）見えるが、今日は魔力を使いすぎたみたいだ。

「パエリアちよつと照らしてくれるか？」

『分かりました』

パエリアは、僕の近くまで来ると、手元を照らしてくれた。

そして、僕はこの手紙を読んで居た堪れない気持ちになった。

『お父様、お母様へ。お元気で過ごしてはいかがでしょうか？あたしも少しだけですが、元気に過ごしています。しかし、最近疑問を持つようになりました。』

あたしは魔法使いを続けていく権利があるのかどうかという、誰にも解決できない疑問です。あたしは魔法使いを続けてもいいのでしょうか？』

そこには自分に対する疑問などが書き綴られていた。

『高月様、できればその手紙を持ってはいただけませんか？』

パエリアが突然そうやってきた。

「何でだ？」

『杏璃さまの疑問を解決できるのは、高月様以外にはいないと私は確信しているからです』

僕は少し考えるとパエリアに言った。

「分かった」

『ありがとうございます』

そう言うと僕は時刻を見た。

5:50

僕はパエリアを元の位置に戻し、部屋から出て寮から出ると、家に向かって歩いた。
ちなみに、家に戻って5分ぐらいで夕食になったので、よかったと思っただけであった。

浩介 Side End

Another Side

浩介が変な声を聞いたのと同時刻。

「やっぱり、浩介って女っばいよな」

そこには雄真の親友である八子と、その横に準が歩いてきた。と言うのも、雄真が放課後になると浩介と共に教室を飛びだしたせいでもあったが。

そして、なぜか話は浩介の事になり、今の発言と言うことになる。

「全くもつ。そんなこと言っているとまた浩介君に殴られるわよ」

準もよく知っているのだろう。

浩介には冗談は絶対に通じるわけがないということ。

「いや、まさか浩介に聞こえているはずは……ヒッ!!」

すると、今まで平気そうな顔をしていた八子が突然飛びあがった。

「どうしたのよ？八子」

「イヤ、今殺気が……」

よくもまあそんなときだけは敏感に感じるなど言いたくなくなったのは関係ないだろう。

ちなみに、次の日に事情を知った浩介によりボロボロになるまで鉄槌を喰らったのも、関係ないと言え言える。

A n o t h e r S i d e E n d

杏璃Side

あたしはなかなか寝られなかった。

「ならば、約束しよう。決して柵を一人にはしないと」

あいつがそうつぶやいたのを最後にあたしは眠りに落ちた。

あたしは夢を見ていた。

これはあの時の光景だ。

あたしが小さい時……約9年くらい前だった。

理由は分からないけど、あたしは迷子になっていた。

すると周りから、野犬みたいのが出てきて、あたしを囲んだのだ。

あたしは泣いてしまった。

そしてあたしに向かって野犬は、思いつきあたしを切り裂こうと飛び出してきた。

あたしはもう駄目だと思ったが、いつもで立つても野犬はあたしを切り裂かなかった。

恐る恐る目を開けるとそこには、一人の少年がいた。

その少年は素手で野犬を跳ね飛ばしたのだ。

その少年はあたしに何かを言うつと野犬と対偶した。

その少年は黒いマントを着こみ、髪は白く目の色は真っ赤だった。

そしてどこからかヴァイオリンを取り出すと、何かを呟いてヴァイオリンを弾いた。

すると、目の前に大きな火の玉が出てきて、野良犬たちを一気に退治したのだ。

そして、その少年はあたしの方を向き、あたしを背負って両親のと

ころに連れて行ってくれた。

あれから5年立って、『あたしの思い出』から『初恋の思い出』に変わった。

そして、少し前まではその少年を探していたのだが、お父様は目は赤かったが黒髪の少年という風に覚えていて、その少年は、名前も教えてくれなかったらしく、あたしはあきらめるしかなかった。

「ん？」

あたしが目を覚ますと、もう朝だった。

そして、ふとテーブルを見るとお弁当があった。

そのお弁当の上に置手紙があったので読んでみた。

『これを見たという事はもう起きたのか、魔力の方は回復できたと思うが、まだ精神力が回復していないと思うから、この弁当でも食べて回復すればいい。それと、朝食は冷蔵庫にあるはずだからレンジで温めて食べれば大丈夫だと思う。では、また学校で。高月浩介』

あたしは余計なお世話よ、と思いつながらあいつが作ってくれた朝食を食べたのだった。

杏璃 Side End

第29話 真の魔法使い（後）（後書き）

今回はこれまでの雰囲気とは一変シリアスです。ですが物語も大きく動き出すのは確かです。

第1章はまだあと10話ありますが。

それでは、第30話にてお会いしましょう

第30話 運命のカウントダウン(前書き)

ようやく物語はクライマックスに。
とはいってもまだまだありますが。

それでは、どうぞ。

第30話 運命のカウントダウン

4月24日

今日もいつもどおりになるはずだった。

朝、ハチが、馬鹿な事を言い、それに突っ込みを入れる準。しかし、そんな日常はすぐに崩れることになった。

その力の先にあるもの 第30話「運命のカウントダウン」

小雪さんから、浩介の封じられた力が暴走すると言われた3日たった。

とりあえずは、浩介のそばにいるようにしようという事になった。

「悪い、ちょっと用があるから今日は一人で帰る」

「……行っちゃったわね」

「そうだな」

放課後、一緒に帰ろうと誘ったが今日は急用があるらしく、浩介は先に行ってしまった。

「何も無ければいいんだけどな」

「そうね……」

俺と春姫はそう言っていた。

小雪さんの予言がはずれれば1番いいのだが、小雪さんの予言は必ず当たるのだ。

最悪な状況だけは何としてでも、回避したいというのが本音だ。

「とりあえず、帰るか……」

「ええ」

俺たちは少しだけ不安に思ったが、帰ることにした。

でも、その行動が間違っていたなんて、今の俺達にはわかるわけがなかった。

浩介 Side

僕は誰かに呼ばれているような気がしたので、呼んでいるところへと向かっていた。

森の中に入ってしばらく進むと、そこには伊吹と信哉それに上条さんがいた。

「信哉、沙耶」

「はい」

伊吹は信哉と上条さんに一声かけると3人は三角形を作るように僕を取り囲んだ。

「これはどういった思考だ？」

「まだわからぬのか、高月？ 貴様にもう一度聞こう。秘室の元へ、私たちを連れてゆくのだ」

伊吹は高圧的に言った。

「分かった。ただ一つだけ、言いたい事がある。それを言わせてくれるのであれば言おう」

「いいだろう。申すがいい」

僕は伊吹の許可が出たことを確認して話し始めた。

「話すのは、僕の使命についてだ」

そう言うと伊吹たちは僕の顔を興味ありげに見た。

「僕の使命はこの世に平和をもたらす事だ」

そして、僕は自分の使命を言った。

「平和だと？笑わせるな、魔法で平和にすることができようか？魔法とは力だ。平和にする事は出来ん」

伊吹は僕の答えを聞くと笑っていた。

その言葉に僕は怒りより悲しみを覚えた。

魔法を力としか見れない者が、魔法使いであることへの……だ。

「だれが世界平和だと言った？」

「御主が言ったのだろ？」

伊吹は何を言っているんだと言いたげな表情でこっちを見てきた。

「僕が目指す平和は、望んではいけない希望を望む愚かな者の精神を修正する事だ。人はいろいろな希望がある。食べたい、寝たい、

遊びたい、買いたい、こういう希望は望んでも良いんだ。しかし、その希望がエスカレートし、望んではいけない希望を持つ者まで出始めた」

「その、望んではいけない希望とは何だ？」

伊吹は僕の話に疑問を持ったのか、そう聞いてきた。

「それはな、人を殺したい、人を甦らせたいなどだ。そしてこのような希望を持った者はその希望は叶わず必ず不幸になる。そうだろう信哉？あんたの父親が、妻を甦らしたいという希望を持ち、秘宝を発動させた」

僕は秘宝事件のすべてを語った。

伊吹たちは僕の事を睨んでいた。

「拳句の果てに暴走までさせて、那津音さんまでもを死なせてしまった。このような事を悲劇と呼ばなければ何と呼ぶ？それを今あんたたちは繰り返す。今度はどうなるかは」

そこまで話した時だった。

「もうよい気が変わった。貴様のような男、生かしてはおけん、今すぐ死ぬが良い！！」

そう言うと、伊吹は詠唱を始めた。

「それになにを言うか、高月殿。那津音様を殺したのは高月殿ですぞ、父上になすりつけるとは、高月殿も堕ちたようだな」

信哉が僕にそう言う。

そうだった。

僕が那津音様を殺したんだった。

「僕は逃げも隠れもしない、しかし、これだけは覚えておいてくれ。望んではいけない希望を望むな、それは絶望と悲劇の幕開けになる」

だからこそ僕は逃げなかったのだろう。

そしてそこまで言った瞬間だった。

伊吹から紫色の魔法弾が放たれる。

そしてここから僕は意識を失った。

もしこれで、全てが終わったら良いんだけどな。

浩介 Side End

伊吹 Side

「……………」

私は、地面に付している愚か者を見ていた。

「ふん、あれぐらいで死ぬとは本当に堕ちたものだな、高月浩介」

「伊吹様、このままでは秘宝の元にたどり着くことができませんが、

「どうなされますか？」

愚か者を冷ややかに見ていると、信哉がそう聞いてきた。

「そうだな、これからは少し様子を見るとしよう」

私は二人にそう言った。

「さて、とつとと戻るぞ、信哉、沙耶」

「御意！！」

そして、私は転送魔法でその場を離れたのだった。

伊吹Side End

Another Side

鈴莉は自分の研究室で、ある調査報告書を読んでいた。

それは雄真たちに見せたものと同じだったが、中身は違う。

その内容とは……。

高月浩介についての追加情報

彼は前に2名、人を殺している。

理由、経緯は不明だが、その情報自体が歴史上から抹消されている

模様。

また、彼の封印された力についての情報が判明。その封印されている力は神力と言い、神魔法とは違うものと言われる力。

高月家についてまとめられた『高月之伝記』に、このような記述がある。

『ある貴族が高月家の者を殺した。その者は体に神を宿していた。そして、その貴族はその者の、心臓が止まったのを確認し帰った。しかし数日後、その貴族の元にとある人物が尋ねた。

その人物とは、その貴族が殺した者だった。その人物は驚いていた貴族の体を剣で貫くと帰って行き、その者はそれから普通に生活していた』

この事から、彼を殺した場合に甦り、報復を受ける可能性あり。

また、彼が神力を発揮した時は、目の色を見ると良いらしい。

神力を使っている時は目が深紅の色になる。

また、神力の情報をもとに神力探知機を用意した。

画面に『God appear』と表示されれば神力を使用している人物がいるという事になる。

さらに、画面の赤い光の輝きで神力の使用者の位置を知らせる。輝きが強いほど近くにいることになる。

この検知器を使って何とかする事を進める。

「こんなものが本当に彼の封印がとけた事を知らせてくれるのかしらね？」

彼女はそう言って、神力探知機をデスクの上に置き、コーヒーを入れるためにデスクから離れた。

だからだろうか、彼女がそれに気づかなかったのは……。

デスクの上に置かれた神力探知機の画面に『God appear』

』と表示されていた。
さらに画面の赤い光の輝きは、森の方向を示していた。
しかし、彼女がデスクに戻るころには表示は消えていた。
もし、彼女が気づいていれば、この後の悲劇は防げたのかもしれない。

しかし何でこんなにも世の中は、理不尽なのだろう？

そもそも彼の力と、高月家にとっての一番のエネルギー源である魔力は、それぞれ月と関係している。

つまり、満月になれば彼の力や、高月家の力はフルパワー状態になる。

そして、次の満月は4月27日。

パワーもあるが、彼の封印は数十年の負担によってもはや、鉄以下の耐久力になっている。

そのためこのような日が一番、封印されている力が暴走する可能性が高いのだ。

神魔法とは違い、神力は意識や意思決定の権利が神に委ねられる。

これが暴走をすれば、世界はあつという間になくなるだろう。

つまり、一番怖いのは暴走するという事である。

そもそも彼ー高月浩介ーは、本当に死んだのだろうか？

伊吹たちはただ倒れていることから、死んだと言っている。

それがもし、封印を解く為の切り替えだったとしたら？

「ぐ……う……あ……」

そして、伊吹が浩介を倒した場所でそれは動き出した。

それは立ち上がると、不気味に笑いだした。

「ふふふふふ、あははははは」

そして、表情を変える。

「ようやく俺は解き放たれた！！今までの苦しみを誰が知ろうか？」

それはそう言うと、殺気を含んだ表情をした。

「あの餓鬼は許してやる。しかしあの二人は殺さないと気がすまねえ」

その人物はかなりの魔力を漂わせていた。外見上ではその人物は浩介と同じ特徴である、切り揃えられた黒髪に眼元がきつちりとした街を歩けば美男子と言われてもおかしくない男性だったが、その言動や彼の周りを取り巻くオーラはそれを浩介だとは認めさせない。

「ならばしばらくは楽しませてもらおう」

浩介はそう言うと森の外に歩き始めた。

「さあ、喜劇の始まりだ！！」

最後にそう言うと彼は森から立ち去った。そして、ついに小雪の予言は的中することになる。

Another Side End

第30話 運命のカウントダウン（後書き）

ということでした。第30話となりました。

次回はもしかしたら閲覧注意になるかもしれません。

それほどひどくなる予定はありませんが一応念のためにお知らせします。

それでは、第31話にてお会いしましょう

第31話 復讐(前) (前書き)

今回は、少々残酷な描写がりますので、ご注意ください。

第31話 復讐（前）

4月27日

今日も普通の朝を迎えた。

「おはようございます。兄さん、ラジアちゃん」

「おはようすもも」

「おはようございます。すもも様」

俺とラジアはリビングにいたすももと挨拶をした。

「おはよう雄真、今日は寝坊じゃないみたいだな」

「ああ、おはよう浩介。それと俺は毎日寝坊はしてないぞ」

そして、さわやかな表情で挨拶してきた、浩介に文句を言いながら挨拶を返した。

まさかこの後とんでもないことになるなど知る由もなかった。

その力の先にあるもの 第31話「復讐（前編）」

キーンコーンカーンコーン

今日は土曜だから午前中で授業は終わりである。
つまり今は放課後である。

しかし、俺はある事で考えていた。

「まくん、雄真くん!!」
「うわ!!は、春姫?」

大声で呼ばれたので、振り向いてみるとそこには頬を膨らませて、明らかに「怒っています」と言っている表情をした春姫がいた。

「な、何?春姫」

「何?じゃないわよ。さっきから呼んでも全く返事しないんだもの」

「悪い、ちよつと考え事をしてて」

「考え事ってさっきの大森君の事?」

春姫は、思い出したように俺に聞いてきた。

「そつなんだけどな、春姫はどう思う?」

俺は春姫に聞いてみた。

「私もあれはおかしいと思うわ」

俺達が言っているのは、HRが始まる少し前のことだ。

「おゝい、浩介!!」

それは俺が浩介に用があったので、呼んだ時の話だ。

「ん、何……おつと!!」

「こ、浩介?」

「大森君?」

俺と春姫はその光景に驚いた。

浩介は何もない所でいきなり転びそうになったのだ。

「だ、大丈夫か？浩介」

「大丈夫？大森君」

俺と春姫は心配して、浩介に聞いた。

「悪い、あまり“この体”に慣れてなくってね」

「えー！」

俺達は浩介の言葉に時間が止まったような錯覚を覚えた。

浩介は今“体に慣れてない”と言ったよな？

どういう意味だ？

俺は疑問に思った。

そして、浩介も気づいたのかすぐに言いなおした。

「あ、えーと、ちょっとよろけただけだから、気にしないでくれ」

そして、浩介は走って教室から出て行った。

「うーんでも、もう一度大森君に聞いてみたらどうかかな？」

「そうだな」

春姫の提案もいいのだが、浩介は絶対に誤魔化すだろう。

俺はそう思い浩介と共に帰るために、教室に戻ってくるのを待つことにした。

浩介？Side -

「くそ！！」

俺は誰も来ないところに逃げて、愚痴をこぼした。

「まさか、変なところでぼろを出すことになるとは」

そう、それはさっきの変な言葉だった。

つい本当のことを言ってしまった。

このままだと先が思いやられる。

「戻った方がいいな」

どうせあの二人は俺について話しているだろう。

これ以上邪魔が増えるのは俺にもよくない。

「それにしても、まだ来ないか」

俺はある人物を待っていたのだ。

「俺の主を傷つけた罰、受けてもらおうぞ！！」

俺は教室へと戻った。

浩介？Side End

「あれ？あそこにいるの信哉じゃないか？」

その後、教室に戻ってきた浩介と下駄箱に行こうとした時、屋上に続く階段から信哉の姿が見えた。

「行ってみよう、雄真」

浩介はそう言うとかけて行った。

しかし一瞬浩介の表情が、獲物を狩る猛獣の顔に見えたのは気のせいだろうか？

「お、おい待てっつて浩介！」

俺は考えるのをいったん止めると春姫と一緒に、いきなり走り出した浩介を追いかけて屋上へ行った。

ぎー

金属のドアを開く音と共に屋上のドアが開いた。

そして、そこにいたのは。

「お待ちしておりました。小日向さん、神坂さん、高月さん」

上条さんと信哉だった。

すると、春姫が一步前に出てた。

「私たちに何の用ですか？」

春姫は緊張を解かず、上条さんに聞いた。

「はい。伊吹様の事ですが、昨日本家の招集がかかったために、本家へとお戻りになりました」

上条さんは用件を淡々と述べた。

「という事はしばらくは安心という事か？」

俺は上条さんにそう聞いた。

「おそらくですが」

上条さんはそう言うと、浩介の方に向いた。

「高月殿、この間は申し訳なかった」

信哉が浩介にそう言うと、上条さんと信哉は頭を下げて謝罪した。俺たちには何のことはわからなかったが、浩介は二人の事を許すと思った。

それは浩介の性格を知っている俺だから言えることだ。

浩介は怒りっぽくて頑固だが、相手が謝ればちゃんと許すはず……。

「そうか、ならば……」

浩介は顔を下に向けるとそう言った。

そして顔を上げた時、浩介の顔を見て絶句した。

何と、浩介の目は深紅の色になっていたのだ。

「死んでもらおう!!」

浩介はそう言った。

そう言った途端に浩介は信哉たちに手をかざした。

その次の瞬間だった。

浩介の手から、魔力が放出された。

信哉はとっさに飛び退いたが、上条さんが捕まってしまった。

「う……あ……あ!!」

上条さんが苦しそうな声を上げる。

このままではいけないと思った俺達は魔法を唱えようとしたが、ラ

ジアを握っている手が震えていた。

春姫もどうやら同じ状態のようだ。

予想するに俺達は浩介の周りのオーラで固まってしまっているようだ。

「させるか!!雷神の太刀!!」

信哉が上条さんを助け出そうと浩介の方に向かい突進する。

その手に持った風神雷神に淡い光纏い浩介を目掛けて振りおろされる。

俺達はやれると思った瞬間だった。

パン!!

「な……に」

「そんな……」

信哉と俺達は一瞬何があつたのかが分からなかった。

浩介はなんと風神雷神を片手で受け止めたのだ。

「これが媒体か。こんなつまらぬものは、消え去るがいい!!」

浩介はそう言うと、風神雷神を粉々にした。

「ぐお!!」

そして、浩介は信哉を壁に叩きつけた。

「貴様のもここで葬ろう」

そして、さらに浩介は上条さんのマジックワンドも破壊した。

「きゃ!!」

そして、信哉と同じ場所に弾き飛ばした。

しかし、浩介から発せられるオーラが弱まった隙を突いた。

「エル・アムダルト・リ・エルス……」

「エル・アムスティア・ラル・セイレス……」

俺と春姫が呪文を唱えた。

「デイ・ルテ・エル・アダファルス!!」

「デイ・ラテイル・アムレスト!!」

俺が攻撃魔法を、春姫が防御魔法を展開するという息の合ったコンビネーションだった。

俺が放った魔法弾が浩介に命中……するはずだった。

「何!？」

俺は何があつたのかが分からなかった。

浩介は俺の魔法を何もせずに消し去つたのだ。

「デイ・アストウム・アダファルス!!」

「フレイス・リ・アダファルス!!」

春姫がかく乱させるため、複雑な動きをしている魔法弾を、俺は魔法式にちよつとした細工を施した魔法弾を放った。

「そんな」

「う、嘘だろ!？」

しかしそんな攻撃にもめげずに浩介は俺達の魔法を打ち消す。

浩介が俺達に向けて手をかざした。

「デンド」

その瞬間、俺は浩介から発せられるオーラにより、手にしていたラジアを落としてしまった。

春姫も俺と同じのようだ。

そして、今実感してしまった。

俺達は浩介の力の暴走を甘く見ていたということ。

浩介の暴走はあくまでも表面上のみ……つまり、本人の実力よりも少しだけ弱くなるので何とかやれると思っていたが、俺達は浩介のオーラで動けなくなってしまうのだ。

ふと俺は、小雪さんの予言を思い出していた。

『高月浩介さんは数日以内に自分自身に秘められている力が暴走を起こしこの学園の生徒二人を魔法使いとして、壊滅的な被害を出す、というのを先日予見しました』

それがまさかこんな結果になるとは俺は思ってもいなかった。

浩介？Side

「高月殿、この間は申し訳なかった」

イマサラナニライツテイル？

「アヤマツテスムトオモツテイルノカ？」

「そつか、ならば……」

俺は顔を上げた。

「死んでもらおう!!」

俺はあいつらに手をかざした。

「う……あ……あ!!」

男の方は逃がしたが、こいつだけでも十分だろう。

しかし横から誰かが突っ込む気配を感じた。

パンー!!

「な……に」

「そんな……」

男が驚いた表情をしていた。

俺は片手で奴の媒体を取ったのだから。

「これが媒体か。こんなつまらぬものは、消え去るがいい!!」

俺はそう言つと、奴の媒体を粉々にした。

「ぐお!!」

そして、俺は男を壁に叩きつけた。

「貴様のもここで葬ろう」

そして、さらに俺はもう一人の媒体を破壊した。

「きゃ!!」

そして、俺は男と同じ場所に弾き飛ばした。

これですべてが終わつた、あとは一つだけやりたい事がある。
しかし、このままではそれは出来ないだろう。

俺は自分から発するオーラを弱めた。

その瞬間、突如魔力の流れを感じた。

……なるほど、俺を楽しませてくれるのか？

「デイ・ルテ・エル・アダファルス!!」
「デイ・ラティル・アムレスト!!」

男が放った攻撃魔法は実によい代物だった。
魔力や制御も実に整えられているものだ。
しかしこんなものは俺の自動防御結界で十分だ。

「何!?!」

男は突然何があったのかが分からないようだ。
向こうも防御魔法を展開しているが、俺の魔法を受け切れれば大したものだ。

だめ

しかし心の声により反撃は出来ない。

攻撃したらだめだ

「デイ・アストウム・アダファルス!!」
「フレイス・リ・アダファルス!!」

だが、再び攻撃魔法が放たれた。
片方はかく乱をさせるように動きもう片方は……ほう、初級魔法のアレンジ版か。

しかし両方とも俺の結界によって無効化された。

「そんな」

「う、嘘だろ!?!」

二人の驚く声が、聞こえたが、これ以上攻撃されても面倒だ。

「デンド」

俺は自分で弱めたオーラを再び強めると、二人に手をかざした。これで、ダイレクトに出来るだろう。案の定二人とも媒体を落としていた。しかし邪魔者の気配がした。

「高月君!!」

「鈴莉母さん!!」

「先生!!」

何だ御難鈴莉か。
俺はそう思った。

浩介? Side End

「高月君!!」

屋上のドアが勢い良く開かれ、鈴莉母さんが来た。

「鈴莉母さん!!」

「先生!!」

母さんは俺たちの言葉を聞くと、ゆっくりと浩介に向かって歩いて行った。

「鈴莉母さん！！危ない！！」

俺は鈴莉母さんに向かって叫んだが、母さんは大丈夫と言わんばかりに進んでいく。

なので、俺たちは鈴莉母さんを信じて見守ることにした。

「ほう、お主が御薙鈴莉か」

浩介は不気味な笑みを浮かべ鈴莉母さんに言った。

「ええ、高月君　いや、今のあなたは違うわよね」

「え！？」

俺達は鈴莉母さんの言葉に衝撃を覚えた。

今は浩介ではない？それはどういう意味だ？

「あなたの名前は、ラティーヌね」

「……………！！！！」

俺たちは言葉を失った。

それは今まで浩介だと思っていたのが、今は浩介ではなく『破壊の神ラティーヌ』であったからだ。

だから、信哉たちのマジックワールドを破壊する事ができたのか。

そして、自分が従えている神が従えている者の体を使っているという事は紛れもない事実だ。

「ほう、よくわかったな。では芝居はやめだ」

浩介いや、ラティーヌはそう言つと手を大きく広げた。

「俺の名は破壊の神ラティーヌ。どうかお見知り置きを」

ラティーヌはそう言つと鈴莉母さんに礼をした。

しかし、鈴莉母さんは懐から何かを取り出して、それをラティーヌの前にかざした。

「エル・アムダルト・リ・エルス・ルテ・ダル・リ・ビアロ！」

すると、鈴莉母さんが持っていたお札のようなものが光り始めた。しかし、ラティーヌは面白そうに笑つとそのお札に手をかざした。

「ふん！！」

その瞬間俺は驚いた。

何とラティーヌは手をかざしただけで、お札を燃やしてしまったのだ。

「お主、神の力を見くびっているのか？そんなまがい物、俺には通じぬわ！！」

「そんな……」

俺たちは目の前の光景に啞然としていた。その時だった。

パタン！！

「ラティーヌ！！」

大きな声が聞こえたので俺はドアの方を見た。

「久美!!」

「久美さん!!」

そこにいたのは、浩介の妹の久美だった。しかし、なぜ、彼女は驚かないのだろうか？そして、ラティーヌは久美を見た。

「ほう、これはこれは、我が主の妹ではないか」

「あなた、何が目的なの」

久美はラティーヌに油断なく言い放つ。

「ふん、目的は達成された」

ラティーヌはそう言うと、倒れている信哉たちの方を指差した。久美はそれを見ると一層険しくなった。

「目的を達成したのなら、今すぐ消えなさい!!」

そう言うと久美は懐から手鏡をとりだした。

「まあ、そう言う俺はその奴と話をしたいのでな、話が終わったら消えてやるさ」

ラティーヌはそう言うと俺たちの方に歩いてきた。

久美はいつでも攻撃ができるように、ルミナスを構えている。俺は念のために、もう一度ラジアを構えた。

横を見ると春姫もソプラノを構えていた。

「まあ、そう構えんなって。そっちが攻撃をしなければこっちからは何にもしないから」

俺はラティーヌの言葉を信じて、構えを解いた。

「雄真君!？」

「雄真!？」

久美と春姫は俺を信じられないと言った顔で見た。

「俺はラティーヌを信じる」

俺はそうきっぱりと言った。

「ほう、あんたもそう言うか小日向」

ラティーヌは俺が言った事に驚いていた。

「『あんたも』という事はほかにも言ったやつがいるのか？」

俺はラティーヌに聞いた。

するとラティーヌを少しだけ喜んだ表情をして語り始めた。

「ああ、そうさ。思えば、俺は何年もこの体の中に封印されていたんだ。それでも苦痛は感じなかった」

「どうしてだ？」

「それはな、俺にはマスター、浩介がいるからな、できればマスターの友人には怪我をさせたくない。これはな、マスターとの約束な

んだ」

そして俺は理解した。

ラティーヌが俺達に反撃しない理由を。

「前にも一回こういう事が起こったんだ。でな、その時にマスターと初めて顔を合わせたんだ」

ラティーヌは昔を懐かしむように言っていた。

「マスターは俺にこう言ったのだ『あなたが、僕の体にいるもう一人の僕？もしそうでなくても聞いてくれ。僕はあなたの行動を束縛したりはしない、でも友人には何も手を出さないでくれ』とな。だから俺はその約束を守っているんだ」

ラティーヌはそう言うと、俺の顔を見た。

「それに貴様は気に入ったぞ、小日向雄真！！その強い意志があれば何でもできるだろう」

ラティーヌは笑いながらそう言った。

「だから、小日向には忠告しておこう」

そう言うとラティーヌは周りを見回していった。

「このことは、俺が独断でやったことだ。浩介には何の責任もない、だから浩介の事を責めたり傷つけるな。もしそんな事したら、死をも覚悟しろ」

ラティーヌはものすごい睨みを聞かせて言った。

「分かった」

俺は周りを見渡して、全員が頷いたのを確認して言った。それを確認したラティーヌは安心したような表情をした。

「そうか、マスターの代わりに礼を言うぞ。ありがとう」

そう言った途端ラティーヌの体に黒い靄見たいのがかかり始めた。

「クツ!!もはや……ここまで……か」

それと同時にラティーヌは苦しみ出した。

俺はラティーヌに駆け寄りうつとしたが、春姫たちに止められた。

「駄目よ、雄真くん!!」

「どうしてだ？」

俺は鈴莉母さんにそう聞いた。

「推測だけどラティーヌは、高月君の体の中に封じ込められようとしてるわ」

「お……ぼえておけ、運……命は変え……る事は……できない……
あああああああ!!」

ラティーヌはそう言うと黒い光がラティーヌを包み込んだ。

そして、光が消えるとそこにはいつもの雰囲気、浩介が倒れていた。

「浩介!!」

「兄さん!!」

俺たちは浩介に駆け寄った。

「これでやつと片付いたわね」

「ああ」

俺と春姫、そして久美は鈴莉母さんの研究室にいた。

あの後、浩介と信哉と上条さんを保健室に運びこんだ。

ちなみに3人とも今は保健室で眠っている。

しかし一番ダメージを負っているのが浩介なのが、ものすごく気になったが、今は考えないでおこう。

506

「それで、これからどうするんだ？」

「とりあえず、今後また、神力が発動したら、高月さんに対処はお願いするでしょう」

「分かりました」

あの時、久美が手に持っていた鏡は暴走した闇を封じるためのものだった。

「それじゃあ、今日は帰ってちょうだい」

「分かりました」

俺たちは母さんにそう言っていると研究室を出た。

第31話 復讐(前) (後書き)

いかがでしたでしょうか？

次回は浩介と上条兄弟の話がメインになります。

それでは、後篇でお会いしましょう。

第31話 復讐(後) (前書き)

ちょっと遅くなりましたが、後篇になります。

今回は上条兄弟と、浩介のやり取りが主になります。

第31話 復讐（後）

浩介Side

「う、ううは……」

目が覚めてすぐ僕はここがどこなのかが分からなかった。しかし冷静に考えれば、僕は学校の保健室にいるようだ。

（だが、伊吹に攻撃されたのがきっかけで封印が解かれるなんてな）

とそんなことを思っていた。

暴走しているときの記憶はちゃんと残っていた。

そして僕の隣にあるベッドでは上条兄弟が寝ていた。

その力の先にあるもの

第31話「復讐（後編）」

「う……」

どうやら二人共も気がついたようだ。

「高月殿？」

「高月さん？」

二人は目を丸くして僕の事を見ていた。

「お目覚めか、さつきは悪かった」

僕は二人に謝った。

いくら暴走していたとはいえ命の危険にさらしてしまったのだ。

「いえ、こちらこそ、申し訳ありませんでした」

「いや、俺の方も悪かった」

信哉と上条さんが逆に謝ってきた。

「ところで、相談なんだが……」

僕は二人にいつか話そうと思っていた事を言うことにした。

「二人は本当に式守家の秘室を発動させようとしているのか？」

僕は二人に聞いた。

「当たり前だ。伊吹様が望むのであれば俺はこの命に代えても伊吹様の望みをかなえて見せよう」

「私も兄様と同じ意見です」

二人は僕が予想していた答えを返してきた。

信哉に限っては行き過ぎでもあるが……。

「あれがどのくらい危険な物かは二人が一番知っているはずだ！！伊吹を那津音様と同じ目にあわせてもいいのか？それで伊吹の護衛とでも言うのか？」

式守家の秘室の怖さはこの身で実感している。

だからこそ強い口調になってしまつのだ。

「……」

二人とも僕の言葉に何も言えなくなつてしまつた。

「僕からは言えないが、主にただ従うだけでなく、主の間違いも直すのが、本当の忠義というものじゃないのか？」

僕はそう言つと、一旦間を開けた。

「もしこの言葉を理解できるのなら、今からでも遅くはない雄真側に付け」

「え……！？」

「何？」

僕の言葉に二人の驚く声が聞こえた。

「高月殿、それはどのような目的だ？」

信哉が険しい顔をして聞いてくる。

「何、裏はない。ただ単に伊吹の暴走を止めようとしているだけだ。しかし信哉がこつちに付くことは出来ない………違うか？」

僕は信哉に対してそう言つた。

信哉の事だ、自分の主を裏切るようなことは出来ないはずだ。

「確かに俺には出来ぬ」

やはり信哉はそう言った。

「だったら、僕達のやるうとする事に干渉をしない。それだけなら出来るだろ？」

僕は信哉に救いの手を差し伸べる。

こうすれば、信哉は雄真側でもなければ伊吹側でもない中間であるということになる。

「……善処しよう」

僕の思い通り信哉は承諾した。

「で、上条沙耶。お主はどうする？」

僕は僕の提案に茫然としていた上条さんに声を掛けた。

「私は……」

上条さんは悩んでいるようだ。

だが、それでいいんだ。

すぐに、はいそうですなんて言えば逆に伊吹がかわいそうだ。

それだけ慕われていないのだから。

しかし二人は悩んでいる。

それは二人が伊吹を慕っているという証拠でもある。

「別に無理をしなくてもよい。伊吹のしている事が正しいと思うのも思わないのもそれは個人の自由だ」

僕はそんな彼女に再び提案を出すことにした。

「ただな、自分の意見を持つことも時には必要なんじゃないか？」

僕は二人を見てて思うのは常に行動を他人に依存している節があるのだ。

伊吹が間違えていたとしても、それにずっとついて来ている。

二人は機械ではない。

自分の意思がある。

だからこそ、その意思に気付かせるのだ。

「私は……小日向さんに付きます」

上条さんはしばらく考えると決心したのか、小さな声でそうつぶやいた。

「沙耶!？」

信哉が上条さんに声を荒げる。

「いいじゃないか。彼女は自分の正しいと思う方向へ進んだ。それを壊すのは無粋というものだ」

「……」

二人は僕の言葉に再び何も言わなかった。

僕はこの手の交渉がとても得意な方だ。

「とりあえず、今日は二人とも帰る事。そして、明後日に学校へ来るか来ないかは自分で決めること」

「分かりました」

「うむ。心得た」

僕の提案に二人ともうなずいた。
そう、それでいいんだ。

この主役は僕ではなく雄真だ。

僕は太陽が月かといえ、月に当たる。

月は己から光ることは出来ない。

いつも僕は雄真という太陽のおかげで光っていた。

なので雄真という光を消すわけにはいかないのだ。

だから僕はせめて裏の方で、雄真が動きやすい状況を作るのだ。

そして出なければいけない時は、僕が表に出て対処する。

それが僕の定めなのだから。

その後上条兄弟は転送魔法を使い、僕も転送魔法を使って小日向家に戻った。

浩介 Side End

「ただいま」

「おかえり〜、雄真くん」

俺が家に帰るとカーさんが出迎えてくれた。

そして、リビングに入るとソファに座ってニュースを見ている浩介がいた。

「お帰り、雄真」

「ただいま、浩介」

【どういふ事なのかを聞かせてくれるか？】

近くにかーさんがいるので迂闊にしゃべられない。

なので、浩介に念話で話しかけた。

浩介から教えてもらった念話は俺自身の負担が少ない点がメリットだ。

【ラティーヌは三日前に封印が解かれた。そしてなぜか二人をターゲットにした。それだけしか分からない】

浩介から念話でそう帰ってきた。

しかし表情を変えずに言えるのはさすがだというべきか。

【一応忠告しておくが、僕の力を不用意に封じればそれ相応の代償を支払うことになるから気付けてくれ】

【分かった】

浩介の念話に俺は心の中でそう言った。

「ねえ、雄真この事件だけどさ

」

この後、浩介のニュース解説なんかを聞きながら俺は夕飯が出来るのを待っていた。

第31話 復讐(後) (後書き)

ということで、次回はシリアス払拭してコメディになります。

それでは、第32話でお会いしましょう。

第32話 初デート(前) (前書き)

今回は今までの暗い雰囲気脱する会です。
ほのぼのとした感じに仕上げました。

それでは、どうぞ

第32話 初デート(前)

4月28日

日曜日の朝俺はクローゼットの前で悩んでいた。

理由はごく簡単で、着ている服を選ぶのを悩んでいたのだ。

馴染んでいる方と言えば、いつも準たちと遊びに行く時の格好なのだが、何せ今日は初デートだ。

少しはおしゃれをした方がいい気もする。

「よし、決定!!!こっちだ!!!」

(もうちょっと早く決められないのですか?マスター)

俺はちょっとおしゃれした服に決めているとラジアが何かを言ったような気がしたが、気にしないことにした。

518

その力の先にあるもの

第32話『初デート(前編)』

「あれ、兄さんどうしたんですか?」

着替えを済ませてリビングに入ると、テレビを見ていたすももが不思議そうに言いながらこっちに来た。

「ちょっとお出かけ、駅前の方に」

「まあまあ、おめかししちゃって!!!さてはデートかしら?」

と、こつこつという話は絶対に放っておかないかーさんがうれしそうに喜んでいた。

「ん……まあ、そんなところ」

俺は普通に答えた。

「姫ちゃんですか？」

すももが目を細めながら聞いて来た。

「ホントに!?!?すごいわ雄真くん!?!」

すると、かーさんがさっきよりも嬉しそうに言った。

「かーさん頼むからあちこちで言って回らないでよ」

俺はかーさんにあらかじめ釘をさしておいた。

こつこつでもしないとあつという間にこの事が広まって準たちにかからかわれることになるからだ。

「はあい……わかりました」

俺が釘をさすとかーさんが残念そうに言った。

やっぱり言っておいて正解だった。

「そうですね……そうじゃ今日は何時に帰ってくるか分かりませんね」

「まだ未定だけど、たぶん遅くなると思う」

すももが聞いて来たので俺はそう返した。
というのもデートで行く場所とかを決めていないのも主な理由にな
ったりするのだが……。

「今晩は、5人でお出かけしておいしいものを食べようか、って話
してたんですけど」

「あ、う……そうなのか……でも、悪い……」

運悪く予定がデートと重なっていたので俺は罪悪感を感じながら謝
った。

「仕方ないですね、今が一番楽しい時期ですから」

すももの表情は笑顔だが、背筋がぞつとした。
それにとげのある言い回しが追加されている。

「う……そんなとげのある言い回しどこで覚えて来たんだよ……」

俺はそんなすももに言い返した。

「すももちゃんはおたしと浩介君と久美ちゃんと一緒に美味しいも
のをい……っばい食べてきましょう」

かーさんがすももと同様、とげのある言い回しをしてきた。
というより絶対にすもものとげのある言い方は親譲りだ。

「リクエストがあつたら、何でも言っていいわよ」

「本当ですか？それじゃ、お寿司とかどうでしょう」

かーさんの提案に今まで怒りの笑顔だったのが一変した。

「オツケー、回ってない所に連れて行ってあげる」

すもものリクエストにかーさんが笑顔で答える。

「回ってないお寿司屋さん！？テレビで何度も見たことあります…」

…」

すももが驚いたように言う。

「いいのよ、代金はすべて浩介君に払ってもらうから」

「ちよつと待つて！！なんで僕が全額払わないといけないんだ!？」

かーさんの言葉に今まで静かに俺達のやり取りを見ていた浩介が叫んだ。

「だって、雄真君と春姫ちゃんが付き合っつきっかけを作ったのは浩介君でしょ？そしてすももちゃんも雄真君が春姫ちゃんとデートに行つて5人でお出かけが出来ないから不機嫌になっているんだから、その責任を浩介君に取ってもらうのよ」

「うぐう!？」

かーさんの説明に浩介が顔をゆがめた。

こうして浩介が全額支払うことになったのだ。

「後で覚えているよ、雄真」

そして浩介はものすごい形相で、俺を睨むとすもも達に聞こえない大きさをそう言った。

「くっ……いいのさ、このくらい言われるのは覚悟してたから」

俺はそう言いながらリビングを出ようとした。

浩介の貫くような視線に耐えかねてだが。

「雄真くん」

すると、かーさんが俺を呼びとめた。

「ん？」

「服、もうちょっと自然な感じの方がいいと思うわよ」

かーさんの表情は真剣だった。

「そ、そうかな？」

「わたしもそう思います」

俺の疑問にすももも言ってきた。

浩介も頷いていた。

「そっか……実はどうするか迷ってたんだけど、やっぱりもう一つの方で行くことにするよ。二人ともありがと」

俺はアドバイスをしてくれたかーさん達にそう言った。

「いえいえ」

「楽しんできてくださいね、兄さん」

かーさんとすももはそう言って、浩介はただただ頷くだけだった。

「おっ」

俺はそんなカーさん達にそう言うとりビングを後にするのだった。

「鍵、忘れずに持ってますか？」

あの後、自分の部屋に戻りいつもの服に着替えた。

「大丈夫、持ってるよ。じゃ行ってくる」

「行ってらっしゃい」

そして俺は家を出た。

約束の時間までまだ時間はあるが、春姫の事だからもう来てるんだろっ。

そんでもって……。

「ごめんなさい、待ち合わせてる人がいるんです……」

うわ、やっぱり声掛けられてるし。

オブジェ前に付くと、春姫に声を掛けている男がいた。

春姫はその男の人に申し訳なさそうに断っていた。

急いできて正解だった。

「おす、春姫」

「あ、雄真くん、早かったんだね。まだ10分前だよ」

俺が声を掛けると春姫が嬉しそうに駆け寄ってきた。

「そうなんだけどさ……大変なことになってるんじゃないかと思っ

てね」

「大変なこと？」

俺の言葉に春姫がきよとんとした顔を浮かべている。

「手当たり次第に周りの男を足止めしちゃうだろ、さっさと回収しねーと……」

「なんだか微妙だね。誉められてるのかな、それって？」

俺の答えにどう捉えたらいいのかが分からないといった感じに言ってきた。

「誉めてるんだよ。それに春姫を一人にしておくのが気が気じゃない」

「クスッ……だったら、ちゃんと捕まえて目を放しちゃダメだよ。でないと、どこかに消えちゃうかも」

俺の言葉に春姫は笑顔で言ってきた。

「そ、それは嫌だ、困る！！」

「そうだぞ、それで平気だったらぶん殴ってやるところだったよ」

俺が春姫に言うのと、突然よく聞いた声が聞こえてきた。

声のした方を見ると、浩介だった。

「こ、浩介どうしてここに？」

俺は冷静に浩介に聞いた。

「ちょっと嫌な予感がしたから来てみたんだが、正解だった」

浩介はそこまで言うと、俺達の顔を見た。

「あゝ、付いてくるつもりは無かったんだぞ、ただまあ雄真にはかなりの貸しがあるからそれを返してもらってもいいかなって思ってたな」

浩介は苦笑いを浮かべながら理由を言った。

「何の貸しだ？浩介」

俺は浩介の言った意味が分からずにそのまま聞き返した。

「……どうやら雄真には神坂さんとのデートではなく僕との有意義な魔法練習をした方がいいみたいだな」

浩介は殺気を含んだ表情を浮かべて俺の襟をつかんだ。

「お、落ち着いて二人とも」

それを春姫がなんとか宥めた。

すると、浩介は春姫をじっと見た。

「な、何かな？」

春姫がたじろぎながら浩介に聞いた。

「0点」

突然浩介が言ったのは点数だった。

「神坂さん、これはどうした？」

浩介は背中を指差しながら春姫に尋ねた。

「う、これって？」

春姫は何の事なのかがよくわかっていない様子だった。

「ソプラノだ。マジックワンドはどうしたんだ？」

浩介は痺れを切らしたのか春姫に直接的に聞いた。

「えっと、今日はデートだから部屋に……」

どうやら今日はデートなのでソプラノを部屋において来たらしい。

「馬鹿じゃないの？魔法使い……しかも女性は外出する際はマジックワンドを持ち歩き、魔法行使が出来るようにしておくものだ。そうでもしなきゃ、万が一の時に魔法を使うことが出来ないだろう」

「は、はい……」

浩介の注意に春姫は頷いていた。

「ちょっと待ってる」

注意を終えると、浩介は右手を空に向けて伸ばした。

「」

すると、浩介は俺達に判読できない言葉を発した。
次の瞬間、俺達の前の空間が突然歪み黒い穴が出来た。

「それは、神坂さんの部屋と繋がっている。その穴に手を入れて呼び寄せたい物を念じれば、呼びよせる事が出来るんだ。それでマジックワンドを呼び出せ」

浩介はそう言うと、春姫はおずおずと穴に手を入れた。

そして、穴から手を抜くと春姫の手にはしっかりと、ソプラノが握られていた。

浩介は穴を埋めると、じゃあね〜と言いながら去って言った。
一体何がしたかったんだ？

「雄真君……腕……」

そんなことを思っていると、春姫が俺に顔を赤くして言いながら近寄ってきた。

「ん……ああ……」

俺の差し出した腕を春姫が抱きしめてくる。
俺は恥ずかしさを紛らわすことに専念した。

「それじゃ何処に行こっか？」

春姫も顔を赤くしながら聞いて来た。

「そ、そうだな。ここは定番の映画館はどうだ？」

「うん、オッケーだよ」

俺の提案に春姫が笑顔で賛成してくれたので、俺達は映画館に向かうことにした。

俺達が見たのは激烈アマアママの恋愛映画だった。

「ふふ、雄真くんって意外に涙もろかったのね」

「な、泣いてなんかなくて!!」

不覚だ。

小日向雄真一生の不覚だ。

まさか恋愛映画ごときにここまでうるっとさせられるとは。

しかも、その涙を拭う決定的瞬間をバッチリ春姫に見られるなんて

あくびだって必死にごまかしてみたものの、全く信じてもらえなかった。

「でも、良かったもんね。あのクライマックスシーン」

「ま……そこそこな」

「もう、素直じゃないなあ」

俺は話題がそれたので、何とかごまかせたと思った。

「ね、映画も見たしそろそろご飯にしましょうか。だからそろそろ

泣き止んでね、小日向君」

「だから泣いてないっての!!」

どうやらごまかせてないみたいだ。

俺はもはや恋愛映画を見て泣く男に認定か。

このまま後ろ指をさされ笑われて生きていくことになるに違いない。

ギュー

その時春姫のお腹の虫が可愛らしく鳴いた。

「あ……」

春姫は慌ててお腹を押さえたが、もう遅い。
神がくれた最後のチャンス。
これを活かせなきゃ一生俺に勝ち目はない！！

「春姫、そんなに鳴くなって」
「うっ~~~~っ」

顔を真っ赤にしながら、春姫が上目遣いで俺を可愛らしく睨む。
おお、そんな顔も結構可愛いぞ。

『マスター、不純です』
「雄真くん、顔がにやけてる……」
「そ、そうか？悪い悪い」

なんか、ラジアに批難されたような気がしたが、一応考えないことにした。

「すぐに何か食わせてやるから、あまり泣かずに我慢しろよ」
「な、鳴いてないってばあ！！」

そんなやり取りを繰り返しながら俺達は昼食を食べるのだった。
お店を出た後俺達は何気ない会話をしながら商店街を歩いていたが

……。

「雄真くん、前を向いてて……」

春姫が突然険しい表情を浮かべて言った。

それと同時にラジアの周辺警戒によって二人が尾行している事に気付いた。

「もしかして、付けられているのか？」

「ええ」

俺の言葉に春姫が頷いた。

俺もこのまま付けられているのは何となく嫌だ。

「春姫、走れるか？」

「うん、大丈夫だよ」

だからこそ俺は……。

「行くぞー!!」

逃げたのだ。

それから走ること数分。

(まだ、追いかけてくるのかよ)

心の中で愚痴を吐きながら必死に走っていた。

「雄真くん、こっちー!!」

春姫に手をひかれて小道に入り込んだ。

「……でやり過ぎじゃましょ」

春姫はそう言うと、息を殺した。

遠くから足音が近づいて、その足音は俺達が隠れている小道を通り過ぎて行った。

「どうやらやり過ぎせたみたいね」

春姫が、安堵の表情を浮かべていた。

俺は小道の陰からそっと表の様子を確かめると、そこには柀と準の姿があった。

声は良く聞こえない。

「……！！雄真くん、携帯電話の電源切って！！」

「お、おう」

俺は何が何だか分からず、携帯の電源を切った。

しかし、切れる寸前に着信音が鳴ったが、二人には聞こえて……。

「聞こえたわ！！あそこよ！！」

どうやら聞こえてしまったらしい。

再び表に出て逃げ出そうとした時だった。

『しばらくそこにいる。絶対に動くな』

突然頭に浩介の声が響いた。

「え！？」

俺と春姫はどういう意味なのかは分からなかったが、浩介の言うとおりにした。

「やっと見つけ」

俺達を見つけて柎は何かを言おうとしたが、それは二人の背後に漂う魔力によって遮られた。

「こ、浩介。どうしてここに!？」

柎が後ろを振り向いて、浩介に向かいそう言った。

浩介はおびたらしい魔力を漂わせ、クリエイトを剣の形から紫色の長い杖に変えていた。

「言ったはずだよな。これ以上やるんだったら、容赦はしないと」

浩介から放たれる言葉に殺気が含まれていた。いくら俺でもこれは危険だということが分かった。

「春姫、浮遊魔法で逃げるぞ!!」

「う、うん!!」

俺達は嫌な予感を感じて上空を飛んで小道から出た。

そしてさっきの小道から少し離れたところに、着地した時だった。

ドカーン!!

いきなりの爆音とともに、俺達が今までいた方角から煙が立ち込めていた。

何があったのかはよくわかったが、とりあえず俺は、二人の命が無事なのかが気になった。
その後俺と春姫は洋服屋でショッピングを楽しんだり、魔法関連の博物館にも寄ったりした。

浩介 Side

僕が音羽かーさん達と別れて違うところに行ったのは理由があった。それは予感だったが、この予感が外れたことは一つもなかった。雄真達と話して戻る最中だった。

「うふふふ」

聞きなれた笑い声がするので、その方向を見てみるとそこには準さんと柊がいた。

二人は雄真達が歩いて行った方向に歩いて行く。どう見ても尾行だ。

「ちょっと待て、二人とも」

だから僕は二人を止めた。

「何よ？ 浩介」

「どうしたの？ 浩介君」

柊は鬱陶しそうに、準さんは普通に僕に言葉を返してきた。

「雄真達を尾行しているのであれば、帰れ」

僕は威圧感を出しながら二人にそう言った。

「な、何よ」

さすがの柊も僕の威圧にたじろいでいた。

「もし、これ以上やるんだったら、容赦はしない」

僕は最後にそう言った。

「わ、分かったわよ」

二人はそう言うのと、雄真達が歩いて行った道とは違う道を歩いて行ったので、僕はそれを見届けて音羽カーさん達と合流すべく、そこを後にした。

『マスター、ターゲットA、Bが雄真様の後ろを歩いています。おそらく尾行していると思われれます』

しばらく歩くと、クリエイトから情報が入ってきた。

実は準さん達と別れるときに、クリエイトに二人の追跡をお願いしておいたのだ。

(クリエイト、ターゲットではなく、名前で言え)

僕はどこぞのスパイのように言うクリエイトに文句を言った。

『どうしますか？マスター』

「そうだな、距離を考えても空を飛んでいくしかないな。頼めるか？クリエイト」

僕は色々と考えてクリエイトに頼んだ。

今いる場所と二人がいる場所の距離は約29km。

この距離だと、空を飛んだ方が速く着くのだ。

『大丈夫ですよ、マスター』

僕はクリエイトが了承したのを確認して、浮遊魔法で空を飛んだ。

いつもは確認をしないが、今日は非常に馬鹿馬鹿しい用途だったので確認したのだ。

どうやら、雄真達が二人が尾行しているのに気づいたらしい。

雄真達が複雑に走り、それを柊たちが追いかけていた。

そして、雄真達はどこかの小道に入り、柊達はその小道の前を通り過ぎた。

でも、その先の十字路で止まっているため、見つかるのも時間の問題だ。

『マスター、念話の使用可能範囲内に入りました』

クリエイトの言葉で何とか脱却法は見えた。

「しばらくそこにいろ。絶対に動くな」

僕は念話でそう言うと、現在位置を確認した。

今の位置は雄真達が隠れている小道の少し前だった。

上空から柊達が小道に向かって走って行くのが見えた。

僕は静かに柊達の後ろに着地した。

「やっと見つけ」

そして僕は、いつでも魔法が使えるように魔力を解放しながら柊を睨んだ。

「こ、浩介。どうしてここに!？」

柊が後ろを振り向いて、僕に気づくと慌てたように言い放った。

「言ったはずだよな。これ以上やるんだったら、容赦はしないと」

僕は殺気を出しながら二人に詰め寄った。

「春姫、浮遊魔法で逃げるぞ!!」

「う、うん!!」

雄真達の声が聞こえたが、そんなのは関係ない。

『マスター、まさかあの魔法を使うつもりですか!？』

クリエイトが慌てたように言ってきた。

あの魔法とは、僕がこの前生み出した新しい魔法の事だ。

僕はクリエイトに答えを言わないで行動に起こした。

「ブレイク系魔法、始動!!」

僕は上空に杖を掲げて、そう宣言した。

それを川切りとして、魔力がクリエイトに蓄積する。

その影響なのか、クリエイトが淡い紫色の光を発している。もちろん宣言したのと同時に結界を作成して、外部の人に影響がなくさらに、ここでの事が見えない。

「ちよつと、浩介！！何するつもりよ！？」

「こ、浩介君、落ち着いて話そう！！」

二人とも命乞いともとれる事を言ってきたが、僕はそれにかまわず魔力を集中させた。

このブレイク系魔法は魔力を効率的に高密度にする魔法である。

通常時では魔力の密度を上げるのは相当な練習をしなければ、容易には出来ないものだ。

しかし密度さえ上げれば、ほんの少しの魔力でも相手に重度のダメージを与えることが出来るのだ。

だからこのブレイク系魔法は、攻撃力が異常に高いのだ。

ただ、問題は使用可能魔力に到達するだけの魔力を持っていないければいけない所だ。

だから今のところ使えるのは僕だけということになる。

このブレイク系魔法はまだ未知の部分が多いため実戦では使わないようにしていたのだが……丁度よい。

人のデートを邪魔したのだ、実験で使っても良いだろう。

一応注意しておくが未知の部分を解明しないで使うと、予想だにしないことが起きるので非常に危険だ。

だが、これはあくまで実験もとい、忠告にも耳を貸さなかった者たちへの罰なのだから問題ない。

「冷やかす者は、魔の塵となれ！！」

そう言うとともに、クリエイトに集中していた魔力が、ブレイク系魔法の使用可能魔力を超えた。

後は、何を使うかだ。

今疑問を感じた人がいるならばその人は正しい。
何を使うかって、ブレイク系魔法だと思っ人もいるだろうがそれは違う。

これが、僕の新たに生み出した魔法の目玉なのだ。

この魔法は自分の好きなように効果を付けられるのだ。

だからこそブレイク系・魔法という名称なのだ。

さて説明が長くなってしまったが、僕が今まで確認した魔法効果は相手を追撃する『ブレイクドライブ』と、溜めた魔力を複数の魔法弾にして放つ『ブレイクアクセルシユート』、命中率よりも攻撃力を最重視した『ブレイクレーザー』に、周囲に対して光線が発生させる『ブレイクフラッシュ』の4種類であるが、今回はそれに最後の効果を加えるべく、使用したのだ。

その種類が……。

「ブレイクプラズマ　！！」

僕の一言と共に黄色の巨大魔法球が目の前に浮かび上がった。

僕はクリエイトを指揮棒のように振った。

それが合図だったのか、魔法球が柀に向けて放たれた。

「きゃー！！」

二人が悲鳴を上げる。

ドカーン！！

大爆発が起きた。

ちなみに僕はすぐに上空に避難していた。

「やっぱり、これも攻撃力重視型だったか……」

僕はしみじみと言った。

さっきの小道から土煙が出ていた。

しかし、僕は魔法球の着弾位置を二人より少し離していたので大丈夫だろう。

さて、今僕が放った魔法が新しく付けた効果である『ブレイクプラズマ』と言うことになる。

この効果と言えば、今のようには相手に大ダメージを与えてさらに追加効果で相手を痺れさせることが出来るのだ。

とまあ、色々と言ってきたがこの後半は二人に聞かなければ分からないが、こっちも音羽カーさん達と出かけるという用事があったため僕はその場を離れた。

「にしても、僕には休日はないのかな？」

僕の空しい嘆きが風にかき消された。

ちなみに夜に準さん達が、あの後痺れて満足に歩ける状態ではなかったという情報を、雄真経由で知ったというのは関係ない話だろう。

浩介 Side End

柊達の尾行＋大爆発というハプニングがあった者の俺達の初デートは無事に予定を消化していた。

俺達は2月に春姫と初めて会った……いや、公園のベンチに座って

色々と談笑していた。

時刻は夕暮れ時、空全体は赤く染まっていた。

「…………と、そうだ。何か食べに行こうか？おなか減っちゃったしそれに…………」

俺は、それに気付くと春姫に提案した。

「は、春姫ともう少し…………一緒にいたいから」

と、最後に恥ずかしい事を言ってみた。

『マスター、自分で言った事なのに、なんで赤くなってるんですか？』

ラジアからきつい突っ込みが来た。

「う、うん。私は嬉しいけど…………」

春姫も顔を赤くしながら答えた。

「でも、そんなことしたら、すももちゃんがご機嫌斜めになっちゃうんじゃない？」

「大丈夫、すももとかーさん達は今日は遅いつて言ってたから家に帰ってもまだ四人とも帰ってないだろうし、食べる物もないんだな、これが」

春姫が心配そうに聞いた。

確かにデートに行くだけで、とげのある言い回しだったし…………。

「あ、だつたらさ……私が……作ろうか？」
「へ？作るって？」

春姫の提案に俺はオウム返しに聞き返した。

「雄真くんの晩ご飯……お口に合わないかもしれないけど。迷惑……かな？」

春姫が不安そうに俺に聞いた。

「と、とんでもない！！そりゃ願ったり叶ったりだけど……いいの？」

俺はそんな春姫にそう言つと俺も聞き返した。

「うん。私も雄真くんに食べて欲しいし」

春姫がまた顔を赤くしながら言った。

夕飯を作ってくれるってことは、これから春姫が家に来るってこと
だろ？

それはつまり、家で二人つきりになるってことで……。

「……」

「ふふ、決まりだね それじゃあ、さっそくお買い物に行こうか」

俺がドキドキしている事を知る由もなく、春姫はうれしそうに言つ
とベンチから立ち上がった。

「……へ？あ、ああ、うん。じ、じゃあ、お願いしようかな」

俺は慌てたように言うと、春姫と一緒に公園を後にした。

その後スーパーに行って食材を買ったりしたのだが……大量の食材を買った為金額がかなり高かった。

もちろん春姫に払わせるほど、俺はケチな男ではないので全額支払うことにした。

ただ、お小遣いで払えるような金額ではなかったので、春姫と付き合い始めた日に浩介から『デートとかで自由に使ってくれ』と言われて渡されたお金を使うことにした。

「ただいま〜」

「お、お邪魔しま〜す」

買い物を終えて春姫を連れて家に帰ってくる。

カーさんやすもも達はやっぱりいない。

まだ出かけているみたいだ。

「……………ん？」

リビングに入ると、俺はテーブルの上に残されているメモ書きを見つけた。

（えーっと、これは……………）

俺はメモ書きを見てみた。

（ああ、カーさんからの書き置きだな）

『そのようですね』

「えーっと、何々……………」

俺はそう思いながらメモ書きに書かれている文を呼んだ。

『雄真くん、おかえりなさい』

なんでだろう、文を読んでもただなのに本人の声が聞こえてくるような気がする。

『今日は雄真くんお楽しみみたいだから、私もいーっぱいすももちやんと楽しんでくるね。ちょっと遅くなると思うんで後のことはよろしく!~!』

なぜか畏じゃないかと疑いたくなるのは、俺の考えすぎかな？

『追伸。春姫ちゃんと……楽しんでやってね』

「ぶふっ!~!」

追伸を読んで思わず吹いてしまった。

「これってまさか、俺が春姫を連れてくる事を読んでの事じゃないよな……」

だが、まだ文には続きがあった。

『追伸2。すももちゃんからの伝言です』

ものすごく嫌な予感がする。

俺が出かけた後、かーさんが何かをすももに吹き込んでいるのだとしたら……。

書かれている内容は大体予想がつく。

『兄さんのバカ〜〜〜!!!!』

.....。

やはり、そこには大きな字でそう書かれていた。

俺は思わず絶句した。

お、俺に一体どうしろと.....。

「ん？雄真くん、どうしたの？書き置き？」

「え！？あ、い.....いや、うん、そう。二人とも今日は遅くなるって。あはははは.....」

書き置きに思わず唾然としてみると背後から春姫が声を掛けてきた。

当然書き置きはすぐに見つかるわけだが、この大問題満載の書き置きを見せるわけにはいかないので、笑ってごまかすことにした。

「あ、そうなんだ」

なぜか、春姫が残念そうに言っていた。

「は、ちよつと拍子抜けのような、ホツとしたような.....」

「拍子抜け？」

俺は落ち込んだ表情をしている春姫に聞いた。

「う、うん。だって、もし音羽さんやすももちゃんがいたら、初めて挨拶することになるわけだし.....」

春姫は恥ずかしそうに言った。

「初めて挨拶して……、別に学園とかで何度も会ってるだろ？」

俺はちょっとだけ気になったので聞いてみた。

「それとこれとは意味合いが違うのー！」

俺の言葉に春姫は少しだけ目を細めると俺にそう言った。

『マスターは女心と言うものを学ぶべきです』

ラジアから厳しい一言を言われた。

いつも浩介から鈍感とか言われているのと同時にラジアからは今のようになんて言われてきた。

しかし、女心と言うのをどうすれば学べるのかという疑問があるのだが……。

「だって……雄真さんと付き合うようになって初めてお伺いするってことなんだよ？」

確かにすももはともかく、かーさんは付き合い始めてから初めて会うことになる。

「私にとっては……雄真さんのお付き合いをちゃんと認めてもらうって、大切な意味合いがあるんだから……」

「……」

俺は春姫の言葉に何も言うことは出来なかった。

そっか、そう言われてみればそうかもしれないよな。

言われてみれば、春姫が緊張するのももつともだ。

「確かに……そうだよな」

「うん……」

春姫がしんみりと、頷いた。

「でも、大丈夫だって。そんな心配しなくても」

「そう……かな？」

俺の言葉に春姫が不安げに言った。

「ああ、むしろカーさんなら諸手をあげて喜んでくれるだろうかな。想像つくだろ？『オアシス』でのカーさんの様子を考えれば」

「うん、確かにそんな感じはするね」

俺の例えに春姫も想像がついたのだろう、明るい表情になっていた。

「ああ」

「じゃあ、あとはすももちゃんだけか」

さっきまでの表情はどこへやら、春姫は再び悩みだした。

そ、そうだった。

どちらかというところちのほうがある意味厄介ではあるんだよな……。

「よし、じゃあ頑張つてすももちゃんにもしっかり認めてもらえるようにしないと……だね。ふふっ」

春姫は決心したように言う。

「あ、ああ。頑張ってくれな」

俺は春姫にそう言って応援した。

「うん……」

ちょっと……いや微妙に不安の一株はあるけど……な。

第32話 初デート(前) (後書き)

いかがでしたでしょうか？

少しでも楽しんで頂ければ幸いです。
それでは、後篇にてお会いしましょう

第32話 初デート(後)(前書き)

といふことで、前回の続きです。

第32話 初デート（後）

「何かすっかり暗くなっちゃったな……」

「うん、送ってくれてありがとう」

俺は暗くなっていたのもあり、春姫を寮まで送ってきたのだ。

「悪かったな。ドタバタしちゃってさ。何かその……かーさん達に変なところ見られちゃったし」

「あ、うん……。私は平気だけど……すももちゃんが……」
「うん……」

春姫の言葉でさっきまでの悲劇を思い出した。

その力の先にあるもの 第32話「初デート（後編）」

そもそもの発端は、確か春姫が張り切り過ぎて創りすぎた夕食を全部食べて、それでなんだかい雰囲気になって、キスをしようとしたら……かーさんが乱入してきたんだよな。

俺はその時の事を思い出す。

「そこよ、雄真くん！！そのままガバァ〜と押し倒して、一気にぶちゅ〜と……」

「……うぐあッ!？」

「……ひゃッ!〜!」

突然、かーさんの声がしてきたので、俺は慌てて起きあがった。

「か、かーさん!! な、な、な、な、なんでここに!?!」
「なんでってご挨拶ねえ。愛しの我が家だからに決まってるじゃない」

そこには、ものすごくぞつとする笑顔のかーさんがいた。

「それにい、雄真くんが寂しがってると思って、急いで帰って来たんだから。ふふふ。でも、ちよっぴりお邪魔だったかしら」
「……」

俺と春姫は恥ずかしさのあまり、何も言えなくなってしまった。

「それより雄真くん。続きはしないの? さっきから春姫ちゃん待たされっぱなしで可愛そうじゃない。女の子を待たせるなんて、男の子失格よ?」

「は、はううっ」

春姫があたふたと慌てていた。

「で、出来るわけないでしょうが!! かーさんが見てる前でそんなことっ!?!」

「あら? そんなこと気にしないでいいのよ。お母さん全然気にしてないし。むしろ、私の事は空気かなんかとも思ってくれていいから」

「思えるかあああああっ!?!」

不覚……。

小日向雄真一生の不覚だ……。
まさか、こんな現場をよりにもよってかーさんに見られるなんて……

…。
明日にはひよっとして学校中に……いや、町内中に噂が広まってる
つてことにも……。

かーさんの隣には、手を組みながら呆れたような目で俺を睨んでいる
浩介と、苦笑いを浮かべている久美の姿があつた。

……ん、ちよつと待て？

かーさんと浩介と久美が帰ってきてるといふことは……。

「は、はわ……はわわわわわ……」

「す、すもちゃんっ!？」

「どわあっ!？すももっ!！」

予想通り、目を回しているすももがいた。

「に、に、に、兄さんっ!！姫ちゃんっ!！こ、こ、こ、これは一
体、ど、ど、ど、ど……」

「お、落ち着いて、落ち着いて……ね？すももちゃん。これは……

その、そう言う事じゃなくてね」

「そ、そうだぞ、すもも。ここは一つ、落ち着いて俺達の話をだな
あ
」

俺は何とか暴走しているすももを落ち着かせようとする。

「うふふふ。すももちゃん、私たち若い二人のお楽しみタイムを
邪魔しちゃったみたいねえ」

「お、お、おたっ、おたっ……」

かーさんの言葉によってさらにすももが混乱してしまった。

「か、かーさん、煽らないでください……って何ビデオ回してるん

ですかッ!!!」

「あら、大事な息子の青春のグラフィティを収めるのは、母親の義務なんだから 安心してね。ちゃ〜んとお・い・し・いシーンは、録画してあるから」

「……………」

「だあああああああ!!!今すぐ消してくださいっ!!!」

「くすくす、どうしよっかなあ〜」

笑いながら言うか さんの背後に回る影があった。

シュ!!!

「あ!!!」

「削除、削除、削除!!!」

浩介は素早くカーさんが持っていたビデオをひったくると、そう言いながらいじくっていた。

あの後、落ち着きを取り戻したすももは俺を床に座らせるところ言
った。

「いいですか、兄さん。私は別に、兄さんと姫ちゃんがイチャイチャ、ラブラブしてた事を怒ってるんじゃないんです。怒ってるのは、私に隠れてこそそした事なんです。それはやっぱり、ちよっぴりモヤモヤしましたけれど……………」

と、いうお説教をされた。

ちなみに最後にこう言われた。

「それより、兄さんには誠意が足りないんです！！真心が足りないんです！！ぷんぷーんっ！！」

「……はあ。なんでへそ曲げてるか知らないけど、帰ったらまた大変だろうな。全く、せつかく兄貴に彼女が出来たんだから、喜んでくれたっていいのに」

「それは、仕方ないことだと思うなあ……」

「ん？なんでさ？」

「う、ううん……。それより、私も早くすももちゃんに認めてもらえるように頑張らないと」

「それは大丈夫じゃないかな。すももだって、本気で俺達の交際を反対してるわけじゃないんだしさ。まあ、しばらくはご機嫌斜めだろうけど……」

それにしても、かーさん達も変なタイミングで帰ってきてくれたよな。

あと十分……。いや、あと三分だけでも待っていてくれれば、俺は春姫と……。

「……」

「……」

ファーストキスは、お預けか……。

「……ねえ、雄真くん」

「おわ！？つと、な、何？……え？」

「……」

いきなり両腕で首に抱き寄せられたかと思うと、唇を強く押しつけ

られる。

時間にしたら二秒か三秒程、だったと思う。

でも俺には、まるで時間が止まったみたい長い長い時間を感じられた。

「……………大好き」

「……………」

俺は突然の事に固まってしまった。

「これからはバイバイの時には忘れずにしてね……………おやすみ、雄真くん」

何も言えずに立ち尽くしている俺を後にして、春姫は走り去ってしまふ。

春姫の柔らかい唇の感触がいつまでも残っていた。

その後、何とか正気を取り戻して家に帰り、リビングに入ると真っ先にこっちに来たのは浩介だった。

「すももならさっき説得しておいた」

「サンキュー」

「とりあえずは、自重しろ」

浩介が呆れたように俺に言ってくる。

心なしか、休日が欲しいという声が聞こえてくるような気がする。

「ん？これは何だ？」

すると、浩介はテーブルの下に落ちていた白くて、小さな紙を見つけたのか、拾い上げた。

「……………!?!」

それを見た瞬間、浩介の顔が驚きに染まった。

「ど、どうしたんだ？浩介」

「雄真、これは何だ？」

浩介が俺に渡したのは、レシートだった。

「これって、俺達を買ったやつ……………」

それは、俺と春姫が、夕食のために買った食材のレシートだった。

「これを払ったのは、雄真か？」

「ああ、そうだが」

「一体どうやって払ったんだ？こんな金額、雄真の小遣いからじゃ払えることは出来ないと思うが……………」

浩介が、不思議そうに俺に聞いた。

「ああ、だから、浩介が渡してくれたお金を使ったんだ」

まあ、自由に使えって言われたんだから大丈夫だな。

「……………」

「浩介？」

「確かに自由に使えとは言ったが、食費にしろとは誰も言ってないぞ？」

浩介はそう言うと、不気味な笑顔を浮かべながら、俺の肩をつくんできた。

「どうやら、雄真には魔法練習をした方がいいみたいだな」

浩介はそう言うと、俺を玄関に引きずっていく。

「大丈夫、お茶菓子も用意してあるから」

浩介は最後にそう言うと、俺を引きずったまま、空を飛んだ。俺が解放されたのはそれから数時間後だった。

魔法練習というのは、浩介の魔法弾を避けるものだった。

第32話 初デート（後）（後書き）

さて、この章では最初で最後のほのぼのとした雰囲気でした。次回から、事件は収束に向かっていきます。

それでは、第33話でお会いしましょう。

第33話 決戦前（前書き）

いよいよ急展開です。

第33話 決戦前

4月29日

キーンコーンカーンコーン

「ふう、今日も無事に放課後を迎えた」

今は放課後生徒たちは勉強から解放される時間だろう。

しかし俺は朝、浩介に言われた事によりその喜びはあまり感じられなかった。

それは朝の教室の事だった。

「久美ちゃん！！おっはよう……ウギャー！！」

久美の手を握ろうとしたハチを、浩介が電撃魔法で返り討ちにして
いた。

「雄真、神坂さんと呼んできてくれないか？」

「ああ、分かった」

俺は浩介に言われたとおりに、春姫を呼びに行った。

俺達が戻ると、そこには浩介と柊、そして久美と上条さんが集まっ
ていた。

「それで、どうしたんだ、いきなり呼びだして」

「ああ、実は、本家に召集されていた伊吹が行方をくらませた」

俺達は浩介の言葉に啞然としてしまった。

「つまり、とても、危ないということね」

春姫が真剣な面持ちでそう言った。

「ああ、伊吹達が来る場所と言えば、ひとつだけだ」

伊吹が来る場所ということは、森だろう。

「ちょうど今日は午前授業だから放課後になったら、森に向かうから、それを頭に入れておいてくれ」

そう、今日は学校の記念日かなんかで半日授業だ。

そして、浩介がそう言うのと同時に先生が教室に入ってきたので、俺達は席に着くことにした。

その力の先にあるもの 第32話「決戦前」

そして、今俺たちは森に向かっていた。

俺たちとはもちろん、俺と春姫、そして浩介と久美に柊と小雪さんそして、あの後無事に和解したらしく、上条さんも一緒だ。

森の前に行くと、そこには風神雷神を構えた信哉が、立っていた。

「……」

浩介が足をとめた。

「僕は、ここを通りたい、そこをどいてくれないか？」

浩介が静かに、けれども威圧感を出しながら信哉に問いかける。

「申し訳ないが、高月殿の提案は呑めぬ。ここを通るのであれば、実力を持って阻止させてもらおう」

信哉が、風神雷神をこっちに付きつける。

俺達はすぐに臨戦態勢に入ろうとするが……。

「いい。信哉は、僕がやる」

浩介はそう言うで一歩前に出た。

俺達は浩介と信哉の戦いを見ていることにした。

「うむ、高月家次期当主の力、特と見せてもらおうぞ!!」

信哉と、浩介はお互い睨みあつたまま動かない。

「はああああああ!!!!」

動いたのは信哉だった。

信哉は浩介に風神雷神を振りかざす。

「儀流・序幕、万物の楯!!」

浩介はここぞというタイミングで、不可視の防御魔法を展開する。

「こんなもの、簡単に……」

しかし、信哉はそれをたたき割ろうと力を込める。

「…………バースト」

ドカアアアアン!!!

「へ？」

俺は何が起こったのかが理解できなかった。

浩介が立った一言つぶやいただけで、爆発したのだ。

そして、爆煙が晴れるとそこにいたのは……。

「猪突猛進も、ここまで来ると考えものだな」

涼しげに言っている浩介と、

「」

反対側にある気に叩きつけられ気を失い、さらに拘束されている信哉の姿だった。

「あ、兄様!!」

上条さんが心配そうに信哉の元に駆け寄る。

「大丈夫。気絶しているだけだ。それよりも時間がない、急ごう」

浩介はそう言うと、森の中に入って行った。

その道中浩介から聞いた話だが、さっき浩介がやったのはわざと均衡が続くようにして自分が作り出した防御魔法を、爆発させると言う何ともずるいやり方だった。

ガサ、ガサ、ガサ

緊迫した雰囲気の中、草を踏みしめる音が一段と聞こえる。しばらく森を歩いていると、前を歩いていた浩介は突然歩くのをやめた。

「どうしたんだ？浩介」

俺は浩介にそう聞いた。

「来る！！」

浩介は前の方を射抜くように見て答えた。

その瞬間前から光が発せられ、そこにいたのは……。

「ほう、死んだかと思ったんだがな……」

伊吹は挑発的に浩介に語りかけた。

「残念ながら」

それに対し浩介は気にせず答えた。

「なあ伊吹。秘宝はとても危険だ、あんな証だか何だか知らないものに手を出すのはやめてくれないか？」

浩介は伊吹にそう問いかけた。

「止めるわけないだろうが。私は秘宝を操ることができるのだから

な!！」

伊吹がそう答えると上条さんが前に出た。

「伊吹様、もうお止め下さい。那津音様はこのような事をお望みではありません」

上条さんも伊吹を止めようとしたが……。

「黙れ裏切り者!! 貴様も御薙鈴莉の方に付いてからに!!」

伊吹がそう言うとな条さんは悲しげな表情を浮かべて何も言い返せなくなってしまうた。

「おい、そんな言いぐさはないだろ!! 上条さんは伊吹の」

俺の言葉を遮ったのは浩介だった。

「どうしても、話し合いでは聞いてくれないんだな」

浩介は埒が明かないとばかりに伊吹にそう言った。

「ほう、ようやく戦う気が起きたか」

伊吹は面白そうな表情をしてそう言った。

「そうだな、一つだけ提案がある」

「なんだ?」

「戦うのは僕と伊吹の対一でどうだ」

「「「「な」」」」

俺たちは驚いた。

何と浩介は一對一で戦うと言ったのだ。

確かに浩介なら伊吹を倒せるかもしれないが。

しかし、不安要素がありすぎる。

「貴様、何のつもりだ？ 貴様らは今、有利な状況にある。それを捨てるとは何か策があるとでも言うのか」

伊吹は浩介をじっと睨みながらそう言った。

「策の問題ではない、覚悟の問題だ」

「……」

浩介の言葉に伊吹はしばらく考えた。

「面白い、そなたの提案呑もうではないか!!」

「場所は那津音様のお気に入り桜がある公園というのはどうだ？」

「なるほど、あそこか、確かに決戦にはもってこいだな」

こうして、浩介と伊吹の決戦の計画は成り立ってしまった。

「それともうひとつお願いが……」

「なんだ？」

「さっきあなたの手下とやりあったから少し疲れが出ている。条件を公平にするために2時間くらい休ませてはくれないか？」

浩介はさらに伊吹に提案をした。

「良かるう。ただしもしこれが、式守の人間を越させる時間稼ぎだった場合、早急に秘室の封印を解除する。良いな?」

そう言っつて伊吹はどこかに消えて行つた。

「おい、浩介一体何のつもりだ!!」

「そうですよ!!」

俺たちは浩介に詰め寄つた、しかし浩介は首を軽く横に振り。

「今戦つても僕たちが勝つただらう。しかし、それじゃ後味が悪くなる。伊吹を力で抑えつけても意味がないんだ」

浩介はそう言つと森の出口に向かつた。

俺は浩介を追いかけた。

「おい、浩介!」

「なあ雄真。僕もそろそろ、覚悟を決めないといけないみたいだな」

浩介は真剣な表情で言つた。

「浩介さん」

すると、小雪さんの声が出た。

声のした方を見ると、小雪さんが袋を持って立っていた。

「あなたにこれをお渡しします」

小雪さんはそう言つと浩介に袋を渡した。

「あの、見ても良いですか？」

「ええ」

小雪さんからの許可をもらったので、俺と浩介は袋の中を見る。袋の中には笛が入っていた。

「小雪さんもしかしてこれは」

浩介が恐る恐る聞いた。

「ええ、那津音様の形見である竜笛です。那津音様がお亡くなりになる前に、これを伊吹さんに渡してほしいと言われたので預かっていたんですが、浩介さんがお渡しになった方がいいと思うのでお渡しします」

小雪さんがそう言うのと浩介は一瞬悲しい表情になったがすぐに戻ると。

「分かりました。僕が責任を持って伊吹に渡しましょう」

浩介は小雪さんから竜笛を受け取ったのであった。

その後、浩介は戻って行った。

しかし、俺は一つだけ聞き忘れていた事があった。

もし、その事を思い出して聞いていたのなら、この後に訪れる取り返しのつかない事態は避けられたのかもしれない。

浩介 Side

僕は自分の部屋にいた。

僕はあるものを机の引き出しにしまい、さらに机の上にさっき風呂敷で結んだワンドを二つ置いた。

僕はベッドに腰掛けて、さっきまで見ていたアルバムを見ていた。

「行きたかったな……お花見」

おもわずそう呟いてしまった。

そこに写っていたのは雄真達が写っている、お花見の時の写真だった。

本当に行きたかった。

もしいければ僕は本当に楽しめただろう。

でも僕は楽しんではいけないんだ。

僕に楽しむ権利なんてないんだ。

そんな風に思いながらアルバムをめくると、写真が落ちてきた。一枚だけ挟んでいたのかと思いつつ落ちた写真を拾い上げる。

「……っ！！」

そして、その写真を見て僕は思わず息をのんだ。

それは僕が一番思い出したくない記憶の塊だった。

僕はとても胸が苦しくなった。

僕は人殺しだ。

それを思い出したくないから、隠していたのだろう。

でも、もう終わりだ。

今日ですべてが終わるんだ。

だからこそ、僕はやらなければいけない。

それが自分のため、そして殺してしまった人へのせめてもの罪滅ぼしなんだから……。

僕は気になって、時計を見た。

約束の時間まで残り30分。

丁度いい時間だった。

僕はその写真をアルバムにはさんで、本棚にしまつとクローゼットを開けた。

そこには私服や制服、そして魔法服などが掛けられていた。

その中から魔法服を出すと、僕はそれを着た。

その魔法服は黒をイメージとした、僕らしい服だった。

「さて、行きますか!！」

僕は気合を入れると、自分の部屋を出て約束の場所に向かった。

浩介 Side End

そしてちょうど2時間後

俺たちは浩介が約束した場所にいた。

伊吹は結界を張っていたので、こっちにまで魔法は来ない。

すると片方側から、浩介は歩いてきた。

黒をイメージした魔法服を着込んでいるその姿は間違いなく魔法使いを印象づけるものだ。

「遅くなつたか？」

「まあ、よい周りに結界を張らせてもらった」

浩介が声をかけると伊吹は不気味な笑みを浮かべて言った。

「一応ルールの確認だ。勝利条件は相手の魔法行使不可、および相手の意識損失だ。また、使用する魔法能力は自分の力であれば何でも使っている事にする」

浩介は淡々と、ルールを説明した。

「そして、伊吹が勝った場合は秘宝の元に連れて行く、僕が勝ったら秘宝はあきらめてもらう」
「分かった」

伊吹は浩介にそう答えた。

「さて、始めるか……」

伊吹がそう言った途端、周りの空気が変わった。

「……」

浩介は目を瞑って精神を集中していた。

こうして、秘宝をかけた戦いが今、始まるうとしていた。

第33話 決戦前（後書き）

いよいよ次回は大詰め of 浩介VS伊吹戦です。

どちらが勝つのかもそうですが、今回はった付箋にも注目していた
できれば幸いです。

それでは、第34話でお会いしましょう。

第34話 決戦(前書き)

今回はいよいよ大詰め of 伊吹戦です。

第34話 決戦

「さあ、始めよう!!」

僕はそう呟くと、懐から水晶玉を取り出した。

「我はかの者の真の持ち主なり。闇夜の元に今その力は目覚める。破滅の杖、破滅の剣、破滅の水晶の3つの姿を持つ破滅の3機よ、今こそ目覚める時が来た。目覚め賜え、そして我が力となれ」

浩介の言葉に反応するように、魔法陣が展開した。

「成れば我は捧げよう、破滅の3機に相応しい名を……創造せし者クリエイト!!」

僕は呪文を全て紡ぐと、首にかけてある勾玉と一緒に水晶玉を上空に投げた。
すると、それは神々しい光を発した。

『破滅の3機……名をクリエイト。確かに頂きました。認証!!』

次の瞬間、浩介の体は光りその手には、大きな剣が握られていた。

「行くぞ。ア・グナ・ギザ・ラ・デライド・ラ・ディーエ!!」

伊吹が詠唱を終えるとともに、上空に天蓋魔法が展開された。
そして、光の矢が浩介めがけ、恐ろしいスピードで降り注いだ。

その力の先にあるもの

第34話「決戦」

浩介はその光の矢を飛んで避けた。

しかしそれでも、数発は浩介の方に向かって行った。

浩介は後ろに跳びながら、手をかざした。

「高月家、緊急結界！！」

浩介が高らかに叫ぶと、浩介の前方に3重の防御魔法が展開された。

そして、伊吹が展開させた天蓋魔法から降り注いだ光の矢は3重の防御結界の前に憊く散った。

しかし、浩介の後ろには木がある。

このままだと直撃だ。

しかし、浩介は木の幹に手を当て反転すると一気に伊吹の方へと戻った。

「ほう、避けたか。ではこれでどうだ！」

伊吹はそんな浩介を相手に余裕の表情を浮かべ、呪文を唱え始めた。

「ア・デイバ・ダ・ギム・バイド・ル・サージュ！！」

呪文を唱え終わると同時に黒い魔法弾が浩介に向かう。

「無限烈火！！」

浩介は柁を倒した時に使った、魔法を発動させた。

そして、浩介が出した黒い霧と伊吹の魔法弾がぶつかり、伊吹の魔法弾が消えた。

その後、浩介は黒い霧を爆発させた。

すると、煙の中から出てきたのは、伊吹のマジックワンドだった。

「ヴォルグ」

「な!！」

俺は驚いた。

伊吹のマジックワンドが単独で魔法を行使したのだ。

そして、マジックワンドから出た、黒い霧は浩介を包みこもつとしたが、消えてしまった。

「消えた!？」

「残念ながら、今伊吹が放ったのは闇属性の魔法だ。属性レベルではこちらが圧倒的に上だ」

突然の事に動揺している伊吹に浩介はそう言った。

「伊吹の力とはそんなものなのか？」

「何だと!？」

さらに浩介は伊吹を挑発するように言う。

「もうここでやめるか、伊吹？」

これ以上やっても無駄。

浩介はそれが分かっているから停戦勧告したのだろつ。

しかし、伊吹は不敵な笑みを欠かさずに浩介にこう言った。

「ならば、これではどうだ！」

「……!?!」

浩介が驚いていた。

伊吹が発動させたのは、さっきと同じ天蓋魔法だった。しかしそれから発せられる魔力は前のより、桁違いだ。

「飽和攻撃、技の技術ではなく数の暴力で決着を付ける」

そして、伊吹は浩介にめがけて大量の光の矢を降り注がせる。

確かに、命中率は下がるものの、この量だと……

さらに浩介は自分の方に光の矢が向かってきているが全く動く気配がない。

(どうするつもりなんだ、浩介?)

そして、天蓋魔法から放たれた光の矢があたる直前、浩介が呟いたのが聞こえた。

「弾数は160発、余裕だな。キャプチャリング!!」

浩介が、降り注ぐ光の矢に向けて手を翳した。

次の瞬間、辺りに土煙が立ち込めた。

しばらくすると煙が晴れ、浩介のいた所が見えた。

そしてそれを見た瞬間、伊吹は驚愕の表情を浮かべた。

「どっぴいっことだ?」

浩介は無傷だったのだ。

「これがとどめだ!!」

「気でも狂ったか……オルム!!」

伊吹はすかさず、呪文を唱える。

しかし……。

「なに!？」

伊吹の放った魔法は確かに浩介に命中したが、浩介はそれに怯むことなく伊吹に迫る。

そして、伊吹が次の一手を打つ前に、浩介の持つ剣は伊吹を……切り裂かなかつた。

浩介の持つ剣は、伊吹に届く前に何かに遮られる。

「やっぱり、結界魔法か!!」

浩介はその光景を見をながら訝しげにそう言った。

「やるわね、伊吹さん」

久美は感心しながらそう言った。

「どういうことだ?」

「伊吹さんは、戦いが始まるのと同時に結界魔法を発動させていたのよ。しかし、これは厄介ね」

久美は俺の疑問に答えた。

確かに結界魔法は自分を守るのにも向いている。

「ほう、よく気づいたな、高月浩介。さて、仕返しとさせて貰おう

かの。ル・サージュー!!」

「がは!?!」

無防備な状態をつく、伊吹の魔法弾によって浩介は弾き飛ばされた。

しかし、まだ伊吹の攻撃は終わって無かった。

「まだまだだ。レ・ティエグ・ダグナ!!」

伊吹から放たれた魔法弾は、かなりの速さでまだ宙を舞っている浩介を襲う。

伊吹の魔法弾をすべて喰らった浩介は、力なく、地面に落ちる。

「浩介!?!」

「ツク……………」

傷だらけの状態で、浩介は気丈にも立ち上がった。

「ほう?あれだけの攻撃にも耐えられるか」

「まあ……………な。頑丈なのが僕らの取りえ、だからな。……………でも、ちよつと、これきついから……………リカバリー!!」

伊吹の余裕な様子の言葉に、浩介は答えると、突然呪文なのか、言葉紡いだ。

「な!?!」

「傷が……………消えてく」

伊吹を含めた俺達は、浩介を見て驚いた。

「治癒魔法か。……おもしろい」

伊吹はそれを見てほくそ笑んでいた。

「ふん、何を勘違いしている？これは治癒魔法ではない」

「治癒魔法でなければ、なんだと言うのだ？」

浩介の言葉に伊吹が聞き返す。

「僕がやったのは、自動再生能力を高めただけだ」

「自動再生能力？」

俺は浩介の言った言葉の意味が分からなかった。

「兄さんや私のような魔族は、身体能力が高くなるだけじゃなくて、自らの体の怪我や体力を全て回復させる能力が、自動再生能力。そして兄さんがやったのが、それを最速でやる魔法と言う事」

「なるほど」

俺は久美の解説に頷いた。

と言うより、本当に卑怯だな。

「なるほど、ならば、それを通り越して倒してくれようぞ！！」

伊吹は久美の解説を聞いていたのだが、そう豪語する。

「その前に、一つの芸をお見せしよう」

「なに？」

訝しげに浩介に返す伊吹だが、浩介はそれを気にせず、杖状の

クリエイトを頭の上に構えた。

「幻想卿へと誘おう!!!」

「ま、まさかあれを使う気なの!?!」

久美が慌てたように呟いた。

「な、何よ。知ってるんなら説明しなさいよ!!!」

混乱した柊が、叫びながら、久美に説明を促した。

「ええ。兄さんは、コピー魔法をするつもりよ」

コピー魔法?

俺は疑問に思ったが、それはすぐに解決することになった。

「何をするつもりだ?高月」

伊吹が怪しそくに浩介に聞く。

「まあ、それはこれから見せてやるわ。これが今までの苦勞の結晶だ!!!」

浩介は頭上に挙げていた物を下した。

しかし、手にしていたのは形状は杖だが、七色に光っているものだった。

そして、浩介はそれを一回振った。
するとそれは形状を変化させた。

「え!?!あれは……ソプラノ?」

春姫が驚きの声を上げる。

そう、浩介の手に握られていたのは紛れもなく、春姫のワンドであるソプラノだったのだ。

「行くぞー！デイ・アダプルスー！」

浩介から紡がれた呪文にさらに俺達は混乱することになった。

浩介が唱えた呪文は俺達が使うカルティエの魔法だ。

魔法使いが立てた、魔法理論を他人が勝手に使用することは通常では出来ないのだ。

ただしそれには例外がいて、理論を立てたものが教えるかもしくは立てた者の子供であるかのどちらかである。

しかし、浩介はその二つの例外が当てはまらないにもかかわらず、それを簡単に成し遂げてしまった。

しかも、浩介の放った魔法弾は、初級魔法のはずだが、威力や速度が素早く今の俺たち以上のレベルに昇華されていたのだ。

「他人の魔法式を利用だとー！」

伊吹が慌てたように言う。

放たれた魔法弾は、爆音を立てて伊吹の結界魔法に命中したがいまだ破れてはいなかった。

「まだまだ……」

浩介はそう言うと、再び杖を振った。
すると、次に現れたのは。

「パ、パエリアー!?」

そう、柁のワンドであるパエリアだった。

「オン・エルメサス・ルク・アルサス……」

浩介が柁と同じ呪文を唱える。

「させるか！！ア・ディバ・ダ・ギム・バイド……」

伊吹は攻撃させじと呪文を唱えた。

「エルトラス・レオラー！！」

しかし、浩介の方が早かったようで、強大な魔力を含んだ、魔法弾がいくつも放たれる。

「ル・サージュー！！」

伊吹の魔法弾と、相殺するが、いくつかの魔法弾が、伊吹の結界に直撃した。

「っち！！何なのだ、その魔法は」

伊吹が分が悪いのか、浩介に聞いた。

「そうだな、ここでネタばらしとするか。この魔法はコピー魔法と言い、僕が今まで習得した人の魔法を全て使える状態になると言う、画期的な魔法さ」

浩介は今の魔法に付いて説明した。

と、言うことはまさか……

「まさか私の魔法を使えるとか申すではないのだろうか？」

「使えるぞ。こんなふうにな」

浩介が再び杖を一振りすると、今度は伊吹のワンドが出てきた。

「自分の攻撃を受けるが良い！！ア・グナ・ギザ・ラ・デライド・ラ・デーエ！！」

浩介はそう言うと、天蓋魔法を発動させた。

すると、伊吹が放ったのと同じようにして雨のように矢が放たれる。

「っち！！」

伊吹はそれを防御魔法で防ぐ。

「これでとどめだ！！クリエイト、リミッタ 解除・フルパワー！！」

『了解です、マスター。リミッタ 解除！！』

浩介は、上空に舞った。

「させるか！！」

伊吹から焦りともとれる表情になった。

「ア・デイバ・ダギム・バイド……」

伊吹は魔法詠唱中の浩介に攻撃魔法の呪文を唱えた。しかし、浩介も無策ではなかった。

「縛り上げる!!」

浩介の言葉と同時に、浩介の持つ杖状のクリエイトから二つの光の波が放たれると、それは伊吹を拘束した。

「なに!? 結界越えだと!?!」

伊吹が驚いた声を上げるが、浩介はお構いなしだ。

「集え、裁きの闇。その力は全てを0に戻す物……」

「あ、ああ……」

浩介に集まる魔力の塊に、伊吹が初めて恐怖の表情を見せた。

「み、皆!! 伏せて!!」

「ふごお!?!」

久美の切羽詰まった声と共に、俺達は地面に倒された。

そして、俺は地面に伏せた状態で、浩介を見た。

「ツク!? な、なぜ外れぬ!!」

伊吹は必死に拘束魔法を解除しようとするが、それが出来ずにいた。

「行くぞ!!! プリマテリアライズ……」

その瞬間、クリエイトから魔法球が現れた。

「オーバードライブ!!!!」

次の瞬間、浩介は伊吹に向けてクリエイトを振りかぶると、魔法球はゆっくりと巨大化していき、伊吹を飲み込んだ。

ドゴオオオオ!!!!

次の瞬間、俺達の辺りは閃光と爆音が響き渡った。

そして、先行と爆音が鳴りやみ、俺が目を開けてみた光景は……。辺り一面の草木は無事だが、伊吹のいた場所には伊吹以外全てが消えていた。

それは比喻ではなく、本当に草木が無くなっていた。

「な、なんなのよあれは」

柊は怯えた様な感じでその光景を見ていた。

確かに柊が怯えるのは無理もない。

「す、すい……」

隣にいた春姫は思わずそう呟いていた。

確かに、春姫が呟くには浩介の魔法は十分な技術だった。

俺はもはや言葉には出来ないほど、驚いていた。

自動再生やコピー魔法などは、誰もまねることが出来ない戦闘スタイルだった。

だからこそ、魔法使いのドンなのだろう。

これが浩介の実力なのだろうか？

いや、もしかしたら、まだまだ実力はあるのかもしれない。

「魔法が使えぬ。貴様何をした」

伊吹は浩介の魔法を受けたためか、少し足が震えていたがそれを耐えて浩介に聞いた。

「僕の使った魔法の副作用だ。しばらくは魔法が使えなくなるが、明日には使えるようになるだろう」

浩介は、そう言うところを構えて伊吹の方に突き付けた。

「伊吹、魔法行使不可とみなして、この勝負は僕の勝ちとする」

浩介は高らかに宣言した。

次の瞬間、伊吹は地面に座り込んでしまった。

そして、浩介はクリエイトを下した。

そして、伊吹のそばでしゃがみこむと伊吹に語りかけた。

「なあ、伊吹。もう一度思い出して欲しい。那津音様の意思を」

「姉さまの意思……だと？」

伊吹はオウム返して浩介に言った。

「そう、那津音様の意思是『秘宝を使い、この世に式守の脅威を知らしめよ』だったのか？」

浩介は伊吹に問いかけた。

その時の浩介の表情は悲しみまたは冷静とも取れるような表情をしていた。

「……『式守の名のもとにこの地に安息を』」

伊吹はしばらく考え込み、そして思い出したかのように浩介に答え
た。

「……やっと思い出してくれたんだね、伊吹」

浩介は魔法服の内側に手を入れて、伊吹に“ある物”を渡した。

「これは、もかして」

伊吹は浩介から渡された物をみていた。

「那津音様の竜笛だ」

浩介がそう言うのと伊吹は今まで竜笛を見ていた顔を見上げた。

「なぜこれを御主が？」

伊吹は浩介にそう聞いた。

「これをさつき小雪さんから預かったんだ。伊吹に渡してほしいと
頼まれてね」

浩介は簡潔に伊吹に説明した。

「那津音様がこれを渡してほしいと言っていたらしいよ」

浩介は付け加えるように言った。

「昔、姉さまの目を盗んで吹こうとした時があったのだが、その時はまだ穴に指が届かなくて癩癩を起していた私に『大きくなったら吹けるようになりますよ』と言ってくれたものだ」

伊吹は竜笛を懐かしむように見ながら言った。

「しかし、私には姉さまの竜笛を持つ資格はもうない」

伊吹は悲しい表情を浮かべるとそう言った。

伊吹は気づいたのだろう、自分が犯した罪の重さに。

「そんな事はないぞ、伊吹」

そんな伊吹に浩介は優しく言った。

「そんなはずはない、私は姉さまの意思を踏みにじったのだぞ!!」

伊吹は少しだけムキになって浩介に言い返した。

「確かに伊吹は罪を犯した。でもね、人は誰でも道を踏み外してしまっただ。だったら何をしなければいけない？その罪から逃げる？それとも隠そうとする？それは間違っている。しなければいけない事、それは罪を償い正しき道に戻る事だ。そうすれば僕たちと同じように過ごす事ができるんだ」

浩介は優しく伊吹に言うと浩介は伊吹の返事を待った。

「そうだな。もう一度やり直してみよう。そしていつか護国にも認められるようになってみせよう」

伊吹は竜笛を抱きしめながら、そう言った。

浩介はそんな伊吹を優しく見ていた。

俺達はこれでこの事件は終わったと思った。

そう、思っていたからこそ、聞き逃してしまったのだろつ。

この後訪れる、悲劇の幕開けの言葉を。

「我を纏いし闇に染まれ」

続く。

第34話 決戦（後書き）

これで一応は解決です。

今回は残酷な描写があると思いますので、ご了承ください。

それでは、次回でお会いしましょう

【閲覧注意】第35話 地獄（前書き）

今回は残酷的な描写が含まれています。
読まれる際にはご注意ください。

【閲覧注意】第35話 地獄

伊吹Side

私は、取り返しのつかない罪を犯してしまった。

しかし、高月浩介は私を正しい道に導いてくれた。

私はこれからも罪を償いながら、すもも達と共に過ごすのも悪くないと思っていた。

その力の先にあるもの

第35話「地獄」

「に染まれ」

何かが聞こえたような気がしたので、私は高月の方を見た。

高月は空を仰ぐように見ていた。

そんな時だった。

「な!!」

私はとつさに息をのんだ。

高月の体が一瞬光るとそこにいたのは、髪の毛は銀色で、深紅のよ
うな瞳の色をした高月の姿だった。

「御主はまさか、式守の人間だったのか？」

その姿は紛れもなく式守の人間の特徴だった。

魔力を最初から生まれ持ったために現れる銀色の髪、そして赤い瞳。

「違つ……」

ついさっきの声よりも冷たい声が返ってきた。

「僕は闇の魔法使で、その身に永遠と闇を抱えている。でも、その闇は僕には耐えることは出来なかった」

高月は冷酷な声でそう言った。

「まさか、闇に飲まれたのか？」

私は思い当たる節があった。

闇の魔法使いは自らの体に闇を蓄えて行動をする者。しかし、その闇に飲まれたものは暴徒と化して、ただひたすらに破壊活動を行う。

昔、式守家の蔵でこのような伝記を読んだ事があったのだ。

「だとしたら、伊吹が右手に持っている剣で僕を殺すのか？」

「何？」

私は右手を見ると、なぜか今までは持っていなかったのに剣があった。

「そんなこと出来るわけないだろ……」

私は高月にそう言った。

もし、この剣で高月に対抗できるのだとしても、私は決してやらないつもりだった。

そして、私は何か方法をないかと考えようとしたが、そんな時間は私にはなかった。

「優しいんだな、伊吹は。でももう手遅れなんだ」

高月は一瞬笑ったが再び冷酷な表情をして言った。

「手遅れ……だと？」

私はどういう事なのかが分からず浩介に聞いた。

「自身にある闇の力が暴走した瞬間から、僕には元に戻る方法がない」

高月がそう言った瞬間、体から大量の闇が溢れこの空一体を黒く染めた。

「高月、しっかりするんだ！！」

私は高月に声をかける事しかできないでいた。

「無理だと言ってるだろ？」

しかし、高月から帰ってきたのは冷たい言葉だった。

「私に……私にそなたを殺せとも言うのか？」

「……」

私の問いかけに高月は何も答えなかった。

「馬鹿馬鹿しい……私にそのような事、出来るものか」

私は高月にそう言った。

私には人を殺す事はもう出来ないのだ。

「前、僕を殺したのに？」

「……！！」

そうだった、私は前に高月を殺そうとしたんだ。

「しかし、そなたを殺すなんて……」

私にはできない。

「ほかに方法がないから言ってるんだ。早く、早くしないと」

高月は虚ろな目をしたまま横に視線を向けた。

その先には、突然の事に呆然としていた、小日向や沙耶たちがいた。

すると高月は自分が持っている剣を、沙耶達に向かい振りおろした。

「……！！」

ドカーン！！

その瞬間、辺りに閃光が走り、それと同時に隕石がぶつかったような振動と爆音が響いた。

そして、光が消えた時、私はその光景に啞然とした。

全員が地面に倒れ、そして血を流して死んでいたのだ。

「な、何てことを……」

私はそれを言うので精いっぱいだった。

「言ってるだろ？……早くしないと、僕は……僕は、伊吹を殺してしまう」

「……！！」

高月がそう言った瞬間だった。

剣が私の心臓を狙うように、飛んできたのだ。

間一髪私は持っていた剣でそれを防いだ。

全員の死が恐怖という感情を生み出した。

そして私の中で生まれた感情が溢れ極限に達した。

だからこそ緊張が解け、自分が恐れるほど冷静になってしまった。

「本気なのだな、高月浩介」

そう、気づくのが遅すぎたのだ。

闇の暴走を止められる事はもはや不可能に近いという事。

そして、自分が自分でなくなる前に命を奪ってほしいと高月が望んでいた事を。

そして、私は持っていた剣を高月に向けて構えた。

いくら魔力が強大でも、体に致命傷を与えればそれに耐えきれぬはずはない。

しかし、私は剣の扱いが高月の足元にも及ばない。

さらに、高月の剣捌きには迷いが感じられないのだ。

高月は私の急所を確実に的確に狙ってきている。

油断をすれば私は高月に瞬殺されてしまうだろう。

だから私は高月と同じ覚悟を決める。

残された道はもはや一つしかない。

私がついている剣で高月の命を奪い、暴走を止めるといっ道しかないのだ。

だから、私は声もあげずに高月に飛びかかった。

それに合わせて、高月は再び剣を構え、私に向けた。

そして高月の剣が私の胸を突き、私は高月の胸を剣で刺し貫いた。

お互いの剣を深く刺し込んでいく。

不思議と痛みは感じなかった。

それは、あまりの痛みに感覚がくるってしまったからかもしれない。

そして私は高月を見た。

高月は笑顔だった。

私はようやく気付いたのだ。

高月はきつと、すべての因縁から解放されて安堵の笑みを浮かべているのだと。

これでよかったのだ。

私は最後にそう思い意識を失った。

伊吹 Side End

続く。

【閲覧注意】第35話 地獄（後書き）

次回もまだまだ続きます。

本当に暗いです。

それでは、これにて失礼します。

【閲覧注意】第36話 真実（前書き）

今回は、少々……いやかなりの残酷的な描写があります。
読まれる際はご注意ください。

【閲覧注意】第36話 真実

伊吹Side

「伊吹!」

突然小日向雄真の声が聞こえた。

「……っ!!小日向雄真!?!」

私が声に反応して目を開けるとそこには、高月に殺されたはずの小日向雄真の姿があった。

いや、小日向雄真だけではない。

沙耶たちの姿もあった。

何という奇跡だと私は思った。

なぜなら、全員が無事なのだから。

こんな喜ばしい事はない。

そうか、私が見たのは全て悪い夢だったのか、あの時高月に最後の
一撃をくらって気絶をして眠っている時に見た悪夢だったんだ。

それなのに、どうして皆は恐ろしい物を見ているような目で見
ているのだろうか?

どうして、絶望の眼差しで見ているのだろうか。

その力の先にあるもの

第1章『秘宝事件(終)』

第36話

「真実」

ふんわりと、私の体に重い何かのしかかる。

それは重量の話ではない。

私を感じたのは犯した罪の重さ。

私にのしかかっていた物の正体。

それは、紛れもなく、紛いもなく……。

私を正しき道に導いてくれた人物。

そう、高月浩介だった。

そして私は高月の体を刀身が突き抜けるほど、深く貫いていた。

「そんな私は、高月浩介と相打ちになって、それで」

私は少しだけ混乱していた。

同じように刺し貫いていた高月の剣は影も形も残っていない。

私は無傷のままでした。つかりと地面に足をついていた。

どうして私だけ！？

私は疑問に思っていた。

「……伊吹」

その答えは高月の笑顔で得られた。

彼はこれを望んでいた。

この結末を望んでいたのだ。

「高月浩介！！なぜこのような事を！！」

私は高月にそう聞いた。

「だって僕は、とんでもない罪を犯したんだ。だから……僕は、その罪を償わなければいけないんだ」

高月は私の質問に悲しげな表情で答えた。

「そんな、だからってこんな……」

「これしか……方法がなかったんだ、許してくれ伊吹」

私の言葉に高月はそう返してくれた。

「僕はなんて罪人なんだ、那津音様を殺しておいて、僕はその事を……忘れてのうのと生きているなんて。何が『善を育み、悪を滅せ』だ、そんな信念で動いていた自分がとてつもなく……憎い」

高月は自分を嘲つかのように言った。

「ごめんな伊吹。勝手に自分に対する罪滅ぼしの計画に巻き込んで
でもな伊吹、僕はこれでよかったと思うんだ」

「え……」

高月は私にそう言った。

これでよかった？どうして？

「僕は伊吹が僕に那津音様を殺した事を思い出させてくれた時から、
伊吹になら殺されてもいいと思ってたんだ。いや、殺してほしいかっ
たんだ」

「そんな……」

高月は私が思い出させた時から、この結末になる事を分かっていた
のか？

「でも、これで僕は罪を償えるんだ」

浩介は笑顔だった。

「それにしても驚いたな、僕は二人も人を殺して、ずっと馬鹿みたいに生きているなんて」

高月は自分の滑稽さを笑っていた。

「でも、世界の神々と……伊吹が許してくれるのなら、僕はもう一度言いたい。僕の信念は『善を育み、悪を滅せ』であると。そして僕は自分自身に裁きを下すと」

高月はそう言うつと私の顔を見た。

「伊吹、久美に僕……の……部屋にある……机の中……を見……る……と伝えて……くれないか？」

高月は言葉を途絶えながら私にそう言うてきた。

「分かった、そなたの頼みはしっかりと伝える。だから、もう話すな。今すぐ救急車を呼ぶ」

私は高月にそう言うつと、結界の外にいた小日向に救急車を呼ぶように言おうとした。

「無駄……だよ。僕はもう……助からない」

高月がそう言った途端、高月の全身から力が抜け始めた。

「高月……」

「あり……がとう、い……ぶき。ほん……とつに、あり……がとう……っ。っ。っ。っ。っ。……」

そして高月の目は閉じ、全身から力という力が抜け、がっくりと頂垂れた。

「高月浩介！！しっかりしろ！！高月浩介！！」

私は高月の体を揺すってみたが、高月が目を開けることはなかった。

そして高月は、一柱の光と共に、消えたのだ。

私は地面に座り込んでしまった。

私は高月の言葉を思い出していた。

『望んではいけない希望を望むな、それは絶望と悲劇の幕開けになる』

それはまさしく今の私の状態だった。

そしてすべてが本当の事になり、私は本当に取り返しのつかない事をしてしまった。

私は絶望にかられたのだった。

伊吹Side End

「そん………な」

俺と春姫は目の前の光景に唾然としていた。

俺は浩介が伊吹に魔法をかけたという事がわかった。

それはおそらく催眠魔法だ。

俺はすぐに止めに入ろうとしたが、伊吹が張った結界のために中に入れなかった。

そして、催眠魔法をかけられた伊吹は浩介を、いつの間にか手に持っていた剣で刺し貫いたのだ。

ああ、今なら分かる。

浩介はきつと最初から死ぬ気だったんだ。

そしてあの時、決戦前の時に言っていた覚悟というのは“戦う”ではなく、“死ぬ”覚悟だったのだ。

俺はただ、そこに立っていることしかできなかった。

杏璃 Side

「そんな、嘘だよ、これは夢だよ」

あたしは目の前の光景を見てそう思ったかった。

あいつが、死んだのだ。

「う……」

気づくとあたしは泣いていた。

「それじゃあ、あの約束は……決して一人にはしないんじゃないかなかつ

たの、浩介……」

「う……」

あたしは泣くことしかできなかった。

杏璃 Side End

浩介 Side

僕はすべてを成し遂げた。
やっと成し遂げたのだ。
そして消えゆく追憶の中
僕はこう思っていた。
これで、良かったんだよな？伊吹、と……。

浩介 Side End

Another Side

誰がこの結末を予想したのだろうか？
浩介の姿はもうどこにもない。
あるのは浩介が大事に身につけていたアクセサリーの勾玉のみだっ
た。
それを久美は手に持った。
久美は浩介の勾玉を触らせてもらえなかった。

だからいつか触って見せるんだと気合を入れていた。でも、こんな形で触れても嬉しくはなかっただろう。そして、久美は自分自身に悲しい気持ちを感じたのだ。それは、兄である浩介の約束『僕に何かあったら、久美が先導してくれ』を守ったことだった。それを言われた時は久美は冗談だと思っていたが、それが本当の事になるなんて。

そして他の者はというと。

伊吹と雄真、春姫は目の前の事実には唖然として。

杏璃と、沙耶は泣き崩れていた。

そして、小雪は悲しげな表情をしていた。

そう、彼女だけ気づいたのだ。

だからこそ運命を変えようと浩介と一緒に向かった。

しかし、運命は変えられなかった。

結局どうするかは浩介自身であったのだ。

そして、それを気付けなかった自分に小雪は絶望していた。

こうして秘宝事件は解決した。

尊い一名の命を犠牲にして。

浩介が死んだのと同時刻。

とある場所にある会議室で、若い男性二人が話し込んでいた。

「そうか、浩介が死んだか」

「は、大臣。部下の情報ですと、ついさっきのようです」

「それで亀沼、式守家のものが殺した証拠はあるのかね？」

大臣と呼ばれた男はもう一人の男、亀沼にそう尋ねた。

「はい、ここに、式守家のものが、浩介様を刺した瞬間の写真です」

「ふむ、パーフェクトだ。でかしたぞ、亀沼」

大臣は浩介が刺されてる写真を見て平然と、いや笑っていた。

「ありがたきお言葉、ありがとうございます」

亀沼はそう言う与会議室から出て行った。

黒い髪に青い瞳をして、顔立ちも洪さを出している大臣はそれを横目で見ていた。

部下であるう亀沼は、髪は金髪で瞳は黒という、いわゆるキザ男だった。

大臣は、再び笑うと。

「さて、次はこっちの番だな」

その言葉と共に、大臣は会議室を後にした。

その時、雄真たちは知らなかった。

浩介の死の裏でとんでもない陰謀が渦巻いている事を。

Another Side End

【閲覧注意】第36話 真実（後書き）

これにて、ようやくの第1章『秘宝事件』が完結しました。
ここまで読んで頂きありがとうございました。

この先続きます第2章も、引き続き読んで頂ければ幸いです。

それでは、また次回にお会いしましょう。

中書き

どうもTRです。

『その力の先にあるもの』を読んでいたいただきありがとうございます。

第1章はいかがでしたでしょうか？

この作品を書くきっかけですが、発端は原作の小雪ルートの伊吹との最終戦でしょうか。

あの場面を見て、もし強大な力を相手にしたらおもしろいだろうな
〜と思ったのが始まりです。

と言う訳で、ここでは第1章内に残された謎のいくつか、を解いて
行きたいと思います。

まず第20話の浩介の破門についてですが、浩介の実家……高月家は近年魔法使いだけでなく著名な名家も破門の対象として監視をしています。

これは、魔法使いと人間との共存をするための対策の一つだからです。

魔法使いと人と共存するのに支障をきたす物を叩き潰す……相変
わらず高月家はすごいです。

魔法界の者たちから言えば『幻の家系』としてあこがれの対象です

が、人間側から言えば『名家食い』として恐れられています。

また、高月家は人間界にも大手貿易会社『高月コーポレーション』を立ち上げていたり、財政面では世界一を誇ります。

続いて第21話で登場した、なぞの家政婦さんの正体ですが、もう分かると思いますが、浩介の妹の久美です。

諜報……つまりスパイ活動や情報面では右を出る者がいない優れ者の力の一部です。

さて、こうして第2章へと続くわけですが、第2章のメインヒロインはあの人です。

次章は一部を除きオリジナルストーリーですので、お楽しみいただければ幸いです。

それでは、これからも本作をよろしく願います。

第37話 風穴（前書き）

時間がかかりましたが、第2章の始まりです。

第37話 風穴

「??? Side」

僕は全てを失った。

肉体も、力も

いや、心が残っていた。

（ここは、どこ?）

そこは何もない真っ白な世界だった。

「ここは世界の中心だ」

突如となく聞こえてきた声に僕は心の中で聞いた。

（あなたは誰?）

「俺か?俺の名前は、ザルヴィス」

（ザルヴィスか、何をしに来た?）

「いや、ちょっとだけお主には、自分が覚えてる過去を見てもらおうと思っただけ」

（嫌だ、見たくない）

僕の過去は絶対に見たくない。

「まあまあ、そう言わずに。見ておいた方が身のためだと思うぞー
そして、自分の過去の旅が始まった。

「??? Side End」

その力の先にあるもの 第37話「風穴」

5月6日

「おはようすももちゃんに雄真に、久美ちゃん」

「おつす、雄真すももちゃんそして久美ちゃん」

「おつす八ちに準」

「おはようございます。準さんに八輔さん」

「おはようございます準さんに八チ……何とかさん」

「いや、俺の名前は高溝 八万円よ 違うわい!!」

朝、いつもの通学路で俺達は挨拶を交わした。

八チと準が漫才を繰り広げている中、俺は思っていた。

(いつもと何も変わらないな)

いや、でも一つだけ変わった事があった。

それは、俺達の心に大きな風穴をあけるものだった。

その変わったものというのは、浩介が死んだことだった。

あれから1週間がたち、俺達はいつもの日常を取り戻していた。

「おはよう、雄真くん」

「おつす、春姫」

校門前で待っていた春姫に挨拶をすると、俺達は教室へ向かった。そして昼休み、いつもなら、屋上で春姫と一緒に弁当を食べていたのだが、今日は気分を切り替えて、準たちとオアシスに向かうことになった。

「いらっしやいませ〜って、雄真達か」

オアシスに入ると最初に言われたのはその一言だった。

「おいおい、お客さんにその態度はないだろ」

俺は終に文句を言いながら、空いてるテーブルに着くことにした。

「いいじゃないよ。それより、注文は？」

「え と俺は……」

そして、俺達は注文を済ませると、料理が運ばれるまで待つことにした。

「あ、兄さんも、オアシスですか？」

「ああ、そんなところだ。すももと一緒に食べるか？」

俺は声を掛けてきたすももにそう言った。

「はい喜んで」

すももはそう言つと、隣のテーブルに座った。

「伊吹ちゃんも一緒に座りましょうよ」
「う、うむ」

そして、すももの後ろにいた伊吹と信哉に上条さんもすもも達と一緒に座った。

「それにしても、浩介は本当に死んだのか？」

八手の一言によって日常は崩れることになった。

「……………!!」

「あ、悪い」

八手の一言に俺達は息をのんだ。

「サイテ ね、八手」

「ひどいです。八輔さん」

「馬鹿」

「……………」

「うう……………」

「高溝君……………」

「八手……………」

八手に全員から集中攻撃する。

それは俺達の中では誰もが知っている事実だった。

そして、俺達はそれを考えないようにしていた。

学校は、休学という形になっている。

その理由は浩介の遺言であった。

あの後、浩介の頼みを聞いた伊吹によって、久美が浩介の部屋を調

べたところ、机の上にはワンドが二つ風呂敷に包まれておいてあり、机の中には手紙が入っていた。おそらく決戦前に浩介が書いたのだろう。そこにはこう綴られていた。

『これを読んでいるという事は、僕はもう死んでいるのかな？まあ、生きていれば処分するからね。まず、僕は誰も恨んでいないよ、こくなるのは9年前から決められていたことだったんだ。だから、僕は恨んでいない。恨んでいるとすれば浅はかな僕自身だ。久美に頼みたい事がある。僕が死んだ事は学校には知らせないでほしい。僕の友達でいてくれてありがとう。そしてさようなら』

それには衝撃の事実と、頼みが書いてあった。

9年前、このキーワードが導き出すのは、那津音さんという人が亡くなった時期と一致するらしい。

一体9年前に、浩介の身に何があったのだろうか？

八チと準にはすべてを話した。

ここで起きていた事件。

そして、浩介が死んだこと。

そして、俺達は浩介が死んだ事を無闇に言わないようにしたのだ。

それは伊吹が罪の意識に苦しまないようにするためでもあった。

しかし、八チは禁断の一言を言ってしまったのだ。

「お待たせしました、A定食……って、どうしたのよ、伊吹？」

注文したものを運んできた柊が伊吹にそう聞いた。

「な、なんでもない!!」

伊吹はそう言っていたが、誰から見てもそれは嘘だという事が分か

った。

なぜなら、目に涙を浮かべていたからだ。

伊吹が泣く理由、それは自分の犯した罪だけではない。それは手紙が見つかった時のことだ。

『兄さんの部屋にあった、アルバムを持って来たわ』

浩介の部屋を調べていた久美がワンド（後に、信哉と上条さんのワンドと判明）と手紙と一緒に持ってきたのはアルバムだった。

『あ、これってお花見の時の……』

俺達はアルバムに張ってある写真を、昔を懐かしむように見ていた。

浩介はどういう気持ちでこれを張っていたのだろうか？

『あれ、何か落ちた』

柊がアルバムに挟まれていたために落ちた写真を手にした。

『な！！』

その写真を見た柊は驚愕の表情を浮かべた。

『どうしたんだ？』

『こ、これを見て……！』

柊が慌てた様子で写真をテーブルに置いた。

『『『な！！』』』

それを見た瞬間俺達は驚きの声を上げた。
そこに写っていたのは、巫女服を着た女性と男性の横に浩介がそし
てその前には……。

『私と兄様と伊吹様が……』

上条さんがそう言った。

つまり、伊吹達が子供の時に浩介達と面識があったということだ。

しかし、伊吹達はその写真を見るまではその事を覚えていなかった
らしい。

そして写真を見たことがきっかけで、伊吹は全てを思い出したらし
いのだ。

伊吹の話によると昔魔法を覚えてくれたというものだった。

つまり、伊吹が涙まで流すのは、罪の意識だけではなく魔法を教え
てくれた人を死なせてしまったからなのだ。

「ハチ、どうなったのかは俺にもよく分からないがとりあえず、そ
れを口にするな」

俺はハチにそう言った。

「あ、ああ」

ハチには悪気がなかったのだ。

それは全員が分かっていることだろう。

その後、俺達は無言で昼食を取るのだった。

時間が過ぎ、夜になった。

そして俺は寢室にいた。

そして、俺はふと思う。

（ラジアは浩介が、死んだと思うか？）

俺はラジアの手入れをしながら聞いた。

『分かりません。しかし、浩介さんの魔力反応は私が見える範囲ではありませんでした』

ラジアの言うことはもっともだと思う。

浩介の遺体は何処にもないのだ。

もしかしたら、生きているのではないかと俺は思う。

しかしその可能性が低いとも俺は思う。

心臓を貫かれて平気な人はどこの世界にもいないのだ。

俺はラジアの手入れを終えて、ベッドに入った。

ベッドに入ると、すぐに俺は眠りに付くのだった。

きつと、俺達はこのような日々を送って行くんだろう。

そう思いながら。

第37話 風穴（後書き）

次回は浩介の過去編になります。
それでは、また次回にお会いしましょう。

第38話 過去（前書き）

ここから浩介の過去編です。
そして今回は、少々重い内容です。

第38話 過去

浩介 Side

僕、高月浩介はごく普通の家庭で生まれた。

ちよつとだけ違うのは高月家がかなり有名な家系なのと、僕が魔族だと言う事だけだ。

でもそんな事は気にしていなかった。

だって僕には父さんと母さんがいるから。

父さんの名前は高月宋次郎^{たかつきそうじろう}。

僕と同じで魔族だと言う。

父さんの家系は代々闇と破壊の神を封じているところでもあった。

そして、その役割は僕に移るそうだ。

母さんの名前は東伊彩香^{あずまいさやか}。

父さんの話によると、母さんが笑えば全員が幸せな気持ちになれるくらいの、美しさらしい。

母さんも有名な家系出身でかなりの魔法技術があるらしい。

そして東伊家も代々、破滅の神を封じているそうだ。

こうして僕はいきなり3神の封印の継承をしなくてはいけなくなつたのだ。

でも、はつきりいえば楽しかった。

それがなぜかは分からないが。

そして、僕があこがれていた先生がいた。

その人の名前は兼本知哉^{かねもとちみや}。

外見はとてもかっこよく、いわゆる美男子と呼ばれる人だった。

黒い髪に瞳の色は茶色で、目には気迫があった。

僕の魔法の指導をしている先生だ。

そして、魔法使いであれば全員が目指す最高機関である、国際魔法連盟の法務課大臣だった。

その力の先にあるもの 第38話「過去」

それはある日のことだった。

その当時僕は人間の年齢でいえば4歳、実年齢は40歳だった。

「はい、今日はここまでだ」

兼本先生の終了の合図とともに僕の今日の魔法練習は終わった。

「ありがとうございます！！」

僕はこの時には自然と笑顔を出せていた。

「お疲れ様です、二人とも」

突然母さんの声があったので振り返ると、母さんは良く冷えた麦茶を出してくれた。

「ありがとうございます、母さん」

「どうも」

僕と兼本先生は母さんが入れてくれた麦茶を飲んでいた。

「おやおや、もう鍛錬は終わったのかね？」

すると、父さんもここに來ていた。

ここは庭、と言ってもかなり広くて、東京ドーム1000個分の敷地

があった。

「ええ、息子さんの上達度はすごいものですよ。教えれば2回目ですべて成功させるのですから」

先生は僕を褒めてくれた。

僕は少しだけ照れて、下を向いてしまった。それを見ていたみんなに笑われてしまった。

「ところで、息子の基本属性はわかったかね？」

父さんは話を変えて先生にそう聞いた。

そう、この時僕には困った問題があった。

それは基本属性がわからない事。

普通魔法使いは、魔法が使える年になれば、基本属性がわかるようになるのだ。

しかし、僕は基本属性がわからなかったらしい。

基本属性によって魔法の練習メニューは組まれるので、これではすべての属性の練習をしないといけない。

しかし、もし扱う事の出来ない属性の練習をしたら、大事故にもつながってしまう。

そんな僕に出された病名は『先天性属性麻痺病』だった。

先天性属性麻痺病とは何らかの理由で属性コントロールが麻痺している状態の事だ。

治療法には全属性をまんべんなく使えるようにして、基本属性を見つけないといけないのだ。

しかし、この治療法をしたがために事故によって、命を落とした魔法使いも多い。

しかし、僕はその問題点を軽く乗り越え、そして、全属性の魔法使用が成功したのだ。

あとは、基本属性を調べるだけで終わりである。

「息子さんの基本属性はおそらくですが、光属性です」

先生はそう言った。

「本当かね!!」

先生がそう言った瞬間父さんが先生に聞き返した。

「ええ。しかし、まだはつきりとは分からないのですが、一応目安にと」

先生がそう言うのと父さんと母さんは二人して喜んだ。

「やったわ、あなた!! ついに光属性の魔法使いが出るんだわ」

どうやら、父さんの家系と母さんの家系は闇属性の魔法使いしか生まれてこなかったらしい。

だからこそ、もし子供が生まれたら、その子の基本属性は光属性がいいと思っていたらしい。

「ただし息子さんは、闇属性の魔法を使う事が出来るのも忘れないでください」

先生が喜ぶ二人にそう言った。

そのあとは属性をもう一度調べて先生は帰った。

そして僕は光の魔法使いになったのだ。

それでも僕自身は何も変わらなかった。

その夜の事である。

「ねえ、父さん」

「サイホリング号に入りたいと言うのなら、だめだ」

「ムー、いいじゃない別に」

僕は父さんに頼みごとをしたのだが、断られた。

それも当然だ。

サイホリング号と言えば、当時は国際魔法連盟のトップの職員じゃないと入る事が許されない宇宙船だったのだ。

僕はそこに見学に行きたいとお願ひしたのだが今日と同じ風に断られたのだ。

しかし今日は違った。

「と言いたいのだが、負けたよ。分かったそのお願ひ聞いてやろう」

父さんはそう言うのと僕の頭をなでた。

「ありがとう父さん！ー！」

「あはは、その代わり、勝手な行動はしない。いいね？」

「はい」

僕は父さんにそう言った。

「うむ、素直でよろしい。では来週に行くとしようか」

「ありがとう」

僕は正直驚いていた。

なにせ、あの頑固な父さんが折れたのだから。

それから一週間はとても楽しみにして過ごしていた。

あれ？僕の基本属性って光だったっけ？

突然始まった奇妙な旅の中、僕は考えていた。

「違う、今の基本属性は闇だ」

「なぜだ？」

「そうか、あの時に変わったのか」

そして、時間はあの時間へと進んだ。

それは父さんがサイホーリング号に連れて行ってくれると約束した日だった。

僕は父さんとそして兼本先生と一緒に、いろんな場所を案内してもらった。

中の構造は普通の宇宙船と同じで、横にはたくさんのドアがあった。

ドアはセンサー式のように、近づくと開くものだった。

そして、ある通路の入り口のドアに近づくと、ドアは開かなかった。

「これはね、この鍵で開けるんだ」

兼本先生がそう言うと、懐からカードのようなものを取り出した。そして、それを差し込み口に差し込むと、ドアが開いたのだ。中に入るとまず思ったのは少しだけ暗いという事。

そして、通路の途中にあった脇のドアを開いてさらに進んだ。そして奥にあったのは大きな扉だった。

父さんは扉を開けると、僕に中に入るように言った。僕は父さんの言う通りに中に入った。

「ここはね、冷凍食品などを冷凍するための冷凍庫なんだ」

父さんはそう説明してくれた。すると突然ドアが閉められた。

僕はドアを開けようとしたが、どうやら完全に鍵がかけてしまったようだ。

僕は魔法でドアを壊そうとしたが、魔力を注入することすらできなかった。

どうやら、魔法が使えないように封印されているらしい。どうして？

僕はその疑問だけしかなかった。そして、ようやく気付いたのは一つだけ。

それは僕が二人に騙されたという事だけだった。

そして次の瞬間、冷凍システムが動き始め、冷凍庫内はどんどん寒くなってきた。

そして僕はそのまま、長い眠りに就いた。

そうか、父さんは知っていたんだー

ー僕の力が危険だと言う事をー

ーだから、それが出来ないうちに僕を封印したのか

あれから何年たったかわからない。
5年？10年？それとも15年？
僕は長い間眠っていた。

しかし、その眠りから覚めることになる。
僕は冷凍システムが起動しているのにもかかわらず、起きたのだ。
温度は余裕で 200度になっていた。
そして、僕は扉を破壊した。
扉はものすごい爆音とともに、飛ばされた。
僕は冷凍庫から脱出したのだ。
しかし、ここで記憶がなくなった。

「あれ？」

僕は気付くとドアの前にいた。
そして、なぜか手の先に血が付いていた。
僕はどこかで切ったのかと思い部屋に入った。
するとそこで僕が見たのは、先生が血を流して倒れている姿だった。

僕はすぐに駆け寄りながら、僕は思っていた。

(もしかして、先生を殺したのは僕?)

それならば手の先についていた血も納得がいくからだ。

「先生、先生!」

僕は先生を揺ると、先生は意識を取り戻した。

「先生!!すぐに医者を呼んできます!!」

僕はそう言うと外に行こうとしたが、先生に腕を掴まれたので、僕は先生のそばに座った。

「どうしたのですか、先生？」

「いいのだよ。私は……たぶん……助からないだろう」「そ、そんな」

僕は先生の言った事に絶句してしまった。

「君は悪くない。悪いのは私だ、君を騙したのだからね」

先生は僕の事を励まそうとしてなのかそう言った。

「そんな、先生は……」

「そうだね。ならば高月浩介君、私から……お願いがある。聞いてくれるかな？」

「はい、僕にできる事なら何でも」

僕がそう言うと先生は微笑んで願いを言った。

「これから、国際魔法連盟法務課大臣になって、私の意思『善を育み悪を滅せよ』を継いでくれないか？」

僕は先生の願い事に絶句した。

そもそも、簡単に法務課に入るなんて事は出来ない。

「大丈夫だよ、君ならできる。私には自分の意思すらも果たせなかった。だからこの意思を君に浩介君に託す。そして、たぶん君の父親は強引に法務課に入れるだろう。この願いを引き受けてくれるかな？」

先生は優しく僕にそう言った。

これが先生に出来る唯一つの償いならば、僕の答えなど決まっているも同然だ。

「分かりました。高月浩介は兼本先生の意思を引き継ぎます!!」

僕がそう言うと先生は笑ってくれた。

「ありが………とう」

そしてそれが最後の言葉だった。

僕の意識はここでなくなつた。

そして僕が目覚めると父さんの姿があった。

僕は父さんに報復を受けると思っていたが、父さんは僕に頭を下げた。

「悪かったな、嫌な気分にならせてしまって。兼本についてだが、今回はまあ、暴走していた事だし不問にしよう。その代わりに、国際魔法連盟法務課に入ることが条件だ」

僕はこの時やつぱりと思った。
先生は強引に法務課に入れようとすると言っていたが、本当にするとは思わなかった。

「わかった」

僕は先生との約束を守るため、先生が果たすことができなかった信念を果たすために法務課に入閣した。

そのあと、僕を永遠に法務課大臣にするという法律を、立法して可決されたらしい。

反対した者はいなかったのだとか。

しかし、僕にはそんな事には関心がなかった。

なぜなら、僕は新たな問題を抱えていたからだ。

それがあいつだった。

僕が封印されてから20年の時が経っていたらしい。

周りの環境はかなり変わっていた。

それは景色だけではない。

家庭までも……。

それは封印が解かれて初めて家に帰った時だった。

「ただい……ま」

僕は思わず啞然とした。

そこには知らない女性と、少女がいた。

少女は黒髪で、瞳の色は僕と同じ赤だった。

パツと見では少女は顔立ちが整っていて、美少女と呼ばれてもいいぐらいだった。

女性の方は少女の母親だという事が分かるくらいに、よく似ていた人だった。

「お帰りなさい、浩介」

「お帰り、兄さん」

僕は何のことかわからなくなった。

兄さん？

僕には妹もいなければ、兄さんと呼ぶ人もいないはずだが？

「ああ、言い忘れてしまった」

僕が頭を抱えていると父さんは、いま思いついたという表情でそう言った。

「この人は、小永井^{こながいあかね}絢音さんだ」

なるほど親戚の人か。

しかし、やけに馴れ馴れしいのはなぜだ？

「そして、今は高月絢音さんだ」

「えー!!」

今は高月……。

「父さん、僕の母さんの名前は東伊彩香だよね？」

僕は絶るような気持ちで父さんに聞いた。

「……浩介、彩香さんとは離婚したんだ」

父さんの言葉を聞いて、たらいを落とされたような衝撃が頭を駆け

巡った。

僕が封印されている間に父さんたちは新しい家族を手に入れていたんだ。

そして、その子供まで。

「改めて、高月久美子です。よろしくね、兄さん」

しかし、僕の心は怒りという負の感情が支配した。

僕は裏切られて封印されていたというのに、自分だけ、のうのうとここで幸せそうにしているなんて。

そして、今こいつを妹と認めれば、確実に前の母さんが母さんでなくなる。

だから僕は……。

「兄さんと呼ぶな。二度としゃべるな!!」

あいつを突き放した。

それから数日間、僕はちゃんとあいつの食事を作っている。

あいつらは、僕の家泊まりに来ているだけだ、と思いきませて。

父さんにも、いい加減仲よくしてくれと言われたが、僕はそれを拒

否した。

しかし、運命とは残酷で、この状態が崩れる時が来たのだ。それはとても暑い夏の時期だった。

僕は、夕飯の食材を買った帰りだった。

「ん？」

僕は一瞬少女が複数の金髪の男たちに連れ去られるところを見た。見たからには、そのまま野放しにはできず僕は買った食材を異次元にしまうと男たちの後を追った。

「な!!！」

僕は男たちを付けていくと、とんでもないのを見た。何と連れ去られていたのは僕が嫌っていたあいつだった。

「兄さん!!！」

あいつは僕を見つけると、助けを求めた。

「だれだあ、てめえ!!！」

男たちはあいつの声に反応して、僕を威嚇した。しかし、奥からリーダーと思われる男が出てきた。

「ここは俺に任せな」

リーダーの男はそう言つと僕と向き合った。

「あんた、法務大臣だろ？」

そしてその男はそう言った。

「俺たちはよ、あんたのためにやってやったんだ。噂では、あんたこの女嫌ってるみたいじゃねえか。だったらよここは俺たちと一緒にこの女を殺さねえか？」

何と男は僕と一緒にこいつを殺せと言ってきたのだ。

「兄さん……」

あいつが、僕を呼んだ。

しかし、僕は男の一言で心をかき乱された。

しかしこの乱され方には覚えがあった。

「あんた、マインドマジシャンか」

「ほう、よくわかったな」

マインドマジシャン、それは人の心を乱れさせ、魔法を使えないようににする魔法使いの事だ。

心が乱れていれば、まともな魔法も打てなくなる。

しかし、僕はその事を既に知っていたそして、対象法も。

僕は目を閉じて思い浮かべた。

それは数日間の事だった。

あいつは嫌だったが、今までとは違ってとても賑やかだった。だったら僕は何をすればいい？

そして、僕はようやく自分に対して答えを出すことができたのだ。その答えは。

「あが!!」

僕は俊足であいつを捕まえている、男に蹴りを入れた。

「てめえ、何しやがる!!」

「兄……さん？」

「確かに僕はこいつの事が嫌いで、殺したいほど憎い」

僕は言葉を紡いだ。

「しかし、人の弱みに付け込むあんたらはもっと嫌いで、殺したいほど憎いんだ!!」

「そうか、愚かな者だ」

するとどこから現れたか知らないが30人ほどの仲間たちが出てきた。

「殺せ」

リーダーの男が部下にそう言うと部下たちは一斉に攻撃してきた。僕はそれを久美を抱えながら飛んで避けた。

「に、兄さんどうするの!!」

普通の魔法使いなら慌てるのが普通だ。

しかし僕はこんな状況には慣れていて、これの1000倍以上の相手もしたのだ。

そして、このために練習したのだ。

「喰らえ、悲惨竜剣!!」

「ぐギャー!!」

僕が腕を薙ぎ払いながらそう言つと、僕の周りに剣が出来て、そばにいた男たちは一斉に吹っ飛んだ。そして残つたのは……。

「ひ！！来るな！！来るな！！」

リーダーの男一人だった。

僕は僕の魔法を見て固まっているあいつにカツを入れた。

「何時までも固まってるな！！僕の妹になりたいんなら、僕の妹にふさわし強さを見せるんだな。行くぞ！！久美子……いや、長いから久美で良い」

僕はそう言つとリーダーの男、久美、僕で三角形の位置についた。どうやら、久美は僕の意味を読み取つたらしい。

「行くぞ、久美！！」

僕は久美にそう合図を出した。

「分かつたわ、兄さん」

久美はそう言つて杖を構えた。そして、僕もかまえた。

「「ラウネド・リア・フレインド・ラストティア……」」

そして、呪文を紡ぐ。

僕達が紡いでいる呪文は光属性で必殺技とも言えるものだった。

「ルミネア・ラシナグ!!!」

そして、僕たちの杖から高濃度の光が放出され、向かう先は一寸の狂いもなく。

「ウギヤー!!!」

リーダー格の男だった。

「これで終わりだ、良くやったな、久美」

「!!!ありがとう兄さん」

今思えば僕はこの時に、久美を家族として認めたのかもしれない。

「でも、久美にはこれからは厳しい魔法の練習があるから、覚悟しとけよ」

僕はそう言うと久美は怯えた表情をした。

はつきり言えば楽しかった。

しかし、こんな楽しい時間も長くは続かなかった。

「あぐ!?!」

「に、兄さん!!!」

僕は突然胸が痛くなるのを感じて、倒れたのだ。

「……………くッ!!!」

「兄さん起きたんですね!!!」

気がつくとも僕は病室にいた。
そのあと医者にいる調べてもらって分かった事があった。
それは、基本属性の転移。
元々基本属性は光だったのだが、それが何らかの理由で闇に変わったのだ。

父さんはこの事を聞いた時に、少しだけ悲しげな表情をしていた。
結局僕は、1日だけ入院する事になった。
そして、その夜は中々寝付けなかった。
当然である、いきなり“光”の魔法使いから、“闇”の魔法使いになったのだから。

だから僕は少しだけ外を歩くことにした。
もちろん今は夜、病院は不気味なくらいひっそりとしていた。
すると、どこから何か声が聞こえたので僕は近寄ってみた。

「あなたのお子さん、高月浩介君の事ですが……」

僕は医者言葉に息をのんだ。
そして僕は続きを聞くことにした。

「彼の基本属性が変わった理由ですが、推測ですがわかりました」
「本当ですか！先生」

医者の言葉に父さんがやや、興奮気味に答えた。

「ええ、推測ですが原因はおそらく、3神だと思われます」

3神……この言葉を聞いた時、僕は昔の事を思い出していた。

それは、今日から数日前の事だった。

朝起きると、枕元に見た事もない剣があったのだ。

僕はその剣について覚えがあった。

確か、高月家代々に伝わる伝説の剣である『勇者の剣』と呼ばれるものだ。

勇者の件はその名の通り、勇気のあるものにはしか扱えず、現れる事がない。

そして、この剣を扱える者には、強大な力を得ることになる。

この事を高月家の文庫で読んだ事があった。

そして僕は、高月家の森に向かう事にした。

その森は、朝にもかかわらず少し薄暗いところだった。

そして、しばらく歩くとそこには、石碑があった。

この石碑は前に僕が偶然見つけたものだった。

石碑には文字が彫られていて、こう書かれてあった。

『その力を得たければ勇気の暁を示せ。されば、我らは勇気ある者の力になる』

僕は持ってきた勇者の剣を石碑に掲げてこう叫んだ。

「我の名は高月浩介。高月家当主、高月末次郎の息子なり。我が示

し、勇気の暁をもとに我に力を与えたまえ」

『その力で何をする？』

すると突然、誰もいないのにもかかわらず、声が聞こえてきた。しかし、僕はその声におびえずに言った。

「我はこの力で悪を滅ぼし善を育み、そして我の大切な友人、また人を助ける」

『……さようか。ならば答えよう、高月浩介。これからは御主が我らの主だ』

そして、その声はそれぞれの名前を言った。

それが3神、破滅の神、破壊の神、闇の神だった。

そして、そのあと僕が覚えているのは優しい光に包まれるところだった。

「この調査結果ですが、魔力の値がかなり上がっています。このままですと、暴走を起こす可能性があります」

「そうか。では記憶を消そう。息子の力に関する記憶を消して、3神を封じ込めるんだ」

「分かりました、それでいつおやりになりますか？」

「そうだな、4日後だな」

父さんたちは僕の記憶を消して、3神を封じようとしていたのだ。彼らがどう思うのかは知らないが、僕は3神の事を友人だと思っていた。

だからこそ、許せなかった。

でも怒ったところで何もできない。

ならばできる事をしようと思えば僕は病室に戻った。

そして、次の日。

今日は連盟に出勤しなくてもいい日（つまり非番なのだが）なので久美を庭に呼び出した。

「兄さん、何のよう？」

久美がそう聞いてきたので、僕は久美にあるお願いをした。そして僕の記憶は、そこからなくなっていた。

いったい、いつまで過去の旅をするんだ？

そう思った瞬間、周りの景色が変わった。

どうやらまだ、過去の旅は終わらないようだ。

浩介 Side End

第38話 過去（後書き）

次回で8年前の真実が明るみになります。

それでは、また次回でお会いしましょう

第39話 真相（前書き）

今回で9年前の真相が明らかになります。

第39話 真相

浩介 Side

「はあ……」

僕は目の前の光景を思わずため息が漏れた。
なぜなら、その光景とは……。

「く、やるな、宋次郎……」

「そっちこそ、護国」

馬鹿二人が倒れているところだった。

こうなったのも、父さんが護国さんに喧嘩を吹っ掛けたからだ。
それは今から2時間前の事。

「おい、護国。俺と戦え」

僕と父さんは、長期休暇で魔法が精通しているこの世界に来た。

その後、この世界で最も名が知られていた名家である、式守家に向
かったのだが……。

あるうことか父さんは、式守護国に挑戦状を叩きつけたのだ。

最初は、向こうも断っていたが父さんの挑発にまんまと乗り、この
状況に至る。

その力の先にあるもの

第39話「真相」

「あらあら、二人ともどうされたんですか？」

そんな時、僕は女性の声が聞こえたので聞こえた方を見ると、そこには銀色の髪に、目は赤く巫女服を着ている、式守那津音様がいた。

「ええ、父さんが挑戦状を叩きつけて二人して戦っていたんです」「それが、このありさまね」

那津音様は呆れたように言うと言つと僕に下がるように言った。

僕は言われたとおりに下がると、那津音様は竜笛に口を付けた。

「幻想曲、第9楽章、精霊の慈悲」

竜笛からゆつくりと流れ出した旋律は、瞬く間に父さんたちを薄い光で包み込んだ。

しかし、すごいのは那津音様の魔法だ。

普通この魔法には、呪文が必要になる。

しかし那津音様は、それを音に乗せているのだ。

そして、那津音様が父さんたちを運ぶのを、僕は手伝った。

那津音様の優しさなのか、それとも那津音様が使っていた魔法が素晴らしかったのか、理由は分からないが次の日に僕は、那津音様に魔法を教えてほしいとお願いした。

那津音様はそれを快く了承してくれた。

父さんも何だか言っていたが、最終的には僕が魔法を教わるのに賛成してくれた。

それから僕の魔法の練習は始まった。

「今日はここまでね、お疲れ様、浩介君」

「ありがとうございます。那津音様」

「……浩介君、様じゃなくて、さんね。少しの間とは言っても、今は家族の仲間入りをしているんですから」

実は、魔法を教えてもらう事をお願いした時に那津音様……じゃなかった、那津音さんは自分の事を姉さまと呼んでほしいと言ってきたのだ。

さすがに姉さまと呼ぶのは嫌だったので、僕は何とか那津音さんに頼んで、さんと呼ぶことで了承してくれた。

それから数日間練習したおかげで、僕は幻想詩と幻想曲を奏でる事ができるようになったのだ。

そして今いるのは、式守家の庭だ。

式守家の家は和風を感じさせるような構造のため、地面は芝生で竹と岩がぶつかり合う、心地よい音も聞こえた。

「それじゃ、浩介君。ついでで悪いのだけど、あの子たちの鍛錬にも付き合ってくださいか？」

「ええ、もちろんですよ」

これもいつもの日課になっていた。

あの子たちと言うのは……。

「浩介お兄様!!」

「浩介兄様!!」

「浩介殿!!」

那津音さんの義理の妹である式守伊吹と、代々式守家の護衛をしている上条信哉とその妹の沙耶だ。

伊吹は僕の事を『浩介お兄様』と、沙耶は『浩介兄様』と、そして信哉は『浩介殿』と呼んでいる。

「遅れて悪いな、みんな」
「いいえ、大丈夫ですよ」

伊吹が3人を代表して笑顔で言ってきた。

「それじゃあ、始めるぞ!!」

「ハハはい!!」

そして、僕たちはそのあと2時間鍛錬を続けた。
鍛錬といっても色々な物がある。

集中力を効率的に鍛える『精神』の鍛錬に、魔力濃度を効率的に鍛える『魔力』の鍛錬に、攻撃方法や、相手と戦う際の技術を鍛える『戦法』の鍛錬が主な物だ。

僕が教えていたのは戦法だ。

伊吹達に教えたのは、それぞれが今まで使っていた戦法をアレンジした戦術とマジックワンドを使用した攻撃法だ。

マジックワンドも使いようによっては打撃系の武器になる。

ただ、教える際に3人に言ったのは自我があるときは、ワンドに断つてからやるようにということだ。

いきなりやるのは色々な意味でよろしくない。

それから数日後、事件は起きた。

「伊吹、どうした?」

今日は式守家の集会のため、護衛以外は誰もいない日だった。

「何らかの気配を感じます」

僕は庭掃除をしながら遊んでいる3人を見守っていると、伊吹が少しだけ表情を険しく言った。

次の瞬間だった。

「グアー！！！」

「きゃ！！！」

何と飛び出てきたのは、前に那津音さんにかなりの被害が出ていると聞いた種類の魔法生物だった。

その魔法生物は一見すると狼に見える。

そして、伊吹は驚いたのか、その場に固まっている様子だった。

僕はとつさにヴァイオリンを構えた。

「幻想曲、第3楽章、精霊の加護！！！」

僕はそう唱えて、ヴァイオリンをはじくと周りに神々しい光が放たれて、魔法生物の攻撃を防いだ。

「幻想曲、第2楽章、雷鳴の祭殿！！！」

そして間髪をいれずに雷の攻撃魔法の音を奏でる。

「ガギャー！！！！」

魔法生物たちは雷の直撃を受け、その場に倒れた。

「お見事です。浩介殿」

信哉が尊敬したような表情を言ってきた。

「ありがとう信哉」

僕はそんな信哉に礼を述べた。

「しかし、浩介兄様のその姿にはまだ慣れませんか」

「そうか？」

幻想詩を初めて使った時に分かったのだが、僕が幻想詩や幻想曲を使うとしばらくの間、髪の色が白くなり瞳の色が深紅に変わってしまうのだ。

しかし、それも少し経てば元に戻るため何にも問題にはならないのだが、この姿の間は身体能力がかなり向上されていて走る速さなどが、普通の状態より速くなるのだ。

「しかし、魔法生物が数匹逃げに行った。このままにしているも問題だから、僕は魔法生物を追うから信哉たちはここにいてくれ」

僕は信哉達にそう言った。

「分かりました。浩介殿、ご武運を」

「どうも」

やけに古い言葉を使う信哉にもう慣れていた僕は簡単に礼を言うと言った。

「いた!!」

しばらく走ると、そこには金髪でストレートの髪型の少女に今にも飛びかかって切り裂こうとしている魔法生物が見えた。

僕は少女の前に飛び込み、魔法生物の攻撃を防いだ。

とっさにかけておいた結界魔法によって魔法生物の攻撃は全く効かなかった。

「すぐに終わらせるからな」

僕は少女にそう言って魔法生物の方を見た。

魔法生物の数は10匹、この状態も長くは続かないから出来るだけ早く倒した方がいい。

そう考えた僕は、ある方法を思いつきヴァイオリンを構えた。

「幻想曲、第4楽章、精霊の怒り」

僕が音を奏でた瞬間、魔法生物たちは吹っ飛んだ。

それは誰にも見えない速さだった。

「もう、大丈夫だよ」

僕は後ろで泣いていた少女を慰めた。

話を聞くに、どうやら両親とはぐれてしまったらしい。

「そうか。でも大丈夫だよ、お兄さんがすぐにパパとママを見つけてあげるからね」

僕はそう言うと少女の頭に手を乗せて集中した。

「だから、今は眠っていてね」

僕がそう言うと少女は寝てしまった。

「さて、これで僕が元に戻れば見つからないかな」

僕はこの世界にとっては異端の存在、だからこそ今の状態に戻る前

に、眠ってもらうしかなかったのだ。

「幻想曲、第1楽章、精霊の恵み」

僕は音を奏でて搜索型の魔法をかけた。

すると、少女の両親がいる場所が脳裏に座標として浮かんできたので、その場所に行くことにした。

その場所に向かう途中で、僕はもとの状態に戻った。

「……りー！」

「ここも記憶がまばらになっているな」

僕は無事に少女を両親のところへ連れて行った。

「その子ですけど、一度魔力の有無を確かめた方がいいですよ」

僕が両親のもとに向かう時に分かった事を両親に伝えた。

「それでは失礼します」

僕に言われたことに対して、固まっている両親にそう言つと足早にその場を去った。

そのあと、那津音さんに魔法生物を退治したことをほめられたのは少しだけ嬉しかった。

しかし、そんな楽しい日常に幕が下りてしまう事件が起こった。

それは事件が起きる1日前。

「崇谷さん、こんにちは」

「こんにちは浩介君、いつも息子たちがお世話になっているようで、

いつもありがとうございます」

庭の掃除をしている僕の前に、和服を着こんだ男性がいた。男性の名前は、上条崇谷いい、言うまでもないが、信哉と沙耶の父親である。

ちなみに式守家では普段、式守家の式服を着ている事がルールなため、用事で外に行く以外では僕も式守家の式服を着ている。

「いえ。それより崇谷さん、何かお悩みの事がありますか？」

「いえ、特には。しかし、なぜですか？」

宗谷さんは僕に不思議だなという表情で聞いてきた。

「いえ、何か悩んでいるように見えましたので。余計なお世話でしたら、謝りますが……」

僕がそう言う宗谷さんは笑顔で言った。

「いいえ、大丈夫ですよ。心配していただきありがとうございます、それでは私はこれで」

この時僕に力があれば、この後の事件を防げたかもしれない。

そして、事件当日。

「浩介様、緊急事態です。至急、護国様の部屋に向かってください。

夜に、寝る準備をしていると式守家の家政婦さんが、僕のところに血相を変えてきた。

この時僕は、胸騒ぎを感じながら、護国さんの部屋に向かった。

「突然で悪いな、浩介君」

僕が護国さんの部屋に案内されるとそこには那津音さんと護国さんがいた。

そして、僕は用意された座布団に座ると護国さんは用件を話しました。

「手短に言おう。危険な物とされる『式守家の秘宝』が発動された。今は暴走していると思われる」

護国さんは真剣な表情で言ったが、僕はある疑問があった。

「すみません、『式守家の秘宝』とは何ですか？それになぜそれが発動しているのかと、誰が発動させたのかも良ければ聞きたいのですが……」

僕の質問に護国さんはしばらく考えると再び僕の方を向いた。

「良かろう、それでは話すでしょう。まずは『式守家の秘宝』につ

いて話すでしょう」

護国さんはそう言うすべてを話してくれた。

「式守家の役割が何なのかは御主に分かるか？」

「はい。確か死者の魂を封じる事ですよね」

僕は護国さんの問いに素直に答えた。

「そうじゃ。そして封印をするのが秘宝なのだ。そして、いつしか秘宝が式守家の当主の証になり、何年も継承されていた」

護国さんはそこまで言うと言話を区切った。

「しかし、秘宝は時代が経つと共に力が強くなり、今では誰にもあれを制御できる者はいない。制御ができなければ封じられている魂が形をなして、暴走を起こすことになる」

護国さんは今の秘宝の状態を話した。

つまりは、魔法使いの証を取ろうとするあまりに、秘宝が暴走してしまったのだろう。

「次に、『なぜそれを発動させた』については秘宝を完璧に制御をする事が出来れば、死者を蘇らせることができる文献にはある」

僕は護国さんが言ったことに衝撃を覚えた。

まさか秘宝にそんな力があるとは思いつかなかったのだ。

「そして、最後の「誰が発動させたか」については上条崇谷だ」

僕は護国さんの言ったことが信じられなかった。

「今は御薙、高峰の当主達が何とかしておるがそれも時間の問題だよ。よって那津音と浩介君には使鬼の間に向かい、二人の救出および秘宝の鎮静をしてくれないか？」

「分かりました」

僕と那津音さんは護国さんの頼みに即答で答えた。

そして、僕と那津音さんは使鬼の間に向かった。

僕がそこで見たのは、想像よりもすごかった。

幻想的な大きな水晶体、そして辺りは青い鬼が辺り一面にいた。

「行くわよ、浩介君！！」

僕は、那津音さんの合図を聞くと一斉に鬼たちを蹴散らす音を奏でた。

「幻想曲、第2楽章、雷の祭殿！！」

そして辺りに雷が落ち、鬼たちは少しだけ減らすことが出来た。

「すーちゃん大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。ありがとう那津音」

すーちゃんと呼ばれた女性は、那津音さんの友人なのだろう。

そしてその女性が僕の方を見ると、那津音さんに何かを聞いた。

「那津音、あの子は誰？」

「お二人ともあまり話している時間はないですよ」

僕は二人にそう言った。

その瞬間、3人ともはっとしたように鬼たちを睨みつけた。

「どうする、那津音？」

黒髪の女性が那津音さんに聞いた。

「それは、決まっている。倒せばいいんだ！！」

僕は那津音さんが何かを言う前にそう言うと、僕は鬼たちの前に出た。

「我が名は大森浩介、我が名をその身に刻め！！」

僕はそう言うと、魔法式を幻想曲から得意の神魔法に切り替えた。

僕の姿は例のごとく、深紅の瞳に白髪の姿だった。

手を見ると、手の周りが赤紫色の光に包まれていた。

手だけではなく、体全体が赤紫色の光に包まれていた。

おそらく、ここには魔力が大量にあるために、それに感化されてオーラが出ているのだろう。

そして、僕は目の前にいる鬼を蹴散らし始めた。

しかし、いくら鬼を倒しても、次から次へと鬼は湧いて出る。

これじゃ、いくらやっても無駄だった。

「ダビス・デ・バート」

広範囲系の攻撃魔法を唱えた瞬間辺りの鬼たちが消えた。

しかし、僕の前に鬼たちがまた現れたのだ。

「浩介君、危険だわ！！」

那津音さんの忠告が聞こえたが僕はもう一度鬼たちに向き直った。

「いくらでもこの僕が蹴散らそう!!」

そしてそれから数十分経った。

「ぐは!!」

とうとう僕は膝をついてしまった。

「!!」

鬼たちが僕に向かい拳を降りおろした。

僕はもう駄目だと思いながら目を閉じた。

「幻想曲、第3楽章、精霊の加護!!」

しかし、それは那津音さんの結界によって防がれた。

「大丈夫よ、浩介君。私が秘宝を封印します」

那津音さんがそう言うと二人の女性が反対をした。

「駄目よ、そんな事したら那津音が……」

「僕も……反対です」

僕も二人と同じように反対した。

しかし、那津音さんは首を横に振った。

「ありがとう。でもね、私がやらないといけないのよ」

那津音さんはそう言うと秘宝の前に行き、竜笛を口に当てた。そして、竜笛の音がこの場を包んだ。

そして、辺り一面にまぶしいぐらいの光が漏れた。

光が消えて、僕が見たのは倒れている那津音さんの姿だった。

「那津音さん!!」

僕はすぐに那津音さんの元に駆け寄った。

しかし、那津音さんは目を開ける事はなかった。

その後、僕は自分の知っている治癒魔法をかけてみたが、それでも彼女は眼を覚まさなかった。

ここから先の記憶はない。

あるとすれば……。

僕は伊吹の寝室の前にいた。

そして、寝室の襖を静かに開けると、そこには気持ちよさそうに眠っている伊吹の姿があった。

「ごめんな伊吹。僕が弱いばかりに、だからせめて

」

僕はそう言いながら伊吹に記憶の封印の魔法をかけ、そして別の記憶を植え付けた。

その記憶は僕が宗谷さんを脅迫して秘宝を発動させ、そしてそれを鎮静化させようとした那津音さんを僕が殺したというものだった。そうすれば、いつかあった時に僕に裁きを下すと思ったのだ。

僕は信哉と沙耶にも同じ魔法をかけ、そしてせめてこれだけとはと、着ていた式守家の式服と那津音さんが渡してくれた竜笛を鞆にしまうと僕は故郷へと戻った。

4月28日

あれから9年。

僕はいまだに覚悟を決められなかった。

「……」

「兄さんどうしたの？」

「ん、久美か」

久美に声をかけられたので久美の方を向いた。

ちなみに今僕がいるのはサイホーリング号の総合管理室だった。

「いやな、先週に伊吹と神坂さんたちとの交戦があったことを6日前に報告したんだが、全く指示がないんだよ」

そう言いながら僕は久美に国際魔法連盟とのやり取りの一覧を見せた。

「ほんとだわ。でももしかしたら父さんは、忙しいのかもしれないよ。それよりも音羽お母さんが、夕御飯が出来たよって言うてるから行きましょ」

「わかった」

僕はそう言った時ある事を考えていた。

もしかして、父さんは何かを企んでいるのか？

確かに、久美の言う通り父さんが忙しいからかもしれない。

でも毎日連絡すれば何があるかと1日で指示を出していた父さんが

6日経っても指示を出さないのはおかしい。

まさか、父さんは僕を利用して何かをしようとしているのか？

嫌な予感がしたが、僕はそれを無理やり否定して、リビングに向かうのだった。

―刹那に目の前に神々しい光が見えた―

―どうやら過去めぐりは終わりのようだ―

―僕はそう思いながら光の中に入ったのだった―

浩介 Side End

第40話 選択の時（前書き）

時間がかかりましたが、40話です。

第40話 選択の時

「一体何なのだ？」

僕はそつつぶやいた。

最初は気づかなかったが、僕がいるのは辺りが真っ白で何も無い所だった。

「ようやく、過去めぐりの旅からのご帰還か」

突然声がしたので、僕は横を見た。

するとそこにいたのは、般若のような顔にまるで妖怪とも思えるような体系をし、そして背中には翼が生えている者だった。

その者の名前は声から分かった。

「これはどうということだ？ザルヴィス」

僕は、ザルヴィスに聞いた。

その力の先にあるもの 第40話「選択の時」

「どうということだと言われても、俺から説明できるのは、今の我が主の状態だけだ」

「状態？何を言っている」

僕はわけが分からず、ザルヴィスに聞き返した。

「それは良いが我が主よ、まだ気付かないのか？」

ザルヴィスは不思議そうな顔をして僕に聞いた。
しかし、僕はやっと気づいた。

今までの癖で気付かなかったが、何故僕の肉体があるのだ？

僕は死んだはず、肉体などとつくに滅びているのに、なぜまた肉体が形成されているんだ？。

僕が疑問に思っていると、ザルヴィスは説明を始めた。

「ここは世界の中心だ。死んだものが簡単に来れる所ではない。つまり、我が主にはここに来る資格と、素質があるのだ」

「それは、どういう意味だ」

僕はザルヴィスに聞き返した。

「まだ、分からぬか？ならば、直接言おう。我が主は……」

そして僕は衝撃の言葉を聞くことになる。

「我が主は魔王だ」

「何だそれは。人をだますのなら、もっと違うネタにしてくれ」

「残念ながら、真実だ。我が主が持っているクリエイトといったか……の元になった杖、それがすべてを示している」

ザルヴィスの言葉に思わず耳を疑った。

僕が、魔王？

普通の人なら、おとぎ話ではあるまいと思うが、僕は違う思いだった。

「確かに、クリエイトは『破滅の杖』から精製した。しかし、僕は魔王は勤められない」

魔王、それは何処の世界でも共通の単語だ。

人ならざる物を束ね、そして征服する

まさに悪役の基本でもある。

雄真から借りた漫画にも魔王が敵だというものが多く見られた。

でも、僕達の世界では魔王というのは違う意味になる。

それは、ともかくそんな大義名分は僕には務まらない。

「そうか？逆に俺には務まるように思うぞ。我が主は我らと契約をする時、この力を正義のため、人を助けるために使うと宣言した。ならば、魔王の力の元はそれに当たる。だが、重要なのはそこではない。魔王としてやっていけるかどうかは我が主ご自身で選択するがいい」

ザルヴィスはそう言うと、地面？に手を掲げた。

すると、何も見えなかった地面に薄らと何かが映り始めた。

「これは？」

「それは、我が主の友、小日向雄真達を映したものだ。見るが良い」

僕はザルヴィスの言葉に息をのんだ。

僕がいなくなつて雄真達はどうなっているのかが気になっていたのだ。

僕は映し出されたそれを見て思わず目を疑った。

「何だよ……何だよこれは……！」

僕は思わず叫んでしまった。

そこに映し出された雄真達は特に伊吹だが生気が感じられなかった。

「これは今日の様子を写したものだ」

「なぜだ、なぜこうなる。僕がいなくなつて普通の状態に戻るはずなのに、なぜこうなる!？」

僕はわけが分からなくなつていた。

僕の予想では雄真達には僕がいなくなつても平気だと考えていた。しかし、結果はこの通りだ。

「それは、我が主の存在が大きすぎたせいだろう。我が主はその魔法や色々な行動によつて存在が大きくなつていき、彼らの普通に加わつてしまつたのだ」

僕はザルヴィスの説明に絶句してしまつた。

何気なくしていた行動が彼らの中で僕自体の存在を確定させるものになつていたなんて、思つてもいながつたのだ。

「僕は、どうすればいい?こんな状態で平然としているのは無理だ。これを解決するにはどうすればいいんだ?」

そして、僕はザルヴィスに聞いた。

「それは簡単なことだ。再びかの地へと舞い戻られよ」

僕はザルヴィスの言葉に何度目か知れない衝撃に包まれた。

「なにを言っている?僕は贖罪で死を選んだのだ。再び戻ることな

ど
「出来ぬというのか？」

僕の言葉を遮ってザルヴィスは僕の事を睨みつける。

「どうやら直球で言った方がいいようだな。良く聞くが良い我が主。お主のしたことは贖罪でも何でも無い。ただの自己満足だ」

「何だと？もう一度言ってみろ！！」

僕はザルヴィスの言葉にキレた。

「お主が死ぬことで式守伊吹の怒りを鎮める事が出来ると思ってるが、これが鎮めていると言えるのか？お主がいない方が幸せ？ふざけるな、お主がいない事で明らかにこいつらは様子がおかしい。

それでも、お主は平気なのか？これで良いのか、高月浩介！！」

「……………！！」

ザルヴィスの言葉に僕は目が覚めた様な気分がした。

そうだ、僕は何をやっていたんだ。

僕の仮説が正しければ、なおさら僕が戻らないといけないじゃないか。

僕はザルヴィスを見た。

「その顔は、どうやら、覚悟を決めたようだな」

僕はそれに無言でうなずいた。

「そうか、ちょっとばかりひどい事を言ってしまった。申し訳ない、我が主」

「いや、こっちこそ。ザルヴィスの一言がなければ僕はいつまでも

自分のことしか見ていなかっただろう。それと、僕の事は我が主ではなく、浩介でよい」

僕とザルヴィスはお互いに謝りあった。

「分かった。それでは、戻るのはいつにする？今からでも出来るぞ」

ザルヴィスは僕に聞いて来た。

「もちろん今からだ。僕の仮説を早く雄真達に伝えたい」

「そうか。ならば浩介、俺もラティーヌもヴェントスも、お主の力に貸そう」

ザルヴィスが嬉しそうに僕にそう言った。

「ありがとう、ザルヴィス」

「お礼はいらない。俺達は友達なのだからな。では、これから、お主をこの世界へと送る。しばらく目を閉じておけ」

「分かった」

僕はザルヴィスの説明にそう返すと、ザルヴィスに言われたとおり目を閉じた。

そして、僕は再び白い光に飲み込まれた。

僕は再びこの世界に戻る。

それは、死ぬためでも、自己満足でもない。

彼らを脅かすかもしれない事態を防ぐためにだ。

そう思いながら、僕はこの世界へと向かうのだった。

第40話 選択の時（後書き）

次は浩介の復活です。

そして物語はさらに加速することに。

それでは、次回でお会いしましょう。

第41話 現実(前書き)

浩介復活編です。

第41話 現実

5月13日

時間が経つのは早いと俺は思うようになっていた。全員が、現実から目を背けようとしていた。

” 浩介がいない ” という事実を……。

その力の先にあるもの 第41話「現実」

「何だ、あれは!!」

放課後に、廊下の窓から外を見ていた八子が驚愕の声を上げた。俺達も外を見た。

「あれは……魔法陣？」

そう、俺達が見たのはちょうど校舎内にある公園の上空に大きく描かれていた魔法陣だった。

と、言う事は誰かが、魔法を行使しているのか？

しかもあれだけ大きいになると、高等魔法に当たるだろう。俺は万が一のことを考えていた。

「あれは、兄さんの魔法陣だわ!!」

しかし、久美の一言によってそれは崩れることになった。

「こ、浩介って、確か死んだはずじゃ……」

柊が久美にそう反論する。

「とりあえず、行こう!」

俺はそう言つと鞆を手にして、準と春姫、八子に柊と一緒に公園に向かった。

「小日向雄真か」

俺達が、公園に辿り着くと、そこには伊吹と信哉、さらには上条さんとももがいた。

「伊吹達は、これを見て？」

「ああ、帰る途中にとてつもない魔力を感じたので、来てみれば……」

俺達は魔法陣を見た。

上空高くに描かれている魔法陣と、地面に描かれている魔法陣があり、それ以外は何も変わらなかった。

「久美の話だと、この魔法陣は浩介の物らしい」

「それは、本当なのか!？」

伊吹が驚いた顔をして俺に聞いて来た。

「ええ。あれは兄さんが魔法を使う時によく描いている魔法陣だから、見間違うはずがないわ」

その魔法陣には色々な文字とその中心に星と月が描かれていた。

「もしかすると、これは……」

伊吹がそこまで言いかけた時だった。

ドカン！！

「きゃっ！！」

突然雷が鳴り始めたのだ。

明るかった空も雲が出てきて、辺りが暗くなってきた。

さらに、その雲の合間で雷が何度も鳴っていた。

ドカン！！

爆音のような音がして、雷は俺達の目の前……丁度魔法陣のところに落雷した。

魔法陣には何も変化はなかった。

しかし、雷が落ちたところを中心に、黄色い球体が上空に上がり始めた。

その光は地面と上空にある魔法陣の中間で止まった。

すると、今までただ回転していた魔法陣に変化が現れた。

地面と上空にある魔法陣がその光に誘われるように近づいて行った

のだ。

そして、2つの魔法陣は上空にある黄色い光のそばで見たりと止まると、再び回転をし始めた。

「一体、何が起こるといふのだ？」

「あ、あれが魔法なのか？」

伊吹はこれから起きることを予想して、ハチや準たちは今起きている現象に茫然としていた。

俺達はただ、何が起きるかを見ていることしかできなかった。

すると、黄色い光が、徐々に人の形を成し始めたのだ。

そして、魔法陣が人の形をした光に入り込むと、黄色い光は弾けた。

「な！！！」

「う、ウソだろ！？」

俺達は一瞬時が止まったような錯覚を覚えた。

なぜなら、はじけた後に現れたのは浩介だったのだ。

浩介はゆっくりと、地面に降りていく。

そして、地面にゆっくりと着地すると、浩介は目を開けた。

浩介はしばらく自分の手を見つめていた。

「久美？」

すると、浩介は俺達の事に気付いたのか、久美の名前をつぶやいた。

「兄……さん？兄さんなの？」

久美は恐る恐る浩介に確認した。

「そつだよ、高月浩介。正真正銘、久美の兄だよ」

「兄さ〜ん!!」

「浩介お兄様〜!!」

浩介がそう言った瞬間、久美と伊吹は叫びながら、浩介に抱きついた。

一瞬おかしいと思ったが、俺はそれを考えないようにした。

「おっと。久美、伊吹、泣くなつて」

「だって…だって、兄さんがいなくなつて、ぐす、とても悲しくて、さみしくて。うわあああああ!!」

「うわああああああん!!」

久美はそう言いながら、伊吹はただひたすらに、泣いていた。

「ごめんな、久美、伊吹」

浩介は優しく微笑むながら久美と伊吹の頭に手を置いて宥めながら、浩介は俺たちの方を向いた。

「ただいま、みんな」

「おかえり」

そして、そのとき全員は浩介が蘇った事を喜んだのだった。

しばらくして、伊吹と久美が泣き止むと、浩介はすべてを話してくれた。

悲しい過去の事を。

「なるほどな」

話を聞き終わった時、俺は納得していた。

「しかし、なぜ自らの命を捨てようと思われたのですか？ 浩介お兄様」

「浩介お兄様！？」

俺たち全員は伊吹が浩介に対する呼び方で驚いた。

いつもは浩介の事を高月浩介や、高月と呼んでいた伊吹が浩介お兄様と呼んだのだ。

「……思いだしたのか。すべて」

しかし、浩介は険しい表情で伊吹に聞いた。

「ええ、しっかりと思いだしました。なぜ浩介お兄様は私たちの記憶を消したのですか？」

そして伊吹の問いかけに浩介は再び真実を口にした。

伊吹との接点、秘宝事件のすべて、そして記憶を消した浩介の思い。

「浩介兄様は命を捨てるつもりだったんですか？」

今度は上条さんが浩介に聞いた。

「そうだ、沙耶。死ぬ気がなかったら3人の記憶を変えたりはしない。さて、信哉、沙耶、それに伊吹。3人が立派になった事を、僕はとても誇りに思っている」

浩介は微笑みながら、3人をほめるように言った。

「でも何で浩介は蘇ったのよ、死ぬ気だったらもう蘇ろうとはしないんじゃないの？」

柊が浩介に聞いた。

確かに、死ぬ気がある限り蘇ろうとはしないはずだ。でも蘇った。

そこに疑問を感じたのだろう。

「そんなの決まっている。不幸になろうとしている人を、放っておくことは僕には出来ない」

浩介はそう言うとおもむろに携帯を取り出し、どこかに電話をかけた。

「あ、もしもし、国際魔法連盟法務課の高月です。その説はご迷惑をおかけしました。……ええ、実は確認したい事があります、そちらに国際魔法連盟からの命令書など来ていませんか？」

浩介が電話をしたのはおそらく魔法連盟だろう。

そして、浩介の表情が一気に険しくなった。

「そうですね……。はい……。はい……。とりあえずその命令書はこちらでその事実関係を調べますので実行しないでください。責任は国際魔法連盟法務課大臣、高月浩介が取ります。それと、その命令書のコピーを今すぐこれから言う座標に転送してください。X187・232・84・Y228・121・231です。はいお願いします」

そして、浩介が電話を切ると険しい表情のままだった。

「おい、どうしたんだよ、浩介。俺たちに説明してくれ」

「伊吹、落ち着いて聞くんだ。式守家に対して問責調査命令書が提出されたらしい」

「なんだと!!」

伊吹が浩介の言葉を聞いた途端驚いたように言った。

「あの、高月君。問責調査命令とは何ですか？」

分からなかったのだろう、春姫が浩介に聞いた。

「問責調査命令とは対象者が罪を犯した際に、その実態を調査し、場合によっては逮捕・起訴される事もあるやつだ」

浩介はさらっと説明した。

「という事は、伊吹が秘宝を使おうとしたから動いたのか？」

俺は浩介に聞いた。

憶測だが、秘宝を封印していた浩介達の妨害をしたのだ。

それで、問責調査とかが出たのだろう。

しかし、浩介が言った事は信じられないものだった。

「いや、秘宝を使おうとした事は罪にはならない。これは魔法連盟法第34条で定められている。それに任務妨害は、国際魔法連盟任務執行法第38条に定められているが、それはあくまで個人であり、それが家ぐるみの物だったらその証拠を命令書と一緒に送付する義

務があるという事が定められている」

浩介は小難しい説明を始めた。

「しかし、この命令書には見る限りでは、そんな証拠が送付されている形跡はない。よってここから推測すると……」

浩介はいったん区切ると、衝撃の結果を言った。

「これは式守家に対する乗っ取りを行うための不当な命令書だ」

第41話 現実（後書き）

ということ、第2章の全貌が少しだけ見え始めたところで、失礼
痛いと思います。

次回は日常（？）編です。

それでは、次回でお会いしましょう

第42話 陰謀（前書き）

ここから少しばかりの日常編へと戻ります。

第42話 陰謀

俺たちは浩介の言葉に衝撃を覚えた。

なぜなら、国際魔法連盟の人でこんな真似が出来るのはただ一人しかいないからだ。

「そしてそれを仕掛けたのは父さんだ」

そして浩介は静かに言った。

その力の先にあるもの 第42話「陰謀」

「そもそもいきなり何も指示をしなくなったのは、前からおかしいと思っていたんだ」

「でも、お父さんにそんな事をして何の得があるの？」

久美が浩介にそう聞いた。

「そんなのは簡単だ。伊吹に僕を殺させて式守家の土地を奪いそして、秘宝を自分のものに出来るとでも思ったんでだろう」

「そ、そんな」

久美はまるで嘘だと言いたいような表情だった。

「どんな理由で秘宝を欲しているかはわからないが、今のところ向

こっちは行動を起こすことはないと思うが、こっちから動けば最悪の事態になるから伊吹たちは普段通りに過ごしてくれ。それと僕は明日1日ゆっくり休んで、学校に行く」

浩介のこの一言で話は終わりになってしまった。

そして全員はそれぞれの家に戻った。

5月15日

「おはよう春姫」

「おはよう雄真くん」

俺たちは教室へと”いつも”通りに向かっていったんだが。

「はあ……」

浩介が突然深いため息をついた。

「どうした、浩介？」

「いやな、1カ月ぶりにそれを見せつけられると何だかな」

浩介はものすごく冷ややかだった。

「悪い……」

「気にするな」

浩介はそう言うと、先に教室に入ったので、俺達も教室に入った。

キンコーンカーンコーン

誰もが待ち望む昼休み。

そして、俺と春姫は例の如く浩介を誘い屋上でランチを楽しんだ。なぜか屋上には誰もいないという点以外は、全く普通の昼食だったのだが。

「御馳走様でした」

「お瑣末さまでした」

俺と春姫はそのような会話をしながらふと違和感に気づいた。

いつもはげんわりしている浩介がなぜか、敵意をむき出しに見ていたのだ。

「ねえ、雄真ちょっと聞きたいんだけどさ」

すると浩介は口を開いたが、何だろうなせかもものすごい恐怖を感じる。

「雄真たちはいちゃいちゃしているのを僕に見せつけるために呼んだのかな？……というより、なぜいつも僕を呼ぶんだ？」

浩介は笑顔で俺に聞いた。

ヤバイ浩介の表情は笑顔だけど言葉には殺気がある。

「いつもいつも、いちゃいちゃいちゃいちゃして……」

浩介はなおも言葉をつづけた。

「そんなに僕を怒らせたいんだ？」

浩介はそう言うといきなり構え出した。

「こ、浩介まさか……」

「ちよつと威力の調節が出来ないからものすごく痛いかもしれないけど、我慢してね」

そして浩介は思いつきりジャンプをした。

「喰らえ！！ホバーリングカッター、マキシマム！！」

「うわ！！」

しかし俺は何とか浩介の攻撃から逃げる事が出来た。

俺が今までいたところは大きなクレーターが出来ていた。

そして、俺は逃げた。

「あ、逃げやがった！！もう怒ったぞ、貴様を半殺しにしてやる！！待て〜」

「追いかけてきた！！」

こうして俺たちは昼休み中、命がけの逃走劇を繰り広げる事になった。

そのあと浩介は許してくれたが、二度と怒らせないようにしようと思っただった。そして、放課後。

「雄真くん、一緒に帰ろう」

HRが終わって帰ろうとしていた俺に声をかけてきた春姫が言った。

「そうだな、そうしよう」

こうして春姫と一緒に帰ることは、俺達の中では習慣づいていたりする。

浩介 Side

「……」

僕は仲良く帰って行く二人を見ていた。

二人とも幸せそうだった。

時を動かした者としては、良かったと僕は思った。でも、なぜだろう。

あの二人を見ていると変な感情がわいてくるのは。

それはまるで……。

「駄目だ駄目だ、考えちゃだめだ」

僕は自分が思っている事に気づくと顔を振った。

しかし、この納得のいかないモヤモヤとした感情は収まらなかった。

「……オアシスに行こう。そうすれば収まるかもしれない」

僕はそう言つとオアシスに向かった。

「やっぱり混んでる」

普段は放課後になつても、そんなにお客がないはずだが柊がウエイトレスを始めてから常にこんな感じだ。

「あ、浩介君」

とそんな事を思っていると音羽かーさんが僕に気づいてこっちに来た。

「音羽かーさん、今日も大変そうだね」

「そうなのよ。もう忙しくて、忙しくて」

「とか言いながらどっぶりと腰を下ろそうとしない」

「えーん、鬼い」

僕が注意すると音羽かーさんはそう言っていたが、それを無視して別の話題を持ち出すことにした。

「そう言えば、もうバイトの募集はかけたの？」

それが落とし穴だとも知らずに。

「うん、かけはしたんだけど……。でも、すぐに人が見つかるわけじゃないし、もうしばらく忙しい日が続くかも」

「大変だねえ」

ピンポンパンポン

『小日向音羽さん、小日向音羽さん、至急B等事務室まで来てください。繰り返します……』

そんな時に音羽かーさんが呼び出された。

というか、このデパートみたいな呼び出し音はいつになったら変わるのかと思ったのは内緒だ。

「あら……？」

「呼ばれてるけど、音羽かーさん、何かしたの？」

「うーん、心当たりはないかな」

「どうだか」

音羽かーさんはたびたびへまをしかしてはこうして呼び出される。

「でも、困ったわね。今私がお店を空けたら、完璧に人手が足りな

くなっちゃうわね」

音羽かーさんは困ったような顔をした。

「……って言いながら、なぜこっちを上目遣いで見る」

「ねえ、浩介くん」

うわ、嫌な予感がする。

「やっぱりそう来るんだ」

「私が出てる間、お店……手伝ってくれる？」

「無理です!!」

即答で答えた。

「そんな事を言わずに、ね、ね!!」

「だって僕は未経験者だ。やっても足を引っ張るだけだって」

「ふふ、大丈夫よ、浩介君なら」

ものすごい笑顔で言われた。

「何にも根拠がない」

「そんなこと言わずに手伝ってよ。頼りにしているのは、今は浩介君だけなんだからさ」

「うーん」

「ね？お願い……」

「……まあ、音羽かーさんにそこまで言われたのなら……」

僕がそう言つと音羽かーさんはものすごく上機嫌になった。

「わあ、助かるう!!………浩介君ならバイト代もかからないしね………」

後半にもものすごいバカにされているような気がしたので僕は帰ろうとした。

「やっぱり帰ります」

「あ、嘘うそ!!帰っちゃダメ!!」

「一言余計なんですよ、音羽かーさんは。それより制服の予備はあるの?」

僕は愚痴を言いながらも気を取り直して音羽かーさんに聞いた。

「うん、ロッカーに行けばあるわよ」

「分かった。それじゃあ、着替えてくる」

僕は制服に着替えるために更衣室に行こうとした。

「それから……お仕事の内容は杏璃ちゃんに教わって頂戴」

「え!?あいつに!!」

「浩介君の事頼んでおくね」

音羽かーさんはそう言つと足早に厨房の方に走って行った。

「なんか……いやーな予感がしてきた………」

僕はもう目の前に迫っている嫌な予感を感じつつ制服に着替えるために、更衣室に行くのであった。

浩介Side End

第42話 陰謀（後書き）

今回は原作の杏璃ルートイベントになります。

それでは、次回でお会いしましょう。

第43話 オアシス（前書き）

原作のイベントです。

第43話 オアシス

浩介 Side

「ふっふっふ、よく来たわね、新入りくん」

制服に着替え終えて更衣室を出て、厨房の方に向かった。しかし、そこに待ち構えていたのはものすごい笑顔の柊だった。

「お前だって、まだ新入りだろうが……」

「うるさいわね！！たとえそれが1日の差であっても、先輩は先輩、後輩は後輩なのよ！！」

矛盾を突っ込まれてキーキー文句を言うバカこと、柊。

その力の先にあるもの

第43話「オアシス」

「と、いうわけで、ぼろ雑巾になるまでこき使ってあげるから、覚悟してちょうだい」

柊はそう言いながら、にやにや笑いながら僕に、にじり寄ってくる。

「あんたはそういう趣味だったのか？」

「痛！！なにする！！」

突っ込んだら今度は手に持っていたお盆で殴られた。

「まずはその言葉遣いから直してあげるわ!!」

柊は怒った表情をしながら言うが……。

「お前に言葉遣いを正してもらういわれは、断じてない!!」

「柊先輩と呼びなさい、柊先輩と!!」

僕が反論したら今度は2回連続お盆で叩かれた。

「あゝあ情けない、150年以上も生きている僕が高々18年しか生きていない小娘に、先輩と呼ばされるとは……くは!!」

「手取り足取りなんてやってる暇はないんだからね」

柊のやろつお盆の角で殴りやがった。

「一通り作業をやって見せるから、後は体で覚えなさいよ」

「無茶苦茶だな」

僕がそう言う柊はため息でもしそうなぐらいの表情をした。

「根本的に認識が甘いわね、ここをどこだと思ってるの?」

柊は変な事を聞いてきた。

「どこって……オアシスだろ?」

「違うわ!! いい?ここは戦場なの!!銃弾が飛び交い、一瞬の判断ミスで命を落とす戦場なのよ!!分かった!?!」

柊はここを戦場と言った。

「戦場なら、武器を持たないと。柊、拳銃が良いか？それともマジックワンドか爆弾でも……」

僕はそれ以上言うのをやめた。
なぜならそこには……。

「って、わかったから、お盆を構えるな！！分からないかもしれないけどそれはものすごく痛いんだ」

そこにはお盆を構えた柊がいたからだ。

「よろしい……それから最後に大切なことを一つ。いつも笑顔を忘れずに、いいわね」

戦場で笑顔を振りまくのか？

「分かったの？」

柊がまた怒鳴ってきた。

「はいはいわかったよ！！」

そう言った時だった。

「すみませーん！！」

お客の呼ぶ声がした。

「そら来たわ！！出番よ！！ついて来なさい、新入り！！」

「はいはい」

一体なんだこの展開。

そう思いながら柵について行くのであった。

……正直信じられなかった。

ウェイターがこんなにも精神的に大変な仕事だったとは。

まだ1時間しか経ってないのに、すでに爆発寸前であった。

「あら、浩介さん。今日は店員さんをされているんですか？」

「あ、小雪さん」

突然声がかけられたので振り向くとそこには小雪さんがいた。

「そうなんですよ、音羽かーさんが急用が店を空けちゃったんで、その手伝いを頼まれて……」

「親孝行なんですね。大変よろしい事です」

親孝行か……。

「それにしても忙しそうですね」

小雪さんが辺りを見渡して言った。

「ええ、もう猫の手も借りたといって気分ですよ」

「にゃん……にゃあ〜ん」

僕がそう言つと突然小雪さんは猫の泣く真似をした。しかも微妙に、似ているから恐ろしい。

「お貸ししましょうか？猫の手」

「え？あの、それって手伝ってくれるってことですか？」

「私でよろしければ……ですけど」

「それは助かります。でもバイト代は出ませんよ？」

「お気遣いなく、これは私の善意にしておきますから……」

「ほんとに良いんですか？」

「ええ」

「御不満のようでしたら、私から浩介さんへの貸し……という事にしておきますけど？」

「い、いえ……ぜひとも善意でお願いします」

僕は小雪さんの言った事に猛烈に反論した。

小雪さんに貸しを作ったらどうなるかが恐ろしいからだ。

「そうですねか……残念です」

でも、ウェイトレスの服って余分ってあんなのかな？

それに僕じゃ、仕事の説明とか出来ないから終に頼んで……。

そんな事を考えていると。

「それでは準備をしてきます」

「え？」

「すぐに戻ってまいりますので……」

小雪さんはそう言うとスタスタと店の外に出て行ってしまった。
準備って……なに………どういう事？

(なんかものすごく嫌な予感がする)

そう思っ僕は再び仕事を再開した。

テーブルは、ほとんど満席で、オーダーはひっきりなしに入りつづ

けている。

「すみませ〜ん、お水ほしいんですけど〜」

「はい、ただいま!!」

「こっちのオーダーまだあ？」

「もう少々お待ち下さい」

客からのオーダーやクレームに返事をしながらフロアの中を小走りに往復する。

客をテーブルに案内する。

オーダーを取る。

料理を運ぶ。

空いた皿を下げる……。

一息着く間もなく客を案内して、オーダーを取って、料理を運んで、水を注いで回って、空いた皿を下げて……。

「すみませ〜ん!!」

「はい、お待ち下さ　!!!」

一瞬何が起きたのかが、わからなかった。
足が突然何かに引っ掛かり動かなくなる。

（まずい!!）

そこでようやく自分の身に起こったことを理解した。
通路にはみ出していた客の荷物に躓いたのだ。

（転ぶ!!）

魔法ではもう間に合わない

僕の左手にはスープとサラダ、右手にはサンドウィッチとドリンクが乗っかってるのに。これを撒き散らしたら……掃除の手間や作り直す労力が、色々かかってしまう。

「アムフエイー!!」

「え……!?!」

突然柀の声が聞こえたかと思うと、とたんに体がふんわりと軽くなる。

(浮遊魔法か!?!)

咄嗟の判断。

僕はさかさず体をひねり、両手に持っていたトレイを近くのテーブルに置いた。

そして、僕は何とか受け身を取った。

そしてすぐに立ち上がって、トレイの中身を確認する。

「ふう……無事だったか……」

「あの、大丈夫ですか?」

荷物の持ち主だろうか、男子生徒が恐る恐る声をかけてきた。

「……ああ……ごめん。それよりもお荷物をテーブルの下に入れていてくれますか?」

若干殺気を出しながら、言ったがまあ大丈夫。

「お客さんに殺気を飛ばさないの」

「いつてえ〜」

「またもや柊にお盆で殴られた。」

「まあ、トレイをひっくり返さなかった根性だけは認めてあげるわ」

「……」

「あれ？でもさっきのは……」

「柊の魔法のおかげだよな。ありがとう」

「お、お礼ならあとでたっぷりとしてもらっから、さっさとそれを運んで来なさい」

「僕にお礼を言われて照れながら言う柊。」

「はいはい、わかりましたよ。先輩」

「せんぱっ……！？」

「僕が先輩というと顔が若干赤くなった。」

「なんだよ、自分でそう呼べって言ったんだろ？」

「ふ、ふん……」

「恥ずかしがるくらいなら言わなきゃいいのに、アホだな。」

『そんな事を言うからまた殴られてしまうんですよ、マスター』

「そう思っているとクリエイトが会話に入り込んできた。（とはいっても念話だが）」

(あれ？クリエイトどうして今まで話に加わってなかったんだ？)

「いらっしやいませ！！」

そして念話をしつつも仕事をする。

『マスターが魔力の供給をしていなかったためです！！！』

クリエイトが若干不機嫌な声で答えた。

(いけない！！そういえば蘇ってからクリエイトには、自動で魔力が供給されてると思ってたんだ)

『マスターまだまだですよ？』

(そうだな。これを4番テーブルに運ぶって、カレーのしかも特盛りを頼む人ってあの人しかないよな)

僕は一旦念話を切ると、トレイの上にあるカレーライスを4番テーブルに運んだ。

「お待たせしました。カレーライスです」

「はい、ありがとうございます」

「……」

「……どうかしました？」

頭にクエスチョンマークを浮かべながら聞いてきた。

「小雪さん、どうしてのんびり注文なんかしてるんですか？」

「と、言いますと?」

「小雪さんもお手伝いをするというお話は、どこに行ったんでしょ?」

「はい、ですからそれはこれから……」

小雪さんはそう言ってエプロンのポケットの中を探し出す。そして……。

「うわー!」

い、いきなりポケットから立て看板が出てきた。その看板に書かれているのは……。

『ラッキーフード占い』……はい?

「ちゃんと宣伝もしてきました」

「へ……?」

小雪さんが向こうの壁を指差す。

壁には……何時の間にかチラシが貼り付けられていた。ふむふむ『新メニュー始めました。あなたのラッキーフード占います』

「な、何でいきなりこんな事……?」

僕は小雪さんに聞いた。

「いえ、私は私なりに出来る方法でお手伝いを……」

「えっと……それって……客寄せ?」

「はい、そうです」

満面の笑みで質問に答える小雪さん。

「ただでさえ忙しいのに、これ以上客を集めてどうするんですか！」

「ふふ、オアシスの売り上げも上がって、うはうはです」

と小雪さんは打算的な事を言っている。

「手伝って……そういう意味じゃないんですけど……」

僕は反論したが。

「浩介さん」

「こ、今度は何ですか？」

「おかわり」

「もう食べたんですか!!?」

「一体いつの間に……」。

「こらあ、新入り!!油売ってんじゃなく〜い!!」

「こうちゃん、ご指名はいました」

「……いつか殺す。」

「……心底恨みますよ、小雪さん」

「ファイター」

愚痴を言ったら笑顔で応援された。

「あと、1時間か……音羽かーさん、遅いな……」

「なに？もうばてたの？だらしないわね」

「んなわけあるか！！次はどこだよ！？」

「3番と14番テーブルの食器を下げて、7番のオーダーを取ってきてくれる？」

「ああ、任せろ」

その後も確実に何の問題もなく仕事をこなしていく。

「柎、8番がそろそろ食べ終わりそうだ。厨房にデザートを頼んでおいてくれ」

「オツケー、だんだんと要領がわかってきたんじゃないの？」

「客としてもよく来ていたし、音羽かーさんの話もよく聞いていたからな」

「上等上等。じゃあその調子で、11番テーブルも頼んだわよ」

「本当に後輩遣いが荒いやつだな……」

とか口では言いつつも、実はこのやり取りが楽しくなってきた。

忙しいのも気にならなくなってきた。

これがランナース・ハイってやつか……。

「ごめんね、遅くなっちゃたー！」

と、そこへようやく音羽かーさんが戻ってくる。

「音羽かーさん遅かったね」

「うん、ごめんね、話が長引いちゃって。でもありがとだね、助かったわ。後は私が代わるから、上がったちゃってもいいわよ」

「ありがと。でも……もう少して閉店だよね？」

「うん。あ、そうね」

「ついでだから最後まで手伝って行くよ」

「えっいいの？」

「ああ」

「ありがとう本当に助かるわ」

「いや、だってここまでやったんだから全部やらなくちゃ気が済まないし、それに……」

「おい、浩介ーっ!!」

「悪い悪い、こっちのオーダーを取ってから戻るよ」

「頼んだわよ」

柊は笑顔で返事を返した。

「あらら……もしかしてゴールデンコンビ誕生？」

音羽かーさんが変な事を言ってきた。

「すごく息があってるんじゃない？」

「音羽かーさんの目利き、鈍ったんじゃないの？こんな即席バイトを捕まえてゴールデンコンビもないもんだ」

「そうかな」

音羽かーさんはにやにやしながら、言っていた。

「それより、音羽かーさんも早く仕事に戻ってくれ」

「はいはい、わかりました」

「じゃ、僕はオーダーを取ってくるから」

「行ってらっしゃーい ふふふ……」

それから数十分後。

「お疲れ様、浩介」
「サンキユ」

ようやくオアシスの閉店を迎える事が出来た。
今はテーブルで柊が出してくれた水を飲んでいるという訳だ。

「ふう、落ち着く」

「お疲れ様二人とも。もう帰ってもいいわよ」

「それじゃあ、僕は柊を送ってくる」

「いいわよ送らなくて」

柊は反論したが、僕は引かなかった。

「まあ、助けてもらったお礼だと思ってくれ」

「な、なら仕方ないわね、送って行かせてあげるわ」

柊は恥ずかしながら言った。

そして、僕は柊と一緒にオアシスを出た。

「柊、大丈夫か？何かげんなりしているぞ」

「それをあんたに言われたくないわね」

「まったく、そこでじつとしてる」

僕は、変な意地を張る柊に呆れながらそう言った。

「なにする気よ」

柊は怪訝な顔をして聞いてきた。

「いいから」

僕は異空間からヴァイオリンを取り出した。

「9年ぶりだから成功するかわからないけど……」

「幻想曲、第9楽章、精霊の慈悲」

僕は音を奏でた。

そして、柊の体を魔力のオーブが包んだ。

「疲れが取れていく。すごい……」

そして、オブは消えた。

「ふう……やっぱり久しぶりだから疲れるな」

9年前に、那津音さんに教えてもらった幻想曲は、まだ僕にも使えるようだ。

「いったい何の魔法をかけたの？」

「回復と治癒の魔法だよ。それで、疲れはとれるはずだ」

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

そして、僕たちは再び歩き始めた。

「ねえ、浩介。あなたにとって魔法は何なの？」

柊は突然変な事を聞いてきた。

「そうだな、僕の魔法は、正義のため、そして守るためにあると思

っている」
「なにを守るのよ?」

柊の問いかけに僕は言葉が出なかった。
僕は何か大事な事を忘れている。

「分からない。僕は何を守るのかはまだ分からない。でも唯一僕が分かるのは、ある人を探しているということぐらいだ」
「ある人?」

「そう、昔……9年前に公園で、金髪の髪でストレートの髪型の少女を助けたんだ。その少女はね、かなり高い魔力があったんだ」
「……!!」

柊はなぜか驚いたような声を上げた。

「その子の両親に少女の魔力の検査をするように勧めたんだ」
「それで、その少女を探して、どうするの?」

「一回戦う。もし魔法使いとして適さなければ、僕の手で葬るんだ。僕が少女を魔法使いの道に進めた。だから僕がそれを終わらせる」
「そうなんだ」

「……悪い。おっと付いたみたいだな」

気づけばもう寮の前に来ていた。

「また、明日な」
「ええ……」

こうして僕は柊と別れた。

でも、”守る何か”を見つけることが、僕がしなければいけない“課題”だ。

でなければ、僕の“力”は動いてはくれないだろう。

浩介 Side End

杏璃 Side

あたしは寝る前にある事を考えていた。

浩介が助けた金髪でストレートの髪型をした少女、そして9年前。

この二つのキーワードはあたしが好きになってしまった少年と出会った時の光景と似ていたのだ。

しかし、浩介が言った『戦う』というのは確実に適正を調べるためだという事はいくらあたしでもわかった。

『もし、適正でなかったら』という仮定が頭から離れなかった。

杏璃 Side End

第44話 伝説のケーキ

5月16日

「おはよう雄真、すももちゃんそれと浩介君と久美ちゃん」

「おつす、準に八チ」

「おはようございます。準さんと八輔さん」

「おはよう準さんそれと八チ」

「おはよう、準さんと八チ」

俺とすももそして浩介と久美は準たちと挨拶して、学校に向かった。

その力の先にあるもの

第44話「伝説のケーキ」

「おい雄真聞いてくれよ。この前の夜に公園を歩いていたら突然男が出てきてよ、『高溝八輔か』って聞いてきたんだよ。それでな俺はそうだって答えたらいきなり魔法で攻撃されたんだ」

八チがいきなりとんでもない事を言ってきた。

「八チ、そいつに何か恨まれるような事をしたのか？」

「そうよね、八チだもんね」

準はさりげなくひどい事を言っていた。

「いや、知らないがな、あれは怖かったぞ。一言つぶやいただけで

飛ばされたんだぞ」

「ハチ、その男どんな奴だった？」

浩介がいきなりハチに聞いた。だした。

「えーと確か、金髪の野郎だった気が……」

すると浩介は険しい表情になった。

「そいつはおそらく国際魔法連盟総理大臣秘書、亀沼という男だ」
「な!!」

俺たちは驚いた。

「つまり、浩介の勤めているところの……」

「そう、トップである、総理大臣の部下になるな」

つまりこれは向こうが動き出したってことになる。

「まずは友人を殺して、僕を精神的に追い詰めようとしたんだろう。それにしてもハチはすごいぞ」

浩介は、突然ハチの事をほめた。

「どういうことだ？浩介」

「あいつは戦闘班第9段の資格を持っているんだ。だから、その男に攻撃されて生きていられたんだから、ハチはすごいんだ」

「戦闘班とは何だ？」

俺は気になったので浩介に聞いた。

「戦闘班って言うのは国際魔法連盟の中で飛びきり強い人を集めて、それを一括りにした軍隊の総称だ。戦闘班の階級が高ければ、その隊員は強いという事になる」

浩介は俺たちに険しい顔で説明をしてくれた。

「浩介、9段ってどのくらい強いんだ？」

「確か9段はレベル3……これは威力を示す数字だけど、の魔法が使えるらしい」

「レベル3ってどのくらいの威力なんだ？」

俺は恐る恐る聞いてみた。

「まあ、そんなに怖くない」

そうだよな、そんなに怖かったらもう俺はびっくりするところだった。

「人一人を簡単に殺す事が出来る」

「……」

「浩介……そのどこが怖くないんだ？」

簡単に殺せるのが怖くないって……。

「だって、このくらいなら大体癖があるからそれを掴めばもう弱くなるんだ」

「それは浩介目線だろうが……！」

俺は貯まらず突っ込んだ。

……？待てよ、もしかして浩介も……。

「まさかとは思うけど、浩介も戦闘班のメンバーになってたりしないよな？」

「おや、よくわかったな。その通り僕も戦闘班特段、つまりレベル5の階級を持っている」

本当に戦闘班のメンバーだったんだ。

「ち、ちなみにレベル5の威力は？」

（ああ、マスターが地雷を……）

俺が浩介に聞くとラジアがそんな事をつぶやいた。

「簡単に人を大量に殺せて、この世界を丸ごと消滅させることが出来るらしい」

「……」

浩介の言葉に俺達は言葉を失った。

「まあ、そんな事はどうでもよく、準さんとハチ、それとすももは気を付けてくれ」

浩介はそう言うともうその話は終わりとはばかりに、黙った。

「ねえ、皆、これを見てくれる？」

昼休みになるなり、久美は突然春姫達を集めて、新聞のようなものを俺の机の上に広げた。

「なになに、『聖者の木が光り輝いた』」

浩介はその新聞の見出しを読み始めた。

その新聞には、今日の朝にその聖者の木というものが光り輝いたと書いてあった。

「聖者の木って何だ？」

俺は浩介達に聞いた。

俺達には聖者の木というものの自体を知らなかったのだから。

「聖者の木っていうのは僕たちの国にある木で、これが、光るとあるものが現れた事になるんだ」

「ある者って？」

柊は浩介に聞いた。

「魔王よ」

「……」

「あはははは、おとぎ話じゃないんだから、今さらそんな話に騙されるようなあたしじゃないわ」

柊は笑っていたが、浩介達の目は本気だった。

「杏璃さん、本当よ。私たちの国では魔王がいると信じられているのよ」

久美が柊にそう言った。

「どうやら、あの伝説を話した方がいいみたいだな」

浩介はそう言うと、浩介の国に伝わる伝説を話し始めた。

『昔、僕たちの国が荒れ果てていた時代。その国の頂点に魔王がいた。魔王は僕達の世界を作り出し、強大な力で国を繁栄させた。そして、初代魔王がいなくなっても魔王は僕たちの国から現れて、国を繁栄に導いている。戦国時代なら領地を拡大させ不景気の時代なら景気を良好にした。』

この事から魔王は僕たちの国では、一種の救世主とされている。そして魔王が現れると必ず、光り輝く木がある。それが聖者の木』

浩介の伝説話に俺達はいまいち実感が持てなかった。

「まあ、信じてもらえなくて結構だ。魔王の事については現代になっても何も知られていないようだし」

浩介はそう言うと、広げられていた新聞を閉じ、教室から出ていったのだった。

俺は信じてないわけではないが、信じられるだけの確証もないのだ。

それ以前になぜ、いきなりその話になったのだろうか。

真実は闇の中である。

キーンコーンカーンコーン

そして、放課後。

「浩介、借りてくね〜」

突然柊が、浩介はかつさらった。

「こら〜、僕はモノではな〜〜い」

「……」

「いったいどうしたんだ？柊」

俺はそう呟いていた。

浩介 Side

「それで何の用なんだ？」

僕はあの後、柊の部屋まで引きずられた。

「これを浩介に見てほしくてね」

そして柊はある雑誌を取り出した。

そこには『簡単ダイエツト〜これであなとも美人〜』という記事があった。

しかし、そこは見なかったことにして隣の記事を見た。

「『伝説のケーキ、プルトニウム』？」

「そうそれよ、浩介！実は明日オアシスで試食会があるのよ」

「そう言えば音羽かーさんが言っていたな」

新商品を生み出すために毎年1回行われている試食会。

この試食会にそれぞれがこれは良いと思うものを作って、持っているのである。

もちろん、おいしければ、商品に採用されるといふのだ。

「そして、今回のテーマはデザートなのよ」

柊はそう言ったが大体は予想できた。

「……つまり、このプルトニウムケーキの材料を探すのを手伝えというところか？」

「そう、その通りよ、浩介」

柊はものすごい勢いで肯定した。

「ならば、さっさと行って材料を手に入れるとしよう」

僕はそう言って柊と一緒に材料を探しに言った。

そして最初に来たのは瑞穂坂商店街だった。

「それで柊、まずは何を探すんだ」

「それはね、プルトニウムよ！！」

柊は自信満々に答えたが、ここで疑問が一つ

「柊、ここにプルトニウムってあるのか？」

「ふ、ふ、ふ。まだまだね浩介」

柊は僕の疑問を笑って答えた。

僕はどういう意味だか分らぬまま柊について行った。すると、だんだん周りが暗くなってきた。

「お、おい柊。どこに行くつもりだ」

「いいから、来ればわかるからついてきて」

僕は柊の言う通りついて行くことにした。

そして目的地にたどり着いたのが、ピタッと柊が歩くのをやめた。そして、柊が中に入った。

「メリッサ、あたしよ」

柊の後に続いて中に入るとそこは薄暗く、そして中央にはフードをかぶった人がいた。

まるで、占い屋のような雰囲気だった。

「またあなたなの、クリスティ 又」

メリッサと呼ばれた女性が柊に向かってそう言った。

「クリスティ 又っていつ改名したんだひい 　　ふー！！」

柊と言おうとしたら、口をふさがれた。

「馬鹿、ここでは本名は出さないの」

柊が小さな声で言った。

「おい、ブラックマーケットは危ないと思っただけど」「僕は柊にそれとなく警告した。

「……………？そちらの方はどなたですか？」

すると、メリッサが僕の方に関心を示した。

「いつは……………そ、そうジョセフィーヌよ」

柊……………よりもよって、ジョセフィーヌか。

「ジョセフィーヌって、いったいどこの外国人だよ」

「それで、何のよう？クリステイ 又」

どうやら、ジョセフィーヌは確定されたいらしい。

「ちょっと頼みたいものがあったね」

すると柊は、メリッサに何かを話した。

「これでいいかしら？」

メリッサは何かを取り出して、柊に見せた。

「うん、完璧よ」

柁はそう言つと商品を手を持った。

「そう。でも……高いわよ」

メリッサは柁にそう言った。

「ええ、大丈夫よ、金額はスイス銀行にいつものアレにアレな感じで振り込んでおくわ」

「な、何だ？アレにアレな感じて？」

「ほら、行くわよ。ジヨセフィーヌ」

そして、出る間際……。

「ジヨセフィーヌ、何かあったらまた来なさい」

メリッサに言われた。

後から聞いた、柁の話だと僕は気に入られたみたいだ。
あまり嬉しくはないが……。

「さあ、次は八子蜜よ!!」

そして、商店街に戻って再び歩きだすと、着いたのは森だった。

「おい、八子蜜って、普通ので良いだろ？」

「し、ここにはトラップが色々あるんだから大きな声を出さないで」

柁にまたもや大きな声を出すと言われた。

「だったら簡単だ、僕がトラップを探すから柊は僕の後ろでどっちに進むかを指示してくれ」

「わかったわ、でもどうやって探すのよ？」

柊が僕に聞いてきたので僕は実際に見せることにした。

自分の中に流れる魔力を活性化して内に秘められた力を解き放つ。

「これでどうだ？」

「うわ、すごい。浩介の目が真っ赤だわ」

僕がやったのは魔眼というやつで、普通の状態は光景などしか見れないがそれを特化した状態にすることで、魔力の流れや掛けられているトラップを探することができるのだ。

「さあ、行くぞ」

そして僕はいくつものトラップを消したり、防いだりしながら目的地まで進んだ。

「ここよ」

そして、到着したので、僕は自分の目にかけて魔眼を解除した。

「は〜ち〜み〜つ〜ふお〜!!」

すると突然奥から大きなクマが出てきた。

「あれを抑えれば何とかなるわね。え〜と」

柊はしばらく考えると何かを思いついたのかパエリアを持った。

そして、パエリアを投げた。

『あ、杏璃さま〜』

「は〜ち〜み〜つ〜フォ〜!!」

『ぐぎゃー!!』

そして、パエリアの断末魔が聞こえてきた。

「おい食べられてるけどいいのか？」

「まあ、いいでしょう。それより八手蜜を……」

柊はそう言うと八手蜜を採取し始めた。

僕はそんな柊を見届けつつ八手蜜の門番出歩く間たがひんに食べられているパエリアを救出することにした。

僕はクマに手を向けると、目を閉じて集中した。

「disarion, busbritencia, barxuns
e……」

僕が発している呪文は普通の者には聞きとることが出来ないものだ。

これが、本物の神魔法かつ、魔族が使う魔法なのだ。

「bristen, toriald, taxio!!」
「フォ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!!!!」

僕が打ち出した稲妻が見事クマに命中して、クマは気絶した。

『ありがとうございます。高月殿』

「柊ー!! パエリア無事に確保したぞ」

「ありがとう、浩介」

柘は僕からパエリアを受け取ると、また歩き始めた。

「さあ、次行くわよ!!」

「ま、まだあるのかよ!!」

そうして僕たちは材料を求めて行くのであった。

「で、何でこんな夜まで待つんだ?」

僕たちは夜の公園の池の前にいた。

「それはね、最後の材料が『月のかけら』だからよ」

「月のかけら?」

なんだそれ?

「月のかけらはね、満月の夜のときに月を写す水がある場所で、取ることが出来るものなのよ」

「そ、そうなんだ」

「さあ、行くわよ」

柘はそう言うと、大きなバケツを池の中に入れて、月の浮かんでいる部分に潜らせたが、もちろん出るはずもない。

「あれ、おかしいわね、もう一度」

柘はもう一度やり直していたが、僕はなぜか月のかけらが気になったので、調べてみた。

「また失敗、もうい　　ちょっと待った！！　　何よ、浩介！！」

僕は何度目かの試みをしようとしている柊は止めた。

「月のかけらについてある興味深い事がわかったから伝えようと思っただが」

「なによ、その興味深い事って？」

柊はしぶしぶだが、話を聞く気になったようだ。

「月のかけらは、月の因子を持つものが出す事が出来るという記述がある」

「と、言う事は月の因子の奴を探せばいいんだね」

柊はそう言って走りだそうとした。

「月の因子を持つものだったらここに1名いるじゃないか」
「どこにそんな奴が……ああ！！」

柊はようやく気付いたようだった。

「そう、高”月”浩介つまり僕の事だね。僕も一応月の因子は持っている」

「それじゃあ、早く出してよー！！」

柊はせかすように言ってきた。

「言われなくてもするつもりだ。ちょっとどいてくれるか」

僕は柊に言つと、池の前に出て深呼吸をした。そして僕は右手を上げて詠唱を始めた。

「我らが纏いし月よ、その恩恵を我らに与えたまえ。その光は、我らを導く灯とならん、ゲエル・ベエノ・レゲナ!!!」

詠唱が終わると同時に僕が上げている右手の上で光が輝いていた。これは紛れもなく月のかけらだ。

「柊、小瓶を出して」

「分かつたわ!!!」

そして、月のかけらを瓶の中に入れてキャップをした。

「ふう、これで全部そろつたことになるな」

「そうね、それじゃあ、部屋に戻りましょう」

そして僕は再び、柊の部屋にいた。

「もう遅いし、僕は失礼するよ、柊」

「あらそう。気を付けてね」

柊は集めた材料で、プルトニウムケーキを作りながら、僕に言うてきた。

僕はそれに返事をする、柊の部屋を出て、寮を出た。ちなみに今の時刻は9時18分。

「音羽かーさんに連絡しておいてよかった」

僕はそう呟いて帰るのだった。

浩介Side End

Another Side

浩介が杏璃の部屋を出てからすぐ後だった。

「さうて、最後の仕上げをやりますか」

杏璃は気迫をこめてケーキの仕上げを始めた。

しかし、忘れてはいけなのが、彼女は動く天災スプリンクラーと呼ばれているということだ。

無事に完成するはずがない。

その夜、寮中にもものすごい爆音が鳴り響いたとか響かなかったとか。

Another Side End

第45話 料理の心(前書き)

またまた原作のイベントです。

第45話 料理の心

5月17日

浩介 Side

「うーん、遅いね、杏璃ちゃん」
「そうですね」

僕たちはオアシスで、試食会が始まるまで待っていたが、柊だけがまだ来ていなかった。

「ちよつと寮まで行ってみます」
「お願いね」

僕は音羽かーさんに言うと寮に向かった。

その力の先にあるもの 第45話「料理の心」

寮に到着すると、管理人さんに柊の部屋の鍵を開けてもらって中に入った。

そして、目の前の光景に絶句していた。
部屋が真っ黒なのだ。

まるでなんらかの爆発があったような感じがした。

「おやおや、またやったのかい」

すると管理人はとんでもない発言をした。

「またってどういう意味ですか？」

「彼女はね、毎回毎回料理をするとこんなふうになるんだよね」

管理人さんからものすごい事を聞いた気がした。

毎回やってるかよ……。

「柊は……あ いたいた」

柊はキッチンのところでひっくり返って寝ていた。

僕は柊を起こすことにした。

「おい、柊、起きろ ！！」

しかし、柊は起きなかった。

「仕方ないね、あまりこれはやりたくないんだけど、まあ悪いのは柊だし」

僕は腕をまくと、柊の傍にしゃがんだ。

そして思いつきり息を吸い込んだ。

「すう。ひいらぎ、おきーろー！！」

大きな声＋高速往復ビンタ（久美対応型）を合成させた必殺技、スリープクラッシュャーを浴びせた。

「きゃー！！痛い痛い痛い！！」

さすがの柊でも、起きたようだ。

「なにすんのよー!!」

そして、逆ギレされた。

「もう、朝だから迎えに来たんだ」

「え、あゝ!! あたしのケーキが」

「浩介!! あたしのケーキに何したのよ!!」

そしてなぜか怒られた。

「なにもしてない!! さっき来たらこうなってたんだ」

「あ、そうか。あたし、プルトニウムケーキを爆発させちゃったんだ」

どうやら思い出したみたいだ。

しかし、どうすればケーキが爆弾になるのが非常に知りたい。

「部屋のクリーニング代はいつもどおりに請求しとくからね」

そして管理人さんがまた、とんでもない発言をしたがそれはスルした。

「それで、どうするんだ、試食会？」

そして、柊は今思い出したかのような表情をした。

時間を見れば開始まであと30分だった。

「プルトニウムケーキの材料も全部使っちゃったし、どうしよう？」

「ひとつだけ言うておくが料理というものはな、どれだけ食材が高級かではないんだ。料理はね、作る時の気持ちが大事なんだ」

僕は、前から思っていた事を柊に言った。

「作る時の気持ち……」

「だから、柊に作りたいうって気持ちがあるんなら、音羽かーさんに頼んでもう一度作ろう」

そして柊はしばらく考えると決心したような気がした。

「分かったわ。浩介、あたしもう一度ケーキを作ってみせるわ！」

どうやら柊は、もう一度ケーキ作りに挑戦するようだ。

「さあ、決めたんなら、急いで仕度しろ。寮の前で待ってる」
「分かったわ」

そして僕は寮の前で、柊が来るのを待った。

「と、言うわけなんです。お願いします」
「僕からも、お願いします」

僕と柊は事情を説明して、厨房でケーキを作る許可を取ろうとしていた。

「いいわよ」

「……！！ありがとうございます」

そして、僕たちは厨房で、ケーキ作りに挑戦する事になった。

「それではよい、スタート！！」

そして、なぜか大会形式にまでなった。

「え〜とまずは……」

柊は、最初では何とか作っていたんだが……。

「それで、これに砂糖を入れる。え〜と袋ごと入れていいのかな？」

「スト〜プ！！」

柊は砂糖を一袋入れようとしていたが、寸前のところで手に持っていたお盆で、防ぐ事が出来た。

「痛！！なにするのよ、浩介！！」

そして、僕は別もう片方の手に持っていたお盆で柊の頭を叩いた。

「砂糖を一袋入れる馬鹿がいるか！！砂糖は、この量なら、このくらい入れればいいんだ」

「そうなんだ」

柊は今わかったという表情で言っていた。
これじゃあ、先が思いやられる。

「それじゃあ、カレーのルーを……」

そんな事を思っていると、また柊が暴走しかけていたので今度は両手に持っているお盆で柊の頭を叩いた。

「痛い！！今度は何よ」

「ケーキにカレーのルーを入れるな」

「むー」

柊は若干不機嫌になりながらも分かってくれたみたいだ。

そして、次はオーブンでケーキを焼くところまで行ったのだが……。

「ストップ！！」

「な、何よ！！」

僕はオーブンを見て思わず柊を止めた。

「オーブンの上に砂糖を置く馬鹿がいるか！！」

そう言いながら、僕は砂糖をどけた。

「何で、オーブンの上に砂糖を置いちゃいけないのよ？」

「もし、オーブンの上に砂糖を落としたり、粉じん爆発っていう大爆発が起きて死ぬぞ」

僕が理由を話すと柊は怖がったようだから、もう大丈夫だろう。

それから幾多もの工程を重ねて、ようやく完成した。

「お待たせしました。贅沢イチゴのショートケーキです」

ようやく完成したのが、僕の完全オリジナルの贅沢イチゴのショートケーキだった。

これでもかと敷き詰められたイチゴ、それでもくどくないように調整している。

「それじゃあ、頂きます」

そして、音羽かーさんがケーキを食べた。

僕と柊は結果を固唾をのみ待つ。

「うん、いいわよ!!」

「ありがとうございます」

音羽かーさんの評価は、よかった。

そして、その後に食べたスタッフの人も良い評価を出してくれた。

そして新メニューに加わったのは、柊と僕が作った『贅沢イチゴのショートケーキ』だと知った時は心の底から喜んだ。

ちなみにキャッチフレーズは『イチゴ好きの人のあなたにピッタリのケーキ』だとか何とか。

どこぞの誰かが食いついてきそうなキャッチフレーズであった。

そして、今はオアシスの片付けを終えて、寮に戻っている途中だった。

「今日は良かったな」

「そうね、浩介ありがとう」

柊がお礼を言うなんて明日は雨だという変な考えを切り捨てた。

「いや最後に頑張ったのは柊だから、お礼を言われる筋合いはない

「ただけ。まあ、ありがたく受け取っておくよ。それじゃあ」
「ちよつと待ちなさい!!」

僕は寮の前についたので、家に戻ろうとした途端に柊に呼び止められた。

「なんだ、柊？」

「今気づいたんだけど、浩介ずっとあたしの事『柊』と呼んでるでしょう？」

「そうだけど、それが何か？」

僕は柊に聞き返した。

「あたしだって、あんたの事を浩介って呼んでるんだから。だから、その……あ、杏璃って呼んでもいいわよ」

柊　じゃなかった、杏璃はドモリながら言った。

「そつちが良いなら僕は良いぞ。じゃあな、杏璃」

僕はそう言って杏璃の前から姿を消した。

それにしても一体、柊に何の心境の変化やら……。

浩介 Side End

第46話 クラス試験（前書き）

敵の登場です。

第46話 クラス試験

5月24日

今日は日曜日で学校は休みだ。

しかし、今日は休日以上にとても大事な日なのだ。

そう、今日はClasss試験が行われるのだ。

そして、春姫が今回受けるのはClasssAの試験。

俺はさんざん迷ったが、ClasssBの試験を受けることにした。

浩介はここに来る前から資格を持っているため、観戦のみ。

柊はClasssBの試験を受けるらしい。

ちなみに場所は大きなビルの中だからかなり広いところだった。

「雄真くん、調子はどう？」

「絶好調だ」

俺は春姫にそう答えた。

「おはようございます。申請の控えを掲示してください」

そのビルの前には、係員が立っていた。

受け方と言えば、申請カードに名前や、受験級を書いて、先生に提出するだけという簡単なものだった。

あとはここで、申請の控えを見せれば、OKなのだが……。

「小日向雄真様ですよね？」

「はい、そうです」

俺は申請カードの控えを見せると、係員の人が俺に尋ねてきた。

「こちらで少々お待ちください」

そして、俺は事務室まで連れてこられるとソファーに腰掛けて待つことにした。

それから数分後。

「小日向様。申し訳ございませんが、あなたがClasss試験を受けることはできません」

俺は係員の話に衝撃を覚えた。

突然受験できなくなってしまうのだ。

「どうしてですか？」

春姫が、俺の代わりに係員の人に聞いた。

「申し訳ありませんが、私にもよく分からないんです」
「タイムパラドックスか……」

浩介が何かをつぶやいたように聞こえたが、俺にはそれを気にすることが出来なかった。

「大丈夫？雄真くん」

春姫が俺に心配そうに聞いてくる。

「ああ、大丈夫だ」

俺はそれに平気そうに答えたが、正直言えば大丈夫ではなかった。

「そ、そう言えば、杏璃ちゃんの試験があるんだけど、ちょっと見に行かない？」

「そうだな、行くか」

春姫は落ち込む俺を励ますために、そう言ってくれた。

俺もいつまでも引きずっていたらいけないので、気を入れ替えて、柊のClass試験の会場に向かうのだった。

その力の先にあるもの 第46話「クラス試験」

「雄真達、遅かったな」

そこには既に浩介がいた。

どうやら浩介も見に来たようだ。

「さて、そろそろ始まるぞ」

浩介がそう言ったのと同時に試験は開始された。

「すごかったな柊の奴」

「そうだね、もう前とはかなり違うわ」

俺たちは会場を出て柊と合流するために待っていた。

「それにしても、浩介の奴、柊の試験中に会場を出て行ったがどうしたんだあいつ？」

「私にもよくわかんないけど、何か深刻そうな顔をしてたわよね」

それは柊の試験中の事だった。

「悪い雄真、ちょっと抜ける」

浩介はそう言うのと、足早に会場を去った。

「おっ待たせ」

春姫と俺が考えていると、柊が来た。

「あれ、浩介は？」

柊は浩介がいない事に気づいたのか俺たちに聞いてきた。

「浩介なんだけど、どっかに行つて」

そう言った瞬間だった。

「悪い、待たせた」

浩介は入り口から来た。

しかし、どことなく疲れているように見えるのは気のせいか？

「浩介！どこに行つてたんだ？」

「悪いが、それは言えない」

浩介は俺の質問にそう答えた。

「なにも聞かないでくれるか？」

浩介が言ってきた。

「分かった、でも何かあつたら言つてくれよ？」

俺は浩介の願いを聞くことにした。

「ありがとう」

浩介はそうお礼を言うと出口に向かって歩き始めたので、俺たちは浩介を追いかけるように歩きだした。

しかし、俺達はまだ何も知らなかった。

俺たちの裏で動き始めている存在に。

浩介 Side

「悪い雄真、ちょっと抜ける」

僕は雄真にそう言って急いで会場を出て、ビルの外に出た。
その理由は気配を感じたからだ。

「そこにいるのはわかってる、出てきたらどうだ？」

僕は路地裏まで行くと、何もない空間に向かって言った。
すると、空間がゆれてそこに現れたのは……。

「気配を消したつもりだったのだがな、さすがは浩介様だ」

金髪の髪をした男だった。

「そんな事はどうでもよい。何の用だ、亀沼」

「用というのはな、死んでもらう事だ!!」

亀沼はそう言い放つと攻撃を仕掛けてきた。

しかし、そんな事をするのは予想済みだったので、僕はよけた。

「ほう、よけたか」

亀沼は感心したように言った。

「行くぞ、亀沼!!!!」

そして、僕たちの戦いが始まった。

「demistea, briston, malze, pussisu
ten!!!!」

まずはコテ調べ。

4小節の雷撃魔法を放った。

しかし……。

「ふん……」

亀沼は僕の魔法を難なく避けた。

「避けられるとはさすがだな」

「ならば、次は俺の番だな」

そう言うと亀沼は詠唱を始めた。

「dirt d t e a , m a t e r i k l e ! !」

「な!!」

僕は驚愕の声を上げた。

亀沼は、なんと2小節で魔法を放ってきたのだ

しかも放った魔法は僕が今使っていた攻撃魔法と同じ威力。

「くっ……!!」

僕はそれを間一髪避けた。

(3年間でここまで成長したのか?しかし……)

僕は亀沼の今の魔法を見て混乱した。

しかも亀沼は本気を出していない。

本気を出せば、1小節での魔法行使も可能だろう。

「どうした？攻撃しないのか？」
「くっ！！デイ・パルティア！！」

魔法式を使った魔法に切り替えて攻撃した。
相手をつらえたと思った瞬間だった。

「dippdance!!」
「……!!」

僕は固まってしまった。

本当に1小節の反射魔法を放ってきたのだ。

「高月……ぐは!!」

防御魔法を展開しようとしたが、それに間に合わずに攻撃を受けてしまった。

「おらおら、最初の勢いはどうした？」

その後は亀沼の攻撃をただ受けるしか、出来なくなっていた。

「あぐ……ぐは!!」

(このままでは、体が限界だ)

僕は必死に回避策を考えた。

『マスター、ここはいったん退却を』

確かに今の相手は勝てる見込みがない。

このままでは命まで危うくなってしまう。

僕は最後の力を振り絞って、懐からボールを取り出した。

パン！！パン！！

突如辺りは、煙に包まれた。

この隙に僕は、転移魔法で逃げるのだった。

「何とか……撒いたみたいだな」

僕は途切れ途切れにそう言った。

僕は自分自身に治癒魔法を掛けた。

(しかし、あれはなんだったのだ。あんな成長の仕方はあり得ない)

僕はさっきの亀沼の魔法を思い出してそう言っていた。

あれは本人の実力ではない。

もっと言えば、何か種があるはずだ。

『とりあえず、傷は完治したようですし、試験会場に戻りましょう。ちょうど杏璃さんの試験が終わったころでしょう』

僕はクリエイトの提案をのむことにした。

そして、試験会場に戻るときに僕はこう思った。

絶対に雄真を巻き込んではいけないと

浩介 Side End

A n o t h e r S i d e

「ち、逃げやがったのか」

亀沼は浩介が今までいた場所を睨みつけてそう言い放った。

「今から追えそうでもねえし。しぶとい奴だ。しかし、次は絶対に生かしては返さない」

亀沼は悪態をつくど、そこから立ち去るのだった。

A n o t h e r S i d e E n d

第46話 クラス試験（後書き）

雄真がなぜClasss試験を受けることができなかったのか。それはのちに判明していきます。

第47話 結果(前書き)

原作のイベントになります。

第47話 結果

6月1日

「おはよう雄真、すももちちゃん」

「おつす、雄真にすももちちゃん」

「おはよう準にハチ」

「おはようございます。準さん八輔さん」

俺とすももは集合場所で待っていた準たちと合流して学校を向かった。

「あれ、浩介君と久美ちゃんは？」

準は浩介達がない事に気づいたのか聞いてきた。

「浩介達は何か用があるみたいで先に行っちゃた」

浩介は朝俺が起きた時には既に家を出ていたのだ。

その力の先にあるもの 第47話「結果」

「浩介がいないから話せるんだがよ。杏璃ちゃんの事を浩介は『杏璃』って呼んでるけど、あいつらに何があったんだ？」

ハチが不思議そうに言った。

そう、浩介は5月の中旬に入ってから柊の事を『杏璃』と呼ぶよう

になったのだ。

そして、その事を浩介に問い詰めに昼休みに総動員した護衛隊という名前の軍団の奴らが、真っ黒になって教室に戻ってきたのはここだけの話だ。

教室に戻ってきた男子曰く、『あいつは黒い服をまとった死神』だとか呟いていた。

どうやら、浩介は冷やかしが非常に嫌いらしく、冷やかそうとした準にクリエイトを突き付けて本気で詠唱を始めそうな迫力だった。なので、男子達には『浩介の前では冷やかすな』という暗黙のルールが出来たらしい。

「でさ、俺は思っんだが杏璃ちゃんと浩介は恋　　グギャー！！

」

八子が浩介達の事を言おうとした途端いきなり何も無い上空から稲妻が落ちて、八ちに命中した。

俺はなぜか急いで、浩介の携帯に電話をした。

「なんだ、雄真？」

「おい、浩介、今どこにいる？」

「どこって、校門前だが……。なんだったら、証人を出そうか？」

そう言うと浩介は誰かに電話を替わったようだ。

「もしもし、雄真くん」

「は、春姫！？」

俺は驚いた。

春姫が出たという事は校門にいるという事だ。すると、また、電話が誰かに替わったようだ。

「という事。それと八子に言つといてくれ、次同じことを言ったら死をも覚悟しろってね。それじゃあ、学校で」

そう言うと浩介は電話を切った。

男子生徒よ『浩介の前で』という暗黙のルールは通用しないで。

しかし、なぜ浩介は早く家を出たのが謎だった。

「おつす浩介」

「おはよう雄真に準さん、八子」

俺と準は教室で浩介と合流した。

「浩介何で、今日は早く学校に行ったんだ」

俺は浩介に分からなかった疑問を投げかけた。

「それについてはもう少し……あ、来たみたいだな」

浩介は言いかけると、教室に入ってきた柊に気づいて言った。

「おはよう杏璃」

「お、おおおおはよう、浩介」

柊はドモリながら浩介と挨拶した。

もういつもの事なので、何も言わないことにした。

「いつもだが、ドモるな杏璃」

「むー仕方ないじゃないの」

柊はふてくされたように言っていると本題を切り出した。

「で、話って何なの？」

浩介は柊の質問に良く聞いてくれましたというような感じで、かばんの中から数通の封筒を取り出した。

「これはまさか……」

その封筒には見覚えがあった。

それは先週受けたクラス試験の、合否の結果が同封されているものだった。

「そう、そのまさかだよ。御薙鈴莉が渡すはずだったんだけど、急用が入ったらしくて僕が代わりに渡すことになったんだ」

浩介はそう言っていると春姫たちに合否の結果が入った封筒を渡した。

ちなみに結果は、ClasssAを受けた春姫は合格して、後は柊だけになった。

「杏璃どうした？さっきから封筒を見つめて」

浩介は柊にそう聞いた。

「もし、落ちたらどうしようと思うとなかなか開けられなくて」

「だったら僕がみようか？」

浩介はそう言っていると柊の答えを待った。

しばらくすると、柊は自分が受けた試験の合否が書かれている封筒を渡した。

浩介はその封を開け、結果を真剣な目で見た。

「ど、どう?」

柊は固唾をのみ、答えを待った。

「なるほどね、ふん」

浩介はその結果を見て何かを企んでいるように笑った。

「まあ、僕が言えることとしたら、おめでとつかな」

浩介はさらっと答えた。

と、言う事は……。

「柊、合格だったのか」

つまりは、柊は合格だったのだ。

「や、やった~~~~」

すると柊はものすごい勢いで喜んでいった。

浩介 Side

「何で僕がこれを……」

今は放課後、一度家に帰った僕は音羽かーさんに、ある“頼まれごと”を受けたのだ。

「それが、このケーキだもんな」

音羽かーさんはなぜか、杏璃がClasssBを合格していたのを知っていた。

(まあ、噂にもなってるし、知っていてもおかしくはないか)

そうこう考えている内に、寮の前についた。

そして、毎度おなじみの管理人さんに許可をもらつと、杏璃の部屋へと向かった。

ピンポーン

「はい」

チャイムを鳴らすと、杏璃の声がしたので、どうやら部屋にいるようだ。

「あれ、浩介じゃないの。どうしたの？いきなり」

「音羽かーさんから、渡して欲しいって頼まれたんだ」

「音羽さんから？とにかく、立ちっぱなしじゃ何だから、上がったちゃって」

杏璃は驚きながらも、僕を部屋に招き入れた。

「わ……何だかすごいケーキだよ、これ」

杏璃は驚きながらケーキを見ていた。

「音羽かーさんとすももがこのケーキを焼いてくれたんだ。ケーキ切るから包丁貸してくれ」

杏璃は台所に行くと包丁とお皿を持ってきた。

「はい、包丁とお皿。あたしはジュースを注いでくるわね」
「わかった」

僕はケーキを切って、小皿に取り分けた。
そして、杏璃が飲み物を持ってきたので、準備完了だ。

「それじゃ……杏璃、合格おめでとう」
「ありがとうー!!」

杏璃は嬉しそうに喜んでいた。

「しかし、ようやく念願のClass Bだな」
「うん。でもずっと失敗してきたからさ、何だかまだ合格したって
いう実感がわかないんだよね。Class Bになったからってこれ
までと何が変わるっていうわけでもないし……」
「そうか……。ああ、そうだ忘れるところだった」

僕はここに来た”もう一つ”の理由を思い出した。

「んん？どうしたの？」
「うん、実はさ……」

僕は内ポケットの中から一枚の紙を取り出した。
そして、折りたたんであるのを広げてから、スツと杏璃に手渡した。

「なにこれ……。ああ！？こ、これ……。な、何で？なんで浩介が持ってるのよ！？」

「いや、それはだな……」

いつか、パエリアに持っているようにと言われた、杏璃の手紙。
それを今日杏璃に返そうと思って、持ってきたのだ。

「やっぱり杏璃に黙ってたまま持っているのも悪いなあ……。と思ってたからさ」

「ど、どという事なの？だから、なんで浩介がこんなの持ってるのよ！？」

「い、いや……。実はさ、パエリアから持っていてくれて頼まれて……」

僕は何とか杏璃に話す事が出来た。

「パエリアから……？」

『た、高月殿……。！こ、困ります……。そのような事をされては私
が……』

壁に立てかけられていたパエリアが、慌てたそぶり口をはさんだ。

『それは私が杏璃さまに無断で行ったことゆえ、杏璃さまに知られ
ますと恐ろしい制裁が……』

「ごめんな、パエリア。やっぱりさ、人の手紙を勝手に持ってるの

は、人としてよくないと思って……」
「どういう事なのパエリア!？」

杏璃がパエリアを睨みつけた。

『あぐう……い、いえ、つまり……』

「どういう事!? 答えないとコンロで炙っちゃわよ!」

炙るのはまずいだろ……。

『あ、杏璃さま。そ、それだけはご勘弁を……』

『じゃあ答えなさい、ほら!』

「お、落ち着けて杏璃。ちゃんと僕から説明するから……」

これ以上放っておいたらまずいと思ったので、僕から説明することにした。

『た、高月殿……』

「あのかな杏璃、実はさ……」

僕は杏璃に、これまでのいきさつを出来るだけ丁寧に説明した。
以前、この部屋で起こった出来事。

捨てられていた手紙を僕が勝手に読んじゃった事。

「な、何でパエリアが、浩介に手紙を……」

『そ、それは、つまり……』

「ちゃんと僕が、杏璃を正しい道にすすめるかが心配だったんでし
よ」

「え?」

『……』

「僕がすっかり杏璃を魔法使いとしての道に進む事が出来るようにするための証として持ってほしかったんじゃないのか？」

『は、はい』

「浩介があたしを魔法使いの道に進める証……」

「まあ、こうしてClass Bになれたわけだしね」

僕はそう言うとジュースを飲んだ。

「ねえ、浩介？」

「なんだ？」

「今から、浩介に手紙を書いていい？」

僕は杏璃の言葉に驚いた。

「ど、どうしたんだよ！？突然」

「浩介にはさ、こんな手紙じゃなくて、他の手紙を持ってて欲しいんだもん」

『おお、それは名案でございます』

「でしよ〜」

杏璃は万弁の笑みだった。

「まあ、杏璃が書きたいんならいいけどさ……」

「ふふ〜ん、じゃあ決まり　よ〜しパエリア！！」

『はい、分かっております。思う存分お書きくださいませ！！』

「うわあ」

パエリアがどんどん小さくなっていく。

そしてあっという間に、普通の羽根ペンになった。

「本当に変身できるんだ……」
「浩介、ちよつと待っててね 絶対に絶え……対、途中でのぞかないですよ？」

僕に釘を刺して、杏璃は羽根ペンを手に取って机に向かう。そして、引き出しから便箋を取り出した。

それはさっきの手紙で使われていた便箋と同じものだった。

杏璃はちらちらと横目で、僕が覗き見してないかを気にしながら、羽根ペンを走らせる。

<マスター、なんだか、杏璃さんへの接し方が変わりましたね>

(そうか? まあ、全てが終わって気が抜けたのかな? それにあいつの様な魔法使いも必要だと言うことも、新たに勉強になった)

クリエイトからの念話に、僕はそう答えた。

最初はああいう魔法使いを問答無用で切り捨てていたけど、今ではそう言うのも良いんじゃないのかなと思っている。

面白いな、柊杏璃。

この僕の考えを変えられるとは……こいつは将来優秀な魔法使いになるだろうな。

まあ、それが来るまでは楽しみにして待っていますよかね。

僕は柊が手紙を書き終えるまで、魔道書を読むことにした。書き始めてから、どれくらいの時間がたったんだろう。

魔道書を30ページ読んだ時に、杏璃の声が聞こえてきた。

「よ……し、完成!!」

「お、書き終わったのか? どれどれ……」

「だあ……ま、まだ見ちゃダメ!!」

杏璃が書いた手紙を読もうと手を伸ばしたら全力で拒まれた。

「あ、ああ……」

家に帰ってから読めという事か？

「さあてと、じゃあ今から出かけるわよ、浩介」

「で、出かける？どこへ？」

「まあまあ、とにかく一緒についてきて ほらほらグズグズしない、立って立って！！」

「お、おい」

杏璃は書いた便箋をポケットに入れて僕の腕をしっかりと掴んだ。そのまま杏璃にズルズル引きずられるように部屋を後にした。

「なあ杏璃、本当にどこ行くつもりだよ？」

「もっ、うるさいわね！！さっきから何回同じことを聞くのよ！？」

「だ、だってさ……」

結局駅前の商店街まで連れて来られた。

ニヤニヤと嬉しそうにしている杏璃の態度が何だかちょっと怖い。そんな事を思っていると、僕たちは商店街の裏側に向かっていった。そして、当たりの光景が、急に怪しい気配を帯びてくる。

「ま、また……ここで何かをする気が……？」

「ふふふふふ」
「……………」

平和そうに見えるこの商店街。

でも一歩この裏側に足を踏み入れれば、ブラックマーケットが立ち並びデンジャラスタウン。

前に来たのは確かケーキの材料を集める時だった……………。
となると当然、この先に待ちつけるのは……………。

「や、やっぱり真つ暗に……………」

地獄の亡者が闊歩^{かつほ}する暗黒の世界……………。
というより、何でこんな世界がこの街にあるんだ……………。

「ほらほら浩介、ビクビクしない！！行くわよ、GO、GO」
「……………」

元気いっぱいの杏璃に引きずられながら、しばらく暗闇の中を進んでいく。

そして、目的地にたどり着いたのかピタッと杏璃の足が止まった。

「メリッサ、元気？あたしよ」
「ま、またここか……………」

この前と同じ、薄暗いようなところだった。

「ここで生きていくのに元気は必要ないわ、クリステイ」
「で、出た……………クリステイ」
「又」

なぜかここでは異国情緒たっぷりの名前で呼ばれている杏璃……………。

「ん？こちらは……確かジョセフィーヌ？」

「ジョ、ジョセフィーヌ……？」

そういや、以前ここに来た時にそんな名前を杏璃が俺に付けたような気が……

というか、すごい記憶力だな、この人……。

(ただ単に、お客が少ないだけか)

「で、今日は何のご用かしら？」

「ちょっとね、変わった事を頼みたいんだけど大丈夫」

「変わったことしかやらない。それがあたしの仕事よ、お忘れかしら？」

「ふふ……じゃあ」

杏璃は俺に聞こえないようにして、何やらメリッサにコソコソ耳打ちする。

そしてポケットから、さっき書いた便箋をメリッサに手渡した。

「じゃ、それをお願いね。」

「面白い事考えるわね、クリステイヌ。でも……ちょっと高いわよ？」

「分かってるって！！金額はスイス銀行のいつものアレにアレな感じで振り込んでおくから」

で、出た……アレにアレな感じ。

「ではお二人とも、ちょっと目を閉じてもらえる？」

「了解」

「??？」

僕はといつとなぜ目を閉じなくちゃいけないのかが分からなかった。

「ジョセフィー又ちゃんと閉じてよ?じゃないと生きて帰れなくなつちゃうわよ」

「う、嘘!？」

「死にたければ、別に開けていてもらって結構よ」

「い、いえ……思いっきり閉じさせていただきます!！」

僕はギョツと目を閉じた。

それと同時にメリッサの微かな呪文の詠唱が聞こえ始める。

どうやら手紙に魔法をかけているようだ。

すると、カメラのフラッシュのような白い閃光が^{まぶた}瞼越し届いた。

「……完了。もう目を開けても大丈夫よ、お二人さん」

「ではジョセフィー又、これを受け取りなさい……」

「何かしたのか……これ?」

僕がメリッサにそう言つと杏璃が小声で話しかけてきた。

(よ、余計な事は言わなくて良いの)

(メリッサのやることいちいち詮索してると、後で痛い目にあつわ
よ)

(……分かった)

「……」

何がどうなって、どういふ目にあわされるのか分かんないが、とり

あえず杏璃の言う事を聞いておく。
僕もあまり深くは関わり合いたくないし。
差し出されたのは、さつき杏璃が手渡した便箋だった。
僕はそれ以上詮索せずに、それを受け取った。

「ねえ、今から大事な事を言うから、よく覚えといて」
「なんだ？」

「今夜の12時……」
「一人で公園の池の前に来て、そこで手紙を読んでくれる？」
「はい？」

今夜の時12時？公園の池の前？

「あつ、そうそう……声を出して読むのを忘れないで頂戴ね」
「な、何するつもりだ？」
「ふふふん、内緒」
「……」

何だろう、ものすごく嫌な予感がするんだが……。
明らかに何か企んでいる気が……。

「分かってんの浩介、ちゃんと約束守ってよ？」

そして、僕たちは駅前の商店街に戻って歩いていた。

「分かった」
「絶対に絶えくく対、守ってよ？分かった？」
「分かっているって……」
「ふふふふふ……」
「うぐっ……」

絶対に100%何かを企んでいる。

「じゃあね、浩介 さっきはケーキありがとう。音羽さんとすももちゃんに、ちゃんとお礼言っついて！！バイバ～イ」

大きく手を振って、杏璃は弾むような足取りで帰って行く。

風にたなびくツインテールが、人ごみの中でも一際目立っていた。僕も家に戻る事にした。

そして夜、僕は約束された時間の10分前に指定された場所に来ていた。

「まったくなんだ、この手紙は。何かとてつもない高度な魔法がかかっているけど」

あのあと家に帰って手紙にかかっている魔法式を読もうとしたのだが、ものすごい隠ぺい方法で、発動式に交じっているために、読もうとすると自動発動されるようになっていたのだ。

しかし、僕はいくつかの考えられる可能性を生み出すことに成功した。

可能性1：開けたらドカン！！

これはこの手紙を開けたら爆発するような魔法をかけてあり、爆発したみじめな様子を見て笑おうというものだ。

これも確かにある、というかこれだったら、絶対に発案者は久美だ。

久美は昔同じことをやった事がある。

あれはひどくて、小包だと思って開けたとたん爆発して、まっ黒焦げになった僕を久美が大笑いしていたのだ。

今でも、あの高笑いを思い出す。

もちろん久美にはきつい罰を与えておいたが。

可能性2：OOをくしたらく

これが一番確実だ。

読んだら何かが起きるように細工されているという予想だ。

まあ、何を考えても何もまとまらない。

そして、今の時間を確認した。

11時59分

「まあ、許容範囲だな」

そして、僕は封筒を開け始めた。

「……………っ！！」

そして、一気に開けて手紙を放り3m後ろにジャンプした。

しかし、爆発は起きなかった。

僕は恐る恐る近づいて、手紙を手を取った。

どうやら何も仕掛けがないみたいなので、便箋を取り出した。

11時59分50秒

「そう言えば声に出して読んでくれって、言われてたな」

そして、折りたたんであるのを、広げて何が書いてあるのかを確認した。

(な、何だこれは!?)

よりもよってこんなのを読ませる気か!?

「何という内容なんだ」

もしかして、これを録音して、後で楽しもうという手か。これにかけてあるのは録音の魔法なのか?

12時00分

そういう考えている内に約束の時間になってしまった。

(ええい、もうどうにでもなれ!)

そう思うと僕は杏璃に渡された便箋に書いてある文字を読むことにした。

「『あたしは浩介が好き。好き、好き、好き、好き、好き、好き、好き、好き、好き。好き、好き、好き、好き、好き、好き、好き、好き、好き……』」

最後の一文を読もうとした時だった。

いきなりフラッシュのようにな閃光が走り、そして……。

「ん、んっ……」

(な、な、な、な、な!?)

僕は一瞬思考が止まった。

便箋を読んだら、目の前に杏璃がいてそして……。

(な、何で僕はキスされてんだ?!?)

キスされていた。

そしてやっとなわかった。

あの好きと並べられた発音をつなげると『好き、好き、キス』つまりこれはダジャレだったのか。

(というか……)

「ん〜ん〜 (いきなり何をするんだ杏璃!?)」

「……ん」

(どうして、防衛魔法が動かない!?)

そう思った瞬間だった。

まるで待っていましたと言わんばかりに、光があふれ始め、そして……。

ものすごい爆音が響いた。

そして、僕と杏璃は吹っ飛ばされ、僕は大きな木にぶつかった。

「3丁……あつた……」

僕はあおむけに倒れた。

ダジャレ手紙に、爆発に木に衝突。

すると、みしみしという音が聞こえてきた。

どうやら木が、僕の方に倒れてくるみたいだが、僕は到底動ける力
はなかった。

「嘘!？」

そう言った瞬間に木を僕の方に倒れてきた。

「しっかり……4丁……ガク」

僕の意識はそこで途切れた。

浩介 Side End

杏璃 Side

あたしは浩介の気持ちを確認するために、この手紙を書いた。

もし、浩介が魔法で攻撃すればあたしはバリバリに警戒されている
という事になる。

「痛た……」

あたしは浩介にキスをしてから少し経って、吹っ飛ばされた。

それは浩介も一緒に、木の下敷きになっていた。

「あゝあ、やっちゃった」

その時、突然誰かの声が聞こえたので声の方を振り向くと。

「久美ちゃんじゃない。ここで何してるのよ？」

そこにいたのは浩介の妹の久美ちゃんだった。

「兄さんが真夜中に家を出かければ、誰だっについて行くと思うけど」

「そ、そう」

理由は簡単だった。

「どうして、二人とも飛ばされたか教えてあげようか？」

「え？」

久美ちゃんはあたしにそんな事を言ってきた。

(まさか、彼女は どうして飛ばされたかを知っているの?)

「それはね、兄さんの防衛魔法が危険だと思ったからよ」

「防衛魔法？」

いきなり久美ちゃんから分からない単語が聞こえてきた。

「防衛魔法はね、その人の安全を守るためのものなのよ。攻撃されても、完全とは言えないけど、ダメージは通らないし、連れ去ろうとしても、体重が元の100倍になるんだよ」

「つまり、あたしは浩介にとって危険だと判断されたわけ？」

「違うよ、普通は防衛魔法はすぐに働くものなの。でも杏璃ちゃんは違った。という事は兄さんは杏璃ちゃんの事を、本心が深層心理どうかはわからないけど、認められたということになるわね」

「だったら、どうして、あたしは飛ばされたの？」

あたしは久美ちゃんに疑問をぶつけた。

もし久美ちゃんの言っている通りだったら、あたしは飛ばされないはず。

すると、久美ちゃんはちよつとだけ苦笑いをした。

「それは、いきなりキスをされたら誰だってびっくりするでしょ？」

「な、ななな何でそれを？」

あたしは久美ちゃんがその事を知っているのにびっくりした。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。それにしても思いきった事をするわね」

ま、まさか久美ちゃんはずっと見ていたのかな？

「あ、あの久美ちゃん……その」

あたしは『だれにも言わないで』と言おうとしたが、それは久美ちゃんによって遮られた。

「分かってるって誰にも言わないから安心して。杏璃ちゃんには少しばかり大人の対応をして貰わないと。兄さんを振り向かせたいんなら、あのくらいしないと駄目なのよね。という事で私は帰るね」

そう言うと久美ちゃんは走って公園から出て行った。

「う……ぐ……」

すると、浩介の声が聞こえたのであたしは、そっちに行くことにした。

杏璃 Side End

浩介 Side

「う……ぐ……」

ようやく、目が覚めた。

時間は12時10分。

「だ、大丈夫？」

時間を確認していると、今回の黒幕が声をかけてきた。

「……大丈夫。そっちは……大丈夫そうだな」

僕はもう聞かなくても相手の状態がわかるようになっていた。

よく見れば今夜は満月。
ならば僕の力自体も高まっているのだろう。

「送るよ……」

僕はそう言うと、杏璃を寮まで送って行った。

「あの便箋にかけたのは、僕が読むと、発動される強制転移魔法だな」

「……怒ってる、よね？」

杏璃は僕の方を申し訳なさそうな感じで見ていた。

「怒ってないよ、あの手紙の危険性を感じられなかった僕も、まだ修行が足りてないみたいだし。でも……」

僕は区切って杏璃の方を向いた。

「恋人でもない人にキスをするのだけは、許す事は出来ない。これからは恋人でもないのに、キスなんかするなよ？分かったんなら、今日の事は忘れる」

「え!？」

杏璃は驚いた声を上げた。

「今日の事を覚えていても何も良い事はない、僕も忘れる、だから杏璃も忘れる。じゃあな」

僕はそう言うとおぼつかない足取りで帰った。
今日はとんでもない最悪な一日だった。

浩介 Side End

第48話 心なき魔法使い（前書き）

少々間が開いてしまいましたが、第48話です。

第48話 心なき魔法使い

6月6日

キーンコーンカーンコーン

「雄真、僕は帰るけど、そっちはどうするんだ？」

放課後、浩介が俺の元に来て聞いて来た。

「いや、こっちはちょっと残る予定だ」

「そう、分かった。それじゃあまたあとで」

浩介はそう言うのと教室を後にしたのだった。

浩介が俺の予定を聞いて来たのは、今日の夕食の当番が浩介だからだ。

浩介が作る料理はどれも絶品だから何の問題もないが、浩介の料理を食べた時にすももが言った一言は今でも強烈に印象付いている。

『まるで主夫みたいです』

その力の先にあるもの 第48話「心なき魔法使い」

「集まったわね」

誰もいなくなつた教室に俺と春姫、そして久美や柊に準に八チたち全員が集まっていた。

その理由は久美が朝に話があるから、放課後に残るようにと言ってきたからだ。

「それで、話とは何だ？」

伊吹が久美に話すように促した。

「まず、これを見て」

そう言っつて久美が取りだしたのはアルバムだった。

「これは、昔の兄さんの写真よ」

久美の補足により、意図が分かった。

その写真には浩介の子供の時の写真があった。撮られている場所や時間は違ったが、一つだけ共通点があった。

「どれもこれも浩介だけが無表情じゃないの」

そう、その写真には浩介の両親と一緒に久美と浩介が写っていたが、久美が思いつきポーズを決めているのに対して、浩介はただ立っ
ていて、いつもの冷徹な感じのする無表情だったのだ。

それはこの一枚だけではなく、アルバムにあるほとんどの写真すべてがそうだった。

「そして、これを見て欲しいの」

久美はそう言っつと、一枚の写真を取りだした。

その写真に写っていたのは、浩介の父親と浩介だった。

しかし、違っつところが一っただけあつた。

「う、嘘！？浩介が笑顔で写ってる！？」

柊が驚いていた。

それも無理はない、そこに写っていた浩介の表情は今の浩介からは到底想像も出来ないような笑顔だったのだ。

「それで、この写真がどうしたんだ？」

八子が久美に聞く。

「兄さんは、140年前に変わってしまったの。確かに兄さんは笑う事はあるよ。でもその笑顔は心の底からじゃないというか何と云うか分からないけど」

「つまり久美ちゃんは、何が言いたいのか？」

準がさらに久美に聞いた。

「兄さんは140年前に心を失ってしまったの。笑う心、人を好きになる心すべてを。そして残ったのは人に怒るといふ心だけだったの」

久美は悲しそうに話した。

「それは、浩介の過去と関係があるということか？」

俺は久美に聞いた。

俺はその過去の出来事に心当たりがあった。

浩介の自分の親に騙されて、封印された事があったのだ。そして封印が解けた反動で尊敬する人を殺してしまった。

この話を浩介から聞いたとき、俺達は衝撃を覚えた。だからこそ浩介が心を失うのも当然だと思ったのだ。もし俺が同じことをされたら、俺も浩介と同じことをしていただろう。

「たぶんそうだと思う。それで、お願いがあるの」

久美はそこで区切ると、本題を話し始めた。

「兄さんの心を取り戻して欲しいの」

「取り戻すって、どうするのだ？」

伊吹が久美に聞き返した。

「その力ギを握るのは杏璃ちゃんよ」

「え!!わ、あたしが!？」

久美の言葉に、柊が慌てたように聞き返した。

「そう。兄さんが心を許している杏璃ちゃんなら、兄さんの失われた心を取り戻せるわ」

「その根拠は何処にあるのでしょうか？」

今まで茫然としていた上条さんが久美に聞いた。

「それはね〜杏璃ちゃん〜？」

上条さんの質問に対して久美は、柊に意味深な笑みを浮かべながら言った。

「え！？それは……あの〜」

久美の意味深な笑みに動揺して答える柊。

「それで柊は何をするんだ？」

これ以上深入りすると、とばっちりを受けるそうだと思った俺は久美にそう尋ねた。

「まずはね……」

久美の提案を聞くこと数分。

「「「えー！！」「」」

俺達は久美の提案に思わず叫んでしまった。

「俺は反対だぞー！！なんであいつが杏璃ちゃんと……ぐはっ！！」「うるさい、ハチ」

別の意味で叫んでいたハチは準によって潰された。

「でも、これしかないのよね。杏璃ちゃん協力してくれるよね？」

久美は表情では笑顔だったが目で『してくれなかったら、あの事を話すよ？』と言ってそんな感じがした。

……なんでだろう、浩介と久美がある意味兄弟である事がすごいわかるのは。

「わ、わかったわよ」

柊の一言により、『浩介の心を取り戻せプロジェクト』（久美命名）が始まる事になった。
ちなみに作戦決行はその日の夜だった。

「兄さん、杏璃ちゃんから電話よ」
「杏璃から？一体何だ」

夜小日向家にて、夕食を終えた俺と浩介はリビングでのんびりしていると一本の電話が入った。

その電話に出た久美が言ったのが今の言葉である。
もちろん、これが計画の始まりである。

作戦では、この後柊が浩介と一緒に出かけること（久美曰くデートらしい）を持ちかける。

そして、デート当日、浩介の手を握ってぶらぶらとする。
といういたって簡単なことだった。

ただ、柊は赤面していたが……。
ちなみに俺達は浩介達のあとをつけるという。

「明日！？いや、無理ではないが……まあ、なんとかしてみるけど、遅れてもいいなら行けるんだが」

と、電話に出た浩介が驚いたような声を上げたかと思うと、困ったような表情をして話していた。

ちなみに、久美からは電話の内容が聞こえるようにと、特殊なイヤホンを渡されていたり（八チの場合は渡すと犯罪に使うという理由で渡していない）する。

実はその実験のために装着していたりする。

イヤホンから聞こえてきた声を補うとこのようになる。

「もしもし」

『も、もしもし』

「何の用だ、杏璃？」

『いやその、明日あたしと一緒にその、ああ遊びに行かない？』

「明日!？」

『え〜と、無理……かな?』

「無理ではないが……まあ、なんとかしてみるけど、遅れてもい
いなら行けるんだが」

『じゃ、じゃあそれで決まりね。集合時間は明日の午前10時にオ
ブジェ前』

「了解」

『そ、それじゃあね』

とまあ、柘はドモリながらもちゃんと用件を伝えられたみたいだ。

一方、受話器を置いた浩介はすもも達のところで何かを話すと俺達
のところへ歩いて来た。

「悪い、明日用事が出来たから、ちょっと片づけなさいといけない仕
事をしないといけないから僕は先に上に行く」

浩介はそう言うと、足早にリビングを去った。

ちなみにこの作戦の事をかーさんやすもも既に知っていた。

「久美。浩介に仕事があつたみたいだけど大丈夫か？」

俺は、浩介がリビングを出ていく所を見ていた久美に聞いた。

「大丈夫よ。兄さんは一度行くつて言つたからには、遅れてもちゃんと行くよ」

すると、久美は自信を持ってそう答えた。

俺はというと、明日の作戦が無事に終わるようにと願っていた。

第49話 謀られたデート（前書き）

更新が遅れてしまいすみません。
デートイベントです。

第49話 謀られたデート

6月7日

俺達は柘と浩介が待ち合わせているオブジェ前から少し離れたところに、隠れるようにしていた。

「なあ、やっぱり尾行は良くないんじゃないか……」

俺は準たちにそれとなく言った。

「これは、尾行じゃないわ。二人がちゃんとデートをするのを見届けるためよ」

準はそう言うが、さすがにこれは見つかったら、浩介に半殺しされるなあと思っていた。

「それにしても遅いわね。浩介君」

今の時刻は、午前10時25分

浩介はまだ来てない。

つまり、浩介は待ち合わせの時間に遅れているのだ。

「だんだん柘が不機嫌そうに……」

俺の言葉にみんなが柘から視線を逸らした。

いや、周りに行きかう人も柘を避けるようにして歩いている。

どうやら柘から発する不機嫌オーラでそうしているみたいだ。

(浩介、早く来てくれ)

本気でそんなことを願っていた。

その力の先にあるもの 第49話「謀られたデート」

ピピピピ

すると、柊の携帯が鳴りだした。

ちなみに説明しておく、柊と浩介の会話(電話の内容も含めて)を聞きとれるようにと久美は昨日渡したイヤホンを付けるように指示したのだ。

よって俺達は柊の半径100mで発せられる音や声を聞き取ることが出来るという仕組みだ。

「もしもし?」

『高月だ』

柊が怒りを押さえずに電話に出ると、浩介の声がした。どうやら電話の相手は浩介のようだ。

「一体何やってるのよ!!待ち合わせの時間を30分も過ぎてるじゃないの!」

(うわ!)

俺はイヤホンをつけている耳を押さえた。

なぜかというと、柊の大音量が頭に響いたからだ。

「久美、とりあえず、イヤホンに音の大きさに合わせて音量を決める機能を付けてくれ」

「う、うん。そうするよ」

俺の提案に久美は弱々しく答えた。

今が必要だというのが分かったのだろう。

『だから、言っただろ。遅れるって』

「それとこれとは違うの!!!」

『あのな、夜になっていきなり一緒に出かけようなんて言われてもこっちにはこっちの仕事があるんだから、間に合わせるのは無理なんだよ』

そんなことを俺達が言っているとは知らずに、浩介と柊は言い合っていた。

『ともかくあと3分くらいで付くから待っててくれ』

ツーツーツー。

浩介はそう言うと一方的に電話を切った。

それから3分経った時だった。

「お、あれは浩介じゃねえか？」

周りを見ていたハチが俺達に言いながら、浩介が来た方向に指をさした。

「あ、本当だわ」

よく見ると、浩介が若干早歩きをしてオブジェ前に向かっていった。

杏璃 Side

あたしは、待ち合わせの時間まで待っていたのだが……。

(遅い……)

遅いと思いつつあたしは駅前にある時計で時間を確認する。

10時20分

あたしは時間を見てさらにイライラしていた。

(普通、デートの待ち合わせに遅刻する？)

心の中でそんな愚痴をこぼしていた。

でも、彼は絶対にこれをただのお出かけしか思っていないよね。

でなければ、遅刻はしないはずだから。

あたしはなんとなくではあるが、高月浩介という人はそういう性格だと分かっていた。

前に久美ちゃんが話していた思い出話で、彼が忙しい時に久美ちゃんとの約束があった時には、仕事を投げつけてまでその約束を守ろうとしたらしい。

だから、あたしは彼が来るのを待っているのだ。

(でも、遅すぎない?)

時間を見るとすでに時計の針は35分を差していた。
あたしの怒りはどんどん高まる一方だった。

(周りの人があたしを避けるように見ているのはなぜかしら?)

そう思っていた時だった。

ピピピピ

突然あたしの携帯が鳴り響いた。

あたしは携帯を取り出して、ディスプレイを見た。
そこには『大森浩介』と表示されていた。

(いい加減、『高月』に直さないといけないね)

そんなことを思いながらあたしは電話に出た。

「もしもし?」

『高月だ』

「一体何やってるのよ!!待ち合わせの時間を30分も過ぎてるじゃないの!!」

あたしはイライラしていたあまりに大きな声で彼に怒鳴ってしまった。

『だから、言っただろ。遅れるって』

「それとこれとは違うの!!」

『あのお、夜になっていきなり一緒に出かけようなんて言われてもこっちはこっちの仕事があるんだから、間に合わせるのは無理なんだよ』

彼はあたしの言った事に反論してきた。

『ともかくあと3分くらいで着くから待っていてくれ』

ツーツーツー。

彼はそう言つと一方的に電話を切ってしまった。

(いったい何なのよ)

あたしはそう思いながらも彼の言葉を信じて待つことにした。彼は言つた通りに3分で着いた。

「ごめん。遅れた」

「もういいわよ。突然あたしが、約束を持ちかけたのも悪かったんだし」

あたしは謝つて来た彼に謝ることにした。

確かに急に約束を取り付けるなんて言うのは非常識だった。

「僕だつて男だ。それにめんどくさいしこっちが悪いという事で良い。それより早く行こう」

彼はそう言つと駈け出した。

「杏璃、早く!!--」

「え!？」

あたしは一瞬何が起こったのかが分からなかった。

彼はあたしが付いてこないのをじれったく思ったのか、あたしに近寄ってきていきなりあたしの手を握ったのだ。

あたしは一瞬手を引こうとしたけど、作戦では、彼の手を握ってぶらぶらするようにと久美ちゃんに言われていたのを思い出して、あたしはそのまま手を繋いでぶらぶらとすることにした。

それに、彼の表情がとても楽しそうだったからやめたのかもかもしれない。

杏璃 Side End

浩介 Side

「出来るだけ早くしたんだけどな」

僕はそう言いながら、連盟から杏璃と約束した場所まで飛んでいた。

僕が頼まれた仕事は連盟で手に負えない量の資料を整理することだった。

本当は、明日までなのだが、杏璃との約束がある手前、仕事は早めに終わらせてたっぷりと楽しもう

と思ったのだ。

しかし、これが予想以上に手間がかかった(特に連盟の担当部長の意味のない長話とか)ために、待ち合わせ時間を25分もオーバー

していた。

(せめて、早く到着しないと)

僕がここまで約束事にこだわるのにはわけがあった。

昔、国際魔法連盟の法務課大臣として就任した時は周りから「親の七光」などと陰口を叩かれた。

それでも僕は自分に課せられてた使命を全うすべくやれることは何でもやった。

自分の担当部署で違法な会計処理が行われていれば、力づくでも資料を提出させた。

提出をしなければこっちから殴りこんで行ったりもしたし、違法な会計処理にかかわった者は全員、退職なり減俸なりそれ相応の懲戒を与え監督不行届きとして自分自身にも懲戒を言い渡した。

自分の管轄でもない事でも誰もやらないのなら自分一人でもとやり遂げた事もあった。

その功績が称えられたおかげで僕は親の七光という陰口を叩かれなくなった。

それから僕は自分が正しいと思った事をやりとおして、気付いた時には国民の9割強が僕を支持するようになっていた。

でも、それと同時に僕はある異名を名付けられた。

それが、『心なき魔法使い』だ。

理由は良く分からないが、僕が受け持つ特訓での一步も譲らない強固な姿勢を言っているのか、それとも……。

だからこそ僕はせめて約束事だけでも守ろうとしてきたのだ。

(ちょっと電話でもしとくか)

遅刻するとは言ってあったが、電話でもしないと杏璃の奴がうるさいからな。

俺は、杏璃に電話を掛けることにした。

『もしもし?』

電話に出た杏璃の声は明らかに不機嫌そうなものだった。

「高月だ」

『一体何やってるのよ!!待ち合わせの時間を30分も過ぎてるじゃないの!!!』

突然杏璃の叫び声が響いた。

僕は思わず携帯を耳から遠ざけた。

「だから、言っただろ。遅れるって」

『それとこれとは違うの!!!』

僕の反論に杏璃はいつもの調子で反論してきた。

「あのな、夜になっていきなり一緒に出かけようなんて言われてもこっちにはこっちの仕事があるんだから、間に合わせるのは無理な

んだよ」

そんな杏璃に呆れつつも一応説明をしておいた。

『マスター、待ち合わせ場所の近くになりましたよ』

「ともかくあと3分くらいで着くから待っていてくれ」

ちょうどクリエイトの情報もあった事なので、僕はそう言っていると電話を切った。

そして、手短な場所に着地すると僕はオブジェ前に向かった。

「ごめん。遅れた」

僕は杏璃のそばまで行くと先に謝った。

何だかんだ言って遅れた僕の方が悪いからだ。

「もういいわよ。突然あたしが、約束を持ちかけたのも悪かったんだし」

杏璃も逆に謝ってきた。

「僕だって男だ。それにめんどくさいしこっちが悪いという事で良い。それより早く行こう」

僕は杏璃を納得させるために心にもない事を言った。

こうでもしないとあいつは絶対に譲らないというのが分かっていたからだ。

そして、もうこの話は終わりとばかりに駆け出した。

「杏璃、早く!」

杏璃はなぜかぼーっとしていたので杏璃のそばに駆け寄った。
たまには羽目を外してもいいよな？

僕はそう思うと、杏璃の手を握ったのだ。

「え！？」

杏璃が何が起きたのかが分からないような顔をしていた。

これが、心なき魔法使いである僕に出来る、せめてもの感謝の証だった。

僕は一瞬心に浮かんだ疑問を消し去った。

(僕はいつまで、心を失っていればいいんだろう)

心を失っているのは自分の意志でもない。

こればかりはどうしようもないのだ。

僕という力の存在の桁がある限りこれは続くだろう。

そして、僕は待ち続けるのだと思う。

心を解き放ってくれる存在を。

浩介Side End

「ああああ、浩介君ってば、大胆ね〜」

浩介の突然の行動に伊吹達は固まり、準やすももはワイワイと騒ぎ、俺達はというと恥ずかしさで固まっていたりした。

「ほら、皆も固まってるんで付いて行くわよ」

準はそう言っていると、浩介の尾行を始めた。
八チ？

八チは口にガムテープを張っておいた。
でなければ叫ぶだろうから。

「モガ、モガ。モガモガモガモガ！」

ほら、今だって叫んでるし。

今のから察するに「おのれ、浩介。杏璃ちゃんと手をつなぐとは許さないぞー！」だろう。

『へえ、ここら辺はこうなってるのか』

『そうよ。浩介はこなかったの？』

『まあ、任務中とかで行く時間もなかったし。こっちも色々忙しいからな』

浩介と柊は楽しそうに会話を続けていた。

二人の関係を知らない人が見たら、二人は恋人だと思いが、恋人ではないのだ。

そのくらい今の二人はカップルのように見えるという事である。

「あれ？あそこは何もないはずだけど……」

すると、浩介達は小道に入り込んだ。

俺達も後に続く。

そして、小道に入り込んだのだが……。

「あれ？おかしいわね」

「見失われたのですか？」

準は不思議そうに、上条さんは不安そうにしていた。

そこには誰もいなかったのだ。

まさか勘付かれていたりするのだろうか？

その答えはすぐに分かった。

「おい……」

後ろから聞こえた声に俺達はびくっと背筋が凍るような錯覚を覚えた。

俺達は声のした方に振り向く。

「やっぱり、付けてたのか」

そこには青筋を浮かべている浩介と申し訳なさそうにしている柊の姿があった。

「まさか、伊吹や沙耶までやるとは、式守の名も落ちたものだな」

「い、いや違うぞ！！これはすももが無理やりに……」

「でも、付けてきたんなら同じ事だ」

浩介はそう言いながらクリエイトを手にした。

「お、おいまさか攻撃なんてしないよな？」

「雄真、貴様が恩を仇で返すような奴だったとは、思いもしなかったよ」

止めようとした俺達にも冷たく言い放った。

「行ったはずだよな？僕はある程度までは許しても、度を越えた冷やかしはただでは済まさないと……」

浩介はそう言うと共に魔力を集中し始めた。

「さて、冷やかしたお前達にはどのような ツー!!」

浩介は俺達に死刑宣告をしようとしていたが、突然集中し始めていた魔力は散開した。

俺は助かったと思ったが、浩介の様子がおかしい。

「どうしたんだ、浩介？」

「なんでもない。あんた達の事は許すから絶対に付いてくるなよ！」

浩介はそう言うのと、走り去って行った。

俺達は何がなんだかさっぱり分からなかった。

「なにボケっとしてるのよ、追っわよ!!」

柊が力強く言うのと浩介の後を追いつめた。

「お、おい柊!!」

「あ、杏璃ちゃん!!」

俺達もそれに続くような形で浩介の後を追う事になった。しかし、俺は気づけなかった。俺達の身に迫る命の危険を。

第49話 謀られたデート（後書き）

ここからオリジナルストーリーになっていきます。

それでは、次回でお会いしましょう

第50話 不可能との戦い(前書き)

いよいよ敵陣の登場です

第50話 不可能との戦い

浩介Side

「へえ、ここら辺はこうなってるのか」

「そうよ。浩介はこなかったの？」

「まあ、任務中とかで行く時間もなかったし。こっちも色々忙しいからな」

僕たちは手を繋いだまま、商店街を歩いていた。

僕が歩いているところは僕が初めて立ち寄る所だった。

そう言えば、最近は何事やら色々な事が立て込んでいて立ち寄る機会はないかった。

しかし、僕は後方がさっきからやけに気になっていた。

明らかに誰かが付けてきているという事は分かった。

「浩介、そこは行き止まりよ？」

「杏璃、少しだけ静かにしてくれ」

僕は杏璃にそう言うと、姿を見えないようにした。

その後すぐに、そいつらは来た。

「あれ？おかしいわね」

「見失われたのですか？」

準は不思議そうに、沙耶は不安そうに言っていた。
やっぱり、付けてきたのか。

「おい……」

僕は雄真達の後ろに回り込んで声を掛けた。
雄真達は僕の方に振り向く。

「やっぱり、付けてたのか」

僕の姿を見て雄真は顔が真っ青になっていた。

「まさか、伊吹や沙耶までやるとは、式守の名も落ちたものだな」

「い、いや違うぞ！！これはすももが無理やり……」

「でも、付けてきたんなら同じ事だ」

僕は言い訳をしている伊吹にそう言いながらクリエイトを手にした。

「お、おいまさか攻撃なんてしないよな？」

「雄真、貴様が恩を仇で返すような奴だったとは思いませんかったよ」

命乞いをしてくる雄真に僕は冷たく言い放った。

「行ったはずだよな？僕はある程度までは許しても度を越えた冷やかしはただでは済まさない……」

僕はそう言うと共に魔力を集中し始めた。

「さて、冷やかしたお前達にはどのような　　ッ！！」

僕は雄真達にそう言いかけた瞬間、強力な殺気を感じた。

「どうしたんだ、浩介？」
「なんでもない。あんた達の事は許すから絶対に付いてくるなよ！」

僕は聞いて来た雄真にそう言つと走り出した。

(ついに、動き出したか!!)

ついにあいつがここにやってきたのだ。

このままだと、雄真達の命まで……。

でも、そんなことはさせない。

させるわけにはいかないのだ。

だから僕は走る。

その男が待つ所まで走り続けた。

この後に激しい戦いになることはもう分かっていた。

(死んでたまるか!!僕は絶対に死なない)

前の僕からは予想もつかない事を思いながら、僕はその場所に向かった。

浩介 Side End

その力の先にあるもの 第50話「不可能との戦い」

「浩介!!」

俺達は浩介の後を追いかけて、前に伊吹と浩介が決戦をしたところ

まできた。

「……………！！雄真！？みんな来ちゃだめだ！！！」

俺の声に反応した浩介が大きな声で叫んだ。

「どうしたんだよ？浩介」

「早く戻って、じゃなければ……………」

俺が聞いた事に浩介が答えた時だった。

「じゃなければ、なんですか？」

「……………！！！！」

その瞬間俺達の間で緊張が走った。

そこに現れたのは、金髪の気障な男だった。

「お、おまえは！！！」

「何だ、生きていたのか？」

突然八チが金髪の男を指差して怒鳴った。

「亀沼、こいつらは関係ない。良ければ、こいつらを避難させてくれないか？」

亀沼と呼ばれた男に浩介はそう提案した。

「それは出来ない相談です、浩介様。彼らがここに来たという事は少なからずかわってしまったのでしよう。何、浩介様のご学友です、せめて苦しまないように殺してあげましょう」

亀沼の言葉に俺は背筋が凍るような気がした。
それはさっきの浩介のよりかは比べ物にならないほどの。

「準とすもも、それに八ちは安全な場所に避難してくれ」

「分かったわ、気をつけてね雄真」

「分かりました。気を付けてください、兄さん」

「すももちゃん達の事はこの俺に任せておけ」

準たちはそう言うと、安全な場所に避難した。

残ったのは俺と春姫、そして上条さんに信哉、伊吹、久美そして浩介に柊の8人だった。

「ほう、戦う気ですか？」

浩介が無言でクリエイトを構えた。

俺達も緊張の面持ちで、それぞれのワンドを構える。

「そこにいる浩介様が負けそうになった私に勝てるだけでも？」

亀沼は余裕そうに俺達に言い放つ。

その言葉に俺達は動揺した。

ものすごい力を秘めている浩介が苦戦したという事は、この男がかなりの強敵であるという事になる。

そして、俺達は魔法服を着用していない。

魔法服は、魔法攻撃によるダメージを緩和するのに必要な物だ。

しかし周りを見ると、すでに皆は魔法服を着ていた。

一瞬驚いたが転送魔法で呼び寄せたのかと考え、すぐに目の前に立っている男に目を向けた。

攻撃力に長けている俺と春姫に伊吹、そして柊。

どちらかといえば、サポート系を得意とする信哉と上条さんに久美そして、オーソドックスの強さを誇る浩介。人数でいえば俺達が有利だ。

しかし、相手はかなりの強敵。

これは、作戦でも立てないと勝つのは難しい。

「みんな、戦う気か？」

「もちろんよ、どうせ死んでしまっんなら、あたしたちはかすかな希望に掛けるわ!!」

柊が力強く浩介に言い返した。

俺達も無言で頷く。

「そうか。あいつは何らかのインチキ技を使って、1小節で魔法を行使して、反射魔法までも行使するから気をつける」

浩介は俺達の決意に頷くと、小さな声で亀沼の魔法について伝えた。

その言葉に俺は衝撃を覚えた。

1小節での魔法行使は魔法使いとしては最上級の強さだ。

しかも反射魔法まで使うとなると、これは苦しい戦いになる。

「でも、3年前までは僕の相手でもなかった奴だ。いきなりここまで成長するのはおかしい。あいつが使っているインチキ技の正体を暴きたい。皆、これから僕の言う通りに行動してくれ」

浩介はそう言って俺達に作戦を伝えた。

「わかった」

「作戦と死ぬ覚悟は持てましたか？」

亀沼は俺達に聞いて来る。

「残念ながら、死ぬ気はないのでね」

「そうですか。では、始めましょうか」

そう言った瞬間俺達の間を緊迫した空間が出来た。

「デイ・タルティス!!!」

浩介が、先攻を切った。

浩介から放たれた紫色の魔法弾が、複雑な動きを浮かべて亀沼に迫る。

「甘い!!!」

亀沼はそれをたやすくかわす。

しかし。

「デイ・ラティル・アムレスト!!!」

春姫の複数の魔法弾が一斉に放たれる。

「!!!」

亀沼は浩介が使っているのと同じく俺達に聞き取れない言葉で何かをつぶやくと、春姫の魔法弾は一斉に消滅させられた。

「デイ・アダファルス!!!」

春姫の魔法と間を開けずに俺は火球を放った。

「無駄だ!!」

しかし亀沼はそれをかわした。

「!!」

亀沼が何かをつぶやくと、かなり高い魔力を纏った魔法弾が俺達に向かって放たれた。

「はあああ!!」

しかし、それは信哉によって無駄に終わってしまった。

信哉のマジックワンドはレジストの効果が付いているのだ。

「ラ・デイーエ!!」

すかさず、伊吹が天蓋魔法を展開して、魔法の矢が亀沼に降り注ぐ。

「!!」

しかし、亀沼の眩きで、天蓋魔法ごと消滅されてしまった。

「幻想詩、第3楽章、天命の矢!!」

上条さんから光の矢が降り注ぐ。

「っち!!」

亀沼が舌打ちをした。

しかし、亀沼はその魔法さえも避けてしまった。

「オ フェンダム！！」

避けた所に柵から大量の魔法弾が放たれる。

しかし、亀沼は柵が放った魔法弾をすべて避けた。

「シークナイト・アブロンシア！！」

隙を与えずに久美から放たれた神々しく輝く魔法は、亀沼がいる場所とは大きく異なった場所へと向かった。

「どこを狙って……つく！！」

久美から放たれた魔法は大きく軌道を変えて、亀沼のそばまで来ると爆発した。

「やっぱり、神譲与をしていたか」

浩介が、亀沼を睨みつけながら言い放った。

「分かっていたのか！！」

亀沼の表情に焦りが現れた。

「ああ、あの時に感じた違和感が気になって調べるうちに」

浩介は亀沼を睨みながらも言葉を続けた。

「違和感……だと？」

「ああ。あんたが魔法を放つたびに父さんの魔力波動を感じたんだ。普通は父さんの魔力波動を感じることはあり得ない。だからおかしいと思ったのだ」

浩介は淡々と説明した。

あの時、浩介から受けた指示は、時間差で攻撃するようにという事だった。

一度の攻撃に対して体制を持つのなら、それは本人の実力だが、個別の攻撃になら別の意味合いになるという理由だった。

「しかし、その者が従えている神の力を貸し与えるという荒業は心の底で油断をしていた僕には不利なものだった。でももう僕にはそれは通用しない。それにあんただって、代償を支払っているはずだぜ。その様子から見て魔力の耐久時間が減っているみたいだな」

浩介の説明に俺は疑問を感じた。

(代償？)

ふと、浩介に心がないという事を思い浮かべた。

これはもしかして、代償なのではないだろうか？

「つまり、あんたが戦い続けてもあたし達が勝つという事よ!!」

杏璃が亀沼にワンドを構えながら言い放った。

「それは、どうかな？まだ、俺は負けてもいない。本当の力を見せて貰うぜ。それに浩介様が使う神召喚はこちらで出来ないようにし

ている」

亀沼はとんでもない事を言い放った。
神召喚は浩介にとっては最大の切り札だ。

(いったい、どうする気だ？浩介)

「ふふふふふ」

しかし、浩介は突然笑い出した。

「なにが、おかしい。小僧！！」

ついに亀沼は浩介の事を小僧と呼ぶようになった。

「そんなことで勝った気になれるお前の頭がおかしくてな。僕はどのような状況でも勝てる自信がある。そのために切磋琢磨してきたんだ」

浩介はそう言うと、一歩ずつ亀沼に向かい歩き出した。

亀沼はそんな浩介から逃げるように下がる。

「杏璃の時に使った魔法を改良してみたんだ。ちょうどいい、実験台になりな」

浩介の言葉で俺達に嫌な予感がよぎった。

浩介が柵と戦ったときに使った魔法で、相手に知られていないもの
といえは……。

「真の闇の元、貴様に制裁を下す……闇の制裁！！」

やっぱりその魔法かと思ったが、遅かった。

浩介は発動の言葉を口にした。

しかし、その魔法は前とは違っていた。

前のは相手を覆うように現れた小さな魔法球と、その時間差で現れた巨大な魔法球により相手にダメージを与えるのが、闇の制裁という魔法だった。

しかし、この魔法は違った。

亀沼の周りを、小さな黒い魔法球が降り注いだのだ。

「こんなものに当たると思うのか!?!」

亀沼が余裕そうに言い放った。

しかし浩介の表情は余裕そのものだった。

「当たらずとも、最後に大きなのが来るからな」

「なに!?!」

亀沼が浩介の言葉と共に上空を見た。

俺達もそれにつられて上空を見る。

そこで見えた物に俺達は絶句してしまった。

そこにあっただのは、前に見たのとは一回りも大きい巨大な黒い魔法球だったのだ。

「さようなら」

浩介がそう言った瞬間、上空に浮かんでいた魔法球が、亀沼に迫る。

「う、うわあああああああ！！！」

ドカーン！！

まるで隕石が落ちた様な爆音とともに、周りに閃光が走った。その光が晴れると、そこにいたのは……。

「く、くそお……」

地面に膝をついている亀沼と平然と立っている浩介の姿だった。亀沼は最後にそう言っていると、倒れた。

「す、すごいじゃないか、浩介！！」

俺達は歓喜のあまり、浩介の元に近寄った。しかし……。

「みんな、危ない！！」

浩介の言葉に俺は何があつたのかが理解できなかった。しかし、それはすぐに分かる事になった。

最悪な形で……。

俺達のいるそれぞれの場所の足元に広がっていたのは、魔法陣だった。

「う、動けぬ」

信哉は魔法陣から抜けだそうともがくが動く事が出来ない。俺は、魔法を使って、抜け出そうとしたが……。

(弾かれた!?)

俺の魔法は弾かれてしまったのだ。
どうやら、それは全員も同じだったみたいだ。

「今、助ける!」

唯一自由である浩介は、俺達に魔法を効率に行使できるようにするために後ろに大きく下がったが……。

「くそ!!こつちもやられたか」

どうやら浩介も拘束されたのか、動けないようになっていた。
だが、浩介が拘束された拍子に魔法弾が放たれた。

今で分かったのは相手に対してなら魔法を行使することが出来る
ようだ。

俺はそう思い、呪文を唱えようとしたが……。

「中々、やるではないか」

それはとある人物の声によって遮られることになった。

第51話 覚醒

「中々、やるではないか」

俺達はその声に反応して、唯一動かせる頭を動かして、その声を発した人物を確認する。

そこに立っていたのは黒い髪に青い目、顔立ちも渋さを出している男だった。

「あなた、誰よ」

柊が立っている男に問い詰めた。

しかしその答えは、すぐに出ることになった。

「お、お父さん!!」

「お、お父さん!？」

久美の言葉に俺達は息をのんだ。

目の前にいる男は浩介と久美の父親であり、この事件の黒幕でもある。

「さよう、高月家現当主、高月宗次郎とはこの俺の事だ」

宗次郎　さん付けで呼ぶ気にはなれない　は堂々と名前を言った。

「なぜ、このような事をした!!」

そんな宗次郎に浩介が吠えた。

「なぜ？そんなの分かってるじゃないか」

宗次郎は口元に不気味な笑みを浮かべて浩介に言い返した。

「俺の目的は式守家を破門して、式守家の秘宝を手にし、お前を封印することだったんだよ」

そして、宗次郎から事実が語られた。

その力の先にあるもの 第51話「覚醒」

「お前の力は危険だ、だからその力を封じようとしたのだ。しかし、1回目は失敗してしまった。だから次こそは成功させるのだ。そしてたまたま名家について調べているときに、式守家の秘宝のデーターを見つけた時は歓喜したものだ。あとはお前の考えている通りだ。そこにいる式守家の次期当主を利用して式守家に罪を作り、秘宝を奪うというものだ」

俺は宗次郎の話に何処となく怒りを覚えた。

逆にこのような性格だから、浩介はあんなに父親の事を嫌っていたのだろうとも思えるくらいだった。

「僕的能力を買ってこの任務を任せると言った、あんたの言葉は全部嘘だったのか！！」

浩介が宗次郎に怒鳴った。

浩介が怒るのも当然と言えるだろう。

「能力を買っているのは本当だ。しかし式守家の秘宝でお前を封印するにはそれしかなかったのだな。お前はそれに気づかず、任務を引き受け、さらには毎日の報告レポートを欠かさずこちらに送り続けていた。それで俺達はそっちの状況を把握できたのだ」

浩介の問いかけに宗次郎は笑って答えた。

さらに宗次郎はつづけた。

「それにしても式守伊吹、お前は馬鹿だよな。騙されていることにも気付かずに、俺達が流した情報に載ってまんまと目的を達成したのだからな」

俺は宗次郎の言葉に一つだけ引つ掛かる事があった。

「何だと……!!」

伊吹が怒りのあまりに魔法を放とうとするが、浩介がそれを首を振って抑えた。

「流した情報とは、どういう事だ？」

俺は宗次郎に聞いた。

聞いた話では元々伊吹が秘宝を取り返そうとした理由は、鈴莉母さんが秘宝を封印しようとしているという情報を聞いたというものだった。

しかし、ここで一つだけ謎が残る。

どうやって伊吹はその情報をつかんだのだ？

前に聞いた浩介の話では、国際を含めた連盟はその任務を行使する際は部外者には情報を伝えないようにと教えられているらしい。

また、その情報を伝えた者にも同じよう忠告するのだと言う。

浩介の事だ、当然式守家の当主や鈴莉母さんに誰にも言わないようにと口止めをしていたのだろう。だったら伊吹は何処からその情報を手に入れられたのだ？

「そんなの決まってるだろう。この俺が、式守家に秘宝が封印される事を流したのだ」

「あんた……サイテ ね」

柊が宗次郎を睨みながら言った。

「さて、話が長くなったな。始めるか」

宗次郎は目を伏せながら言うと、手を上空にかざした。

「久美、こいつらに手を貸すのであれば、ただではおかないからそのつもりでいろ」

「……っ!!」

宗次郎は、防御魔法を展開しようとしていた久美に脅しを掛けた。これによって久美は完全に身動きが取れなくなってしまった。

「安心しろ、表にいた連中は生かして帰してやる。まずは、邪魔だからあんたたちから消すことにするか」

宗次郎は不敵の笑みを浮かべると上空にかざしていた手を、俺達に向かって手をかざした。

「……!!」

宗次郎は何かをつぶやくと、かざされている手から黒い霧が出現し

た。

「それじゃ、あの世で仲良くしな!!」

宗次郎はそう言うと黒い霧を俺達に向けて放った。どんな事をしてもこの攻撃を防ぐことは出来ない。

しかも今俺達は宗次郎の拘束魔法により身動きが取れない状態だ。まさに万時休す。

もうだめかと思っただ瞬間だった。

「何ッ!？」

宗次郎が慌てて驚きの言葉を口にした。

なぜなら、黒い霧が俺達に当たる瞬間、それを遮るように水柱が立ったのだ。

「今は久美ではない。という事は……」

宗次郎が、後ろを振り向いた。

そこには宗次郎の拘束魔法に捕われていた浩介の姿があった。そして、浩介は何かを呟いていた。

おそらくさっきの水柱は、浩介が出したのだろう。

「おのれええ!!邪魔するな!!」

宗次郎は気が狂ったように叫ぶと、浩介に向けて杖を振った。その瞬間、浩介に向かって電撃が放たれた。

「あぎゃあああああ!!!!」

浩介が断末魔の様な悲鳴を上げて、苦しそうにもがいていた。

(くそっ!!何とかならないのか!!)

俺は必死に脱出しようとしたが、やはり拘束魔法には変化がない。

「あ……あぁ

」

浩介は意識を失ったのか、力なく頂垂れて動くそぶりを全く見せなかった。

そして、浩介の体から煙が立っていた。

それもそのはずだ。

あの電撃を防御魔法もなしでまともに浴びてしまったのだ。意識を失わない方がおかしい。

「さて、今度こそお前らには死んでもらおう」

宗次郎はそう言うと、再び魔力を集め出した。

「それじゃ……死ね」

俺達の前にあるのは巨大な黒い魔法球だった。

そして、その魔法球は宗次郎によって放たれた。

その魔法球はものすごい速度で俺達に向かう。

もう魔法を使っても間に合わなければ、防げないだろう。

俺は、目を閉じた。

人が、死ぬと思っていると目を閉じると言うのは本当のようだ。

そして、俺は心の端でこう思っていた。

(俺達を助ける人が来るといふ事も本当なのかもしれない)

それがどのような根拠で思ったのかは分からなかったが、俺はある意味確信していた。

諦めなければ、何とかなる。

一番の根拠は浩介の言葉だったかもしれない。

それは俺と浩介と久美が瑞穂坂に入学した日の夕食後のことだった。俺と浩介は相変わらず、リビングのソファに座りテレビを見ていた。

『雄真』

すると、今まで静かにしていた浩介が突然俺に話しかけてきた。

『何だ？』

『入学祝いに一つだけためになる話をしてあげる』

俺の言葉に浩介はそう返した。

『何だ、話って?』

『正義って誰が決めると思う?』

『そんなの、神様……とかじゃないのか?』

浩介の突然の問いかけに俺はばかばかしいと思いながら答えた。

『まあ、それもある。でもね、正義なんて人それぞれだ。その人からは悪と見えても自分ではそれが正義だと思うように』
『……』

俺は浩介の言葉に、ただ耳を傾けることしかできなかった。

『だから、正義なんてもんは少なからず決まってないんだ』

浩介はさらに続けた。

『特撮アニメをしてみる。家や何かをヒーローが破壊しているのに皆は、彼らを正義の味方だと人々は言ってるんだ』
『確かに……』

俺は浩介の言葉に頷いた。

『でも、アニメとかを例えにするのはちょっとまずいが、要するに僕が言いたいのは……』
『言いたいのは?』

俺は浩介に先を促した。

『自分がこうしたいと思えばその意思を決めた時から、その人にとっ

ての正義はそれに限定されるという事だ』

『……？』

俺は浩介の言っている事の意味がよく分からなかった。

『今は無理に分かろうとしなくてもいい、いつしかこの言葉を理解する日が来るだろうから』

浩介は、俺が理解出来ていない事に気づいてそう言った。

『でも、一つだけ言えるのは、自分がどんな窮地になっても諦めなければ何とかなるかもしれない』

浩介はそう言うのとソファアールから立ちあがり、リビングから出ていった。

それが、浩介が俺に教えてくれた格言の一つだった。

その後も浩介は暇を見つけては、俺に格言などを話してくれた。

だから、俺は大きな賭けに出ることにした。

そして、魔力球が俺達のすぐ前に迫ってきて言う事も感じ取れた。

浩介 Side

僕は父さんに威力の高い電撃を浴びせられ、意識を失っていた。

なんでこんなむちゃな事をしたのかと聞かれれば、僕にもよく分からないと答えるだろう。

相手の思うどおりになるのが嫌だったのかもしれないし、友人を助

けたいと思ったからかもしれない。

(結局僕は役に立たなかった)

深い眠りの中、僕はそう思っていた。

目覚めたくない、目覚めれば目の前に広がるのは地獄絵図だろう。

父さんの魔法レベルはかなり高い。

久美を動けないようにしている時点で、父さんが優勢なのは目に見えていた。

(僕はいつもいつも、皆を傷つけている)

心の中に浮かぶのは後悔の思いだった。

(僕が弱いせいで)

ドクン

(僕は弱い。だから皆を守れなかった)

ドクン

僕の思いと連動して心臓の鼓動が聞こえた。

(弱い……？本当に僕は弱いのか？)

僕はふと疑問に思った。

(弱いんじゃない。僕が望んでいないからだ)

そして、僕は答えを導き出した。

（ならば、僕は力が欲しい）

ドクン、ドクン

僕は心臓の鼓動が速くなっていくのを感じた。

（友を守り、大切な人を守るための力を……）

僕はその力の名前を知っていた。

前は出来ないと言って避けていた力。

それを僕は自ら求めていた。

資格なんてものはどうでもいい。

この身に変えてもあいつらを守りたい。

それが僕を動かしていた。

そして、僕はその名前を心の中で紡いだ。

（魔王の力を……）

それを心の中で紡いだ瞬間、僕の体の中からものすごいエネルギーを感じた。

さあ父さん、始めようか。

己の裁きを……！！

浩介 Side End

「な、なんだこの力は!？」

宗次郎が魔法球を放った瞬間、おびただしい魔力を感じた。俺は瞑っていた目を開いた。

そこに広がっていたのは浩介の方を見て、怯えたように声を発している宗次郎と……。

「浩……介？」

「浩介……お兄様？」

俺達はその先にいた浩介の姿に固まってしまった。

浩介の外見が変わっていたのだ。

髪の色は黒から銀色へ、そして浩介の背中には黒くて大きな翼が生えていた。

次の瞬間だった。

「え？」

「拘束魔法が解けた!？」

突然拘束魔法が解けた様に消えたのだ。

いや、違う。

これは解けたのではなく、拘束魔法が浩介に吸い込まれているんだ。

浩介の周りには今までの比にもないほどの威圧感を発していた。

「させるか!!」

宗次郎が叫びながら浩介に向かって、突進した。

宗次郎が、魔法弾を具現化しているにもかかわらず、浩介は目を閉

じて避ける素振りを見せない。

このままだと、浩介は宗次郎の攻撃を喰らってしまう。

「喰らえ！！デバンスティア！！」

宗次郎の詠唱と共に魔法弾が放たれた。

俺から見てもその魔法弾にはかなりの魔力が込められており、これをまともに喰らったら浩介は無傷では済まないだろう。もうだめかと思っただ次の瞬間。

「な、何！？」

「防いだ！？」

宗次郎だけではなく俺達も驚きの声を出した。

宗次郎の魔法攻撃は、浩介に命中するギリギリのところまで跡形もなく消えたのだ。

「我らが纏いし闇の力……」

すると、ただ立っていた浩介が言葉を紡ぎ始めた。

「その力は我が意思の名のもとに開放する」

「ま、まさか！！」

浩介の言葉を聞いた宗次郎が慌てた様に後ろに下がり始めた。

「どっついう事だ？高月」

「……覚醒よ」

伊吹の問いかけに久美は一言だけで答えた。

「でも、この魔力の量はあたし達が感じてきたものとは全く違う」
柊がうわ言のように呟いた。

「我が意思は友を守り、大切な人を守る事なり。人の道を外れる、愚か者め！！恥を知れ！！」

浩介は目を開くと憎悪をこめて宗次郎を睨みつけながら言い放った。

「まさか、覚醒したのか!？」

「ああ、父さんが色々とやったおかげでね」

宗次郎の問いかけに浩介はそう答えた。

「はあああああ！！！」

浩介はクリエイトを握りしめると、雄叫びを上げながら宗次郎に向かって突進した。

「ぐはあ！！！」

宗次郎は防御魔法を展開しようとしたが、それは少しばかり間に合わず浩介に弾き飛ばされた。

「みんな、ごめん」

浩介はそう言うと、俺達の前に移動してきた。

「浩介……その姿は？」

柊が浩介に聞く。

「まさか……お前が魔王だったとはな……」

宗次郎は痛む体を引きずりながら俺達の前に移動してくる。

「ま、魔王!？」

そして、宗次郎の言葉に俺達は全員驚いた。

少し前まではおとぎ話かと思っていた存在がまさか目の前にいたなんて、俺達には想像もつかなかった。

「気付いたのは最近だけだな。さあ、罪滅ぼしを始めようか……」

浩介はそう言うのと俺達に向き直った。

「軽蔑してもいい。だから今だけみんなの力を貸してくれ。皆には亀沼と同じやり方で、攻撃をして欲しい。その間、僕は超特大の魔法を放つ準備をするから」

浩介の言葉に俺達は何も言わずに頷いた。

「兄さんが例えあくまでも、皆が見捨てるわけじゃないよ」

久美は浩介にそう言うと、話は終わりとばかりに宗次郎の方を睨んだ。

俺達も、ワンドを構えながら宗次郎を睨みつける。

「魔王がいても、俺が勝つ!!」

宗次郎はそう言い放つと、魔法弾を放った。

「高月家、緊急結界!!」

しかし、それは久美の防御魔法により、無意味になった。

「……エル・アダファルス!!」

そして、その間に呪文を詠唱していた俺は、簡単な魔法弾を宗次郎に放った。

「こんなもの……はああ!!」

宗次郎が横に手を振っただけで俺の魔法は掻き消された。

「デイ・ラテイル・アムレスト!!」

しかし、春姫の魔法弾が隙を与えないように放たれる。

「小癪な!!」

宗次郎はそう言うとともに、魔法弾を防御魔法で防いだ。

「ラ・ディーエ!!」

しかし、それに間髪を与えずに伊吹の天盖魔法が展開され、魔法の矢が雨の如く降り注いだ。

「くっ!!」

宗次郎はそれを飛んでかわす。
しかし、優勢なのはこっちになってきたようだ。

「みんな、避難して!!」

浩介の言葉に、俺達は反射的にその場から、後ずさった。

「闇の名の下、かのもとに真なる闇の裁きを下せ!!」

「11の!!」

宗次郎は自滅を覚悟で、浩介に向かい突進する。

「闇の制裁!!」

浩介が放ったのは、亀沼にとどめを刺したのと同じものだった。

「ぐは!!」

宗次郎は突進していたために上空から降ってくるオトリの魔法弾が命中した。

ドカーン!!

「ぎゃああああああ!!!!」

そして、上空から迫ってきた黒い魔法球が宗次郎のいた所に落ちた。

その途端、再び隕石の落ちた様な爆音と閃光が走った。

光がおさまると、宗次郎は地面に膝をついていた。

「ふう、終わった」

浩介はそれを見てそう呟くと、髪の色が銀から黒に変わり背中に生えた翼も消えて元に戻った。

「みんな……隠しててごめん」

浩介は俺達に向き合つと頭を下げて謝ってきた。

「いや、浩介が魔王なのは驚いたが、それで接し方を変えるほど薄情なやつはいないよな？」

俺はそんな浩介にそう言うと、確認の意味を含めて全員に聞いた。
全員は無言でうなずいた。

「らしいぞ、浩介」

「ありがとう」

浩介が俺にお礼を言ってくる。

「雄真!!」

「兄さん!!」

「雄真!!」

すると、準たちの声が聞こえたので、振り返ると俺達の後ろから準たちが走って近づいて来た。

「みんなも無事でよかった。突然みんなの様子が見えなくなったか

らどうなったかと不安だったのよ」

準が安心したように言ってきた。

「どうやら、父さんが外から見えないように細工したようだ」

浩介が準の話の話を聞いてそう言った。

「でもまあ、終わったんだし良かったじゃねえか」

八チがしみじみという。

「八チにしては珍しく正論だけど、そのとおりね」

「珍しくは余計だ!!」

準の言葉に八チが反論をするが、それも準によって華麗に流されてしまった。

そして、俺達はこの場を離れようとした。

しかし、そうは問屋がおろさなかった。

「……………!!」

突然背後で人の気配がした。

俺達は振り返った。

そこには、宗次郎が顔を俯かせたまま立っていた。

「まだ、終わってない。こんなことで……………こんなことで終わらせてたまるか!!」

どうやら、この戦いはもうしばらく続くようだ。

俺達は再び緊張の面持ちでワンドを構えた。

第51話 覚醒（後書き）

もはや急展開以上のものです。
次回は某所で話題になったお話になります。

第52話 未知の領域

「往生際が悪いぞ、父さん！」

浩介が呆れたように言う。

「勝った気になるな。まだまだ俺には切り札があるんだ!!」
「なに!？」

宗次郎の言葉に俺達は聞き返した。

「見るがいい、この俺の強さを!!」

宗次郎はそう言い放つと首にかけてあつた何かをはずした。

その力の先にあるもの 第52話「未知の領域」

宗次郎がに首から外したのは浩介が持っている首飾りと同じ勾玉の
ようなものだった。

「まさか、あれをする気が!？」

しかし、それを見たたん浩介と久美の表情が険しくなった。

「どういう事だ、浩介?」

「父さんは完全体になろうとしている」

俺の問いかけに浩介が慌てた様子で答えた。

「完全体って何よ？」

柊が浩介に聞く。

「魔族が持つ最強の形態変化能力の事だ」

柊の質問に浩介が答えた。

「我に秘められし真なる力よ、我が名のもとにすべてを解き放ち、真なる姿へと変えたまえ！！」

宗次郎がそう唱えた瞬間、宗次郎の周りから灰色の光が光り始め、やがて宗次郎の体を覆った。

光の中に宗次郎の姿らしき影がかすかに見えた。

「どっついう意味なのだ？」

目の前で起きている現象に警戒しつつ、伊吹が浩介に聞いた。

「魔族のほんの一部のものでしか出来ないものだが、これをする事によつて体内に秘められているその人にあつた力が解き放たれる。この形態の恐ろしさは、その人の体力や魔力などのすべての値が上昇して、そんじょそこらの魔法では倒す事が出来なくなる所だ」

伊吹の問いに浩介は冷静に答えた。

「でも、時期に分かる。それが目の前で起こるのだから」

浩介が言った途端、目の前にあった宗次郎の体を映したシルエツトが少しずつ変化し始めていた。その影は見る見るうちに巨大化していった。

「神坂、雄真それと杏璃。神坂はすももの、柊は準さんの、雄真は八千のそばについて、いつでも空を飛べるようにしてくれ」
「分かった」

俺は浩介の見幕に押されながら浩介の言う通りにする。

ちなみに上条兄弟は浩介の魔法によって上空に強制転送された。その瞬間、目の前の光がはじけた。

「な、何だあれは!？」

八千が驚いたように“それ”を指差して言った。

そこにいたのは宗次郎ではなく、まるで魔神の様な姿で大きさも馬鹿にはならないほど巨大なものだった。

「……っ!!来るぞ、上空へ避難しろ!!」

突然浩介が、慌てた様子で俺達に指示を出してくる。

よく見ると、魔神の姿になった宗次郎が腕を思いっきり振り上げていた。

俺達は急いで上空に舞い上がった。

浩介と久美はワンドを使わずに上空にジャンプするように避難した。

その次の瞬間だった。

ドスン!!

俺達が今までいた所が魔神の攻撃によって抉れていた。

「う、ウソだろ……」

俺はそう呟いた。

それほど目の前で起きた事は常識を超えていたのだ。

魔神が地面に向けて腕を振りおろした所から離れているにもかかわらず、地面が抉れていたのだ。

「あれが、父さんの完全体。そしてこれが完全体の恐ろしさ」

浩介は俺達の横に付くと静かに言った。

「久美、僕たちも行くよ」

「え！！まさか私たちもやるの？」

浩介の言葉に久美が驚いた様子で聞き返した。

「仕方ないだろ。あの状態では、どんな魔法も効かないんだから。それと、雄真達は絶対にそこから動かないでくれ」

聞き返してきた久美に対して浩介はそう返し、俺達に注意をすると、魔神から少し離れた所に着地した。

「闇の名の下、我が身に込められし、真の姿を今ここに表せ。その力は我が望みし、真実の姿なり！！」

宗次郎がさつきしていたように首飾りを握ると、浩介は叫んだ。その瞬間浩介の周りに黒い光が発せられそれに覆われた。

「ああ、もう！！結局やらないといけないの！？」

久美はそう文句を言うと、浩介の隣に着地して、首飾りを手にした。

「光の名の下、神聖なる力を示せ。その光は周りを助ける神の証なり！！！」

久美が叫んだ瞬間、久美の周りに白い光が発せられ、それに覆われた。

「おいおい、二人ともあんな風になるのかよ」

八子が不安そうに呟いた。

しかし八子の不安は当たることなく、元のサイズのままだった。

一番初めに光がはじけたのは、浩介だった。

浩介の姿で一番目を惹くのは、腕の部分だろう。

浩介の腕、正確にいえば爪が異様なほど伸びていたのだ。

それは地面に当たっているくらいのものだ。

そして、服装や外見は元のままと同じだが、浩介から発せられるオーラがまるで浩介の周辺に針があるような錯覚を覚えるほど、攻撃的なものだった。

他が変わっているとすれば、浩介の眼の色が真っ赤に輝いているくらいだ。

そして、しばらく後に、久美を覆っていた光がはじけた。

「うっひょ〜久美ちゃん可愛いぜ！！！」

完全体になった久美の姿を見た八子が、興奮して暴れる。

「それ以上騒ぐと、落とすぞ?」

そんなハチに俺は一言言うと、ハチも恐れを成したのか静かになった。

それほど久美の姿はすごいものだったのだ。

服装は魔法服である巫女服から、白いドレスに変わり、髪の色も黒から銀色のロングヘアーになっていて、さらに頭には白いカチューシャが装飾されていた。

外見では、浩介ほど威圧的なオーラは発せられてなく、背中には白い翼が生えていた。

「あまり、こういう姿になりたくないのだが……仕方ない。1発で決める。防御と攻撃力の補助よろしく」

浩介は久美に簡潔に言った。

「そうね。私もこの姿は落ち着かないし、出来るだけ協力するわ」

久美も苦笑いを浮かべながら言うと、目を閉じて集中し始めた。

その途端、久美の体と浩介の体が白くて淡い光が纏った。

そして、浩介は片足を大きく曲げて、体を下げた。

その次の瞬間。

浩介はものすごいスピードで、魔神に突っ込んでいった。

「は、早い……」

それを見ていた春姫が唖然としながら言った。

そのスピードは視認することは出来ず、確認出来るのは浩介を覆っている白い光の残像だった。

その光は、魔神の周りを複雑に回っていた。

「ぐおおおお！！」

浩介の攻撃に魔神は苦しがつているようだ。そして、浩介は腕を振りおろした格好で魔神の前に着地した。次の瞬間、魔神が地面に倒れた。

「本当に倒しちゃったぞ、浩介」

俺はまるで信じられないとばかりに呟いた。他の皆はこの光景を見て、固まっていた。倒れた魔神は再び光だし、その体は見る見る小さくなっていき、宗次郎の姿に変わった。

「ふう、終わったな」

浩介の言葉と共に、二人は元の姿に戻った。

「お〜いもう降りてきても大丈夫だぞ！！」

浩介の言葉に俺達はゆっくりと浩介のそばに着地した。

「あんな魔神を倒すなんて、二人ともすごいじゃないの」
「俺もだ。久美ちゃんのドレス姿に思わず……グハ！！」

着地するとすぐに、準と八チが二人に声を掛けた。八チの一言で、久美が顔を真っ赤にして持っているワンドで、叩きつぶした。

俺はそんな八チを見ながら嫌な予想をしていた。もしかして、上条さんと久美がワンドを使って攻撃するのは、浩介

譲りなのではないかという予感を……。

第52話 未知の領域（後書き）

今回の話は某所でネタにされるほど、面白かったのか、すごかったのかはわかりません。

次回は和解編になります。

第53話 和解

「う……ぐ」

そんな予想をしていると、宗次郎がうめき声を上げながら、起きあがった。

俺達は緊張の面持ちでワンドを構えた。

「もう、大丈夫だ。俺の計画は失敗に終わった」

宗次郎はそう言うのと両手を上げ、攻撃をする意思がない事を表現した。

それを見て俺はラジアを下した。

春姫達もワンドを下げていた。

そして宗次郎はかなり疲れているようだった。

その力の先にあるもの 第53話「和解」

そんな中、浩介が疲れきっている宗次郎に近寄った。

「何か、申し開きあるか？」

浩介が宗次郎に尋ねた。

浩介の声色からかなりの怒りが込められている事が分かった。

「なにも、弁解することはない。浩介の気が済むのなら、俺はどんな罰も受けよう」

宗次郎は浩介にそう言うと、目を閉じた。
それが、父親として出来ることだと思っていたのかもしれない。

「そう。分かった」

浩介はそう言うと、片手に魔力を溜め始めた。

「お、おい浩介、何をするつもりだ？」

「兄さん、今の父さんにそんな魔法を使って攻撃しちゃダメ!!」

慌てた俺の問いかけと、半分悲鳴を上げている久美の言葉に耳を貸さず、浩介は宗次郎に振りかぶった。

「グハ!!」

宗次郎は浩介に殴られると、数メートル飛ばされた。

しかし、宗次郎は殴られた頬を押さえて、きよんとした表情を浮かべながらすぐに起きあがった。

「殴るだけで、いいのか？」

「いいわけないだろ。でも今ここで怒りをぶつけてたら、本当の意味で僕は高月浩介を失う事になる」

宗次郎の問いかけに浩介が答えた。

「僕の気が済むのなら、どんな罰でも受けよう？生意気な事を言うな!!僕のを父さんがどう理解しているんだ!!」

すると、突然浩介が感情をあらわにして宗次郎に叫んだ。

「父さんは、僕を2回も陥れた。もう父さんに僕の心を変えることは出来ない」

「し、しかし……」

「もし、罪悪感を感じているなら、この一件について真相を国民に伝えることだけが父さんに出来ることだ」

宗次郎の反論を遮って浩介はそう言った。

「だから、僕は父さんを信じる。だって、父さんは僕の親だから……例えば父さんが僕を陥れても、親子の絆は絶ち切る事は出来ない。だから、これ以上僕につらい思いをさせないで、父さんを消したいっていう感情を出すような事をしないで。それが守れるんなら、伊吹達しただけで、父さんを許す」

浩介の言葉に俺達は何も言えなくなってしまった。

宗次郎は浩介の話を聞いて、驚いた顔をして浩介を見ていた。

「分かった、約束する。俺は俺の出来る範囲で浩介との約束を守る。それと、ここにいる全員には迷惑を掛けてしまった。本当に申し訳なかった」

宗次郎は浩介にそう言うと、最後に俺達に向けて頭を下げて謝った。

「私も浩介お兄様と同じ意見だ。一刻も早く式守家に掛けられている虚偽の罪を取り下げてもらいたい。それさえして貰えば私もこの事は水に流そう」

伊吹も大方だが、宗次郎を許したようだった。

「さて、俺はしばらくこの場に留まる事にしよう。それと、これから俺は浩介のホームステイ先の小日向家に言っただ挨拶をしてくる」
「お、お父さん！？ちよつと待ってよ！！」

いきなりとんでもない事を言っただ公園を去って行っただ宗次郎を、慌てて久美が追いかけていった。

「みんな、今日は無関係な事に巻き込んで本当に悪かった」

そんな二人の姿を見送ると、浩介は俺達の方に向き直ってそう言いながら頭を下げた。

「もういいって、俺達に浩介を責める権利なんてないんだから」

「そうよ、それに私達が浩介君達を尾行したのがいけなかったんだし」

そんな浩介に俺と準は皆を代表して声を掛けた。

「まあ、そうだが……とりあえず皆は帰って、体を休めてくれ。少なからず疲れているだろうから」

浩介はそう言うと、初めに伊吹と上条兄弟が、その後に準と八子が公園から去って行っただ。

「浩介はどうするんだ？」

俺は気になったので、浩介に聞いた。

「僕はもうしばらくここでゆっくりしてる事にするよ」

俺は浩介の答えを聞くと、春姫と一緒に公園から出た。

(それにしても、本当に長い一日だったな)

そして、春姫を寮に送りながら俺はそう思っていた。

「ただいま」

「あ、おかえりなさい。兄さん」

「おかえり雄真くん」

「おかえり雄真」

俺がリビングに入ると、そこにはテレビを見ているすももと、お茶を飲みながら手元にある書類を見ていた浩介と、その横には久美と宗次郎さんが座っていた。

「それにしても、浩介。あれだけで本当に良かったのか？」

「だから、何度も言ってるだろ。怒りにまかせて攻撃をすれば、それは決して本人にとっていい方向には進まない」と

宗次郎さんの言葉に浩介は鬱陶しそうに答えた。

「そうだな。では別の話をするとしよう」

宗次郎さんの言葉をきっかけに、俺達は学校の事など、さまざまな事を話した。

「さて、久美は……手遅れか」

あの後聞いたのだが、完全体になると、反動が表れて動けなくなってしまうらしい。

それも一晩寝れば治るのだが、宗次郎さんにその予兆が出たので先に、浩介の宇宙船に戻って貰うと、浩介は久美に声を掛けたが、すでに反動が発生していたようで横になって静かな寝息を立てていた。

「さて、どうしたものか……」

浩介は考えると、何を思いついたのか久美を背負った。

「本当に、成長したな。久美は」

浩介はそう呟きながら、リビングを後にした。

「それじゃあ、お休み」

そして、最後に俺達にそう言うと、俺達が返事を言う前にドアを閉めた。

「美味しいオムライス……」

「はいはい、明日のご飯はオムライスにしようね」

廊下からそんな声が聞こえてきたが、俺は聞かなかった事にするとソファーに座ってテレビを見始めた。

（あんがい、浩介と久美は俺達が考えるよりも仲が良い兄弟なのかもな）

『そうですね』

俺とラジアはそう考えながらテレビを見ていた。

その後、時間も時間なので、俺はベッドに入ると、俺の意識は闇の中に落ちていった。

しかし、この時俺はまさか浩介に変化が訪れていた事に、気づくことはなかった。

そして、この変化がこの後に俺達の予想もしない展開を迎える事も俺はまだ予想もしていなかった。

第53話 和解（後書き）

ようやく物語は一段落つきました。

ここからは本章最後の展開を見せます。

それでは、これにて失礼します。

第54話 動き出した心(前書き)

今回でまた新しい設定が現れます。
それでは、第54話をどうぞ。

第54話 動き出した心

浩介Side

「ふう……」

雄真達が公園から去っていくのを見届けて、僕は一息ついた。雄真達に残ると言ったのは、ゆっくりしたいという理由もあったが、心の整理をしたいという理由もあった。

魔王には衝動的になってしまったが、本当に僕には出来るのだろうか。

僕たちの国では、魔王は救世主として崇められている。

その理由は前に話した通りだが、どう言おうが、僕は魔王としての責務をこなさなければならぬ。

僕は魔王として、法務課の大臣として国民を守る義務がある。

このままなら僕の自由は消されてしまうだろう。

どうにかしなければいけない、そんな気持ちだけが先走る。

僕は何を求めているのだろうか？

その答えは僕にでも分からない。

だからこそ今は出来る範囲の事はしよう。

（まずは魔王を補助する存在を探すこと……か）

その者は魔王を補助し、そして常に魔王と共にある人物らしい。

僕はその人物を探さなければいけない。

しかし、その人物はもしかしたら魔法使いではないかもしれない。

魔法が使えない者にいきなりこの話をする、どういつ反応するか位は僕でもよく分かっている。

気絶か逆切れか現実逃避かのどちらか。

そしてその人物が魔法使いとして不適格者だったら、僕はそいつを自分の相棒にする気はない。だから、探し出すのは慎重にしよう。幸い候補は限られている。

常に僕のそばにいる者で限られるのは10人。

さらに、魔法使いに絞ると、7人。

魔法使いなら、探し出すことは簡単で特殊な魔法陣を形成し、その魔法陣を対象者に触れさせた時の反応で調べる方法がある。とりあえずは、手掛かりを探してからにしよう

その力の先にあるもの 第54話「動き出した心」

「浩介!!」

そんなことを考えていると、僕を呼ぶ声が聞こえた。

「どうした？杏璃」

声のした方に顔を向けると、そこには杏璃が立っていた。杏璃の表情から何か、重大な決意をした事を感じ取れた。

「あのねあたし、浩介に話したい事があるの」

「何だ、話とは？」

僕はなぜか顔を赤くしている杏璃に答える形で先を促した。

「あたしは……浩介の事が……」

「僕がどうした？」

僕はさつきよりも増して顔を赤くしている杏璃に聞いた。

「あたしは、浩介の事が好きです!!」

「……っ!!」

僕は杏璃の言葉に頭が真っ白になった。

これは、告白ではないか？

「それは、友人としてか？それとも……」

僕は確認の意味を込めて杏璃に聞いた。

「浩介の事をあたしは一人の男性として……好きです」

どうやら、杏璃は僕の事を異性として好きになってしまったようだ。

普通の人なら喜ぶ所だが……。

「杏璃……」

「な、何？」

杏璃は告白の返事だと思ったのか、緊張した声色で答えた。

「これは、夢だ。杏璃は僕の事を好きにはなっていない。これは夢なんだから、早く覚めないと、学校に遅れるよ？」

「え？」

僕の言葉に杏璃は固まった。

それも当然だろう。

僕はこれを夢だと言ったのだから。

「それじゃあ、僕はこれで……」

「ま、待って!!」

公園から出ようとする僕を杏璃は引き止めようとした。

僕は、その声に耳を貸さずに、公園を後にした。

正直に言えば、とても嬉しかった。

もし、この告白が140年ばかり早かったら、僕は速攻でYESと答えただろう。

でも、もうそれは叶わぬ夢。

僕は恋をすることも許されない人間なのだ。

だって、僕は……人を二人も殺してしまったのだから。

そして、僕の闇。

もう僕には心に住み着く大きな闇をぬぐい去ることは出来ない。

杏璃の告白を受ければ、彼女を巻き込んでしまう。

もう誰も不幸にはさせない。

だから僕は彼女の告白を断ったのだ。

(ごめんね、杏璃)

罪悪感が芽生えた僕は誰にも聞こえないように心の中で謝った。

「全く、久美ったら……」

僕はため息をつきながら、サイホリング号にある久美の部屋から出た。

簡単にいえば反動による行動不能に陥ったのだ。

そして、僕は自室に戻った。

何もすることがなかった僕はすぐにベッドに入り寝ることにした。

(どうか、今日の……せめて告白の事だけでも夢でありますように)

僕はそんなことを望みながら眠りに就いた。

S i d e o u t

6月8日

「おつす雄真、すももちゃん、浩介、久美ちゃん」

「おはよう雄真、すももちゃんそれと浩介君と久美ちゃん」

朝、いつもの通学路で俺とすももと、久美と浩介は準と八子と合流した。

「おはようございます、準さん八子さん」

「おはよう八子、準さん」

「おはよう八子、準」

すももと久美、そして俺は準と八子に挨拶をしたのだが、一人だけ挨拶をしていない人物がいた。

「浩介？」

「……」

俺はさつきから何も言わずに歩いている浩介に声を掛けた。しかし、浩介は何の反応も示さなかった。

「浩介！！」

「わ！？な、何？」

「なに？じゃないよ、準たちが話しかけてもぼーっとしてたからだよ」

大きな声で呼ぶと、浩介はようやく驚いたように反応した。俺はそんな浩介にため息をつきながら言った。

「う、うめん」

浩介はそう言うと、再び黙りこんでしまった。
結局浩介はずっとこんな感じだった。

そして、昼休みになると……。

「神坂、ちよつといいか？」

「え！？かまわないけど……」

突然浩介に話しかけられたためか、春姫が慌てた様子で答えた。

「悪い、ちよつと話がある。一緒に来てくれるか？」

「わ、わかったわ」

浩介の頼みを受け入れた春姫は、目で謝っていた。
それを見た俺は、かまわないぞ、と目で訴えた。

「それじゃ……転送！！」

浩介の言葉と共に、二人の足元に魔法陣が形成され、二人の姿は消えていった。

浩介の言葉から、どうやら、転送魔法を使ったらしい。

しかも、二人の転送先は浩介が何らかの対策をしているのか、特定することが出来なかった。

「一体どうしたんだ？」

八ちはそんな4人の姿を見て不思議そうに呟いた。

そう、4人なのだ。

浩介が春姫に話しかける少し前に、柊も久美に話しかけていたのだ。

柊達の会話は分からなかったが、何かを言うと二人はそのまま教室を後にした。

「でも浩介君の様子が変なのと、杏璃ちゃんが関係しているのは確かね」

準が確信を持って4人の行動を言った。

それは俺でも領けた。

教室に入るなり、浩介と柊はやけに避けあっているし、柊に関しては悲しげな表情を浮かべていた。

「でも、俺達に出来るのは二人を見守る事だけだ」

それを踏まえて俺は準たちにきっぱりと告げた。

ここで俺達が何かをしたとしてもそれは浩介達のためにはならない。

だからこそ、俺達は二人がどのような道を歩むのかを見守ろうと思った。

「そうね。さあ早く食べましょ」

準もその事が分かったのか、話を切り上げると、俺達は昼飯を食う事にした。

浩介 Side

「神坂、ちよつといいか？」

「え！？かまわないけど……」

僕は昼休みになると神坂さんに声を掛けた。

「悪い、ちよつと話がある。一緒に来てくれるか？」

「わ、わかつたわ」

僕の無茶な頼みに神坂さんは首を縦に振ってくれた。
俺は心の中で感謝すると、魔法式を構築した。

「それじゃ……転送！！」

僕の一言がカギとなり、巨大な魔法陣と共に、僕たちは異次元に転送された。

「……っ！！ここ……は？」

転送された場所が分からずに神坂さんは恐る恐ると言った感じで聞いて来た。

「ここは僕が使う事が出来る異次元空間だ。別に怖くない場所だし、この空間は緊急時の隠れ屋と、荷物置き場として使っている」

僕の言葉に安心したのか、神坂さんは空間の中を見渡した。

その空間にはイスや、机などを置いている。
これはすべて僕がこの空間に収納したものだ。

「ここにいれば、核兵器や爆弾でもこの世界に干渉することは出来ないし、この空間は僕の思い通りに変えられる」

僕は補足で説明した。

「ところで、話って何かな？」

神坂さんが、本題を切り出す。

「そうだな。単刀直入に聞く……恋とは何だ？」

「え！！？」

僕の問いに神坂さんが目を丸くして驚いた。

それもそうだろう、いきなりこんな事を聞かれればだれだってこう
いう反応をするだろう。

しかし、今だけは我慢して貰おう。

「いきなり変な事を聞いて悪い。だが、僕の身近で恋人になっているのは二人以外には思い当たらなかったんだ」

僕はそう言つと頭を下げた。

「た、高月君、頭を上げてください」

僕は神坂さんに促らされて頭を上げた。

「え と、恋つていうのは、その人の顔を見ると、もう何も考えられないようになる事だと私は思うよ」

「そうか……」

神坂さんの答えに僕は納得せざるを得なかった。

恋というものに答えはないのだ。

だからこそ僕は経験者に聞いたのだ。

「高月君、好きな人がいるの？」

しかし、当然のことく問題が発生した。

人に尋ねれば、逆にこっちにも聞かれてしまう事は予想できた。

もちろんこっちもそれにこたえる義理はない。

「さあね。とにかく、教えてくれてありがとう。これから戻るよ」

僕は神坂さんにはぐらかして言うと、再び転送魔法を利用して教室に戻った。

実際のところ、どうなのか……。

いや……僕が聞いたかった理由はそういう意味ではない。

この心が恋心ではないことを証明したかったのだ。

言うなれば、杏璃の魔力に引かれただけ。

そう言う答えを期待していた。

でも実際には違う答えを見つけた。

もう、後には引けない。

僕は何が来てもいいように覚悟を決めた。

Side Out

杏璃 Side

「久美ちゃん、ちょっといい？」

昼休みに入ると、あたしは久美ちゃんに声を掛けた。

「別に私は良いけど、どうしたの？」

「ちょっと話したい事があるのよ、浩介の事で」

久美ちゃんに聞かれた事に答えると久美ちゃん表情が引き締まった。

「分かったわ、とりあえず、屋上に行きましょ」

「ええ」

あたしがそう言うと、久美ちゃんは教室を後にした。

あたしも久美ちゃんの後に続く。

屋上に着くと、久美ちゃんとあたしはベンチに腰掛けた。

「それで、浩介がどうしたの？」

そして、久美ちゃんがあたしに聞いて来た。

「うん、実はね……」

あたしは昨日あった事をすべて話した。

浩介に告白をしたこと。

告白に対して浩介が、夢だと言った事。

「なるほどね、道理で兄さんの様子がおかしいと思っただわ」

あたしのお話を聞き終わると久美ちゃんが真剣な表情を浮かべて言った。

「浩介の様子がおかしいって、どういう事よ？」

「なんだか今日はぼーっとしていたりする事が多かったのよ、だから……」

あたしの問いかけに久美ちゃんは答えた。

「それで、杏璃ちゃんの話から察するに、兄さんに心が戻ったようね。でもそれでも杏璃ちゃんの告白を受けるわけにはいかなかった」

「どうしてなのよ？」

あたしは久美ちゃんの言っている事が理解できずに聞き返してしまっただ。

心が戻ったのならどうしてそれを断ったの？

それに断り方も不自然だわ。

あたしは昨日の浩介の言葉で考えていた事があった。

浩介は告白を『夢』と表現した。

なぜ『夢』と表現しなければいけないの？
断るなら直接NOと言えればいいだけの事じゃないの。

「兄さんに残った最後の闇が原因なのかもしれないし、兄さん自体が杏璃ちゃんと合わないと思っっているからかもしれない」

あたしに久美ちゃんは意味深な答えを返してきた。

「だったら久美ちゃん、ひとつお願いしてもいい？」

「うん、かまわないよ。言ってみて」

そして、あたしは久美ちゃんにある頼みごとをした。

「杏璃ちゃんのやりたいことは分かったわ、でも一歩間違えれば命を落とすよ？」

「……………」

あたしは久美ちゃんの忠告に固まってしまい、何も言えなかった。
まさか今からやることだけで、浩介がそんなことをするはずはない。

「兄さんが杏璃ちゃんを危険人物として認識したら、杏璃ちゃんに生き残る道はない。今兄さんはとても不安定なの、だから何が起こってもおかしくない。それでもやるの？」

あたしの心を読んだのか、久美ちゃんはあたしの考えを否定してきた。

「それでも、あたしはやるわ。あたしは浩介に2回も助けられたのよ、だったら1回だけでもお返しをしたいの」

「は、分かったわ。私の方で出来る限りは協力させて貰うよ」

あたしの心は変わる事がないと判断したのか、久美ちゃんはため息をつきながら承諾してくれた。

あたしも覚悟を決めなければいけない。

生半可な気持ちで浩介にあたしの本当の気持ちを伝えるだけじゃ駄目だよだった。

もう、後には引き戻せない。

その後、あたしは久美ちゃんと昼食を食べると教室に戻った。

そして、ついに放課後になり、あたし達の作戦は始まった。

杏璃 Side End

第54話 動き出した心（後書き）

と言うことで、物語は急展開を迎えました。
果たして二人は結ばれるのか。

それでは、これにて失礼します。

第55話 闇が牙をむく時（前書き）

今回の話は読む人によっては意味が分からない可能性がありますので、ご了承ください。

第55話 闇が牙をむく時

浩介 Side

「浩介」

「ん？どうした、久美」

放課後になり、帰り支度をしていると、久美が声を掛けてきた。

「うん、ちょっと話したい事があるから、森の方に来てくれる？」

「わかった」

僕は久美にそう言うと、鞆を手にして森に向かった。

久美は何か用があるらしいので僕が一人で向かう事になった。

久美に言われた森に到着すると、僕はそこで久美が来るのを待ったのだが……。

「全く……何分待たせれば気が済むんだ、あいつは」

僕は文句を言いながら久美が来るのを待っていた。

もうここに来て10分は立ってるのにまだ久美が来る気配もない。

（これは新手のいたずらか？）

その力の先にあるもの 第55話「闇が牙をむく時」

そう思い始めたころ、横の方で人が来る気配がした。

「遅いぞ、久美!!」

「ごめん兄さん。ちょっと用事が長引いちゃって」

文句を言う僕に対して久美はいつもどおりに本当に反省しているの
かないのかが分からないような謝罪をしてきた。

「で、なんだ？話って」

僕はこれ以上無駄話をするわけにはいかないので、本題を切り出す
ことにした。

「兄さんは杏璃ちゃんのことを、どう思っている？」

「どうした、急に」

久美は突然、変なことを言い出したので、僕は思わず聞き返してし
まった。

「好きなの？それとも嫌いななの？」

僕の問いかけを無視して久美はさらに続けた。

「そうだな、嫌いではない。あいつもなんだかんだ言っっちゃんと
した核を持ち行動している。あいつには僕にない物を持っているし
な」

僕はこれ以上久美に何かを言うのを諦め、久美の問いに答えた。

「そう、やっぱりね……。なら、どうして杏璃ちゃんからの告白を
断ったの？」

久美はなぜか彼女が僕に対して告白をした事を知っていたようだ。

「どうしても何も、それを話す義務は……」

僕はそう言いながら久美の顔を見ると、そこから先を言う事が出来なくなった。

それは久美の表情が、今まで見せている和やかな表情ではなく、真剣そのものだったからだ。

こんな表情をした久美を見たのは数十年前のあの事件以来だろう。

僕はあの時の事件を思い出すのをやめた。それを思い出す時ではないからだ。

「私は真剣に聞いているの。答えて兄さん」

久美から無言の威圧感が漂う。

これが久美の強さ。

表情一つで、僕の言葉を止めるほどの“気”を持ち合わせている。

「理由は二つある。一つは僕自身の問題だ、僕は人を殺した。犯罪者が幸せになる権利なんてない。そしてもう一つが僕が抱える闇だ。封印が解けて闇の力を自由自在に扱えるようになったが、僕自身にある闇はもうどうしようもないほどに増加している。このままなら杏璃たちとも敵対しなければいけない。どっち道僕には彼女と付き合う資格もないんだ」

僕は久美に本当の事を話した。

前半の方は気の持ちようというかもしれないが、後半は違う。

実際一緒に封印されていた闇が解放されて、一気に体中を駆け巡っているのだ。

例えるならば、水が通るように道を作りそこに水を流し、その道の途中に板を立てて水が通らないようにしたとしよう。その板を取り外せば、水は一気に押し寄せ、ものすごい力で色々な物を押しつけてしまう。

これと同じ事が僕の体の中で起きているのだ。

自分でも、もうそれほど長く持たない事は、分かっていた。

だから、僕は彼女の告白を断ったのだ。

彼女とかかわりを持ってば、いずれ彼女を悲しませることになる。

「なるほどね。兄さんの気持ちは分かったわ、でも、杏璃ちゃんの気持ちはどう？この話を聞いて彼女が告白をなかった事にしようとする？」

「仮定の話はしない」

僕は久美にそう言っていると、話を切り上げようとした。

「だったら今、本人に聞いてみる？」

「は？何変な事を言っている」

僕はいきなり変な事を言い出した久美に、ばかばかしく思いながらそう言った。

「本当の事だもん、そうでしょ？杏璃ちゃん」

久美がそう言った途端、木陰から杏璃が出てきた。

「騙してたのか！！」

僕は久美を問いただそうとしたが、そこにはすでに久美の姿はなかった。

「浩介……」

僕は杏璃と向かい合った。

「あたしは例え浩介が恐ろしい人でも、浩介を嫌いになることはないわ」

「そんなの、口からの出まかせだ!!皆そう言って必ず裏切るんだ。僕はもう誰も信じない」

杏璃の言葉に僕は感情をあらわにした。

「だったらあたしを信じて。あたしは浩介を騙すために告白なんてしたりしないわ」

「……!!」

その言葉は他の人が聞けば、何を言ってるんだぐらいのものかもしれない。

しかし、僕は杏璃の言葉で心を抉られるような感じがした。

ドクン!!

(まずい!!)

一瞬だが、鼓動が速くなるのを感じた。

このままだと僕の中に秘められた闇が暴走を起す。

「なるほど、よく分かった。杏璃は僕の心を乱して僕を暴走させようとしてるんだな」

僕は杏璃の言葉を僕が暴走するためのものと取ることにした。

「ち、ちが」

杏璃は驚いたような表情をして僕の言葉に反論してきた。

「違うない、今もこうして魔力バランスを狂わしているんだからな」

僕は柊の言葉を遮って言った。

「貴様も闇の裁きを受けるがいい!!」

そして、僕はあまりにも危険なために、父さんから使わないように言われてきた魔法を行使することにした。

「我がに纏いし闇よ、その闇の主の名の元、かの者の罪を裁け。我は望まん、かの者に裁きが下る事を……」

そして、僕は禁断の魔法を発動させる言葉を唱えた。

「ダークジャッジメント (Dark judgement) !!」

僕の言葉により発動した闇は上空に集まってきた。

「……」

そして、あまりの恐ろしさに固まっている杏璃に向けて、僕は無言で杖を振りかざした。

シユン、シユン、シユン

その瞬間、闇の塊は大量の長い剣を形成し、それが杏璃に目にも止まらぬ速さで降り注ぐ。

剣は、杏璃の立っていた所を突き刺さる。

杏璃は大量の剣で見えなかったが、無事ではないだろうと思いつながらとどめを刺すことにした。

「バースト!!」

ドーン!!

その言葉が合図のように剣は轟音を立てながら一斉に爆発した。

そして、辺りは閃光が走り僕は目を閉じた。

「な……馬鹿な!!」

光がやんだので僕が目を開いた瞬間、目の前に広がっていた光景に思わずそう叫んでしまった。

そこには全くの無傷の状態で立っている、杏璃の姿があった。

「なぜだ、あれはどんな防御魔法でも防ぐ事が出来ないはずだ!!」

僕は何が何だか分からずに叫んでいた。

(まさか……)

僕の頭に一つの仮説が浮かんだ。

そもそも僕が使ったダークジャッジメントは、己の意思によってそ

の効力を発揮するのだ。

もし、使用者がそれを使うのを望んでいなかったら？
僕はそこまで考えると仮説を否定した。

「浩介、お願い。話を聞いて」

杏璃が必死に僕に呼び掛ける。

しかし、僕にはもうそれに答える事は出来なかった。

ドクン、ドクン

心なしか心臓の鼓動が速くなってきた。

このままでは本格的に僕は暴走する。

『認めたら、どうですか？マスター』

だが、それは僕の相棒であるクリエイトによって防がれた。

「どういう事、クリエイト？」

杏璃が僕が何かを言う前に驚いた表情をしながら聞いた。

確かに、クリエイトが自分から……しかも何も話題を振っていないにも関わらずに話すのはとても珍しい事なのだ。

『マスターの魔法が彼女に聞かなかった理由、それはマスター自身
が彼女に攻撃するのを望んでいなかったからです』

「え！？」

杏璃が驚いた様子で僕を見た。

『マスターが放った魔法はマスターの意思で強さが決まります。なのでマスターが望まなければ、あの魔法はただのパフォーマンスに過ぎないのです』

僕はクリエイトの言葉にただ黙るしかなかった。

『あとはマスターがご決断してください。彼女を受け入れるのかそれとも突き放すのかを』

クリエイトは、しかし、と言葉をつづけた。

『私は彼女はマスターにふさわしい人だと思いますよ?』

クリエイトはそう言うともうこれ以上言う事はないのか、しゃべらなかつた。

「浩介」

杏璃の顔を僕は正面から見た。

杏璃の目は強い意志が込められていた。

そして、僕は杏璃と初めて会った時の事を思い出した。

杏璃と初めて会ったのは2月14日。

あの時はフィールドも使わずに、雄真に魔法弾を当てた事もあり、魔法使いとして人として最低だという認識だった。

でもそれはいつしか変わり始めていた。

その具体的な物が、僕と決闘をしてきた時だった。

杏璃の魔法を使っている時のむなしさや葛藤を、狭間見た僕は杏璃の人物像を魔法使いとしては少しだけ難があるが、人としてはとてもいい人という認識に変えた。

そして、杏璃の姿が久美とだぶったのは杏璃の部屋に初めて行った

ときだろつ。

気づけば、僕はいつしか杏璃に心を許すようになっていた。それからだろつ。

杏璃の顔を見るたびに心が揺れるようになったのは。

でもあの時の僕に、それを理解することも考える暇もなかった。

だから、今が一番いい時かもしれない。

『心なき魔法使い』……そう呼ばれる事を嫌っていた僕が、心を手に入れるための一つの階段かもしれない。

「杏璃、僕はこの身に凶悪な力と、罪を背負っている。それはいつ杏璃に牙をむけるか分からない。それでも、僕と共に歩む覚悟はある？これからずっと、一点の曇りもなく歩める自身はある？」

だから、僕は最後に杏璃の心を確かめるように聞いた。

「もちろんよ、死神だろつがなんだろつが私はこれからもずっと浩介と一緒にいるつもりよ」

杏璃は笑顔で答えた。

やっぱり、彼女はそう言うんだよな。

だったら、僕も答えよう。

もう、気持ちに踏ん切りはついているんだから。

「杏璃さん。僕も、あなたの事が好きです」

そして、僕は自分の意思を口にした。

浩介 Side End

第56話 闇の魔法使いと光の魔法使い（前書き）

一応言いますと、私はラブコメは苦手ジャンルです。
なので、最後はしまりが無いような気が……

とりあえずは、どうぞご覧ください。

第56話 闇の魔法使いと光の魔法使い

浩介Side

「……………浩介!!」

僕の言葉に杏璃は突然叫びながら、抱きついて来た。

「うわ!!あ、杏璃!?!」

僕は驚きながらも杏璃に声を掛けた。

「これからも、よろしくね。浩介」

杏璃は嬉しそうに言った。

僕はそんな彼女の背中に手を回して抱く事で、返した。

「ごめんね、杏璃」

「……………いいのよ」

僕が謝ると杏璃は許してくれた。

そして、僕は両手を杏璃の肩に置いて杏璃の顔を見た。

「浩介……………」

「杏璃……………」

僕と杏璃は目を瞑り、ごく自然な動作で顔を近づけた。

「ん……………」

そして、僕と杏璃は唇を合わせた。

「はあく本当に変わるもんだな」

唇を離して目を開けた僕がそう呟いた。

恋は人を変える

そんな言葉を聞いた事があるが本当なんだな」と思っていた。

「言っておくけど、今のあれには目的がある」

「なによ？目的って」

僕の言葉に杏璃が不思議そうに聞き返してきた。

「それは誓い。僕は杏璃と共にこれから一生歩んでいくという誓い」

「浩介……」

僕の言葉を聞いた杏璃が、目をうるませていた。

その力の先にあるもの
第56話「闇の魔法使いと光の魔法使
い」

「こ、浩介！？か、体が……」

突然体が光り出した僕の姿を見た杏璃が、慌てたように叫んだが、

僕はそれを手で制した。

「大丈夫だ。力が戻るだけだ」

「力が……戻る？」

僕の言葉に杏璃が分かっていないようだ。

しかし、そうしているうちに僕の体を包んでいた淡い光は跡形もなく消えた。

「一体何なのよ？あれは」

杏璃が不思議そうな顔をして聞いて来た。

「あれは僕に、心が戻った証。そして、光が宿った証だ」

「え！？」

僕の言葉に杏璃が目を丸くして驚いた。

「元々僕は光の魔法使い。そして僕は手に入れたんだ。光の魔法の力と心を」

「という事は、浩介は心が戻ったっていう事なのよね？」

杏璃がまとめるように僕に聞いて来たので、僕は無言でうなずいた。

「さて、今日は祝杯だ！！」

「ええ！？」

僕が元気にそう言うと、杏璃が驚いた様子で声を掛けてきた。

「何を驚く？付き合い始めた、お祝いをするだけじゃないか」

僕はそんな様子の杏璃に疑問を投げかけた。

「そ、そうよね。私たち付き合ってるんだし……」

僕の疑問に杏璃は顔を真っ赤にしながら答えた。

「さあ分かったなら、い……こう」

僕は森を抜けるべく、そう言いながら歩き出そうとした途端、体がまるで鉛になったように重くなった。

それだけじゃない、どんどん眠くなってきた。

(反動の前兆か)

「こ、浩介！？どうしたのよ」

杏璃が僕の様子に気づいたのか慌てたように駆け寄ってきた。

「だ、大丈夫……夫。反動が……来ただけだ」

僕はそんな杏璃に出来るだけ心配掛けないように、平気そうな表情を作ろうとするが、かなりしんどい。

そもそも、完全体というのは簡単にいえば筋力や体全体に掛けてあるリミッタを解除して、体内で爆発のような状態にする事なのだ。

魔族は元々、普通の種族よりも筋力や能力が高い点が特徴だ。

そんな強大な力を常に出していたら肉体が持たない。

だから自分でも意識せずに体にリミッタ を掛け、それ以上の力を
出せないようにしているのだ。
そして、この反動は、オーバードロー状態の肉体を休めるための症
状なのだ。

「全然大丈夫じゃないじゃないの!!」

杏璃が僕の言葉に叫ぶが、僕にはそれに返事をする気力がなかった。

「悪いが、久美に電話をして迎えに来て貰ってく……れ」

僕は杏璃にそう頼みごとをすると、僕は意識を失った。

失う直前に、杏璃が僕を呼ぶ声が聞こえた様な気がした。

浩介 Side End

杏璃 Side

「浩介!! 浩介!!」

あたしはいきなり動かなくなった浩介の体を揺すって叫んでいた。
そんなあたしの脳裏に少し前の事が過った。
それはあたしが森に入る前のことだった。

『兄さんを森の中で待たせてあるわ。私がそれとなく杏璃さんの事

を問いたただすから、私が合図をしたら杏璃ちゃんは出てくること。いいわね?」

あたしは久美ちゃんの確認に無言でうなずいた。

「兄さんは、まだ反動が起きていないの。反動が起きれば兄さんは動けなくなるから、出来ればそれまでに兄さんの心を取り戻して」
「どうしてよ?」

あたしは久美ちゃんの言葉に疑問を持ったので聞いてみることにした。

「兄さんは、おそらくだけど暴走を起こす可能性があるの。だからそれまでに兄さんの心を取り戻す必要があるの」

真剣なまなざしの久美ちゃんの言葉にあたしは頷くことしかできなかった。

「しょうがないわね……」

あたしは前の事を思い出すのをやめてそう呟くと、携帯を取り出して久美ちゃんに電話をかけた。

「もしもし」

「あ、久美ちゃん?あたしよ」

久美ちゃんが慌てた様子で電話に出た。

「杏璃ちゃん、兄さんはどう?」

「それは……その……」

心配して聞いてくれた久美ちゃんにわたしは言葉を濁した。だって、恥ずかしいものは恥ずかしいもの。

『あくわかったわ。それで用件は？』

あたしの様子で察してくれたのか、久美ちゃんは話を変えてくれた。

わたしは心でお礼を言うと、本題を話すことにした。

「実は、浩介が反動……とかで動けなくなったのよ。それで浩介が久美に電話して、こつちに来て貰えって言ったから
『私が兄さんを引き取るためにそつちまで来い、ということね』」

あたしの言葉を遮って久美ちゃんが呆れた様な口調で言った。

『まあ、いいわ。森の外にある公園で待ってるから杏璃ちゃんは兄さんをそこまで運んでね』

久美ちゃんはそう言うとな一方的に電話を切ってしまった。

「それじゃ、運びましょうか」

わたしはそう言うとな浩介を背負っていくことにした。

(軽い……：やっぱり久美ちゃんの言った通りだわ)

わたしは森の外に向かったいる途中でそう思っていた。

久美ちゃんは信頼している人物だと防衛魔法が+に働き体重を軽くしてくれるけど、信頼していない人になると に働いて体重が重く

なったり、浩介に近づくことすらも出来ないと言っていた。

あたしは、その事を身にしみて感じていた。

それと同時に嬉しさがこみあげてくるような感じもした。

だって、浩介にあたしは信頼されているんだもん。

「すみません」

あたしがそんなことを考えていると澄み渡るような女性の声が聞こえた。

あたしはいったん、歩くのをやめて声のした所を見ることにした。

そこにはまるで伊吹が大人になったような女性がいた。

「あの、あたしに何の御用ですか？」

あたしはその女性に尋ねた。

「ええ、あなたが背負っている方にご用があるのですが、今は動けなさそうですね」

あたしの疑問に対して女性は口到手を当てて、にこやかに笑った。

その動作から、礼儀正しいという事があたしにもよく分かった。

「では、こちらを彼にお渡しください」

そう言うと、女性は一通の封筒をあたしに手渡した。

その封筒は白い物で、外見からではどういうものなのかがよく分からないものだった。

「あの、あなたは？」

「それは、そちらの方が一番分かると思いますよ。それでは私はこ

れで」

あたしの問いかけに女性は答えると、一礼してあたしたちの前から去って行った。

「一体なんだったのよ?」

あたしの呟いた言葉は、風にかき消された。

「今のうちにおめでとつと言っておくわ」

公園に着くと、そこには万弁の笑みで立っている久美ちゃんがいた。

「うん、ありがとね久美ちゃん」

久美ちゃんのお祝いの言葉に、あたしは笑顔を作ってお礼を言った。

「……………?どうかしたの、杏璃ちゃん」

あたしの様子がおかしいのに気がついたのか、久美ちゃんがあたしに聞いて来た。

「うん、実は……」

そしてあたしは森であった女性の事を久美ちゃんに話した

「なるほどね。それで杏璃ちゃんは兄さんが、その女性に取られてしまっんじゃないかって不安なんだね？」

「うん……」

話を聞き終えた久美ちゃんは考え込むようなポーズを取ってあたしに言ってきた。

「でも、それは間違いよ」

「どういう事？」

久美ちゃんの言葉にあたしは思わず聞き返した。

「兄さんはね、一度こうと決めたらそれに向かって何が何でも変えない人よ。だから、兄さんが杏璃ちゃんと一緒に生きていくと決めているんなら、兄さんを信じてあげようよ。そうじゃないと今度は兄さんが、信じてくれないって思うようになるから」

「そう……ね」

久美ちゃんの言葉にあたしは納得するしかなかった。

「兄さんね、他にもこう言ってたわ……相手が他の異性と話していたりして嫉妬するのは自分自身に自信がない証だってね」

「全く、何を言ってるんだか……」

久美ちゃんの言葉にあたしは思わず苦笑いしてしまった。ただ、あたしの心の中に渦巻いていたモヤモヤ勘はいつの間にか消えていた。

あたしは、久美ちゃんに女性から渡された手紙を渡すと、寮に帰る事にした。

その夜あたしは、なかなか寝る事が出来なかった。

杏璃 Side End

第57話 決断(前書き)

今回も話が飛びに飛びまわりますので、ご注意ください。
とはいっても、浩介大胆すぎです。

第57話 決断

6月9日

俺はすももと久美、そして浩介の4人で学校に向かっていたのだが……。

「準たちがいないな……」

いつも合流する所にいるはずの準と八子がいないのだ。そう言えば、春姫と付き合い始めた日もこんな状態だったような。

「おい、浩介」

俺はすもも達に聞こえないように小声で浩介に話しかけた。

「雄真、小声で話しかけるのなら念話で話しかけてくれ。その方がこっちも楽だ」

浩介からそんな言葉が飛んできた。

ちなみに念話のやり方は、ただ単に、浩介に向けて心の中で話しかければいいらしい。

【これでいいか？】

という事で俺は、念話で浩介に話しかけた。表面上は普通を装って……。

【ああOKだ。ところで、用件は何だ？】

【今日は、待ち合わせ場所に準がいなかった。だから気をつけろって言おうとしたんだ】

俺は浩介に念話で用件を言った。

【何を気をつけろと言うんだ？冷やかしてくる者に容赦はしないっていう事が分かってるんだから、そんなに目立った事はしないだろ】

【それは、そうだが……】

俺は浩介の言葉にそれ以上言えなくなってしまった。
確かに少しお節介が過ぎたのかもしれない。

【……っと、雄真。彼女のお出迎えだ】

【は？】

突然の浩介の言葉に俺は思わず聞き返した。

「おはよう、雄真くん」

「お、おはよ春姫」

浩介の言った通りに目の前には春姫がいた。

俺はごく自然に挨拶をする。

しかし、いつの間に校門の前まで来てたんだ？

「ラブラブですね」

すももからとげとげしい視線と言葉を掛けられた。

気づけば俺と春姫はごく自然の動作で手を握っていた。

「そ、それはだな……」

俺は慌てて弁明しようとした。

「まあまあ、そんなに顔を赤くして言っても説得力はないよ」

それも浩介の一言によって失敗に終わった。

「まあ、すももそんな目で見ない見ない。しょうがない事だよ、だって二人は恋人なんだし」

浩介はすももを説得しているようだった。

「おっはよ、雄真!」

「お、おっす、準」

いつもよりも元気の良い準の挨拶に俺は押されながら挨拶をした。

「と・こ・ろ・で、杏璃ちゃんから聞いたんだけど浩介君と杏璃ちゃんは付き合ってたね」

やっぱり冷やかされるなと俺は他人事のように思っていた。

いや、俺が直接手を出さなくても……。

「ああ、そうだけど。何か文句でも?」

「い、いや文句はないわよ」

「だったら、なんだ?まさかとは思うが冷やかし目的で、声をかけたのではあるまいな?」

やっぱり浩介の怒涛の攻撃が始まった。

浩介は準を睨みつけている。

睨みつけられている準は俺に助けを求めていたが、俺は自分でどうにかしろという視線を飛ばすことで答えた。

「ち、違うわよ。わ、私はただ二人の事をお祝いしようかなって」

浩介の威圧感に耐えられなかったのだろう、準はとうとう話を変えてしまった。

「そうか、ならば良い。……で八子は？」

と準の横にいた八子にも浩介が声をかける。

「俺はもちろん、杏璃ちゃんとのあ〜んな話や、こ〜んな話を聞こうという目的だぜ!」

準がなぜあそこまで怯えていたのかを理解していない八子は、今の浩介にとっての禁句を言ってしまった。

「ほづ〜、そう言う事が」

その瞬間、浩介の雰囲気が変わった。

ただでさえきつかった威圧感がさらにきつくなり、クラスの連中も後ずさりをしていた。

「八子、ちょっと向こうでお話をしような?」

万弁の笑みを浮かべた浩介が八千の襟首をつかんだ。

「え？ちよ、ちよっと待って」

「大丈夫、苦しめないようにしてあげるから」

浩介は笑顔で八千を引きずりながら告げた。

「ゆ、雄真、助けてくれ」

哀れ、八千。

俺は心の中でそう言うと、柊の方に向かった。

「おめでとう、柊」

俺は一言だけそう言うと、そそくさと自分の席に鞆を置いた。

柊の表情は分からないが、さっきまで色々と質問攻めにされていた事もあった為か、顔を真っ赤にしていた。

『いい方向に進んでよかったですね、マスター』

（そうだな）

俺はラジアと念話でそんな話をしていた。

ドーン！！

その最中に表の方から聞こえた爆音の原因などは俺にもよく分かっていた。

『変な事を言わなければひどい目にあわないで済んだのに、バカですな』

……最近、ラジアが腹黒くなってきたと思うのは気のせいだろうか？

余談だが……

「お前ら、席に着け。ホームルームを始めるぞ」

担任の先生が教室に入ってきたため、俺達は席に着いた。

「では、出席を……と、高溝はどうした？」

先生がハチだったもの（……）を見て驚いた声を上げた。

浩介の鉄槌によりこんがり黒焦げになったハチを、浩介が強引に座らせていたのだ。

そのため、机に伏せている真つ黒なハチがいると言う訳だ。

「まあ、いい。出席を取るぞ」

（いいのかよ!?!）

俺は思わず心の中で突っ込んでしまった。

その力の先にあるもの 第57話「決断」

「それで、何の用ですか？」

放課後、僕は伊吹達を呼び出していた。

その理由は朝に久美から渡された手紙に書かれていたからだ。その手紙にはこう記されていた。

『前略、明日の午後4時30分に桜の木の下でお待ちしております。伊吹と信哉君、沙耶ちゃんを連れて来てください』

そして、最後に書かれていた差出人の名前に僕は思わず息をのんだ。

そこにはこう書かれていた 式守那津音 と……
今の時間を確認すると4時30まであと5分だった。

「実はな伊吹達を連れて来て欲しいと頼まれたんだ」

僕の言葉に伊吹達は驚いた顔をした。

「一体誰が頼んだのでしょうか？」

沙耶が緊張の面持ちで聞いて来た。

「それは、三人ともよく知っている人だと思っぞ」

僕の答えに三人とも首をひねっているが、それに答える必要はない。

何故なら……。

「ですよ、式守那津音さん？」

「え！？」

三人が驚いた声を上げた。
そして、僕の問いかけに一人の女性が姿を現した。

「那津音姉さま!？」

「那津音様!？」

「那津音殿!？」

信哉達は全員固まっていた。

「お久しぶりですね、伊吹、信哉君そして沙耶ちゃんも」

那津音さんの声に気を取り戻すと、信哉と沙耶は従者のように那津音さんに深く礼をした。

「那津音姉さま!!」

伊吹は、涙を流しながら那津音さんに抱きついた。

それを那津音さんは優しく微笑みながら伊吹の頭に手を載せた。

「大きくなったわね、4人とも」

那津音さんの言葉に僕にも嬉しさがこみあげてきた。

同時に僕の肩に乗っていた罪は音を立てながら崩れたのだ。

「お久しぶりです。那津音さん」

僕は那津音さんに軽く礼をしながら話しかけた。

「ええ、このたびは私のせいでご迷惑をおかけしてしまい申し訳あ

りませんでした」

「いえ……それよりも一つだけ聞きたいのですが、どうして生きていられるのでしょうか？」

僕は那津音さんに疑問をぶつけた。

そして、那津音さんは僕に真実を話してくれた。

あの時、瀕死の重傷を負っていた那津音さんは、僕が掛けた転送魔法によって、僕達の住む世界に移ってしまったらしい。

そして、国際魔法連盟に不法進入で逮捕されていた所を、父さんに助けられたらしい。

「申し訳ありませんでした!！」

僕はその話を聞いて土下座をして謝った。

「いえ、いいですよ。浩介君のおかげで私は生きていられるのですから」

僕は那津音さんの言葉に頭を上げた。

「それでは、僕はちょっと用がありますので、これで失礼します。

那津音さんよろしければ、御薙鈴莉や高峰ゆずは達にも顔を見せてきてはどうですか？」

「そうですね、3人とも案内してくれますか？」

僕の提案に、那津音さんはそう言った。

「では、この俺が案内を　信哉だけはやめておいた方がいいです。という事で伊吹か沙耶が案内して」

僕は案内をしてみると言ってきた信哉の言葉を遮って二人にそう言った。信哉の方向音痴っぷりは尋常じゃないからな。僕はそう思いながらその場を後にした。

「ありがとう、浩介お兄様」

伊吹のお礼に僕は振り返らずに片手を上げることで答えた。さて、僕は彼女の問題を解決しないと僕はそう思いながらオアシスへ向かった。

「いらっしゃ〜い……って浩介？どうしたのよ」

僕が入ってきた事が分かったのか杏璃が駆け寄ってきた。

「ちょっと杏璃に用があるんだが、ちょうど良い。僕も手伝う」

「え？ちょっと!」

驚いた声を上げている杏璃を無視して、僕は音羽かーさんに手伝いをさせて欲しいとお願いした。

音羽かーさんは二つ返事でOKを出してくれた。

「「ありがとうございました!」」

それから1時間くらいした時だっただろうか。

最後のお客さんを送りだした僕と杏璃は、制服に着替えてオアシスを後にした。

「で、何の用なのよ？浩介」

桜の木がある公園のベンチに腰掛けると、杏璃は僕に用件を聞いて来た。

「ところで、どうしてそんなに離れているんだ？」

僕は座っている場所の距離感が気になって聞いてみた。

「そ、それはその……」

「まあ、いい」

僕は杏璃の回答を待たずに用件を話し始める事にした。

「用事というのはほかでもない。杏璃は僕の彼女だよな？」

「あ、当たり前じゃないの！！」

僕の問いかけに杏璃は顔を赤くしながらも答えた。

「それじゃあ、将来僕と結婚をする気があるか？」

「な、何を聞いて……」

「これは重要なことなんだ。まじめに答えてくれ」

「……」

僕の表情から真剣な事だと分かった杏璃は目を閉じて考え始めた。

「うん。結婚したいなって思ってるよ」

「そうか……」

僕は杏璃の回答を聞くと息を吐き出した。

「ところで、その質問ってどういう意味よ？」

「それはな、杏璃の気持ちを知っておきたかったんだ」

僕は杏璃の疑問に答えると説明を始めた。

「僕の家系が有名なのは知ってるよな？」

「ええ」

「杏璃、申し訳ないが杏璃の事を調べさせて貰った」

「……！！」

僕の言葉に杏璃が息をのんだ。

「柊家はかなり裕福な家系らしいな。世界にいくつもの支店を出しているほどだからな」

「ええ、そうよ」

「まあ、それとは関係ないのだが僕は立場上、そう簡単に恋人を作るわけにはいかないんだ」

「という事は、あたしは浩介と別れなくちゃいけないの？」

僕の言葉に杏璃が悲しそうな眼をして聞いて来た。

「いや、そう言う訳ではない。恋人を作るときは結婚を視野に入れ

て付き合わなければいけないんだ。だから杏璃に聞いたんだ」
「どういふ事よ」

僕は杏璃の言葉で更に説明を続けた。

「つまり、僕と杏璃は今後も絶対に離れないという証……婚約をしないといけないんだ」

「ええ!?!」

杏璃が顔を真っ赤にして驚いた声を上げた。

「そ、それはつまり……その」
「ダメか?」

言い淀んでいる杏璃に僕は聞いた。

「駄目じゃないよ……でも、本当にいいの?あたしなんかで」
「何を弱気になってる。もっと強く自信を持ちな。杏璃が僕の恋人にふさわしいからこそ話しているんだから」

僕は自信を持ってない杏璃にそう言ってやった。

「浩介……」

杏璃は目を輝かせていた。

「わかったわ、それで婚約っていうのはどうすれば」
「婚約をする時は、これを首にかければいいんだ」

僕はそう言つと、黄色の間が玉の形をした首飾りを取りだした。

「それは、浩介が着けているやつと同じ……」

「ああ、これが高月家のものであるという事を証明するものだ。これを僕が着ければ婚約は成立、杏璃は僕の正式な許嫁となる」

「い、許嫁……!?!」

杏璃は許嫁という言葉に顔を真っ赤にして呟いていた。

「それじゃ付けるから、目を閉じててくれる?」

「う、うん。こっつ?」

杏璃はそう言いながら目を閉じた。

「そう、そのまま」

そして、僕はベンチから立ち上がり杏璃の前まで行くと首飾りを手にして杏璃の首に手をまわした。

「……!?!」

杏璃は驚いた声を上げるが、僕はそれに気を止めずに首飾りをつけた。

「もういいよ」

「う、うん」

杏璃は目を開けると、自分に付けられた首飾りを見た。

「その首飾りには2つの力がある」

僕はそんな杏璃に首飾りの効力の説明をした。

「まず一つ目が、完全体になるための力ギとして使う事が出来ること。まあ杏璃は魔族じゃないから使えないが……」

この首飾りには魔族が仕える必殺技である完全体を効率よく動かせる力ギの効力があるのだ。

「そして次が、神魔法行使の補助、および魔力の流れをよくしてくれる事」

「神魔法って、浩介が使う魔法よね？でもあれを使うには……」

そう、神魔法を使うには神と契約をしなければならぬ。

「だから、これから契約をするんだ」

「どうということよ？」

僕は分からない様子の杏璃に説明をした。

「僕と婚約をしたとはいえ、その特色の魔法を使わなければいけない。だから杏璃もその特色である神魔法を使えるようにするんだ」
「どうすれば、契約ってというのが出来るのよ」

僕は杏璃の問いかけに答えた。

「僕が契約の魔法陣を作成するから、杏璃はその魔法陣の中央に立つて、僕が教える呪文を言う」
「分かったわ」

僕は杏璃の言葉を聞くと、クリエイトを杖状にして地面に振りかぶ

った。

ゴー!!!

すると、魔法陣が出来小さな音を立てて、動き始めた。

「さ、始めるよ。僕の言う詠唱に続いて……」

驚いていた杏璃だがすぐに魔法陣の中央に立った。

僕はそれを確認して杏璃に呪文を言った。

「月に浮かばれし魔法よ、我の願いを聞き入れたまえ」

「月に浮かばれし魔法よ、我の願いを聞き入れたまえ」

僕の言葉に続けて杏璃が呪文を唱える。

「我、神と契約を結びたいものなり」

「我、神と契約を結びたいものなり」

魔法陣から発せられる光がどんどん強くなる。

「深淵なる神々よ、我にその恩益を与えたまえ。成せばその力は…

…」

「深淵なる神々よ、我にその恩益を与えたまえ。成せばその力は…

…」

魔法陣の光がさらに強くなり、最後の呪文を待っている。

「この後はどうすればいいの？」

「あとはその力をどう使いたいかを言えばいいんだ。そうすれば、

呪文は完成する!!」

杏璃は納得したのか、目を閉じて考え始めた。

（信じているぞ、杏璃。絶対に1番になるためのものとは思わないでくれ）

僕はそう願っていた。

1番になるためのものと言ってしまえば、それを具現化しようとする神と契約する事になる。

間違いなくその神は閻属性だ。

閻魔法は体に負担を与える。

だから僕はそれが起こらないように願っていたのだ。

「この力は、大切な人と共に歩む力なり!!」

「え!?!」

僕は杏璃の言葉に思わず驚いてしまった。

僕は心の底で、杏璃は本当に変わったと思っていた。

杏璃の気持ちを具現化しよう魔法陣が働いた。

魔法陣が輝くと、上空に魔力塊がゆっくりと、杏璃に向かって降りて行った。

「こ、浩介、あれは?」

「あれは、神の力。それに触れれば契約は完了だ」

僕は杏璃を安心させるように言うと、魔力塊は杏璃の顔の高さで止まった。

杏璃は手を伸ばして、その塊に触れた。

次の瞬間、辺りはまばゆい光に包まれた。

気がつけば、魔法陣は消えていた。

「浩介、これって失敗？」

不安そうに聞いて来た杏璃に僕は一言言った。

「だったら、簡単に2音で魔法を使ってみれば？」

「わ、分かったわ」

杏璃は目を閉じて集中を始めた。

「エルートラス・レオラ　!!!」

次の瞬間、杏璃からいつもよりも威力の高い魔法弾が僕に放たれた……って

「杏璃!!!　なんで僕をターゲットにしてるんだ!!!」

「ご、ごめん!!!」

僕は杏璃からこっちに迫ってくる魔法弾に意識を向けた。

弾数は20発。

着弾まであと3秒。

だったら、やることは決まってる。

「dixantion・brust!!!」

瞬時に魔法方式を切り替えて、相殺魔法を放つ。
けたたましい爆音を立てながらすべての魔法弾は消滅した。

「と、いう訳で。杏璃は光の神リヴィウスと契約したみたいだな」

「リヴィウスって確か……」

「久美と同じ神だよ」

僕は杏璃の言葉を遮って言った。

「今日は疲れただろうから、寮に戻ってゆっくりと休め。後日、日を改めて神魔法を使うための練習を始めるから、それまでは絶対に僕のいない所で無暗に神魔法は使わないように」

僕は杏璃に忠告をしておいた。

杏璃の事だ。

朝の特訓とかで試しそうだな。

「わ、分かったわよ」

杏璃の言葉により今回はお開きとなった。

そのあと僕は杏璃を寮に送り届けると、小日向家に戻る事にした。

「ただいま」

「おかえり、浩介」

リビングに入るとテレビを見ていた父さんと会った。

「どうでもいいけど、いつまでここに居るつもりだ？」

僕は父さんの隣に座りながら聞いた。

父さんは総理大臣だ。

いつまでもここで油を売っていていい人間ではない。

「いや、ちよつと先方と話をつけてきてな」

「どういう事だ？」

僕は父さんの言葉に聞き返した。

「浩介、あの柀という少女と付き合う事になったそうじゃないか、だから俺が、柀のご両親と話をつけてきたんだよ」

「はい〜!？」

僕は思わず大きな声で叫んでしまった。

「そ、それで、向こうは何と？」

僕は冷静さを取り戻すと、父さんに聞いた。

「杏璃が選んだのならば、私たちは何も文句はありませんよ。こんなじゃじゃ馬な娘ですが、よろしくお願いします。と言ってたぞ」

「そ、そう……」

僕は父さんの言葉にそう返した。

つまり、僕と杏璃との交際は認められてたという訳か。

僕は嬉しさをかみしめながらのんびりと過ごすのだった。

浩介 Side End

第58話 アシスタントマジシャン(前書き)

またもや急展開の、秘宝封印編です。

第58話 アシスタントマジシャン

6月10日

放課後俺達は、学校の裏にある公園に集まっていた。

それは、浩介の父親、宗次郎さんが帰るのでその見送りをするためだ。

最初は浩介と久美だけだったが、とんとん拍子に俺達も見送る事になった。

「わざわざすまないな、見送って貰って」

宗次郎さんは俺に近づいてくると申し訳なさそうに言った。

「いや、まあ浩介の父親だし」

俺は宗次郎さんに頭を掻きながら答えた。

「ふむ……良く分からぬな」

宗次郎さんは俺を値踏みするように見た。

「あの、何がですか？」

「あの浩介がお前さんの事を偉く気に入ってるようだな、お前さんがどんな奴なのかを見ておきたかったのだが……よくわからんな」

宗次郎さんが、首をかしげているとその後ろに浩介が来た。

「なせも何も、雄真を信頼しているからに決まってるじゃないか、

そんなことよりとつと元の世界に帰ってくれる?」

浩介から無言のプレッシャーが発せられる。

「あくわかった、分かった。それじゃ浩介も色々頑張るな」

宗次郎さんはそう言い残すと、地面に広がっているゲートに飛び込んで姿を消した。

「今度は、ずるではなく、正々堂々と僕と戦えるように、強くなれ」

「ありがたきお言葉、ありがとうございます」

そして、浩介は亀沼にそう言つと、亀沼は浩介にお礼を言つて、ゲートに飛び込んだ。

それと同時にゲートも閉じて、そこはいつもと変わらぬ公園になっていた。

「わざわざ、付き合つて貰つて悪かつたな。もう帰つていいよ」

浩介の一言により、俺達は家に帰る事にした。

そして、俺達の激動の2日間が始まる事になった。

その力の先にあるもの 第58話「アシスタントマジシャン」

6月11日

「秘宝が、暴走を起こす!？」

俺達は、鈴莉母さんから聞いた事に思わず大声で叫んでしまった。放課後、俺達は鈴莉母さんに呼ばれて、研究室まで春姫と一緒に来たのだ。

そして、そこにはすでに伊吹、信哉、上条さん、小雪さん、浩介と久美と杏璃の8人がいた。

そして、鈴莉母さんから聞かされた話が、今の事だったりする。

「ええ、最近森の方から不気味な魔力を感じるようになったの、それで調べてみたら秘宝が保有できる魔力値が限界にまで高まっていたの。このままだと明日には秘宝は暴走するわ」

鈴莉母さんから言われた事に俺はただただ茫然としていた。

鈴莉母さんから秘宝の役割を教えて貰ったのだが、この地に寄ってくる魂を収めるのが役割らしい。

つまり、もし暴走すれば、鬼が出てくるという事になる。

「学校がつぶれるだけなら、良いが最終的にはその魔力でプリマテリアライズ・オーバードライブが起こる可能性が高い。もし起こったら最後、世界が終る」

浩介が続けて言った言葉に俺達は何も言えなくなった。

「そう言う訳で、この後すぐに、秘宝を封印しないといけなくなっ
た」

浩介が、さらっと説明をする。

「封印については、御薙鈴莉から聞けばいい」

そう言うと、浩介は話は終わりとはかりに、黙った。

「それじゃ、封印について手順を説明するわね。まず、式守さんが、秘宝を発動させて、その魔力を雄真くんに集まるようにする。そのあとすぐに式守さんは秘宝のコントロール権を放棄して、私の後ろに避難すること。そして雄真くんは、秘宝から来る魔力を高月君にそのまま流して、高月君がその魔力を放出する。他の皆は何かあった時のために控えて置く。いいわね」

「どうして、俺に魔力を集めるようにするんだ？集めるんなら浩介に直接やった方が早いだろ」

俺は鈴莉母さんの計画を聞いていくつか疑問があったので聞いてみる事にした。

「それについては僕が答えよう」

すると、今まで静かにしていた浩介が口を開いた。

「確かに雄真を中継しなくても魔力の放出は出来るが、その分暴走率が増加する。それを防ぐため、中継場のようなものが必要になるということだ」

俺は浩介の説明に一応納得した。

「それじゃ、今から行くわよ。あまり時間が残されていないの」

鈴莉母さんはそう言うと、研究室から立ち去った。
俺達もそれに続く。

「大丈夫？雄真くん」

「大丈夫、大丈夫」

途中春姫が心配そうに聞いて来たが、俺はそれに笑顔で答えた。

「一応言っておくけど、これはちよつとしたテストだ。神坂がどれだけ雄真の事を愛しているかを見るためのな」

「お、おい！！それはどういう意味だよ！！」

突然現れて恐ろしい事を言った浩介は俺の問いかけに答えることもなく去って行った。

「これが、式守家の秘宝よ……」

森を進むとぽつりとあつた洞窟に入り、その先にあつた魔法陣に乗って転移すると、そこには、大きな結晶があつた。

どこかしら、伊吹達の顔がこわばっているのが分かつた。

「それじゃ、皆位置について！！」

俺達は鈴莉母さんの指示で決められた場所に着いた。

俺と浩介が秘宝の目の前に、伊吹が俺達のさらに前に、春姫は小雪さんと一緒に俺達より少し後ろに、上条兄弟は、春姫と小雪の両端に、久美は春姫達よりもさらに後ろにいる鈴莉母さんと柊の横にいた。

「雄真、ラジアを構えて、杖の先をこつちに向けてくれるか？」

俺は浩介に言われたとおり、ラジアを右手で持つと、それを浩介の方に向けた。

「お、おい。浩介何をしてるんだ」

浩介はラジアの先端を突然片手で握ったのだ。

「ラジアを媒体として魔力を受け渡すためだ。ラジアには悪いがしばらく我慢してくれ」

「いいえ、大丈夫ですよ」

ラジアからそんな言葉が返ってくる。

「それと、もし魔力の中継中に苦しくなったら、月が描かれている魔法陣を頭の中でイメージしてみな。そうすれば、楽になるから」

浩介からそんな説明をされた。

俺としては、対処法を覚えてくれたので、大助かりだった。

「サンキュ、浩介」

だから俺は浩介にお礼を言ったのだ。

しかし、この時の俺にはそれが浩介の策略だとは、知る由もなかった。

「それじゃ、始めるわ。式守さん、お願い」

鈴莉母さんの言葉によって俺達に緊張が走った。

伊吹は、ワンドであるビスイムを秘室に向けると、呪文を詠唱し始めた。

伊吹から大量の魔力が放出されるのが分かった。

「レイム・ボウ・ド・セル!!!」

そして、伊吹の呪文が完成した。

それと同時に秘室が音を立てながら、今までの比にはならないほど光り出す。

「秘室の魔力よ、小日向雄真に集え!!!」

そして、伊吹が、コントロールを開始した。

伊吹の命令どおりに、秘室の魔力は俺に波のように押し寄せた。

「くっ!!!」

その途端、まるで体がバラバラになるような激痛を感じた。

しかし、俺はそれに耐えて、魔力をラジアを通じて浩介に流す。

伊吹はそれを見て、コントロール権を放棄して、素早く鈴莉母さんの所に行った。

「雄真、放出魔力量を上げて」

浩介から指示が出たので、俺はさらに魔力の放出量を上げた。

実は、魔力をせき止めるのもきついが、放出する魔力の量を多くす

るのもかなり苦痛になったりする。
それは、作られた道に決められた量以上の水が流れ込むのと同じ原理なのだ。

「よし、その量をキープしてくれ」

浩介の指示で俺は、放出量を一定にして、浩介に放出し続けた。しかし、浩介からは魔力を放出する気配はない。それは、浩介が、失った魔力をこの際すべて取り戻すために、魔力を蓄えているらしいのだ。

「我に放出されし魔力よ、すべてを無の空間に還せ!!!」

しばらくすると、浩介が魔力の放出を開始した。その魔力は、空間と溶け合っていた。

「うわ!!!」

浩介の体が、光ったと思うと、銀髪に背中には黒い羽根が生えていた。どうやら、放出される魔力の影響で、魔王化したみたいだ。そして、俺達はしばらく無我夢中で、放出を繰り返した。

「秘宝の保有魔力あと50%!!!」

後方で秘宝の状態を監視していた久美から、そう伝えられた。

「そろそろだな……」

「ん？何か言ったか？」

俺は浩介が何かを呟いたような気がしたので聞いてみた。

「いや、何も。それよりも、放出魔力量をもっと上げてくれ」

浩介は否定の言葉を出すと、さらに放出量を上げるように指示を示してきた。

俺は、浩介に言われたとおりに、魔力量を上げた。

しかし、それと同時に体がバラバラになる感じが強くなった。

(仕方ない、浩介に教えて貰った対処法を使うか……)

俺は、頭の中で月の描かれた魔法陣をイメージする。

すると、魔法陣が発動したような音と共に体中が不思議な力があふれてきた。

それはまるで、今体を苦しめている放出量が自然である事を感じられるくらいに。

浩介の言った通り、今までの苦しみは何だったのか、きれいさっぱりと消えていた。

「ゆ、雄真……くん？」

「小日向……雄真？」

「小日向……さん？」

しかし、後ろにいた春姫達が茫然としたような声で俺の名前を呟いた。

「どっしたんだ？みんな」

俺は何があったのかが分からずに、後ろを振り向こうとした。

「よそ見はするな。それよりも、放出魔力量を限界まで引き上げる」

しかし、浩介からの注意と、指示により俺はそれを断念した。

「秘宝の保有魔力あと5%を切ったわ!!」

「よし、雄真。魔力放出を中止しろ」

久美からの報告を聞くと、浩介は手早く俺に指示してきた。

俺は、ゆつくりと、魔力の放出を止めると、浩介はラジアから手を離した。

「さて、雄真ごころうさま」

「どういたしました」

俺は浩介とごく普通に会話した。

「……」

しかし、他の皆は俺の事を変った目で見ていた。

「おい、どうしたんだよ？」

俺はいてもたってもいられずに、皆に聞いた。

「雄真……君よね？」

俺の問いかけに口を開いたのは鈴莉母さんだった。

「何を言ってるんだよ。実の息子が分からないのか？」

俺は不思議に思いながら鈴莉母さんに返した。

「雄真、ちょっとこれを見て」

浩介から手渡されたのは、普通の手鏡だった。

「一体なんだよ……は？」

俺は、鏡で自分の顔を見たとき思わず固まってしまった。

「俺……だよな？」

俺は、ようやくみんなが言葉を失っている理由が分かった。自分ですら、分からなくなってしまうほど、外見が変わっていたのだ。

髪の毛は黒から銀色に、そして、浩介と同じ、赤い瞳をしていた。

「浩介、どういう事だ？」

俺は思わず浩介に聞いた。

「そうか……お前だったか」

しかし、浩介は俺の疑問に答えずに一人で納得していた。

「高月君。答えて、雄真くんはどうしちゃったの？」

次は春姫が浩介を聞いた。次は春姫が浩介を聞いた。次は春姫が浩介を聞いた。

「雄真は、僕が思い浮かべるように頼んだ、月の魔法陣を思い浮かべた。そして、その魔法陣により引き出されたんだな」

浩介はそこまで言うと一旦話を区切った。

「アシスタントマジシャンの力をな」

「アシスタント……」

「マジシャン!?!」

俺達は浩介の言葉に茫然としながらオウム返しに聞いた。

「そう、常に魔王と共に歩み、魔王の補佐……つまり手助けをするのがアシスタントマジシャン。その力は魔王の強さに比例しているから、かなり強いことは確かだ。ただし、力をもっと引き出せれば……だがな」

浩介の説明に俺は頭がパンクしそうになった。

「ちょっと待てよ……俺はそんなものではない」

俺は、浩介に精一杯言い返した。

確かに魔法を扱ったりするのは少しばかりうまいが、それは毎日の練習の賜物だ。

「そうか?それにしては雄真の魔力量は他の人に比べると高いようだが?まあ、魔力量が高いのはアシスタントマジシャンの影響もあるが、雄真が魔族である事がもっともな原因だがな」
「な!?!」

俺は、さらに衝撃の事実を聞いた。

「お、俺が……魔族？」

俺は浩介に聞き返した。

「そつだ、雄真は完ぺきな魔族だ。アシスタントの力でも目の色までは変えられない。目が赤いのは魔族の証拠だ。まあ、伊吹は……先祖が元々魔族だったからその部分だけ影響が残っているんだろう」

俺が、言おうとした事まで先回りして浩介は言った。

確かに伊吹の目も赤い、という事は伊吹も魔族ではないのかと思つたのだが、浩介の言う通りだとすると、伊吹は影響のみを受け取つた事になる。

「私は、雄真くんがどんな存在でも嫌いになつたりしないよ」

「春姫……」

俺は春姫の言つた言葉に思わず感動してしまった。

そつだ、ここにいる皆は俺が例え普通の魔法使いではない事が分かつても態度を変えないんだつた。

「さて、雄真。これから僕と雄真の力を利用してあの秘宝を封印しなければいけない。手順を説明するから、雄真はその通りに動いてくれ」

浩介はそつ言つと、手順を話した。

要約するところだ。

まず俺が、アシスタント……何とかという力を使って、秘宝を撃ち

抜きそれを浩介が、活動破壊をするというものだった。

「それじゃ、僕の教えたやり方で頼む」

「分かった」

俺は浩介に答えると、目を閉じた。

そして即座に弓を想像した。

すると、目の前に光が見えたので俺は目を開けた。

そこにはしっかりと白い光の弓と矢らしきものが具現化していた。

俺は、その矢を後ろに引いた。

「白新の矢よ、全てを絶ち切る道となれ！！ブレイク……イヤー！！」

俺の言葉と共に矢を引いていた手を離すと、光の矢はものすごい速さで秘宝に命中した。

どーん！！

爆音が響く中、浩介が行動を起こした。

「世を惑わし秘宝よ。真なる闇の裁きを受けよ！！ダークジャッジメント！！」

浩介がクリエイトを上空に振り上げる。

すると、浩介から放たれた黒い闇が集まってくるのが分かった。

「ファイア　！！」

浩介の言葉と共に黒い闇の塊は剣の形となって、秘宝に突き刺さる。

「バースト!!!」

浩介の一言と共に突き刺さっていた剣が、爆発した。

そして、爆発の余波が消えるとそこには、光を失った秘宝があった。

「よし、これで封印完了。秘宝の機能は完全に正常作動をしている」

浩介の言葉で俺達には知っていた緊迫した空気は跡形もなく消え去った。

「という事で、雄真はアシスタントマジシャンになったが、まだまだその力は未完全。まあ、覚醒したばかりだから仕方ないが、時間がたてば強くなっていくから、その時はぜひとも僕の助けとなってくれ」

あの後鈴莉母さんの研究室に戻ると同時に浩介はそんな事を言い出して、足早に帰ってしまった。

「それにしても雄真くんがそんなにすごいだなんて、思ってもいなかったよ」

「それは仕方ないよ。俺だって知らなかったんだし」

今、俺は春姫を寮に送り届けている最中だ。

「それはそうだけど……何か不思議な気持ち」

「どうしてだ？」

俺は首をかしげている春姫に聞いてみる事にした。

「なんだか雄真くんが遠くに行ってしまうような気がするから……かな」

俺は不安そうに話す春姫の両肩を掴んだ。

「ゆ、雄真く……ん!？」

俺は、春姫の唇にキスをした。

そう言えば、俺からしたのはこれが初めてのよう……。まあ、いいか。

「俺は、春姫から離れないよ。ずっとそばにいる、だから心配しなくてもいいんだ」

「雄真くん……」

春姫は俺の顔を目を潤ませながら見ていた。

「うん。そうよね、雄真くんは私を置いてどこに行かないもんね」

春姫は、そう言って頷くいつもの表情に戻っていた。

そして、俺は春姫を寮まで送り届けるのだった。

第58話 アシスタントマジシャン(後書き)

と言うことで、雄真に新事実発覚です。
色々な意見が来そうで怖いですが……。

それでは、これにて失礼します。

第59話 始まりのとき

6月12日

昼食時、浩介の言った一言が俺達の波乱な事件の幕開けとなった。

「伊吹、ちょっと話があるからこっちに来てくれないか？」

オアシスでいつものように昼食を食べようとすると、突然浩介が伊吹を連れ出そうとする。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ、浩介！！伊吹を連れ出して何をする気よ！？」

「伊吹ちゃんに何の用ですか？」

「……………」

終やすももの問いかけにも浩介は口を閉ざす。

良く分かる、浩介の今の顔は、俺達を巻き込みたくないと言った表情だ。

「浩介、俺達に変な遠慮は無用だぜ。だって俺達は“仲間”じゃないか、辛い事があつたらみんなで助け合って乗り越えようぜ」

俺の言葉で浩介は決心がついたのか、ついに口を開いた。

「分かった。でもみんなにはショックが大きいかもしれない。すべては自己責任という事にしてくれ。まずは、これを見て欲しい」

浩介は一通り断るとテーブルに一冊の雑誌を広げて置いた。

その力の先にあるもの

第2章 『封印より解き放たれて（終）』

第59話「始まりの時」

「なになに……『冷酷な鬼、我が国の希望を殺す……圧力により連盟が虚偽の情報公開か？』！？」

俺は思わず何が何だか分からなくなりかけたが、気を取り戻すと、雑誌を読み進めた。

『来る4月29日、国際魔法連舞法務課の大臣、高月浩介氏が式守家の次期当主、式守伊吹氏に殺害されたと同総理大臣、高月宗次郎氏が会見にて発表した。

国民100万人以上の有志達が軍隊を形成し、式守家を爆破するとの声明を発表した。我らもこの声明を支援しつつ、今後式守家に対する裁きを下す方向である。

しかしそんな中おるとい高月宗次郎氏が、「前に発表した情報は全て誤報であり、事実ではない。国民の皆様には心からお詫びを申し上げます」との謝罪会見を開いたが、国民からは式守家の圧力だ、洗脳などと式守家に対する批難が集中している。

高月浩介氏は、国民目線での政策をして弱きものに手を差し伸べ、悪しき者には容赦をしない活躍を評価され、支持率が90、9%を記録し続けている。なお、当会社の掴んだ情報によると高月浩介氏は、存命とのことだ』

「ど、どういう事だよ、これは」

そこに書かれていたのは、明らかに伊吹を批判するものだった。

「……」

「伊吹、済まなかった。僕の勝手な事で式守家全体に迷惑をかけた」

浩介は泣き出しそうな伊吹の頭を撫でながら謝罪していた。

「でも、どうして、ここまで酷くなったのよ」

「それは、僕の人気の高さにある」

伊吹が落ち着いたのだろうか、慰めていた浩介が伊吹から離れて席につきながら答えた。

「確かに、支持率90、9%だからな」

俺はその数字に驚いていた。

いくら凄腕の政治家でもここまでの支持を得ることは難しいはずだ。

しかし、浩介はそれさえもやってのけている。

「国民の力は恐ろしい。全員が魔法使い……しかもこの世界の者達より強い力を持っている者たちが、この世界に乗りこんできたら、式守家は終わりだ。言っておくが国民を怒らすと本当の意味で死ぬ事になるからやめた方がいい」

浩介が、ぞっとする説明をした。

つまり、浩介は国民から守られているのだ。

「今は、父さんが事態の收拾を図っているのだが、結果は見ての通り全く進展がない。これを収めるには、僕達の世界で月に一度行わ

れる国民と政治家との交流をするための『徹底討論』の場で伊吹が国民の納得がいく説明をするしかない」

「でも、それって逆に危ないんじゃないの？危険な所に自ら飛び込むようなものよ？」

浩介の提案に柊が反論した。

確かに敵が大勢いる所に自ら行くのは、自殺行為に等しい。

「しかし、やらなければ、いずれは死が待っているんだ。だったらこっちから行ってやるうじゃないか、それに……」

浩介はそう言うと、一旦区切った。

俺達は浩介の一言を待っていた。

「まだ、皆にはお詫びをしていなかったからな。ちようど良かったからみんなへの恩返しを含めて、夏休みに来ないか？」

「もしかして、私たちも、ですか？」

春姫の問いかけに浩介は無言でうなずいた。

「ちよつと待ってよ、一体どこに行くのよ？」

「そんなの決まってる」

柊の疑問に浩介は即座に答えた。

「我らの故郷……魔界だ」

そして、俺達は再び扉を開ける事になった。

第2章 『封印より解き放たれて』 完

第59話 始まりのとき（後書き）

と言うことで第2章は終了いたしました。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

次回は第3章の魔界編となります。

ここからポリウムは一気に減ります。

それでは、次回でお会いしましょう

中書き

どうもTRです。

『その力の先にあるもの』を読んでいたくださりありがとうございます。

第2章はいかがでしたでしょうか？

今回の章は柊杏璃をメインヒロインとしました。

何気に杏璃とオリキャラのカップルを書く作家さんが多いのには驚きました。

ちなみに杏璃以外では誰とも付き合わないと言う案や、妹との禁断の愛！？と言う危ない案までありますが、後者はともかく前者はあまりにも妻ら……もとい悲しいので杏璃と付き合つと言う設定にしました。

ちなみに、杏璃と付き合う事が決定してから、第3章以降が出来たわけですが……。

そもそも浩介にここまでの重い話はありませんでした。

当初はただ強いだけにするつもりが、杏璃と付き合う流れを考え出した途端浩介がどんどんと真っ黒に……。

こ、これが杏璃クオリティーなのか……！

……し、失礼しました。

と言う訳でして、第2章で残った謎は特にない……と思いたいですが、もし何か謎が出てきましたら何なりとご質問ください。

こちらでお答えするか、もしくはご質問方法にて返信するかをしてお答えします。

分かりやすい文と大ボリュームを目指していきたいと思います。

現在の目標は70話越えです。

そしてついに次章が始まるわけですが、次章からは視点が3人称になります。

ちなみにこの形式は書きにくいので、第79話以降は2人称に戻しております。

世界を超えた壮絶なストーリーをお楽しみください。

それでは、これからも本作をお願いします。

第60話 未知なる世界（前書き）

TRです。

いよいよ第3章に突入です。

第60話 未知なる世界

一面緑で覆われた広大な自然が広がる野原に、12人の少年少女が倒れていた。

「う……ん？」

最初に立ち上がったのは、剣のようなものを手にしている少年だった。

それと同時に他の少年少女たちも立ち上がる。

「ここは……どこ？」

それは、最初に立ち上がった少年の隣にいた杖を持っている少年が発した言葉だった。

この少年少女たちの名前を言うのならば、高月浩介と小日向雄真達である。

どうして、このような事態になってしまったのか、それは今から数時間前の事から話した方がいいだろう。

その力の先にあるもの 第3章『魔界（新）』 第60話「未知なる世界」

8月1日

小日向家のリビングで、雄真と浩介、久美にすももが待っていた。その人物が……。

「お、邪魔します」

「こんにちは」

そんな事を言いながら雄真達に促らされてリビングに向かってるのは、春姫、準に続いて八子、杏璃の4人だった。

「おい、信哉達はどうしたんだ？」

浩介が上がってきた八子たちに聞くが、全員は首を横に振るばかりだ。

「あいつの方向音痴は相変わらずだな」

浩介の呟きに全員が苦笑いしたのは当然だろう。

信哉の方向音痴は全員が知っている。

いつしか、伊吹と一緒にボーリングをするために出かけた日は、キヤバクラに入ろうとしていた。

信哉の首に首輪でもつけて、変な所に行かれないようにしてやろうか、は浩介の弁。

彼の場合は本気そうで恐ろしい。

それから待つこと2時間。

「遅れた、すまぬ」

突然、来訪を知らせるチャイムが鳴り浩介が来訪者の対応をするために、玄関に向かってから少したった時に息を上げてリビングに入ってきたのが息を切らした伊吹達だった。

「おかしいな、あそこを曲がればここに着くはずだったのだが……」

信哉は、浩介達の予想通りの方向音痴っぷりを発揮して、迷ってしまっただけらしい。

さらには首をひねって考え込んでしまってもいる。

「もうお主には頼まん!!」

伊吹の判断は正しいだろう。

何せ、信哉の案内を続けられたら命にかかわることは間違いない。

「ところで、浩介。準備は良いか？」

雄真が、浩介に尋ねる。

そう、彼らは旅行に行くのではない。

式守伊吹に掛けられた罪を解消するために魔界へと向かうのだ。

「浩介君、私も行きたいな」

しかし、浩介の思いなどどこ吹く風。

音羽の一言に浩介はため息をつきながら音羽さんを説得する。

「これは遊びではないんです。ですので、大人たちの介入は拒否させていただきます。大丈夫ですよ。彼らの身の安全はこの僕と、久美が保証しましょう」

浩介の力強い言葉に音羽は何も言えなくなった。

一番恐ろしいのはたった一言で音羽を黙らせる事が出来る浩介でもあるが。

「気をつけてね、みんな」

「はい!!」

「うん」

「ありがとうございます」

三者三様にお礼を言うと、浩介が雄真達に近づく。

「それじゃあ、魔界に転送するぞ。転送魔法が発動しているときは絶対に魔法陣から出たり、魔法は使わないように」

浩介は全員にそう告げると、緊迫した雰囲気は漂う。

「ディスプレイスター……D43532 / F111221 / TE5
0423 / M001 / 260」

浩介の言葉から発せられるのは座標なのだろう。

浩介の呪文と共に魔法陣の光が強くなる。

「転送、開始!!!」

そして、浩介の一言と共に、魔界への扉が開く。

ただしそれは、魔法陣が本格的に動き出した瞬間に、魔法陣を壊す緑色の物体がなければの話だが。

突然リビングに響き渡った爆音はその物体の発する音なのか、それとも魔法陣が発した音なのか。

正解は両方だ。

緑色の物体が命中してしまった為に、転送魔法が壊れたのだ。

そして、緑色の物体をぶつ放した犯人は浩介達のすぐ近くにいた。

「小雪!!! 何をするんだ!!!」

浩介が小雪に向かって怒りをあらわにして怒鳴りつけた。
雄真達はそんな様子を呆れてみていた。

「私だけを誘ってくれないなんてひどいです」

小雪は目を伏せると転送魔法の妨害をした理由を言った。
どうやら、魔界に行く事を誘って貰えなかった事が気に入らなかつたらしい。

「これは、遊びではなくてだな」

浩介が2回目の注意をしようとした時だった。
突如音を立てて発動したのは、浩介が今まで発動させていた転送魔法だった。

「お、おい浩介。様子がおかしいぞ」

とっさに雄真はこの魔法のおかしい所に気付いたようだった。

「どうやら、時空間を開いている際にそれを制御する基盤を失ったせいで、暴走したみたいだ」

浩介から語られたのは衝撃の真実だった。
それと同時に、魔法陣があった場所に穴が空き、雄真達を吸い込もうとする。

「くっ！！ 絶対にその穴に飲み込まれるな！！ それに飲み込まれたら最後、二度と出てこられなくなるぞ」

浩介が飛ばされないように杏璃や雄真達を支えながら言った。
しかし、そんな浩介をあざ笑うかのように穴の吸引力は増し……。

「きゃああああああああ!!!」

「うわああああああ!!!」

悲鳴を上げながら音羽以外の人は全員飲み込まれた。
そして、穴はまるで役目を終えたばかりに閉じた。

そして、時空間内。

その空間は上下左右が全く分からずに、周りは灰色の所だった。

「ど、どうするんだよ!!!」

「ち!!! 強引に空間を開く。あとはどうにでもなれだ!!!」

ハチのぼやきに浩介は、苦虫をかみつぶしたような顔をしながら言う
と、答えを聞かずに空間に穴をあけた。

そして、雄真達はどこかの次元に飛ばされて今に至る。

「とりあえず一つだけ言えるのは、小雪には後で懲戒処分とかを受けて貰うことだ。もちろん文句はないよな? テメエの勝手な行動

で10人以上の命が消える所だったんだ。今すぐお前を殺してやりたいぐらいだが、命ぐらいは助けてやる」

浩介が今まで見せた事もないような怒りの表情に小雪は何も言えなくなっていた。

「ところでよ……」

そんな状況を打ち破ったのは八子の一言だった。

「ここはどこなんだ」

確かに原因を問い詰めるのも必要だが、自分たちの置かれている状況を理解しておかなければいけない。

八子もたまにはまともな事を言うなと思ったのはおそらく全員だろう。

「何処つて……なあ、久美？」

しかし浩介は不敵な笑顔で久美に振った。

「ええ。新鮮な空気、空間に満ち溢れている魔力。これらが指し示すのは」

浩介と久美は数歩前を歩いて、雄真達に振り返った。

「ようこそ、私たち（僕たち）の故郷、魔界へ！！」

そして、この時から彼らの先の長い物語が始まるうとした。

第60話 未知なる世界（後書き）

いかがでしたでしょうか？

少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

それでは、次回にてお会いしましょう。

第61話 魔界（前書き）

長らくお待たせしました。
第61話です。

第61話 魔界

浩介達の衝撃の告白からしばらくして立ち直った雄真達は、浩介達が先導する形で野原を歩いていた。

「それで、一体魔界ってどういう所なのよ」

すると、杏璃が突然浩介に疑問を投げかけた。

「魔界、それはその名の通り人ならざる者が集まる世界だ。この世界では魔法を使えることは常識でここの文化は全て魔法がかかわっている」

そんな杏璃の疑問に浩介は振り向かず淡々と説明した。

「魔界は雄真達の世界とは根本的に異なる。たとえば文明とかだな」

「どついつ事だ？」

雄真は浩介の話に興味を持ったのか先を促した。

「そうだな……たとえば雄真が持っている携帯電話とやらは、それだけの機能が付いているものだけでざっと500万円以上の値段で販売されている」

「……5、500万!?」「」

浩介の言葉に雄真達は驚きのあまり叫んだ。

「だから、携帯電話を持っているとスリとかに巻き込まれやすくな

るから、街中では出さないようにした方がいいな。まあ、このあたりで電波塔とかはないから圏外のはずだけど」

浩介の話に雄真達は頷いた。
すると雄真は携帯を取り出した。

「本当だ。圏外になってる」

どうやら雄真は、本当に圏外なのかを見ておきたかったようだ。

「まあ、最近は人間たちとの共存や、政府の補助金とかで少しずつ一般に普及出来るくらいにはなってきたが、まあ今はせいぜい家庭用の電話とテレビやビデオあたりの普及が限界だな」

浩介の話聞きながら雄真達はなるほどと言わんばかりに頷く。

その力の先にあるもの 第61話「魔界」

「でも、どうして魔法使いと人間は今まで対立していたんだ？」

雄真が浩介に分からないとばかりに疑問を投げた。

確かに雄真達の世界では魔法使いとそうではない者は、互いにその存在を認め合っている。

「……これは魔界に伝わる歴史書に書かれている内容だ。昔魔界と人間界が繋がっていたころの話だ」

浩介は雄真の問いかけに答えるように、ゆっくりと歴史書の内容を

語り始めた。

「人間と魔法使いは交流を図っていた。人間は誰にも使えない“魔法”と言う特別な力を、魔法使いは人間達の高い“技術”を伝え合うという持ちつ持たれずの関係であった。しかしその関係が崩れる時が訪れた」

「それは？」

浩介の話に雄真は先を促した。

「その時代で一番偉い人に対しての反乱がおきたんだ。魔法使いはその人にとって脅威に過ぎなかった。いくら魔法というものが分かっているてもその力は人間がもちうる力をはるかに超えていたからなそれで、その偉い人が魔法使いに対してとんでもない仕打ちを与えた」

「どんな仕打ち何だ？」

今度は八子が聞いた。

ちなみに八子は歴史関係については苦手もいいところだ。だが、テレビでやる歴史の番組はよく見ると言う良く分からない性格の持ち主でもある。

「魔法使いを全員斬首」

「……！！」

浩介の言葉に全員が息をのんだ。

「当然魔法使い達は抵抗した。そして互いに多くの犠牲者を出しながらも、生き残った魔法使い達が世界を隔離した。それで出来たのが、この魔界と言う訳だ。だから魔界の住民は人間を憎んでいる。」

でも今はその空気が少しずつだが、払拭されつつある。あと少しで人間との共存が出来るだろう」

浩介の言葉に全員が黙って聞いていた。

「それよりも、私たちはどのくらい歩くんですか？」

春姫が気になったのか浩介に聞いた。

「そうだな、転送位置のずれは5キロくらいだったはずだから、まだまだ歩くようだな」

「じよ、冗談じゃないわよ！！空を飛んでいけばいいじゃないの！！」

浩介の言葉に杏璃が叫ぶような形で浩介に反論した。

「たぶん無理だと思うぞ。この領域は魔法が使えないように、特殊な魔道具によってすべてキャンセルされるはずだから」

「え！？アムフェイ！！」

浩介の言葉に驚きながら杏璃は空を飛ぶべき呪文を唱える。

「あ、あれ？」

しかし、その効果は何も起きなかった。

「な、言っただろ？ここは魔法を使う事が出来ないんだ。それにあと少し歩けば入出国管理センターに到着する」

「わ、分かったわよ」

「ところで浩介お兄様、入出国管理センターとは何ですか？」

不満げに杏璃が返事をする、伊吹が浩介に尋ねた。

「外の世界からこの世界に来たり、この世界から外の世界に行くための門である『ゲート』がある場所だ。いくつもの手続きを踏んでからでない」とゲートは使わして貰えない」

そして、浩介から魔界についての説明が始まった。

魔界内の居住区と政治関連のライフラインが集まっている場所から少し離れた所にあるのが入出国管理センターだ。それから先は魔法使用不可区域になる。

「入出国管理センターに到着したら、まずは入国審査を受けて貰う。これをしないと犯罪者扱いになるからな」

一通りの説明を終えた浩介は入出国管理センターでの行動を話し始めた。

「その後にはワンドを持っている人はワンドに飛行拡張魔道具を付けて貰う」

「飛行拡張魔道具？」

雄真はオウム返しのように浩介に聞き返した。

「言うておくが、入出国管理センターから国際魔法連盟までかなりの距離があるってのに普通の装備でやっていたら到着前に魔力が尽きちゃうだろ。それを防ぐのが今言った魔道具だ。これは飛行に必要とする魔力量がいつもの半分になるという素晴らしい物だ」

浩介はエヘンと言わんばかりに説明をした。

「あゝ、ちなみに魔法を使えなかったりワンドを持っていても飛行能力がない場合は誰かのワンドに乗せて貰う事になる」

「お、それじゃ、俺は杏璃ちゃんと それとワンドに乗せて貰う際は男は男の、女性は女性の人に頼む事 うっ」

八子の邪な陰謀に浩介は一言で潰した。

「それとっておくが、法律とかはそっちの世界と変わりないが、一応ここは紳士の国と言う事で通ってるから、町で不用意にナンパとかするとすぐに逮捕されるから気をつけるよ、八子。ナンパとかがしたければ、ダークシティーに行くんだな。まあそこは20歳未満は立ち入り禁止だけだな」

「い、行かんわい!!」

浩介の半分冗談半分本気の言葉に八子は言い返した。

「ダークシティー？」

「闇の町の事だ。暴力団やらなんやらが勢ぞろいしている町の総称だ」

すももが意味が分からないような感じで言ったのを浩介は素早く補足した。

「それじゃ、浩介さんはそこをつぶそうとしているんですか？」

すももが閃いたような表情で浩介に聞く。

確かに普通の世界ではそう言ったものは対立する事になるだろう。

「いや、むしろ逆だ。僕がそこに行けばすぐに長蛇の列が出来るだ

ろうな。何せダークシティーを認めたのは他ならぬ、僕なんだから」

「え〜!?!?」

浩介の言葉を聞いたすももが驚いた様子で叫んだ。

「そ、そんな〜浩介さんは不良だったんですね」

「誰が不良だ!!僕は悪だからと言って切り捨てない。むしろそれを受け入れて向こう側にはそれなりのマナーを守って貰う事で活動を認めているんだ。そこんところ勘違いしないでくれ」

すももの言葉に浩介が必死に反論する。

「は、はい……」

「とまあ、そんなことを繰り返しているうちに目的地に到着したんだがな」

「「え!?!?」」

浩介の言葉に雄真達は驚きの声を上げる。

それもそのはず、まだ野原だと思っていた光景が、それなりの高さを持つビルが目の前にあったのだから。

「ほら、入るよ」

浩介が先導する形で雄真達は入出国管理センターに入った。

「おかえりなさいませ。高月大臣」

入るや否やいきなり深々と頭を下げてそう言ってくる職員に雄真達は動揺した。

「これだけは慣れないんだよね」

浩介の呟きがそれがどういふものをひしひしと説明していた。

「それでは、皆様の入国審査を行います。それぞれの媒体を持参していただきこの魔法陣からお入りください」

職員から淡々と入国審査の説明を受ける雄真達は、突然現れた黄色の魔法陣を通り、その先で入国許可書を受け取った。

「こちらが入国許可書になります。この書類はいつ必要になるのかが分かりませんので、携帯を忘れないでください」

職員の最後の説明で雄真達は入国審査を終えたのだが……

「八千達はもうしばらくかかるだろうな」

そう、問題は魔法使いではない八千達だった。

魔界は本来魔法使いが集まる世界だ。

そこに魔法使い以外の者が入国するとい言つのは非常識に値するのだ。

今は人間が入ってこられるようになったが、まだまだこういう所では差が生じるのだ。

「それでは、こちらの装置の前を通ってお入りください」

ようやく手続きが終わったのか、八千達の前に現れた装置の前を通って八千達は雄真と合流した。

「お疲れ、3人とモ」

疲れたような表情をしている八子達に浩介が労いの言葉をかけた。

「全くだぜ、魔法を使えないだけで、なんでこんなに書類を貰わなければならいんだ？」

八子が手に持っている書類を掲げて、浩介に愚痴を漏らした。

「仕方ない、そもそもここは魔法使いのための国だ。いくら人間と共存が始まるうとしていたとしても、まだ検査や審査が厳しいんだ」

浩介は八子に申し訳なさそうに言った。

「それより、本家に行くんだから早くここを出たいんだが……」

浩介が困ったような表情をして八子達に言った。

「そうだな、それじゃ案内よろしく」

「はいよ」

雄真の言葉に浩介は軽く答えると再び歩き出した。

歩くこと数分、通路を抜けるとそこは待合室のような所だった。

「ここは『飛行用ゲート』と言って、空を飛んでここを出るときはこのゲートを使う」

浩介がその部屋について説明をする。

「でも、どうやって外に出るんですか？」

すももが不思議そうに浩介に聞いた。

確かにここに出口らしきものは、何処にもない。

「それは後で説明するが、まずはこれを飛行能力があるワンドの先端に装着してくれ」

浩介がそう言いながら雄真達に銀色のコップのようなものを渡した。

「これは、なんだ？」

「それが飛行拡張魔道具だ」

良く分からなかったのか雄真の疑問に、浩介がサラッと答えた。

この魔道具は柔軟性なのでどのような形状でも対応しているのが特徴だ。

ちなみに渡されたのは、飛行能力のあるワンド……春姫のソプラノと、杏璃のパエリアに雄真のラジア、小雪のワンドに伊吹のピサイムだ。

他のメンバーは魔法使いだが飛行能力のあるワンドを所持していない物や魔法使いではない人だ。

「さて、空を飛ぶ事が出来ない人は出来る人のワンドに乗って貰う。基本男子は男子、女子は女子のワンドに乗せて貰う事」

浩介は雄真達に真剣な様子で説明をする。

ちなみに暴走しようとした誰かさんのために釘をさす事も忘れない。

「おい浩介。準はどうすんだ？」

雄真が困ったような顔をして浩介に聞く。

「そうだな、体は男で心は女だから……とりあえず準さんは女子として扱う方向で」

「わかったわ」

浩介の言葉に準は頷きながら返事をする、乗せてくれる人を探しに行った。

「それで、信哉と沙耶は誰に乗せて貰うんだ？」

浩介は気になったのか、いまだに立ち往生している二人に聞いた。

「俺は雄真殿か、浩介殿に頼もうかと」

「私は伊吹様をお願いしようかと」

二人はそれぞれ乗せて貰う人物の名前を口にした。

「それは良いんだが、雄真は八チと乗るみたいだし、伊吹は……」

浩介はそう言いながら一角の方に顔を向けた。

浩介にならって二人もその方向を見る。

「ね〜伊吹ちゃん、乗せてください」

「む……. しかしいいのか？」

そこには猫撫で声を出しながら、頼んでいるすももの姿があった。

「もちろんですよ〜」

そして、浩介は視線を戻した。

「な？」

苦笑いを浮かべながらの浩介の言葉に、二人は苦笑いを浮かべるだけだった。

それからしばらくして魔法が使えない、もしくは飛行能力が備わっていないワンドを持っている人の同乗者が決まった。

準は春姫が、沙耶は小雪がすももは伊吹が、八チは雄真が信哉は浩介がそれぞれの持つワンドに乗せる事になった。

「よろしくね、春姫ちゃんに、ソプラノちゃん」

「は、はい。しっかりと捕まっていますね」

『こちらこそ』

準と春姫はそんな会話をしながらソプラノに腰掛けた。

「しつかりつかまっておれよ」
「はい!!」

一方すももと伊吹は、楽しそうに会話をしながらビサイムに腰掛けた。

「暴れたら、叩き落とすぞ」

「わ、わかってらい」

『仕方なくですけど……暴れないでくださいね?』

ハチはというと雄真とラジアに釘を刺されるように注意されていた。

「よ、よろしくお願いします」

「そう、遠慮なさらずに」

『上条の姉ちゃんもそんなに畏まらんでな』

恐縮している沙耶に小雪とタマちゃんが明るい声をかけていた。

「最初に言っておくが僕の運転はかなり荒いぞ」

「う、うむ……よろしく頼む」

浩介の忠告に首を傾けながらも頷く信哉。

「それじゃ、これから出口のパッチを開く。ここからの出方は、ワンドを足が地面に着かない程度に浮かせて、パッチ上にある道に沿って外に出る。外に出たら最初に僕が行っているから高度を上げる。分かったか?」

浩介の説明に全員が頷く。

それを確認した浩介は、大きな壁の横にあるボタンを押した。すると、今まで壁だった所が開いて、出口に変わった。確かに壁の部分から高度を上げるように出ることがうかがえた。それと同時に心地よい風が、雄真達の間を駆け巡る。

「それとここを出る際は魔力の放出を最大にすること」

「ちよつと、それじゃ最高速度になるじゃない!!」

浩介の言葉に杏璃が反論する。

魔力の放出を最大＝最高速度という式が成り立つのためだ。

「そうでもしないと、家に着くのに日が暮れる。あと僕を追いぬかないように。追いついた時点で撃ち落とすから」

浩介は杏璃の反論に対してそう言うと、最後に恐ろしい事を言った。

「つまり、魔力の放出加減を知れという事だ」

浩介は話が終わりだと言わんばかりに魔力の放出を始めた。

「行くぞ……デイ・クラスティア!!」

浩介の呪文に応えるかのように、杖状のクリエイトの最後尾から口ケットのよう光だした。

「GO!!」

そして、浩介の言葉が合図かのように急発進した。その瞬間口ケットのような爆音が響いた。

「うおわあああああ!!!」

ちなみに、誰かの悲鳴も。

浩介はものすごいスピードで、上空（直角）に上昇している。

さて、ここで発進する順番だが、雄真 春姫 杏璃 小雪 伊吹 久美となっている。

「それじゃ、行きますか」

「ゆ、雄真。頼むからあいつのようなスピードは出さないでくれな
?」

『何を言ってるんですか、私たちも全力で行きますよ。マスター』

「その通りだハチ。ラジア全速力で行くぞ。デイ・アムフェイ!!!」

「うぎゃあああああ!!!」

雄真の呪文と共に急発進した。

同時に再び誰かの悲鳴がこきました。

「さ、さすがに私はそんなにスピードは出しませんよ」

「そ、そうだよね……春姫ちゃんお願い」

「はい。お願いねソプラノ」

『ええ、春姫もしっかり捕まっけていてくださいね』

準と春姫とソプラノはそんな会話をしながら上空に飛び立つ。

「遅~~~~い!!!!!!」

それからしばらく後にそんな怒鳴り声が響いた。

「いつくわよ〜」

気合十分の杏璃は全速力で発進した。

「それでは、タマちゃん」

『あいあいさ〜』

「え？つきゃ!？」

急に発信した事に驚いた沙耶が声を上げるが、それとはお構いなしに上空に舞った。

「貴様は、戦争を起こす気か!!!」

そして再び怒鳴り声が響いた。

「全く何をやっておるのだ、あ奴らは……すももすっかりつかまっておれよ」

「はい、伊吹ちゃん!!!」

「うむ、では……舞えビサイム」

『御意』

「きゃあああああ!!!」

……もはや言うまい。

「ルミナス……お願い」

『ええ、行きますよ』

この中で一番良かったのは久美かもしれない。

まあ、爆煙を撒き散らさなければの話だが……。

上空で合流した雄真達は、浩介の先導の元目的地に向かいながら、

文化について説明をしていた。

「この世界ではかなり向こうになるけど、車が走っている。これも人間との交流の賜物だな。ただ中心部は道路が完備されていないから無理なわけだが」

浩介による説明では、この文明は雄真達が住む世界よりは劣るもののテレビやビデオと言った物はあると言う。

ちなみにこれら一式をそろえるだけで、100万を超えたという話を聞いた時、雄真達が固まったのは言うまでもない。

テレビや固定電話は高くないのだが、ビデオがかなり高いとのことだ。

「ほら、ちょうど目の前に大きなビルが見えてきただろ？あれが国際魔法連盟だ」

「へ」

目の前に現れた巨大ビルを見て春姫や杏璃が感嘆の声を漏らした。それは当然だ。

魔界や全世界の魔法使い達を束ねる所を、今間近で見ているのだから。

「ここには犯罪などが発生した時に対応する犯罪対策課や、同じく事件の調査をしたり加害者に対しての量刑を決めたりする法務課とか色々ある」

浩介は説明をしながら国際魔法連盟の前で、方向を切り替えると再び飛行を続けた。

最初は飛行魔法を体験する機会がなかった普通科メンバーは、今では周りの景色を見れるくらいに慣れてきていた。

さて、浩介が先導する形での飛行だが、入出国管理センターからすでに1時間が経とうとしていた。

「浩介、あとどのくらいかかるんだ？」

雄真が、ヘトヘトになりながら浩介に聞く。

浮遊魔法はかなりの魔力と精神力を使うためである。

魔力は浩介が渡した拡張装置で大丈夫だが、さすがに精神への負担が大きい。

「あと2、3分で到着だ」

浩介の言葉に雄真や春姫達に希望の光が見えた。

「だけど、こんな森だらけの所に浩介の家はあるのか？」

ハチが浩介に疑問を投げかけた。

確かに浩介達が今飛んでいるのは、森のような場所の上空だ。到底、家らしきものは見当たらない。

「あるも何も、ここが僕の家なんだけど？」

「「「はい!？」」「」」

浩介から出たとんでもない言葉に全員が固まった。

それもそのはずだ。

明らかに森ばかりの場所で、僕の家なんて言われたら固まりもする。

「????どうしたんだ?みんな」

全員が固まっているのを不審に思った浩介が、不思議そうに聞いた。

「浩介の家って、森の中にあるの？」

杏璃が浩介に疑問を投げかけた。

「違うよ、正確に言うところは僕の家敷地内だから、そんなに変わらないでしょ」

「変じゃないでしょ、じゃないわよ！！もしかしてさっきから観覧車とかがあっただけど、あれも……」

杏璃が浩介の言葉に突っ込みを入れた。

そして、嫌な予感がした杏璃は浩介に恐る恐る聞いた。

実はこの森に入る前に遊園地や、牧場やらが広がっていたのだ。最初はそう言う町なのかと思っていたが、さすがに不安に思っていたのだ。

「そう、あれも僕の家敷地だ。おかげでこの家にいると暇をもてあまさないからいいもんだぞ」

浩介は笑いながら杏璃の問いかけに答えた。

「っと、見えてきた。あれが高月家本家だよ」

浩介が指し示した先にあったのは、豪邸という言葉では表せない大ききで青い屋根に外壁が白い建物だった。

「あ……はははは」

さすがに全員も笑うしかなかった。

そして、伊吹は高月家本家に近づきながらこう思っていた。

(さすが、全ての名家を束ね、魔法使いの原点と言われる場所だ)

第61話 魔界（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は高月邸まででした。

次回では高月家内の様子が主になりそうです。

それでは、次回でお会いしましょう。

第62話 高月家本家にて（前書き）

ようやくの高月家本家内でのやり取りです。

それでは、どうぞ

第62話 高月家本家にて

「うは、近くから見ると本当に大きいわね」

高月家の本家前で着地した杏璃が、茫然と本家を見上げていた。

「そりゃ本家だからな。この程度なければおかしいだろ」

そして、浩介は真面目に言った。

高月家本家は外壁が白いのが特徴だが、その広さは尋常ではない。ざっと計算しても7階くらいはありそうだ。

「それよりも、こんな所で立ち話は何だ。中に入るぞ」

浩介は啞然としている雄真達に言うと、本家に向かって歩き始めた。

「お、おい、浩介！！」

こうして雄真達は高月家に入るのだった。

その力の先にあるもの 第62話「高月家本家にて」

「ただいま」

「お、おじゃまします」

「邪魔するぞ」

三者三様に言いながら家の中に入る。

「ようこそ我が故郷、魔界へ。高月家当主及びこの国の頂点として歓迎する」

浩介の家は外見から予想できないほどの広さだった。

天井にはシャンデリアがあり、明らかに客人用のソファが設けられている。

少し奥にはドアがあった。

「本日はお呼びいただき、ありがとうございます」

雄真は緊張しながら宗次郎に感謝を述べた。

「そんなに固くせんでよい。普通に接してくれた方がこっちとしても楽だ」

「わかりました」

宗次郎の言葉に雄真は肩の力を抜いた。

「それと他の……え〜と、渡良瀬さんに高溝さんに、小日向さんに神坂さんに、柊さんそれと小日向君に式守さんに上条兄弟、あとは高峰さんだったな」

「あ、はいよろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

「お、お願いしますです」

「は、はい」

「よろしくお願いします」

「よろしく頼む」

「はい、兄ともどもよろしく願います」
「はい、よろしく願いますね」

名前を呼ばれた人がそれぞれに頭を下げた。
それほどに宗次郎には貫録があるのだ。

「それとあなたは呼んではいなかったのだが……浩介、どうい
う事か説明をしてくれ」

すると、宗次郎は小雪を見ながら浩介に説明を求めた。

「はい。彼女は転送魔法行使を妨害……さらには暴走を起こし一
緒に来る事になりました」

「うむ、そうか。高峰小雪」

「は、はい」

「お主には訓告と嚴重注意の処分です。次元にかかわる転送魔
法で失敗すると命を失う危険性があるんだ。だから本来であれば、
あなたは死刑になってもおかしくないんだ」

宗次郎の死刑という言葉に、一瞬肩を震わせた。

「まあ、今回は初犯と言う事もあるし、全員が無事に来たのだから
目を瞑るとしよう」

宗次郎はそう区切ると、本題に入った。

「ところで式守の譲ちゃんの件だが、まずは詫びを入れさせてくれ。
この度は式守家に多大なる迷惑をかけてしまった。申し訳ない」

「あ、頭を上げよ！！その、なんだ。私は怒っておらぬ」

突然頭を下げた宗次郎に、伊吹は驚きながら頭を上げるように促した。

「今回は浩介から聞いていると思うが、国民1000人が参加する討論会であなたには国民と話し合ってもらおう。討論会の趣旨説明はもう済ませた。日程だが、明日の午後1時から開始だ」

「明日ですか！？早すぎないか？」

日程を聞いた浩介が異論を唱えた。

「しょうがないだろ。こっちも日程までは指示することは出来なかった。それにこれはマスコミからの指定だ……意味は分かるよな？」

「……討論会で彼女を叩く、ですね」

宗次郎の言葉に、浩介が顔を伏せながら答えた。

「そんな……ひどい」

春姫は顔をしかめながら言った。

「マスコミとはそういうものだ。最初は上げて何かあったら落とすんだから。しかし僕達はマスコミのために討論会を開くのではない。その事だけを頭に入れて置く事」

「そうだな、私から言えるのは討論会でしっかりと自分の意見を述べる事、それだけだ」

「……」

宗次郎と浩介の言葉に全員が黙ってしまふ。

「さて、これから一月はここでゆっくりしていくといい。家の中を案内するからついてこい」

そう言うと、宗次郎は奥のドアに向けて歩き始めた。

「まあ、そんなに重く考えるな。何かあれば僕がフォローする」

浩介はそう言うと、宗次郎の後をついて行った。

雄真達はさっきまでの落ち込みは何処へやら、浩介の後をついて行くように立ち上がった。

「ここで、靴を脱いでくれ」

驚いたのはあの明らかに部屋だと思えるほどの、広さのある部屋が玄関だったという事だ。

雄真達は驚きながらも靴を脱いでスリッパに履き替えた。

ちなみにエントランスと思われる所は、これまた豪華な飾り付けが施されている広い所だった。

「ここをまっすぐ行くと3か所の扉がある。右側の扉が食事室と居間に続くドアで、真ん中のドアが洗面台に脱衣場そして、浴場につながる。そして、左側のドアがトイレとなる」

浩介は家の構造をさらっと説明する。

雄真達と言えば、ただただ茫然として説明を聞いていた。

「ちなみに入浴に関しては、レディーファーストを生かして女性から入って貰う。た・だ・し、覗きを行おうとしたものは問答無用で叩きのめす。それと八チだけは例え洗面台目的でも使用は禁止する」

「な、なんで俺だけ!？」

浩介の説明にハチが反論した。

「それはお前が一番覗きを行いそうだからだ。という事で、女性陣は怪しげな音がしたらすぐに大声で叫んでくれ。すぐに僕が駆け付けて覗きを行う不埒な輩を叩きのめす」

浩介の言葉に女性陣（準も含め）がいつせいに頷いた。

「さて、そこにある階段を登れば寝室になる」

浩介はそう言いながら、エントランスの横にあった階段をのぼりはじめた。

「まずは2階だがここには奥から、父さんと母さんの寝室。次に久美の寝室、そして手前の部屋が僕の寝室となる」

通路の方は普通でかなり広々としていた。

浩介はそう説明するとさらに階段を上がった。

「で、ここがゲストルームになる。部屋割はそれぞれドアに貼ってあるから、それを参照してくれ。3階は女子部屋だから、男子は立ち入らないように」

浩介はそう言うと、女性陣は、3階で別れる事になった。

「さて、次が男子部屋だが、家具とかは一式揃っているけど、壊したら弁償だから壊さないように」

浩介は雄真と信哉と八子を4階に案内すると、そう忠告して階段を下りて行った。

「それじゃ、またあとでな」

「ああ……」

「うむ」

八子と雄真と信哉はそう言うと、割り当てられた部屋のドアを開けて部屋に入った。

「うわ……」

雄真が部屋に入った第一声がそれだった。

「本当に浩介の家は、色々な意味でスケールが大きいな」

『そ、そうですね』

雄真は茫然としながら言った。

それもそのはずだ。

雄真の部屋はざっと計算しても、20畳はあると思える広さだったのだ。

部屋の装飾も豪華で、照明はシャンデリア、床は普通のフォローリングだった。本棚にはこれまたびっしりと詰められた本棚。

大きな窓の外にはテラスがあり、部屋の中央にはテーブルと椅子が置いてあり、部屋の隅には階段がある。

階段を登れば寝室となっていた。

「ん？なんだこれは」

すると、雄真はテーブルの上に一枚の紙を見つけた。

「何か書いてあるな、どれどれ……」

雄真は紙に書かれている文章を読み始めた。

『当部屋内に盗聴・盗撮器などプライバシーを侵害するような装置、またはそれに準ずる魔法の確認を行いました結果、当部屋内からはそのような物が一切見つかりませんでしたので、ご安心ください。』

PS：午後6時より夕食ですので、食事室にお集まりください。高月宗次郎』

そこにはそのように記されていた。

「ここはホテルか何かか？」

雄真は、そう呟いた。

その感想が正しいとも言えなくもない。

時刻は午後6時。

夕食の時間になったため雄真は食事室に向かった。

「雄真、とりあえずそこに座って」

どうやら雄真が、最後のようで、全員が席についていた。食事室は暖炉などがあり、奥の方には台所がある。

「それじゃ、全員がそろった事だし、頂きます」

「」「頂きます」

浩介の言葉で食事が始まった。

ちなみにこの日の食事のメニューはオムレツだった。

「オムレツ、オムレツ」

全員が静かにしている中、久美がご機嫌に歌を歌っていた。

「うるさいぞ、久美」

やっぱり、浩介に一喝された。

「まあ、それだけ大好物なんだからいいじゃないか。それに食事中は静かな方より、賑やかな方がいいしな」

「それもそうだな」

浩介は宗次郎に窘められると、納得したように自分も食べ始めた。

「ん、このオムレツ、おいしい」

すると、杏璃が感嘆の言葉を漏らした。

「でしょでしょ、兄さんが作ったんだから当然よ」

そんな杏璃に久美が自慢げに話す。

「なんで、お前が自慢げに話すんだ？」

浩介がにらみながら久美に言った。

「え、嘘。浩介君って、料理が出来たの？しかもとてもおいしい」
準が驚いたように浩介に聞いた。

「そりゃ、この家で久美以外はまともな料理を作れるよ」

浩介が久美をじろつと見ながら言った。

「それに比べて久美は、変なものばかり作るからな」

浩介はため息をつきながら愚痴をこぼした。

「ム、しょうがないじゃない。あれがいいと思ったんだもん」

そんな浩介に久美が頬を膨らませて抗議する。

「だからってな、お菓子に唐辛子が4個中1個に入っている状態は異常だろ。ロシアンルーレットじゃないんだから」

浩介が久美に反論した。

「う……」

浩介の言葉に久美が固まった。
結局その後、久美の料理について触れる者は誰もいなかった。

第62話 高月家本家にて（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回の話では、賛否両論がありそうで怖いです。

そして次回では、八手たちがやらかします。

それでは次回でお会いしましょう

第63話 魔王（前書き）

今回はハチたちがやらかします。

第63話です。

第63話 魔王

夕食後、それぞれがお風呂に入る中、浩介は覗きが来ないかを見張っていた。

見張りをしているのは、通路から少し前にある場所だった。

そこは、お風呂場に行くためには必ず通る場所なので、見張りをするにはもってこいの場所だ。

「確か、今入っている伊吹と、久美以外の女子は入浴を終えているから、この見張りももう少しだな。まあ、ここで見張ることを断言しておいたから、まさか覗きに来る愚か者はいないだろう」

浩介は安堵したように言った。

そもそも浩介はいくら八チが変態でも、まさか覗きはしないだろうと思っていたのだ。

ある意味その辺は八チを信じていると言っても過言ではないだろう。

しかし、その浩介の信頼を裏切るものが2名いた。

そう、“2名”なのだ。

その2名は、浩介が、見張っている場所からちよつと死角になる所だった。

普段なら死角だろうがなんだろうが、人の気配を察知する事が出来る浩介だが、この時は安堵感で気づく事が出来なかったのだろう。

「よし、信哉行くぞ」

「高溝殿、浩介殿に覗きは駄目だと言われているのではないか」

そこには、信哉と八チの姿があった。

その力の先にあるもの

第63話「魔王」

なぜ信哉がいるのか、その理由は至って簡単なものだった。

覗きをしに行こうとしていた八手を偶然信哉が見つけて、八手は共犯にしようという事で、強引に連れてきたのだ。

「お、浩介が目を離している隙に、行くぞ!!」

八手はそう言うと、信哉と共に、浩介が見張りを行っている場所を通り過ぎた。

「……?誰か、通ったような」

一方浩介は気配に気づいたが、振り返っても誰もいなかった。

「……つと、やっぱり見張りには冷たいコーヒーだな」

浩介が、目を離した理由は簡単だった。

のどが渴いたので、飲み物を用意するためだった。

浩介が、アイスコーヒーを口に含んだ瞬間だった。

「きゃああああー!!」

「……!!ゲホ、ゲホ」

突然上がった悲鳴に、浩介はむせながら声のした方へと向かう。

「お、落ち着いてくれ、伊吹ちゃん」

そこには、明らかに男の姿を確認できた。

「覗きを行う不埒な輩め、成敗してくれる!!!」

「え？ちよつま」

八子が言い切る前に浩介は、クリエイトを振りかぶった。

「闇の鉄槌!!!」

「うぎゃあああ!!!」

「ぐは!!!」

浩介が放った、魔力の刃もとい闇の刃が二人を襲った。

「大丈夫か？伊吹」

「う、うむ」

制裁が終わった浩介は、洗面所内に入らないように声をかけた。

「とりあえず、こいつらは連れていくから」

浩介はそう言うと、魔法で二人を表に運んだ。

「高月君、今悲鳴が……つて高溝君!？」

すると、さっきの悲鳴を聞きつけた春姫達が、一斉に駆け寄ってきた。

「やっぱり覗きをしたのね、八子は」

「まさか、兄様まで……」

それぞれが怒りを込めた目で、気絶した二人を見ていた。

「う、うーん。あれ？どうしてここにいるんだ？」

「ひどい目にあった」

すると、意識を取り戻したのか、二人はそのそと立ち上がった。

「兄様」

「む、どうした、沙耶？」

そんな信哉に沙耶が、ものすごく低い声で呼びかけた。

「どうした？ではない！！覚悟は出来てるだろうな？信哉」

信哉を睨みつけながら言うのは、伊吹である。

「幻想詩、第3楽章・天命の矢！！」

「レ・ダゲナ！！」

「ぐぎゃあああああ！！！！」

伊吹達の鉄槌により、信哉は吹っ飛ばされ、悲鳴が響いた。

「さあ、懺悔の時間だ」

ちなみに浩介の方は、伊吹達と同じくものすごい低い声で八ちに言った。

「え、ちょっと待ってくれよ。俺は何もしてない！！」

「……言いたいことはそれだけか？覗きを行いし愚か者め。闇の制裁を受けよ！！闇の制裁！！」

浩介は八子の言い分に聞く耳を持たずに魔法を放った。
浩介から放たれたのは闇を纏った球体だった。

「ぎゃああああああ！！！！」

そして、また悲鳴が響いた。

ちなみに、八子と信哉には、浩介からの説教に加え八子だけが表の
草むらに追い出された。

自業自得なので同情の余地はないが……。

一方、場所は雄真の部屋になる。

「本当に、色々な本があるな」

雄真は、驚きながらも本棚にある本を興味心身に見ていた。
ちなみにここにある本は全て、魔導書であり雄真が読みたそうなも
のばかりだった。

そんな中、ドアがノックされた。

「はい？」

雄真はドアの方に近づくと、ドアを開けた。

「すまない、ちょっと話があつてきたんだが」

訪ねてきたのは浩介だった。

いつもの寝間着姿だったことから、寝る前だという事がうかがえた。

「それで、何の用なんだ？」

浩介を部屋に招き入れると、雄真は本題を切り出した。

「ああ、雄真の力……アシスタントマジシャンの力を効率的に使うための練習をしようと思うんだが、どうだ？」

浩介の用事は簡単にいえば、魔法練習の誘いだった。

「そうだな、お願いしてもいいか？」

雄真は、たまにはいいかなという考えで誘いを受けた。

「分かった、明日の朝5時に来るから、魔法服に着替えて準備して
いてくれ」

浩介は用件だけを言うと足早に部屋を出て行った。

時刻は20時45分

早寝早起きという言葉が、浩介には合いそうだと思う雄真だった。
そんなことを思いながら雄真は、さらに魔導書を見始めた。

「ん？」

そんな中、1冊の魔導書が雄真の目にとまった。

「『魔王の全て』?」

その本は著者が全く分からない魔導書だった。

そして、雄真はそれに導かれるようにテーブルに置いて読み始めた。

その魔導書にはこう記されていた。

『この世界には、意思というものが存在する。世界が滅びたりするのは、その意思が関係すると言われる。世界の意思が形になったのが、魔王である』

そのような書き出しで、さらに続いていた。

『魔王は世界の意思を担い、3神を従えて誕生する。さらには、魔王にとって必要不可欠なのが、破滅の水晶体である。魔王の力は増大で誰にもその力を超えることは出来ない。しかし世界の意思はとつともなく肉体に負担をかける。その負担が故に殆どの魔王は滅びてしまう。しかしそれに耐える魔王もいる。その大半が力をほとんど失った状態だったが、完璧な状態で堪える魔王が存在する。私はあえて、この魔王を真の魔王と呼ぼう』

(誰しもが魔王の力を制御できるわけではないのか)

雄真は、読み進めながらそう思った。

確かにほとんどの魔王が、重圧に耐えられなかったのだから、そう思えてくる。

『魔王同士の闘争を防ぐため、世界に一人だけしか魔王はいない。そして、その魔王を補佐する存在としてアシスタントマジシャンがいる。この存在は常に魔王のそばにいて魔王の力と比例して強くなるが、殆どがその力を認識していない。そのため魔王の手によって強大な魔力を通し、覚醒の魔法陣を本人に使わせることでアシスタントマジシャンとして覚醒するのだ』

雄真は、その先の文に興味をひかれることになった。

『魔王が使う事が出来る必殺技が、2つ存在する。まず一つが『スタークラストー』だ。これは治療魔法や再生魔法の最上級で、どのような病気や怪我でも治してしまう強大な力だ。ただし、これを使えるのも真の魔王で12時間に1回が限界である。そして、二つ目が『ファイナルクラストー』だ。これは、世界のすべての根源を変えてしまう恐ろしいものだ。例えば、太陽が東から西の方向に行くのを西から東にしてしまったりすることが出来る』

その本には最後にこう記されていた。

『限界以上の力を行使すると、身の破滅を呼ぶ危険性がある。特にファイナルクラストーはたった1度でも使えば、その先には必ず死が待っている。魔王が根源を覆す時、その力をどのような目的で使うのであろうか？』

その本には魔王に付いての事が書き記されていた。

「……………寝るか」

雄真は、そう言うと、ベッドにもぐりこんで眠りに付いた。

しかし、雄真は気づいていなかった。

この二つの力は雄真が考えているよりも力の桁が大きいという事。そしてこの魔導書に、今後の浩介の運命を決める内容が、含まれていた事を。

第63話 魔王（後書き）

次回はいよいよ討論会です。

楽しみにして頂けると幸いです。

第64話 贖罪（前書き）

いよいよ訪れた討論会、果たして彼女たちの運命は？

と言っことで、第64話です。

第64話 贖罪

8月2日

午前5時、高月家にてとある部屋のドアをノックする人物がいた。

「雄真、約束の時間だぞ」

その人物とは浩介である。

ちなみに雄真とは魔法の練習をするという事を約束していたのだが、
当の雄真は……………。

「ん……………うるさいな……………」

相変わらず寝ていた。

「……………ッ!? な、なんだ!？」

次の瞬間、雄真は突然慌てたように起きあがった。

それもそのはず、いつまでも起きない雄真に痺れを切らせた浩介が、
大量の魔力を雄真の部屋に向けて放出したのだ。

普通の者でも大量の魔力を流せば、威圧感として効果が表れる。

これも一種の威嚇のようなものだ。

「……………雄真、約束の時間を10分も過ぎている。3分以内に支度を
済ませなければこのドアをぶち破って、貴様を上半身裸にして練習
に連れていくぞ」

浩介の低い声の忠告も一種の威嚇のようなものだ。

「うげ!？」

雄真は、浩介の宣告に固まったかと思うと、常人ではありえない早さで身支度を整えた。

「ま、待たせたな」

「時間がないから、急いで向かうぞ」

浩介はそう言うと、足早に外に向かって歩き始めた。

一方、4階フロアの一角。

「全く、こんな朝早くに何をやっておるのだ？」

「まあまあ、なんか面白そうなものが見れそうだわ」

そこにいたのは、伊吹や柊を筆頭とした、浩介の両親を除いた全員だった。

ちなみに、どうして全員がここにいるかというと、原因は浩介が放った魔力にある。

浩介の魔力は強すぎたのだ。

それは、下のフロアにいた普通科のメンツたちでさえも、目覚めさせてしまうほどだ。

そして、伊吹と柊がこっそりと発信源を探して、これまた浩介に見つからないようにこっそりと物陰に隠れて二人の様子を伺っていたのだ。

「お、行ったみたいだぞ。つけようぜ」

浩介達が歩きだしたのを見届けた八チが、興味本位にそう提案する。春姫や沙耶達が反対をする中、柊達の言葉によって言い包められた。

「うむ、俺達も追っぞ。付いてこい、沙耶!!」

「あ、兄様そちらは5階です」

再び信哉の方向音痴っぷりが発揮された瞬間だった。

その力の先にあるもの 第64話「贖罪」

「まずは、軽い練習からだ。今自分が放出できる限界値の魔力を具現化したままキープするんだ」

家を出て少し歩いた所に練習に適している広場があった（もちろん高月家の敷地内）

「お、おいどころが軽いんだよ!!」

雄真が、浩介に反論した。

確かに、浩介が出した練習方法は軽いものではない。自分が放出できる魔力をつぎ込んで、それを、魔力球などにしたまま保つのは制御力などを大量に使う。

「ちつとも重くはない。それに、この後するアシスタントマジシャン通称ASMの力を使い慣らすための練習はもっと過酷だ」

浩介は雄真の反論に対してきっぱりと言い切ると、練習を始めるように促した。

「エル・アムダルト・リ・エルス……」

雄真は、渋々と言った形で魔力を限界値の魔力を放出し、それを魔力球に具現化した。

「……つく!!」

それと同時に雄真に苦悶の表情を浮かべた。

(まだまだ、いける!!)

雄真は自分に喝を入れると、さらに制御を続ける。

この時の雄真の周りの時間は、ゆっくりに感じられた。

「よし、そこまで!!」

「……!!は〜」

浩介の声がかかると同時に、雄真は今まで浮かべていた魔法球を消して、地面に座り込んだ。

「まあ、初めてにしては5分間も、よく持ちこたえられた。次は10分持ち堪えられるようにするんだな」

「まだ、増えるのかよ〜」

浩介の言葉にがつくりと頂垂れた。
休憩時間を10分取ったのは、浩介の優しさかもしれない。

「次は、いよいよASMの力を習得する練習に入る」

「それは分かったんだが、ASMの力はどついうのがあるんだ？」

浩介の言葉に雄真が疑問を投げかけた。

「そうだな……人によってさまざまだが、僕の予想だと反射系の魔法とか攻撃系だな」

雄真の疑問に浩介は考えながら答えた。

「だったら、俺は何をするべきだ？」

「そうだな、まずはこれから僕が教える方法を使って、僕が放つ魔法を的確に打ち消していくことからだな」

雄真の問いかけに浩介はそう答えると、浩介は、雄真に魔法を教え始めた。

一方その頃、雄真達から死角になっている木陰……。

「さすがは、浩介お兄様が認めた男だ。あれだけの荒業をやり遂げるとは」

「そんなに、難しいんですか？」

二人を付けてきた伊吹達は、雄真の魔法練習を見てそんな会話をしていた。

「ああ、高い魔力を維持しつつそれを一定に流し続けなければいけないのだ。かなりの精神的疲労がかかる」

伊吹は、聞いてきたすももにそう説明するが、すももはいまいち理解していなかったようだ。

「ところでよう。俺達いつまでここにいればいいんだ？」

ハチの問いかけが空しく空気に交った。

「……という事だが、分かったか？」

さて、浩介達だが説明を終えて、雄真に確認をしていた。

「まあ、とりあえずは……」

「なら、これから練習を始める。今から僕が放つ25発の魔法を、今教えた方法で全て防いでくれ」

理解できた事を確認できた浩介は雄真にそう言い放つと、一瞬で25発の魔法弾を浮かび上がらせた。

「分かった。いつでもいいぞ」

「ディステリアー!!」

雄真の言葉を聞いたと同時に、浩介が呪文を唱える。
すると、25発が一斉に放たれた。

(しっかりと、見切って……)

雄真は、迫りくる魔法弾を冷静に見ながら見極めていた。

『魔法弾の弾道を見極めて、それが自分に対して、害の及ぼすもの
だったら、目の前に大きな壁をイメージして、さっき教えた言葉を
言う事』

これが、浩介が雄真に教えたことだった。

(今だ!!)

雄真は、右手を、魔法弾の方に掲げた。

「無限烈火!!」

その呪文は、浩介が使う無効化の魔法だった。

雄真の手から放たれた水色の霧が、浩介の放った魔法弾を全て打ち
消して言った。

「おーやるな。とまあ、今日はこのくらいにしておこうか。見物
人がいるようだし」

「……!!」

浩介の言葉と同時に茂みの方から、微かな声が聞こえる。
それはもちろん、雄真達を尾行していた準たちだった。

「あゝあ、ばれてたのね」

そして、観念したように準たちは「そごそと出てきた。」

「準に八子……それに春姫まで」

雄真は、春姫も一緒に尾行していた事を驚いていた。

「ごめんね。雄真くん」

本当に申し訳なさそうに謝る春姫に、雄真は怒る気を失った。

「にしても、浩介の魔法を全弾防ぐとは、雄真にしては中々やるじやない」

なぜか、胸を張って杏璃は自慢するように言った。

「中々って……それに浩介が放ったあの魔法弾は本気じゃねえよ」

雄真は、杏璃の言葉に若干肩を落としながらも、浩介の放った魔法弾について解説をした。

「そうなの？」

雄真の言葉に驚きながらも、放った本人である浩介に杏璃は聞く。

「その通りだ。まさかいきなり全力で放ったりしたら練習にならないだろ。だけど次は本気で放つ事にする」

浩介は雄真の問いかけにそう答えると、良い時間だと言いながら元来た道を歩き出す。

雄真達もそれに続いて歩き出した。

「いただきます」

「「「「「いただきます！！」「」「」」

雄真達が、本家に戻ってから数分で朝食が出来上がった。

「うーん、本当にここの料理はおいしいですね」

「あらー。ありがと、春姫ちゃん。そう言っただけだと作った方も嬉しいわ」

ちなみにこの日の食事を作る当番は、浩介と久美の母親の絢音さんだった。

トーストにスクランブルエッグという至って簡単なものであったが、これがまた極上なのだとか（宗次郎談）

「そう言えば、今日は例の討論会がある日だったな」

そして、宗次郎が言った言葉で楽しい食事の場に、なんともいえぬ空気が漂った。

「あなた、食事中にそんなことは言わないで」

「すまない。しかしこれだけは言わせてくれ。何かあると感情的になるんじゃないぞ」

絢音の咎めるような言葉に宗次郎はそう言っつと、雄真達にそう忠告をした。

「感情的になると、聞いている人に理解がされにくくなるからね」

宗次郎の言葉に浩介が、続けて口にした。

「う、うむ……」

伊吹はそれに頷くと、再び朝食を食べ始めるのだった。

「それじゃ、皆準備はいいか？」

「ああ、俺達は大丈夫だ」

そして、午後12時30。

雄真達は、玄関にマジックワンドを持って集合していた。

「距離と安全性を考慮して魔法を使って空を飛んでいく。空を飛ぶ事が出来ないメンバーは、昨日と同じ人に相乗りをさせて貰う事」

浩介は一通りそう言うと、魔法が使えないもしくは飛行魔法が使えない人たちは、昨日と同じ人と相乗りすることになった。ちなみに、安全性と言うのはテロを想定したものだとか。

「それじゃ、出発！！」

浩介の言葉が合図だったのか、それぞれが空に飛び立った。ちなみに、速度は昨日よりはかなり落としている。

「国民の方には、伊吹が来ることは伝わっている。そのためにテロを仕掛ける可能性があるから気をつけてくれ」

「まさか、そんなことは」

浩介の言葉に雄真が、笑い飛ばそうとした時だった。

『マスター。左側から、飛行物体が近づいてきます』

ラジアの言葉に雄真は横を見た。

すると、はつきりと数十機の飛行物体が見えた。

「おいおい……冗談だろ？」

雄真は何が何だか分からないようだった。

「ありゃ、自動狙撃魔法だな。またもや物騒な物を……」

浩介は呆れながら向かってくる物を見て言った。

「とりあえず、雄真達はそのまま前進。僕は、あれを撃ち落とす」

浩介は雄真達にそう言つと、手首をポキポキ言わせて気合を入れている。

「こ、浩介。さすがにあれは無理なんじゃ……」

杏璃が浩介に不安そうにそう言った。
確かに、そう思うのも当然だろう。
しかし、忘れてはいけない。
浩介に付けられたまたの名を。

「フン、心配無用だ。生きる戦闘兵器とまで言われた僕の実力、なめて貰っては困る。信哉、しっかりつかまってるよ!!！」

浩介は自信満々に言いきると、信哉にそう指示を出した。

「ま、まさか……浩介殿」

信哉が、不安そうに呟いた。

一応信哉は浩介の操縦で苦い思い出がある。
昨日、着陸してしばらくはまともに動けるような状態ではなかったのだ。

「行くぞ!!！」

浩介の言葉と共にものすごい速さで進路を狙撃魔法の物体に変えた。

「ま、またあんなにスピードを出して……」

久美が呆れたように呟いた。
一方、浩介の方はと言うと。

「こ、浩介殿。出来ればあまりスピードは出して貰いたくないのだが……」

「バカ言え！！ そんなことをしたらロックオンされるだろうが！！」

信哉の必死の頼みは浩介によって一刀両断された。

「来るぞ！！」

一旦、進むのをやめて、敵機の確認をする。

戦闘機のような形状をしている事が、本格さを出していた。

しかし、相手もただ者ではなかった。

ある機体は爆撃を、またある機体は狙撃をして、浩介達を襲つ。

「行くぞ！！」

「うおおおおおお！！」

信哉の悲鳴も響いたが、それは気にしない事にしよう。

大量に浴びせられる攻撃の中、浩介は果敢に飛び込んで行く。

「direction！！」

浩介が唱えた呪文によって、浩介の腕に全てのエネルギーが集結する。

「ほら！！」

浩介が、腕を一振りする。

それと同時に、辺りに飛んでいた、数十機の機体は全て撃ち落とされた。

「こんな雑魚、一瞬で片付けてくれるわ」

煙を立てながら落ちていく機体を、冷やかな目で見ながらそう言い放つと、浩介は雄真達の元に進路を変えた。

「戻ったぞ」

「本当に、今さらだけどたまに浩介が怖くなるのよね……」

戻ってきた浩介にそう呟いたのは杏璃だった。

とまあ、道中ハプニングはあったりしたが、しばらく飛行すると、大きな建物が見え始めた。

「あれが、討論会場だ」

「は〜、まるで野球場みたいだな」

雄真の言う通り、端から見れば野球場級の広さを持っていた。

そして、討論会場の裏口の方に雄真達は着地した。

「それじゃ、入るぞ」

浩介はそう言うと、出入り口に立っていた職員の方に歩いて行った。

「高月浩介様御一行ですね？お話は伺っています。待機室までご案内しますので、どうぞ」

女性の職員は、雄真達に笑顔で言うと中に歩いて行った。

それに続くようにして、雄真達は待機室へと向かった。

「通路は普通だな」

歩きながら八チがそう感想を言った。

「そりゃ、魔界全部がお金持ちなわけないからな」

それに対して浩介が、苦笑いしながら答えた。

「こちらが、高月様御一行の控室でございます」

そんなやり取りをしていると、女性職員が、ドアを開けながら言った。

「うわー、広い」

その部屋を見た春姫が思わずそう呟いた。それもそのはずだ。

待機室は、かなりの広さがあり、高級感はなかったが雄真達総勢、12人がくつろぐには十分だった。

「わざわざ、ありがとうございます」

「いえ、開始時間になりましたら、お呼びしますので、おくつろぎ下さい」

浩介のお礼の言葉に女性職員はそう答えると、雄真達に一礼してドアを閉めた。

「さっそくで悪いけど、流れを説明する」

浩介の言葉に全員が注目する。

「まず、僕が今回の事件について話す。その後に伊吹が釈明をする。」

その後は質疑応答になる」

「浩介が、問題だと思っ部分は何処だ？」

雄真は気になったのか、浩介に聞いた。

「そうだな、一番の問題は……最後の質疑応答だな」

「それって、もしかして……」

春姫の仮説に浩介が無言で頷いた。

春姫の仮説とは、質疑応答で伊吹が叩かれることだ。

「そのために、皆は国民に対しての言葉を考えて置くんた。決して挑発をするような事をしてはいけない。何を言われても軽く流して、その言葉に対して反論するんだ」

浩介の言葉に全員が頷いた。

それから、数十分が経った時だった。

「そろそろお時間です。ご案内いたします」

先ほどと同じ女性職員によって、雄真達はステージの横へと誘導された。

「それでは、こちらでお待ちください」

女性職員は雄真達にそう言うと、ステージに出て行った。

「うわ〜……たくさん人がいるわね」

「そりゃ、兄さんは国民のほとんどから、支持されているんだから当然でしょ」

杏璃の言葉に久美が若干、苦笑いを浮かべながら言った。

「伊吹。国民を納得させるために、強硬手段を取らなければいけない事がある。申し訳ないが、理解してくれ」

浩介の言葉にそれぞれが、緊張の面持ちを見せる。

浩介の言う強硬手段は、法的措置に等しい。

それを分かっているから、誰も何も言わなかった。

「なあ、浩介。俺達も出ないと駄目か？」

すると、八チが浩介に顔を引き攣らせた感じで尋ねた。

「申し訳ないが、出て貰う。嘘偽りがないようにしたいから」

大丈夫、何も話さなくてもいいから　最後に浩介はそう付け加えて答えた。

「まず最初は、僕だけがステージに呼ばれる。その時に今回の事件について説明をするから、伊吹達は僕が呼ぶまではそこにいてくれ」

「分かった」

「頑張れよ、浩介！！」

雄真達が、浩介に答えた。

このとき、それぞれがどのような心境だったのだろうか。それは、誰にもわからない。

「それでは、国際魔法連盟法務課大臣の高月浩介さんです。どうぞ

「!!」

そして、ついに浩介が呼ばれた。

「浩介殿、ご武運を」

「はは……どうも」

信哉の言葉に浩介は軽く笑いながらお礼を言うと、ステージに向かって歩き出した。

浩介が、ステージに出た瞬間、ものすごい歓声と拍手が響いた。

「す、すごい人気だな」

「ほ、ほんとだわ」

雄真と春姫が、その反応に驚きながら言った。

「みなさん、こんにちは」

一方、ステージに出た浩介は、いつもと変わらない感じだった。

「えー、最近はどんどん暑くなってきました。熱くなったからと言って暴動は起こさないでください。どんどん暑くなりますから」

浩介の、ジョークとも言えるような言えないような言葉に、国民達は和やかな空気を出した。

「それでは、本題に行きたいと思います」

浩介のその言葉と同時に会場内が、一気に静かになった。

「な、なんで静かになるのよ!？」

「それは、兄さんの言葉を聞くこうとしているからだよ」

ステージの横からそんなやり取りが聞こえる。

「皆さんも知つてのとおり、来る4月29日に私は式守伊吹によつて殺されたと言つ情報が流れました」

その言葉と同時に国民から怒号が飛び交つた。

その中には……

「鬼なんか、殺せ!!」

「国殺しの大罪人に天罰を!!」

そのような物があつた。

「……ッ!」

その怒号は伊吹達にも聞こえ、伊吹は顔をしかめた。

「私はこの場を持って宣言いたします。この情報は全てが真実の物です。この事件の発端は式守家が所有する式守家の秘宝が……」

そして、浩介によつて秘宝事件の解説が始まつた。

「と言う事です。式守伊吹には殺人罪が当てはまり、今すぐに破門に処すべきだと思われます」

浩介の言葉に国民達からはそうだ!!と賛同の意見が上がつた。

「しかし、本人達にもこれについて意見を述べる権利があります。そこで、本日は式守伊吹氏をここにお呼びしています。彼女の話聞いてください。……式守伊吹さん、どうぞ」

浩介の言葉で、雄真達の緊張はピークに達していた。

そして、ついに雄真達は、ステージの方に歩いて行った。

雄真達が姿を見せると、同時に国民からは大ブーイングで迎えられた。

客席はざつと見た所満席だった。

と言うよりかは、ここは音楽スタジアムか何かかと勘違いするような構造だった。

ステージの方は、中央にマイクが備え付けられているスピーチ台があるだけだった。

「しつかり、自分の意見を言うんだぞ」

スピーチ台から離れた浩介は、すれ違いざまに小声で呟いた。

「只今ご紹介に授かりました、式守伊吹です」

伊吹は、普段の姿からでは想像もできない口調で話し始めた。

これには雄真達だけでなく、浩介すらも目を見開いて驚いていたほどだ。

「皆さんの知つての通り、私は彼を殺してしまいました。それを私は隠そうとはしません。これからも自分が犯してしまった罪を償って行くことと思う所存です」

伊吹は、話したい事をすべて話したのか、スピーチ台の前から離れた。

しかし、国民からの反応は全くなかった。
いや、冷やかなものだと言った方が正しいだろう。

「それでは、本日最後になります、質疑応答に入らせていただきます
と思います。ご質問がある方は、挙手をお願いします」

入れ替えて、スピーチ台に立った浩介が、軽く説明をした。
それと同時に大勢の国民が手を上げた。

「はい。それでは、その人」

指を差さないあたりで、育ちの良さが伺える。
浩介が選んだのは、中年男性だった。

「先ほど、式守さんは、罪を償って行こうと仰っていましたが、大
臣は彼女の発言にどう思われましたか？」

男性の質問は、非常に的を得ていた。

「はい。私個人としては彼女の誠意の気持ちから、改善の見込みが
あると判断できました。確かに彼女が行った事は非常に許しがたい
ものです。しかし、彼女がこのように反省をし、その過ちを認めよ
うとしているのですから、私は彼女の意思を尊重しようと思います」

「ありがとうございました」

質問をした中年男性はそう言うと、座席に座った。

「それでは、そちらの方」

次に浩介に選ばれたのは、女性だった。

「高月大臣が魔王だと言う噂がありますが、これは、本当なのでし
ようか？」

どうやら、伊吹のスピーチが功を奏したようで、浩介が予想した混
乱は起こらなかった。

「……えー、そう受け取って貰ってもかまいません」

浩介は、言葉を濁すように言った。

「ありがとうございます」

それからすぐに、討論会は終了した。

ちなみにこの日から、雑誌などで叩かれていた式守家が一転し、持
ち上げられるようになった。

とある雑誌には『はじめをつけるために、罪を償うと断言した式守
家の対応は評価に値する』と書かれていた。

これにより、当面はテロなどが起きる心配もなくなり一安心となっ
た。

そして、雄真達は、魔界で残りの夏休みを過ごすことになった。

第64話 贖罪（後書き）

これって本当に討論会？

と思われた方はおそらく正しいです。

ですが、どうも泥沼の展開は私には向いていないようでございまして、
しまいました。

次回からは普通の夏休み編をお届けできると思います。

それでは、これにて失礼します。

第65話 夏の風物詩（前書き）

季節的にもほぼピッタリな話です。

それでは、どうぞ。

第65話 夏の風物詩

8月4日

「うひょゝすげえ」

「そう、それなら良かった」

八ちは目の前の景色の感想を興奮気味に言っていた。

それに対して相槌を打ったのは浩介だ。

もちろん、雄真達もいるがその景色は……一面の海だった。

その力の先にあるもの 第65話「夏の風物詩」

事の発端は八ちの一言だった。

「なあ、浩介？」

「どうした、八ち」

二日前の徹底討論会が功を奏し、伊吹達へのバッシングも下火になった。

浩介はしばらくは休暇になるらしく、リビングのソファで雄真達とくつろいでいた。

春姫は、台所で絢音の家事を手伝っていたが。

「魔界にはさ、海ってあるか？」

「あっそれあたしも気になってたのよね」

八子の疑問に杏璃も便乗した。

「二人とも魔界をなめてるのか？あるに決まってるだろ」

「ならさ、これからみんな海に行かねえか？」

浩介の答えに八子は立ち上がってそう提案をした。

「まさかとは思うが、それで皆の水着姿を拝もうなんて、ふしだらな事を考えているわけではないよな？」

浩介が八子に向けて疑いの目を向けていた。

「そ、そんなことはない！！ただ、夏と言えば海だぜ」

浩介はため息をつきながら出かける支度を始めた。

「こ、浩介。あたし達水着を持ってきてないんだけど」

それと同時に浩介が固まった。

「あ、そう言えばそうか。そんなものを用意しているのは八子ぐら
いだしな」

浩介は八子の事を呆れた目で見ながらそう言った。

「分かった。みんなの水着を召喚する」

「「「「え！？」「」「」」

浩介の言葉に全員が固まった。

「ちょっと、高月君。召喚って」

「まさか、あたし達の」

「水着を召喚する気ですか？」

見事にシンクロナした春姫と杏璃とすももの言葉に、浩介はきよとんとした表情を見せた。

「もちろんだ。じゃなきゃ素っ裸で泳ぐ気か？」

浩介はさも当然そうに言った。

「大丈夫だ、召喚した水着は誰の目にも介さずに、それぞれの部屋に送るから」

浩介は、春姫達を安心させるように言った。

「でも、召喚魔法だったら、形状とかをイメージしないんと出来ないんじゃない？」

春姫は浩介の言葉に不思議そうな表情をして、疑問を投げかけた。

確かに春姫の言った事は正しい。

召喚魔法や転送魔法は、対象物の場所・位置・形状をイメージしなければいけない。

しかもどれも中途半端ではいけない。

正確に対象物がある場所とその位置そして、詳しい形状をイメージしなければこれらの魔法は失敗する。

そのため、春姫と杏璃の顔が引きつったのが、浩介に水着のデザインまでも言わなければいけないことだった。

召喚魔法について知らない者たちは、この場に転送されることに不安を覚えていたわけだ。

「それも心配はない。言っておくが、僕は高月家の人間だ。その水着がある場所……つまりどの部屋にあるかだけを教えてもらえれば、十分だ」

浩介の言葉に雄真達は驚いた表情をした。

それは、前に説明した召喚魔法の根本を覆すものだったからだ。

「浩介でもそれは出来ないでしょ」

「そんなに心配だったら、証明する」

杏璃の言葉に浩介はめんどくさそうに言いながら、雄真に言葉を投げかけた。

「雄真の水着って、部屋にあるよな？」

「ああ……ってまさか、俺の水着を!？」

雄真は自然に答えると、思い出したように浩介に問いかけた。

「その通り。雄真の水着は僕は一度も見ていない。証明するとしてはびつたりだろ？」

「そりゃそうだけど……」

雄真は納得できなかつた様子であったが、浩介にOKを出した。

「それでは……高月家儀流・序幕、次元の導き!！」

浩介の力ある言葉と共に、浮かび上がっていた魔法陣が一瞬だけ輝くと、再び魔法陣は輝きを失い浩介の周りに浮かび上がっていた。

「うお！！お、お皿が突然」

八チが驚いたような表情で、突然目の前に現れたお皿を指差しながら言った。

「それより、雄真の水着が召喚されたはずだから、確認してくれるか？」

浩介に促らされた雄真は、急いで自室に向かった。

「ホントに召喚されてる……」

部屋のドアを開けた時に、雄真は驚いたように呟いた。

ただ難点は、雄真が持っている水着を全て召喚されている事だが。

「確かに、召喚されてたけど、多すぎないか？」

戻って来た雄真が浩介に言った。

確かに、何十着は多いだろう。

「そこで、これを使うんだ」

浩介がそう言って取り出したのは魔法陣が描かれている以外は、何の変哲のない紙だった。

「その紙が何なのよ」

杏璃が不思議そうに聞いた。

「これを召喚された物に包めば、元のあった場所に戻してくれる、

とても便利なものだ」

「本当なのか？」

伊吹が、魔法陣が描かれている紙を見ながら不思議そうに呟く。
紙の大きさはA4用紙が2枚分の大きさだ。

「だったら、試してみようか？」

浩介はそう言うと、先ほど雄真の水着と同時に召喚したお皿を、紙に包んだ。

「それで、火をつけると」

浩介はその紙に火を付けた。

「きゃー！！」

「うわー！！」

ポンと言う音と共に紙は跡形もなく消えた。

「ちなみに、さっきのお皿はあっち」

「あ、ほんとだ」

浩介が指差した方を見ると、確かに浩介が召喚したお皿が置いてあった。

「浩介！！勝手に召喚しないで！！」

ちなみに浩介は絢音に叱られた。

「と言う事で、理解できた？」

「ああ、出来たぜ。それじゃ、サクッと」

浩介の言葉にハチが答える。

「……わかった。それじゃ、皆は水着が置いてある部屋を思い浮かべてくれれば後は勝手に召喚されるから」

雄真が、台所にいた春姫に事情を説明してリビングに連れてくると、浩介は全員にそう呼び掛けた。

「それじゃ……高月家儀流・序幕、次元の導き!!」

再び浩介の周りに現れた魔法陣が、眩しいくらいに輝きだす。

「この紙を持って、お気に入りの水着を見つけてくるといい」

浩介が、全員に紙を手渡すとそれぞれが自室に戻った。

「あの……浩介兄様」

「どうした？沙耶」

そんな中、信哉と沙耶、伊吹がリビングに留まっていた。

「私達はその……水着を持っておりません」

「あ〜」

沙耶の言葉に浩介はしばらく考え込んだ。

「なら、確かあれがあったはずだから、貸してあげる」

浩介は3人を連れて、リビングから出た。

「この水着を使うと良い」

そして、連れてこられたのは、ロッカールームだった。

「浩介殿、これは？」

「ああ。これは高月家が使っている水着なんだ。魔力を込めれば、耐冷作用が働く便利なものだ。女子はそのの、男子はそっこのロッカーだ」

『ここで着替えるなよ?』と言い残すと、浩介はロッカールームから出て行った。

それから数十分後に、全員がビニール袋を持って玄関に集まった。

「浩介、これお昼御飯よ。皆と一緒に食べなさい」

「ありがとう、母さん」

絢音から風呂敷を受け取った浩介は、お礼を言いながら、異次元空間にしまった。

「それじゃ、出発!」

「「「「おー!」」」」

浩介の号令で雄真達は、徒歩で海に向けて歩き出した。

そして、今に至る。

「青い海に、心地いい風……まさに夏だ！……って感じだわ」

「本当だね」

背伸びをしながら言う杏璃に、春姫も賛同する。

「それじゃ、水着に着替えようか。女子は向こう、男子はあっちだ」

浩介の言葉に全員が、各々と更衣室に向かった。

こういう時になると、浩介はリーダー性を発揮する。

「ハチ、まさかとは思うが、”また”覗くつもりではないだろうな？」

「い……いや、そんなことはないよ」

浩介の陰に隠れて、女子更衣室に向かおうとしていたハチに、浩介は『また』を強調して問いかけた。

「そうか、ならば、男子更衣室に行け」

それから数分後、男子組が全員待ち合わせの場所にやってきた。

雄真と八ちに信哉は、ごく普通のトランクスタイルの水着だった。ただ、信哉で一つ異なったのは、魔力のオーラが漂っていることだった。

「あれ？ 浩介は着替えないのか？」

「僕なら、後でも出来る」

不思議そうな顔をして問いかける雄真に、浩介はそう答えると、再び空を眺め出した。

「お待ちせしました」

それからさらに数分後。

女子組が雄真達のいる場所に歩いて来た。

春姫は緑をベースとしたビキニタイプ、杏璃はピンクをベースとしたビキニタイプでももはスクール水着（一般的にはスク水）、小雪は黒をベースとしたビキニタイプ、伊吹と沙耶は青をベースとしたワンピースタイプ（二人共も、何故か魔力のオーラが漂っている）準は青と白をベースとしたビキニタイプで久美は白をベースとしたワンピースタイプの水着を着ていた。

「うひょ〜!! 姫ちゃんと杏璃ちゃんの水着姿もかわい……ゲボ
ラ!!」

「春姫の水着姿を見るのが目的か!!」

「いい加減にしないと、海の中に沈めるぞ!!」

八千の言葉を遮ったのは、雄真と浩介の鉄拳だった。

「って、浩介は水着着ないの？」

何度目か分からない問いかけが、杏璃によって投げかけられた。

「はいはい……クリエイト」

背中に付けているクリエイトに呼び掛けると、浩介の体が光始めた。

「はあ〜、確かにそれが出来れば、着替える必要もないわね」

浩介の姿を見た杏璃が感心したように、言葉を漏らした。

浩介の水着は黒をベースとしたトランクスタイルだった。

「高月家の水着は、耐魔法・温度構造になっているから、そのせいで多少魔力が一般の人に見えるようになってるんだ」

と言うのが、浩介の弁。

「その、私の水着……似合ってるかな？」

「あ……ああ、似合ってるよ」

さて、恋人である雄真と春姫は定番のやり取りをしていた。

ちなみに雄真が、春姫の水着姿が似合ってると言った瞬間、春姫は万弁の笑みを浮かべた。

一方、もうひと組のカップルはと言つと……

「こ、浩介……あ、あたしの水着……その……似合ってる、かな？」

こちらもやっていました。

しかも、春姫よりも顔を赤くしていた。

初々しいと思うのか、空を飛ぶのかはそれぞれの考えだと思う。

と話を戻し、普通の男だったら一発KO負けの上目遣いを受けている浩介はと言つと。

「誰が言うか、バーカ」

全く効いていないし、ムードが大なしの一言を言った。

杏璃の表情に怒りが見え始めた。

しかも、浩介はそれだけ言つと、杏璃の横を歩いて行った。

杏璃が浩介に怒鳴ろうとした瞬間だった。

【似合っているよ……杏璃】

「え!？」

杏璃の頭に言葉が響いた。

浩介はどういう訳か、念話を使ったのだ。

杏璃が、浩介の方を見ると、笑っていた。

(直接言いなさいよ)

杏璃はそんなことを思いながら浩介の方に歩き出した。

全くその通りである。

「それじゃ、ビーチバレーでもやりましょ」

準の提案に全員が賛同する。

その後チーム決めをして、女子対男子で行う事になった。ちなみにしっかりとハンデはある。

それが……。

「5点が向こうの方に最初から入ってるんだから、俺達も負けてられないな」

雄真は気合を入れるように言った。

ハンデは、女子チームに5点入れておき、さらにサーブ権も与えられるらしい。

「それじゃ、行くわよ!!」

と言う事で始まったビーチバレーだが、忘れてはいけないのは両チームに怪物級の力を持つ者がいると言う事だ。

「兄さん、体が鈍ってるんじゃないの？」

「何を!? 久美の方こそ隙だらけだ!!」

言葉だけを聞けば、ただの言い合いのように取るかもしれないが。

「……あれ、いつになったら終わるのかな？」

「さあ？」

脇で茫然としながら疑問を口にする準と、それに疑問形で返す雄真。

「すばらしい。沙耶もあのようにな　　ゲボファ!!!」

「兄様、私にはあれは出来ません」

どこかずれた感想を言う信哉と、何処から取り出したのかサンバツ
八を振り下ろす沙耶。

「伊吹ちゃん、あれを止められますか？」

「……できれば関わりたくない」

こちらも茫然としながら疑問を口にするすももと、目の前の光景か
ら逃避している伊吹。

「春姫!!! 手を離してちょうだい!!!」

「だ、駄目よ杏璃ちゃん!!!」

パエリアを片手にいまにも駆け出そうとしている杏璃と、それを止
めている春姫。

え、八チは何処に居るかって？

八チなら……。

「グハ!!! あのだ美ちゃ　邪魔よ!!!　　グベラ!!!」

コート内でボールの的になっている。

全員が見ていたのは、久美と浩介が永遠と高速でボールを打ち続け
ているものだった。

どうしてこうなったのかと言うと……。

「それ!!!」

「杏璃ちゃん!!!」

「分かってるわよ!!!」

女子対男子のビーチバレーは白熱しており、それぞれが、巧みに協力し合っていた。

そんな所で、今現在7対7と同点だ。
10点先制なので、ここで決めたい所なのだが……。

「貰った!!!」

「甘いね!!! は!!!」

久美の抜群な運動神経で、信哉が放ったスマッシュボールを打ち上げた。

「ナイスよ、久美ちゃん!!!」

「ありがとう!!!」

しかし、負けている男子チームではない。

「えい!!!」

「させない!!! た!!!」

春姫打ち出したボールが雄真達のいる所よりも後ろの、ラインぎりぎりの所へ向かう。

誰しもが間に合わないと思った時、浩介が猛スピードで、ボールの落下地点に回ったのだ。

ちなみに、浩介がいた場所は一番前、つまりコート全体の中間の位置だ。

浩介は軽く、上に打ち上げると、相手のコートにうちこんだ。

ここまででは、普通のビーチバレーだったのだが……。

「ふんげ!？」

久美が放ったボールが浩介の顔面に直撃した。

「こ、浩介?」

「久美……何か言う事があるよな?」

浩介は若干顔を引き攣らせて、久美に問いかけた。

「兄さんがとろいから当たったんだよ。しっかりしてよね」高月家の人間として恥ずかしいよ」

「……!」

久美の言葉に浩介が固まった。

「く、久美ちゃん。謝らないと駄目だよ」

春姫が慌てたように久美に言った。

「分かってるわよ。兄さん、ごめんね」

「……え」

久美の謝罪に浩介はぼそりと呟いた。

「え？」

「喰らえ!!」

何を言ったのかが聞こえなかったのだろうか、久美は浩介に聞き返したが、浩介は突然叫ぶとボールを久美に向かって投げつけた。

「あた!!」

「久美がとろいから当たるんだ。本当にしっかりして欲しいね」高月家の者としては恥じれ」

仕返しとばかりに久美が言い放った言葉をそのまま返した。

「やったわね!!」

「そっちこそ!!」

そして、今に至る。

「しづといわね」

「それはこっちのセリフだ!!」

簡単に言えば兄弟喧嘩だが、勢いがすごいために誰も止める事が出来ないのだ。

「はいはい、そこまでね。お昼にでもしましょう?」

しかし、その喧嘩は絢音の一言で収まった。

「食べる」

「そう言えば、あたしちょっとお腹がすいて来てたのよね」

雄真達は、浩介が異次元空間から取り出したサンドイッチを食べ始めた。

浩介と久美が食べているという事は、喧嘩は終わったのだろう。

雄真達は心の中では、再び喧嘩がぶり返して欲しくはないと感じている事は容易に想像がついた。

昼食の後はそれぞれが自由に行動を始めた。

ある者は、潮干狩りをしていたり（浩介曰く、この浜辺からそのような物は一切採れないとのこと）。

またある者は、浜辺の散策に。

さらにある者はせっかくの海と言って泳いだり。

ある者は木陰で眠っていたりとそれぞれが、魔界の海を楽しんでいた。

「雄真くん、あれ見て!!」

浜辺を散策している雄真と春姫は、目の前に見えてきた光景に茫然としていた。

「へー、浜辺を歩いていたら、高台に出たか」
「でも……いい風ね」

そこに広がっていたのは、何処までも続く海だった。
太陽の光が反射して、絶景と化していたのだ。

「そうだな」

あたりを見回すと、切り株のようなものがあり、春姫はそこに腰掛けた。

雄真も、春姫を追いかけるように横に腰掛けた。

「それにしても、魔界でこんな絶景を見れるなんてな」
「そうよね。素敵だね」

春姫はそう言うと、雄真の肩にもたれかかった。
雄真は若干顔を赤くしながらも静かに、目の前にある景色を楽しんでいた。

一方、海を泳いでいる浩介と杏璃はというと。

「お〜い、どこまで泳ぐ気だ？」

「いいじゃないよ、せっかくの海何だから」

泳いでいる杏璃を浩介が追う形になっていた。

「でもな、沖の方に出ると色々と厄介だから」

「分かってるって」

実は魔界の海は、沖と浜辺周辺とでは波の強さが異なるのだ。

普通の海では、浜辺と沖の方の波の強さはそれほど変わらないが、魔界の場合は浜辺は比較的に穏やかだが、沖の方に出ると嵐の前兆のように激しくなるのだ。

「って！！ わかってないだろ！？ もう沖だって！！」

浩介がそう叫んだ瞬間だった。

「うわっぶー！！」

突然の波に杏璃が飲み込まれた。

「杏璃！！」

浩介は杏璃の名前を呼ぶと急いで、杏璃がいた場所に向かった。

「クリエイト！！」

『はい、マスター！！』

浩介の指示で、杏璃を抱えて上空に飛び立った。

「ゲホ！！ ゲホ！！」

「バカ！！ だから言っただろ！！」

むせている杏璃に浩介が怒っているのか怒鳴った。

「ごめん」

杏璃はそう言っていると、浩介の方にもたれかかった。

「まったく。無事でよかった」

「ありがとう、浩介」

二人は上空で堂々と唇を合わせた。

こっちも負けずを劣らずバカップルである。

「ちょっと浜辺の方で泳ごうか」

「そうね」

浩介の提案に杏璃はそう言っていると、浜辺の方へと飛んで行った。

「忘れ物はないか？」

「ああ、こっちの方はないぞ」

あれからそれぞれが海を楽しんで、気がつけば夕方になっていた。

「じゃ、帰るぞ」

夕日に照らしたされる海面を目に焼き付けて、浩介は歩き出した。こうして、雄真達の思い出にまた新たに加わったのだった。

第65話 夏の風物詩（後書き）

夏の風物詩と言えばほかにも花火がありますね。

今回は半分コメディ半分シリアスです。

第66話 突撃 部屋訪問（前書き）

某テレビでやっていたコーナーと、昔やっていた寝起きドッキリを混ぜたようなものです。

第66話 突撃 部屋訪問

「と言う訳で、準備はOK？」

「お〜」

「準、なんでこんな事をするんだ？」

高月家のリビングに、密かに集められた浩介以外のメンバー。

その中の雄真が準に呆れた様子で聞いた。

「それはね、浩介君の裏を調べるためよ」

「そうよ、あんな顔をしてもしかしたらいかかわしい物でも隠してるかもしれないでしょ」

雄真の問いかけに準が答え、杏璃もそれに賛同する。

ちなみにメンバーの中でやる気を出しているのは準と八子と杏璃に久美と小雪だった。

他の者は消極的だが、浩介の部屋には興味があるのか、誰も止めようとしなかった。

「それじゃ、行くわよ」

そして、準たちは浩介の部屋がある2Fに向かった。

「鍵は掛ってる？」

「ううん。掛けてないわ」

浩介の部屋の前に着くと、久美が施錠されているかを確認した。どうやら、かぎは掛かっていないらしい。

「じゃ、一気に行くわよ」

そして、準は部屋のドアを一気に開けた。

その力の先にあるもの 第66話「突撃！！部屋訪問」

「どうも！！真下の渡良瀬で〜す！！」

「何だ？その某タレントが入ってくる時に言うセリフは？」

突然押し掛けられたにもかかわらず、浩介は冷静にそう切り返した。

「そんなことはどうでもいいのよ。浩介の部屋に変な物がないかをチェックするのよ！！」

杏璃が浩介にダイレクトに言い放った。

「まあ、調べても良いけど、僕はそんなものは持ってないぞ。ハチじゃあるまいし」

浩介はそう言うと、呆れながらそう言った。

それが了承と取ったのか、準たちは浩介の部屋を調べ始めた。

「基本構造は、あたし達と同じなのね」

部屋を見た杏璃がそう感想を言った。

「まあな。……ハチ、それ勝手にいじると爆発するから気をつける

よ!！」

浩介は、道具が置かれている棚に、手を触れようとしている八ちに注意した。

ドカ〜ン!！」

しかし、それは手遅れだったようで、八チが置いてあった物を持ち上げた途端爆発が起きた。

それほど恐ろしい物ではなかったが。

「あゝあ。片づけときなよ、八チ」

「……」

当の本人は気絶していた。

「浩介、あれは一体……」

「異次元空間に格納できなかった武器を置いてある。八チは運悪く爆弾を手にしたようだけど」

サラッと答える浩介に雄真達が固まった。

「ちなみにその異次元空間には、他にもやばい物はないよね?」

柊が恐ろしげに聞く。

「ん?あるよ。例えば刺した物を一発で蒸発させる剣や、他にはもういいわ!！」　そう?」

しかし、予感と言うのは当たるもの。

浩介はサラツと物騒な物を答え出した。
さすがにこれ以上聞くと、やばい物が出てきそうなので杏璃は説明を止めた。

「あ、押し入れの中何か恐ろしいわね」

次は準が襖式の押し入れを開けた。

「あれ、何かな？このたくさんのアタツシユケースは」

押し入れから出てきたのは、サラリーマンが持つような大量のアタツシユケースだった。

「あ、それは……」

浩介が中身の説明をしようとしたが、それは一歩遅かった。

「うわ！！ お、お金が！！」

そこにあっただのは万札がこれでもかと敷き詰められたものだった。

「あの、もしかしてこれ全部が？」

「ああ、全部が金庫に入りきらなくなった僕のお金だ」

すももが恐る恐る浩介に尋ねると浩介は、溜息をつきながら答えた。

「これ1個でいくら入ってるんですか？」

神坂さんも好奇心が働いたのだろうか、自ら墓穴を掘る事を聞いた。

「えっと、確かこれ一つで一千万円で、アタツシユケースは九百個はあったはずだからまとめると……」

「……きゅ、九十九億円!!!!」

浩介からの爆弾発言二つ目が来た。

「あゝ」

「す、すももちゃん!？」

ちなみに倒れたのはすももだった。

「倒れたいのはこつちだ、金庫の中にも入りきらなくなったから困ってるんだ」

浩介がため息交じりで呟いた。

さすがに爆弾発言をさせようとする者は誰もいなかった。

そんなこんなで、浩介の部屋の調査は二人の被害者を出して終わりを告げた……はずだった。

「雄真、お前は残ってくれ」

浩介からそう言われた雄真は、全員が部屋を後にする中、部屋に留まった。

「長くなるから、そこに座って」

浩介は雄真に近くに置いてあったソファアームに座るように言うと、今まで座っていた椅子を回転させて、雄真と向かい合うように座った。

「さて、話だが、この間のクラス試験の事だ」

浩介の言うクラス試験とは、雄真達が受けた試験の事だ。その時、雄真だけは理由も明かされずに拒否されたのだ。

「あの時拒否されたのは、タイム・パラドックスの可能性が高い」
「タイム……何？」

浩介の言葉に雄真が聞き返した。

「タイム・パラドックスだ。何だかの理由で時空が歪んだ物を元に戻そうとして起こる現象の事だ」

「悪い、よく分からない」

雄真は、本気で分からなそうに言った。

さて、これを見ている人も分からないと思うので、解説を一つ。

タイムパラドックスとは先ほど言ったように、何らかの理由で歪んでしまった歪みを元に戻そうとする働きの事だ。

例えば下敷を曲げれば、それが元に戻ろうとするように、時空が曲がってしまった物を治そうとするのだ。

元々時は、全てが『1』ではなくてはいけないのだ。

このおかげで時空の方は安定している。

逆に世界の場合は『0』ではなければいけない。

これは中国の陰陽学で実際に言われていることだ。しかし、時空を故意にいじってしまうとそのバランスは失われ、不安定になる。

それを防ぐために、狂ってしまった時を修正しようという働きが起こる。

これがタイムパラドックス。

例えば、亡くなるはずの人を助けたりすることなどだ。

この場合はその人が亡くなる様に次々と修正が働くのだ。

結局その人は亡くなってしまふ。

このように、タイムパラドックスは非常に恐ろしい存在なのだ。

「と言う事だ」

「なるほど、それで俺の何が矛盾しているんだ？」

浩介からタイムパラドックスの説明を受けた雄真は、分からないのか、浩介に聞いた。

「雄真は、昔神坂さんを助けるために魔法を使った。そして魔法に絶望し雄真は魔法を止めるはずだった」

浩介は雄真の過去について話し始める。

「でも、俺は魔法を使い続けている」

雄真が、浩介の言葉に付け足すように言った。

「そう、なのに雄真は普通科」

「……ッ！！ そう言う事か」

浩介の言った一言がヒントになったのか、雄真は理解した表情にな

った。

「そう。つまり、魔法を使えるのに普通科にいる事が矛盾と言う事だ。もちろん、姓が『小日向』なのも原因だが、それはまだ許容範囲だろうしな」

「まさか、浩介は俺に魔法科に行けと？」

浩介の言葉を聞いた雄真が、浩介にそう疑問を投げかけた。

浩介はその言葉に頷くように答える。

「冗談じゃない！！そんな事のために、重大な問題を決められるわけないだろ！！」

雄真が、大声を上げながら立ち上がった。

「プツあはははははは」

しかし、それを見た浩介は突然笑い出す。

「何がおかしい！！」

「だってな、まさか雄真からそんな言葉を聞けるとは思わなかったからな。だけど、分からないのならはつきりというしかないな」

浩介は、そう言いながら立ち上がる。

「……………！！」

雄真は、浩介の表情を見て悟った。

浩介の顔はすでに魔法使いの顔となっていた。

「断言しよう。このままなら、雄真は魔法使いとして生きていくことは出来ない!!」

「……っ!!」

浩介の言葉に雄真が唇を噛みしめた。まるで、悔しさを隠すように。

「いい加減に目を覚ませ!!」

浩介の言葉に雄真は力なく座った。

「今が決断の時だ。決めるがいい」

そして、浩介は雄真に再び同じ事を問いかけた。

「俺……は……」

雄真の心は揺れていた。

魔法科に行く事は、準たちと馬鹿騒ぎが出来ないことを意味している。

しかし、普通科に留まれば浩介の言うとおりに、時の阻害を受けるだろう。

そして、魔法科に行けば、春姫達と一緒に授業を受けられる。

どちらもプラスがあればマイナスがある。

それを今決めるのは不可能に近かった。

浩介はその事を十分に理解していた。

「まあ、答えは急がなくてもいい。どうして普通科に留まるのか、それを考えていればおのずと道は見えるんじゃないのか？ま、答えが出たら教えてくれ」

浩介の言葉を聞くと、雄真は項垂れるようにして部屋を出て行った。

『言いすぎではないですか？マスター』

そんな時に、クリエイトからきつい一言を言われる。

「でもな、あそこまで言わないと気付かないと思うぞ？」

『そもそも雄真さんがクラス試験を受けられ無かったのは、数年前にマスターが受けさせないように連盟の方に進言したからなのを、忘れてたんですか？』

そして、クリエイトから衝撃の事実が突き付けられた。

そもそも最初に連盟の方に受けさせないようにと指示を出していたのだ。

しかも、浩介がその事を忘れていたのだ。

それでは、誰も気づくはずもない。

「まあクラス試験は違うが、今後何があるかが分からない。まだ神坂と雄真に起こりうる悲劇の“時”を変えきれてないんだ。出来れば、矛盾の要素を少なくしたい」

浩介のその思いに、反論する者は誰もいなかった。

「……………」

一方、その事を知らない雄真は悩んでいた。

「ふう〜。ラジアはどう思う」

『私も浩介さんと同じ意見ですね。魔法を学びたいと思うのであれば、魔法科に行った方がいいと思いますよ』

最後に マスターの意思次第ですが と言って再び静寂が訪れた。自らの意見を押し付けずに、雄真自身の意思で決めさせようとしていたのだ。

（俺の夢は……みんなを幸せにする魔法使いになること。だったら……）

そして、この時雄真の心に一種の決意が出来た。

そしてそれが分かったのは、夏休み明けの2週間前の時だった。

第66話 突撃 部屋訪問（後書き）

次回は久々の閲覧注意報が発令されますので、ご了承ください。

【閲覧注意】 第67話 同期化せし者の密談 (前書き)

今回は終盤のほうで残酷な描写があります。

閲覧される際にはご注意ください。

【閲覧注意】 第67話 同期化せし者の密談

8月5日

何の変哲もない朝。

いつものように浩介達は朝食を食べて、色々な話や魔界の観光をしたりと色々な楽しみがあった。

しかし、それは、浩介のたった一言によってすべてが無くなってしまった。

そう、ほんの些細な一言で。

その力の先にあるもの 第67話「同期化せし者の密談」

「同期化？」

それが、事の発端だった。

「そう、杏璃と一緒にいるにはこの儀式が必要なんだ」

雄真の言葉に、浩介がそう言った。

「ちょっと、待って。それってどういう事よ？」

理解が出来なかったのか、杏璃が浩介に疑問を投げかけた。

「言っておくけど、僕は魔族だ。魔族の特徴ぐらいは分かるよな？」

浩介の問いかけに全員が何も言えなかった。
普通科のメンバーはもちろんだが、魔法科でも伝説程度の存在なのだ。

「魔族の特徴は、普通の魔法使いより高い魔力を持っている事だ。
これによって、高度の魔法を行使が出来るんだ」

浩介は、それが分かっていたのか、説明を始めた。

「そして、魔族の生命源は魔力だ。最悪な場合食事を取らなくても魔力さえあれば暮らす事が出来るくらいだね。でも、ここで問題が発生する、それは何だと思う？」

「魔力の消費量……ですか？」

浩介の問いかけに春姫が答えた。

「御名答。魔族は魔力を使って生きている。つまり、行動するには無意識にしろ魔力が必要になる。だからこそ魔族は肉体的に頑丈で機動性がいいたがね」

浩介の説明に全員が頷いた。

浩介の身体能力は、非常に高くそれが全て強化されている物だとすれば納得がいったのだろう。

「次の特徴は、再生能力だ。軽い怪我なら体の方で勝手に再生してくれるんだ」

「それって、何となくだけど、嫌だな」

雄真が苦笑いしながら言った。

「まあ、便利な物だぞ。そして、最後の特徴が人間よりも長い寿命だ。魔族なら平均で1000年ぐらいは生きるらしい」

「「せ、千年!?!」「」

浩介の言葉に全員が驚きの声を上げる。

「さて、勘の良い奴なら僕の言った事の特徴が分かるはずだよな」

浩介の言葉に全員が考え込んだ。

「もしかして……寿命ですか?」

そして、答えを導き出した春姫が、浩介にその答えを言った。

「その通り。僕の寿命と杏璃の寿命は全く合わない。そのままなら杏璃が先にいなくなる事になる。それだけじゃなく杏璃は大人になつて行くが、僕の姿はこのままでそんなには変わらないだろうな」

浩介の言葉に全員が気付いた。

元来から人の何倍もの寿命を持つ魔族は人間とは生活できないと言われている。

その理由が、寿命なのだ。

人の寿命は個人差はあるが1000年とされている。

しかし魔族の寿命は、1000年から1500年なのだ。

つまり、このままでは杏璃は浩介と離れ離れになることは間違いがない。

「そこで、出てくるのが同期化だという事だ」

「どづいう事だ?」

雄真が浩介の言葉の意味が分からないのか、先を促すように聞いた。

「同期化をすれば、杏璃は僕と同じように長く生きる事が出来る。何せ、同期化って言うのは術者の状態にさせるものだからな」

浩介の言葉に全員が言葉を失った。

「つまり、浩介はあたしに魔族になれと？」

「まあ、大ざっぱに言うんならそうなるな」

杏璃が顔をひきつらせながら浩介に言った。

そんな杏璃にお構いなく浩介はサラッと答える。

「だったら、浩介があたしに同期化すればいいんじゃないよ!！」

杏璃が浩介に反論した。

確かに杏璃の意見も一理ある。

「でも、僕が杏璃に同期化したら僕の体内にある闇は、一体どこに行くんだろっかね?それにそんなことしたら、僕自身がそれに耐えられないとは考えられないし」

しかし、浩介は杏璃の意見に反論した。

つまり残された道は杏璃が同期化することしかないのだ。

「……あのさ、同期化って言うのをしたら後遺症とか出るのか?」

すると、今まで珍しく静かに聞いていたハチが口を開いた。

「いや、後遺症と言っても同期化のために眠くなったり、寿命が僕と同じになったりとか後は魔族の特徴である赤い瞳になったりくだいな。赤い瞳だって“意識をすれば”赤くなるくらいだからあまり変わらないな」

浩介の疑問に浩介が真剣な表情で答えた。

「それで、杏璃は賛成なのか？それとも……」

すると、浩介は杏璃の方向に直るとそう尋ねた。

浩介の本心は同期化して貰いたいだろうが、それを決して口には出さない。

「分かったわ。それが、浩介の”決意”だったら、あたしはそれについて行くわ」

「……杏璃ちゃん」

杏璃の決意に春姫が驚きながらも名前を口にした。

「それじゃ、僕の前に立つてくれるか？ 後は僕がやるから」

杏璃は浩介に言われたとおりに、浩介の前に立った。

「闇夜に苛まれし宿命の時よ。我が高月浩介の名の元かの者を我に同期化せよ。しからは我は願おう、永劫なる絆とその力を！！」

浩介の言葉と同時に、杏璃が魔法陣に囲まれた。

「杏璃ちゃん！？」

春姫が慌てて駆け寄ろうとするが、それは目に見えない結界で防がれた。

そして、杏璃を囲んでいた魔法陣はしばらくすると、まるで嘘のように消えた。

そして、それと同時に杏璃が崩れるように倒れた。

「柎!!」

雄真達が慌てて駆け寄るが、浩介によって倒れる前に支えられたので、杏璃の体が地面にたたきつけられる事はなかった。

「悪い、ちよつと部屋に運ぶから神坂さんも手伝ってくれるか？」

浩介は春姫にそう言うと、杏璃を抱えながらリビングを後にした。その夜だった。

「う……ん？」

杏璃は自室で目が覚めた。

真夜中だったため、彼女は寝なおそうとしたがどうにも寝付けなかった。

「散歩にでも行こうかな」

いつもなら思いつかないであろう行動を思いつくと、ジャケットを羽織って誰も起こさないように、静かに階段を下りて行った。

「ふう〜。やっぱり空気がおいしいわね〜」

杏璃は表に出ると、思いつき深呼吸をしながらそう言った。
魔界は人間界ほどに工業の発展をしていない。
いや、していたとしても自然を守るうとするだろう。

「あれ？」

しばらく歩いてみると杏璃は首を傾げた。
そこは、昼間は壁だった場所のはずだ。
だが、今は道が出来ているのだ。

「行ってみようかな」

いつもなら引き返す杏璃も、好奇心の方が勝ったのか道に入ってしまった。

(誰かいる!!)

しばらく歩くと、人の姿が見えたのだ。
暗くてよく見えなかったが、誰かが佇んでいた。

杏璃の本能が逃げると告げていた。
今回ばかりは本能の方が勝ったのか、ゆっくりと後ずさりを始めた。

だが、ここで杏璃に予想だにしない事態が起こった。

パキ!!

(……ッ!)

杏璃は地面に落ちていた、木の枝を踏みつけてしまった。

そしてこれがまたいい音を出したのだ。

「…………ツ!? 誰だ!!! そこにいる者は」

もちろん人影の方も気づいたのか、杏璃に向かって声を放つ。

(あれ?この声…………)

しかし、杏璃にはこの声に聞き覚えがあった。

「そこにいるのは分かってるんだ」

しかし、それを考えていたのもつかの間、影が杏璃の前にまで迫ってきていたのだ。

だが運のいい事に、雲に隠れていた月がひょっこりと姿を現した。それと同時に月明かりが人影に降り注ぐ。

「こ、浩介!? 何をやってるのよ!!!」

「それはこつちのセリフだ、杏璃。こんな所で何をしてるんだ?」

人影は浩介だった。

杏璃が驚いたように浩介に問いただすと、浩介の方も杏璃を問いただした。

「全く、『秘密の花園』に辿り着かれたのは今のが初めてだぞ」

浩介は杏璃から事情を聞くと、ため息をつきながら言った。

「秘密の花園?」

「ああ、僕が秘密で育てている植物がある場所さ…………付いてきな」

杏璃の疑問に浩介はそう答えながら、付いてくるように促した。杏璃も浩介の後に続いて歩き出す。

「ここはね、今まで誰も入れた事はなかったんだ」
「そう」

そして、浩介がさっきまで座っていた所に座りながら、そう説明した。

杏璃も浩介の横に座る。

「時たま寝付けなくなる事があるんだ。そんな時はここに来るんだ。こうやって植物を見ているのも案外良い物だぞ」

浩介は苦笑いをしながらそう言った。

「ねえ、浩介」
「ん？どうした、杏璃」

そこで、ふと今まで気にしていた事を思い出した杏璃は、浩介に聞く事にした。

「どうして、浩介は人を信用できなくなったの？」
「……っ！」

杏璃の疑問に浩介が息をのんだ。
それは絶対に聞いてはならないタブーなのだ。

「なんで、そんな事を」
「何て言ったらいいかわからないけど、少し前までは人と関わるこ

とを、拒絶していたように見えたのよ。だから……」

浩介の声色が変わった事を杏璃は感じて、何とかしようと言葉を選びながら理由を言った。

「分かった。話しても良いけど、その後の事は責任は持たないからな」

浩介はそう言うと、過去について話し始めた。

「僕は、魔法学校に通っているときは、成績は常にトップだった。もちろん親友もいた」

「いきなり、自慢話？」

浩介の最初の話から、杏璃は苦笑いを浮かべながら言った。

「違うよ。そんなある日な、学校に登校するなり数十人の学生に囲まれたんだよ」

「どうして？」

浩介の言葉に杏璃は、疑問に感じた事をぶつけた。

「さあな。まあ所謂いじめというものだ。その中にな……いたんだ」

浩介はそこまで言うと、表情に陰りが出た。

杏璃はあえて何も言わずに、浩介が続きを話すまで静かに待った。

「僕の親友が。信頼していた奴が」

「……っ！！」

浩介の言葉に、杏璃が息を呑んだ。

それは浩介の事を裏切ったのだと言うことぐらい、杏璃にはすぐに分かった。

「でね、皆が僕にこういったのさ。『お前化け物のくせに調子に乗ってないか?』とか『成績が優秀だからって、えばるな!!』この化け物が!!』とかね」

「……………ひどい!!」

浩介の言葉を聞いて、杏璃が怒りながら言った。

「ありがとう。そう言ってくれる人がいるだけでも幸せだよ。それでね、その後リーダー格の奴がこう言ったんだ。『のこぎりとチエーンソーを持ってこい』てね」

「まさか!!」

杏璃は浩介の言葉に、考えたくもない事を考えてしまった。

「そのまさかだ。僕はそいつらに両腕を切り落とされた」

「……………!!」

浩介の言った言葉に杏璃は息を呑んだ。

すると、おもむろに來ていた服の袖をまくった。

「これが、その時の傷跡だ」

「……………!!」

それを見た瞬間、杏璃はあまりの悲惨さに目をそらした。

浩介の腕の根元には古傷が、痛々しく残されていた。それが、斬った時の傷だと分かるのに難しくはなかった。

「まあ、そんな事で僕は人を信じることは出来なくなったという事」

浩介は、悲し気な表情をしている杏璃に少しでも笑わせようと明るく言った。

「その人たちは、その後どうなったの？」

「……死んだよ」

杏璃の問いかけに、浩介の冷たいような声が返ってきた。

「え？」

杏璃はあまりの言葉に理解が出来なかったようだ。

「僕の腕を切り落としたと同時に自らの腕も切られて……な」
「……」

浩介の言葉に杏璃は何も言う事が出来なかった。

「そつだ、あと少しですごい物が見れるぞ」

「何よ……すごい物って」

杏璃はわけが分からずにそう聞き返した時だった。

「うわ〜」

杏璃が感嘆の声を漏らした。

突然目の前に広がっていた草木が、光り出したのだ。まるで、草木が彼女たちを祝福しているかのように。

「毎晩午前2時になるとここの植物が光り出すんだ」

それは、町でよく見かけるライトアップと同じような美しさだった。

「さあ、杏璃は自分の部屋に戻って寝な」

「浩介は？」

浩介の言葉に杏璃が聞いた。

「僕はもうしばらくここにいます」

杏璃は浩介の言葉を聞くと、出口に向かって歩き出した。

「杏璃」

「何よ？浩介」

すると、浩介が突然杏璃を呼びとめた。

「ん！？」

杏璃は突然の事に理解が出来なくなった。

浩介はいきなり杏璃にキスをしたのだ。

「例え杏璃が魔族になっても、杏璃は杏璃。それだけは忘れない事」

浩介はそう言うと、さっきまで座っていた所に腰掛けた。

(何なのよ……もう)

杏璃はそんな浩介に苦笑いを浮かべながら今度こそはと、秘密の花園を後にした。

その翌日、杏璃の瞳は魔族の証である“赤”になっていた。

I n t r o d u c e 『裏切られし過去』

「全く、なんで変な所だけに疑問を持つのかな」

誰もいなくなつた花園で浩介はぽつりとつぶやいた。

普段なら絶対に思い出したくない過去だった。

だからこそ、浩介は過去の事を思い出したのだ。

あの日の事を。

『おはよう………』

魔法学校に登校するや否や、いきなり浩介は数十人のクラスメイト

に囲まれた。

浩介は何が起こったのかが分からずに固まっていた。すると、一人の男子生徒が浩介の前に立った。

それは、いつも浩介の事を詰っていた者だった

『お前さあ、何度言ったらわかるんだ？ここにはお前は来てはいけねえんだよ！！』

そして浩介に浴びせられる暴言。

『一体何人、人を殺したんだ？この殺人鬼！！』

『きゃー助けて〜、殺される〜』

『お前なんて死んでしまえばいいんだ！！』

『お前は前から気に入らなかつたんだ！！』

『成績がいいからつてえばるな化け物め！！』

『そつだ、この化け物め！！』

そんな暴言にも、浩介は必死に耐えていた。

『おい、みんな。この殺人鬼を俺達の手で殺してしまおうぜ！！』

そして、男子生徒の一人がそう言いだすと、他の物たちも賛同の声を上げる。

『それはいいな。そうすれば俺達は国民名誉賞を取れるぜ！！』

『お〜い。のこぎりとチェーンソー持って来たぜ！！』

『よし、それでお前はのこぎりでこいつの腕を、俺はチェーンソーでこいつの首をもぎ取るぜ！！』

『ほらほら、死になよ！！』

『あははは！！！！』

浩介は両腕両足だけではなく、首までも切られようとしていた。だからこそ、彼の闇の力が解き放たれたのかもしれない。

『ガハ！！』

浩介の腕が切り落とされたのと同時に彼の近くにいた者の両腕が一瞬で切り落とされた。

浩介はそのおかげで助かった。

そして、両腕が切り落とされた生徒達はすぐに病院送りになり、そして……死んだ。

死因は出血死ではなく不明というものだった。

それは、浩介の使う“呪い”であった。

当時の浩介は、呪いの力を現在ののようにコントロールする事が出来ていなかったため、ちよつとした衝撃ですぐに発動する。

それもいじめられる原因になった。

もちろん浩介は殺されかけたのだ。

これは立派な正当防衛で浩介には何のおとがめも無かった。

そして、浩介を殺そうとしていた生徒達や、ギャラリ は書類送検された。

それから浩介は学校を辞めた。

それから、浩介は誰とも友人になろうとはしなかった。

浩介は心を閉ざしたのだ。

（友人なんて、何かあればすぐに離れていく、裏切り者の塊だ）

それが、浩介の考えていた事。

それを変えた人物がいた。

（雄真達に会って、僕は人を信じようと思えるようになった）

浩介は心の中で感謝の言葉を述べると、目の前の植物を見ていたのだった。

I n t r o d u c e 『裏切られし過去』 E n d

第68話 生みの親と育ての親（前書き）

今回はものすごく長いです。

第68話 生みの親と育ての親

8月14日

その日雄真達は、浩介と一緒に魔界の散策をしていた。魔界は雄真達の世界と一緒に市場や、いろんなお店があった。そんなことをしているうちに、お昼の時間になった。

その力の先にあるもの 第68話「生みの親と育ての親」

「浩介、あそこのカフェテリアはどうだ？」

雄真達は「たまには社会勉強を」と言う絢音の提案で、お昼のお弁当は持ってきていないのだ。

なので、雄真達は飲食店を探していたのだが、運のいいことにちょうどいいカフェテリアがあったので、雄真は浩介に聞いてみたのだ。

「どこなんだ？そのカフェテリアは」

浩介はため息をつきながら答えた。

「あそこだよ」

「どれどれ……！！」

浩介は雄真が示したカフェテリアを見ると、驚いた表情をした。そのお店の名前は、カフェテリア『ムーントラフト』という名前だ

った。

「どうした？浩介」

「いや、なんでもない。あそこはやめておけ」

雄真は浩介に聞くと、浩介は目を伏せながら言った。

「なんでだよ」

「あそこは料理がまずい」

浩介に理由を聞いて、返ってきた言葉はそれだった。

「そんなのは行ってみないとわからないけどな」

久美は浩介に反対意見を出した。

すると、浩介は目を開けると久美を睨みつけた。

「行きたいんならあんた達だけでいけばいい！！僕はあの店は御免だ」

浩介はそういうと、すたすたとどこかに歩いて行った。

「何なのよ、あれは」

今まで黙っていた杏璃が突然文句を言い出した。

「でも、何も理由がないのに怒鳴るなんて初めてだよな？」

八子が驚いたように言った。

確かに浩介が怒ったり怒鳴ったりするときには、少なからず理由が

あつた。

しかし今回は理由もなく怒鳴つたのだ。

それにここに入りたくない理由として、浩介は料理の味がまずいからと言つた。

しかしそれも嘘だ。

普通はやめておくように言う時に理由を言うものだ。

あその料理はまずいからやめた方がいいと

とくに浩介は理由を聞かれることが分かっていたのだから、先にと行動をするはずだ。

しかし、それが出来なかつた。

それは浩介が嘘を言っているからだと雄真は考えていたのだ。

(マスター、いつそのこと名探偵と名乗つたらどうですか?)

雄真の考えを聞いていたラジアから、そう突つ込まれたが雄真はそれを聞かなかつた事にした。

どちらにしても、浩介がここを嫌う理由は中にあると雄真は踏んだのだ。

「入ってみないか？」

「賛成」

雄真の提案に全員がそう答えたので、雄真達はカフェテリアに入ることにした。

扉を開けると、鈴の心地良い音がした。

そして中は木製のためか、外装と同じ茶色だった。

店内は広く、数人のお客さんがいた。

「いらつしゃいませ」

カウンターにいた女性が、雄真達を迎え入れた。店内にいる従業員はその女性一人だけだった。そして雄真達はカウンター席に着いた。その女性は短く切り揃えられた髪が特徴の人だった。

「ご注文は何ですか？」

女性店員が聞いて来たので、雄真達はそれぞれメニューを開いて注文した。

このカフェテリアは品揃えが良いのが特徴でもあった。デザートだけでなくサンドイッチや、おにぎりとかだが……。ちなみに春姫がショートケーキを頼み、伊吹は栗ようかんを頼んだのはここだけの話だ。

言いふらしたりでもしたら、地面の無いそこに落とされるだろう。

「ふう〜おいしかったです」

雄真達が食べている間に、雄真達が入ってきた時にいたお客さんは出て行ってしまった。

「まあ、ありがとうございます。ここは私だけしか働いているものがないので大変なんですよ」

女性店員は笑顔で雄真達にお礼を言うと、愚痴をこぼすように言った。

「でも、ここの料理はおいしいのになんかどうして浩介は、入りがらなかったんだろう？」

杏璃は疑問に思ったのか首をひねってそう言った。

その瞬間だった。

「え！？ 今、浩介と言いましたか？」

女性店員が突然驚いた顔をして杏璃に聞いたのだ。

「はい。お知り合いですか？」

杏璃は女性店員にそう聞いた。

確かに、知り合いでもおかしくない。

浩介は一度この店に来ているのだから、名前を知っていてもおかしくない。

しかし、女性店員から言われた言葉に、雄真達は固まることになる。

「はい……浩介の母親です」

「……ええ……！！！！」

店内に雄真達の驚愕の音が響いた。

Introduce 『因縁（浩介View）』

「すみません、チーズケーキセットを一つ」

僕は店員に頼むと、窓の外を見た。

(それにしてもあのお店に目を付けるとは何の縁だか)

僕は少し前までの雄真達を思い返していた。

雄真は何とムーントラフトに目をつけてしまったのだ。

あの店が嫌い？

いや、あそこの料理はおいしかった。

ならなぜか？

それはあそこのマスターだ。

僕はため息をつくとき届いたチーズケーキセットを食べるのだった。

Introduce 『因縁(浩介View)』 End

「改めてご紹介させていただきませぬ。ここのお店のマスターでもあり浩介の生みの母親でもある、東伊彩香です」

雄真達が驚いているのをよそに、彩香はそう名乗った。

「でもどうして、浩介はここに入ることを嫌がっているんですか？」

杏璃は彩香に聞いた。

「その理由はね、昔のことよ。確か今から10年前かしら」

そして、彩香は昔のことを語り始めた。

「昔、宗次郎さんと離婚をして所持金が底をつき始めたころ、彼…
… 浩介が目の前に現れたんです」

「つまり、そこで親子のご対面ということか」

伊吹が簡単にそう言うと、彩香は話を続けた。

「ええ。そして、浩介にはいろいろと面倒をもらいました。こ
このお店を紹介していただいたり、メニューを考えて貰ったり…」

「それじゃその時に、母親だとわかったんですか？」

確かにこの時に母親と分かれば、浩介は嫌がってここに入らないはずだ。

「いいえ。しかし私が実の母親だということを、浩介は気づいてい
たのかもしれない」

彩香は浩介の生みの親だという事を浩介が知っていたかもしれない
というのだ。

「浩介は開店祝いでここに来たんです。その時浩介は私にこう聞いて
来たんです。『何か隠していることはありますか？』と」

「それでなんとお返事を？」

それまで静かにサンドウィッチを食べていた小雪さんが彩香に聞い
た。

「『いいえ何もありません』と。すると、浩介は『そうですか』と
言っ出て行ったんです。それっきり……」

彩香は悲しい表情をしてそう言った。
つまり浩介は、ウソを突かれたことが、ショックだったのかもしれない。

雄真達がそんなことを思っているときだった。
突然入店を知らせる、ドアのベルが鳴ったのだ。

「いらっしゃ……」

そして、彩香は入ってきた人物を見て固まった。
俺達はドアの方を見た。

「雄真、遅いぞ。いったいどれぐらい待たせるんだ？」

そこにいたのは浩介だった。

「こ、浩介も何か頼んだら？冷やかしいはいけないと思うけど……」

杏璃は何とか場を和ませようと必死に浩介に言った。

「杏璃の頼みなら」

そう言うと、浩介は雄真の隣に座った。

「マスター、チーズケーキセットを一つ。飲み物は　ミルク入り
コーヒーですね？　……それでいい」

浩介はメニューを見ずに、冷酷な感じで彩香に注文した。
その光景に雄真達は一言もしゃべられなかった。
それだけ、浩介から出る威圧感がすごかったのだ。

「どうぞ、チーズケーキセットです」

「いただきます」

浩介は彩香が出したチーズケーキを黙々と食べ始めた。

「浩介、味はどうだ？」

どうにかして、雄真は浩介に聞くことが出来た。

「全く変わらないな昔と」

浩介は目を閉じたままそう言うと、再び黙々と食べ始めたのだった。

それから数分が経過した。

「マスター。全員分のおあいそをお願いします」

「1500円です」

「お釣りはいらぬ」

浩介は2000円を出してそういうと、スタスタと外に出て行った。

「それでは、俺達も失礼します」

「いいえ、ありがとうございます」

そして雄真達も浩介のあとを追った。

「浩介、あのお店の東伊さんのことなんだが……」

雄真は前をスタスタと無言で歩いている浩介に、さっきのことを聞いてみようとした。

「母さんなんだろう？ 僕の」

浩介はどうやら雄真達が予想した通りに、知っていたみたいだ。

「どうして、あそこまで毛嫌いしているのよ」

杏璃も疑問に思っていた事を聞いた。

「それをみんなに話す権利はない」

「でも それ以上あのお店の話をするのなら容赦はしない！！」

「

浩介の答えに、さらに聞き出そうとした杏璃の言葉を遮り、浩介は最後にそう言うのと再び黙ってしまった。

結局雄真達はあのお店の話題を出すことはなかった。

Introduce 『拒まれた言葉（浩介View）』

あれは今から約10年前の事だった。

僕はいつもどおりに町を歩いていると、女性がよろめきながら歩いているのが見えた。

「すみません」

「はい？」

僕はその人を呼びとめた。

その女性の顔を見て、僕はすぐに母さんだとわかった。
彼女は気づいているのだろうか？

「ここ最近なにかお食べになりましたか？」

「いいえ、ここ3日は」

僕はその女性をとりあえず飲食店に連れていくと、食事をする
ことにした。

そして、その足で僕は近くにあった。

テナント店のところに行き、管理人と話し合いをして、かなり高
かったが土地を譲渡してもらった。

「ここで何かお店でも開くといい。何か得意なことってないん
ですか？」

「実は私は前から料理を作るのが得意なんです」

元母さんは昔から変わっていないかった。

元母さんは料理が得意だったのだ。

とくにチーズケーキがとてもおいしかったためか、僕はつい大
好物になったのだ。

「そうですねそれなら、カフェテリア『ムーントラフト』でどう
でしょう？」

そして、僕は飲食店の名前を付けたのだ。

別にこの名前に意味などはなかった。

ただいつも月と共にある、という意味で『ムーン』を使ったのだ。

「いいと思います」

こうして、僕は彼女のお店の経営を始める手伝いをしたのだ。

手付金としていくらかをこのお店に入れたり、メニューを考えたりカウンター席を広く作り、テーブル席を設けたりとしばらくは大忙しだった。

それからしばらくして、僕はムーントラフトを訪ねた。

それは開店してから3日後のことであった。

お客さんはピーク時以外は数人程度だが、ピークになると満員になるらしい。

そして僕が訪ねた時はお客さんが誰もいなかった。

「あら浩介さん、いらっしやいませ。またいつものですか？」

「ええ」

僕はそういうとカウンターの席に着いた。

店内では心地よいBGMが流れている。

「どうぞチーズケーキセットです。飲み物はミルク入りコヒです」

僕は相変わらずチーズケーキが大好物だった。

しかし今日はこれを食べに来ただけではない。

「マスター。あなたは僕に、何かを隠してはいませんか？」

僕はマスターに聞いた。

それは言い代えれば、『あなたは僕の母さんだということを隠しているんですか?』ということになる。

「いいえ、何も隠していませんよ」

しかしマスターこと、元母さんは表情を変えずにそう言った。

僕はこの質問の意図が分かっているにも関わらずに、嘘を付かれたことにシヨックを抱いた。

僕はそのあとお会計を済ませて家に帰った。

それからずっと僕はあのお店にはいかなかった。

(まさか今になって、この問題に直面するとは……)

僕は今自室でそのことを思い出してはそう思うのだった。

d I n t r o d u c e 『拒まれた言葉(浩介View)』 E n

8月15日

今日は浩介が急用でいないため、雄真達は久美と一緒にカフェテリア、ムーントラフトに向かった。

行く理由というのはもちろん、浩介のことだ。

このまま膠着状態を続けるわけにはいかない、という雄真達の思いから出た行動だった。

「あれ？ おかしいわね、もうとっくに営業しているはずなのに……」

久美がドアの前で首をかしげていた。

確かに、看板には『年末年始以外営業。開店時間：朝10時から夜の10時まで』と書いてあった。

今の時間は11時。

それなのにドアのフレームには『CLOSE』となっていた。

「中に入ってみよう」

雄真はそう言うのだめ元で、ドアを開けようとした。しかし、ドアは開いた。

「小日向雄真、早く入らぬか!？」

伊吹の叱責を受けながら雄真達は中に入った。

「誰もいないね」

雄真の隣にいた春姫がそうつぶやいた。

「みんなちよつと黙って」

しかし雄真はどこからともなく聞こえる、うめき声の場所を聞きとるために、黙るように言った。

そして、そのうめき声はカウンター内から聞こえた。

雄真達は横からカウンター内を見てみた。

そこには人が横たわっていた。

その人はこのお店のオーナーである彩香だった。

「東伊さん!!」

雄真達は急いでカウンター内に向かうと、彩香のところに向かった。

彼女にはまだ息はあるみたのだが、病院に運ばないといけないと判断した雄真は、久美に指示を出した。

「久美、救急車を呼んで!!」

「わ、わかつたわ!!」

久美はすぐに携帯で救急車を呼び始めた。

雄真は携帯で浩介の携帯に電話を掛けた。

しかし、いくら掛けてもつながらなかった。

「浩介は出ないのか!？」

八チが焦っている表情で雄真に聞いて来た。

それに雄真は首を縦に振って答えた。

その後に来た救急車に雄真達は乗車すると、病院に向かった。

そして、雄真達は診察室の前にある待合室で、診察が終わるのを待っていた。

すると前のドアが開き、医者が出てきた。

「すみません。東伊さんは!?!」

雄真は医者に彩香の容体を聞いた。

「東伊さんは、末期の肺がんです。もうすでに体中のあちこちに転移しています。持って明日まででしょう」

医者はそういって歩いて行った。

「そんな……」

雄真達は力なくイスに座り込んだ。

しかし雄真にはすることが一つあった。

「雄真、浩介に早く電話しないと」

そう、浩介にこの事を伝える事だ。

雄真は急いで公衆電話から、浩介の携帯に電話した。

『もしもし』

どうやら繋がったようだ。

「浩介か、大変なんだ!!」

『どうした雄真!! 事件か!!』

浩介が慌てたように聞いて来た。

「東伊さんが倒れたんだ！！ 医者の話だと末期の肺がんを持って明日までらしい。すぐに総合病院まで来てくれ！！！」

雄真は浩介に用件を伝えた。

浩介はしばらく黙ると結論を話した。

『僕は行かないよ』

「浩介！！」

『勝手に死ねばいい。あんな奴、僕の母さんではない！！！！』

そして、浩介は一方的に電話を切った。

「浩介何だった？」

杏璃が不安げに雄真に聞いた。

「行きたくないって」

雄真がそう言ったとたん杏璃たちが落胆した。

このままでは、浩介と彩香は仲直りしないまま一生会えなくなってしまう。

雄真達は気を取り直すと、彩香の病室に向かった。

「失礼します」

そこにはベットに横になっている彩香がいた。

「あなたが救急車を呼んでくださっただんですね。ありがとうございます」

います」

彩香は雄真達にお礼を言った。

「浩介に電話したんですけど、来たくないと言われました」

「そう、ですか……絢音とは昔からの親友でしたので、いろいろと様子とかは聞けたんですけど……」

彩香はそう言うと俯いてしまった。

その時、雄真は考えていた。

浩介と雄真とは、家庭の環境がよく似ている。

生みの親と育ての親に義理の妹、そしてそれぞれの親が親友であること。

しかし、どこかで捻じれてしまっているのだ。

それはおそらく浩介が、最初から気づいていたこと。

しかし相手には嘘を突かれた。

それによって浩介は、とてつもないショックを受けたと思う。

もし雄真がそんなことをされたら、浩介と同じことをした可能性もあった。

だからこそ雄真達には、浩介が来ることを祈るしかなかった。

Introduce 『せめぎ合つ心（浩介View）』

「浩介、いつまで彼女のことを避けているつもりだ」

連盟に行つたはずの父さんが、家に戻ってきて僕を庭に呼び出した

のだ。

「避ける？なぜだ？ 僕はあいつが謝るまでは許さない」

「現に避けているだろ！！ いい加減にしてくれ。どれだけ父さんを困らせれば気が済むんだ！！」

「困らせる？ ふざけんなよ。困ってるのはこっちだ！！ 勝手に人を封印したら自分はこのこと別の女と結婚して、今度は僕までも殺そうとした父さんにそんなことを言う権利はない！！」

僕は数十年ためていた怒りが突然とわき出した。

ピピピピピ。

父さんとの間に沈黙が出来ていた空間に、僕の携帯の着信音が鳴り響いた。

「もしもし」

僕は電話に出た。

『浩介か、大変なんだ！！』

すると、電話口から慌てたような雄真の声が聞こえた。

「どうした雄真！！ 事件か！！」

僕は雄真に聞いた。

『東伊さんが倒れたんだ！！ 医者の話だと末期の肺がんで持って明

日までらしい。すぐに総合病院まで来てくれ!!!」

僕は驚いた。

とうとうあいつに制裁の時が訪れたのだ。

「僕は行かないよ」

『浩介!!!』

僕は雄真にそう伝えた。

「勝手に死ねばいいあんな奴、僕の母さんではない!!!」

僕はそれを言うと電話を切った。

「父さん。あの人が末期がんならしい」

「何だと!!! 浩介は……いかないよな」

父さんは驚いて僕も一緒に行くかと言おうとしたが、僕が行かないことはもう分っているようだった。そして、父さんは走って行った。

「フフフ……ついに制裁の時が訪れた。僕を放置して、ウソをついた罰。特と受けるがいい!!!」

待ちに待った制裁の日なのに、どうして僕の心はこんなにも痛むのだろう。

まるでこの結末を望んでいないような……。

(望んでいない?そんなバカな。僕はこれを望んでいるのだ!!!)

しかし、一度出た考えは頭から消えることもなかった。

(僕の本心は元母さんと仲直りをする事なのか?)

そして、集中して考えた結果に出たのがそれだった。

もう考えは決まった。

僕は総合病院に向かった。

Introduce 『せめぎ合つ心(浩介View)』 End

「そつですか……」

しばらく経つと、宗次郎が病室を訪れた。

しかし浩介は行かないとの一点張りだという。

「あれ、何の音かしら?」

雄真が考えていると、廊下から誰かが走ってくる音が聞こえてきた。

そして、その音はこの病室の前で止まった。

「誰かが、きたのかしら?」

そして、ドアが開いた。

ドアの前にいた人物に俺達は驚いた。

「「浩介!!」」
「……………」

浩介は黙ったまま、彩香の横に立った。

「死んで逃げる気か？でも絶対に逃がさない。貴様はその罪を生き
て償うんだ」

「浩介……………」

それは雄真達が聞いたかった言葉とは少しだけ違った物だった。
だがこの言葉を言うのに、浩介はかなり悩んでいたのだろう。

「しかし浩介、病気はどうするんだ!？」

宗次郎は浩介にそう言った。

確かに病気を完全に治す魔法なんてものはない。

そんなものを使うものなら、最高のレベルの魔法を使うしかない

(最高レベルの治癒魔法？ まさか!?)

雄真は一瞬で、浩介のしようとしている事が理解できた。

「そんなの問題はない」

「浩介、もしかして使う気か!？」

雄真は確認を含めて浩介に聞いた。

「おや、雄真は知っているみたいだな」

雄真の予感は的中したみたいだった。

「雄真君。いったい何を使おうとしているの？」

春姫が慌てたように聞いて来た。

「浩介は『スタークスター』を使う気だ」

「スタークスター!？」

もちろん全員がこのことを知るはずもない。

「スタークスターは、どのような病気や怪我でも治してしまう強大な力だ。僕はこの力を使って、彼女のがんの病原体を消し去る。」

「使えるのは魔王だけ……だよな？」

雄真が浩介の話に続くように言った。

「「浩介が、魔王!？」」

普通科の面子から驚愕の声が上がった。

そう言えば、ハチや準たちは浩介が魔王として覚醒した時は気絶していたんだっけ。

「その通りこの僕が、魔王だ」

「そ、それじゃあ、世界を乗っ取るんですか!？」

すももはやっぱり普通の反応をした。

「そんなことはできるはずもない。魔王は意思の塊だ。悪いが、僕

は世界を滅ぼすのにこの力は、理由がない限り使わない」

浩介は笑いながら言った。

雄真達魔法科のメンバーは、八子たちに魔王について軽く説明した。

「なるほど。でも、浩介なら大丈夫なんじゃないのか？」

「どこからそんな根拠が出てくるんだ？八子」

雄真はいきなり変なことを言いだした八子にそう言った。

「いや、だってよう。魔王だぜ？絶対に死なねえよ」

(なんの自信だそれ……)

雄真は内心でそう突っ込んだ。

「さて、無駄話はこれぐらいにしよう。みんな絶対に僕には近づかないで」

浩介がマントを着込んだ次の瞬間、浩介からものすごい威圧感が放たれていた。

これが浩介の真の力。

「あれは高月家の式服」

宗次郎が驚いたように言った。

そして浩介は目を閉じて集中した。

その瞬間浩介の体が光ったと思うと、背中に黒い羽が生え、髪の毛が銀髪になった。

「すげえ」

「これが、魔王」

準たちから驚きの声上がる。

そして、浩介が彩香の顔の前に手をかざした。

「全ての命を司りし星達よ。かの者の病気を治したまえ。我高月浩介こと、魔王の名の元に命ず！！輝け、スタークラスター！！」

浩介の足元に魔法陣が描かれた。

そして、浩介の周りに流れ星のような流星が浮かび上がる。

「きれい……これが魔王の力なの？」

しばらくすると流星は止んだ。

「浩介！！」

「後はしばらく経てば治る」

浩介はそういうと、いすに座った。

「お疲れ様、浩介」

「まっただ」

「浩介はもしかしたら、真の魔王なのかもしれないな」

宗次郎が先ほどの光景を見て、つぶやくように言った。

それは雄真も考えていた。

こうして浩介は、彩香を助けることが出来たのだ。

そして、それから数日が過ぎた。

「マスター、いつもの奴を三つください」

「わかりました」

浩介は週に4日カフェテリアアムントラフトに通うようになった。

浩介もかなりここを気に入っていたようだ。

今では彩香のことを、浩介はたまにだが『母さん』と呼んでいる。

そして、浩介がこの時見せていた万弁の笑顔は、この夏の思い出になるだろう。

第68話 生みの親と育ての親（後書き）

設定が痛い？

はい自分でももう十分に理解しています。

しかしその痛さを見るのもまた（ry

この章も残すところあと2話です。

それでは、これにて失礼します。

第69話 もう一人の許嫁現る！？（前書き）

今回もまた長いです。

そしてめちゃくちゃです。

第69話 もう一人の許嫁現る!?

8月23日

浩介から元の世界に戻る日が告げられた。

戻るのは8月31日らしい。

雄真達は、その日までゆっくりと過ごせると思っていたのだが、そうは問屋が卸さなかった。

全てはこのチャイムから始まった。

ピーンポーン

「は〜い」

掃除中の絢音が、玄関の方に来客者の元に向かった。

雄真達とは言えば手分けして、掃除を手伝っていた。

ちなみに現在雄真達は全員で固まって、リビングの掃除をしていた。

「誰だろう、こんな日に？」

浩介は不思議そうに言った。

「なんかいや〜な予感が」

浩介が突然そんなことを言い出した時だった。

「浩介さ〜ん!〜!」

突然、玄関の方から浩介を呼ぶ声が聞こえた。

その力の先にあるもの 第69話「もう一人の許嫁現る!？」

「あの声は、早苗か!？」

浩介は驚いたように言うと、突然あたりをきよるきよると見始めた。

「浩介、どうしたんだ？」

「隠れなくちゃ!！」

雄真は気になって浩介に聞くと、浩介はそう言って姿を消した。

「どうしてだ？」

「シッ静かに」

雄真の問いかけに浩介は、そう言って身を隠していた。

「あの、すみません」

次の瞬間少女の声が聞こえたので、雄真達は声がした方を見た。そこには茶色の短髪の髪型をしていて、顔立ちも良く細身の少女がいた。

「すみません。浩介さんを見ませんでしたか？」

そして雄真達にその少女はそう尋ねた。

「……いえ、見てません」

「そうですか……」

雄真は背後から感じられるプレッシャーに押されつつ、そう返した。

「はじめまして、高溝八輔です。第1印象から決めてました」

そして、八チは無謀にもまたナンパをした。

準がいつものように、八チを始末しようとした瞬間だった。

「へ、変質者!? di en j u s t i u m ! !」

早苗と呼ばれた少女が、八チに電撃を浴びせた。

ちなみに二つである。

「今の魔力は……浩介さん、そこにいるのは分かりますから、すぐに出てきてください」

浩介の魔力反応を感知した彼女は、辺りを意識して見回す。

ちなみに浩介の方と言えば……

(し、しまったあ!?!? 八チについ、いつものように魔法を!?!)

リビングの天井で酷く後悔していた。

「見つけました……よっと!?!」

「え!?!」

雄真達はその光景に驚かざるを得なかった。

一見細身で力の無いような少女が、いきなり天井まで高々とジャンプをして、浩介を捕まえたのだ。

「浩介さん、み〜つつけた　！！」

「そんな事をしたら落ちる　！！」

浩介の言葉もむなしく二人は、地面に向けて落下した。

さて、この後起こることと言えば、少女に浩介が覆いかぶさるとか言うありぎたりな展開。

「よつと……全く危ないじゃないか！！」

一部の期待（？）も空しく浩介は見事床に着地した。もちろん、彼女が落ちないように浮遊魔法をかけて、ゆっくりと下す事も忘れない。

「お久しぶりです。浩介さん」

地面に着地した早苗は、そう言いながら浩介に抱きついた。

「こら！！　抱きつくなくて言うてるだろ！！」

そんな彼女に浩介はそう言うと、彼女を自分から離そうとするがテコのように動かない。

「離れなさい！！　それにしても、あなたは誰？」

杏璃が痺れを切らしたように、早苗に聞いた。

「あ、紹介が遅れました。はじめまして、私は高月早苗さなえです。早苗と呼んでください」

少女は背筋を伸ばして自己紹介をした。

それにならって雄真達も、早苗に自己紹介をする。

「そうなんですか……あ！！言い忘れたんですけど……」

そして早苗はこの後、とんでもないことを言い放つことになった。

「浩介さんの許嫁です」

その言葉が発せられた瞬間、しばらくこの空間が固まった。

「こら、早苗！！いつ、誰が、あんたを許嫁にすると言った！！それにあんたとは許嫁の契約をしていないし、出来るだけの資格もないと前に言っただろ！！」

そしてその空間を打ち抜いたのは浩介だった。

「え〜どうしてよ？」

早苗は頬を膨らませて、浩介に抗議した。

「いいか？ 高月家公認の許嫁になるには、高月家の魔方式を自由自在に使用することが出来ようになる事が絶対条件だ」

「私だって、高月家の魔法を使ってるもん！！」

浩介の言った事に、早苗は反抗する。

「あんたが使っている魔法は古代魔法！！ 高月家のものではない！！」

さらにそれに続いて別の方から、とどめを刺されることにある。

「それに高月家の者同士は結婚することを認めないっていう規則もあるよ」

「それって、どういう事だ？」

若干興味を持ったのか、伊吹が久美に続きを促した。

「うん。なんでも昔高月家を安泰にするために、高月家の人間同士を結婚させたらしいの。でも結婚しても姓は変わらないし、離婚してもそんな状態だからいくら高月家でも、不公平という事になって禁じたの」

久美は伊吹達にそう説明した。

ちなみに今の事が起こったのは250年前とされている。

「ねえ、早苗さん？」

恐ろしいぐらいに万弁の笑みを浮かべた杏璃が、早苗に話しかけた。

「だ、誰ですか？ あなたは」

若干怯えているように、早苗は杏璃に言った。

「あたしは柊杏璃。浩介の許嫁よ！！」

そして、杏璃は「こそとばかりに堂々と宣言した。

「な、なんですって〜!!」

そして、早苗の驚愕の聲がリビング中に響いた。

「杏璃は高月家の魔方式を扱い、高月家の公認での許嫁になった」
「ガーン!!」

浩介のとどめの一言で早苗は完全に固まった。

「それで、二人はどこで知り合ったのよ？」

その後テーブルに雄真達は座ると、浩介と早苗に杏璃が拷問という名の質問会を始めた。

「あれはちょうど100年前のことだ」

そして、浩介が語り始めた。

どうでも良いが、過去のスケールが大きすぎる。

「その日はものすごく寒い冬の日だった。僕はいつもどおりに家に帰ると、門の前に倒れている女の子がいたんだ。門の外に倒れている人を放っておく事が出来なかった僕は、その女の子を家に運んだんだ。その女の子は両親を事故で亡くしたらしくて、行くあてもなく歩いていたところで倒れたんだ」

「それが、早苗さんなわけ？」

杏璃が浩介にそう聞いた。

「そういうこと。それで、身寄りが無いのならいつその事、高月家の人間として育てようと思ったわけだ。まあ、この家ではそういう事もよくあるし」
「どういうだ？」

雄真は思った疑問を、浩介に聞いた。

「高月家では、両親による虐待とか、両親がいない子供を保護したりもするからな」

浩介は雄真の質問に答えた。

ちなみにこれが高月家のもう一つの機能であつたりする。虐待などのために子供が殺されるのを防ぐという理由もある。

高月家は弱い立場の者の声を、親身に聞くからこそかなりの信頼があるのだ。

「それで彼女を高月家の者として育てるとともに、僕は早苗に魔法を教えたんだ。早苗の扱える魔法はデッドサイクロン式だったから、教えるのにかなり苦労したけど」

「デッドサイクロン？」

突然浩介から発せられた言葉に、雄真達は首をかしげた。

「デッドサイクロンというのは古代魔法の総称だ。通常は唱える呪文により内部で、魔法式を間接的に作成させるものがサイクロン式なんだが、デッドサイクロン式は魔法式自体を唱えて、直接作成するんだ。威力や、距離はサイクロン式の方が高いが、デッドサイクロン式はスピードが速い。まあ、支援組に分類されるがな。僕と久美はブレンド式だ。ブレンド式とは、魔族が扱える方式で、一番厄

介な者なんだ」

「どうして厄介なんだ」

浩介の言葉に疑問を持った雄真は、浩介に聞いた。

「なんでかって？それは常に魔法の呪文が異なるからだよ。たとえば雄真はアダファルスという呪文が定着しているが、僕達の場合はその呪文がいろいろと変わったりするんだ。だから魔方式を作る前に、自身の魔力探知の式を発動させて、体内の魔力性質から呪文を作成するんだ」

浩介はいろいろと説明したが、ほとんどの人にはわかっていないみたいだった。

わかりやすく説明するとデッドサイクロン式と言うのは魔方式自体を唱える魔法の事だ。

そのため、魔法式を作成して魔力を通すという工程が一つにまとめられるので、発動時間が速くなる。

ただし射程距離や威力が他の方式と比べて、劣るのが難点なのだ。その事から主に支援として分類される。

次にサイクロン式だが、これが雄真達が使っているものだ。

間接的に作られた魔法呪文を唱え、魔法式を作成して魔力を通すという工程で、魔法を放つ事が出来る。

そのため発動時間はやや遅くなる。

ただ、射程距離や威力は一般的な物なので、オールマイティーな戦術で使える。

最後が浩介達の使う、ブレンド式だ。

これは魔方式自体を直接唱えるところはデッドサイクロンと同じだが、唱えるのと同時に魔力を通すため、発動時間は最速となる。問題点とすれば呪文が毎回異なる事だ。

そのためまずは魔力の性質を確認してから、呪文を詠唱するようにしなければいけない。

ただ、そのおかげか干渉系の魔法に対する耐性は、非常に高い。
閑話休題。

「だから、早苗の使っている魔法は、古代魔法で高月家ではない。
一応魔族なんだがな」

浩介は補足するように説明した。

「それで今は、分家の方に受け渡したわけだ」

浩介の説明はそこで終わった。

「それで、結局僕は明日の明美のこの町を観光するガイド兼警護をしろというわけか」

あの後、浩介が宗次郎に電話をして話を聞いた結果、『二日後に早苗の家族が隣に戻ってくるので、この町を案内すると同時に警護をするように』と言われたらしい。

「そう言う事です。よろしくお願いします、浩介さん」

早苗はそういうと、頭を下げた。

「わかったから頭をあげて。とにかく明日の朝9時に出発するから覚えておいてくれ。それと明日は朝の6時30に朝食だから、遅れないように」

浩介はそういうと忙しそうに外に行った。

8月24日

「それじゃあ、僕達は行くけど何かあったら電話してくれ」
「わかったわ」

そして、早苗を案内する日が来た。

雄真達は玄関で浩介の注意を聞いていた。

「それじゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい!!」

浩介は雄真達の返事を聞くと早苗と歩いて行った。

「無事に終わればいいんだけどな」

雄真はそんなことを呟いていた。
この時にはまさかあんなことが起こるうとは、誰にもわかってはいなかった。

Introduce 『表れし”敵”（浩介View）』

「ここがこの町で一番有名なところなんだ」
「へえ〜」

僕は早苗にこの町を案内していた。

今いるのは、魔法関係の商品を扱っているショッピングモールだ。

「うわあ〜！！ かわいい〜」

早苗が見ていたのはフクロウだった。

フクロウは昔、文通の受け渡し手段とされていた。

今は人間界と共存されているおかげで、文通は今ではメールや携帯とかで、済ませることが出来るようになった。

しかし、その煽りを受けてフクロウは不要になってしまったのだ。

だが、フクロウはペットとしての面では、今でも人気を誇っている。

ちなみに前にも言った通り、携帯電話などは一部の金持ちのみの話だ。

まだまだ、人間界の技術で作ったものすべてはものすごく高いのだ。

今の僕に出来るのは少しでも、この莫大な費用を少しずつ減らして

いくことだ。

そのためには人間界とさらなる交流が必要なのだ。

（まあ、僕はここではもっぱら文通派何だがな）

そんなことを思いつつ僕達はショッピングモールを歩いて行った。

途中早苗に、魔力補強装置を買ってやった。

この装置は魔力が不足すると自動で補充してくれるものだ。

そして、今はカフェテリアムーントラフトで昼食を食べているのだ。

「それにしても浩介が、そんな大役を任されるなんてすごいわね」

「まあな。頼まれたらやるしかないし、こうして説明しながら歩き回るのも、かなりいいと思うぞ」

僕はそういうと、母さんに勘定をしてお店を出た。

それからもうろいろな名所やスポットを回った。

「そろそろ暗くなってきたね」

「そうだな」

そして、僕は最後のスポットに向かうべく、住宅街を歩いていた。とは言っても、人通りがほとんどない所なのだが。そしてもう夕方なのか、周りが暗くなってきた。

ピリリリッ、ピリリリ

そんな中、歩いていると突然携帯が鳴った。

僕は立ち止ってディスプレイを見た。

そこには『国際魔法連盟法務課』と表示されていた。

僕はすぐさま、電話に出た。

「もしもし僕だ」

『大臣！！ 指名手配犯No.19993が目撃されました』

「なんだと!？」

国際魔法連盟では、裁判のときでも犯人の名前はコードネームになる。

それは、犯罪者にもプライバシーがある（ただし魔界の住民に限る）という観点からだ。

ちなみに19993は有名な家系の魔法使いを何人も襲撃しているという、とんでもない野郎である。

そのうち数人は死亡している。

『現在交際魔法連盟の職員が、総力を持って捜索に当たっています。大臣も合流してください。目撃場所は』

職員から緊急で出勤要請されたのだ。

そして僕は住所を聞いて愕然とした。

なぜなら、その住所とは……。

「その場所にはすでに僕がいる。すぐに隊員をこっちに飛ばしてくれ。あまり時間がない」

『それはどういうことでしょうか?』

「……来たぞ」

『大臣!大……!』

僕は電話を切った。

「早苗、気をつける。来るぞ!」

僕は早苗に警告をしようとした。

「なにが来るのかね?」

「それはコード19993に……っ!」

しかし僕の警告に答えたのは全く別人だった。

そして、僕が振り返ると、そこにいたのは……。

「はじめまして高月浩介様。俺の名前は19993」

その男は僕達が追っていた犯人だった。

そして、早苗を人質としていた。

「このお嬢さんがどうなってもいいなら俺を捕まえなさい」

気色悪く笑いながらその男は言った。

「私のことはいいから捕まえて!」

「てめえは黙っている!」

早苗を脅している男は、彼女を自分の前方に立たせている。
この状態では、普通の魔法使いが不用意に攻撃すれば、人質に当てる事になる。

でも僕はその法則を無視できるんだ。

「最後に聞こう。投降する意思はあるか？」

僕はその男にそう呼び掛けた。

「どついう意味だ？」

「どついう意味も何も言葉の通りだが」

男の質問に、僕は冷静に返した。

「それはないな」

男はそう答えた。

「そうか、なら仕方ないな」

僕はそういうと、クリエイトを構えた。

「なにをする気だ？」

「こつするんだ！！ クリエイト」

僕は男にそう言うのとクリエイトに呼び掛けた。

『わかったわ』

クリエイトがそう言うのと同時に僕の体が、光始めた。

そして光が消えると、僕の服装は変わっていた。
それまでは黒い上着に黒のズボン姿だったが、その上にマントを羽織っていたのだ。

魔法服のマジックワンドによる転移魔法というのは、自分が持っている魔法服ならできることなのだ。

要は変身のようなものだ。

そして僕は魔王の力を発動させた。

僕の背中に翼が生えたのがわかった。

夜で周りが暗いはずなのに、僕から放たれる力のオーラによって、周囲は明るく照らされていた。

それを見て誰が茫然としないのだろうか。

現に男と早苗は茫然としていた。

「魔王の名の元、我が天誅を下す」

「お、おいそんな力を放つたら、こいつがどうなるか分かってるんだろうな？」

男は慌てたように、僕に言ってきた。

「その力は法則をも狂わせる。くらえ！！ リバインドブレイク！！」

僕から放たれた紫色の破門魔法が男に向かう。

このままなら、早苗に当たる。

しかし、僕の魔法は法則を狂わせるものなんだ。

「アガ！！」

僕が放った破門魔法は早苗を透りぬけて、男に当たった。

僕はその魔法弾には、ターゲット以外の人物に害のないようにして

いたのだ。

「浩介さん!!」

早苗が僕の後ろに逃げてきた。

「縛れ!!」

僕はさういうと、さっきの破門魔法に直撃して倒れている男に向かって、手をかざした。

すると、どんどんと気をつけの体制になった。

僕の魔法には一言で、相手を縛ることが出来るのだ。

そして、相手が縛られれば解除しない限り、相手は自由にはなれないのだ。

そのあと職員が来て、彼は連行された。

d I n t r o d u c e 『表れし“敵”（浩介View）』 E n

その頃雄真達と言えば、家でテレビを見ていた。

もう夕食を食べ終えて全員で座ってテレビを見ていたのだ。

ちなみに今やっているテレビは、雄真が全く知らない芸能人のお笑いコントだった。

「兄さん……遅いわね」

テレビを見ていた久美がそんなことをつぶやいた。
今の時間は6時50分だった。

「確かに、こんなに遅くなるときは電話の一本でもよこすだろうに」

宗次郎さんも不思議そうに言っていた。
そんな時だった。

『番組の途中ですが、速報をお伝えします。繰り返します……』

突然ニュース速報に画面が切り替わった。

「おかしいわね、いつもならテロップなのに」

その様子を見て、絢音が不思議そうに呟いた。

『先ほど指名手配犯No19993が逮捕されました。この犯人は……』

テレビでは指名手配犯の逮捕のニュースを伝えていた。

それと同時に、この人物のした悪行が報じられた。

ある者は驚き、ある者はこの犯人を非難していた。

「そうか、こいつもとうとう捕まったか」

そんな中、宗次郎さがほつとしたようにそう呟いた。

彼の家系も名家のために、かなりひやひやしていたのだ。

早苗の観光に、浩介を護衛として付けたのもそのためだ。

しかし、ニュースはまだ続いていた。

『犯人確保の際に、国際魔法連盟法務課大臣の高月浩介氏と、彼と一緒にいた高月早苗氏が、魔界総合病院に搬送されました』

ニュースで、浩介の名前が、出た時は全員啞然としていた。

「みんな、これからすぐに支度をしなさい。病院に行くわよ!!」

そして、誰よりも早く正気を取り戻した絢音が、雄真達にそう言う
と全員が支度を始めた。

そして、雄真達は総合病院へと向かった。

病院に入ると宗次郎が受け付けの人のところに、浩介が今どこにいるかを聞きに行った。

そして、戻ってくると、雄真達は浩介の元へと向かった。

「浩介!!」

「こら、病院の中だから静かにしろ!!」

診察室前の椅子に座っていた浩介が、大声で叫んだ杏璃に注意した。

「あれ？ 怪我はしてないの？」

浩介の様子を見た久美が、浩介に聞いた。

「してるわけないだろ？ 職員の奴が行け行けうるさいんだよ。それに僕の破門魔法の影響が、出ているかもしれないしな」

そして、浩介は事の次第を雄真達に話した。

結局早苗、浩介の両名には怪我や異常などは無く雄真達（特に杏璃

と久美）は胸を撫で下ろしていた。
そして雄真達の不思議な夏休みは、もう間もなく終わりを迎えよう
としていた。

第69話 もう一人の許嫁現る！？（後書き）

次回で第3章は完結となります。

第70話 帰る日(前書き)

今回が第3章の最終話です。

第70話 帰る日

8月31日。

楽しい時間は経つのが早い物である。

それは、雄真達に関しても例外ではない。

ついに雄真達が瑞穂坂に帰る日がやってきたのだ。

その力の先にあるもの 第70話「帰る日」

「言っておくけど帰る時間は、出発から5日後の8月6日までが限界だ」

そして雄真達は浩介から、元の世界に戻る際の注意点を聞いていた。

浩介曰く、時間コントロールにも法律があり、その法律によって時間を戻せるのは、出発から5日後の8月6日までが限界らしい。

ちなみに雄真達は夏休みの宿題もすべて終わらせているため、全く問題ではなかった。

「魔界で暮らしてみて、どうだった？」

宗次郎は雄真達に見送りがてらに言った。

雄真達は入出国管理センター内にある、ゲートの前にいた。

このゲートから、小日向家のリビングに戻るのだという。

「まあ、色々あったけど、とても楽しい場所でした」

「そうか、では達者だな」

雄真の言葉に宗次郎はそう言つと、雄真達はゲートから小日向家に転送された。

Introduce 『魔界にて（浩介View）』

「浩介。お前が中途半端な事を嫌う事はよく分かるが、出来るだけ早く魔界に戻つてきてくれ？」

父さんは僕がゲートに潜ろうとするのを、遮つてそう言った。

「どうしてですか？」

「浩介はこの魔界では非常に重大な切り札だ。それなのに長期間離れられると国民の不安も増す」

僕の言葉に父さんはそう言った。

確かに、僕の任務は『式守家の秘宝の封印』だった。

そして秘宝は封印され、任務は達成となった。

本来であれば僕達はすぐに撤収となる。

だが、僕は父さんに無理を言つて瑞穂坂学園を卒業するまで、滞在時間を延ばして貰つたのだ。

「それは分かっている。ただ、ここにいると自由が無いからな」

僕は父さんに含みのあるように言った。

少なくとも法務課の大臣である僕には、父さんや国民によって自由は無い。

高月家の次期当主としての威厳や、国の治安を守るためという理由に僕は束縛されていたのだ。

しかし、魔界を離れると高月家の次期当主としての威厳は残るが、僕には多少の自由が与えられたのだ。

僕はこれをもっと味わっていたい。

「そうか。色々とすまないな」

「もう慣れた」

父さんの謝罪に、僕はそう返した。

そうだ、こうなるのなんて、僕が生まれた時から決まっていたんだ。

「それと、例の件だが許可が出たから、後で書類の方をそっちに送るから、それを使うと良い」

僕は父さんにあることを頼んでいたのだ。

「わかった」

そして僕はゲートを潜ったのだった。

Introduce 『魔界にて(浩介View)』 End

雄真達は気が付くと、小日向家のリビングに立っていた。

「お帰り、雄真君!!」

「ただ今、かーさん」

驚いた様子で迎えた音羽に、雄真はそう返した。

日付は8月6日だった。

浩介は雄真達が到着した数分後に戻ってきた。

ちなみにとんでもない形で、魔界に行った雄真達の事を普通に出迎えられた理由は、魔界側から送られてきた『入国報告書』だった。

浩介曰く、他世界からの入国の場合は入国した者の住所に、そういった書類を送るらしい。

なんでも、家出先としての滞在を防止するためだとか。

その後全員は、それぞれの家に戻って行った。

(なあ、ラジア。魔界はどうだった?)

雄真は、自室に戻りつつ念話でワンドに話しかける。

『そうですね、マスターと同じ感想ですよ?』

雄真の問いかけにラジアはそう答えた。

最初は波乱続きだったが、全く違う文化に触れることで、雄真達は世界を知る勉強にもなった。

そんな想いをかみしめながら、雄真達の不思議で、なぜか長い夏休みを終えるのだった。

第70話 帰る日（後書き）

時期的にはある意味びつたりです。
特に夏休みの終わりと云う部分が。

そして次章はネタ＋史上最短です。

中書き

どうも、TRです。

と言う事で、第3章が完結しました。

第3章は10話と何となく量が少ないと思われる方もいると思いますが、基本的にはスル の方向でお願いします。

なぜ章の名前に『新』と明記されているのかと言いますと、実はこれの前に第3章を書いていたのです。

それには宇宙船でのトラブルで脱出するというある意味斬新なストーリーの予定だったのですが、かきあげたデータがクラッシュのため消えてしまった為、書き直しとなったのです。

要するに、幻の第3章と言っても過言ではありません。

さて、ここから第4章に入りますが、次章も基本的には半分コメディで、半分シリアスな内容です。

楽しみにして頂けると幸いです。

それでは、これにて失礼します。

第71話 暴走とその代償（前書き）

いよいよ第4章の始まりです。

第71話 暴走とその代償

9月1日

楽しい時間は経つのが早いという。

雄真達に取って色々あった夏休みは終わり、始業式の日を迎えていた。

「おはよう、ラジア」

「おはようございますマスター」

雄真はラジアと朝の挨拶をして、リビングへと向かった。

その力の先にあるもの 第4章 『高月浩介の悲劇の1日』

第71話「暴走とその代償」

浩介の1日は朝早くから始まる。

浩介が起きる時刻は、6時。

それから軽くトレーニングをいた後、妹の久美を叩き起し、リビングへと向かうのだ。(このときに、着替えておくのは常識)

その後は雄真達といつも通りに学校へ向かうというのが彼のサイクルだった。

「おはようございます。準さん」

「おっす、準」

「おはよう、準さん」

「あら、おはよう、雄真に、すももちゃんに久美ちゃんに、浩介君

も
」

いつも通りに雄真達は合流地点で準と合流した。
しかし、ひとつだけ、違う点があった。

「あれ、八手は？」

そういつもならいるはずの、八手がいないのだ。

「八手なら、先に行くって言って行っちゃったわよ」

準がそう言ったので、雄真はそのまま歩くことにした。

「それにしても、今日から雄真は魔法科なのよね」

準がしみじみとした感じで呟いた。

「まあな」

そう、雄真はその後、結局魔法科への編入を決めたのだ。
ちなみにその事を聞いた鈴莉は万弁の笑みだったそうなの。
そして雄真は今日から、魔法科に編入するのだ。

「まあ、頑張りなさいよ」

準は雄真にそう言って歓迎してくれた。

「ありがとう」

そして、雄真は準にお礼を言うと考えていた。

(この魔法科で、自分の夢に進めればいいんだが……)

そう考えているうちに、学校の校門が見えてきた。

さて、ところ変わって森では、杏璃が春姫を連れて、魔法の練習をしていた。

そして、足元には強大な魔法陣が神々しい光とともに現れた。

「ちよつと杏璃ちゃん!! こんな朝早くからそんな魔法を試さなくても」

そして、春姫はと言うと杏璃を止めようとしていた。

しかし杏璃が彼女の注意などを聞くはずもない。

「朝早くじゃないと、一晩かかって覚えた呪文、忘れちゃうでしょ!!」

「一夜漬けなの!?!」

彼女の行使しているのは、一夜漬けの魔法だ。

さらに追い打ちをかけるように、フィールドも張っていない。

「大丈夫、私の記憶力信じて」

杏璃はそういうと、再び詠唱に入った。

「アイス・ルーエ・トライ・デイ・フェア・ラ……」

すると突然杏璃の詠唱が止まった。

「あれ？なんだっけ」

なんと呪文を忘れていた。

呪文を忘れて完全に制御できなくなった、魔法陣がたどり着くのは

……。

光が集束していき爆発した。

すると魔力でできた魔力片が現れた。

一方教室では……。

「ほう、では、高溝殿はそのような軽い気持ちで沙耶を抱いたと？」

信哉がマジックワンドである『風神雷神』を八チに向けて突き付けていた。

信哉達は、色々と世話になったクラスの者たちに、礼を言おうとして来ていたのだ。

そのあたりは、信哉らしいとも言える。

しかし、そんなときに八チがさも平然と、沙耶を抱いたのだ。

そして、現在に至る。

「そ、そんな大げさな……お、俺はただ朝の挨拶をしながら、こつ軽く肩を抱いて……」

そう言つて、八チはまた沙耶を抱いた。というより少しは学習をした方がいい。

「やはり、抱いたのだな!!」

信哉が思いつきり風神雷神を横に振りながら叫んだ。とうとう信哉の怒りが頂点に達したようだ。

「うわあ〜!!」

そして、八チは教室を飛び出して逃げた。

「待たぬか〜!!」

そして、信哉はものすごい形相で八チを追いかけて行った。

一方、占い研究部の部室では……。

「エル・アムイシア・ミザノ……」

小雪が占いの練習をしていた。

杖をテーブルに置いてあるロウソクの前で構えて呪文の詠唱をしている。

しかし、どうやら不調のようだ。

「なんや、調子悪そうでっな〜姉さん」

小雪の相棒でもあるタマちゃんが心配そうに小雪にそう言った。

「弱りました、これでは正確な占いが……」

小雪はそう言うと、どこから取り出したのか、巨大なロウソクをテーブルの上に置いた。

「今日はこちらを使いましょう。これなら何とかかなりそうです」

小雪はそう言うと、結界を張った。

結界をしっかりと張るところは、どこかの誰かさんも見習ってほしいものである。

そして、小雪は杖を巨大口ウソクに向けて構えた。

「チチンパイパイタマちゃんホイ」

小雪が呪文の詠唱をした。

しかし、なんだその呪文……色々突っ込みどころ満載なんだが……。

パキパキパキッ！！！！

そして、結界にひびが入り始めた。

「うわ、姉さん結界が！！」

そして、タマちゃんが警告を発した。

「あら？」

そして、小雪はそう言つと窓を開けた。

すると、窓から強大な赤い魔力の塊が、外に出て行った。

一方、校舎前では……。
一人で歩いている伊吹の姿があった。

「伊吹ちゃん!!」
「……………!!」

そこに大きな声で呼ぶのは、すももだった。

「一緒に教室に行きましょう!!」

これもいつものやり取りなのだが……

「こら!! 来るな!! 来るなと申している!!」

駆け寄ってくるすももに伊吹はマジックワンドである、傘のような形状をしているビスイムを振り回した。
しかし、それはかなり危ないぞ……。

「ビスイム!! 何とかせぬか!!」

そして、伊吹はビスイムにそう言った。

『しかし、ここでは一般生徒が……』

ビスイムは伊吹にそう言って伊吹に意見した。
というより、本当に魔法は危ないぞ。

「脅すだけでよい」

伊吹は苦言を言うビスイムにそう言った。

いや、脅すので大丈夫いぞ。

『では』

そして、ビサイムはそう言って、傘を広げた。

ところ変わって、魔法の呪文の度忘れというところでもない理由で、大量の魔力片を出した森では魔力片が校舎の方に向かい始めていた。

そして、何もできずにあたふたしている杏璃がいた。

「大変、ソプラノお願い!!!」

『はい、春姫』

そして春姫はというと、対策のために魔法を使おうとしていた。

「デイ・アストウム・アムレスト!!!」

春姫は呪文を唱えた。

すると、空間にいくつも小さな魔法陣が出現して、魔力でできた魔力片を吸い込んでいく。

そして、すべての魔力片を吸い込むことに成功した。

「ふう」

杏璃が一安心したのか、息を吐きだした。

しかしそんな杏璃の前を、魔力片が通り過ぎて行った。

「ちょっとそっちは、みんなが……」

なんとたった一かけらだけが、残っていたのだ。

「間に合って!!」

そして春姫は、魔法陣の一つを飛んで行った魔力片を、追いかけるように飛ばした。

ところ変わって、昇降口では……。

「うおっとうとと!!」

信哉から逃げていたハチが、急停止した。

なぜかというと、八チがいる所より先は、上履きではいけないからだ。

そして、信哉はとうとう八チに追いついた。

「武士の風上にも置けぬやつ、この風神雷神で成敗してくれる!!」

信哉はそう言うと、風神雷神に、青白い光がまとい始めた。

「お、俺は武士じゃないって……」

八チはそう言った。

というより言うことが違う。

「雷神の太刀!!」

信哉は八チのそんな一言を無視して、ついに魔法を発動した。

「てりゃ〜!!」

そして信哉は、八チに向けて魔法を放った。

瞬間に青白い稲妻が八チに向かう。

「うわぁ〜!!」

そして、八チはそれを後ろに仰け反ってかわした。

さすが、八チ。

運の良さは断トツだ。

ところ変わって、校舎前……。

『リ・ベラ』

そして、ビサイムから大量の魔法弾が放たれた。

「きゃっ!!」

すももはそれを、ものすごい反射神経で避けた。

そして、杏璃の魔法の失敗でできた魔力片と、それを吸収するための魔法陣、さらに伊吹が放った魔法弾そして、小雪が占いの失敗で外に放った赤い塊、止めが信哉が放った雷神の太刀が全て混ぜあって一つになった。

そしてその塊は、ものすごい勢いでとある人物の方へと向かった。

「久美、聞いているのか!!」

さて、場所は変わって校門前。

浩介は久美に説教をしながら、校舎の方へと向かっていた。ちなみに何をしたのかというと、久美は浩介のものを盗もうとしたのだ。

それを浩介が見つけて、説教をしているということだ。

「だいたいな、久美はいつも……って久美、聞いているのか!!」

浩介が気付くと、久美が横に飛び跳ねていた。

「兄さん、前、前!!」

久美が必死に言っているので浩介は周りを見ると、なぜか全員が横に避けていた。

そして浩介はすぐにその理由を知る事になった

目の前にあつたのは、巨大な魔力の塊が浩介に迫ってきている光景だった。

距離は大体1m。

もちろんこの距離だと、どんな防御魔法でも間に合わない。

「ギャー!!!!?」

そして、浩介はその魔法を正面から喰らった。

そして辺りは、ものすごい光と轟音に包まれた。

光と轟音が消えると、そこには浩介が倒れていた。

「大丈夫か、浩介？」

雄真はそう言っつて、浩介に手を差し伸べた。

「うっぐー!!」

浩介はその手に捕まりながら、立ち上がった。

しかし全員は知らない。

魔法の塊よりも恐ろしい存在がいることに……。

浩介は立ち上がると、ものすごい勢いで睨みつけた。

それはまるで悪魔のように……。

そして浩介が、一人の少女を見つけると……。

「雄真は、これから職員室だよな？ だったら一人で向かってくれ、僕は用事があるから」

浩介は雄真にもものすごい笑顔で言った。

「いや、浩介何をする 行ってく・れ・る・よ・な？ はい」

浩介の笑顔は今やものすごい恐ろしいものになり果てた。

「やあ、伊吹、元気だった？」

「こ、浩介……お兄様」

浩介は万弁の笑みで、伊吹に声を掛けた。

しかし見えない威圧感で、伊吹は後ろに下がっていた。

「放課後森に来てくれる？もちろん、逃げたらただじゃおかないからな？」

浩介はそう言うと、すたすたと歩いて行った。

その後、信哉と八チ、小雪と杏璃に、春姫も同じようにしていた。それはまるで、死神のようだった。

「誰だ！！死神といたのは！！」

……恐ろしい。

こうして雄真達の新学期は始まった。

しかしそれは波乱な幕開けを迎えそうだったが……。

第72話 新たなるスタート（前書き）

大変お待たせしました。

第72話です。

第72話 新たなるスタート

「本日このクラスに編入生が来ます」

教室前で待機するように言われた雄真と浩介は、鈴莉の言葉によって教室がざわめくのを聞いていた。

(そう言えば、どうして浩介もこっち側なんだ?)

雄真は、浩介が横にいる事を不思議に思いながらも、鈴莉の合図が出るまで待っていた。

「それじゃ、入って頂戴」

そして鈴莉から合図が出たので、二人は教室に入る。

「えっと、今日から魔法科に編入する事になった小日向雄真です。よろしく願います」

「小日向君は今まで個人的事情で魔法を隠していたんだけど、今日付で魔法科に編入しました。そして次が……」

鈴莉の言葉に浩介が一步前に出た。

「高月浩介です。個人的事情で偽名を使っていましたが、今日からは本名になりました。ちなみにそこで関係なさそうに見ている久美も大森ではなく高月なので、よろしく」

浩介はいつまでも偽名では駄目だと思って本名にしたのだが……。

「ねえ、高月ってあの高月よね？」

「うん。なんでそんな人がここに？」

やはり、一部からはそんな内容の会話が、聞こえていた。

その力の先にあるもの 第72話「新たなるスタート」

その後HRで、これからの注意点を聞いた後に解散となったが、一部の人にはそんな時間はなかった。

浩介は、放課後になると早々春姫と杏璃、八子と信哉に伊吹さらには、小雪を連れて森に入った。

そして始まったのは、壮絶の説教だった。

「なんで僕がこんなに怒っているかわかる？」

浩介が話しているのを、雄真は木陰に隠れて聞いていた。六人は、浩介が魔法で創り出したシートに座らせている。

「あたし達が、魔法で浩介を撃つちゃったから」

柊が小さく答えた。

「その通りだ！！ 信哉と八子は一体何をしているんだ！！」

浩介が大きな声で、信哉と八子に問いたです。

あれはかなり相当怒っている。

「俺は、武士の風上にも置けぬ高溝殿を成敗しようとしていたのだ」

「なにがあつたかは想像つくが、そんなもんに魔法を使うな！！
こんな奴に信哉の魔法なんか使うことはないんだ！！」

浩介は信哉に怒鳴った。

(浩介、八手にこんな奴とは言いすぎだ)

雄真は呑気に心の中でそう突っ込んだ。

「それと伊吹、鬱陶しいと思うのはわかるが普通科の、しかも女子に魔法を使うとは何たることだ。それが式守家のすることか！！ビサイムもだ！！」

そして、続いて怒鳴られたのは伊吹とビサイムだった。

「すまぬ」

『申し訳ありません』

ビサイムは那津音と浩介には頭が上がりなかつたりする。

「まあいい。そして……」

浩介は杏璃と春姫のところに行った。

「またまたまたまた、お前か杏璃！！何度言ったら、魔法を使用する際はフィールドを張れるのかね？」

浩介は杏璃に今までの数倍の怒りをあらわにしていた。

「でもあたしはもうClass Bなんだから、フィールドを張らなくてもいいじゃない!!」

柊は浩介に反論した。

「しかしな、どんなことにも対応できるまでは、念のために使用するのが策ではないか？」

浩介はものすごい威圧感を出しながら、杏璃に言い返した。

その後も1時間は説教は続いた。

久美曰く、浩介は本気で怒ると2時間は余裕で過ぎるということだった。

そんな時だった。

「なあ杏璃？そんなに僕の話はつまらないか？」

浩介はものすごい怒気を漂わせて杏璃に聞いた。

理由は、杏璃が居眠りしていたからだ。

「いや……その……」

柊はあたふたしながら何かを言おうとしていた。

「そうか……そんなにつまらないのなら、直接体に刻みこむしかないな」

浩介はそう言うところをクリエイトを掲げた。

「こ、浩介、もう時間がないけど……」

とそこに、雄真が死を覚悟して浩介にそう言った。

「そうか？もうこんな時間か……しょうがない、今日のところは解散にするが、明日午前11時に雄真の家に来い。魔法の怖さについてたっぷりと知らしめてあげるから」

なんとか、終わったものの明日に延期のような形になった。

「もし、逃げたりしたらわかってるよな？」

そして最後に一言、春姫達に言うと浩介は帰って行った。
ちなみに春姫達が、かなり怖がっていたというのは余談だ。

第73話 高月浩介悲劇の1日(前書き)

もうどうなってしまっのかを知っている人には、わかる展開だと思
います。

それでは、どうぞ

第73話 高月浩介悲劇の1日

9月2日

浩介は、今日もいつもと同じ時間に起きた。

早寝早起きは重要だというが、彼にはそれがぴったりだった。

「今日はまず、管理室に向かって、それから……」

そう言いながら今日のやることを確認していると、浩介は不意に昨日のことを思い出していた。

浩介にとっては、思い出すだけでも腹の立つことだが杏璃達が魔法を使って（しかも理由は不適な物だ）その魔法が浩介に当たったのだ。

（馬鹿馬鹿しくて、話す気にもなれない）

浩介はそんな事を思いながら、総合管理室のドアを通ろうとした時だった。

「あれ？ おかしいな」

浩介は首を傾げた。

なぜなら、いつもなら開くはずのドアが開かなかったからだ。

このドアは誰かが来て、その人が久美か宗次郎、そして浩介だと認識すると、自動で開かれる仕組みになっているのだ。

「故障かな？」

浩介はそう言って渋々、戻るのであった。

その力の先にあるもの 第73話「高月浩介悲劇の1日」

一方、小日向家のリビングでは……

「おはよう母さん、すもも」

「おはようございます。兄さん」

「おはよう雄真君」

雄真は朝の挨拶もそこそこに、席に着いた。

「後は浩介君と久美ちゃんが来ると、食べられるんだけどね」

音羽がしみじみとした感じで言った。

小日向家では、どうしようもない理由を除いては、全員で食事をするのが決まりになっているのだ。

『皆で一緒に食べればどんな料理もおいしくなるのよ!!!』

そんな音羽の言葉による物だった。

「おはようございます。雄真にすももさんに、音羽かーさん」

そんなことを思っていると久美が来たようだ。

後は浩介だけだった。

「おはようみんな」

そんな時に挨拶が聞こえてきたのだが、雄真達は顔を見合わせる。そして、その声の正体が姿を現した。

「に、兄さんの変態〜!!!」

その人物の姿を見るや否や、すももが大きな声で叫んだ。というより、意味がわかって言ってるのか？

「おいおい、神坂さんというものがあいながら、雄真は浮気したのか？」

すると、その人物は他人事のようにそう言った。そして雄真はその人物に一言、言った。

「あなた、誰？」

雄真の一言に、その人物は不思議そうな顔をした。

「おいおい、大丈夫か雄真？頭でもおかしくなったか？」

すると、その人物は、そう言って言い返して来る。

「あの、あなたはどちら様ですか？」

すもももわからないのか、そう聞いていた。

「だから、本当に大丈夫なのか？みんな」

そして、向こうでは、その人物が心配していた。

「誰だ誰だって、僕は高月浩介に決まってるじゃないか」

その人物のため息交じりの言葉に、雄真達は思わず耳を疑った。

その人物は浩介と名乗った。

しかし、雄真達には浩介には見えない。

「だったら、その証拠を見せてくれ」

雄真は浩介と名乗った人物に、そう言った。

このときに、クリエイトを持ってはこの人物は本当に浩介ということになる。

「わかったよ……クリエイト!!」

すると、水晶玉が剣状になったワンドが現れた。

『マスター、この人物から、浩介さんの魔力反応を感知しました』

ラジアの言葉により目の前にいる人物は、浩介と言う事になった。

しかし、一つだけ問題があった。

「浩介、今すぐに鏡を見てこい」

雄真は浩介にそう言った。

それでもしないと絶対に自分の身に降りかかった事が分からない。

「わかったよ。見ればいいんですよ。全く」

浩介は文句を言いながらリビングを出て行った。

一方、浩介はと言うと……。

「何なんだ、一体」

洗面台の方へと向かいながら文句を言っていた。

総合管理室にはなぜか入れないし、雄真達には名前を忘れられると言ったまさに不幸の連続。

しかし彼には、さらなる不幸が待ち構えていた。

浩介は洗面台の鏡を見た。

「??？」

鏡を見ると、浩介は後ろを見たが、そこには誰もいない。

さらに浩介は右手を上げたり下げたりした。

すると、鏡に映っている人物も右手を上げたり下げたりした。

しかし、あくまで“姿”は浩介ではない。

映っていたのは、……”少女”だった。

顔立ちは良く、瞳の色が赤くて髪の毛の色が金髪のストレートになっていた。

背丈は、男である浩介とほぼ同じ背丈だった。

「な、ななななな……」

浩介が、やっとのことで言葉にできたのは……。

「なんじゃこりゃ~~~~!!」

叫び声だった。

一方リビングにいる雄真達は……。

雄真達は洗面台の方から、ものすごい叫び声が聞こえていた。

雄真達に話しかけていた浩介の外見は、間違いなく少女だった。

雄真達は苦笑いを浮かべていた。

それから数十分後。

「どうしてだ……何で僕が女性に」

浩介はあの後ショックを隠せない様子で、何とか食事を食べて一人落ち込んでいた。

「浩介、なんか魔法でも失敗したのか？」

雄真はそんな浩介に聞いた。

「そんなことはない！！ 昨日は魔法を使用していなかった」

浩介は雄真にそう言うと、考え始めた。

「思い出せ、思い出すんだ……昨日の朝はいつもどおりに、学校に行って……あー！！」

どうやら浩介は思い当たることがあつたらしい。

「まさかあの魔法の塊が……」

浩介が言っているのは、昨日の朝に杏璃達が使った魔法が混ぜあい、一つになって浩介に命中したことをだつた。

「いや、あり得る。複数の魔法を浴びると、性別がおかしくなるって読んだような気がする」

浩介はそう納得すると、ふと立ち上がって万弁の笑みでもものすごい怒気をさらけ出した。

女性の姿でそんなに怒気を出すとある意味怖い……。

「あいつら……絶対に殺す!!」

浩介は本気で殺そうとしているようだった。

「そ、それよりもどうするんだ？この後柊たちがここに来るんだぞ？」

雄真は話題転換のために、別の話題を出した。

「は!! そうだった。あいつらが、今日の11時に来るんだ。今の時間は9時だから、まだ大丈夫だ」

浩介は、そう言って考え始めた。

「そつだ、こついうことには、もしかしたら父さんが詳しいかもしれない!!」

浩介はいい考えでも見つけたのかそう言った。

「よし、電話……はできないな」

浩介は電話しようとして立ち上がろうとしたが、それを止めた。

「どうしてだ？」

「今の僕は女性だ。声も女性のものになっているから、電話しても信じてもらえそうにない」

確かに、浩介の声は、穏やかな感じの女性の声だった。
そんな状態で電話をしたら変な誤解をされる可能性がある。

「というわけで、お願いだから久美。父さんに電話で事情を説明して、すぐに来てもらうようにお願いして!!」

「わかったわ!!」

それまで、事の顛末を伺っていた久美に浩介は頼むと、久美は急いでリビングを後にした。

それから、数分後久美は戻ってきた。

「父さんは時間がかかるけど、すぐに行くって言ってたよ」

「ありがとう」

浩介はそう言うと、気分を紛らわすためか、魔導書を読んでいた。

ピーンポーン

すると、チャイムが鳴った。

その瞬間浩介は、嬉しそうに玄関の方へ向かった。

どうやら、宗次郎が来たと思ったのだろう。

浩介は父さんが来たと思い、玄関に向かうとドアを開けた。

そこに立っていたのは……。

「……」

この時、浩介はなんとという悲劇だろうかと思ったに違いない。
なぜなら、そこにいたのは春姫に杏璃だったからだ。

二人は、早く行った方が、印象が良くなるのではないかと考えて早

く来たのだ。

ちなみに浩介は、何とかごまかすことにした。

「あの、何のご用ですか？」

浩介は苦し紛れに、二人にそう聞いた。

「あ……ええと高月浩介さんに用があつてきたんですけど……その……」

春姫はここに来た理由を説明すると、言葉に詰まった。

浩介にはよくわかった。

これは名前がわからないからだ。

浩介は心の中で参っていた。

こんなことになるとは思わなかったので、名前なんて考えていない。

(考える、考えるんだ!!)

次の瞬間浩介は、奇跡的にいい名前が思い浮かんだ。

「あ、はじめまして。高月佳奈江かなえです」

浩介は考えた名前を、二人に言った。

「あ、とりあえず上がってください」

そして浩介は、とりあえず二人を家に上げることにした。

そして、浩介はものすごい哀愁を漂わせて、リビングに戻ってきた。

「浩介？」

『神坂さん達が来た。彼女には、高月佳奈江で通しているから、口裏を合わせてくれ』

浩介は念話で雄真達に、伝えるとすぐに二人が入ってきた。

「それで、佳奈江さん。浩介はどこにいるのよ？」

杏璃は佳奈江こと、浩介に聞いた。

「ええっと……今、呼んできますね」

浩介はそう言うと、リビングを出て行った。

「ねえ、雄真君。佳奈江さんはいつから来ていたの？」

浩介がリビングを後にすると、春姫が雄真に聞いた。

「ああ、彼女なら、今朝来たんだよ」

「なるほどね」

雄真は二人に、苦しまぎれの嘘をついた。

しかし、二人は納得したようだ。

その後浩介は戻ってきた。

「すみません。兄さんはいないようです」

もちろん浩介は、彼女自身。
いるはずがない。

「全く人を呼び出して何をしているのよ、あいつは!!」

そして杏璃は文句を言っていた。

「それにしても、どうしてお二人はここへ？」

浩介は、場を紛らわすために、杏璃たちに聞いた。

「それはね……」

こうして二人は話し始めた。

しかし、時々怪しい場面があっただが……。

「浩介の変な理論がすごくて、いつも感心しているのよ」
「変な……」

杏璃の言葉に、浩介は一瞬ものすごい殺意を発したが、すぐに消した。

「どうかしましたか？」

「い、いえなんでもないですよ。あはははは！！」

浩介は苦笑いをしながらうまくごまかしていた。

「私、少し席をはずしますね」

浩介は気が変になりそうだったのかりビングを後にした。

「ねえ、雄真君」

すると、春姫が不思議そうな顔をして、雄真に話しかけてきた。

「何だ、春姫？」

「彼女、なんか高月君に似ているような気がするんだけど……」

まずい、浩介が女性になったことがばれるのか！？

「そうなのよね〜なんか。あの笑い方や、目なんかが同じなのよね」

さらに杏璃がそう言った。

しかしさすが、浩介の彼女だ。

浩介のしぐさをわかっている。

「それはもしかしたら、浩介の仕草をまねちゃったとかじゃない？」

そして、雄真はさりげなく、二人をごまかすことにした。

しかし二人は彼女に不信感を持っているようだった。

二人は何かを話し始めた。

「すみません」

二人の話が終わったあと、浩介が入ってきた。その瞬間二人が動いた。

「あなた、佳奈江さんじゃないですね？」

春姫の言葉に、浩介は一瞬驚いていた。

「な、何を言っているんですか？」

浩介は動揺を隠すようにして、言った。

「あなたの仕草や行動、言い方はすべて高月君と同じなんですよ」

春姫は、浩介にそう言った。

「それは もちろん、浩介の仕草を見ていたからという理由もわかるけど、ひとつだけあなたは重要な問題を残しているわ。それは何ですか？」

浩介が言おうとしたことを、杏璃が言った。

「私達が、魔界に行ったのはいつで、なぜですか？」

春姫が、浩介に聞いた。

それは畏だった。

これに答えるという事は、それを間近で見たからという事になる。

「いいえ、さっぱりわかりません」

だからこそ浩介はそう答えた。

そして、やはり罷だったのか、二人とも苦虫をつぶしたような顔をした。

しかし、そんなことを思っていたのもつかの間。

「ちょっと失礼」

杏璃が浩介に近づいたかと思うと、首に手をまわして首飾りを取り出した。

それは高月家の者であることを証明する勾玉だった。

「この勾玉が、あなたが浩介である証拠よ!!」

勾玉には高月家の月を彩る黄色が半分着色されており、後の半分には仕えている神の色が着色される。

例えば、光の神を従えている場合は黄色と黄緑色が着色されるのだ。

それは人為的ではなく、自然に着色される。

そして、それは人それぞれだ。

浩介の勾玉の色は、黄色に紫色と黒の3色だった。

そして、杏璃が持っている勾玉の色は、浩介の勾玉と同じ色だった。

「もはやここまでか……」

諦めたのか、浩介はそう言った。

「そつね」

浩介は二人に文句を言いながら、ソファ―に座った。

「全くあんたらのせいで、とんだ目にあつた」

「でも、まさか女性化するなんて思いもよらなかつたわよ」

杏璃はそう言つて浩介を見た。

「それに高月君、とても可愛いですよ」

春姫の誉める言葉は今の浩介には何かがぐさりと刺さるような物だつた。

そして浩介が女性化したことが杏璃達にばれてから、しばらくたつと再びチャイムが鳴つた。

時刻は11時。

となれば、伊吹たちが来た可能性が高い。

「雄真が出て」

浩介はうんざりしたように言つと、そのまま座つていた。

そんな浩介を見ながら雄真は、玄関の方へと向かうことにした。

「おつす雄真」

「失礼するぞ、小日向雄真」

「おはようございます、小日向さん」

「良い朝であるな」

「おはよう雄真」

「おはようございます雄真さん」

そこにいたのは準や八子たちだった。
どうやら、思った通り全員が揃ったようだった。

「ところで、浩介お兄様は？」

伊吹が、本題を切りだした。

「それなんだが、見てもびっくりするなよ？」

雄真の言った言葉の意味がわからないのか、全員が首を傾げていたのだが、浩介を見ればすぐにわかるだろう。

雄真はそんなふうを考えながら、全員に上がってもらった。

「こんにちは……ってあれ？」

八子が大きな声で挨拶をしようとして、固まった。

そこには、声に反応した浩介と、春姫達がいた。

「うひょ〜！！ そのきれいなお嬢さん、名前は何ですか？」

八子が、浩介だとも知らずに手を取ろうとした瞬間だった。

ゲシ！！

「うぎゃああ！！」

八子は浩介の豪快なキックで、反対側に吹っ飛ばされた。

「ふん、体が女性になろうがこの高月浩介、貴様のような獣には指一本触れさせん！！」

浩介はかっこよく言ったが、女性の姿で言うと、凛々しい姿になってしまう。

「浩介、お兄様？」

そして伊吹は、浩介の姿に戸惑っていた。
それは、一種の現実逃避だったのかもしれない。

「なるほど、私達の魔法が混ざったために出た症状か……すまぬ」
伊吹は浩介の話の聞くと、再び謝った。

「いや、もう過ぎたことはいい」

「と・こ・ろ・で、そんな雄真にビッグプレゼント!!」
場の雰囲気と和ませるためか、準はそう言うと紙袋からいろんな服を取り出した。

それはすべて女ものだった。

「どう？ 嬉しい」

「嬉しくないわ!! ボケ」

雄真は準の頭をこずいた。

しかし、準が持っている服にもすごい視線を送っている人物が、一人いた。

「あ、あの、浩介……君？」

準が戸惑ったように浩介を呼ぶ。

それもそのはずだ。

なぜなら浩介の様子が、明らかにおかしいからだ。そして、浩介の言葉に全員が固まる事になった。

「かわいいお洋服……」

「……へ？」

それは、いつもの浩介に似つかわしくない口調だったのだ。

「お、おい浩介大丈夫か!？」

雄真は慌てて浩介を揺さぶった。

「は!？　なんだ？　今一瞬意識が……」

浩介は驚いたように言っていた。

「どうやら、女性化したせいで、心までもが蝕まれているのね」

春姫が慌てたように言った。

「何か方法はないの？」

杏璃が浩介に聞いた。

しかし浩介は、首を横に振った。

「父さんと呼んだんだけど、まだ来ないようだし……あと数時間もすれば完全に僕の意思は消えるな」

浩介はまるで他人事のように言った。

そんな時だった。

玄関のチャイムが鳴ったので、雄真は玄関に向かった。そして、ドアを開けるとそこにいたのは……。

「久しぶりだな、雄真君。話したいことはあるだろうが、時間がないので浩介のところに案内してくれるか？」

浩介の父親の宗次郎だった。時間がない。

それは仕事の時間ではなく、浩介の時間がないということは雄真にもわかった。だからこそ雄真は宗次郎をリビングに案内した。

「浩介！！ 大丈夫か！！」

宗次郎さんはリビングに入って、浩介の姿を見るや否や、いきなり大きな声をあげた。

「たぶん大丈夫だけど、これを治す方法はある？」

浩介がそう言うと宗次郎は、考え込んだ。

「普通は、薬とかで、強制的に解除するんだが……」

宗次郎はそこで話を区切った。

「浩介は、普通の人と体の……魔力回路とかが、まったく違っていて複雑だから、無理だろうな」

宗次郎の言葉を聞き、浩介は落ち込んだ。

「あゝあ、俺もいつか女性になる力を手に入れるんだゝ!!」
……
「げふあ!!」

雰囲気を変えようとした八手の言葉に、宗次郎が鉄拳を浴びせた。

「こんなときに何不吉なことを言っている!!」

……この親にしてこの子ありだな。

その場にいる全員が、そんなことを純粹に思っていた。

「……力？」

浩介が、八手の言葉に何かを閃いたのか突然立ち上がった。

「久美、文庫のE - 66 - 3の本を持ってきてくれ!!」

「わかったわ!!」

浩介は久美にそう言うと、久美は走って、リビングを後にした。

「浩介、何か方法をひらめいたのか？」

宗次郎が、浩介に聞いた。

「確か、形状の変化を自分の力にすることが出来るって、書いてある本があったんだ」

浩介がそう言った時久美が戻ってきた。

そして、浩介が、本をぱらぱらとめくるとあるページでめくるのを止めた。

「あつた!!」

浩介が、そう言った。

そこにはこう記述されていた。

『形術変動魔法 この魔法は何らかの理由で動物になって戻れなくなつたときや、性別が変わってしまったときに有効。この魔法は以下略』

「よし、やってみるか」

浩介は一通り読み終えてそう言うと、クリエイトを持って立ち上がった。

全員が固唾をのんで見守る中、浩介が呪文を唱え始める。

「オル・クエイド・ライド・サム・ル・ランセル・ミルノ・サイド・ラ・コイラ……」

浩介はクリエイトを平行に構えながら詠唱している。

そして浩介の足元には、魔法陣が浮かび上がり、眩い黄色の光を発していた。

「ルム・ド・サイエンスト・ラ・ミール!!」

浩介が最後の呪文を唱え終わると同時に魔法陣から発せられていたまばゆい光が、どんどんとその光量を増して行った。

「我が姿の異常な状態を修復し、その状態をも我の力と成さん。されば、願おう元の姿へ戻ることとこの状態をも力にすることを、我は、この言葉を通し願おう、ラ・プリーゼ!!」

浩介が言い終わると同時に、閃光が走りついには何も見えなくな
った。

そして光が消えた時、そこにいたのはいつもの姿の浩介だった。

「ふう、成功したみたい」

浩介は自分の姿を見ると、そう言った。

「良かったな、浩介!!」

宗次郎は喜んでいた。

「良く無事に戻ってくれた、浩介お兄様」

「うむ、祝福だな」

「それ、誉めてるのか？」

浩介は喜んでいる者たちにそう言つと、お茶を入れるために立ち上
がった。

「それでは、私は帰るとしよう。まだ仕事があるのでね」

そう言うが早い宗次郎は、作りだしたゲートの中に入って帰って
行った。

第73話 高月浩介悲劇の1日（後書き）

次回で早いことに第4章は終わりです。

第74話 続く災難？（前書き）

かなり早いですが、これで第4章は終わりになります。

第74話 続く災難？

これで、一件落着かと思つた雄真達だが、それはとある人物によつてすべてが覆される事になった。

その力の先にあるもの 第4章『高月浩介、悲劇の1日（終）』

第74話「続く災難？」

「準さんは、女性用の服とかを選べる？」

そんなことを聞いたのは浩介だった。

「ええ、もちろん」

そして準は、楽しそうに答えていたが、この時雄真はいやな予感を感じていた。

「それじゃ、ちょっと手伝つて欲しい事があるんだけど」

浩介は準にそう切り出した。

「何かな？」

そして、次に浩介が言った一言にリビングは凍りつくことになる。

「僕が着る女性物の服を選ぶのを手伝つてほしいんだけど」

「浩介、大丈夫か？なにか後遺症でも残っているのか？」

雄真は、心配になって浩介に聞いた。

「後遺症も何も、これからもしかしたら、女性化するかもしれないのに、服がなかったらまずいだろ」

「どうやら、浩介はこの先のことを考えて言ったらしい。それにしても……」

「だったら、柊にやってもらえばいいんじゃないか？」

「そうよ！！なんで準ちゃんなのよ!？」

雄真の意見に柊も乗ってきた。

「神坂さんは雄真の恋人だし杏璃はネタに走る、八子は信用できないし、伊吹は真面目過ぎて、決まらなそうだし、沙耶も同じで信哉は色んな意味で間違ってる、小雪さんは絶対杏璃と同じ」

浩介は準を選んだ理由を言ったが、ものすごい本音を言った。

「私はネタになんかは知らないわよ!!」

「お、俺は信用されてないのか!？」

「わ、私はまじめすぎるのか!？」

「どうせ私なんて……」

「俺は、どこを間違っているのだろうか」

「私は、ネタには多分走りませんよ?」

杏璃達が、次々と文句を言っていた。

しかし一部には、その通りだという物もあったが……

「ということ、頼まれてくれないかな？」
「分かったわ」

浩介は、そんなのを無視して準に頼むと、準も快く了承したようだ。そしてなぜか全員で、浩介の女性用の服を買いに行くことになったのだが……。

「なんで、浩介が女性化しているんだ？」

浩介は家を出る前に、女性化したのだ。

そして浩介は、女性化している時は、高月佳奈江と呼ぶようにと言っていた。

ちなみにその理由としては……。

「だって男が、女性用の服を漁るなんて事が、雄真にできるか？」

「確かに、出来ないな」

浩介の言葉を聞いた雄真はその光景を想像してみた。

浩介が女性用の服の前で、服を選んでいる。変質者に見られる。結局雄真だったら、浩介と同じことをするだろうという結論になった。

そして向かったのが、大手の洋服店だった。

ちなみに雄真は、八子と一緒に表で待っていた。

それは、周りからの視線を気にしてだった。

「しかし、浩介達は大丈夫か？」

雄真は、そんなことを呟いていた。

一方洋服店内では……

「さて、佳奈江さんに似合う洋服はどれかな」

浩介達が準さんと一緒に、服のコーディネートをしていた。

「ねえ、佳奈江は男なんだから、ここにいたりしたらまずいんじゃないの？」

杏璃が、そんなことを小声で言ってきた。

「僕は心は一緒でも、変なものを見たり聞いたりすれば、戻るときに記憶が消えるようになっていくから大丈夫だと思う」

浩介はそう言うと、杏璃は納得したようだ。

「佳奈江さん。まずはこれとこれを着てみたらどうかかな？」

浩介に渡されたのは、赤いチェックのスカートと灰色の上着に、青と白の縞模様のシャツだった。

浩介はそれを受け取ると、試着室に入った。

「佳奈江さん、スカートのはき方とかわかる？」

外から準が浩介に聞いて来た。

「大丈夫」

準の問いかけに浩介はそう答えた。

そして浩介は知識だけで、何とかスカートを履いた。
あとはいつもと同じようにした。

(ほんとにすごいな……)

浩介から出た感想は、その一言だった。

女性化すると下着だけは、自動で女性物に代わるらしい。

そして、浩介は試着している服を着終わった。

浩介はさすがは準だと思った。

青と縞模様のシャツの上に羽織っている灰色の上着、そして赤いチ
エックのスカートは、ものすごく浩介に似合っている物だった。

浩介は試着していた服を脱いで、来る時に着ていた服を着ると、試
着室を後にした。

「どうだった？」

準が、浩介に聞いた。

「すごく良かった。ありがとう」

浩介は準にそう言うと、準はまた服のコーディネートを始めた。

その後はワンピースタイプの服や、普通のズボンなどのタイプを購

入した。

もちろん支払いは浩介だが、余裕で万を超えた時は、さすがに驚いていた。

さて、外で待っていた雄真は準たちがお店から出てきた所に声を掛けた。

「終わったか？」

「ええ、ものすごく似合っていたわよ。彼はどんな服にも似合う性質があるもんだから、びっくりしちゃったわ」

準は感心したように、浩介の方を見ながら言った。

佳奈江こと、浩介の機嫌が良かったのが印象的だった。

「それじゃあ、私たちはこれで」

そして、いつの間にか浩介の怒りも完全に消えていたため、春姫達とは駅前のオブジェの前で別れることになった。

「そうだ、くれぐれも僕が女性化できることは秘密にするように」

あの後しばらく歩きだして、周りの目を気にしたのか元の姿に戻った浩介が、ハチたちに釘を刺すように言った。

そして、雄真達は、家へと向かうのだったが……。

雄真は背後に感じる殺気に、冷や汗を感じていた。

誰からなのかはもう分かっていた。

その人物は浩介だった。

もし話したら、この餌食になることは雄真にも分かった。

雄真は気を付けるように心得ながら、家へと戻るのであった。

第4章 『高月浩介、悲劇の1日』 終

中書き

どうもTRです。

『その力の先にあるもの』を読んでいただきありがとうございます。

第4章はいかがでしたでしょうか？

なんでこのような作品を書いたのが、いささか疑問です。

正直に言うと、今回の章は黒歴史です。

しかも、今後の展開に影響する事はなにも無しというおまけっぷり。

しかし今までのお固い話にすればこのくらいのぶっ飛びも、必要だなと思う今この頃です。

さて、次章は敵のスケールが大きくなりました。

浩介VS幽霊

とうとうここまで来たかと言う敵ですが……。

そして、もう一つが…… 浩介VS歴史

これはもう意味不明だと思われる人もいると思いますが、詳しくは

第5章で……。

それでは、本作をこれからもよろしくお願いします。

第75話 夢と現実(前書き)

いよいよ始まりました第5章。

今回の敵は幽霊です。

それでは、どうぞ

第75話 夢と現実

「おつす雄真、すももちゃん」

「おはよう雄真、すももちゃん」

朝、いつもの通学路で雄真とすももは、準と八子と合流した。

「おはようございます。準さん、八子さん」

「おつす八子に準」

雄真とすももは準と八子に挨拶をすると、学校へ向かった。

その力の先にあるもの

第5章 『瑞穂坂幽霊騒動』

第75話

「夢と現実」

「おはよう雄真君」

校門で雄真を待っていた春姫が、笑顔で雄真に駆け寄る。

「くそお〜朝っぱらからいちゃつきやがって!!」

「ほんとに熱々ね〜」

涙を流しながら恨めしいとばかりに言う八子と、にやりと笑いながら言う準をしり目に春姫は、自然な動作で雄真の腕に自らの腕をか
らめた。

「準たちも行くぞ」

「はいはい」

「わかりましたよ」

雄真の言葉に準たちも校舎に入る。

「あれ？」

雄真は気づくと自室にいた。

「何だ、夢か」

寝巻を着ているのを見て、雄真は残念そうに言った。

「今の時間は…… 2時27分!？」

雄真は時計を見ると、固まった。

「とりあえず寝るか……」

そう言って雄真は、もう一度寝なおすことにした。

(またさっきの夢の続きが見れますように……)

雄真の願いもむなしく、夢の続きは見れなかった。

9月3日

「　　という夢を見たんだ」

「まったく……夢でもイチャイチャするってどういう事だよ？」

翌日、準たちと登校する最中に昨夜見た夢について話していた。浩介は呆れ、準はにやにやと笑い八手は、悔し涙を流していた。

「そう言えば、雄真。その夢に僕は出てきたか？」

「え？　いや……出てこなかったな」

雄真は、浩介の突然の問いかけに首をかしげつつも、答えた。

「どうして浩介君が出ているかを聞いたの？」

「ああ、僕には存在固定化……つまり僕の存在を固定する事で、偽物が出来ないようにする能力の事なんだけど、それをしてあるとはいえ夢の世界までは、効かないはずなんだ。

なのに僕が出ていないという事は、この世界の並行世界かそれ以外の物と言う事になる。しかし雄真が起きた時間も引つかかるな」

準の疑問に浩介は答えた。

「雄真。もし今見ている夢を繰り返し見たり、恐ろしい物に変わったりもしくは起きた時の時刻が”2時22分”に近づいていたらすぐに知らせるんだ」

「どういう意味だ？」

浩介の忠告に雄真は、意味が分からないのか聞き返した。

「もしかしたら雄真、とんでもない物に憑依されてるかもしれないんだ」

「も、もしかして……幽霊？」

浩介の言葉にすももは恐る恐るその言葉を口にする、浩介は無言で頷いた。

そして、ことは夜に動いた。

「兄さん。これは持っていく？」

「なになに………何で電気ポットがいるんだよ？」

「いや、向こうでお茶でも 却下！！ はっい」

夕食の時間になったので、俺はリビングに入ると、そこには荷物の整理をしている浩介と久美の姿があった。

「何をやってるんだ？ 二人とも」
「実は、魔界の方で依頼が入ってた」

二人の行動に疑問を感じた雄真が問いかけると、浩介が手を休めずに答えた。

「依頼って？」

「ああ、邪気払い師としてのな」

邪気払い師……それは自然に生まれた邪気を払う人の事だ。

「？ どういう意味だ？」

「実は魔界のとある場所で幽霊に襲われたらしくてな、すぐにそれを駆除してくれとの、依頼が来たんだ」

「ゆ、幽霊!？」

浩介の言葉にすももがとび跳ねた。

ガシャン!!

次の瞬間には、手に持っていたであろうお皿を割った。

「幽霊と邪気払い師って何の関係があるんだ？」

お皿を割ってしまったすももを横目で見ながら、雄真は浩介に問いかけた。

「実は、幽霊とかは邪気がもとで動いていたりもするし、もちろん霊体が見えたりもする。だから僕はこの世界で言う霊能力者みたい

な感じかな」

「なるほど……あ、これがその道具ですか？」

割った皿の片づけが終わったのか、すももは興味心身に箱を持ち上げた。

「ああ、そうだけど触らないでもらえるかな？一応それ浄化してあるから、下手に触られて邪念でも入れられたら、たまったものじゃないし」

「あ、ごめんなさい」

浩介の言葉を聞いてすももは、慌ててそれを地面に置いた。

浩介はそんなすももを苦笑いしながら見ると、箱を開けた。

「このお札が霊体の動きを止めたり、逃げられないようにする物だ。それでこの銃が緊急時の浄化用で少しの間は霊が入られないようにする。それでこの杖が霊体を切ったり邪気を吸収したりするものさ」

浩介は説明をしながら、雄真達に道具を見せた。

「ということでした、音羽かーさん。悪いんだけどしばらくここを離れる」

「良いわよ。気を付けてね」

浩介の言葉に音羽は明るく見送った。

「それじゃ、僕はこれで……それと雄真。今朝の言った事……忘れるな？」

「ああ」

そして浩介達は魔界に戻って行った。

9月4日

「むく浩介ったら勝手に帰っちゃうなんてく!!!」

翌日教室に入ると、ものすごい不機嫌な杏璃がいた。

理由とすれば、何も言わずに魔界に帰った浩介に対してだが。

「まあまあ。浩介の話だと急に決まった事らしくて、伝える暇がなかったんだってさ」

雄真はそれとなくフォローを入れた。

雄真のフォローに杏璃は「それくらいわかっているわよ」と言っていた。

そんな中春姫が、心配そうに雄真に近づいた。

「それで雄真君。その……夢なんだけど、どうかな？」

雄真は春姫にも夢の事を話していたのだ。

「ああ、昨日も見た。しかも話が少し進んでいた」

そう、昨日雄真が見た夢は前に見た八千達と合流して、春姫と腕をからめて校舎に入る続きまでであったのだ。
それが……

『ねえ、雄真君』

『ん？どうした、春姫』

魔法科の廊下を歩いていると春姫が雄真に声を掛けた。

『あのね……今日の放課後、話したい事があるから屋上に来てくれるかな？』

『分かったけど……何なの？話って』

顔を赤くする春姫に雄真は問いかけるが、彼女はただ顔を赤くして
『なんでもないよ』と言うばかりであった。
ここで夢は終わり、雄真は目覚めた。
時間は……

2時26分だった

第76話 幽霊の狩り人

魔界に戻った浩介と久美は、国際魔法連盟に戻り仕事をこなしていた。た。

その理由が……。

「まだあいつらが帰ってないってどういう事だよ」
「まあまあ3人にも事情って言うのがあるんだよ」

浩介の愚痴の通り、仲間の3人が魔界に戻ってきていないのが原因だった。

「まあ良いか。霊体は夜間にならないと活発に動かないしな」
「それじゃそれまでは、デスクワークでもする？」
「言われなくてもやるぞ!!」

こうして二人はデスクワークに励むのだった。

その力の先にあるもの 第76話「幽霊の狩り人」

そして夜を迎えた。

「高月君に久美さん!!」
「浩介に久美さん!!」
「高月君に久美さん……お久しぶりです」

黒い髪をした少年と、同じく黒い髪の少女そして栗色の髪をした少

女の、計3人が現れた。

「おう、直人に奈緒美に谷村じゃないか。久しいな」

「久しぶりだね直人君に、奈緒美ちゃんに陽子さん」

直人と呼ばれた黒い髪をした少年の本名は、神代直人。

同じく奈緒美と呼ばれた黒髪の少女の本名が、神代（旧姓は田村）奈緒美。

そして陽子さんと呼ばれた栗色の髪をした少女の本名が、谷村陽子。

この3人は浩介がとある事件で知り合ったメンバーだ。

「さて、色々と話したい事もあるんだが、仕事があるから今すぐ向かうぞ」

「……はい!!」「」

浩介の言葉に全員が頷くと、歩き出した。

「兄さん、魔法で行けば早いのにどうして歩いて向かうの?」

「おいおい。昨日説明しただろ……魔法を使うとそれによって発生する魔力で、霊体に気付かれるのを防ぐためだ」

（だってよ?）

はい、分かりやすい説明をありがとう。

補足すると幽霊などは邪気を元に行動する。

そして魔法使いは魔力によって魔法を行使する。

実はこの魔力と邪気と言うのはほぼ（・・・）同じエネルギーなのだ。

そのため邪気で行動すると言われていた霊体が、彼らの存在に気づ

く可能性があるのだ。

幽霊もただではやられない。

大抵の場合は軍を形成して、反撃してくることもあるのだ。そのため、霊を活性化しないために歩くのである。

「そう言えば、何でこんな山奥で人が襲われたの？」

「確か犠牲者は、若者たちだったよな」

「ああ。なんでも肝試しとかで、来ていたらしいぞ」

奈緒美の問いかけに浩介と直人が答えた。

「全く、何でそんな事をするんだか……」

浩介が呆れた風に呟いた。

「霊の被害に合うほとんどが、心霊スポットとかに行った人だって聞くけど、それって自業自得ってやつじゃないか？」

「だから、言ってるだろ？ そう言った場所にいる悪霊は駆除するけど、そんなでもなかったら駆除はしない」

直人の言葉に、浩介がそう答えた。

ちなみに、浩介が心霊スポットに言って被害に遭った人には、きつい一言を言う事で有名だ。

『人の家を荒らしたお前が悪い。たっぷりと苦しめ!!』

そして、お被いすらを断るのだ。

「さて、そろそろ襲撃地点に……っ!？」

浩介は突然顔を引きしめた。
そう、霊が発する邪気を感知したのだ。

「……っ！？ 上だ！！」

直人の言葉に全員が上空を見る。

彼らが見たのは、上空から降ってくる黒いオーラを纏った骸骨だった。

「礼を言うぞ、直人！！」

「さすが直人君！！」

「相変わらずだね」

浩介達は後ろに飛びのきながら、伝えた直人にお礼を言っていた。

「……………」

そんな時、栗色の髪をした少女 谷村陽子 が目を閉じると、髪の色が銀色になり気配が変わった。

「かなりの邪気だ。さて、浩ちゃんどうする？」

「だからな……いい加減その呼び方はやめてくれ、神楽」

浩介は銀髪になった陽子の言葉にため息交じりに言うと、神楽と呼んだ。

それが銀髪になった彼女の名前なのだ。

「はいはい。で、浩介殿どうする」

「そうだな、奴はかなりの邪気がある。とりあえずは物理攻撃と浄化で弱らせた所で、封印だな」

神楽の問いかけに浩介は霊を見ながら答えた。
その霊体は起き上がると、黒い邪気を漂わせてこっちを見据えた。

「ぜやああああ！！ 断絶竜剣！！」

「グオオオオオオ！？」

直人の剣劇が霊体に繰り出される。

「ウオオオオオオオオ！！」

霊体から黒い触手が放たれる。

狙うのは、邪気を大量に格納している浩介の所だ！！。

「させない！！ マテリアル……ガード！！」

しかし奈緒美の張った結界魔法によって防がれた。

「……………」

浩介は精神を集中して、力を蓄えているため無言だ。

「次は私だな。闇に染まりし愚かな魂よ。その穢れを完膚なきままに滅せ！！破滅の狂想歌」

神楽から放たれた白い光が、霊体の邪気を浄化する。

これが裁きの神の浄化の力だ。

罪ありし者を裁く、それが裁きの神の役割だ。

「ナイスだよ、神楽ちゃん！！ 次は私が……高月家儀流・特幕、

浄化の光!!」

続いて久美から放たれた白い光が、さらに霊体の邪気を浄化させる。

「兄さん!! 今よ!!」

久美が浩介に合図を送った。

「行くぞ!!」

目を開けた浩介は、先端には十字架のアクセサリーがついている、金色の杖を手にしている浩介が叫んだ。

「っ!?!」

霊体は浩介から発せられるオーラに怯んだのか、逃げようとする。

「逃がすか!!」

浩介はそう叫ぶと、金色の杖が形を変え始めた。それは、先端が鋭い剣になった。

「死んでまで……」

「!?!」

浩介は呟きながら、剣を片手に霊体の所まで飛んで行った。

「人様に迷惑を掛けるんじゃないねえ!!」

「グオオオオオ!!」

そして、浩介はセリフを決め、霊体を思いつきり剣で切り裂いた。すると、今までいた骸骨は消え、青白い光が浮かび上がった。

「邪気……封印!!」

浩介は、剣から杖に戻すと、浮かび上がった光を杖に吸収した。

「ふう、一件落着き!!」

浩介の宣言通り、辺りに漂っていた邪気は跡形もなく消えた。

「さて、何から話そうかね」

「まずは俺達の任務の事から話すよ」

そう言うと、直人達は任務について話し始めた。

「全く大変だったよ。神楽さんが『浩ちゃんに会いたい!!』って言いながら暴れるし……」

「む？ 仕方ないではないか。私は浩介殿といるときが幸せなのだから」

直人の愚痴に神楽がそう答えた。

「あはは……でも残念ながら兄さんには“守る人”が出来ちゃったから、それは叶わないと思うよ？」

「どつという事だ？」

「実は……だな」

浩介は顔を赤くしながら自らの任務で起きた事を話した。

「まさか自殺するかもしれないって思ってたけど、本当に自殺したんだ」

「でも、おめでとう高月君」

「そんな…… 浩介殿に…… 恋人が……」

浩介の話聞いた3人は、それぞれ異なった言葉を返した。

直人は、浩介が自殺をした事に。

奈緒美は浩介に、恋人ができた事を祝福していた。

神楽は浩介に恋人ができた事を聞いて、倒れた。

「まあ、それが僕の宿命だからな。それとありがとうな、奈緒美。ついでに気絶すんな！！というより元の姿に戻るってどれくらいのショックだよ!?」

浩介の突っ込みに全員が笑っていた。

結局浩介は翌日、霊の現れた場所を浄化すると、瑞穂坂に戻ったのだった。

「ふう、戻ってきたな。かなり暗いけど、どれくらい経ってる?」

「えっと5日だね。今は午前2時15分だね」

瑞穂坂商店街に転送してきた浩介は久美に聞くと、久美は時計を確認して言った。

「それじゃ、とつとと帰りますか」

「そうね、ちよつと疲れたしね」

そして二人は小日向家に向かった。

「それじゃ、雄真さんの部屋から 待て!!」

「どうしたの？ 兄さん」

雄真の部屋のかぎを開けようとした久美を、浩介が止めた。と言つより、それって完全に泥棒のやることだぞ？

「感じないか？ 雄真の部屋から、邪気が……」

「あ、本当だね……まさか!？」

浩介の言葉に久美は頷くと何かを悟った。

「おい、久美。今何時だ!!」

「えつと……午前2時20分!!」

「久美、早く玄関のかぎを開ける!! 時間がない!!」

浩介は久美にそう指示をすると、久美は慌てて魔法でかぎを開けた。

第77話 夢枕

雄真は、目の下にクマが出来ていた。

それは誰から見ても、寝ていないという事が分かるくらい人だ。春姫達が心配そうに聞くが……

「うっん。大丈夫だよ」

と言っばかりである。

しかし雄真の精神はもう限界だった。

その力の先にあるもの 第77話「夢枕」

その理由は雄真の見る夢だった。

曇り空で薄暗い屋上に、雄真は約束通りやってくる。

『雄真君。来てくれたんだ』

『何かな？ 話って』

そこに佇む春姫に雄真が本題を切り出す。

春姫は雄真の方に体を向ける。

雄真の手に握られていたのは………包丁だった。

それが雄真が見た9月7日までの夢の内容。

そして、目が覚めるたびに雄真は時間を見て恐怖を覚える。

3日は午前2時27分、4日が26分、5日が25分、6日が24分、7日が23分。

これが雄真が起きた時間だった。

(どんどん2時22分に近づいている!?)

それを悟った雄真は9月6日に浩介の携帯に電話するが、通じない。

魔界では、まだ技術の進歩が遅れている。

そのために固定電話はまだしも、携帯電話は通話ができる状態ではなかった。

そして、とうとう9月8日を迎えた。

夢は7日までのよりもさらに進む。

「な、何で!?!」

「だって、雄真君誰かにとられちゃうから」

そう言う春姫の表情は、もう狂っているの一言だった。

そして包丁を持った春姫が、雄真に向かって行く。

「起きろ!!! 雄真!!!!!!」

だが、それは突然外から聞こえてきた声によって、無になった。さて、時は戻り浩介達に視点を戻そう。

「雄真！！」

雄真の部屋に入り込んだ浩介が察知したのは、とてつもない邪気だった。

「今の時間は……午前2時21分30秒」

浩介は時間を確認すると、起こそうとする。

「起きろ！！ 雄真！！！！」

さらに雄真に、浩介お手製のびんた攻撃まで加わる。

「は！？ こ、浩介！？」

「大丈夫か！？ お前は夢枕にやられていたんだ！！」

何が何だか分からない様子の雄真に、浩介が叫んだ。

「夢枕って……」

「夢枕と言うのはな、相手に夢を見せる霊だ。この霊は午前2時2分に誘いこんで呪い殺そうとしていたんだ」

浩介の言葉に雄真は慌てて時間を見る。

2時23分

「ほっ!!！」

それを見た雄真は一息ついた。

「いや、安心するのはまだだぞ」

『アト、チヨットダッタノニ』

浩介の言葉にそう言いながら姿を現すのは、女性の霊だった。

「お前を今ここで、封印させて貰う」

『ソナナコトハサセナイ』

霊はそう言つと、壁をすり抜け外に逃げて行つた。

「あ、逃げた!!！」

「兄さん、雄真!!！急いで」

「あ、ああ!!！」

何の事かが分からない様子の雄真は、今着ている寝巻に、ジャケットを羽織つて、家を出た。

「朝は神の時間、でも夜になれば魔の時間となる。それが頂点に達する時間が」

「2時22分と言う訳か!!」

雄真は浩介と久美の外を走りながら話を聞いていた。

「それにしてもなんで、走ってるんだ？」

「久美、説明をよろしく」

浩介は説明を久美に押し付けると、霊体の気配を探す。

（っち!! やっぱり今の時間は分が悪いか……霊の気配がうっようにしている!!）

「それでどうなんだ？浩介」

「良く分からないけど……たぶんあっちだ!!」

雄真の問いかけに浩介はそう答えると、再び走り出した。

「つて、ここは女子寮!？」

「ああ、あそこの部屋からとてつもない邪気が」

そして到着したのは、春姫達がいる寮だった。

そして浩介が示した部屋は……

「あそこつて、春姫の部屋!？」

「何で雄真が神坂さんの部屋の場所を、正確に知っているかはともかく、だったら入るぞ!!」

浩介は春姫の部屋だというのを瞬時に、見抜いた雄真をじと目で見

ながら、そう呟いた。

「は？ 入るって、どうやって？」

「こっやってだあ！！」

ガチャン！！

浩介は上空に飛びあがると、春姫の部屋の窓ガラスを割った。

「って！！ 何やってんだ浩介！！」

「後で修復する」

「そんな事を言ってるんじゃないと取りつかれるぞ！！ ああ、もうどうにでもなれ！！」

浩介に言葉にやけになった雄真が、春姫の部屋に侵入する。

「え…………あ…………ああ」

「あのだな、春姫！！ ちょっと落ち着いてくれ！！」

今の衝撃で目が覚めたのか、春姫は浩介達を見て口をパクパクさせている。

それを雄真は必死に説明しようとしていた。

「……………出たぞ」

「あれ…………幽…霊？」

春姫は女性の霊を見ると、春姫は固まっていた。

「ちょっと春姫！！ 何が……………って浩介に雄真！？ 何やってんの

よ…………」

そしてさっきの騒ぎを聞きつけたのか、杏璃が入ってきた。

その杏璃は浩介達に問い詰めるが、女性の霊が外に逃げようとする。

「兄さん!! 夢枕が!!」

「逃がすか!! 邪気の包囲陣!!」

久美の声で、背後を見た浩介は、懐から札を数枚取り出し、逃げだそうとした窓に向けて投げた。

札の効果なのか、霊は逃げ出せなくなった。

浩介は、懐から金色の杖を取り出すと、それを瞬時に剣に変える。

「人様の夢を……」

「……!?!」

浩介の言葉を聞いた女性の霊は後ずさりを始める。

「勝手に汚すなあ!!!!!!」

『ギャアアアアア!!!!!!』

浩介の持つ剣によって切り裂かれた女性の霊は、姿を失い魂になった。

「邪気、封印!!」

そして浩介は、剣を元に戻すと、それを杖に吸収して封印した。

「んで、どういう事なのかを説明して貰いましょうかね?」

「は、はい……」

浩介達に待っていたのは、杏璃と春姫による状況説明とお説教だった。

「なるほどね。雄真の夢はその霊が見せていたっていう訳ね」
「それで、高月君が、その霊を封印したわけですね」

浩介達の事情説明に二人は納得していた。

「まあ、あと少しでも遅かったら、雄真と神坂さんは手遅れだった
だろうな。それじゃ、僕達はこれで失礼するよ。悪かったね、夜遅
くに」
「全くよ」

浩介と久美は言うが早いか、窓から外に出て行った。

「それじゃ、お休み。春姫」

「うん。お休みなさい。雄真君」

そして雄真も外に出た。

「全く、とんだ目に合った」

「まあ、そう言うな。それと雄真は体に残っている邪気を浄化する
ために、お祓いをするから」

「へいへい」

雄真と浩介達は帰って行った。

ちなみにこの日の事は週明けには、すでに広まっ
ていて浩介への『幽霊退治依頼箱』が設置されたのだとか。

そしてそれを見た浩介が設置したと思われる、理事長に文句を言
いに行つて結局このままにして、依頼が来たら対処する事になったの
は余談だ。

ちなみに、この依頼箱には設置されたその日に軽く100件の依頼
が来ていたそうなの。

第78話 旧瑞穂坂

Introduce 『過去の記録』

昭和20年。

その年は戦争の真つただ中だった。罪のない者たちが次々と命を落とす。戦争とは、一体何なのであろうか？そして、瑞穂坂も例外ではなかった。

「あら、中村さん。今日も暑いわね」

「そうじゃの。今日は空襲もないから、畑仕事が出来そうじゃよ」

老人が近所に住む女性と楽しげに話しこむ。

「ねえ良子ちゃん。聞いた？」

「え、なにになに？」

また所変わって、3人くらいの少女達がグループで何かを話していた。

「アメリカがまた魔法使いを搬入したんだって」

「また？ ここにも、強い魔法使いがいればいいのにな」

一人の少女の言葉に、良子と呼ばれた少女が答えた。当時、人ならざる力を使う魔法使いは、有力な戦力となり、重宝とされていた。

しかし、当時の日本では、魔法使いの数は少なく、日本の魔法使いの強さは世界で最下位のため、戦力にならなかった。

そして、この日……
この街は敵国の空襲で、焼け野原となった。
そして、その場所には負の記憶が染み付いた。

Introduce 『過去の記憶』 End

その力の先にあるもの 第78話「旧瑞穂坂」

9月15日

夢枕の幽霊騒動から1週間たった。

ここはオアシス。

雄真達は何時ものように集まって談笑をしていた。

「旧瑞穂坂!?!」

「そうよ!!! そこにお化けが出るらしいんだって」

雄真の言葉に準が楽しそうに返す。

浩介は伊吹達と一緒にになって呆れていた。

「と言う事で、行ってみない」

「お、良いな!!! それ」

準の言葉に八チが乗った。

杏璃も何気に乗り気なようだ。

「と言う事で、雄真と浩介君も一緒に行かない?」

「いや、俺はそう言う所にはあまり行きたくない」

雄真は先週の騒動の一番の被害者だから、幽霊の怖さが分かった。

「そもそもそう言う場所には、遊び半分で行くもんじゃない」

そう言うのは、浩介だった。

「だから、浩介君も一緒に行くんじゃない」

「は？」

準の言葉に浩介が首を傾げた。

「浩介君は、幽霊達を何とかする事が出来るんでしょ？ だったら

浩介君と一緒にいけば、遊び半分じゃないよね」

「あ・の・な・邪気払いは口実ではなく、困っている人を助けるためだ。面白がって行く時の保険ではない！！ 僕にもそういうプライドがあるんだ」

準の言葉に浩介が、怒りをむき出しにして言った。

確かに、浩介の言う事に一理ある。

しかし、この後からひどかった。

「ねえ、浩介。お願い」

「うっ！？」

何を思ったのか、杏璃の上目遣いをお願いをした。

昔はそれほど弱くなかった浩介だが、今ではこれにまるつきり弱くなっていた。

それは浩介に言わせれば、音羽とすももの泣き落としのように。

「全く、付き合いきれん」

伊吹達とえば、呆れた風に言うたと去って行った。さて、杏璃の上目遣い攻撃を喰らった浩介だが……。

「わ……分かった」

ものすごい敗北感を感じながら、許可を出していた。

「こ、浩介!？」

驚く雄真だったが、数分後準によって買収された春姫の攻撃によって、雄真も堕ちた。

「それじゃ その前に一つ条件 何？」

「行くのはいいけど、助っ人を3人呼ぶ。これくらいはいいだろ？」

準の言葉を遮って、浩介が条件を提示した。

もちろん3人と言うのは直人に奈緒美、陽子の3人だ。

久美は知っているのか『あゝあの人たちね』と呟いていた。

「まあ、いいわよそのくらいは。それじゃ、明日の夕方5時ごろに集合しましょ!！」

「……おー!!!(お〜)」「」「」

準の締め言葉に二人を除く全員が、答えた。

こうして、旧瑞穂坂行きは決定した。

「久美、旧瑞穂坂について調べてくれるか？」
「OKよ」

その日の夜、浩介は久美に調査をさせると、携帯を取り出して電話を掛けた。

『あれ？ 浩介、どうしたんだ？』

「ああ、実はな……」

電話の相手は直人だった。

そして浩介は、事情を説明した。

『なるほどな……そう言う事なら、奈緒美達にも頼んでみるよ』

「ああ。悪いな」

『気にすんなって。それじゃまた明日』

直人はそれだけを言うと、電話を切った。

「向こう、やってくれそう？」

「まあな、引き受けてくれたし大丈夫だろ」

久美の問いかけに浩介が答えた。

「さて、早めに寝ますか」

「そうだね」

そして二人は、早めの睡眠をとる事にした。

9月16日

時刻は午後5時30分。

オブジェ前に、雄真に春姫に準、八子そして浩介と久美に杏璃とすももの8人が集まっていた。

「それにしても、まだ助っ人の人は来ないの!？」

「そう言うな。向こうも仕事の合間に来るんだから、少しぐらいは感謝しろ」

杏璃が苛立って言うが、浩介にたしなめられた。

「それじゃ、3人が来る前に今から行く場所みたいなどころでの、注意点でも話すでしょうか」

浩介は機転を利かせ雄真達にそう言うと、注意点を話し始めた。

「心霊スポットでは悲鳴を上げない。霊を刺激するから。それと一

人で走って行く事もNGだ。全員で固まる方がいい」

浩介は色々と注意点を話している。
心霊スポットにゴミは捨てない、もしくは勝手に持って行かないなど。

ちなみにこの理由だが、ゴミを捨てたり持って行くとそこのかかわりが出来、霊が来てしまうと言う物だ。
最も一番いいのは、行かないという点だが……。

「浩介！！ 悪い、遅れた」

「高月君、ごめんなさい！！」

「遅れました！！」

そんな事をしてしていると、助っ人の3人……直人達が来たようだ。

「ああ、まあ大丈夫だろ。紹介する左から僕の友人の小日向雄真、その隣がクラスメイトでもあり雄真の恋人の神坂春姫、その隣が見女子に見えるが本当は男でもある渡良瀬準、その隣が変態の高溝八輔、通称八手だ。その隣が、雄真の妹でもある小日向すもも。それで最後に僕の守るべき存在の柊杏璃だ」

「こ、浩介！！ 変態とは何だ！！」

「そ、そんな……てれるじゃないの／＼」

浩介に変態と紹介された八手が怒り、杏璃は浩介の言葉に顔を赤く染めていた。

「なるほど……あなたが、浩介の彼女さんか」

「な、何よ」

ジッと杏璃の事を観察する直人に杏璃が問い返す。

「いやいや。浩介が言っていた通りの人だと思ってなって、いたたたた！！！！！ つねらないでくれ！！ 奈緒美」
「プン！！」

直人の言葉を遮るように、奈緒美が手をつねり奈緒美はそっぽを向いた。

「さて、紹介が遅れたな。こいつが神代直人だ」

「神代直人だ。まあよろしくと言う事で」

「それでその隣が、直人の妻の神代奈緒美だ」

「よろしくね」

「最後が谷村陽子だ」

「私だけ細かな事はないの？ …… よろしくお願いします」

浩介の紹介に、それぞれが名前を言って行く。

「まあ、どういってで知り合ったのかは、歩きながら話すとしてよ
うか」

浩介はそう言うと、歩き出した。

「僕と直人に奈緒美が知り合ったのは、最初は敵同士だったよな」
「そうそう」

昔を懐かしむような浩介の言葉に、直人が頷いた。

「どうしてですか？」

それに疑問を持ったすももが聞く。

「この二人の能力を危険視した僕達が、抹殺しようとしたんだ」
「あゝよく覚えてる。そう言えば、良い所で割り込んだよな？ 浩介」

「だって、あれ以上二人が幸せになると無性に 無性に……何ですか？ イエナンデモアリマセン」

三人が当時の事を思い返して話している中、雄真達と言えば完全に蚊帳の外だった。

「柊杏璃」

「何よ？ 谷村さん」

陽子の声に杏璃が用件を聞く。

しかし、陽子の姿はちよつと変わっていた。

そう、銀髪でしかもかなりの威圧感を身にまとっていた。

「……私は谷村陽子ではない。神楽だ」

「はあ？ 何寝ぼけた事言ってるのよ」

杏璃は、神楽に向かって変な物を見る目で言い返した。

「この無礼者め！！ お主はやはり浩ちゃん婚約者に相応しくない！！ 叩きのめして ストップ！！ ……命拾いをしたな」

激怒して杏璃に向けて魔術を掛けようとするが、浩介の精子でそれを止めた。

「な、何なのよ、あの子は……」

「谷村は自身にこの世の悪に裁きを下す“裁きの神”を宿している

んだ。それが神楽という訳だ」

叫んでいる杏璃に浩介はそう説明すると、立ち止まった。

「ここが、旧瑞穂坂だ。直人、奈緒美、神楽。気を抜くな！！」
「「はい！！」」

浩介の指示にそう返事をする、雄真達に向き直った。

「それでは、旧瑞穂坂に入る。その前に全員には、このお札を渡しておこう」

「これは？」

「それを身につけていれば、もしものときには憑依されないようにしてくれる物だ。ここは危険だから、常に身につけておくように」

浩介から渡された札を訝しげに見ると、雄真が浩介に聞いた。

浩介は淡々と、渡した札の効力を言うついに旧瑞穂坂街に侵入した、

「へえ、ここが旧瑞穂坂か」

「意外と田舎なのね」

中に入ってしばらく歩いていた準と杏璃がそう呟いた。

確かに、ここは田舎だ。

まるで、昭和時代にタイムスリップをしたみたいだ。

「久美、この街について分かった事を、言ってくれ」

浩介は久美にそう言うと、久美がこの街についての情報を話した。

「旧瑞穂坂。確認されたのは昭和元年とされていて、豊かな自然で緑に囲まれていたらしい。第2次世界大戦の空襲で昭和20年に焼け野原となった」

「なるほど……」

「戦争って何もかもを一気になくしちゃうんだね」

久美の情報に頷く雄真と、しみじみとした事を言う準。

「戦後、復旧作業をしようとするも、原因不明の事故が多発し、死者が大量に出た。そのため、この街はいつまでたっても復旧されずにいつしか、呪われた土地として恐れられた」

「……ふむ。話を聞く限り、被災者の無念な思いが残っている……と言った方が妥当だな」

久美の話聞いた浩介は、ここにいる霊がどのような物かを判断していた。

「現代では、有名な心霊スポットとなり、一度は言った物は二度と出る事が出来なくなる。また霊能者も多数ここに向かったが全員が帰ってくる事はなかった……」

「……」

久美の言葉を聞いた瞬間、全員が固まった。

「なあ、皆。戻ろうか」

「う、うん！！ そうね、そうしましょ」

さすがに怖くなったのか、浩介の問いかけに今まで乗り気だった準たちがそう答えると、一斉に回れ右をして来た道を行って行った。

「皆、手遅れだ……前方より霊体反応、数は50!!」
「っち、遅かったか」
「皆は下がって!! 三人とも、サポートするよ!!」

浩介によって察知した霊体反応に、浩介達は一気に媒体を構えた。

「来やがった!!」

浩介がそう呟くのと同時に、前方から骸骨がこちらに向かってくる。

「な、何なの!? あれ」

「ゆ、雄真君!!」

「に、兄さん!!」

その骸骨を見た女性陣（杏璃は除く）は全員雄真に張り付いた。

「斬り裂け!! 滅閃一貫」

直人の剣撃が骸骨を次々と倒していく。

「死人に語る事は!! ない!!」

浩介の乱舞により、50あった数も20に激減した。

「根源よ、浄化の道しるべとなれ!! マテリアル、クリ ニア!
」

次に奈緒美が放った浄化の光により、20体の霊体は全て浄化された。

「全方位に霊体反応を感知……数は650体!?」

久美から絶望的な情報が届いた。
この情報が示すのは……。

「囲まれた!!」

「そ、そんな!!」

そして、姿を現したのは、無数の骸骨が歩いてくる、トラウマものの光景だった。

「五人とも、出来るだけ、減らすぞ!!」

「了解!!」

そして、直人が剣術を行使し、浩介が乱舞で減らそうとするが、数はまだ600体。

「根源よ、浄化の道しるべとなれ!! マテリアル、クリ ニア!!」

さらに奈緒美の浄化の光も加わるが、50体が減っただけだった。

「久美!!」

「分かってるよ!! 光よ、その力を浄化の力としてかの者らにその脅威を見せつけたまえ!! ライトニング、パーフティー!!」

久美から全方位に放たれた光は霊体の数を一気に250体まで減らした。

「次は私だな。死して生きる愚か者よ。自らの裁きを喰らうが良い。破術・光轟天栄!!」

神楽からとてつもない光が打ち出され、それは辺りを包み込んだ。しかし、これでも残りは100体となった。

「なあ、俺にも何かできないか？」

「そうだな……穢れを消すのをイメージして弓矢で奴らに向かって放てば何とかなるだろうな」

雄真の問いかけに浩介が、周囲の警戒をしながら答えた。

「だったら、全てを消し去れ……ブレイクン・イヤ!!」

雄真から放たれた白銀の矢は霊体に命中し、一気に5体を減らした。

「す、すごい雄真君!!」

「おう、さすが雄真だぜ」

「どこぞの腰抜かしとは違ってね」

「抜かしてなどいらんわ!!」

霊体を倒せた雄真を誉める春姫と、八子と漫才を繰り広げる準だったが……。

「でも、今のもう無理だろ？」

「ああ、正直苦しい」

それは攻撃を放った時から、雄真にのしかかっていた。

「雄真のは光属性で、まだ完全に習得してもいない属性を、無理に使ったんだから、疲れが出て当然何だが……まだ予断を許さないな」

「うん。何か、どんどんと寄ってきているし」

そう、雄真達が格闘している間に、さらに霊体の数は増え、辺りには1000体の霊体が集まっていた。

「こうなったら、最終手段だ」

「まさか……駄目よ、兄さん！！ あれを使ったら……」

「あの、久美ちゃん。あれって何？」

浩介の言葉に反対する久美に杏璃が聞いた。

「兄さんは光属性の魔法を使う気なのよ！！」

「え？ 浩介、光魔法使えるのか！？」

久美の言葉に雄真は、驚いた表情をして言った。

「ああ、久美だって闇魔法を使う事は出来る。ただ体にちよつと負担がかかるから、本当に最後の切り札としてだけだ」

「でも、兄さんは元々病弱な体質……光魔法なんて使えば一発で動けなくなるわ！！」

浩介の説明を次ぐように久美が言った。

元々同じ魔族と言う存在の浩介と久美は、対極の極限属性の魔法を使うことも可能なのだ。

しかし、その行為はかなりの精神力と体力を消費するため、緊急時以外は使用不可としている。

「これしかみんなを何とかする方法はないんだ。強引にでも使わせて貰う。光よ、その猛威を今ここに振え……穢れした地に浄化の光を与えたまえ……」

「浩介!!!」

「兄さん!!!」

強引に光魔法を行使した浩介に久美と杏璃が叫ぶが、それはまったく意味をなさない。

「滅せ……ライトニング・エンドレス!!!」

それは光の最終形態……。

そう表現しても良いぐらいの、光景だった。

高濃度に満ちた白銀の光が辺りを覆い尽くす。

「す、すごい……」

「私達の魔法つて、こうなるんだ……」

杏璃達はその光の強さを……久美達は自身が使う光のすごさを口にしていた。

そして、浩介から発せられた光は、周囲にいる霊体を次々と殲滅して行った。

「れ、霊体反応……半径100キロ以内になし」

「こ、これが浩介君の本当の力……なの」

久美からの情報に、準たちは驚いた様子で、今だ立ちつくしている浩介を見ていた。

だが、浩介の体はゆっくりと崩れ落ちた。

「こ、浩介!？」

「兄さん!!」

それを見た雄真達が慌てて浩介に駆け寄った。

「しっかりして!! 兄さん!!」

「嘘だろ……」

久美と杏璃は必死に浩介を揺さぶり、雄真と八子は目の前の現実から目をそむけようとしていた。

だが、浩介の意識は戻らなかった。

第79話 目覚めた場所

浩介Side

「う……うう」

僕は目を覚ました。

（生きてる……のか？）

僕がやったあれは死を覚悟しなければいけない物だった。

闇の魔法使いが、対極の光属性の……しかも強力魔法を行使したからだ。

光が闇を侵食する……それはいわば体の一部を消していくのと同等的だ。

さて、説明は後だ。

「おお、目覚めたぞ」

「君、大丈夫？」

僕が見たのは、知らない家で僕の顔を覗き込む、知らない老人と少女の姿だった。

その力の先にあるもの

第79話「目覚めた場所」

「道端で倒れていたから、心配したぞ」

「…助けていただきありがとうございます」

とりあえずはお礼の言葉を言う事にした。

(クリエイト、無事か?)

【はい、マスター。私も無事です】

僕の念話にクリエイトから声が返ってきたので、とりあえずは魔法が使える事は確認できた。
後は、状況確認だ。

「ああ、すまないのお。わしは中村俊和なかむらとしかずと言う。この子はわしの孫だ」

「中村良子なかむらよしこです。良子って呼んでね。それで君の名前は？」

二人は御丁寧にも名前を名乗った。

(クリエイト、偽名の可能性は?)

【いいえ、特にはありません】

とりあえず、本名だと言う事を確認した僕は、礼儀に則る事にした。

「僕の名前は、高月浩介です」

「うむ、浩介君じゃな」

「よろしくね、浩介君」

名前で呼ばれるが、嫌な感触はしなかったので、何も言わない事にした。

「それよりも、「ここはどこでしょう?」

「ここは、瑞穂坂じゃが……君は分かっててここに来たのではないのか?」

僕の疑問に中村さんが答えるが、何かがおかしい。

「実はこの人たちを探しているんですが、この街で見かけませんでしたか?」

僕はそう言つと、花見の時に撮影した集合写真を、二人に見せた。

「いや……わしは見てはいないな」

「私も」

「そうじゃ、周りにも聞いてみようかのお」

中村さんはそう言つと、外に出て行った。

と言つより、この家は随分古い家だな。

日本史の授業の時に見た昔の家の様な……つて、まさか!!

「……ッ!! やっぱり……」

「すまんのぉ。やはり誰も見てないらしい」

この時、僕は理解した。

なぜここに杏璃達がないのか……。

「いいえ。こちらこそすみません」

ここは、並行世界なんだ。

「あれ？ その子が良子ちゃんが言っていた人？」

「うん。浩介君だよ」

そんな時、黒髪をした二人の少女がやってきた。

「小野崎峰子おののき みねこです。皆からは峰と呼ばれてるから、そう呼んでね」

「私は、中寺杏子なかでらきょうこと言つ。よろしく」

「えっと、峰さんに中寺さんですね。僕の名前は先ほども言いましたが、高月浩介と言います。どうかお見知り置きを」

二人の少女にもとりあえず名前を告げる。

「さつきから気になったのだが、その敬語は止めてはくれまいか？

浩介君は私達より年上のようなからね」

「……分かった。あなたがそう言うのであれば、このスタイルで行くでしょう」

(どうした物か)

僕は頭を抱える事になった。

どうやってここから出ればいいんだ？

並行世界から脱出するには、次元にも関わる様な転送魔法を使うのが一番だ。

幸い僕にはその魔法がある。

それが『高月家儀流・序幕、次元の導き』だ。

これなら、元の世界に戻る事が出来る。

ただ、これを行使するには、今はまだ不向きだ。

なぜなら、周りには人がいる。

こう言つた魔法は人目を避けてやるのがベストだ。

だからこそ、僕は夜まで待ち、一人になるチャンス伺う事にした。

しかし、この時僕は気づいていなかった。

今の年代が昭和20年であると言う事と、いつここに敵国が攻め込んできてもおかしくないと言う事に。

それに気付く事になったのは、この日の夜だった。

Side out

「浩介！ 浩介！！」

気を失った浩介に、柊が必死に呼びかける物の、浩介の意識は戻らない。

「久美、浩介は一体……」

「分からないわ……ただ魂自体が別の場所に行ってしまったのだけは、分かった」

俺の問いかけに久美は冷静な様子で答えた。

「あの……それってどういう意味ですか？」

「つまり、兄さんは違う世界……しいて言うならこの町に漂う無念の気持ちが生み出した、世界と言うべきだけど」

俺達は久美の言葉に何も言えなかった。

訳が分からなかったというのが一番かもしれないが。

「なんで、久美ちゃんはそんなに冷静なのよ！！」

そんな中、沈黙を破ったのは柊の叫び声だった。

「……だつて」

柀の叫び声を聞いた瞬間、久美から表情が無くなった。

「私だつて、泣きたいよ！！でも、今私達が慌てていても何もならないでしょ！！」

「ふ、二人とも落ち着いて」

初めて見る久美の叫び声に全員が固まっていたが、準が、久美をなだめた。

（しかし、どうする？）

浩介の命を掛けた光魔法のおかげか、辺りに嫌な雰囲気はしないが、それがいつ消えるかは分からない。

（……感じる）

俺はこの地に宿る苦しみや悲しみと言った怨念を、かすかにだが感じていた。

早くしなければ、俺達も消えてしまうだろう。

動かしたいのは山々だが、浩介の体は鉛のように動かない。

久美の話では、浩介は自分の身に緊急事態が発生して意識を刈り取られた際に、周囲に敵と認識した人や物がいた場合は、動けなくするように魔法を掛けているのだと言う。

恐らくはそのためだろう。

そして、俺はこの危機を脱するための策を考えるのだった。

第80話 始まりを告げた戦い（前書き）

とうとう来ました80話。

100話まであと少しです。

第80話 始まりを告げた戦い

浩介Side

「な、なんだかすみません。助けて貰いさらには夕食まで」

「気にせんでもよい。こうして会えたのも何かの縁じゃ、こんばんは、ゆっくり休むとよい」

僕はありがたくも夕食をごちそうになっていた。

ただ、ぬか漬けと雑穀米だったが……

（まあ、信哉との鍛錬だとも思えばやって行けるし……中々美味だ）

どうも、こう言う物も僕に合ってたらしく、おいしく頂いた。

こうして夕食を済ませ、就寝となった。

その力の先にあるもの

第80話「始まりを告げた戦い」

「……さて」

皆が寝静まったのを確認すると、僕は誰も起こさないように、静かに家を後にした。

（ここで、やっちゃんおつか）

「我が名のもとに、導き手よその調べを奏でよ。高月家儀流・序幕、

次元の導き！」

呪文を紡いだ瞬間、僕の周りに魔法陣が浮かび上がる。そして、僕は元の世界に……。

「あれ、消えた!？」

戻れなかった。

なぜか魔法陣が消えてしまったのだ。

(どうしてだ?)

僕は必死に考えた。

この魔法はどの世界にいても行使できるのだ。つまり、それが出来ないと言う事は非対応の世界。

(まさか、ここって)

その時、ようやく僕は理解出来た。

この世界は並行世界でもなんでもなく、ただ単に、旧瑞穂坂の地に眠る死者たちの、無念の思いが集結して出来た世界。僕はずっと同じ世界にいたんだ。

そんな時だった。

ウーン！ ウーン！

突然のサイレン音が、この町一帯に鳴り響いた。

「空襲じゃ！」

「浩介君、早く家の中へ!!！」

これは敵国が攻めてきた事を知らせる物だ。

「……私達の町に、優秀な魔法使いがいれば」

そんな時、中村さんが呟いた一言は、やけによく聞き取れた。他は人々の悲鳴で聞けなかったのに。

（確か、この時代は日本には魔法使いはいなかったんだっけ）

僕は、日本史でやった授業を思い出した。

当時の日本では、シャーマンや巫女などと言った霊術系の物が主流だったため、魔法使いと言う者はいなかった。

魔法使いは様々な奇跡を起こし、戦況を優位にする事が出来ると言われていた。

それゆえに、魔法使いは神の使いとも言われるようになったのだとか。

（クリエイイト、ここでひと暴れしても史上には影響はないか？）

この地に眠るのが無念の思いならば、せめて幻想の世界では勝たしてやりたい。

何故だか、そうすれば出られるような気がしたのだ。

【はい。全く影響がありません。マスター、思いっきりやっちゃいましょう】

クリエイイトからの答えを聞いて、眠らせておいたプロトコールを全部始動させる。

「そつだな。じゃ、始めようか」
「こ、浩介君？」

僕の突然の言葉に良子さんが首を傾げて聞いてくるが関係ない。

「クリエイト!!」
『はい、マスター』

僕の呼びかけに、クリエイトは姿を現すことで答えた。

「も、もしかして……」
「魔法使い……なのか？」

二人は目を点にしてこつちを見ているが、そんなのは関係ない。

(まずは、爆撃からこの街を守らないとな)

「万物の楯よ、全ての脅威からこの街を守れ!!」 高月家儀流・序
幕、万物の楯!!」

僕の行使した魔法により、上空に壁が形成された。

「な、なんとという事じゃ」
「攻撃が通じない」

二人は外の様子を見てそう呟く。
そして空襲のはずなのに、何も起こらない事を不審に思った人たちが、次々と外に出てきた。

「な、なんだあの膜は!？」

「も、もしかして魔法使い!?!」

町の人達が驚いていた。

「良子ちゃん!?!」

「これはどうなってるんだ?」

すると、峰さんと中寺さんが、良子さんの所にやってきた。

「皆、この人魔法使いよ!! 私達の町を守ってくれたの!?!」

良子さんの言葉と同時に、人々の視線が僕に集中する。

「は。ありがたやありがたや。あなたは私達の神様です」

「そ、そんな神様って……」

お婆さんが僕を拝みながらそう言うが、僕は神という器ではない。

「せれじゃ、浩介。あそこでいまだに攻撃を続ける飛行機を落とせる?」

「そんなの、お安い御用さ!?!」

中寺さんの言葉に僕はそう答えると、クリエイトを構えた。

「リ・デランデド・メルスレイヤ・フレイヤル・ラ・アムレスイン
!?!」

久々にやる魔法呪文形式だが、難なく成功し魔法弾が放たれた。

それは戦闘機に直撃し、撃墜させた。

そして、僕は再び歓声と拍手が送られ、その後は、ひたすらに戦闘

機を撃ち落とし続けるのだった。

S i d e o u t

『マスター!!』

「!!!?」

考えを巡らせていると、ラジアから切羽詰まったような声が聞こえた。

それはすぐに分かった。

「も、もしかして、幽霊か!?!」

「ど、どうすればいいんだ!?!」

「雄真君!?!」

目の前にこっちに歩いて来る人影があった。

それを見た俺と神楽さんと神代と神代さんと久美以外の全員が慌てていた。

俺はと言えば、何故か冷静でいられた。

そして、俺達から3Mの距離まで近づくと、不意に動くのを止めこちらを見た。

それは黒髪の少女だった。

「ご無事でしたか」

「皆下がれ!?!」

少女の言葉に神楽さんが、手に剣を構えて警戒しながら言い放った。

「そう警戒しないでください。私の名前は中村良子です。この地に眠る遺恨の塊です」

「遺恨……だと？」

中村さんの言葉に、神楽さんが目を細める。

「はい、私達の目的は戦争に勝つ事でした。今まで優秀なお方を探していましたが、見つかりませんでした」

「……それじゃ、浩介がこうなっているのも」

「ええ、私達作り出した世界へと、引きづり込まれたのです」

柊の仮説を中村さんが認めた。

「だったら、浩介を開放してやってくれないか？」

「もちろんです。彼は最高の魔法使いです。彼のおかげで私達の遺恨はなくなりました」

俺の言葉に、中村さんは笑顔でそう答えた。

「もしかして……」

「はい。私達が勝ちました。とは言いましても、彼が開始早々3分で全滅させましたが」

中村さんの言葉に、俺達は言葉を失った。

浩介の事だ、俺達には影響がないと判断して、暴れたに違いない。

「ただ、一つ問題がありました……」

「なんだ？ その問題って」

俺は首を傾げながら疑問を投げかけた。

「遺恨の濃度が高すぎて、浩介様が出られない状態にあります」

「どういう事よ！！ 早く浩介を出しなさいよ！！」

「お、落ち着かんか！！」

中村さんの言葉に大声で叫びながらパエリアを構える柊を神楽さんの一喝で、抑え込んだ。

「浩介様を助け出すために、皆様に協力してほしい事があります」

「……それって、一体」

「はい。その事を説明する前に、私について来て貰いませんか？」

中村さんの言葉に春姫が俺に近づいた。

「ねえ、この人の事を信用できるの？」

「……」

春姫の言葉に何も返せなかった。

彼女の事には不明点が多すぎる。

このままついて行けば、酷い目に合うかもしれない。

「お願いです。私を信じてください。早くしないと、ここに眠り遺恨が再び襲ってきます。遺恨の動きが封じられている今しかないんです！！」

「……わかった」

「雄真君！？」

驚いたように俺を見てくる春姫……いや、全員が俺を驚愕の目で見ていた。

「ここにいてやられるんなら、一か八かの賭けをするしかないしな」

「まあ、そうだな。やられるんなら子力やってやるうじゃないか！

！」

俺の言葉に乗ってくる八子が、これほどまでに頼もしいと思った事はない。

「では、急ぎましょう」

そして、俺達は中村さんについて行くのだった。
全ては浩介を解放するために。

第81話 解放(前書き)

ようやくここで一つの騒動に終止符が打たれます。

第81話 解放

浩介Side

『マスター右です!!』

「了解!!」

僕は今上空にいる戦闘機を破壊していた。

「たあ!!」

僕は右手の指と指の間に、魔力で作成したカードを投げつける。

ドカーン!

さっきからずっとこの方法で撃ち落としている。
何となくだが爽快だ。

「クリエイト、残機は?」

『0です。増援もありません』

どうやら今ので最後だったようだ。

『では、降りましょうか』

「そうだな、ちょっと怖いんだが……あれ」

僕は苦笑いを浮かべて地上を見る。

そこには……

『お ……!!!!』

町の人々の大歓声を上げる光景が見えた。
この後大勢の人にもみくちやにされる事を覚悟しないとイケないな
と思いつつ、僕は地面に降り立った。
結局僕は、揉みくちやにされた。

その力の先にあるもの 第81話「開放」

あれから数十分は揉みくちやにされた僕達は、神社の方へと移動し
た。

「お疲れ様だね、浩介君」

「お疲れ 浩介君」

「よい働きだったな」

三人の称賛の言葉を受けていた。

「ところで浩介君」

中村さんが僕に話を切り出す。

「もう……気づいているんだよね？」

「……ああ」

僕は頷いた。

「いつから？」

「僕の次元を超える魔法が効かなかったときに確信したけど、感覚ではずつと前からだな」

峰さんの問いかけに僕はそう答えた。

序幕・次元の導きは魔法などで造られた幻想世界では、全く効果が無いのだ。

それが、僕にこの事を確信させる材料になったのだ。

「そう……それじゃ正直に言っね」

そして中村さんから真相を聞かされた。

「ここは、この街に眠る人達の、無念の思いから作られた世界なの。そして戦争で勝ちたいと言う願いを込められている世界でもある」

「なるほど……それでこの地に眠る人たちの遺恨は消えたんだな」

僕は確認のために、三人に聞いた。

「うん。浩介君の活躍で、みんな満足して成仏したよ」

「ありがとうね、浩介君」

峰さんの答えと同時に二人が頭を下げてきた。

「それじゃ、出方を教えてくれるか？」

「えっと、実はここの神社に祭られている神様の力なら、戻る事が出来ますが……」

言い忍ぶ中村さんの様子に僕は少なからず不安を覚えた。

「現世での神社の神殿が崩壊していますので、脱出は不可能です。」

「でも、現世の方で浩介君の友達が頑張って直しているから、大丈夫だと思うよ。」

「そうか……」

中村さんの言葉にショックを受けたが、峰さんの言葉で少し安心した。

それと同時に僕の心の中に負の感情が入りこんだ。

（また、なにも出来なかったな）

僕がやったのは、遺恨を消しただけだ。

それさえも、僕のドジが原因だ。

結局僕は災いの象徴にすぎないんだ。

「いいえ、違いますよ。あなたの力で皆は動いてくれている。それはすごい事だと思いますよ。」

「だから、浩介君も、応援しましょう。現世で頑張っている友達を！」

「……………そうだな」

二人の言葉に僕は気を切り替えた。

（でも、僕に出来る事って……………あったな）

僕はすぐに出来る事を思い出した。

「それじゃ、応援でもしましょうかね」

僕はそう言つと、目を閉じて意識を集中した。
そして、僕は舞った。

「それって、舞？」

僕は誰かの声にも耳を貸さずに舞い始めた。

神楽に教えて貰ったのが、ここで役に立つとは思ひもしなかったが。
なぜか、舞っていると、周りに頼もしい友人がいる様な気がした。

(頑張つて、雄真に皆)

僕は心の底で思いながら舞い続ける。

S i d e o u t

「ここです」

「ここって……」

「神社……よね？」

中村さんに案内されたのは、神社のような場所だった。
しかし、そこは神殿が崩れていたり、神社だとは到底思えない場所になっていた。

「ここは、遺恨の世界とこの世界を結ぶ入口になっています。しかし、神殿が壊れているために、それが出来なくなっているのです」

「どうすればいいんだ？」

俺の問いかけに中村さんは俺達に振り返る。

「これを修復すれば浩介様は出てくれます」

「よっし、ぱっぱとやっちやいましょうか!!」

中村さんの言葉を聞いた瞬間、八子が動き出した。

幸い横に工具らしきものがあつたので、大丈夫だろう。

こうして、俺達の修復作業が始まった。

「雄真、そつちを抑えててくれるか？」

「了解つと」

やる事は、完全に大工仕事だったが……

「準、釘を取ってくれ」

「分かつたわ」

男の俺と八子と神代の3人で力仕事を、女子たちはその手助けをしていた。

頑張つて、雄真に皆

『え!?!』

そんな中俺達に聞こえてきたのは、応援の言葉だった。

「ふふ……浩介様もやりますね」

何があったのかは分からなかったが、中村さんはくすくすと笑っていた。

「何か力が湧いて来たぞ!!」

「よし!! 早くやっちまおう!!」

何故だか俺達に力が湧いて来たような気がした。

まるで誰かが俺たちに、声援を送っているような何かを受けながら

……

「よし! これで完成だ!!」

そしてようやく俺達は、神殿を修復する事が出来たのだ。

「これで浩介様は戻ってこられます」

「え? 中村さん、体が」

中村さんの体はかすかに光始め、少しずつ薄くなり始めていた。

「私は遺恨の塊です。その遺恨が無くなったので私は消えるのです」

「ありがとね、良子ちゃん」

「フフ……お幸せにね」

そして、中村さんは消えて行った。

パアア！

「な、なんだあ！？」

突然光り出した神殿に、ハチが叫んだ。

「人？」

柵の言う通り、光に人影のような物が見えた。

しかし、気は抜けない。

もしかしたら、霊かもしれないからだ。

しかし、光が消えた時、そこに立っていた人物に、俺達は固まった。

なぜなら、その人物は……

「ふう……やっと戻って来れたな」

溜息をつきながらそう呟く浩介だったからだ。

浩介Side

「ふう」

僕は一通り舞終わり息を吐いた。
そんな僕に、中村さん達が拍手を送ってくれた。

「素晴らしかったよ」

「うん、とてもいい舞だった」

「素晴らしい出来だ」

「ありがとう、皆」

僕は三人にお礼を言った。

「それじゃ、これを受け取って」

「これは!？」

3人が差し出してきたのは、刀と薙刀だった。

「浩介君、見た感じだと霊払い師のように感じられたから」

「霊を成仏させる道具だよ」

「薙刀や刀は斬った霊をすぐに消す事が出来るからうまく使え。ま

あ、霊体である私達が言うことではないがな」

「ありがとう。大事に使うよ」

僕は三人にお礼を言うと薙刀と刀を受け取った。

「さあ、早く出た方がいいよ」

「分かりましたよつと。儀流・序幕、次元の導き!」

そして僕の体が白い光で包まれたかと思うと、一瞬で僕は転送された。

「ふう……やっと戻って来れたな」

光がやみ、僕はそう呟いた。

「浩介！」

「兄さん……！」

「ぐはぁ……？」

それと同時に僕に、体当たりをしてくる人物がいた。

「杏璃、久美」

「よかった……本当に良かった」

「うん……うん……！」

涙声の二人に、僕は少々戸惑いながらも戻ってきた証の言葉を口に
する。

「皆。ただいま」

『お帰り！』

こうして僕は遺恨の世界から解放された。

Side out

「そう……そんな事が」

遺恨の世界での事を、浩介から聞いた終はそう呟いた。
ただ、浩介の大暴れに関しては全員が、ただただ笑うだけだったが
……。

「それじゃ、帰りましょう」

「そうだな」

「そうですね」

準の提案に全員が頷くと、出口に向かって歩いて行く。

「え？ もう朝!!!?」

外に出た俺達が視たのは、朝日が出始めている光景だった。

「どうやら、この中には長い時間いたようだな」

神代の言葉に、全員がポカ〜ンとしていた。

「俺と奈緒美と神楽さんは、浩介のサイホリング号で休ませて貰
おうかな」

「そうだね、久しぶりの休暇だし」
「はあくお気楽なことだ」

神代さん達の言葉に浩介は、呆れながら言い返した。
そんな時だった。

ありがとう

「「え？」」

突然聞こえてきた声に、俺と浩介はほぼ同時に、後ろを振り向いた。
しかし、そこには誰もいなかった。

「どうしたの？雄真君」
「どうしたの？浩介」

春姫と柊が怪訝な表情で、俺と浩介に聞いてくる。

「いや、何でもない」
「右に同じく」

俺と浩介はそう言うと、春姫達の元に走って行った。
こうして俺達の幽霊騒動は幕を閉じた。

第82話 恐怖の前兆（前書き）

季節外れのホラーですが、どうぞ

第82話 恐怖の前兆

9月23日

「雄真君、次はここに行こうよ」

「それじゃ、その次はここね、浩介」

旧瑞穂坂に行った翌週の日曜日、俺と浩介は春姫と柊と一緒に買い物などを楽しんでいた。

所謂Wデートと言う物だが、こうなった原因は春姫とのデートの約束をした事を忘れた俺が、浩介と映画を見る約束をしまい、さらに浩介も忙しい最中だったので、俺との約束を忘れて柊とのデートの約束をした事だった。

もちろん、それが分かった時はかなりの修羅場になった。

『だったら、皆で一緒に行けばいいんじゃないか？』

それは浩介の機転を利かせた一言で、解決した。

「ねえ、春姫。次はこの洋服を買おうよ」

「そうだね杏璃ちゃん。だってこの代金は雄真君達が持つてくれるもんね」

ただ俺は春姫の、浩介は柊の買った洋服の代金を払うと言う、罰が科せられたが……。

その力の先にあるもの

第82話「恐怖の前兆」

俺はそんなにお金を持っていなかったため、春姫の服の代金を支払う事が出来なかったが、浩介が代わりに払ってくれた。

「悪いな。浩介にまで払って貰って」

「気にすんな。僕と雄真は親友だろ」

やはり持つべきは友だ。

「でも、払ったお金は返してね」

「……………分かった」

浩介が悪魔に見えた瞬間だった。

さて、そんな事は置いておき、今俺達は前で行こうとしているお店を探している春姫達を待っていた。

「平和だな」

「そうだな……………」

俺は感慨深くそう呟く。

思い返せば今まではやれ秘宝事件だ、やれ戦いだと平和な日を過ごせる事はなかった。

こう言う日も悪くはない。

「なあ、雄真」

「どうした？ 浩介」

そんな中、浩介が俺を呼ぶ。

「あれって、雄真にも見えるか？」

「あれって、なんの」

俺は浩介が指差す先を見て言葉を失った。

そこは、手元にある本を見ている春姫達の上空にある、何の変哲もない看板だった。

ただ一点を除いて………だが。

その看板が、風もないのに不気味なように揺れていた。

「なあ、どうして揺れてんだ？」

「分からないから、困ってんだ」

俺は揺れている看板を凝視する。

次の瞬間。

「「な!?!」」

俺達は声を上げた。

看板をブランコのように押し出す、白い手が見えた様な気がしたからだ。

(おいおいまじかよ)

白い手はすぐに消えたが、看板の揺れはどんどん激しくなっていく。それはいつ落ちてもおかしくなくらいに。

(でも、落ちたら春姫達が!)

真下にいる春姫達に看板が命中して、命の保証は出来ない。声を掛けようにも、周りの雑音で絶対に聞こえないだろう。

俺はどうすればいいかが、分からなくなっていた。

「なあ、雄真」

「何だ！ 浩介」

俺はこんな状況なのに、ゆっくりとした口調にイラつきながら聞き返す。

「もし神坂さんの体を間違えて触っても、許してくれるか？」

「は？ ま、まあ春姫が許すんなら」

俺は浩介の質問の意図が分からなかったが、とりあえず答える事にした。

俺の第六感が、そうした方がいいと告げていたのかもしれない。

「分かった……それじゃ」

浩介が両手に魔力を集束させる。

「何をする気だ？ 浩介」

「こっするん……だ!!」

俺の疑問に浩介は両手を春姫達の場所に押し出すように翳す。

「どっせい〜!!」

そして今度は左手を左斜め後ろに、右手を間後ろに下げた。

「きゃあああ!!……!!?」

その瞬間、春姫達はまるで紐に繋がれているかのように、俺達の方に半ば飛んでいる様に引き寄せられてくる。

「のわぁ!?!」

「よっ」と

俺は春姫を慌ててキャッチし、浩介は柊を冷静に受け止めた。

「浩介!! あんた何を」

柊が、浩介を問い詰めようとした瞬間だった。

ガシャン!!

それは雑音の中でやけに響いて聞こえた。

「怒鳴る前に、二人はあっちを見る事を進める」

浩介はそう言っつて前方の方に視線を向けた。

「「な!?!」」

「っ!!」

それを見た春姫達は驚きの声を上げ、俺は息を呑んだ。

そこにはあの揺れていた看板が、地面に落ちている光景だった。

「も、もしかして浩介は、あの事を知って……」

「まあ……な」

柊の仮定に浩介が頷いた。

「ありがとう、浩介」

「ありがとうございます。高月君」

「お礼なら雄真にも言っちゃってくれ」

「え!？」

俺は浩介の意外な言葉に、思わず声を上げた。

「あの時、雄真が許可してくれなかったら、僕はなにも出来なかったんだ」

「まあ、癪だけど、ありがとう」

「ありがとう。雄真君」

柗と春姫の感謝の言葉に、俺は良かったと内心思った。

(でも、あの手は一体……)

俺は心の底でそんな疑問を感じていた。

浩介Side

僕は、唐突な寒気に襲われた。

だからこそ僕はふと、上空を見上げた。

そこには揺れている看板があった。

「なあ、雄真」

「どうした？ 浩介」

俺は一応確認のために、雄真にも確認を取ろうとした。

「あれって、雄真にも見えるか？」

「あれって、なんの」

雄真の様子から、やはり見えているのだろう。

「なあ、どうして揺れてんだ？」

「分からないから、困ってんだ」

僕は看板をもう一度見る。

その時だった。

「「な!?!」」

看板を押し出す白い手が見えた。

あれは明らかに幽霊だ。

しかもそれが次第に揺れが激しくなって行った。

「なあ、雄真」

「何だ！ 浩介」

僕の言葉に雄真がイラついたように聞いてくる。

「もし神坂さんの体を間違えて触っても、許してくれるか？」

「は？ ま、まあ春姫が許すんなら」

僕の問いかけに雄真が、半場固まりながら答えた。

「分かった……それじゃ」

雄真の答えを聞いた僕は、両手に魔力を集束させる。

「何をやる気だ？浩介」

「こつするん……だ!!」

雄真の疑問に僕は答えながら両手を杏璃達の場所に、押し出すように翳す。

「どつせい!!」

そして今度は左手を左斜め後ろに、右手を間後ろに下げた。

これは相手を魔力の紐で縛る為の物だ。

それを応用して、引き寄せる用途で使用したのだ。

「「きゃああああ!!!!」」

その瞬間、杏璃達は僕達の方に半ば飛んでいる様に引き寄せられる。

「のわあ!?!」

「よつと」

僕は杏璃を冷静に受け止め、雄真は神坂さんを慌ててキャッチした。

「浩介!! あんた何を」

杏璃が、僕を問い詰めようとした瞬間だった。

ガシャン!!

それは看板の落ちた音だった。

「怒鳴る前に、二人はあつちを見る事を進める」

僕はそう言っつて前方の方に視線を向けた。

「「な!?!」」

「っ!!」

それを見た杏璃達は驚きの声を上げ、雄真は息を呑んだ。

「も、もしかして浩介は、あの事を知って……」

「まあ……な」

杏璃の仮定に僕は頷いた。

「ありがとう、浩介」

「ありがとうございます。高月君」

「お礼なら雄真にも言っつてやっつてくれ」

「え!?!」

雄真は僕の意外な言葉に、思わず声を上げた。

「あの時、雄真が許可してくれなかつたら、僕はなににも出来なかつたんだ」

「まあ、癪だけど、ありがとう」

お礼を言った二人は、落ちた看板をもう一度見る。
看板の周囲には、野次馬がたかっていた。

「ありがとう。雄真君」

「でもこの看板、なんで落ちてきたのかしら？」

「建てつけでも悪かったんじゃないの？」

腕に抱きとめた杏璃を離すと、看板を見てそう首を傾げていた。

あれは立て付けではなく、人為的だ。

しかも、霊のだ。

「神坂さん、雄真。この札を自分の部屋の何処でも良いから、張っておいてくれる？」

「え？ 何でだ」

雄真が僕に聞いてくる。

「いやな予感がするからな。杏璃は光の魔法使いだから、はじく事は出来るけど」

「えっと、ありがとう……」ざいます？」

神坂さんが疑問形でお礼を言った。

「それじゃ、帰ろうか」

「そうだな」

「そうね」

雄真の提案により、僕達は帰る事にした。

(何だろう……この嫌な感じは)

僕はそんな中、嫌な予感を感じていた。

Side out

「ねえ、浩介」

「何だ？ 杏璃」

春姫達を寮に送っている途中、全員が何も話さない中、柊が浩介に話しかけた。

「もしあたし達が幽霊に取り憑かれたら、浩介はどうするの？」

「魂の中に入り込んだ、異物を取り除いて出てきたやつを叩き斬る」

浩介の言葉に俺達は微妙に恐怖を覚えた。

「それって、あたし達も傷つく？」

「まあな、怪我はするかもしれないな。それにしばらくは魔法も使えなくなるし」

「だったら、なるべく怪我をさせないようにしてね？」

柊は浩介にそう頼んだ。

「いやでも、取り憑かれれば必ずそうなるぞ？」

「そ・れ・で・も！ 約束だよ？」

俺は内心、無駄だと思っていた。

浩介は人を切ることなんて全く気にしていないし。

「……………善処する」

「嘘!？」

俺は驚きのあまり、思わず声を上げた。

あの頑固な浩介が、柊の提案を聞いたのだから

「聞こえてんぞ」

「は!?! しまった!?!」

俺にじと目で見てくる浩介を見た春姫達が、ちょうど寮に到着した
ようで、逃げるように寮に入って行った。

「覚悟は良いか？ ゆ・う・ま？」

「え、あ、や、やめて!?!」

そして俺は浩介に引きづられるように、連れていかれた。

「ぎゃあああああ!?!?!?!」

この後の事は……………思い出したくない。

第83話 狂った歯車

9月24日

「……………」

俺はいつも通りに起きた。

しかし、なんでだろう。

体が重く、意欲が出ない。

これがいつもの俺だったか？

俺はそう疑問に思うほど、力が出なかった。

「……………死にたい」

試しに呟いた言葉。

それだけで動く動力源になった気がした。

もう考える事すらが面倒になってきていた。

(気の向くままに行こうか)

俺はそう思い、制服に着替える。

その後の事は何も覚えていない。

その力の先にあるもの
第83話「狂った歯車」

浩介Side

放課後、僕は杏璃と教室で談笑していた。

「今年のクリスマスはどうしようかな？」

「まだ3カ月あるだろ」

「それでもよー！ 浩介には分からないのかな。この複雑な女心が」

こうして話している時間が、僕にとっては至福の時だ。

そんな時をぶち壊す事件が起こった。

それは、ある人物の乱入だった。

ガタン！！

「きゃ！？」

「うわ！！」

突然乱暴に開けられたドアに僕達は驚いて、ドアの方を見た。

「春姫？」

「神坂……さん？」

そこにはなぜか涙目の神坂さんが立っていた。

「高月君……！！」

「うわあ！？ か、神坂さん！？」

「あー！！ 春姫！ 何浩介に抱きついてんのよ……！！」

突然の神坂さんの行動に、杏璃が怒鳴った。

「雄真君が……グス……雄真君が」

「雄真がどうしたんだ？」

事情がありそうだったので、僕は神坂さんに詳しい話を聞く事にした。

Side out

春姫 Side

「どうしたの？雄真君。いきなりこんな所に呼んで」

放課後、私は雄真君に呼ばれ、屋上に行きました。屋上には空を見ている雄真君がいました。

「春姫」

「何？雄真君」

そう言っつて私を見てくる雄真君は、どこか違和感を覚えました。

「……………別れよう」

「……………え？」

突然の言葉に私は、頭の中が真っ白になりました。さよならという声が聞こえたような気もしました。

「雄真君？」

そして私が気付いた時には、そこには雄真君の姿がありませんでした。
私はいてもたってもいられずに、雄真君を探すために屋上を後にしました。

そして、廊下で雄真君を探しているとき、高月君の声がありました。

（高月君なら！！）

私は一閃の望みを掛けて高月君の所に行きました。

Side out

浩介Side

「そんな……嘘でしょ」

神坂さんの話を聞き終わった杏璃は、驚いたように神坂さんに聞く。

しかし、神坂さんは涙を流しながら首を横に振った。

「それよりも気になるな」

「え？」

「いや、違和感を覚えた所だ。一体どこに違和感を覚えたんだ？」

僕の疑問に神坂さんは必死に考える。

「なんだか……雄真君、とても暗かった。何かに絶望していた様な感じだった」

「暗い……絶望……さようならという言葉……まさか!？」

僕の脳裏に、一つの可能性が出てきた。

でも、まさかあいつが……。

「な、なに?」

「雄真は、自ら命を絶つ気だ!！」

「!?!?!」

僕の言葉に、二人は目を見開く。

「こうしてる場合ではない。杏璃は僕と一緒に上空を、神坂さんはこの校舎内をくまなく探してくれ!！」

「わ、分かったわ」

「う、うん!！」

僕の指示に二人は頷くと、神坂さんは教室を飛び出していき、僕は窓から空へと駆け出す。

(それにしても、どうして突然そんな事を……)

そんな疑問が脳裏をよぎったが、今は雄真を探すべきなので、僕は地上をくまなく探し続けるのだった。

S i d e o u t

第84話 絶望の心

「……………」

俺は学園の屋上にいた。

別の場所に行こうとしたが、ここでもいいだろう。

(なんでこうなったんだろうな)

俺は心の中でふと疑問に思う。

俺はどうして死にたいと思ってるんだろう？

(まあ、いいか)

俺は考える事を放棄した。

『おいで……………』

頭の中に響く声が、俺にはいい子守歌に聞こえた。

俺はその声に誘われるようにフェンスの方に歩いて行く。

『こつちに……………おいで』

また俺を呼ぶ声がある。

そして笑い声まで聞こえた。

それは悪意に満ちていた。

(どつでもいいや)

そして俺はフェンスを飛び越え、屋上の端に立つ。
後一步踏み出せば俺は死ねる。
その一步を踏み出そうとした瞬間だった。

「雄真君!!!」

さっきまで恋人だった少女の声したのは……。

「来るな!」

俺は彼女に拒絶の言葉を言い放った。

その力の先にあるもの 第84話「絶望の心」

春姫Side

私は校内をくまなく探していた。

「雄真君!!! 雄真君!!!」

それでも、雄真君は見つからず、私は少しずつ焦りが出てきた。
もしかしたら、雄真君はもう……。

(ううん!!! まだあきらめちゃダメ!!! 雄真君なら絶対にどこかにいる!!!)

私は再び走り出す。

「……………もしかして」

この時私にはなぜか雄真君が、屋上にいる様な気がしました。どうしてかを説明しろと言われても、私にもよく分かりません。

私は、この直感に従って一気に屋上へと続く階段を駆け上がります。

その間の事は全く記憶にありません。

気がつくと、私は屋上にいました。

屋上はさつきと変わらず、夕日が屋上を照らしています。

そして、屋上にあるフェンスの向こうには……………

フェンスを飛び越えて、前をずっと見ている雄真君の姿がありました。

「雄真君!!」

私は雄真君の所に駆け寄ろうとします

「来るな!!」

「っ!!!??」

しかし、雄真君の拒絶に、私は思わずその足を止めてしまいました。

「死んじや駄目!! 雄真君!!!!」

私は雄真君を止めようと声を掛けました。

「……………死なせてくれ」

でも、雄真君から返ってきたのは悲しそうな声でした。

そして雄真君は、飛び降りようと体を傾けました。

「っ!! 雄真君!!!!」

気がつくど私は、左手で屋上から飛び降りた雄真君の腕を掴んで、もう片方の手で屋上の床の段差部分を掴んで自分の体を支えています。

「離してくれ! 春姫!!」

「いや…だよ! 雄真君!!」

私は暴れる雄真君を離さないように、力強く掴みます。今私はぶら下がっている状態です。

もし床の段差部分を掴んでいる手を離したら、私達はこのまま落ちると言う事は、すぐに分かりました。

「なんでだよ…:…なんで俺の邪魔をするんだ!」

「好きだからだよ!! 雄真君の事が、好きだからだよ!!!!」

私は雄真君に気持ちをぶつけます。

でも、私の力はすでに尽きていました。

(も、もうだ…:…め)

自分の体を支えていた片手は掴む場所をなくし、私達はそのまま重力に従って落下し始めました。

「きゃああああ!!!!!!」

もうだめかと思った瞬間でした。

「え!？」

「神坂!!! 大丈夫か!!!!」

突然落下が止まったかと思うと上空から声が掛けられました。

私はその声につられるように、上空を見上げました。

そこには必死な様子で片手をマジックワンドを掴んで、自分の体を支えていて、もう片方の手で私の手首を掴んでいる高月君の姿が見えました。

Side out

浩介Side

「クリエイト、見つからないのか!」

『は、はい。反応はありません』

僕は上空で雄真の魔力反応を探していた。

しかし、魔力隠滅でもしているのか、雄真の魔力反応を感知する事が出来なかった。

僕の心を焦りが満たし始めていた。

「……………クリエイト、学園に戻るぞ!!!」

『そ、そうですね。もしかしたら神坂さんが、見つけているかもしれませんし』

僕の言葉にクリエイトはそう答えると、学園に進路を変えた。飛行魔法は現在クリエイトに任せているので、自動操縦だ。

『マスター、あれは神坂さんではありませんか？』

学園が見え始めた時、クリエイトが僕にそう伝えてくる。

「どれどれ」

どこかくらいは、すぐに見当がついたので、僕は目を凝らして見た。

「おいおい……悪い冗談はよしてくれよ……クリエイト、急降下だ
！……！」

僕が見たのは、神坂さんが雄真諸共落ちて行く所だった。

僕はクリエイトに指示を出して急降下した。

そして僕はクリエイトから飛び降りると、神坂さんの片手に向けて手を差し出した。

(うまく、捕まえられれば……！)

そして僕は神坂さんの腕を掴んだ。

「え！？」

「神坂……大丈夫か……！」

突然の事に驚く神坂さんに声を掛ける。

タイミング良くクリエイトが来たので、僕は片手でクリエイトを掴む。

「う、うん！」

「危機一髪だったな……今引きあげる！！」

そして僕は神坂さん達を屋上へと引き上げた。

「雄真君……どうしてこんな事をしようとしたの！」
「……………」

神坂さんの問いかけに、雄真は何も答ええない。
というより、雄真自身が神坂さんを見ていない。

「浩介がうらやましいな」

「な、なんでそこで高月君が出てくるのよ！」

神坂さんが雄真に問い詰める。

というより、神坂さん完全に怒ってるな……。

「浩介は、心が強い……だからいつも前向きでいられる」
「……………」

僕は雄真の言葉に、ただ黙って聞いていた。

「だから俺も闇の魔法使いになるうかなくなって思ったんだけど、無理
だった。俺も、浩介のようになりたいんだ！！！」

「雄真君……………」

神坂さんが悲しげな表情で、雄真を見る。

「神坂……ちよっとどいて」

「え？」

僕は雄真の一言に、どうしようもない位にキレた。

僕は雄真の目の前まで移動すると、胸ぐらを掴んで手加減なしで、雄真の顔面を殴った。

ズガアアアン！！

「ガハ！」

「ええ！？」

思いつきり壁に叩きつけられる雄真に、神坂さんが驚いたような声を上げる。

「貴様、もう一度言ってみろ！！」

「ッ！！」

僕を見る雄真の表情には、驚きが含まれているような気がした。

「闇の怖さも知らない餓鬼が、闇を語るんじゃないねえ！！」

僕は雄真に向けて思いつきり叫ぶ。

「闇の魔法使いだから前向きでいられる？ それ本気で言ってるなら、雄真には失望した。確かに僕は前向きだろう。でもな、それはあくまで僕個人の事だ。後ろ向きなのか前向きなのかは本人次第だ。それに闇も光も関係ない。僕の苦労や苦しみを知らない奴に、まねをされるのはな、とても不愉快なんだ！！！！」

それが僕の心からの叫びだった。

そして僕は雄真のそばまで近寄ると、優しく語りかける。

「それに……僕は雄真のようになりたかったな。何の権利もなく、役割もなく行動するのに制限がない雄真のように。だから、二度とそれを言わないで欲しい。そして偉そうに僕に立て吐いたころの本当の雄真に戻って欲しい」

「本物の……俺」

僕言葉が、雄真の心に響いたのだろうか、

「あ、あれ……俺一体何を……」

目に生気が戻ったかと思うと、雄真は変な事を言い始めた。

「お前一体何をしていたのか、覚えていないのか？」

「浩介？ 春姫？ どうしたんだ二人とも？ なんだか顔が怖いけど……って、いたたた……」

本気で何も覚えていないようで、雄真は立ち上がろうとしたが、体中の痛みで立ち上がれないようだった。

「あ、ごめん。さっき雄真を全力でぶん殴ったからその痛みだと思う。やっちゃったね、てへ」

「何がてへだ！！ というより、なにさわやか顔で言ってるの！？ というより一体何が！？」

「あー、分かったから、落ち着け。何があったかを話すから」

こうして僕は雄真の体の怪我を治し、神坂さんは、なにがあったのかを説明した。

「そんな事が……その浩介、悪かった」

「その言葉は僕よりも、もっと言うべき人がいるんじゃないのか？
雄真の言葉に振り回されて、死の危険まで与えたとある人物に……」

何があったかを理解した雄真は僕に謝ってくるが、僕はそう言うと雄真は慌てて神坂さんの方を見た。

「その、春姫……ごめん」

「ううん……いいの。その代り……」

「その代り？」

な、なんだ！？

何か甘い雰囲気……

「……キスして」

「……………分かった」

(あのお二人さん？ここに僕がいる事忘れていませんか？)

「「ん」」

(ん。じゃないよ！！ 僕の前でそんな事をしないで！！！！)

僕の心の叫びは熱々の二人には聞こえる事はなく……

「きゅっ」

とうとう僕の許容範囲を超えたのか、僕は気を失った。

パタン

「「きゃあ!?!」」

何か、二人の驚く声が聞こえた様な気がした。

「全く、二人とも今後は気を付けてよね」

「「ごめんなさい」」

杏璃の言葉に二人が謝る。

あの後、杏璃がやってきて僕の介抱をしてくれたいらしい。

「浩介がこう言う事に免疫がないこと位、いい加減分かってよね」

「「言い返す言葉もありません」」

「まあまあ、今日はこのくらいで」

とりあえず僕は杏璃を抑えることにした。

「それじゃあたしたちは帰るけど、浩介は?」

「あゝ。僕はちよつとここに残るよ」

「そう？ それじゃまた明日ね、浩介」

「さよなら、高月君」

「じゃあな、浩介」

雄真達は屋上を出て行った。

「クリエイト、どう思う？」

『雄真さんの事ですか？ そうですね……マスターの思っている通りだと思います』

「そうか」

クリエイトの答えに僕はため息をつく。

(本当に、幽霊に憑かれやすいよな雄真は)

あれは完全に霊障だ。

恐らく、精神を一時的に破壊されたのだろう。

まあ、今は修復されているからいいが……

(雄真が寝た時に、心の中に侵入して本格的に直すか)

僕はそう処置を決めると再び夕焼けを見る。

「雄真は、僕の事を強いつていうけど……強くなってるよ」

その呟きは、少しだけ冷たい風が掻き消す。

弱いからこそ、その部分を補うように人を殺して行くのだ。
止めたいのに、止められない。

一度スイッチが入れば、僕は二度と止まらない。

（どうにかしないとな）

僕はそう思うと、屋上を後にした。

その日の夜、雄真の精神内に侵入し、浄化を終えてようやくこの騒動は幕を閉じた。

……かに見えた。

S i d e o u t

第85話 闇を抱えし少女（前書き）

すみません、まだ重い話が続きます。

第85話 闇を抱えし少女

???? Side

「ウフフ……あなたって本当にお人好しね」
「誰!?!」

夢の中で私に話しかけてくる。

「くだらないわ……でももう終わり……」
「どづいう事!」

私は語りかける何かに言い返します。

「あなたの幸せ、壊してあげる」
「いやああああ!?!」

私は目を覚ましました。

(夢……なの?)

そう思いつつ、ふと横を見る。

「ッ!?!?!?!」

そこには、私に似た人影がありました。
そして、私は意識を失いました。

Side out

その力の先にあるもの

第85話「闇を抱えし少女」

「雄真、早く行くぞ」

「ああ、分かってる！」

『マスター、いい加減浩介さんを待たせるのは、止めましょうよ』

呆れたように言ってくるラジアに、俺は何も言い返せなかった。

今完全に、敗北感を感じていた。

「それじゃあ、皆さん、始めてください」

実習場に移動して、しばらくすると、鈴莉母さんが入ってくると、そう言った。

ちなみに実習場はかなり広く、数百人がここに入っても余裕だと思えるぐらいの広さだった。

おそらく魔法に対しての耐性があるのだろう。

今日の課題はシューティングだった。

シューティングとは、相手に魔法を放ちもう片方が、防御魔法で防

ぐというものだ。

「春姫一緒に……」

俺は、春姫を誘おうとした。

しかし、この空間の異常に気付いたのだ。

「上条君、やめなさい!!」

実習場内に突然、鈴莉母さんの声が響いた。

声のした方を振り向くと、そこには信哉が立っていた。しかし信哉は、どこか様子がおかしかった。

『ま、マスター、あれは……』

信哉の今の姿は異常だった。

目は白目をむいていて、体の周りからはものすごい魔力が吹き荒れていた。

そして、鈴莉母さんは信哉を止めようとしたが、信哉は鈴莉母さんを振り切った。

そして、そこに立ちふさがったのは浩介だ。

「信哉、どうしたんだ!？」

浩介は、信哉にそう聞いた。

しかし信哉が、浩介のに片手を翳した瞬間だった……

「あぐ!？」

なんと浩介は、いとも簡単に弾き飛ばされたのだ。

「浩介!!」

柊が浩介の方に駆け寄ったので、俺も駆け寄ろうとした。しかし、そんな俺を止める者がいた。

「やっぱり高月君のところに行くんだ？」

それは春姫だった。

しかし、いつもの春姫とは何かが違う。

それは春姫の目が、絶望に満ちているような顔をしていた事だと思
う。

「浩介のことが心配なんだ」

俺は春姫に正面から向き合った。

「……………次は許さないからね」

春姫はしばらく考えて、俺にそう言つとどこかに歩いて行った。

「浩介!!」

俺は、春姫のことが気になったが、浩介の方に駆け寄った。

「雄真か……………大丈夫だ」

浩介の姿は、悲惨なものだった。

浩介の魔法服のマントが、ズタズタに切り裂かれ今浩介が身に羽織
っているのは、袖がない、黒いランニングシャツのようなものだっ

た。

「く!? ある程度の闇魔法には耐えられるはずなんだが」

浩介は、立ち上がりながらそう言った。

浩介は魔法服と、本人の高い防御力でダメージは通りにくいと言っていたのを思い出した。

「信哉、浩介に謝りなさいよ!!」

柊が信哉にそう言うが、信哉はそれを無視して、真ん中に歩いて行った。

「うおおおおおおお!!!!」

そして、両手を広げると信哉はものすごい雄叫びをあげた。

「兄様!!」

そこに、上条さんが慌てた様子で来た。

「上条さん、信哉にいったい何があつたんだ!!」

俺は上条さんに、何があつたのかを聞いた。

確か、信哉と上条さんとで組んでいたはずだ。だから何かを知っているかもしれない。

「わかりません。いきなり、様子が変わったと思ったら、このように」

どっちら上条さんにすらわからないらしい。

「これは……魅了を使ってるんだ」

浩介が、思いついたように言った。

「魅了って何なのよ、浩介？」

柊が浩介に聞いた。

俺にも、よくわからなかった。

「魅了って言うのは瞳と瞳を通して、相手を催眠状態にさせるんだ。掛けられれば、掛けた人の思うどおりに動かされるんだ」

浩介は、緊迫した様子で簡潔に説明した。

「しかし、レベルが高い魔法使いなら、瞳を通さなくても特定の人に掛けることはできるんだ。ちなみに言うが僕にはこれは出来ない、遠隔で掛けることはできるが、対象者の攻撃スタイルすら変えることはできないんだ」

浩介は、最後にそう付け加えた。

その次の瞬間、信哉が俺達に襲いかかった。

「ダークインテリジェント！」

浩介は信哉に手加減なしで、闇魔法を放った。しかし、信哉には全く効かなかった。

「やっぱり、闇魔法を相殺されてる………こうなったら杏璃と久美

が、力を合わせて信哉に攻撃するんだ」

浩介は、二人に向かってそう言った。

「どうしてだ？」

俺は、浩介に聞いた。

「信哉の今の属性は闇。闇が闇に攻撃してもあまり意味がないんだ。だから、弱点である光で攻撃すれば、何とかなるかもしれないんだ」

浩介は、そう説明すると、柊と久美が前に出た。

「わかったわ、久美ちゃん、合わせて行くよ!!」

「ええ!!」

二人は息を合わせると、詠唱を始めた。

「光よ、われらの言霊を聞け！ここに在りし闇を、我らの光で浄化せよ!!ライトニング・ブレスレイン!!」

二人がそう叫んだ途端、二人から黄緑色の魔法砲が、放たれた。

「ぐおおおおお!!!!?」

そして、二人の魔法砲は、信哉に命中した。

信哉は苦しんでいるような声を出すと、がっくりと倒れた。

そして、何とかこの騒動は幕を閉じたのだ。

??? Side

「あらら〜案外あつけなかつたわね〜」

私は使えないお人形が倒れるのを涼しげに見ていた。

「それにしても、あの少年……邪魔」

私の目には険しい表情をする、ボロボロの魔法服を着た少年しか、見えなかった。

Side out

浩介 Side

「ふう、本当にどうすんだよ……これ」

僕はズタズタに破れた魔法服のマントを見てそう呟く。
DSYも40まで減っているようだし……

ちなみに、今僕は実習場に残っていたので一人だ。

「あれ、神坂さん？」

「……………」

僕の前に立っていたのは、いまだに魔法服を着ている神坂さんだった。

「ど、どうしたのかな？」

「高月君……………」

僕の問いかけに、神坂さんは口を開いた。

「死んで」

そして、僕に迫ってきたのは、魔法刃だった。

S i d e o u t

第86話 盟約の弱点

「授業を始めるぞ!!」

昼休みを終え、先生が教室に入ってきて来る。

「神坂と高月はどうした？」

先生の言葉にクラスの誰もが答えられない。
浩介と春姫は、実習から戻ってきてない。

(どうしたんだ?)

俺は少なからず不安を覚えた。
なんだか嫌な予感がしたのだ。

ドカン!!

「な、何事だ!?!」

突然響き渡る爆音に、先生も含めた全員が驚く。
普通ではこのような爆音は響き渡らない。
しかし、現に爆音が響き渡っている。
これは何かが起こった事を示していた。
そして、俺にはなぜかこれと浩介が絡んでいるような気がしたのだ。

「こ、こら!! 小日向! 柊! 高月!!!!」

俺達は一斉に教室を飛び出した。

「久美ちゃん、浩介は今どこにいるの!!」

「桜の木があつた所!!」

そして、俺達はお花見をした場所へと走って行った。

その力の先にあるもの

第86話「盟約の弱点」

浩介Side

「ツク!!」

「どうしたの？ さっきまでの威勢が無いよ？」

僕はとても追い詰められていた。

突然神坂さんに襲われているのだ。

しかも、僕が持っていたはずの魔剣で……だ。

「さすがは、魔剣だ。全ての魔法を断ち切るから防御魔法も効かない」

そう、あの魔剣は全ての魔法を断ち切ってしまうのだ。
だから僕の防御魔法すらも貫くのだ。

最初はそれに気づかず左手に、かなり重い傷を負った。
本来であれば、魔法で攻撃するのだが……。

「あれ？ いいのかな？ 大事な彼女さんとの約束を守る事になって
も」

「ッく!!」

背中に装着しているクリエイトに、手を回すと神坂さんは不気味な笑みを浮かべて僕にそう言い放つ。そのせいで、僕は攻撃に踏み出せなかったのだ。

(あの野郎……僕が杏璃との約束を守ろうとする事を知って!!)

つまりは、弱みを握られて僕は逃げる事を余儀なくされているのだ。しかもあの怪我のせいで、少しずつ体が言う事を聞かなくなっている。

それにあの神坂さんは、偽物だ。

きっと心を霊などに操られているのだろう。

霊的な物である事は、すでに分かっていたのだ。

「があ!!」

「ふふふ。ようやく体に傷を付けられたわ」

(僕とした事が、何たる失態!!)

一瞬の隙を突かれ、左足に魔法刃が命中した。

「ッく!!」

もうすでに逃げる事も難しくなっていた。

「確かに、約束はある……でもな」

僕は神坂もどきにそう言うと、懐から一冊の魔導書を取り出す。

「何のつもり？」

「つまりは、傷つけなければいいってことだ!!」

そして、僕は魔導書を開いた。

「遅い者の嘆きを知れ……高月家儀流・第6幕、豚足の嘆き!!」

開かれた魔導書のページに手を合わせながら技名を言うと、紫色の魔法光が神坂もどきに放たれる。

「ぐあああ!! う、動きが遅く……ッ!!」

効果は抜群のようだ。

神坂もどきの動きは若干遅くなっていた。

「な、なんだその魔導書は!!」

余裕が無くなってきたのか、本性が現れてきたようだ。

「これは『高月家儀流議定書』だ。お前は知らなくてもいいことだから割愛する。いくぞ!!」

さて、この『高月家儀流議定書』は僕がよく使う高月家儀流の事が記されている魔導書だ。

高月家の魔法使いは、これを肌身離さず持っておりこれが無いと、高月家儀流を使う事が出来ない。

そしてこの魔導書を媒体とすれば、高月家儀流を行使する事が出来るのだ。

ただし、問題は相手に与えるダメージが下がる事だ。

本来であれば、この魔導書にある技の一つ一つの技に、所有者の攻撃力を加えた物が、ダメージとなる。

そんな物でもあるが、今の場面で早くに立つだろう。傷つけないで、何とかする事が出来るのだから。

「罪ありし者を縛れ！ 高月家儀流・第3幕、罪の十字架！」

「ツク！？ 調子に乗るな！！ こんな物すぐに！！！」

神坂もどきは僕の拘束魔法を破ろうともがき出す。

いつものなら、絶対に破る事は出来ないが、劣化したような物だ。すぐに破られるだろう。

「我が速度を上げたまえ……高月家儀流・第1幕、駆け巡りし隼！」

僕はその間に行動速度を上げる。

「はああああああ！！！」

そして僕は一気に彼女の元に近づく。

「何！？」

「うぐ！！！」

僕は彼女の右手に握られている魔剣を奪い取った。

それと同時に、手に鈍い痛みが走る。

「よくも……よくもおお！！！」

相手もかなり逆上している。

しかしこれでは、かなりじり貧だ。

幸い相手は霊に乗っ取られているにすぎない。

魔法を扱うことは不可能だ。

しかし、彼女の中に入り込んだ靈魂は、そう簡単には分離できない。

僕と神坂もどきの間に、こう着状態となった。

しかし、そんな状態を打ち破る存在が、現れる事になった。

「浩介!!」

「兄さん!!」

Side out

「浩介!!」

「兄さん!!」

俺達が公園に駆け付けると、そこには腕と足を怪我しているのか出血していた。

「って、春姫!?何やってんのよ!!」

「待って、杏璃さん!!彼女神坂さんじゃない!!」

春姫に問いただす終に、久美がそう叫んだ。

春姫じゃない?

それってどういう意味だ?

「浩介、一体何が……」

俺は浩介に、なにが起こったのかを聞いた。
突然春姫が浩介を襲ったと言う事を……。

「そんな……まさか春姫が……」

柊は、浩介の話聞いて、信じられないとばかりに呟いていた。

「雄真、頼みがある」

「何だ？浩介」

「雄真のASMの力で靈魂を彼女の体から分離して欲しいんだ」

浩介の頼みは、とんでもない物だった。

「そ、そんなこと俺には出来ない!!」

「出来るはずだ……彼女のおかしな光を貫くだけだ……頼む!!」

俺の言葉に、浩介が反論する。

「分かった。やってやろうじゃないか!!」

俺は浩介にそう答えると、すぐにASMの力を覚醒させる。

「……」

久美と柊は何も言わなかった。

「ゆ、雄真君!?!それを私には打たないよね?高月君、頭がおかし

くおまけく

「久美ちゃん！浩介を運ぶのはあたしの役目よ！！」

「杏璃さんこそ、兄さんを運ぶのは妹である私の役目です。あなたはお呼ばれではないんですよ〜っだ！！」

久美と柊が浩介を運ぶので、言い争っていた。

結局この二人は、目が覚めた浩介に折檻されることになった。もっと関係ないが、目が覚めた春姫は浩介にずっと頭を下げ続けていた。

浩介もそれには苦笑いだっただが。

第87話 共通点と、神隠し事件

9月26日

「でも、なんだか気味が悪いわね」

「そうだな、俺に続いて春姫まで……」

昼休み、オアシスで俺達は今までの事について話していた。

「もしかしたら、二人には何らかの共通点があるんじゃないのか？」

「共通点？」

浩介の言葉に、春姫がオウム返しに聞き返した。

「そうじゃなきゃ、おかしいだろ。こつも連続で憑依されるなんて事はざらにはない」

「それって、雄真に憑依していた幽霊が、春姫に移っただけじゃないの？」

浩介の言葉に柊がそう指摘した。

「それはないな。雄真の場合は憑依されている様な感じはしなかった」

柊の指摘に浩介がそう反論する。

「何か、俺って毒物のような扱いをされてないか？」

「そんなことあるわけないじゃない」

「そつだよ……たぶん」

俺の言葉に柊と浩介は目を逸らしながら答える。

そんな時だった。

「雄真、浩介！！ 準が……準が！！！」

「ど、どうしたんだよ！？ 八チ」

血相を欠いた八チが、俺達の所にやってきたのは。

「落ちついたか？八チ」

「ああ、悪かった」

俺達は八チを座らせ、水を吞ませて八チを落ち着かせた。

「それで、一体何があったんだ？」

「準が……準がいなくなっただん！！」

八チのその一言に、一瞬俺達の時間が止まったような気がした。

『ええ　！！！！？』

そして、俺達の叫び声も響き渡った。

その力の先にあるもの　　第87話「共通点と、神隠し事件」

3人称Side

9月25日

時刻は夜の8時。

そんな夜遅くに、瑞穂坂学園の普通科校舎内に人影があつた。
そう、”二人分”の。

「準、見つかったのか？」

「うん、見つかったわ。ありがとね、八チ」

この二人が校内にいる理由は、準が教室に忘れ物をしたことだった。

八チは、強引に連れてこられたただけだが……。

「それよりも、いきなり呼び出すのは止めて貰いたいんだが……」

「あれれ？　それじゃ、八チが春姫ちゃんの胸を　わっわっ！！

言う通りにしますから、それだけは言わないでくれっ！！！！！！

分かればよろしい」

ちなみに、準の言っているのは前に八チが不用意に呟いた一言だった。

それが『姫ちゃんの胸を揉んでみたいぜ』だった。
これが雄真の耳に入ったらどうなるかくらいは、簡単に想像できる
だろう。

「それじゃ、帰りま……」

教室を出た途端、準の足が止まった。

「おい、どうしたんだよ？ 準」

「あ……あ……」

八手の問いかけにも準は体を震わせるだけで、答えなかった。

「お、おい…… 本当はどうしたんだよ？ あそこに何があるんだよ
……」

八手は準の怯えたように見ている場所を見るも、そこには何もな
かった。

しかし、準はそれに怯えているのは間違いがなかった。

「お
」

そして、八手がもう一度準を問いただそうとした時だった。

「いやあああああ……！！！！」

「あ、ま、待ってくれ……！！！！準……！！！！」

突然悲鳴を上げて走り出す準を、八手は追いかける。

「準…… 何処だよ！ 準……！！！！！！！！」

しかし八子は準の姿を見失ってしまった。

Side out

「八子……ちょっと向こうに行こうか」

「高溝君。私とお話、しまししょうね？」

「え、あ、その……いやああああ……!!!!」

俺と春姫は、八子を連れて表へと行く事にした。

一回地獄を見せないとな？」

「あゝあ……自分から言いたくない事を言うなんて、馬鹿だろ」

そんな中、俺の背後でそんな声が聞こえた様な気がした。

「つまり、今日になっても準が来ないから、何かあったのかと思い、

僕達に助けを求めたと言う事か」

「ああ。頼む！ 準を見つけてやってくれ！！！」

八チの話で浩介がまとめた。

「それって、神隠しじゃないのか？」

「神隠し……かは分からないが、調べてみる必要はあるな」

浩介はそう呟くと、携帯を取りだした。

「あ、もしもし、僕だけど……そう、仕事だ……ああ、場所は瑞穂坂だ。それではよろしく」

浩介は電話口で何かを話すと、電話を切った。

「という事で、今晚調査をするぞ」

「それなら俺も！」

浩介の言葉に八チも同行すると言い出す。

「八チは家で待機している。何心配すんな、ちゃんと準を見つけ出すから」

「ああ……頼む」

浩介の言葉に八チは納得したようだった。

「それじゃ……みんな、協力して貰えるか？」

浩介の確認の言葉に、俺達は無言で頷いた。

真夜中、俺達は瑞穂坂学園の校門前にいた。

「全く、せつかくの休暇だったのに」

「悪いな。僕だけだとちょっと難しそうだったからな」

文句を言う直人（本人がこう呼んで欲しいとのこと）に浩介がそう言い宥める。

「とにかく、入ろう」

「了解だ。他の皆も覚悟はいい？」

「当たり前だ」

「あたしもよ」

「私もだよ」

神楽さんの確認の言葉に、俺達は一斉に答えた。
そして俺達は校舎に入って行った。

「直人、どうだ？」

「辺りに霊の気配があつて特定は難しいな」

「そうか……」

直人の言葉に、浩介は残念そうに答えた。

今浩介が探しているのは、最も強い反応を示す霊体だった。

浩介曰く、それが大元だと言うのだが……。

「学校というのは、霊が集まりやすい場所だから……見分けるのはかなり難しくなりそうだ」

浩介がそう呟いた瞬間だった。

「……！……！」

「……浩介」

「ああ」

突然湧きおこった膨大な霊気を、俺達は感じ取った。

最初はまったく感じる事が出来なかったが、色々あったせいで霊感が強くなったのだろう。

そして、それはすぐに姿を見せた。

「な、なによ……あれ」

それを見た柊が怯え様に呟く。

それはとても巨大で、首から上のない”人”だった。

「下がって三人とも!!」

「終術・破滅霊合!!!!」

神楽さんから放たれる白銀の光は、巨大な霊を捉える物の、何の変化もない。

「ツク!? 私が使う最強の力すらも通じぬのか」

神楽さんが左手を抑えて、苦しげな表情を浮かべながら言う。
「どうやら、今のが限界の力だったらしい。」

「皆、こつちだ!!」

「サンキュ、浩介!!!!」

一つの教室のドアを開けた浩介が、俺達になかに入るように誘導する。

俺達はなかに入り、巨大な霊が通り過ぎるのを待った。

「行っ たみたい……」

外を見ていた春姫の言葉に、俺達は教室から出た。

「追いかけるぞ!!」

「あ、ああ!!」

浩介の言葉に、俺は気合を入れて返事をする。

「二人も、大丈夫か？」

「ば、馬鹿にしないでよね！」

「だ、大丈夫だよ」

浩介のからかうような問いかけに、柊達も答える。そして、俺達は巨大な霊を追いかけようとした。

「な、なんだ！！ これは？」

俺達の目の前に広がるのは、たくさんの霊体。

「破術・滅閃易霊！！」

神楽さんがすぐに浄化の光を放ち、霊体が消えて行く。

「ふ、増えた！？」

「これじゃ、キリがないな」

直人が呟くのも当然だろう。

なぜなら、一度減った霊体が再び増えて行くのだから……。

「こうなったら、ここは俺達に任せて浩介たちは、巨大な霊を追いかけて！！」

「……………分かった。三人とも、頑張れよ」

三人の事を良く知っているからなのか、浩介と直人達には信頼関係が強かった。

「それはお互い様だ」

「……こっちだ!!! 皆、はぐれるなよ!……!」

俺達に向き直した浩介は、俺達にそう言つと一気に駆け出す。

「こつちの方向つて、式守家の秘宝のある場所じゃない!」

「確かに、そうだよ」

森の中を走りながら、口にした柀の言葉に、春姫が肯定する。
明らかにこの先には式守家の秘宝のある、場所が続く門がある場所に通じている。

「ここだな」

「そうなるな」

門のある場所に到着した俺達は、中から強い靈気を感じていた。

「行くぞ……」

そして俺達は中に入って行った。

「皆、この魔法陣の先にターゲットがいるから、気を抜くな」

「そんなの、言われなくても分かってるわよ！」

浩介の言葉に、柊がそう答える。

そんな柊に浩介は、苦笑いを浮かべていた。

「それじゃ、転送魔法を発動させるよ」

そして、俺達は、式守家の秘宝のある場所へと飛ばされた。

第88話 繋がる線（前書き）

これで、第5章も完結です。

お付き合いいただきありがとうございます。

第88話 繋がる線

「ようこそ、私達の舞台へ」

使鬼の間に出た俺達に掛けられたのは、女性の声だった。

「あなたは!!」

「あら、お久しぶりかしら？ 出来損ないのお人形さん？」

春姫の声に反応したのか、立っていた若い女性が答えた。

「ッ!!」

女性の言葉に、春姫が怒りをあらわにする。
女性の横には、準が倒れているのも見えた。

「準を返せ!!」

「あらあら……そう熱くならないで欲しいわね」

刀を手にした浩介だが、突然黒い何かによって行動を止められた。

その力の先にあるもの 第5章 『瑞穂坂幽霊騒動(終)』 第
88話 「繋がる線」

「これは……結果？」

「そうよ。君、とても強そうだから動きを止めさせて貰うわね」

浩介は唇を悔しそうに噛んでいた。

「あなた達の事はあの廃村から、ずっと見ていたのよね」

「そうか、つまり共通点というのはそんな所だったか」

ようやく俺は分かったのだ。

浩介の言っていた共通点というのは 旧瑞穂坂町に行っていた事だったのだ。

「そうよ、坊やのおかげで私の計画は全て失敗」

女性はそう言いながらやれやれと、言いたげなポーズを取る。

「あんたの目的って、何なのよ」

「そうね……ここに眠る幽霊たちを蘇らせて、たくさんの人間を呪い殺す事だね」

柊の問いかけに女性は、笑顔でそんな事を口にする。

「そんな事、させるわけないだろ！」

「あなた達がどう言っても、私を消さなければ意味はないの。あと1時間もすれば、幽霊たちは再び目覚めるわ」

「それはどうかな？」

そんな中、久美がいつもと同じような感じで言い放った。

「何？」

「あなたの力……霊力はかなりあるみたいだけど、果たして私達と兄さんを拘束できるほどの力なのかな？」

いつの間にか春姫達まで結界で拘束されていた。
今、フリーなのは俺だけという事だ。

「な、なんだ！？ この気は」

突然巻き起こった気に女性はうろたえていた。
それは浩介自身が発していた。

「雄真、刀と薙刀……どっちが好き？」

「は？ 薙刀……だけど」

意味不明な浩介の問いかけに、俺はとっさにそう答えた。
すると突然、俺の方に薙刀が放り投げられてきた。

「こ、これは？」

「それは霊を斬る神剣らしい。それを使ってあいつをぶった切れ！」

浩介の説明に、俺は茫然とするしかなかった。

「そんな事が出来るわけが……って！？ う、動けない！？ なん
だこの紐は！！」

女性の両手両足は、黒い紐で固定されていた。

「お前の舞台はつまないんだよ。今はチーズケーキのような舞台
がおもしろいんだ！」

いや、チーズケーキのような舞台ってどんな舞台だよ……。

「行くぞー!!」

「くー!? この、外れなさい!!!」

ASMの力を発動させた俺は、紐を取ろうとする女性に向けて突っ込む。

「この世にありし悪しき魂よ、この世の塵となり、消える!!!」

なぜか俺の口を次いで出てきたのは、そんな言葉だった。

そして、俺は……。

「ギャアアアアアア」

女性を切り裂いたのだった。

それと同時に、辺りに満ち溢れていた異様なエネルギーは、嘘のように消えて行った。

「霊体の消滅を確認。お疲れ、雄真」

俺に労いの言葉を掛けながら近寄る浩介に、俺は薙刀を差し出した。

「……………それは雄真が持つててくれ。もしかしたら何かの役に立つかもしれないしさ」

「わ、分かった……………って、準は!?!」

俺は慌てていまだに倒れている準の方に、駆け寄った。

「しっかりしろ、準!!!」

準に呼び掛けるも、全く反応がない。
そんな俺をよそに、浩介は冷静だった。

「準さんは、ちょっとしたショック状態だから、あと少しすれば意識が戻るよ」

「そ、そうなのか？」

浩介の言葉に俺は半信半疑だったが、今この場でこういった事に詳しいのは浩介だけなので、信じるしかなかった。
そんな時だった。

「ん……あれ？　ここは……」

「準！（準さん！）」

「え？　雄真！？　それに浩介君も！？　って、何なの？　これ」

目が覚めた準に、俺達はほっと胸をなでおろしていたが、準は何が何だかがさっぱりのもよう、ただ混乱していた。

「そんな事があったの……全く思いだせないわ」

俺達は何があったのかを準に話したが、あの日に何があったかの記憶が全くないようだった。

その後、旧瑞穂坂に行った人たち全員が、浩介によるお祓いを受けることとなった。

こうして、幽霊騒動は幕を閉じたのだったが……。

浩介曰く、この土地は霊を集めやすらしく、今でもそうだった相談は後を絶たなかった。

第5章 『瑞穂坂幽霊騒動』 終

中書き

どうもTRです。

『その力の先にあるもの』を読んでいただきありがとうございます。

第5章はいかがでしたでしょうか？

今回は幽霊VS浩介でしたが、この章内に付箋を一つ張ってみたのですが、気付かれた方はいるでしょうか？

この付箋が次の章で本領を發揮するのですが……まあそれは置いておきまして。

この章を書くころと思ったきっかけは、人とても強い浩介を人以外で戦わせてみようかな〜と思ったのが一番です。

どれだけ浩介の力が非常識なのが分かってもらえれば、それだけで嬉しいです。

さて、少しずつクライマックスに向かうこの作品ですが、何と次章は、オチ担当の彼が主役びたいな感じの話です。

どのような話になるかは、第6章で……。

それでは、本作をこれからもよろしくお願いします。

第86話 いしへの口癖（短編）

いしへのいしへの第6章、はごまします。

第89話 いつもの日常

??? Side

衰える。

それが私の普通でした。

毎日毎日力を失ってしまう家系に、私は恐怖も覚えました。でも、今私には光があります。

そう、あの”お方”という光が……

Side out

その力の先にあるもの 第6章『八千恋物語』 第89話「いつもの日常」

10月1日

「あれ？ 今日には雄真もオアシス？」

「準か。まあな。たまにはと言う事だな」

俺と春姫、上条さんと信哉に柵の5人でオアシスで昼食を食べていると、準たちが俺達の所にやってきた。

「それじゃ、私達も一緒に食べても良い？」

「ああ、構わないぜ」

そんな時だった。

「伊吹ちゃん、今日はこちらで食べましょ……あ、兄さんに皆さん！」
「だからすもも、そんなに引つ張るで……む、小日向雄真。そなたもオアシスか」
「まあな。たまには」

オアシスに入ってきた仲良し(?)二人組は今日も一緒だったようだ。

「そう言えば、浩介君の姿が無いわね」

「む？ 確かに言われてみれば」

準の言葉に伊吹が辺りを見回して答えた。

そう、今日は浩介は欠席なのだ。

「という事は、杏璃ちゃん はいは〜い。危ない妄想する人は外に行ってください〜い って、久美ちゃん!？」

八チが馬鹿な事を言おうとすると、それを遮るように注文した料理を運んで来たのは、久美だった。

「あれ？ 久美ちゃん。何で久美ちゃんがウエイトレス？」

「何でも、人が少ないらしくて、浩介命令で手伝わされているみたいだぞ」

準の疑問に俺は直球で答えた。

久美はただ苦笑いをするだけだった。
ちなみに他にも数人いた。

それが……。

「何で、俺が……」

「私と直人君とのスイートな休みが……」

「これで浩ちゃんの好感度がアップ……」

文句を言ったり、危険な事を呟いている直人と奈緒美さん、神楽さんがいた。

「な、なるほどね」

準はそれを見て苦笑いしていた。

「ところで、なんで浩介君は休んでるの？」

「それが私にも分からないんだよね。ただ公務だとは聞いているんだけど」

準の疑問に久美が答えた。

「公務とあたしのどっちが大切なんだろう」

柊の呟きはとりあえずスルーしよう。

「大変よね、家が名家だと」

「だが、慣れてしまえば問題はない。それが次期当主だ」

伊吹の言葉には、重さがあった。

「ただいま」

「おかえりなさい、浩介さん」

そうして家に浩介が戻ってきたのは夜の7時を回った時だった。

「お疲れ様」

「どうも。公務というのもたまにはやらないと駄目だな」

そう言っつて俺の横に座る浩介は、どことなく疲れていた。

「なあ、浩す あゝだめだ。僕は、休ませて貰うよ あ、ああ。
お休み」

浩介に話しかけようとしたが、浩介はかなり疲れていたのか、弱い足取りでリビングを後にした。

「なんだか、疲れてましたね、浩介さん」

「ああ。倒れなければいいんだけどな」

俺はそんな不安を覚えつつ、テレビを視るのであった。

浩介Side

僕達がいるのは、とある高級料亭だった。

「本日は、わざわざお越しくれまして、ありがとうございます」
「あ、いえ。こちらこそ、お招きいただき光栄です」

そして僕達は今、先方の家の当主達と対面していた。

「水園家の当主、みなそのひであき水園英明と申します」
「私は、次期当主のみなそのなでしこ水園撫子と申します」

タキシードを着込んでいたちよび髭を生やした、いかにもダンディな要望をした男性が当主らしい。
そして水色のドレスを着こんだ、黒くてサラツと伸びた髪をした僕達と同じ年にも見える少女が、次期当主だ。

「高月家当主、高月宗次郎と申します」
「同じく次期当主、高月浩介です」

僕達は礼には礼を返すと言う事で、自分の名前を名乗った。

「それでは、早速ですが、例の件について話したいと思います」
父さんの切り出しによって、僕達の間にも極度の緊張感が漂う。

「貴殿のことに關して調べさせていただきました。その結果に關してお伝えします」

僕はそう言いつつ、手元に資料を取りだした。

今僕の前にいる水園家というのは、大手企業を統括する家系なのだ。

その家系とこうして対談しているのには、とある理由があるのだ。

「貴殿の家系には何ら不審点、問題点は見つかりませんでした。よって例のサンプルとして貴殿の申し出を聞きたいと思えます」
「そうですか！ 本当にありがとうございます」

僕の通達を聞いた当主が、席を立って頭を下げてきた。

「あの、宗次郎様」

「はい。何でしょうか？ 撫子様」

そんな中、次期当主が突然父さんに話しかけた。

「あの、浩介様にお話したい事があるので、少々席をはずしてもよろしいでしょうか？」

「……………ああ、構わないよ。こんなのでよろしければ。後我々も少し話をしたらここを後にするから二人とも、自分の家に直接帰るように」

父さんの言葉に突っ込みたいのを、僕は必死にこらえた。
というより、なんだ？ 話って。

「ありがとうございます。それでは、浩介様」
「……………分かりました」

僕はため息をつくのを必死に我慢して、次期当主と共に外に出た。

「で、何処まで行くのでしょうか？」

「……ここならいいでしょう」

ずっと歩き続けている僕達だが、瑞穂坂商店街の入り口にさしかかると、次期当主が足をとめた。

「浩介様……高月君、私の事は知っていますか？」

「……当然だろ、水園。同じ学校なんだから」

今まで固い口調だったが、口調が柔らかくなった次期当主……水園に僕は力を抜いて返した。

彼女、水園撫子は瑞穂坂学園の普通科の、2年生でもある。

そう言った伝手もあり、彼女からの要請を聞いたのが今回の対談につながったと言う事だ。

「それで、話しというのは何？ 出来ればすぐに休みたいんだけど」

最近公務をしていなかったせいで、どうも体がなまってしまったよ
うだ。

「はい。実は私の家系はご存知のように、男手がないのです」
「確かに、末代はあんただからな」

水園の言葉に僕も乗る。

「そこなのですが、高月君にお願いしたい事が……」
「一応聞かせて貰えないか？」
「はい……実は」

僕は水園の頼みに耳を傾ける。

「なるほど、そう言うことか」
「はい。お願いできないでしょうか？人を視る目がある高月君なら、信用が出来るんです」
「うーん」

僕は水園の頼みに難色を示した。

「確かにそうだけど、さすがにあんたの一生を決める事にまで、僕が責任を持つと言うのは……」

「お願いします！！ 今は高月君しか頼れる人がいないんです！！」

そう言っつて頭を下げってくる水園に、僕は……

「ああ、分かったから！ 頭を上げて！！」

「本当ですか！？」

「ああ」

承諾したのだった。

「それでは、見つかりましたら、連絡を」

「了解」

この後、僕は水園を家まで送り届けて、家に帰るのだった。
……………疲れた。

S i d e o u t

第90話 日常狂想歌（前書き）

久しぶりにコメディっぽいコメディになったと思います。
それでは、どうぞ

第90話 日常狂想歌

10月2日

「おはようございます。準さん」

「おっす、準」

「「おはよう、準さん」」

「おはようすももちゃん、雄真、久美ちゃんそれと、浩介君」

朝、いつものように通学路で挨拶をした俺と浩介とすももは、準と合流して学園に向かう。

「そう言えば八チがいないけど」

「なんか、先に行くって言って行っちゃったけど」

何処となくだが、デジャヴを覚える様な朝的一幕だった。

その力の先にあるもの

第90話「日常狂想歌」

「おはよ 浩介！！ な、なんだあ！？」

校門で準たちと別れ、魔法科の教室に入ろうとドアを開けた瞬間、八チの怒鳴り声と共に八チが出てきた。

「なんで八チがここにいるんだよ！？」

「そんなことより、浩介どういう事だ！！」

俺の疑問を無視して、八チは俺の後ろにいた浩介に迫ろうとしていた。

「ちょっと、落ち着け！とりあえず教室に入ろう」

俺は何か八チをなだめ、教室の中に入る事が出来た。

「で、どうしたんだ？八チ」

「実はな、昨日浩介と黒髪の可愛い美少女が、仲良く話をしてたのを見た奴がいるんだ！！ しかもタキシード姿で！！！！」

八チの口から語られたのは、到底嘘っぱちに近い物だった。

「ああ……あいつか」

しかし浩介は考えるしぐさを見せると、そう呟いた。

「浩介！ これはどう言う事だ！！！！」

「浩介！！ あたしという物がありながら！ どういう事よ！！！！」

それを聞いた柊と八チは、浩介にすごい剣幕で詰め寄る。

「杏璃と久美に問題」

しかし、浩介はそれを気にせず悠長にクイズをし始めていた。

「僕が公務中に美少女とデートをする男でしょうか？ ……恋人だと言ってるんだから、ちゃんと答えられるよな？ 杏璃」

「そんなの！ 実際にしてるんだから、するに決まってるじゃない！！！！」

柊が答えたのと同時に、浩介がため息をついたのを俺は見逃さなかった。

「それじゃ、久美」

「うん。兄さんは公務中に……特に公務服を着ている最中は、女性とましてや婚約者以外デートなんてする様な事はしないよ。兄さんはそう言った所には誇りがあるから、しないと思うよ」

「正解」

久美の答えに、浩介が頷きながら言った。

「たぶん僕と一緒にいたのは、現在交渉中の先方の人だろう」

「そ、そうなの？」

「そうだよ。全く、少しは僕を信用して欲しいな。杏璃が僕の事を思ってくれているように、僕だって杏璃の事が好きで好きでたまらないんだから」

「浩介／＼／」

浩介の言葉に、柊は顔を赤くしていた。

というより、よくそんなきざな言葉が出るよな。

「本当なのか！ 本当なんだな！！！」

しかし、八手はそれを信じられないのか、浩介に顔を近づける。

「本当だ！！ というより、気持ち悪いから、近寄るな！！！」

「へぶ！？」

浩介は鬱陶しそうに八手を押し飛ばした。

それが八子の悲劇の始まりだった。

八子の吹っ飛んだ先にいた人物によって巻き起こされたのだが。

「ひゃ!?!」

「きゃ!?!」

「んな!?!」

八子が吹っ飛んだ先にいたのは、奈緒美さんと神楽さんに久美の三人だった。

ちなみに今の悲鳴の理由は、とんだ拍子に八子が両手で久美と奈緒美さんの胸を掴み、神楽さんの胸に顔を突っ込んでいたからだだった。

「あれ……柔らかい……って、ひ!!!」

八子がそう呟いた途端、何処からともなく殺気が漂い始めた。ちなみに、浩介はと言えば……。

「皆、死にたくなかったら、廊下側に避難してね」

楽しそうに教室にいた人達に避難勧告をしていた。

「わ、私の……」

「胸を……」

「触った……な」

「え、そ、その……」

いつものとは違って、三人から溢れる殺気に、八子が後ずさりする。

……だが。

「さあ、屑。星屑となれ!!」

「え、そ、その、止め」

八子が止めようとした時だった。

ズガアアアアン

「ぎゃああああ!!?」

八子は神楽さんの魔法によって吹っ飛ばされ、その先にいたのは…。

「消えなさい、塵屑!!!!」

ドスン!

「ぐヴァあああ!!!!」

ガチャン、ヒユウウウウウン

久美と奈緒美さんによって思いっきり殴られた八子は、窓ガラスを割って外に吹っ飛んで行った。

「ふう……またつまらないゴミを消してしまった」

この時、久美の恐ろしさを初めて思い知ったのであった。ちなみに余談だが、八子は3時間目前に着たらしい。

放課後、俺達は校門の方に歩いていった。

「ああ、俺にも彼女が欲しい〜な〜。魔法さえあれば、俺のユートピアが〜!!」

そう言っただけなのは、言わずもながらハチだ。
一緒にいる準たちも若干呆れていた。
だが……

「そんなに恋人が欲しいのか？」

「ああ!! 欲しい!!」

浩介の真剣な眼をした問いかけに、ハチは即答で答えた。

「……………ハチ、忠告しておく」

そして、浩介は目を閉じてハチに言いだした。

「魔法の力が絶対だと思っているのであれば、お前は一生一人だ」
「な、なんだってえ!？」

ハチがショックを受けたように、叫んだ。

「力とは、得る物ではない。人を守るための物なんだ」

そして、浩介はそう呟くと、一人でスタスタと歩いて行った。

「何だったんだ？ 一体」

その問いかけに答えられる者は、誰もいなかった。

浩介 Side

「あ、もしもし、僕だけど」

僕は、人気のない場所に行くと、とある人物に電話を掛けた。

「例の件で、良い人物を見つけた。名前は高溝八輔……そう。人間性はちよつと難があるが、根はいい奴だ。絶対に騙すような奴ではない」

それは、僕のやるべきことだった。

そして、電話口の人物の声では、どう思っているかかなにも分からなかった。

「詳しい資料はそっちに送るから。では」

そして、僕は電話を切った。

「ふう……」

僕は空を仰ぎ見る。

空は薄いオレンジ色のカーテンが掛っていた。

「さじは投げた。後はお前次第だ。八チ」

そして、僕は家に向かって歩き出した。

願わくば、八チの未来が幸せになりますようにと、思いながら。

S i d e o u t

第91話 八千の新たな日常（前書き）

ここから怒涛の展開を入れたい……無理だと思いますが。

第91話 八チの新たな日常

八チSide

「はあ、今日も一人か」

俺は一人、さみしく家に帰っていた。

浩介や雄真達は、用事があるとかで先に帰ったんだ。

「何で雄真や浩介だけが」

雄真達は女の子に囲まれて、俺だけはずっと一人。

何ていう差別だ！

そんな時だった。

「あの！」

「え？」

俺は慌てて声のした方を見る。

そこには、瑞穂坂学園の制服を着た黒い髪の美少女がいた。

「高溝、八輔さんですね？」

「そ、そうですが、何か？」

そして、この日から、俺の環境は一転したのだった。

Side out

その力の先にあるもの

第91話「八子の新たな日常」

10月4日

「八子が、女子とお弁当を!？」

「そ、そうなのよ!! 私もう、びっくりして」

昼休み、オアシスで浩介達といつも通りに昼食を取っていた俺達は、準から驚きの話を聞いた。

「ま、まさか八子に限って、ないない!」

柊は真っ先に否定していた。

「ちょっとこっちに来て!」

準の剣幕に押されるように、俺達は屋上へと連れていかれた。そして、そこにいたのは……

「八輔さん、これをどうぞ」

「お、ありがとよ、撫子ちゃん」

仲良くお弁当を食べている八子と女子生徒の姿だった。

「うわゝ、綺麗」

「あ、あたしには叶わないけどね」

俺の横にいた春姫が呟き、柊は、負け犬の遠吠えの様な事を言っていた。

「なあ、いったん戻らない？」

「そうだな。なんだか、見てるのも悪いし」

浩介の提案に俺は頷くと、俺達は屋上を後にした。

「お、雄真に姬ちゃんに浩介じゃねえか！」

放課後帰路についていた俺達は、偶然八チと鉢合わせになった。

「お前ら驚くなよ。この子は俺の彼女の水園撫子さん、だ！」

顔がニヤニヤしている八チだが、水園さんは、俺達にお辞儀をしてきた。

「水園撫子です。お三方の事は良く、お耳に入れております」

「えっと、小日向雄真です」

「神坂春姫です」

「高月浩介だ」

俺達は名前を言って行った。

「八輔さん……そろそろ。それでは、私達はこれで」

「それじゃあな、雄真！」

「あ、ああ」

俺は仲良く歩いて行く八子達を見て、変な感触に苛まれていた。

「雄真、八子もそれだけ成長したんだよ」

「……………そうだな」

浩介の言葉で、俺はようやく八子がすっかりしたんだなと実感するのであった。

八子Side

「なあ、撫子ちゃん」

「はい、なんででしょうか？」

雄真達と別れてしばらく一緒に歩いていた俺達だが、俺は気になった事を撫子ちゃんに聞いてみる事にした。

「なんで、俺を？」

「それは……八輔さんがとても優しい人だからです」

撫子ちゃんの言葉に、俺は喜びのあまりに叫びそうだったが、必死にこらえた。

そう、それは昨日のことだった。

「高溝、八輔さんですね？」

「そ、そうですが、何か？」

俺の言葉に、撫子ちゃんは頭を下げると、俺にこう言ってきた。

「私と付き合ってください!!!」

その時は俺は弾みで受け入れたが、今になって不安になった。
でも、これが夢でなくてよかったとつくづく思う。

(どうだ、雄真！ これで俺も楽園生活だぜ!!!)

「八輔さん？」

「ああ、何かな？撫子ちゃん？」

ちよつと物思いにふけていたようだ。
いけないいけない、男の俺がしつかりしなければ。

「今週末の日曜日は、お暇ですか？」

「ああ、いつでも俺は、ひまだぜ」

撫子ちゃんにちよつときざつぱく行ってみた。

「それは良かったです。今週末の日曜日に、私とお買い物に行きませんか？」

「!!! もちろん、喜んで行くぜ!!!」

これはデート!??

なんだか、怖いが俺って幸せだな

「それでは、オブジェ前に10時集合でいいでしょうか？」

「分かったぜ。それよりも、俺達は付き合ってたんだからよ、敬語は良いぜ」

「……………分かりました。それじゃ、改めて八輔さん。よろしくね」

「こちらこそ！」

こうして俺達は、歩いて行った。

「それじゃ、私はこっちだから」

「おお。また明日な！」

俺は撫子ちゃんの姿が見えなくなるまで、手を振り続けていた。

そして、俺も家に帰ろうとした時だった。

「おい小僧」

「な、なんだよ!？」

俺に高圧的な態度で話しかけてきたのは、背が高く、金髪で目が狐のように鋭い風貌をした男だった。

「水園撫子には近づくな。あれは俺の物だ」

「なんだと!？」

俺は男の言葉に憤慨し、掴みかかろうとする。
だが…………

「おっと、これが見えないのか？」

「な!？　そ、それは……………」

男の手にあつたのは、一本の杖。
雄真達が持つような奴だ。

という事は、こいつは魔法使いか!?

「もし断れば?」

「お前と水園撫子の命が消えるだろうな」

男の言葉に、背筋が凍りついた。

『力とは、得る物ではない。人を守るための物なんだ』

なぜか浩介の言葉が、俺の脳裏に蘇った。

(まさかこうなる事を知って?)

俺は心の中でそう思ったが、すぐに否定した。

「だったら、断る。俺が撫子ちゃんを守るんだ!!」

「ふ……魔法が使えない物に何が出来る。だが、良いだろう。しばらく猶予をくれてやるう。その時にもう一度答えを聞かせて貰おうではないか」

男はそう言い放つと、何処ともなく消えて行った。

「……………」

俺は無言のまま家路についた。

S
i
d
e

o
u
t

第92話 壁となりし脅威

10月6日

いつも通りに、学校へと向かっていた俺達に、声を掛ける奴がいた。

「おい、その小僧」

「何だ？ おっさん」

高圧的な男の声に、浩介が威圧感を曝け出して答える。

「テメエ！ もういつペン言ってみろ！」

男は浩介の一言で、怒りをあらわにしていた。しかし、最初に仕掛けたのはこの男だ。

「用件は何だ？ あいにく、こちらはお前のように暇人ではないのでな」

浩介は、男の怒りなど気にも留めずに、さらに挑発をする様に言い放った。

「お前の仲間の男を、水園撫子に近づかせるな」

「……理由を聞こうか」

一瞬浩介の表情が険しくなった。

「あいつは俺の物なんだよ」

「何を言っただ？」

「撫子さんは物じゃない!!」

男の暴言を聞いたのと同時に、俺と準は男に言い放っていた。

「おめえらは黙ってる!! あの男を近づかせたのは、あんただと言っのくらい、こっちでは分かってんだよ!!」

「残念だが、断らせて貰おう。お前のような物に従いたくはないの
でね」

浩介は男にそう言っただ断った。

「そうか。なら、あの男の命はないと思うんだな。あはははははは
!!!!!!」

男は大笑いをしながら、俺達の前から去って行った。

「どついう事なの？ 撫子さんと八子を付き合わせたって」

準が浩介に疑問を投げかけた。

それは俺も聞きたいことだった。

「放課後になつたら話す。それまで待つてくれ」

浩介のその言葉で、一旦追及はしなかった。

しかし、俺は八子の身が心配になってきた。

その力の先にあるもの

第92話「壁となりし脅威」

放課後、俺達はオアシスにいた。
ここにいるのは俺と浩介、春姫に柊、久美に伊吹、上条さんに信哉、
準の9人だ。

「浩介、話を聞かせて貰おうか」

「……………分かった」

そして、浩介の口から真実が語られた。

「伊吹は、水園家の事は知ってるよね？」

「うむ。確か昔はかなり栄えていた名家だったらしいが、今では衰えていたとは聞いた事がある」

伊吹は思い出すように答えた。

「それで、水園家は僕達……………高月家に助けを求めてきたという訳だ」

「ちよつと待って」

柊が、浩介の話に待ったを掛けた。

「確か浩介の家は、名家の破門をするんじゃないの？　なのに何で衰えている名家が助けを？」

「高月家では、最近新たな取り組みを始めているんだ。それが、名家の再生だ」

柊の疑問に浩介が答えた。

「名家の……………再生」

「そう。衰えている家系で、存在する意味のある家系のみが受ける事の出来る処置だ」

それはいわば、名家を破門する役割の高月家では名家の再生という役割は、とても浮いていると言つのかもしいれない。

「そして、いくつかの条件をクリアして名家の再生を受けるようになったのが、今月のはじめくらいだ」

「それがあの日の公務か」

俺はようやく公務の理由を知る事が出来た。

「でも、それとハチと水園さんが付き合う事に、何のつながりが？」

「その公務の際に、水園と話した時があつてな、その時に頼まれたんだ」

俺はこの時、浩介と黒髪の美少女が仲良く話していると言つ噂を思い出した。

どうやら、その時のことだろう。

「彼女の家系は、もう後を継ぐ男性がない。いなくなつては家の威厳に支障が出るために、水園と付き合うに値する男性を探して欲しい。それが彼女のお願いだつた」

「という事は、ハチは浩介が選んだから」

準の仮定に浩介は頷く事で答えた。

「しかし、彼女もハチを道具として利用するような人間ではない。それは今まで数多の人達に会つてきた僕が保障する」

「……………」

浩介の言葉に、俺達は何も言えなかった。
いや、言う事が出来ないと言うのが正しいかもしれない。

「そして、あの男だが……久美」

「はい、兄さん」

久美の手に合った資料を、俺達に見えるように置いた。
そこにはあの男の顔写真と、詳細なデータがあった。

「この男の名を、藤野忠久ふじのただひさという。藤野家の当主だ」

「藤野……か」

藤野という名前を聞いた伊吹は顔を強張らせた。

「な、なんだ？ 藤野家ってどういう家系何だ？」

俺は、なにが何だか分からずに、浩介に聞いた。

「藤野家は覚せい剤の密輸や、恐喝暴行、殺人と色々とやばい事をしている家系だ」

「そ、そんな事があつたら、藤野家はとっくに全員捕まってるはずじゃないのか!？」

「それが、尻尾を出さないんだ。そのせいで逮捕が出来ない」

俺の言葉に浩介が、ため息をつきながら答えた。

「この男は、魔法使いだ。それに暴力団と繋がっている可能性もある。はつきり言ってこのままでは八手達の命が危険だ」

「でも、なぜ、そこまで彼女にこだわるんでしょうか？」

上条さんが疑問を口にした。

「藤野家は水園を手に入れようとする為に、わざと財力を消して行つてるんだ」

「ひどい！」

それを聞いた春姫が思わず声を上げた。
確かに、それは酷すぎた。

「どうするんだ？」

俺は浩介にどうするのかを聞いてみた。

「とりあえず、高月家の方では、もう破門にしても良いと言う許可が出ている。よって、この男を殺す」

『な！？』

浩介の言葉に、その場にいた全員が驚きのあまりに声を上げた。
というより、久しぶりに浩介の“殺す”という言葉聞いたような気がする。

「向こうはおそらく、八千と水園の明日のデートを狙はずだ。僕達も尾行をして、現れた所で抹殺する」

「浩介！！ 殺すのはだめだ！！」

俺は浩介に思わず声を上げた。

「……雄真。残念だが、お前の意見は聞かない。皆が何と言おうと、

殺すことには変わりはない。それじゃ」

「あ、おい！ 浩介！！」

俺の制止を聞かず、浩介はオアシスを後にした。

「皆、浩介をどうにかしないと」

「そうだよな。悪い人だから死んでいいなんて言う事はないもんね」

「そうよ。あたしの浩介が血に染まるのを見たくないし」

「うむ、私も浩介兄様のために、力を貸そう」

俺の呼びかけに、久美以外の全員が頷いた。

「私もよ。兄さんには、人を殺す殺人鬼は似合わないからね」

久美はそう言って、賛同した。

「でも、どうやって？」

準の言葉に、俺達は固まった。
方法を全く考えていなかった。

「理論で押し通しても駄目。それじゃかえって逆効果。でも、一つだけ方法があるの」

「それは？」

俺は久美に続きを促した。

「杏璃ちゃんよ」

「え、あたし！？」

久美に突然名前を挙げられたからか、驚いた様子だった。

「前に、操られた春姫ちゃんが、兄さんと戦った事があったよね？」

「確かにあったけど」

「その時、春姫ちゃんは怪我を負っていなかった」

久美の言うとおりだ。

あの場所一面には、魔法を使った痕跡があったが、春姫には傷一つなかった。

「杏璃ちゃんもしかして、兄さんに春姫ちゃんを傷つけないでとか言わなかった？」

「……あ、そう言えば言ったような気がする」

柊の言葉を聞いて、俺も思いだした。

俺と浩介のWデートのとき、確かに柊は浩介に言っていた。

「つまり、兄さんは杏璃ちゃんとの約束を守っていたの。だから、兄さんにもう一度約束させるの」

「そうか！ あたしが浩介に、人を殺さないでと言えば……」

「うん。兄さんはもうやめると思う」

柊の仮定に久美が肯定した。

「でも、それをさせるには、兄さんを納得させなければいけないの。そうしなければ、理論を振りまくのと一緒にだから」

「……分かった」

そして、俺達の間で、一通りの対策を話し合った所で、解散となった。
全ての勝負は明日だ。

第93話 人間としての覚醒

10月7日

ハチSide

俺は、初デートと言う事で、待ち合わせ場所に向かっていた。

(今日は撫子ちゃんとのデートか)

ほんの数日前までは全く予想も出来なかった。

(まずはあそこに行って……ぐへ)

俺は今日のデートの予定を立てながら楽しさを膨らませた。

(ツと、笑ってたらまずいよな)

俺はにや付いていた顔を引き締めた。

準たち曰く、これをやると女の子が引くらしい。

(お、良かった)

いつの間にか俺はオブジェ前に来ていたらしく、そこには上着には緑色のジャケットを見に纏い、水色のスカートを着込んでいた撫子ちゃんが立っていた。

「撫子ちゃん、待った?」

「ううん。今来た所だよ」

撫子ちゃんは、俺に笑顔で答えた。

「それじゃ、行くところか」

「うん！」

俺の提案に撫子ちゃんは笑顔で頷くと、俺達は当てもなくオブリジェ前を後にした。

「ねえ八輔さん。何処に行く？」

「え〜つとだな……」

しばらく歩くと、撫子ちゃんが俺にそう聞いて来た。
そんな俺には全く行き先なんて考えてもなかった。

「そうだな、適当にぶらつくか」

「ふふ。そうね、それじゃ、行きましょ！…」

俺の答えに撫子ちゃんは微笑むと、俺の腕に撫子ちゃんの腕をからめた。

「え!?!」

「あ! その……お嫌でしたか?」

突然の事に俺は声を上げると、撫子ちゃんは悲しげな顔で俺に聞いて来た。

(女の子をなかしたら男がすたる!!)

「いやいや!! 嫌なんかじゃないぜ!!むしろ大歓迎だぜ!!」
「そうですか。それじゃ……えい!!」

撫子ちゃんはそう言うのが早いのか、俺の腕に抱きついて来た。

「おっと!?!」

俺はよろけそうになるのを必死にこらえた。

「そ、それじゃ、行こうか」
「うん」

そして、俺達は歩き続けた。

S i d e o u t

その力の先にあるもの 第93話「人間としての覚醒」

俺達は、八手達が歩いて行くのを、後ろから付けていた。

「撫子ちゃんったら、大胆ね〜」

「こ、公衆の面前で／＼／」

準は水園さんが八ちに抱きついたので見てニヤニヤしながら呟き、伊吹は顔を赤くして叫んでいた。

「あたしたちつて、端からはああ見えてるのかな？」

「……言うな」

柊の問いかけに、浩介は視線を逸らしていた。

「……えい!!」

「……春姫、どうしたんだ？」

俺はいきなり腕に抱きついてきた春姫に声を掛けた。その春姫は顔を赤くしているだけだった。

「あらあら〜こっちもラブラブね〜」

「……む!!」

準の言葉が発端となり、柊が浩介の腕に抱きついた。

「……」

「わ、分かったわよ!!」

浩介は、視線一つで柊を引き離した。

「それよりも、早く行かないと見失う　　ッ!!」

「ど、どうしたんだ!?　浩介」

突然顔つきを変えた浩介に、俺は驚きながら聞いた。

「来た」

『っ！！』

浩介の一言に、俺達は息を呑んだ。

ハチSide

気づけば時間はすでにお昼ごろ。

「八輔さん。そろそろお昼にしましょう」

「そうだなそれじゃ おやおや、仲がいいなあ っ！？」

俺の言葉を遮るようにして表れたのは、金髪で狐のような鋭い目をしたあの男だった。

「お、おまえは！」

「久しぶりだな。答えを聞かせて貰おうか？」

そう言う男の手には、マジックワンドという物が握られていた。

そして気づけば辺りには俺たち以外の、人の気配すらもなかった。

「どついつつもりですか！？ 藤野忠久！！」

「え？ 撫子ちゃん、知ってるのか？ こいつを」

撫子ちゃんの鋭い目つきに俺は、それ以上聞く事が出来なかった。

「どついつつもりも何も、あなたは私の所有物なのです。よって勝

手に動かれては困るんですよ」
「っ!!」

俺はその言葉を聞いた瞬間、キレた。

「ふざけんなあああ!!!!」

「だ、駄目です!! その人には向かっては!!」

俺は撫子ちゃんの制止の声も聞かずに、男に殴りかかる。

「ふん。……リメイラル」

「ぐああ!!」

俺は男の魔法弾をまともに食らい、後方に跳ね飛ばされた。

「八輔さん!!」

「だ、大丈夫……だ」

俺は日ごろ浩介に攻撃されているために、免疫が出来ていた。
その陰で立ちあがる事が出来た。

「さっきのは、断ると受け取っても良いかね？」

「ったりめえだ!! 最初っから変わらねえ!!」

俺はそう叫び、再び男に殴りかかる。

「そうか……では、死ね」

そして男が取りだしたのは、黒い物体。
それがすぐに銃だと言う事に気付いた。

(ヤバ！？)

俺は即座に横に避けた。
次の瞬間。

パン！

「があ！？」

銃声が響いたと思うと、左肩に鈍い痛みが走った。
そして俺はすぐに、撃たれたのだと悟った。

「ふははははは！！！！ 俺に逆らうからこうなるのだ！！」

それを見ていた藤野の笑い声が、やけにはっきりと聞こえた。

(俺、負けるのか？こんな奴に)

俺はうつ伏せに倒れながら考えていた。

「八輔さん！！！！」

俺の好きな人の声が聞こえた。

(終わり……か)

俺は薄れる意識の中、そう思っていた。

S i d e o u t

「八子！？ くそ！！」

俺は八子が撃たれたのを見て八子の元に駆け寄ろうとしていた。しかし、それを遮っていたのは、浩介が掛けた拘束魔法だった。

「浩介君！！ これをはずして！！ じゃないと、八子が！！」

準の悲鳴交じりの言葉にも、浩介は首を横に振っていた。

「僕は八子を信じる。あいつなら絶対にやってくれる」

浩介は俺達にそう言うだけで、ただ見ていた。

八子Side

『……………八子、忠告しておく』

俺は数日前の浩介とのやり取りを思い出していた。

『魔法の力が絶対だと思っているのであれば、お前は一生一人だ』

俺はその言葉を理解する事は出来なかった。

『力とは、得る物ではない。人を守るための物なんだ』
俺は考える。

一体浩介は何が言いたかったんだ？

魔法が絶対ではない。

それなら、なにが絶対何だ？

俺には理解が出来なかった。

悔しいだろ？

そんな時、俺の頭の中に声が響いた。

悔しいのだろ？

(ああ。くやしさを)

俺は心の中で、声に答える。

ならば目覚めるのだ

(目覚める?)

そう、目覚めるのだ。愛しの者を救うために……立ち上がるのだ
！！

(魔法が使えない俺に、なにが出来るんだよ?)

俺は声に聞いたです。

魔法じゃなくても勝てる。必要なのは、勇気と心。目覚めなさい。そして、想いに身を委ねるのだ！！男を見せる！！高溝八輔！！

その声が響いた瞬間、俺の視界が一気に開いた。

「八輔……さん？」

「……………」

撫子ちゃんの声が聞こえるが、俺はそれに答えない。今俺の視界にあるのは……

「な、何故立てる!？」

俺が立ちあがった事に動揺している藤野だけだった。

「うおおおおおおおおおお!!!!!!」

そして、俺は藤野に再び殴りかかる。

だが、次の瞬間俺の目には青く光る物が近づいてくるのが見えた。

それが魔法によるものくらいは、すぐに分かった。

そして不思議な事に、それはスロー再生しているかのようにゆっくりと迫ってきていたのだ。

(何なんだ? 一体)

俺はそう疑問に思いながらも横に移動する。

すると藤野の放った魔法は、今まで俺がいた所を通り過ぎた。

「なに!?!」

魔法を避けた事で、焦る藤野だが、再び魔法を放った。
しかし俺はそれを軽々と避けた。

「くそ! なぜ魔法が使えない人間ごときが!!」

そして、俺はついに藤野の目の前までたどり着いた。

「お、おい……止める!!」

俺に命乞いをするかのような藤野の言葉に、俺は見意味を貸さずに俺はその言葉を口にした。

「俺の大事な人に手を出すな!! 喰らえ! 裁きの鉄拳!!!!」

それは俺の意思だったのかは分からない。
でも俺の拳には力があふれていた。

ドス!

「がはあ!!?!」

俺が見たのは、一撃で後ろの方に吹っ飛ばされる藤野の姿だった。

「はあ……はあ……」

「八輔さん! 大丈夫ですか!?!」

息を切らしている俺に、心配するように近づいてきた撫子ちゃんに俺は頷く事で答えた。

(そうか……俺はあいつに一発ぶん殴る事が出来たのか)

「すごいです!! 八輔さん。魔法を避けて藤野忠久を倒したんですよー!」

俺は、若干興奮気味の撫子ちゃんに、思わず笑みを浮かべていた。

「誰が……倒されただと?」

「ツ!?!」

しかし、俺達の耳に聞こえてきたのは、あの藤野の声だった。

藤野はさっきを放つような視線で俺達を睨みつける。

しかしどことなくふらついているのは、もしかしたら俺の一発が効いている証なのかもしれない。

「よくもしてくれたなガキ。まあ魔法を使えない者にしては、上出来だ。しかし勝つのは俺だ、魔法が使えないお前たち何ぞ、灰にしてやる!」

そう言つて杖を俺達に掲げ呪文を唱え始めた。

「ツク!」

俺にはもう、さっきのような芸当はできない。

それにもう倒れそうなくらいに、力が抜けている。

「さあ、死ぬ。……レイン・デストリウム！」

そして藤野の魔法が完成した。

(ここまでか)

俺に向かってくる青色の魔法を見て、俺は全てを諦めた。

「デイ・ラテイル・アムレスト!!」

俺の耳に聞こえてきたのは、俺がよく知る人物の声だった。
俺は閉じていた目を開けた。

「な、なんだ貴様ら!？」

「雄真？」

そこにいたのは、俺の親友の雄真や、姫ちゃん達だった。

「愚かだな、お前も」

「何？」

藤野に暴言を吐きながら現れたのは、今まで見た事もない、背筋がぞつとするような笑みを浮かべた浩介だった。

Side out

第94話 惨劇からの回避

「貴様！ あの時の小僧！！」

浩介の姿を見た藤野が叫ぶ。

「高溝殿、我々が来たからには、もう大丈夫だ」
「あ、ああ」

俺は何とか八チを守る事が出来た事にほっと胸を撫で下ろした。

その力の先にあるもの 第94話「惨劇からの回避」

(それにしても、八チが魔法弾を避けた時は驚いた)

それはさっきの八チの行動だった。
さっきの八チの動きは、普通ならあり得ないほどの速さだったのだ。

「お前の魔法はもしかしたら強いのかも知れないが、八チはある物
がお前の魔法の力を上回らせたんだ」
「何？」

唐突に浩介が語りだした。

「それはな、水園を守りたいと言う想いだ！ その想いが力となり、
八チに人を超えた……いや、人としての最強の力”愛の力”を与え

「ただ」

「ぶっ!？」

俺は浩介がまじめな顔をしてとんでもないことを口走ったので、思わず吹き出してしまった。

「愛の力？ 笑わせるな、そんなもの！」

「確かに、人は魔法使いに比べれば弱い。しかし人というのはここぞと言う時に、理論を越えた力を出すんだ。お前のような屑には理解できないがな」

最後は浩介が鼻で笑った。

それが合図となり、藤野は逆上した。

「小僧!! お前から殺す!! 死ぬ死ぬ死ぬ!!!」

藤野は浩介に向け大量の魔法弾を乱発する。

しかし……。

「どうした？ ちっとも当たらないぞ」

浩介には魔法弾はかすりもしなかった。

「くそ!! なぜ当たらないんだ!!」

「……………興奮めだ、レストフレンジ」

浩介はつまらなそうに呟くと、藤野に向け手を掲げた。

次の瞬間。

「あぎゃあああ!!?」

藤野は浩介から放たれた金色の魔法波によって吹っ飛ばされた。しかし、藤野はなぜかほくそ笑んでいた。その理由はすぐに分かる事となった。

「こ、こいつは、家が無くなるのが嫌でお前に近づいたんだ!」
「そ、そんな」

藤野の何の脈絡もない言葉。

しかし、それは八子の心を揺さぶった。

「ち、違うわ!! 私八輔さんを利用したわけでは!!」

藤野に向けて水園さんが、必死に否定していた。

「本当……なのか?」

「……ッ!」

「あ!?!」

水園さんは耐えきれなくなったのか、どこかに走り去ってしまった。

「八子、今すぐに追いかける!!」

「だ、だけど……」

俺の言葉に、八子は中々動かない。

「おい!! あんたはそれでも男か!! 好きになった奴の言葉くらい!! しっかりと聞いてやれ!!」

「ッ！！？ 分かった」

浩介の怒鳴り声で、ハチは水園さんが走り去って行った方に追いかけるようにして、走って行った。

「さて、邪魔もいなくなっただし……始めますか」

その瞬間、浩介の周りの空気が一変した。

それは、まるで俺達が殺されるかのような恐怖感を生み出すほどの物だった。

「そ、その姿は！？ 小僧……いや、あなた様は！！！」

浩介が魔法服を身にまとった瞬間、藤野の声色が一変した。そしておもむろに土下座をした。

「浩介様！？」

「……」

藤野の今の姿はとてもみじめな物だった。

「先ほどの不届きをお許してください。あなた様に会えるとは、恐悦至極です」

「今さらそんな物をしても無駄だ。貴様の罪は非常に重い。お前には情状の酌量の余地すらない」

浩介は冷たい目で藤野を見下しながら、言葉を続ける。

「よって、お前は……死刑！」

「ひ！？」

浩介の言葉に、藤野が後ずさる。

しかしそれすらも、浩介が張った拘束魔法で意味を失くした。

「さあ、死ね」

「や、止めるー!!」

浩介の手にあるのは……刀!?

浩介はそれを藤野に振りかざそうとしていた。

だが……

「雄真……離せ」

「浩介、いくらなんでも人を殺すのは駄目だ!」

俺は刀を持っている浩介の腕を抑えて、浩介に言い放った。

「なぜだ? このような屑を生かしておいて、何の意味がある?」

「意味なんかじゃないよ! 悪い人を殺したりなんてしたら、高月君が悪い人になっちゃうんだよ? そんなのは絶対に駄目!」

浩介の言葉に、春姫が反論した。

「浩介殿、悪い者は、生かして裁きを受けさせると言うのが一番いいのかと」

「生かしておいても、再び悪事を働くのであれば……死んでいた方がよっぽどまだ」

信哉の言葉に、浩介がそう呟く。

「そんなの、やってみなければ 黙れ!! 何も知らない奴が、勝

「手な事を言つな!!」

俺の言葉を遮って、浩介は叫んだ。

「今まで多くの犯罪者を見てきた。何人も裁いても裁いても、再び罪を犯す。もうそんなイタチごっこは止めたいんだ!!!」

「浩介……」

それは浩介の本心だったのかもしれない。

俺はようやく浩介の無尽蔵な殺すと言う者に対する真の理由を狭間見た様な気がした。

だからと言ってそれを許すわけには行かない。

「兄さん」

「うるさい。それ以上止めるのであれば、お前らもこいつと同じ目にあうぞ」

浩介の冷たい一言で、俺達は何も言いだせなくなった。しかし、一人だけが、浩介に語りかけた。

「ねえ浩介。最後にこれだけ聞いてくれない？」

「……………分かった。それだけ言ったら、この手を離せ」

それは柊だった。

全ては柊に掛けられた。

「確かに何回も悪い事をするなら、いつそのこと消した方がいいよね」

「……………」

「でもさ、それって苦しみも一瞬なわけでしょ？」

「何が言いたい」

俺達は柗の言わんとする事が、理解出来たような気がした。

「だったらさ、ずうっと生かしておいて長い間苦しませる方がいいと思わない？」

柗の言葉に、俺達はただただ呆れるだけだった。

浩介の行動を否定するのでもなく、賛同するわけでもなくただ方針を変えただけなのだ。

(どうやら、俺達が馬鹿だったみたいだな)

「だから、ね。もう人を殺さないで。浩介の力は皆を守るためだし

よ

「……………」

柗の言葉に、浩介は何も言わない。
辺りは緊張感が張りつめていた。

「雄真……………この手を離して」

「浩介？」

浩介から放たれる殺気が、揺らいだように感じた。

「全く杏璃はすごいな。確かにそれも良いかもしれないな」

俺はその一言を聞いて、浩介の手を話した。

「さて、こいつには裁きを与えないと」

「浩介」

俺は心配して浩介に声を掛けた。

「安心しろ。殺しはしないさ」

「……分かった」

俺は浩介を信用して、浩介から離れた。

それは皆も同じだったらしく、春姫達も浩介から少し離れた。

「クリエイト、戦闘レベルを1ランク下げて」

『了解しました。戦闘レベルを10から9まで下げました』

今クリエイトからとんでもない数字を聞いたような気がしたが、俺は聞かなかった事にした。

「行くぞ！！ 高月家の名の元に、貴様に裁きを与える！！ 高月家次期当主、高月浩介が命じる……リバインドブレイク ……！！」
「ぎゃあああああああ！！！！？」

次の瞬間、クリエイトから漆黒の魔法光が藤野に向けて放たれ、体が飲み込まれた。

藤野の悲鳴と共に、俺には何かが砕けた様な感じになった。

それが藤野の魔法回路だと言う事を知ったのは、この後のことだった。

「そして最後に……裁きの時は訪れた、ジャッジ」

「ぐあああああああ！！！！？」

浩介のその言葉は、前に幾度か見た死の呪い。

それを受けた藤野はパタリと、その場に倒れた。

「浩介！」

「大丈夫。殺してはいない。ただ単に、魔力を9割奪っただけだ」

俺は浩介の言葉を聞きながら、藤野の脈を確認すると、確かに藤野は生きていた。

それは、浩介の人を殺すと言う闇は消えた。

「全く、お前らには驚かされるな」

「それよりも、八チは大丈夫かしら？ あれ、銃で撃たれてたわよ！？」

俺は準の言葉で思い出したように顔を見合わせた。

そうだった、俺達ほとんどもない見落としをしていた。

「いくらなんでもあのまま動き続ければ、命が危ない」

「皆！ 手分けして探すよ！！」

『ああ（御意）』

そして、俺達は急いで八チを探しに行った。

（八チ！ 無事でいてくれ！！）

そう心から願いながら。

第95話 リプロポーズ（前書き）

色々と内容がありますが、どうぞ

第95話 リプロポーズ

ハチSide

「はあ……はあ……」

俺は浩介達に言われるがまま走り続けていた。

（くそ！ 一体どこにいるんだよ！！）

いつまで走っても撫子ちゃんを見つかる事が出来ない俺は、苛立っていた。

（何である時俺は、言えなかったんだ）

撫子ちゃんが俺を利用してない。

俺は撫子ちゃんを信じる。

そんな簡単な言葉が出なかった自分に俺は、腹が立っていた。

「ツク！？ 傷が痛むぜ」

藤野に撃たれた場所からは生ぬるい液体が、流れ出していた。

でも俺は走るのをやめない。

俺には、成すべき事があるのだから！

その力の先にあるもの

第95話「リプロポーズ」

「はあ……はあ……見つけた」

しばらく走り続け、辺りはオレンジ色で包まれていた公園に、撫子ちゃんがいた。

「撫子ちゃん」

「ッ!?!」

俺の声を聞いた途端、撫子ちゃんは肩を震わした。

「一緒に行こうぜ」

「ううん。私にはもう、八輔さんと一緒にいる権利なんてないんです」

俺は撫子ちゃんのそばまで静かに歩いて行った。

「人と一緒にいるのに権利なんてないぜ。もしあったら俺は浩介達という権利なんかないもんな」

「……でも！ 私……私……は」

撫子ちゃんは俺の言葉に、涙を流しながら言葉を続けようとしていた。

「撫子ちゃん！」

「ッ!?!?!」

俺は、いてもたっても居られずに、撫子ちゃんを抱き寄せた。

「俺は撫子ちゃんが酷い事をする人じゃないって信じてる。だって

よ、俺なんかを利用してても意味ないだろ？ それに浩介なら絶対に、酷い奴を紹介するはずはないしな」

「う……うう……」

「大丈夫。泣いても良い、むしろ我慢なんて体に毒だぜ？」

「う……うわあああああああ……！！！！」

俺の言葉が、合図だったように、撫子ちゃんは俺の胸に顔を埋めて泣き始めた。

俺はそれをただただ、優しく抱きしめるだけだった。

「落ちついたか？」

「は、はい。ありがとう、八輔さん」

俺にお礼を言いながら離れて行く撫子ちゃんの顔には、迷いなんてものは感じられなかった。だから、俺も覚悟を決めた。

（ここは、男の俺から言うべきだ！）

「水園撫子さん」

「……はい」

「俺は君の事が好きです！」

そして、俺は撫子ちゃんに告白したのだ。

「私も……私も八輔さんの事が大好きです！」

そして、返ってきた返事は、俺が聞きたかった言葉だった。本当は、とび跳ねるほど嬉しく、騒ぎたかった。でも。

「っが!？」

「八輔さん!!！」

突然の痛みに、俺は地面にうずくまった。

「肩から血が!？」

「う……うう、撫子……ちゃん」

俺は少しずつ薄れゆく意識の中、撫子ちゃんの名前を呟く。

「はい……私はここにいます」

「はは、まさか俺にも恋人が出来るなんて、まるで夢見てえだな」

俺は、今の状況を感じて、思わず笑った。

「待っていてください！今すぐに救急車を……えっと番号は110番!!！」

「……それを言うなら、119番だ……ぜ」

俺は慌てている撫子ちゃんにそう言ったが、言いきった瞬間俺は意

識を手放した。

「八輔さん？ 目を開けてください！！ 八輔さん！！！！！！」

撫子ちゃんの叫び声を聞きながら。

「う……」

「八輔さん！？」

俺が目を開けると、そこには涙ぐみながら俺の事を見ていた撫子ちゃんの姿があった。

「あれ？ 俺、何で生きてるんだ？」

すぐに浮かんできたのはそんな言葉だった

「それはね……浩介様が」

「浩介が！？」

「全く、命がけとは僕みたいな事をやってるな」

俺の背後から聞こえたのは、まぎれもなく浩介の声だった。

「浩介！！ それにその姿……」

俺は浩介の姿を見て納得が言った。

銀髪に黒い羽根が生えた浩介……魔王になっていた浩介を見て。

「まあ何はともあれ、八手を騙していたんだからなこれくらいはするぞ」

「サンキュ、浩介、撫子ちゃん」

俺は浩介と、今まで看病してくれたであろう撫子ちゃんにお礼を言った。

「お礼はいいって。さて、後は二人で仲良くやりな」

浩介はそう言いながら、俺達の前から姿を消した。

「それじゃ、行こうか、撫子ちゃん」

「はい」

こうして、俺の長い1日は幕を閉じた。

S i d e o u t

第96話 革命の日常（前書き）

怒涛の展開を迎えた第6章もこれにて終了です。

第96話 革命の日常

10月8日

八千Side

今俺と浩介、撫子ちゃんとはある豪邸にいた。

「何か緊張するぜ」

「大丈夫だよ。お父様もきつと許してくださるわ」

「そうだよ、あんたの事はすでに当主に送ってあるんだから、今頃緊張しても遅い」

そう、今日俺は撫子ちゃんの父親と対面するのだ。

「って、なに勝手に送ってんだよ!?!」

「大丈夫大丈夫。どうせすぐに本性が分かるんだから、今のうちにばらしておけばいいんだよ」

浩介に反論するが、浩介からはそう返ってきた。

その力の先にあるもの 第6章『八千恋物語』 第96話「革命の日常」

「初めまして、私が水園英明だ。君が高溝八輔君かね?」

「は、はい! 高溝八輔です!!! 撫子さんとお付き合いさせていただけます!!!」

「は、八輔さん!?!」
「あんたは少し落ち着け!?!」

撫子ちゃんと浩介が俺にそう言うってくるが、俺はもう緊張続きだった。

「はっはっは!!! やはりユニークな方ではないか!!! 気に行つたぞ! 八輔君!」
「え? という事は……」

「私の娘を幸せにしてやってくれることが条件だ。良いかい?」

撫子ちゃんの父親の問いかけに、俺は率直に答えた。

「はい! この高溝八輔、命に変えてでも撫子さんを幸せにしてみせます!?!?!」

「やはり、浩介様の目は確かだったようだ。八輔君はいい子だ。高校を卒業した後はわが家系に入るための勉強も待っている。まあ、頑張りましたまえ」

「 @!?!?!? 」

俺は、水園さんの言葉を聞いた瞬間に、石化した。

どうやら、道のりは長いようだ。

「ところで、八輔君。娘とはもうしたのか? しちゃったの パチン げふあ!?!」

「お父様あ? あまりおかしなことはお聞きにならないでください ね?」

撫子ちゃんは、父親をハリセンで殴っていた。

「ははい!!! 分かりました!!!」

そして、父親は弱かった。

「おお。水園家名物のハリセン突っ込みか」

浩介だけは、苦笑いしていた。

そんなこんなで、俺と父親との初対面はあっけなく終わった。

Side out

「おはよう、雄真、浩介君、すももちゃん」

「おつす雄真、浩介、すももちゃん」

「おはようございます八輔さん、準さん」

「おはよう八子準さん」

「おつす準に八子」

俺達はいつものように通学路で八子達と合流した。だが、そんないつもの風景は最近変わりつつあった。

「八輔さ〜ん!!!」

「あ、撫子ちゃん!!!」

八チの名前を呼びながら駆け寄ってくるのは、水園さんだった。彼女はいつも八チと一緒に登校していたりする。

「そうだ！ 今度恋人取り換えデートでもやらねえか？ 浩介！」

「八チ？ 死にたい？」

「八輔さん……」

八チのとんでもない提案に水園さんと、浩介さんの顔色が怖くなっていた。

「八チったら、こんなに可愛い恋人がいるってのに」

「まあ、八チはこれくらいがちょうどいいかもな」

「ふふ。そうですね」

準の言葉に、浩介さんと水園さんがそう頷いた。

「さて」

「あ、あの〜何で俺の肩を持っているのでしょうか!？」

浩介と水園さんが八チの肩を掴んでいた。

しかも恐ろしい形相でにらみながら。

「私という者がありながら、他の人と付き合おうだなんて」

「これは裁きが必要だな」

「あ、あの〜、というより撫子ちゃん、何でハリセンを取りだしているのでしょうか!？ そして浩介は杖を構えないで!!!」

八チは何とか止めようとするが、二人は止まらない。

……そして。

「喰らえ〜!!!」

「ぎゃあああああああ!!!!!!!」

朝の通学路に八子の悲鳴が響き渡った。

結局はこんな才子だが、しかしそれでも八子は成長したと思う俺だった。

第6章 『八子恋物語』 終

中書き

どうも、TRです。

今回の第6章はいかがでしたでしょうか？

夢落ちだろと言う期待（？）をしていた方には申し訳ありませんが、落ちなします。

こうして八子は彼女を手にしたわけですが……

この章を書くきっかけは、かなり前にあった浩介に対する指摘でした。

そこで、前にありました指摘を参考にしつつ、ストーリーを組み上げたのが第6章という事です。

まあ、それが無くとも事象の展開などで今回の話は必要だったのですが（苦笑）

さて、この第6章、八子が主役と言いながら八子が輝いていない気もするのが今の心境です。

願わくば、この章が不評に終わらない事を祈るばかりです。

さて、次章ですがいよいよ最終章の直前となりました。

ここからこの物語は急展開を迎える事になります。

第7章ではズバリ愚かなる魔法使いVS浩介、雄真です!!

それでは、さらに一層急展開を迎えようとする本作を、よろしくお
願います!

第97話 偽りの魔法使い（前書き）

とうとう始まった第7章。
よろしく願います。

第97話 偽りの魔法使い

10月20日

「フレイアル・ダスト・ゼネラル！」

とある日の魔法実習の授業。
実習室に、魔法の呪文が響いていた。

その力の先にあるもの 第7章『地に堕ちた魔法使い』 第9
7話「偽りの魔法使い」

今日はたまたま担当する先生がお休みという事もあり、代役の教師
がやる事になったのだが……

「え〜この魔法の作成効率を上げるには、まず魔法式の簡略化をし
……………」
「ふあ〜」

教師の説明にも、浩介はあくびをしているだけでろくに聞いてすら
いなかった。

「ちょっと、浩介！ ちゃんと聞きなさいよ」
「だって、あれの言っている事、半分以上間違いだしつまんないし」

小声で注意した終に浩介はため息をつきながら答えた。

「だってさ、軸になる魔方式を簡略化したら暴走が発生するだろ。あの場合作成の効率を上げるのであれば魔方式の定義化をすればいいんだ」

「定義化って何？」

「ねえねえ教えて」

浩介の非難に周りにいた生徒達が、興味を持ったようだ。

「よく使う魔方式の共通した部分をマジックワンドなどに格納する方法だ。後は続きの魔方式を書くだけだから作成効率は上昇する。まあ、かなりの知恵と工夫がいるが」

『へえ』

浩介の説明に聞いていた生徒達（主に女子）が、感心したように頷いた。

「……む」

それを見た柊は膨れていた。

「そこ！ 私語は慎みなさい」

『すみません！』

浩介の周りにいた生徒たちは、再び教師の話を聞く。

>マスター<

（なんだ？ ラジア）

俺は突然念話で話しかけてきたラジアに用件を尋ねた。

>ええ、あの教師の行使している魔法なのですが<

(魔法がどうかしたのか?)

「魔方式が不安定になり始めているんだ」

俺の心の中での問いかけに浩介が答えた。

「どういう事だ?」

「魔法の構成は、頭でされる。そのために、魔方式にフリーズを掛けなければ魔方式に勝手に追加されたりして、しまいには暴走する事になるんだ」

「な、なんだって!?!」

俺は小声で、浩介の説明に声を上げた。

「まさか、あの教師」

「ああ、フリーズを掛けしていない。だから今魔方式がどんどん悪化している。このままなら魔方式の操作権が破棄されて暴発するぞ」

浩介から語られたのは、恐ろしい未来だった。

「それにしても、魔方式は終よりもグダグダだし、教師であれば誰でもやるであろうフリーズ処理も知らない、説明の間違いをするなんてあれは本当に教師か?」

「……確かに」

魔方式を狭間見た俺は、浩介の意見に賛同した。

「ましてや、実習室にいて魔法を使ってるにもかかわらず、魔法服を着用させないなんて、魔法使いとしても失格だろ」

そう、この教師はあろうことか俺達に、魔法服は着ないようにと通告してきたのだ。

魔法服は、魔法が失敗した際に最低限の防御力となるものだ。

それを着させなかった時点で、俺はすでに不信感を持っていたのかもしれない。

「しかもニクラス混合をしている最中に、もしあの魔法が爆発を起こしたら……」

「恐らく全員が死ぬな」

俺の言葉に、浩介が続いた。

そして、それは本当に起こってしまった。

「先生!!」

「な!?! この!! 止まれ!! 止まれ!!!」

教師の具現させていた赤い魔法球が突然不吉な円を描き始めたのを見て、一人の生徒が声を上げた。

教師は慌てて魔法球の動きを抑えようとするが、恐らく操作権のない状態の魔法球は一切受け付けなかった。

そして魔法球は、一旦止まると突然向きを変え高速で飛んで行った。

その軌道上にいた生徒たちが避難する中、突然の事態に固まっていた一人の女子生徒がいた。

それを見ていた生徒たちは危ないと叫んでいるが、女子生徒は足がすくんでいるのか全く動かなかった。そして、魔法球が女子生徒に直撃したかと思われた瞬間。

「高月家、緊急結界！！！」

女子生徒の前に立ちふさがる人物がいた。

ズガアアアン！！

「え？」

女子生徒は、全く衝撃が無い事を不審に思い目を開けると、突然の事に声を上げた。

「おい、怪我はないか？」

「は、はい！　ありがとうございます」

浩介の問いかけに少女は、頭を下げてお礼を言った。その女子生徒は背が短い黒髪だった。

「お礼を言う前に、とっと他の奴らがいる場所に避難しろ」
「は、はい！」

浩介の指示を聞いた生徒は、慌てて俺達がいる場所に、走って行った。

「おい、その似非教師。あんた何をやってるんだ？」

「な、何ですか先生に向けてその態度は！！　それに魔法服の着用は許可していませんよ！！」

浩介に声を掛けられた教師は、恥も知らずに浩介にそう言い放った。

「残念ながら、今の僕は貴様ごと気に従うような身分ではないのでね」

「あなた！！ ちょっとお家がいいからと言ってその対応は！！」

「愚かですね。貴女高月家の事を知らないんですね」

浩介は教師を馬鹿にするような視線を送りながらそう言い放つ。

「ふん。どうせ高月家なんて、塵屑のような奴らが、集まっている外道な塊でしょう」

（あゝあの教師死んだな）

俺はその暴言を聞いてそう思っていた。

浩介は自分の事をとやかく言われてもそれほど気にはしないが、家の悪口を言った物には絶対に容赦をしないのだ。

つまりは、浩介の怒りの起爆スイッチを押してしまった。

「そう言えばあなたには妹もいましたわね？ あなたに似て生きている価値のない小娘です事。オホホホ！！」

教師のその一言がカギとなった。

俺の横にいた久美から表情が消えゆつくりと前に出て行く。よく見れば浩介も表情が無くなっていた。

「あらあら噂をすれば屑兄妹が集まりましたね」

「……れ」

そして、浩介が口を開いた。

「ん？」

「黙れと言った！！ このクズ野郎！！」

「あなたに私達をとやかく言われる筋合いも権利もないわ！！」

二人の怒りの表情に、教師は命の危険を感じて後ずさりをする。

「逃がさない。拘束！！」

「な！？ 何をする気！！ 離しなさい！！」

浩介は、教師の言葉を一切無視していた。

「クリエイト、リミッタ 解除、フルバースト」

『は、はいいマスタあ！？』

「ルミネス……私も、リミッタ 解除、フルパワー」

『イ、イエス、マイマスタあ！？』

二人から沸き起こる殺気に、ワンドすらも怯えていた。

「永遠に、死になさい！！ 真空刃！！」

「がああ！！」

教師は久美の繰り出した強烈な一撃によって、思いっきり後方へと吹き飛ばされた。

そこに待ち構えるのは、恐ろしい形相をした浩介だった。

「我らを侮辱した罰。その身に刻め！！ ホバーリングカッター、

マキシマム!!」

「ぐぎゃああああ!!!!?」

浩介による足蹴りを喰らった教師はそのまま天井を突き抜けると、空の彼方に消えて行った。

「久美、高峰ゆずはを呼んで来い」

「分かったわ」

この時、俺はこの兄妹の恐ろしさを再び知らしめられることになったのだった。

ちなみに、この教師はゆずはさんが来たのと同時に空から落ちてきた。

ゆずはさんが何を聞こうとしても、ただ震えているばかりだった。それを見た浩介達はやりすぎたかな?と首を傾げていた。

結局、生徒たちの証言をもとに、この教師は教師を辞めさせられる事になった。

第98話 嵐を引き起こし者

10月21日

??? Slide

あたしは家で携帯を開く。
そして電話を掛けた。

『おかけになった電話番号は現在は使われておりません
』
「あいつも逃げたんだ」

あたしは電話を切り、憎悪を込めてあいつの顔を思い浮かべた。

(あいつも2カ月で逃げた)

あたしは孤独。

皆あたしのいい所が分かってくれない。

そりゃメールをやりすぎたかな。ってところはああるけど、そこは付き合ってくれるべきじゃないの？

「あいつもあたしと一緒にいる権利のない奴だったんだ。は。いな
いかな。そう言ういい男」

あたしはそう嘆いて、ベッドに寝っ転んだ。

「なにかしら？ これ」

無造作に置かれていたプリントから、一枚の用紙を手にした。

「いたじゃない。あたしにぴったりの男が」

あたしはその紙を見て笑みを浮かべた。

そくだよね、彼ならあたしを受け止めてくれるよね？

「そうでしょ？ 高月浩介君、それに小日向雄真君。きゃああ、恥ずかしい！！！」

あたしはその人の名前を呟いただけで、恥ずかしくなった。

「うるさいわよー！！」

「……わかってるよ」

ドアを開けずかずかとは言ってくるババアにあたしはそう答えると、婆は部屋を出て行った。

Side out

その力の先にあるもの 第98話「嵐を引き起こし者」

浩介Side

昼休み、僕はいつものように校舎の中を散策していた。

「浩介！」

「……む」

突然聞いた事もない女子生徒の、僕を呼ぶ声が聞こえた。

僕は声の方を見た。

そいつは黒髪を短く切りそろえ、眼鏡を掛けた女子生徒だ。

しかし、僕ははっきり言いたい。

こいつは、心が穢れている女だ。

「初めまして、だよな？」

「ん〜も〜そんな連れない事言わないでさ〜ちよつと相談に乗ってよ〜」

そう言つて僕の手を触ろうとする女子生徒。

「っ!?!」

僕は嫌悪感を感じ、後ろに下がった。

「浩介〜? 早く行こつ〜!!」

「あ、分かった!!」

そんな時に聞こえた、天使のような声に僕は、逃げるように女子生徒を後にした。

「一緒にいたあの子、誰？」

「知らん。あんな虫唾の走るやつは初めて見た」

すっかり気分の悪い僕を癒してくれるのは、愛しい人の声だけだった。

そして、僕達はしばらく話すと教室に向かうのだった。

「雄真君の馬鹿〜!!」

「は、春姫!!」

教室前に行くと、神坂さんの叫び声がした。

「何があつた のわ!!」

僕は何があつたのかを知るために、中に入ろうとしたが、飛び出してきた神坂さんに跳ね飛ばされた。

「ち、ちよつと春姫!？」

(とりあえず神坂さんの事は、杏璃に任せても良いだろう)

僕は神坂さんを追いかけて行った杏璃を見てそう思うと、教室の中に入った。

「……………」

そこには、影が出来ている雄真がいた。明らかに何かがあつた。

「雄真、神坂さんと何があつたんだ？」

「浩介か……実は」

そして、雄真は何があつたのかを話した。

S i d e o u t

昼休みも半ば、俺は教室で、昼食の余韻を感じていた。

気づけば春姫がいなかったのがいつもと違う所だった。

「春姫でも探しに行くか」

そう言っつて俺が立ちあがった瞬間だった。

「雄真！！」

「のわ！？」

突然俺に抱きついてきた女子生徒に、俺は混乱した。

「あ、あんたは一体誰だ？」

その女子生徒は短く切りそろえてあり、眼鏡をかけていた。

「もゝあたしの事を知らないなんて、駄目じゃない」

「というより離れる！！」

「離れない」

そんなやり取りを続けていると。

「雄真君」

「は、春姫！？」

ドアの所に立っていたのは、茫然としていた春姫だった。

「あゝあ邪魔が入っちゃった。それじゃまたね雄真〜うふふ、次は浩介だね」

俺から離れた女子生徒は、そんな事を呟きながら教室を出て行った。

「えっと、これはだな」

俺は事情を話そうとした。
しかし……

「雄真君の馬鹿ー!!」

「は、春姫!!」

春姫は泣きながら俺にそう言い放つと、教室を飛び出したのだった。

杏璃 Side

あたしは逃げて行く春姫を抑えて、何とか屋上に連れて行くと、話を聞いていた

「そ、それ本当なの!? 春姫!!」

「うっ……うんツグス、女の子が、雄真君に抱きついて」

春姫は、泣きながら事情を話してくれた。

【浩介、一体どういう事？】

【ああ、説明するよ】

そして、浩介から説明された事を聞いたあたしは、そのまま春姫に話した。

「グス……そ、それじゃあ、雄真君が悪いんじゃないん……だね？」

「そう言う事よ、ほら、雄真の所に行くわよ」

あたしは、春姫の肩を持ち雄真のいる教室に連れて行った。

S i d e o u t

浩介 S i d e

杏璃の念話で事情を説明してから数分して、杏璃達が戻ってきた。

「春姫、その……ごめん」

「ううん。私の方もごめんね。雄真君の話も聞かないで、飛び出して」

二人はちゃんと謝っていたようだったので、これで何とかだったが。

「一体、あなたに抱きついた奴って誰なのよ」

「正確には、僕にも近づいてきたやつだけだね」

杏璃達は僕の言葉に、驚きの表情を浮かべた。

「あんたもなの！？ それで、そいつどんな感じだった？」

杏璃は、僕に人を見る目がある事を知っているのか、そう聞いて来た。

「そうだな……まず礼儀作法を知らない。女性で初対面の者に対して名前をしかも呼び捨てにするような奴だ。心が腐りきって穢れてんだ」

「なるほど……」

だからこそ、心が穢れてると僕が思った理由だった。

僕の解釈を聞いた杏璃達が、感心していた。

「おい、さっき言って雄真に抱きついてたやつだが」

すると、一人の男子生徒が僕達に話しかけてきた。

「もしかして知ってるのか？」

「ああ、知ってるも何も、あいつは有名だぜ」

雄真の問いかけに答える男子生徒の言葉に僕は驚いた。

決してその有名というのが悪い方だと言うのも知っているの事……だが。

「あいつを俺達はこう呼ぶのだ」

男子生徒から語られたそれは、僕の予想をはるかに超える物だった。

「サキュバス……とな」

S i d e o u t

第98話 嵐を引き起こし者（後書き）

自分で書いてて背筋に寒気が走るのは気のせいですよ？

第99話 サキユバスと呼ばれる少女

??? Side

「でね、あたし雄真に抱きついたので」

あたしは教室に戻ると、成果を口にした。

「ふうん。やるね佐恵子。でもまだまだ足りないわ。今度は浩介君とお弁当を食べてお話をしてみたらどう？」

「それいいね！ 浩介優しいから色々と話してくれるね」

あたしは友達の助言で妄想が広がる。

「で、でもいいのかな？」

「あん？ なにがよ行ってみな幸恵」

幸恵ちゃんに佐久名ちゃんが問い詰める。

「だって、高月君にも、小日向君にも恋人が だから何？ いえ、なんでもありません」

「変だよ、幸恵ちゃん。恋人がいたら、奪っちゃえばいいんだよ？」

あたしはそう告げた。

そつだよ、邪魔な奴は消しちゃえばいいんだ。
今までのようにね。

Side out

その力の先にあるもの

第99話「サキユバスと呼ばれる少女」

浩介Side

「……サ、サキユバス!?」「……」

男子生徒の言葉を聞いた僕達は思わず叫んだ。

サキユバスと言われるからには、それほどすごいのか。

「そうさ。あいつは今までも色々な男子生徒に目を付けては、何人も精神がいかれさせやがったのさ」

「なるほど、それでサキユバスか」

「ああ、俺達も怯えてんだ、あいつに目を着けられんじゃねえかってな」

男子生徒が怯えているのもよく分かる。

確かに、サキユバスではないが、しかし精神が駄目になると言うので近い存在はサキユバスという事になる。

「最近も普通科の奴がここを止めてったな。何でもストーキングされたらしいぜ」

「……」

あまりの悪行ぶりに、僕は何も言う事は出来なかった。

「あいつには確か友人がいたらしいんだが、そいつのせいでいなく

なつたらしくてな」
「いなくなつた？」

僕は男子生徒の言葉に引つかかった。

何か変な噂を流されて離れて行ったのかなとも思ったが、どうやらそいつは、僕の常識を超えた行動をするみたいなので、聞いてみたのだ。

「ああ、なんでも突然行方をくらませたみたいでな、今でも見つからないんだよ」

「そうか……ありがとうな」

僕は男子生徒にお礼を言った。

これはかなりの重要な情報だ。

「何、礼を言われるまでもないさ。という事で、二人の事は俺達クラスが守ってやるから、ここにいる間は心配いらねえぜ」

「ありがとう」

お礼を言ったのと同時に、授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

なので僕達は自分の席に着いたのだが。

(サキュバスと呼ばれる少女か……気を付けないとな)

僕はそう思い、気を引き締めるのだった。

Side out

クラスの奴から、あの女子生徒についての話を聞いた日の夜。

ピピピピピピ

「……………出ないの？」

「ああ」

リビングには電話が鳴っているにもかかわらず、中々出ない浩介を不思議そうな顔で見る久美の姿があった。

「どうしたんだ？ 浩介」

俺はその異様さに、つつい浩介に聞いた。

「ああ、例のサキュバスから電話がかかってきてんだ」
「何!？」

俺は浩介の携帯を手にとると、ディスプレイを確認した。
そこには俺達の知らない電話番号（恐らく携帯だろう）が表示されていた。

「だけど、どうしてこれがサキュバスからの電話だと分かるんだ？」

「さつき知らないで出たら、あいつの声だったんだ」

俺の疑問に浩介が答えた。

かなりげんなりとしていた。

「仕方ない。雄真、ちょっと携帯貸して」
「おいおい、俺の携帯をどうする気だ？」

俺は浩介の頼みにそう尋ねた。

変な事されて、電話が出来なくなったら大変だ。

「変な事はしない。携帯にこの番号から繋がらなくするだけだ」
「ならいいけど」

俺は浩介の言葉を信じ、携帯を渡した。

「それじゃ、10分で返すな」

浩介はそう言い、今だ鳴りやまぬ携帯を手に、リビングを後にした。

「浩介さん、大丈夫かな？」

「分からない」

すももの疑問に、俺はそう答えるしかなかった。

浩介Side

「よし、これでもう電話は大丈夫だな。後は……」

僕はサイホーリング号の総合管制室にいた。

先ほど、電話の着信深設定を終え、雄真に携帯を返したばかりだ。
そして僕は、クリエイトを手にするると、接続ポートにそっと乗せた。

次の瞬間、画面に色々なデータが表示される。これが、クリエイトの優れている所だ。

「クリエイト、この画像を連盟に転送して、魔法使いデータベースとなければ、住民票を照合」

『了解しました』

僕はクリエイトに照合指示を出すと、紅茶を一口口に含んだ。

「それにしても、どうしたもんか」

僕は必死に悩んだ。

いま彼女をどうにかできる方法がない。

倫理規定にも違反していなければ、犯罪も犯していない。

だからこそ、法的には彼女を裁く事は出来ない。

法的が無理ならば、残るは……殺すだけ。

(駄目だ駄目だ!！)

そんな事をすれば杏璃との約束を、破ってしまう事になる。

そんな事だけは、絶対にしない。

ようやく変な楔から解放されたんだ。

自分で作るなんて事はしない。

「クリエイト、照合にどのくらいかかる？」

『申し訳ありません。1週間はかかります』

照合が終わらない事を不審に思いクリエイトに尋ねるとそんな回答が返ってきた。

「いや、謝らなくていい。照合を中止して」
『分かりました』

そして僕はまた、紅茶を呑んだ。

その後僕は自室に戻ると、眠りに就くのだった。

S i d e o u t

10月22日

この日はいつも通りだった。

ハチと水園がいつも通りにイチャイチャしたりといったやつだが…

…。
そう、あの時まででは。

それは昼休みの事だった。

今日は杏璃がオアシスのバイトでいないため、僕は一人寂しく花見をした場所でお弁当を食べていた。

「あ、ここにいたんだ。浩介君」

「あれ？ どうしたんだ？ 準さん」

そんな時にやって来たのが、準さんだった。

「浩介君、会いたって言う人がいるんだけど、付いて来てくれる？」

「別に構わないけど」

僕は準さんの頼みだったので、何の疑いもなく付いて行く事にした。

「なあ準、屋上にそいつがいるのか？」

「そうよ」

そして準さんは屋上へ続くドアを開けた。

「それじゃ、私はこれで」

「な！？ あんたは！」

屋上にいたのは、サキュバスと魔法実習の時に助けた女子生徒、そして緑色の髪を後ろで束ねて顔立ちの言い女子生徒の3人がいた。

「あの……その」

僕の鋭い視線に、前に助けた女子生徒がたじろいでいた。

(気が弱いのか?)

そんな事を思っていると、緑色の髪をした女子生徒が一步前に出た。

「初めまして、あたしは峰月佐久名よ。でこれが」

「み、宮本幸恵です」

「そしてあたしが月本佐恵子だよ。浩介」

宮本さんはいいにしろ、恐らくは峰月と月本がグルだというのは一目瞭然だった。

「んで、僕に何の用だ？」

「んもう、こんなに可愛い子がいるんだから、そんな態度はしちやいけないよ?」

この時、月本を見た僕の感想は一言だった。

(気持ち悪い)

「そんな浩介君にプレゼント。佐恵子と一緒にお昼を食べる権利をプレゼント!!」

「な!?! いらない!! そんな物、死んだってするか!?!」

僕は峰月にそう言って拒否した。

その瞬間、峰月の表情が変わった。

それは、まるでチンピラのようなようだった。

「あらあら。あなた、一緒に食べておいた方が身のためよ? さもなくば、大事な人がいなくなるわよ?」

「ッ!!!?」

今のは明らかに脅しだ。

この高月家次期当主に対してそのような事をするとは、恐れ入った。

「分かった」

さすがに分が悪いので、僕は受け入れるしかなかった。

「あら、そう それじゃあたしたちはお邪魔のようだし行きましょ
うか?」

「う、うん」

そして、全員が屋上を後にした。

「ささ、浩介。座って」

「ちよつと端に座って」

「分かったよ」

僕の命令に月本は従い、端に座った。

(障壁よ)

そして僕はこっそりと見えない壁を形成すると反対側に座った。

「むふふ、浩介 あた!？」

やはり近づいてきた月本に僕は告げた。

「僕はお昼を食べると言ったただけだ、それ以上入るのであれば今すぐ止める」

「……」

月本はなにも言わない。

だが、舌打ちのような物が聞こえた気がした。

「ねえねえ、あたしの悩みを聞いてよお」

「……」

「あたしね、今クラスで孤独なお。どうすればいいのお？」

虫唾が走りそうなくらい嫌だが、僕は月本に答えてやった。

「だったら、積極的に話すこと。人の嫌がる事をしないようにすればいいだけだ」

「嫌がる事なんてしてないよお？ だから浩介だって一緒にお弁当を食べてるんだよ」

月本のあまりの答えに、僕は反論する気もなかった。

「そつだ。あたし魔法がうまく出来ないのお。どうすればうまくできるようになるう？」

「……… 数学の勉強を怠らない事、想像力を養う事」

僕はそつけなくそつ答えた。

魔法を使うにあたっては想像力などが必要だし、ベクトルなどの数学的知識も必要だ。

「そつ言えば、浩介は高月家の次期当主なんでしょ？」

「それがどうした？」

「いいなあ、将来は大金持ちだもんねえ」

「……………っ！！？」

月本の言葉に、僕は体中から怒りがこみ上げた。

「……………なくせに」

「え？」

「何も知らないくせに、偉そうに言っな！！！」

僕はついに怒りの頂点を超えた。

僕の家を馬鹿にしたから？

それもある。

僕の人生をけなしたから？

それもある。

次期当主の座も、今まで血もにじむ苦勞をして得た物だ。

それをあのようになされた事に対する、怒りは尋常ではなかった。

「え、あたし何か起こる様な事を言ったあ？」

月本はその事すらも理解していなかった。

「もういい！！」

僕はそう怒鳴ると、フェンスを飛び越え、屋上を後にした。

午後の授業は二つのクラスの混合での魔法実習だった。

「こら月本!! 実習をしろ」
「……………」

実習室に響き渡す怒鳴り声に、全員が実習を止め、声のした方を凝視する。

そこにいたのは、床に座り込んでいた月本だった。

教師に注意されてもなお、動こうとするそぶりを見せない

「無視とはいいい度胸だ……………おい、高月。ちょっと来い」
「……………はい」

先生から僕の名前が出た途端、月本の目が輝いた。

「なんですか?」
「こいつと模擬戦をしてくれないか?」

先生の元に向かった僕が聞いたのは、そんな物だった。

「ここは、あんたの力であいつの性根を叩き直してやってくれ」
「……………分かりました。受けて立ちましょう」

この時僕は、ある利点を考えていたのだ。

(力でねじ伏せれば、こっちの要求を聞かせる事が出来る)

要は向こうのやってきた事の、仕返しのような物だった。

「月本はどうする?」

「やります!! 戦いたいです!!」

月本はさっきまでのやる気のない様な態度から一転、好戦的になっていた。

「.....」

そして僕達は今、向かい合っていた。

周りでは、生徒達が僕達の模擬戦を見ていた。

「それでは、始め!!」

先生の合図を聞いた瞬間、僕はクリエイイトを構えた。

(まずはコテ調べ)

「はあ!!」

僕は簡易式の魔法弾を、数発月本に放つ。

「きゃ」

月本はそれをわざとらしい悲鳴を上げて避けていた。

「やったね」。次はあたしの番だよ」

月本はそう言うと、銀色の杖の形をしたワンドを構える。

そして月本が放った魔法弾は、お世辞でもすごいなんて言える代物ではなかった。

「フン！」

僕は魔法弾を拳で軽く殴ると、それは消滅した。

「次もあるよ！」

そして、僕に再び魔法を放とうとする。

「うわ〜!!?」

しかし、月本さんは躓いたのか、こっちに向かって走ってきた。そして、僕に抱きついた。

S i d e o u t

「な!？」

突然始まった浩介とサキユバスと呼ばれた奴との模擬戦。

女子生徒の方は、完全に遊んでいたのだが、女子生徒はわざとらしく、躓いたかと思えば浩介に抱きついたのだ。

それによってみていた他の生徒も、ざわめきだした。

「あいつわざとだろ」

「何あいつ?」

「高月君、やっちゃえ!!」

そんな声までさらに聞こえていた。

俺は、浩介の行動を見守るのであった。

浩介Side

「大丈夫? 月本さん」

「うん。浩介のたくましい体のおかげで大丈夫だよ」

僕は笑顔を作り、月本に聞くとそんな答えが返ってきた。

しかし、彼女は離れる気配どころか、さらに抱きつく力を強めた。

(なるほど、最初からこれが目的だったわけだ)

僕は、そう感じ取り月本に死刑勧告を言い渡すことにした。

「それじゃ、月本さんにいい事を教えてあげる」

「なあに？」

「模擬戦中の敵に近づくのは……」

僕はそう言いながら魔力を溜めると、月本の体との間に薄く幕を作る。

「命取りだ!!」

そして、僕は一気に攻撃へと転換する。

「バースト、インテグラント!!」

パァン!!!

「きゃああ!!!? が？ は！」

僕の魔法にいおって、月本は元いた場所まで弾き飛ばされた。

これがバースト魔法だ。

自分で作った魔法をわざと爆発させ、その衝撃によって、相手を遠くに吹っ飛ばす。

そして、今のはその吹っ飛ばすのに、ダメージ効果も追加した物だ。

「喰らえ!!! ダークインパルス!!!」

「ぐぎゃ あああ!!!」

闇属性の爆発攻撃が、月本を容赦なく襲う。

「これが絆の力だ!! 儀流・特幕、盟約の黙示録!!!」

そして僕は、高月家儀流魔法を発動させた。

「我が主の名の元に。ダークインフィニティー!!!」

ザルヴィスによる闇攻撃が炸裂する。

「破壊の剣よ。破壊魔性剣!!!」

ラティーヌは、全てを打ち壊す剣を大量に月本に浴びせた。

「が!?!」

「おまけだ!!! ダークインフィニティー!!!」

最後にザルヴィスの攻撃魔法が唸る。

「必殺奥義!!!」

僕はとどめとばかりに、魔力を溜めこむと宙に浮かんでいる月本に照準を合わせた。

「闇よ、全てを滅ぼせ!!!」

「あがあああああ!!!?!」

最後の一発が命中し、月本は地面に叩きつけられた。

「そこまで! この勝負、高月浩介の勝利!!!」

先生がそう告げた瞬間、実習ないが歓声で包まれた。そんな中、僕は月本のそばに近づいた。

「おい。もしまた雄真や僕に近づいてみる。今度は命の保証はしない！」

僕はそう脅すと、踵を返した。

今、僕はとても気分が良かった。

Side out

「ばんざーい！！ ばんざーい！！」

実習が終わると、浩介は、クラス中の生徒たちに胴上げされていた。

理由はあの女子生徒を倒したからだった。

しかも、徹底的にだ。

「いや、私もあれは嫌だったのよね。高月君のおかげでスカッとしちゃったわ」

浩介はとても嬉しそうだった。

月本Side

「全く！ あいつは何様のつもり！？ 佐恵子をこんなになるまで傷つけて！」

佐久名ちゃんが、あたしを介抱しながら怒っていた。

「違うよ、浩介が悪くないよ。悪いのは……浩介の周りにいる女どもだよ！！！」

そっこだよ。

あいつらがいるからあたしの美しさが輝かないんだ。

「ねえ佐久名ちゃん。浩介の周りにいる女性の人全員調べて」

「おお、何をするのかな？」

佐久名ちゃんが嬉しそうに、あたしに聞いてくる。

「皆に罰を与えるの！ そして二度と近づけないようにするんだ」

「その意気よ佐恵子！ あたしも協力するわ。彼女達を懲らしめましょ？」

やっぱり友達っていいな。

待っていてね、浩介！

今すぐ目を覚ましてあげるからねっ！！

S i d e o u t

第100話 日常の終焉（前書き）

祝100話達成!!

と言いたい所ですが、内容がこれとは真逆です。
それでは、どうぞ

第100話 日常の終焉

月本Side

「高峰小雪に式守伊吹……」

あたしは自分の部屋で浩介と雄真の周りにいる邪魔者のリストを見ていた。

「こんなにいるんだ……」

(後はどうやって懲らしめるかだね)

あたしはこの邪魔者を懲らしめる方法を考えようとするけど、中々まとまらない。

「そうだ！ 佐久名ちゃんにお願いしよう!!」

そしてあたしは携帯で佐久名ちゃんに電話をするのだった。

Side out

その力の先にあるもの 第100話「日常の終焉」

10月28日

「おはようかーさん、すもも」

「おはようございます。兄さん」

「おはよう雄真君」

朝、俺はいつも通りにリビングに入ると、朝食の支度をしていたか
ーさんとすももに挨拶をした。

「そう言えば、浩介達は？」

「あ、浩介君と久美ちゃんは何でも緊急の用事とかで、実家の方に
戻ったわ。浩介君曰くお昼ごろには行くだって」

「ふ〜ん」

俺はこの時、浩介達がない事を軽く考えていた。

「兄さん、朝ごはん食べましょう」

「そうだな」

そして俺は朝食を取るのだった。

「悪い、遅れた」

「本当に昼休みに来たな……」

申し訳なさそうにオアシスに入ってきた浩介に、俺は苦笑いして迎え入れた。

「それでなんで遅れたのよ？」

「そう言えば久美はどうした？」

俺と柗の問いかけに、浩介は顔色を変えた。

「これから言う事は、他言無用だ。それを約束してくれるか？」

浩介の表情から、それはかなり重要な話だと言う事が分かった。だからこそ、俺達は無言で頷いた。

S i d e o u t

浩介 S i d e

それは昨日の夜のことだった。

「た、大変よ！！兄さん！！！！」

「な、なにがあつたんだ！久美！！！！」

慌てるようにして部屋に入ってきた久美に、僕は用件を聞いた。

「私の議定書が、議定書が！！！！」

僕はこの時から、うすうす嫌な予感を感じていた。

「議定書が無くなったの!!!」

「議定書を失くしただと!?!」

「ご、ごめんなさい!!!」

今まで座っていた僕は久美の言葉を聞いて、驚きのあまりに立ちあがった。

「とにかく、話を聞かせてくれ!」

「う、うん!」

僕は久美から詳細な事を聞いた。

何でも議定書が無くなったのに気づいたのは、夜の魔法トレーニングをしていた時のことだったらしい。

仕上げに高月家儀流の魔法を行使しようとしたが、使用不可になっていたのを不審に思い、探してみた所議定書が無かったらしいのだ。

「久美、お前格納してある異空間に3重ロックは掛けてなかったのかよ?」

僕は気になる事を久美に聞いたです。

異空間には、本人の意思で開けられないように、鍵を掛けているのだ。

そのために、突破される事はまずないのだ。

「それが最初のロックが掛って無かったみたいで」

「なるほどな……」

久美の言葉を聞いて納得した。

3重ロックで一番強化なのが最初のロックになる。つまりそれさえ突破してしまえば、後の二つは異空間へのアクセス座標さえ分かれば異空間内に進入できるのだ。

「とにかく、これは本家に報告する」

「……………うん」

久美は僕の言葉に目を伏せていた。そんな久美を見ながら僕は、本家にいる父さんに連絡をしたのだった。

翌日、僕と久美は魔界に戻り、本部の会議室に集まっていた。そこには、高月家の分家を含めた当主達が既に席に座って待っていた。

「……………というのが、今回の起きた事件です」

「ふむ」

父さんによる事情説明が終わり、全員が口々に意見を言い出す。

「彼女は即刻破門にするべきだ！」

「いやいや、まずは無くなった議定書を探すのが先決だ」

「確かにこれは忌々しき事態だ」

「ゴホン！ 私個人としては、彼女には厳重な処罰を受けて貰うべきだと思うが、いかがかな？ 本家当主殿」

この状態では、とてもではないがまとまらない。

そう思ったのか一人の分家の当主が倒産にそう結論を告げた。

「そうだね。今回の決断は、次期当主である浩介氏に委ねよう」

「な!?!」

僕は突然の父さんの言葉に、思わず声を上げた。

今までこう言った重要な案件では、意見を言う事は出来ても決断をさせて貰う事までは出来なかったからだ。

「なるほど、魔界の番人の君でなら任せられそうだ」

【こう言った事は俺よりも、お前の方がいいだろ?】

父さんからの念話で僕は、全てを理解した。

父さんも久美を守りたいんだと。

「えー、今回の事件ですが、彼女の最初のロツクミスという事が原因です。しかし、そのロツクミスは一つだけであり彼女の過失は低いと見られます」

僕は事実を並べて、出来る限り論理的に説明する。

このままでも向こう側が満足はしない。
なので、向こうの要求も通す。

「しかし、それを加味しても彼女の起こした事件は大変重大な危険をはらんでいる者でもあり、それを無視する事はできません。よつて、高月久美子氏を無期限の高月家権限のはく奪に処する事にします」

「……………っ!？」

その場にいる全員が驚いたように顔を見合わせた。

高月家権限のはく奪……………それは聞こえはかなり重い罰のようだが、実際は3番目に重い罰なのだ。

高月家権限である高月家の当主などからの調査などや、破門などの行為が出来なくなるだけなのだ。

久美は調査専門の為、そう言った物と公務への参加禁止という事になる。

「久美、お前はしばらく自宅謹慎だ」

「……………はい」

僕は久美に最後にそう言い渡した。

これが僕に出来る事の限界なんだ。

「これでいかがでしょう?」

「まあ、ちゃんとした処罰ですので、特に私達からは反論はありません」

当主達の意見により、久美の正式な処罰は決まったのだった。

「そんな事があったのか」

俺達は浩介の話聞いて、そう静かに呟いた。

「ところで、高月君。その『議定書』って何かな？」

浩介の話聞いていた春姫が、疑問を口にした。

「正式名所は『高月家儀流議定書』だ。高月家の者全員が持つ魔導書で、これが無いと儀流系の魔法が使えなくなる」

「でも、どうしてその魔導書一冊でここまで話が大きくなるのよ？」

柊が浩介に疑問を投げかけた。

確かに、魔導書の一冊ごと気と言ったら何だが、あそこまで大きくなるのは異様だった。

「それはな、普通の魔導書とは違い、あの議定書には高月家儀流の魔法を使う魔方式が書き込まれていて、魔導書のロックさえ解除すれば、誰でも高月家儀流を使えるようになってしまっただ」

「な、なんだって!？」

あの高月家儀流を誰でも使えるようになったら、それこそとんでもない事になる。

それは俺にでもすぐに分かった。

「特にそれが犯罪にでも利用されたら最悪だ」

「でも、久美さんの議定書にはそんなに恐ろしい物は入っていませんよね？」

「いや、全員に共通している物で入っているのが、人を死に至らしめる効果のある魔法なんだ」

「死に至らしめる!？」

俺達は何度目かもしれない驚きの声を上げた。

「その名も【儀流・終幕、死への狂想歌】だ。あれは魔力光に触れたもの全てを殺す奴だ」

「それって、大問題じゃない!」

浩介の説明を聞いた柊が声を上げた。

「そう言う事だが、現在連盟が総力を上げて搜索している。その結果を待つしかないな」

「そう………ごめんね、つらい事を聞いて」

春姫の謝罪の言葉に、浩介は気にするなど言っていた。

「ねえ、雄真君。クリスマスイブに行く場所だけど、もう決めた？」

「そ、そうだな……………」

春姫からの問いかけに俺は首を傾げた。

春姫から前に言われていた事だったので、俺も考えていたのだが、中々案が思い浮かばなかった。

「動物園なんてどう？」

「動物園か。可愛い動物さんがいればいいね」

俺の出した案に、春姫が予想以上にくつついた。

「それじゃ、クリスマスに行く場所は動物園という事で」

「うん。あ、私御薙先生に用があるから、また明日ね」

「お、またな」

そう言っただけで俺と春姫は廊下で分かれた。

……………これが俺が春姫とかわした最後の言葉だった。

Side out

浩介Side

「ねえ、浩介。行きたい所は決まった？」

「ああ、遊園地に行きたいな」

僕は帰り道で杏璃に行きたい所を聞かれたので、そう答えた。

「遊園地？　またしても何でそんな所に何か行きたがるのよ」

「僕ね、遊園地に行った事が無かったんだよ」

呆れた様な杏璃の言葉に、僕はそう答えた。

「はあ？　だって浩介の家にはあったでしょ？　遊園地」

「確かにあったけど、一人でやるのって、とても悲しい物なんだ。だから今まで一度も言った事が無いんだ」

「そう、なんだ」

僕の言葉に杏璃はそれ以上聞いては来なかった。

「でも今年の遊園地は杏璃と一緒に行ける。だからとても楽しみだな」

「も、もういきなり変な事言わないでよ／＼」

杏璃はなぜか顔を赤らめていた。

「あ、雨」

そんな中、突然雨が降り出した。

「あたし傘持ってきてないよ」

「それは僕もだけど、こんな時は……っ」と

「異次元空間よね？　今取り出したのは？」

僕が異次元空間から取り出すのを見て、僕にそう聞いて来た。

「そうだな、まあこんな事でも使えると言う事だ。さ、差して帰ろう」

「そ、それって相々傘／＼」

「ん？ 一緒に入るのがいやだったら、杏璃だけで使うか？」

僕は一緒に入るのを嫌がっていそうな杏璃にそう提案した。

「い、いやなわけないでしょ！」

そう言っただけで杏璃は思いつき僕にくっついたのを確認して、僕は傘をさした。

「晴ればいいわね」

「？」

「クリスマスイブの日よ。せつかくのデートなのに雨だったらいやでしょ？」

「そうだね。でも絶対に晴れるよ」

僕がそう言っただけで、杏璃は笑っていた。

「まあ、それが浩介らしいわね。って、もう着いちゃった」

「はは。楽しい時間は立つのが早いな」

僕がこうして笑えるようになったのは杏璃のおかげだ。そう思いつつ、杏璃にそう答えた。

「浩介」

「なにか んう!？」
「ん、ちゅ」

杏璃に呼ばれたと思い、振り返ると突然キスされた。

「ま、また明日ね！ 浩介!!」

そう言っつて杏璃は走って、寮の中に入って行った。

「恥ずかしいんならやらなきゃいいのに」

僕は最後にそう呟くと、そのまま家に歩いて行くのだった。
楽しい日が終わるとも知らずに。

S i d e o u t

「ただいま」

「お帰り、雄真」

「お帰りなさい、兄さん」

家に帰った俺はリビングで、テレビを見ていた浩介とすももと言葉を交わすと、浩介の横でテレビを見た。

「魔法使いによる連続強盗事件？」

「そう。連盟の方でも、これで大変らしいんだ」

「確か、昨日は取引をしようとしていた人たちが持っていたお金、

三千万円が盗まれたんですよね？」

俺の言葉に、浩介達がそれぞれ俺にそう言ってきた。

「つと、私、ちょっと出かけますね」

「あれ、こんな遅くに買い物か？」

「いいえ。伊吹ちゃんが来るように手紙で言ってきたんですよ」

突然出かける支度をするすももに、俺が尋ねるとすももは嬉しそうにそう呟いていた。

(まあ伊吹なら大丈夫だな)

俺はそう考え、特に言及はしなかった。

「気を付けて行けよ？」

「はい。それじゃ、夕食までには戻りますね。行ってきます」

「行ってらっしゃい」「」

俺と浩介はリビングを後にするすももに、そう言って見送った。

「……久美、分かってるよな？」

「うん。分かってるよ」

久美はそう言うと、すももの後をついて行くように家を後にした。

「浩介？」

「分かってるさ。念のためだよ」

浩介は俺にそう言うと、リビングに戻って行った。

「あれ？ すももちゃんは？」

「かーさんか。まだ戻ってきてないんだ」

「そう。心配ね」

かーさんの問いかけに、俺はそう答えた。

「久美とも連絡が取れない。おかしいな、いくらなんでもこう言う事は無いはずなんだが……」

俺は浩介の言葉に、嫌な予感を感じた。

ブルルルルルル

「はい。小日向です。……ええ！？ ……はい……はい！ 分かりました！！」

突然の電話に出たかーさんは叫び声を上げたので、俺は何事かと思っ

「かーさん、なんだって？」

「雄真君、浩介君。落ちついて聞いてね」
「あ、ああ」

この時、俺は嫌な予感が確信に変わっていた。
そして、かーさんから、衝撃の一言が告げられた。

「すももちゃんと久美ちゃん達が、何者かに襲われて意識不明の重体なのよ!!」

それが、俺達の戦いの始まりだった。

S i d e o u t

第101話 襲撃事件（前書き）

前回は、誤って102話を投稿してしまいました。
大変失礼しました。

第101話 襲撃事件

3人称Side

夜の公園に、二人の姿があった。
それは久美とすももの物だった。

「あ、伊吹ちゃん！」

「む、すももと久美か」

指定された所には、確かに伊吹が待っていた。
しかし、それは少しばかり異様な物だった。

「どうして小雪さんに準さんや撫子さん達までいるんですか？」

そう、そこには伊吹や久美達の他に沙耶、信哉そして準に小雪の姿もあつたのだ。

「私は浩介さんに呼ばれて」

「私は八輔さんに呼ばれまして」

「私は雄真に呼ばれたんだけど」

「私は小雪様に呼ばれましたので」

「俺は沙耶と伊吹様を、お守りするべく」

「私はすももに用があると云われて、呼び出されたのだ」

それぞれがここに来た理由を話す、その時点で全員が疑問を感じていた。

なぜ呼んだ本人が来ていないのか？

呼んだのを忘れたか遅れているということであれば説明は行くが、

それがこうも大人数になると話が別になる。
つまり、それが意味するのは。

「嵌められたわ！」

久美の一言だった。

「どういう意味だ？ 高月……く……み……」

声を上げた久美に説明を求めようとした伊吹だが、突然力なく地面に倒れた。

「伊吹……ちゃ……ん」

そして、今度はすももだった。
それを川切りとして、次々に全員が倒れて行った。
まるでそれは、集団催眠のよういだ。

「ま……さか」

久美は脳裏にある魔法が思い浮かんだが、それを口にする事は出来なかった。

「な、なにが起こったのだ」

信哉は突然の事態に慌てつつも近くの気配を探り、敵の位置を突き止めようとしていた。

「見つけた！！ 雷神の……太刀……！！」

信哉がとある方向へと風神雷神を振りかぶる。

「つち!!」

「もらった!!」

声を出したのが運の月。

それは信哉にさらに詳細な位置や距離を、分からせるのに申し分なかった。

だが……。

「……終幕、闇夜の灯火」

「な!? それ……は」

犯人の魔法呪文を最後に、信哉は地面に倒れた。

それは紛れもなく、高月家儀流だった。

Side out

その力の先にあるもの

第101話「襲撃事件」

最初それを見たときは、夢かとも思った。

「春姫!? おい! しっかりしろ!! 春姫!!」

瑞穂坂総合病院の一室に、俺の声が響き渡った。

今俺の前にいるのは、ベッドの上で眠っている春姫の姿だった。俺の呼びかけの声にも、春姫は全く反応が無かった。

「医学的には外傷もありませんので、全くの健康体です」

ドアに立っていた医師が、しかしと言葉を続けた。

「何らかの要因により、意識不明状態なのです。我々でも対処のしようがありません」

それは俺にとっては死刑宣告だった。

「雄真、どうだったんだよ!？」

「……………ハチ…か」

俺は気づくと待合室にいた。

「……………その様子だと姫ちゃんもか」

ハチも少しばかり元気がなかった。

そう、襲撃されたのはすももや春姫だけではなかった。

終に久美、伊吹に上条さんに信哉、小雪さんに準に水園さんの10人。

「そういえば、俺達の学園の生徒もここに運び込まれてたな」

「誰なんだ？ そいつは」

「確か……………月本と言う名前だったような」

ハチの言葉を聞いた瞬間、俺は息を呑んだ。

彼女までもが襲われたと言う事で、犯人の目的が分からなくなったからだ。

「とにかく、浩介が来るのを待った方がいいんじゃないか？」

「そうだな」

俺は病室に入った浩介が戻るのを待つ事にした。

浩介 Side

「杏……璃？」

家で音羽さんの電話を聞いて、病院に来た僕はそこで信じられない物を見た。

それは、神坂さん達が運び込まれている所だった。

その中に、久美と杏璃の姿もあった。

そして杏璃の寝ているのを見た僕は、その場で力なく座りこんだ。

「は……はは。杏璃、悪い冗談はやめてくれよ」

僕は現実を見たくはなかった。

そう、これは夢だと思いこみたかった。

でも、そんな事は許されなかった。

「杏璃……目を……目を開けてよ、杏璃……!!」

僕は叫びながら杏璃の体を揺らしていた。

「あ、浩介！」

「浩介！」

病室から出てきた僕に声を掛けたのは雄真と八子だった。

「なんで……何でこんな事になるんだよ!!」

「俺に言わないでくれ!!」

「お、おい二人とも落ち着けて!!」

僕の心の叫びに、いつもは叫ばない雄真が叫んだ。
それで僕の眼は覚めた。

「あ……そうだったね。雄真は妹と大事な人と友人までやられてるんだよね。ごめん」

「それはお前もだろ。こつちも悪かった」

「つたく、しつかりしろよ二人とも」

いつもはお茶らけている八子が僕達にそう言ってきた。

「さて、僕は今から行かないといけない」

「行くつて、どこに?」

気を入れ直して告げた言葉に、雄真が聞いて来た。

「学園さ。緊急事態だから、しばらく学園は休校状態にさせないといけない。その要請のためさ」

「なるほど」

僕の説明に二人は納得していた。

「僕はこの事件を調べるが、雄真はどうする」

「俺……は」

そして僕は雄真に、尋ねた。

僕は雄真の答え次第では、一緒に調べようと思っていたのだ。

「俺も、一緒に調べる。なんでこんな事をしたのかを、犯人の奴に聞き出してやる」

「……分かった。だったら、これを」

僕はそう言っただけ雄真に一枚の紙を差し出した。

「これは？」

「それは捜査契約の用紙さ」

「捜査契約？」

予想していたように、雄真が首を傾げた。

「親友や家族が被害者になった場合は、錠を入れてしまい捜査に支障をきたす事がある。これはそれを絶対には言えないが、情を入れないように努力すると言っ事を証明するものさ。僕もすでにサインをしたが、これさえあれば、雄真にも捜査をする権利が出ると言う事だ」

「これにサインすればいいんだな？」

雄真はそう言っただけ名前前の記入欄に、サインを書き始めた。

「そのサインは、非常に重要な意味を持つ物だ。それだけは心に入れておいてくれ」

「分かってる」

そして僕は名前が記入された契約書を受け取ると、病院を後にした。

(杏璃が、襲撃された事は一旦気にしないようにしよう)

僕は、自分にそう言い聞かせた。

そして、僕は瑞穂坂学園に向かったのだった。

S i d e o u t

第102話 捜査開始

10月29日

事件発生から一夜明けた朝。

俺と浩介は瑞穂坂警察署の会議室にいた。

学園の方は、浩介の要請もあつてか臨時休校となっていた。

「それでは、捜査会議を始めろ」

お偉いさんが入ってきたのか、警察官全員が立ち上がったので、俺もそれに習い立ち上がる。

「今回は魔法連盟との合同捜査になる。担当するのは」

「国際魔法連盟法務課大臣。高月浩介です」

「助手の小日向雄真です」

俺達は自己紹介をして礼をして席に着いた。

俺はなぜか浩介の助手という事になっていた。

浩介曰く『捜査のイロハ位見ても、別に悪い物じゃないだろ?』だった。

その力の先にあるもの 第101話「捜査開始」

そして一人の刑事が事件の概要を話した。

事件発生は公園で発見されたすもも達は昨夜の午後6時ごろ、春姫と終に関してはそれから20分後の6時20分。

そして月本さんが6時40分だった。

それぞれの場所を歩いて行けばちょうど20分くらいはかかる場所なので、別段不審な点は見られないとのことだった。

「以上の事より、我々は近頃発生しております、魔法使いによる強盗事件の犯人によるものだと、結論付けました」

その言葉で、終わったのか概要を話していた刑事は席に着いた。

「さて、今までの事で何か疑問点がある者はいないか？」

お偉いさんの問いかけに一人手を上げた者がいた。

「何でしょうか？ 大臣」

「高月で結構」

それは浩介だった。

「今回の事件は、強盗事件とみているようですが、被害にあった者たちは金品は身につけていませんでしたし、盗られたような跡もありませんでしたが、そこはどうお考えでしょうか？」

「その事を知らずに襲いかか 確かにそれもあるでしょう。なので、その線でも調べるのはいいですが、それだけで考えるのは危険かと思えます。……………」

一人の刑事が反論するが、それは浩介によって遮られた。

「分かった。では、これからの捜査方針を言う」

そして、お偉いさんが捜査方針を口にした。

「強盗事件の方も視野に入れて捜査するが、現場近辺の聞き込みも行うよう。以上!」

それは浩介の意見が含まれた物だった。

もしかしたら、警察として当然の結論だったのかもしれないが……。

「ここが、最初の事件現場だな」

俺達が向かったのは、最初の事件現場になった公園だった。

「この明かりがなぜか付いて無かったようだから、発見が少し遅れたんだろっな」

俺は手袋を手に着けながらそう呟いた。

「確かに、そうだとすると犯人の仕業だろっな。それにこれは何だろっ?」

「これ?」

浩介が屈んでみている場所を見ると、そこには黒くなった雑草があった。

「元からそういう色なんじゃないか?」

「公園にこんな色の草があったら、誰だって気づくはずなんだけどな」

俺の指摘に浩介は頭を抱えていた。

「とにかく、次の被害現場に行ってみよう」
「……そうだな」

という事で、俺達は次の被害現場、学生寮へと向かった。

「雄真、学生寮に入れるからって、そうきよるきよるするな」
「きよるきよるしてない!!」

浩介の注意に俺は全力で否定した。

「ここが神坂さんの部屋だな」

浩介はそう呟きながらテープ線を潜りドアを開けた。
ドアが開いて、俺達が見たのは……。

「これは……」
「ひどい」

周りの壁や床が黒くなっている春姫の部屋だった。

「神坂さんの部屋のこの部分は、こんな色だったか？」

「いや違う。前に来た時はこんな色では……っは!？」

俺はそこまで行ってようやく気付いた。

「何だ、やっぱり入った事があるんじゃないか」

「ああ、そつだよ！ 入りましたよ！！ 悪いか!！」

もう俺は開き直すことしかなかった。

「しかし、気になるな」

「だから、もうその話は終わりだつて!！」

「いやそれじゃなくて、二か所の被害現場すべてに、こつ言った黒い物がついていただろ？」

俺の言葉を否定すると、浩介は顎に手を当てて考えるように呟いた。

「確かにそつだな。だけど、一体どういう意味が……」

「失礼。大臣、表に犯人の姿を目撃したと話す者がいるのですが」

「だから高月で結構だ。つて、それは本当か!？」

部屋に入ってきた捜査員の一人の言葉に、俺達は急ぐようにして部屋を出た。

「こつらです」

そこには、一人の女子学生が立っていた。

「えつと、あなたが見た犯人の姿とは、どのような姿だつたでしょうか?」

「あ、はい。叫び声があったので外を覗いたんですけど、その時にちらっと後ろ姿ですけど見たんです。なんだか、うちの学園の制服を着た二人組の女子のような気がします」

浩介の問いかけに女子生徒が答えた。

「「学園の制服を着た二人組の女子生徒……」」

俺は女子生徒の言葉を呟いた。

「ありがとうございます」

「それでは、失礼します」

浩介のお礼の言葉を聞いた女子生徒は、そのまま去って行った。

「これで、犯人は特定されたが、まだ人が多すぎる」

「確かに、魔法科の女子の数は半端じゃないからな」

浩介の言葉に俺も続いた。

そして、俺達は学生寮を後にした。

その足で向かったのが、ファミレスだった。

「これ食べ終わったら、最後の現場に向かうぞ」

「了解」

時間もお昼ごろだったと言う事もあり、程よくお腹を満たした俺達は、最後の事件現場である、月本さんの家へと向かった。

「どちらさまでしょうか？」

「魔法連盟法務課の高月です」

「同じく小日向です」

チャイムを鳴らして出てきた母親と思われる人に、浩介は手帳を見せると名前を告げた。

「お嬢さんのご容体はどうでしょう?」

「はい。幸い軽いやけどで済みましたが、本当に怖くて怖くて」

「御心中お察しします」

(軽いやけど?)

浩介が母親と話しているとき、俺は母親の言葉に疑問を感じた。

他の被害者たちは全員が意識混濁という状態が、なぜ彼女だけがやけどで済んだのかが分からなかった。

「それでは、お嬢さんのお部屋を拝見してもよろしいでしょうか?」

「はい、こちらです」

俺は月本さんの部屋へと向かう浩介の後に付いて行った。

「それでは、拝見します」

「どうぞ」

そして俺は月本さんの部屋を調べ始めた。

月本さんの部屋は、どちらかと言えば小説系の本が多かった。

「きれいですね」

「はい。娘には整理整頓をしろと、日ごろから言い聞かせておりますので」

浩介の言葉に、母親が嬉しそうに答えた。

「この形は……もしや」

「どうかしたか？ 浩介」

浩介が壁の一か所を見て何かを呟いていた。

「あのすみません」

「はい。何でしょうか？」

「この壁に何か貼ってあったりしませんでしたか？」

浩介がそう言っ指差したのは、逆三角形の形に黒くなっていた物だった。

「いいえ。確かに何も張ってありませんでしたが」

「そうですか……あの」

そして、浩介は母親に質問をして言ったのだった。

「長居してしまいすみませんでした」

「いえいえ、こちらこそお構い出来なくて」

俺達は母親に頭を下げ、家をあとするのだった。

「浩介、一体さっきの質問はどういう 悪い」

俺の疑問の声を遮るように携帯が鳴り出したので、浩介は電話に出た。

「はい、高月です……はい……はい……分りました、すぐにそちらに戻ります」

電話で話す浩介は最後に慌てて電話を切った。

「どうしたんだ？」

「連続強盗事件の犯人が捕まったらしい」

俺は浩介の言葉に、胸が高鳴った。

「本当か!？」

「ああ、急いで行くぞ!!」

そして、俺達は瑞穂坂警察署に向かうのだった。

第103話 深まりし謎

「それで犯人は？」

「はい。こちらです」

警察署に戻った俺達は、捜査員の一人の案内で取り調べ室の控室に連れていかれた。

その力の先にあるもの

第103話「深まりし謎」

「彼がその犯人ですか」

「はい」

硝子越しに見えたのは、パツと見30代の男性だった。

「今まで犯した罪は殆ど認めています、一件だけ否認しているのが……」

「今回の連続襲撃事件ですか？」

俺の問いかけに、捜査員が頷いて答えた。

「嘘付きやがって」

俺は唇を強く噛んだ。

「彼の言っている事はおそらく正しいだろうな」

「どうしてだ？」

俺は浩介の言葉に理由を聞いた。

「彼が最後に起こした強盗事件の被害金額は？」

「確か……三千万円くらい」

「そんな大金を手に入れた者が、また襲撃してまで強盗を思うか？ 現に2500万円は彼の自宅から発見されている」

俺の言葉に、浩介がそう言った。

「なるほど、確かにそれならまた強盗をする気はしないよな」

俺は浩介の理由に納得する事にした。

「それだと、犯人は誰になるんだ？」

「犯人の見当は付いています」

捜査員の疑問に、浩介は答えた。

「それは一体……」

「そいつの名前は……」

そして浩介は、犯人の名前と犯行のトリックを俺達に説明した。

「なるほど、それなら納得だ」

「犯人に関しては大臣にお任せします」

「ありがとうございます」

そして、俺達は警察署を後にした。

「浩介、どうやって責めるんだ？」
「そうだな……とりあえずは明日にでも最後の被害者に事情を聴きに行くか」

明日の予定を聞いた俺は、とりあえず小日向家に戻るのだった。

10月30日

俺は、最後の被害者……月村さんの病室前にいた。

「この部屋で合ってるな」
「ああ」

そして、俺達は中に入った。

「あ、浩介！ 雄真！！ 看病しに来たんだね！？」

「悪いが、今は学生ではなく、魔法連盟の法務課大臣としてきている」

中にいたのは月本さんと緑色の髪をした女子生徒だった。

背筋が凍るような笑顔で俺達を見る月本に、浩介は冷たい声でそう言い切る。

「それで、刑事さん。あたしに何の用ですか？」

馬鹿にしたような口調で聞いてくる彼女に、怒鳴りたい気持ちを我慢する。

「事件当夜の状況について、お話を聞かせて貰いたいのですが」

「うん。いいですよ。あの夜はね、お母さんがたまたま留守だった時に、突然部屋に黒い服を着た男の人が入ってきて『金を出せ』って言うてきたの」

「それで？」

俺は色々と言いたい気持ちだったが、我慢して月本さんの話を聞く。

「あたしが慌てていると魔法を使っってきてね、それにあたっちゃったの」

「なるほど……そうですか」

浩介が一回頷いた。

「ね、犯人捕まりそう？ やっぱ最近の連続強盗事件の犯人だよね？」

「一つ聞きたいんですが、あなたは魔法を使ったりしましたか？」

「使っていないよ。あたし、使う余裕なかったもん」

月本さんの答えを聞いた時、浩介が一瞬表情を変えたのを見逃さなかった。

「おかしいですね」

「……………？ 何が？」

「あなたの部屋の壁に逆三角形の黒い物が付いていました」

浩介はそう言うと、黒くなっている部分が映っている写真を、月本さんに見えるように置いた。

「この後の付いている位置は、ドア側から手前で右斜めの位置から放たれた物の後です」

「それが、何かおかしいのかな？」

浩介の説明にも、動じない月本さんに浩介が追及を始めた。

「確かに黒い後がついてもおかしくはないんです。形なんです」

「形？」

月本さんが分からないのか首を傾げた。

「ええ、こう言った逆三角形のような跡にはなりません。ここに何かを張っていない限りは」

「あゝ壁には何も張っていないよ」

月本さんが、浩介の言葉にそう答えた。

「ええ、それは貴方の母親からも聞いています」

「ちょっと待ちなさい！ あんたさつきからの質問は何なのよ!？」
すると突然緑色の髪をした女子生徒が声を荒げた。

「まるで佐恵子を犯罪者扱いじゃない!! いい？ 佐恵子は被害者よ？ しかも怪我で済むように攻撃するなんて器用な事は出来ないわけよ!!!」

「いいんだよ、佐久名ちゃん。聞く事が浩介と雄真の立場なんだから」

「まあ、色々と勘繰りを入れて悪かった」

浩介は月本さん達に頭を下げると、そのまま病室を後にした。

「あの、すみません。月本さんの退院はいつでしょうか?」

「はい。怪我も浅いですし、明日には」

俺達は医師から退院の予定を聞くと、病院を後にするのだった。

「雄真、明後日全校集会を掛ける。もしかしたら戦闘に発展する可能性もあるから覚悟しておいて」

「分かった」

浩介からの指示に俺はそう答えると、この日はそのまま小日向家に戻って行くこうとした時だった。

「あの!」

俺達を呼びとめる人物がいた。

「あなたは、宮本さん？」

「……お話したい事があります」

「話したい事？」

俺の言葉に、宮本さんがこくりと頷いた。

「分かった、それで何を話したいんだ？」

「ごめんなさい!!」

「「??」」

突然謝ってきた宮本さんを見た俺達は、顔を見合わせた。

「ど、どうしたんだ!？」

「と、とにかく話して」

「あの、実は」

そして俺達は宮本さんに話を聞くのであった。

月本Side

「ちょっとヤバいかもね」

「……絶対にもう分かってるよ」

あたしたちは浩介達が出て行ってから作戦会議を立てていた。

「恐らくあいつらは佐恵子の退院の日に合わせて行動を仕掛けてくる」

「ま、まさかあゝ」

あたしは笑い飛ばそうとしたけど、全然笑えなかった。

「だからこつちも武装するのよ」

「な、なるほど。でも、浩介は強いよ？あたしたちに勝てるのかな？」

「大丈夫よ、あたし達には”あれ”があるんだから」

そうだよね。

あたしたちの手元に”あれ”があれば、負ける事はないよね。

S i d e o u t

第104話 真相解明

12月1日

学園の前生徒達が、体育館に集まっていた。

（浩介大丈夫かな？）

俺は、これから起こるであろう事に、緊張していた。

「それでは、これより緊急集会を始めます」

校長先生のその言葉が合図となった。
ついに、真相を話す時が訪れたのだ。

その力の先にあるもの 第104話「真相解明」

「今回は、魔法連盟の法務大臣よりお話がありますので、聞くように」

「ご紹介に預かりました、魔法連盟法務大臣、高月浩介です。今回は集まっていたいただきありがとうございます」

校長先生の言葉で、浩介が壇上に立った。

一方生徒たちは浩介を指差して色々と慌てているようだった。

「さて、今回の話は他でもありません。数日前に発生した連続昏睡事件についてです」

浩介の言葉に、一気に生徒達がざわめく。

「まずは、今回の事件についての概要を話します」

浩介はそう切り出すと、事件について説明を始めた。

「さて、今回の事件ですが、起こした犯人が分かりました」
「それってやっぱり連続強盗事件と同じ……………」

浩介の言葉を聞いた生徒の一人が、大きな声で浩介に聞いた。
ちなみに俺はもう誰が犯人かは知っていた。

「いいえ、違います。目撃者の証言や現場の状況を見る限り…………この事件はここ瑞穂坂学園の生徒によるものと断定できます」

浩介の言葉に生徒達が再びざわめき始めた。

まあ、同じ学園の生徒が犯人かもしれないと言われたら、普通はそうなるよな。

「まず、今回の犯人は次の点に当てはまるものです。まず最初が土地勘がある事。これは先ほどの通り、犯行の場所やそこからの移動などに関してこれ以上には無いと言っても良いほどの近道などをしていきます。次が女子である事です。これは目撃者の証言からのものです。最後は当然のように魔法科の生徒である事、魔法の扱いが苦手である事以上です」

「ちょっと待ってください。どうして魔法の扱いが苦手だと断定できるんですか？」

浩介の推理に一人の女子生徒が疑問を投げかけた。

「はい、それはこの写真が証明しています」

そう言って浩介が取りだしたのは、最初の犯行現場でもある、公園だった。

「この黒い跡のような物ですが、これはある魔法を使用した際に出る物だと推測できます。これを魔法残滓と言い、普通であればこのような物は出てきません。つまり、これが出てしまうのは魔法の扱いが苦手な人物だけしかあり得ないので」

浩介の言葉に、魔法科の生徒達が顔を見合わせていた。

浩介はそんな物を気にせずに続けた。

「さて、これらの条件に見事に一致する人物が、一人だけいます」

浩介はそう言うと、壇上から降り、俺達の方へ向かってきた。

そんな浩介にその場にいた全員が注目していた。

そして浩介は、一人の女子生徒の前で歩くのを止めた。

「そうですよね？ 月本佐恵子さん」

その瞬間、全員が驚いた様子だった。

「ち、違うよお！！ あたしは犯人じゃないよお！！」

「……………そうですね。確かにあなた”だけ”ではないですよね」

浩介は月本さんの否定の言葉に、意味深な発言をすると、少し後ろを見た。

「そうですよね？ 峰月佐久名さん」

もはや、この場を鎮める事は出来ない状態だった。

「待ちなさい！！ 何であたし達が犯人なのよ！」

「いいですか？ あなた方の手口はこうです」

そして浩介は月本さん達の手口を説明し始めた。

「まず、あなた達二人は手紙などで高峰さん達を公園におびき寄せ、一気に魔法を使いこん睡させました。その後、学生寮に向かうと、神坂さんの部屋に入り、神坂さんをこん睡させるとその騒ぎを聞いて駆け付けた柊さんもこん睡させました。最後にあなた達は、偽装工作のため自分も襲われた様に自分に魔法を放ったのです」

「何処にそんな証拠があるのよ！」

浩介の推理に峰月さんが反論する。

「それは、これです」

浩介が体育館の壁に映し出した物……それは。

「これは月本さんの部屋の壁にあった黒い跡です」

「だからこれが何なのよ！」

「この黒い跡ですが、他の現場で見られた物とは全く違う物でした」

浩介はそう言うと、壁の方を見た。

「この跡は純粹な焦げ跡でした。ではなぜこのような物があるのか。あなたは腕に軽いやけどをしましたのよね？ つまり、やけどをするように使った魔法の為に、焦げ跡がついたのです」

「それだけでは、あたし達が犯人だと言う証拠にはならないわね」
「確かにそうでしょうね。しかし、この跡……少し変ではないですか？」

シラを切り続ける峰月（もうさんを付ける気がしない）に浩介は若干演技っぽく告げた。

「どこがよ？」

「模様ですよ。逆三角形になっています。こうなるにはここに何かが張ってなければおかしいんです」

「それで？」

峰月がイライラしたように浩介に続きを促す。

「あなた達は偽装工作をしようとしたのはいいものの、一つだけ問題が発生しました。それが魔法のコントロールが苦手だという点です。そのために魔法を自分に向けて放つ事は出来なかった。だからこそ、月本さんはこれを使ったんですね？」

そう言っただけで浩介が取りだしたのは、三角形の形状をしたシールのような物だった。

「これは、魔法などを真反対に反射させる特殊なシールです。あなたはこれをあそこに張り、魔法を放った。だからこそ、逆三角形の焦げ跡がついたのです」

浩介の説明を聞いた生徒たちは、なるほどと呟いていた。

「これを使ったと言う事は、あなたの母親が証明しています」

俺は数日前の浩介と母親とのやり取りを思い出した。

「いいえ。確かに何も張ってありませんでしたが」

「そうですか……あの昨日に何かなくなった物は、ありませんでしたか？」

「そう言えば、魔法の反射板シールが一つだけなくなっていました。勘違いかとは思ってたんですけど」

最初はこの質問の意味が分からなかったが、今になってその意味がよく分かった。

「た、たとえそれが本当だったとしても、あたしの犯行だと証明はできないね」

「この跡の付いた角度はドアから離れた場所から放たれた物でした。そんな場所に犯人は移動するはずもないですし、第一争ったような痕跡の無かった部屋で、位置を入れ替わるような芸当も不可能です」

浩介が壁に写した映像には、魔法を放った場所の位置が記されていた。

確かにドアから離れた場所から放たれていて、明らかに不自然だ。

「こ、こんなの！ ただの状況証拠じゃない！！」

「あなたはこの計画を行うために、私の妹の魔導書を盗みました」
「違うわよー！」

浩介の言葉に峰月がすぐに否定する。

「本当ですか？」

「違つたら違つわよ！！ 議定書なんて、あたしは盗んでなんかいない！！」

その瞬間、浩介がしてやったりと言いたげな表情になった。俺も内心では、決まりだと思った。

本人も、なにを言ったのかに気付いたのか、口を押さえたが、もう遅い。

「おかしいですね。確かに妹の盗まれた魔導書は議定書というものです。しかしそれをなぜあなたは知っているのでしょうか？」

「そ、それは、あんたが言ったからで」

「私が言ったのは”魔導書”ですよ？ 一言も議定書なんて口に出していません。それはこの場にいる全員が証明してくれます」

浩介はそう言うと、周りをぐるりと見回した。

浩介が、全校生徒を集めたのは証拠を残すと言う理由もあったのだ。

「議定書なんて言う言葉を知っているのは、それを持ちださない限りは無理なんです。まだ否認されますか？」

「……………」

二人は浩介の言葉に、なにも言わなかった。

もはやチエックメイトだと思った瞬間だった。

「ふふふ……あはははは！！！！」

「何がおかしい！」

突然笑い始めた峰月に浩介が強めに叫ぶ。

「馬鹿ね、あたし達が無策でここに来ると思う？」

「……まさか!？」

浩介ははっとした表情をした。

それを見た俺も気づいた。

この二人が何をしようとしているのかも

そして月峰の手が不意に動いた瞬間。

ズガアアアアン!!!

辺りに轟音が鳴り響いた。

その音に、生徒達が逃げるように体育館から逃げ出して行った。付近には俺と浩介、月峰達しか残されていなかった。

「そのまさかだよお。これを見てね」

「そ、それは!？」

そう言っただけで彼女達がとりだしたのは一冊の魔導書だった。

「ふふ。気付いた?そうよ、これはあんたの妹さんの議定書さ」

「あの子のを使うのは嫌なんだけどねえ」

彼女達にはにやにやとはらわたが、煮えくりかえりそうな笑みを浮かべながら俺達に行った。

「これで形勢逆転ね。知ってしまったからには、あなた達には死んでもらうわ」

「雄真」

「ああ」

俺は浩介の言葉の意味をすぐに察知した。

俺は浩介に答えたのと同時に、自分の中にある異種の力……ASM
を呼び起こす。

「す、姿形だけ変わっても今のあたし達には無敵よ」

「はあく銀髪の浩介と雄真も素敵」

横を見れば浩介も魔王の姿だった。

「黙れ」

「貴様らの罪……我が手において裁きを与えてくれる……！」

俺と浩介の言葉で、戦いは始まった。

第105話 最終決戦

「まずは僕から……闇よ、全てを滅せ！」

浩介から離れた闇魔法が、彼女たちを襲う。

それは彼女達に、命中するかと思われた瞬間だった。

「残念。儀流・序幕、万物の楯」

峰月によって張られた透明な楯により、浩介の魔法は防がれた。

「だったら……アダファルス！」

ASMによって威力が上げられた魔法弾を放つ。

しかし、それは浩介の魔法と同じだった。

「次はあたし達の攻撃ね。行きなさい、儀流・特幕、絶対の定義域」

「っち！！」

峰月によって、俺達に魔力光が放たれる。

ダメージは入らなかったが、俺はこの効果を知っていた。

魔法弾を喰らっていなくても、ダメージが入る
それがこの絶対の定義域だ。

「行くよ、レイブルスレイブン」

月本の遊ぶような口調で放たれた魔法弾が、俺達に向けて放たれる。

それはスピードが遅かった事もあって避けるのに苦労はしなかったが……

「こつぐ!?!」

定義域の効果でダメージが入ってしまった。

「今度はこつちだ!!」

浩介はそう言うと、剣状のクリエイトを手に彼女達の元に向かって行く。

そして、二人が攻撃するよりも早く……。

「切り裂け! 一刀両断!!」

「きゃああああ!!?!」

浩介が繰り出した強烈な一撃は、峰月が張り巡らした防御魔法を通り越して、二人にダメージを与えた。

その力の先にあるもの 第105話「最終決戦」

「な、なぜ!?! 防御魔法は張り巡らせたはずよ!」

「残念ながら、僕の技の中には、防御魔法を無効化する技があるのでね」

混乱する峰月に対し浩介が余裕な様子で、答えた。

「なるほど……でもあたしが使った定義域はまだ有効だよ」

月本の言う通り、彼女が使った定義域だけはいまだに有効だった。

「次はあたし達の番だね。行って、儀流・第2幕、再燃の怒り」

「ぐううー！」

俺達に向けて放たれた雷撃は、攻撃事態は防いだが、やはりダメー
ジが入ってしまう。

「闇よ、我に集え！」

そんな中浩介は、強大な闇魔法を放とうと、闇を集め始めた。

「隙を作るなんて馬鹿ね」

「儀流・特幕、パーフティ」

「っぐ！」

峰月に放たれた魔力光によって、詠唱されていた浩介の魔法が消え、
さらに後ろの方に吹っ飛ばされた。

「全ての魔法の行使を停止出来て、相手を後ろに吹っ飛ばせるなん
て、本当にすごいわね」

「うんうん。これなら高月家で生まれたかったな」

（くそ！）

俺は、二人のやり取りを聞いて、内心舌打ちをした。

向こうは余裕だが、こっちは追いつめられている。

何よりも、議定書が向こうにあるのが問題だった。

議定書を壊したらまずいと言う事で、浩介は全力を出せずにいた。

「高月家儀流・第1幕、駆け巡りし隼！」

そんな中、浩介は自分の移動速度を上げた。

「おい！ そのこの馬鹿二人」

「ふん、その余裕も今のうちよ」

「あたしは馬鹿じゃないよお」

浩介の言葉に、それぞれが答える。

「生意気言う前に、特幕の盟約の黙示録でも使ってみろ！」

「な！？」

俺は、浩介の言葉に、思わず叫んだ。

それも当然だ。

盟約の黙示録は魔導書の持ち主が仲間にして魔導書内に取り込んだ者呼び出し、さらには仲間の攻撃力を上げると言うチートのような物だ。

そんな物を浩介は使うように言ったのだ。

「ふふ。いいわ、使ってあげようじゃない。儀流・特幕、盟約の黙示録！」

峰月が儀流を発動させた。

「「「「……………」」」」」

俺達が固まるのも当然だ。

なんせ、発動させたは良い物の、何も起きなかったのだ

「な!?! なぜよ!!! 出てきなさいよ!!!」

「所詮は貴様の實力なんぞその程度なんだ」

慌てる峰月に浩介はそう言い放つ。

「何だと!?!」

「隙だらけだ!?!」

浩介は峰月の隙をつき、峰月に急接近した。

「これは返して貰ったぞ!」

「そ、そんな……速すぎよ」

浩介が手にしている議定書を見て、峰月が驚きながら声を上げた。

「……久美、力を貸して!」

浩介の右手に握られている黄色に白銀の勾玉から光があふれ始めた。

「つく!?!」

俺はそのあまりにも強い光量に目を閉じた。

やがて光が無くなって目を開けた俺が見たのは……。

「こ、浩介?」

俺はその姿に思わず見とれた。

黒一色の魔法服は半分が白で半分が黒の物に変わり、魔族の証でもある赤く光輝いていた目の色も片方は、赤でもう片方は透き通った青だった。

「行くぞ！　これが本物の高月家儀流だ！」

浩介はそう言うや否や、久美の議定書を開いた。

「ツク！　議定書はこつちにもあるわ！　佐恵子、攻撃よ！！」

「遅すぎる！　儀流・特幕、パーフティ！！」

「くああああ！！？」

浩介から放たれた魔力光を浴びた二人は俺達が喰らった以上の勢いで、遠くに飛ばされた。

「な、何故よ……技も一緒のはずなのに」

「嘆いている暇はないぞ！　これが本当の力、儀流・特幕、盟約の黙示録！！」

嘆く彼女たちをしり目に、浩介は容赦なく、儀流魔法を発動させた。

そして俺は魔力を集めていた。

「我が主の名の元に……ダークインフィニティー！」

「ツグウ！？　ま……だまだよ」

「全てを破壊するが我が使命……破壊の波城門！」

「ぎ、議定書があ！？」

ラティーヌの魔法波により、議定書は粉々に破壊された。

「呼ばれたからにはやらなければ……ダークインフィニティー！
！」

「ぐああああ……！」

ザルヴィスの攻撃で二人は、かなりのダメージが入っていた。
そして……

「歌い狂え……ディゲード、エツジ……！」

集めた魔力を俺は二人に向けて、砲撃として放った。

「きゃああああああ……！」

その白銀の砲撃は、二人の罪人を包み込んだのだった。

【閲覧注意】第106話 惨劇の始まり（前書き）

今回久々の閲覧注意報発令です。

と言っことで、読まれる際は自己責任でお願いします。

【閲覧注意】第106話 惨劇の始まり

「なぜ……議定書はあるから、パワーバランスでは対等のはずなのに……なぜよ!!」

砲撃を喰らった峰月は地面をたたいて呟いていた。

「確かに議定書があったから強くなっただろうが、高月家の魔法と
言うのは、どんなに天才と言われた魔法使いでもすぐに使えるよう
にはならない。必ずどこかが空転して効力が弱くなったりする」
「まさか、あんたそれが分かって」

浩介の言葉に峰月が浩介を指差して言った。

浩介は、それが分かって、戦っていたと言う事になる。

「だからこそ、現場に黒い跡が残った」

「え!? あれって魔力残渣じゃ……」

「確かにそうだが、あれはちょっと違ってな、闇残差と言うもので、
闇を込めた量が多すぎるとあんな風になってしまっんだ。全員に使
ったのは、魔力光に触れたもの全てを意識不明状態に陥らせる”終
幕の闇の灯火”だったと言う事もすぐに分かったんだ」

俺の言葉に、浩介が苦笑いしながら答えた。

その力の先にあるもの

第106話「惨劇の始まり」

「盟約の黙示録だつて、あれは力だけではなくカリスマ性や統治能力も必要だ。それが無ければ仲間が出てくる事は実質不可能だったわけだ」

「それで、何故こんな事をしたんだ？ 言ってみろ」

俺は峰月に、この事件を引き起こした理由を問いただした。

「なぜ？ それはね」

「邪魔だったんだよねえ〜あいつら。浩介と雄真はあたしの物なのに」

「「!!!??」」

俺と浩介はその一言を聞いた瞬間、俺の中で何かが切れた。

浩介 Side

「……ために」

「え？」

僕は怒りを抑えられなかった。

大事な人をそんな理由で襲われたなんて……。

「そんな事の為に、杏璃や久美を……うあああああああああ！！！」

僕は我慢の限界を超えた。

僕の怒り呼応して体中から魔力が溢れかえる。
懐かしい感触だった。

これは……そう。

前に怒りで人を殺した時のと同じ感覚だ。

「許さねえ、お前らを……殺す!!」

「ひ!?!」

屑どもが声を上げ後ずさる。

僕は、この怒りの衝動に身を委ねた。

しかし、そんな瞬間に、ふと杏璃の声が聞こえた。

『浩介に人殺しは似合わないわよ』

『もう人を殺さないで浩介!』

それは前に杏璃に言われた言葉だった。

(そうだよな……あの時に僕はもうこんな事をしないって誓ったんだ。それに殺しても残るのは虚しさだけ)

僕は暴走しかけた魔力を抑えた。

彼女達との距離はあったが、右手には鋭い剣が握られていた。

(二人を刺し殺す気か?)

僕は自分に苦笑いをしながら聞いてみた。

「なんで、殺さないの?」

「え?」

僕は横から掛けられた冷たい声に思わず後ろを見た。

「……………っ!!」

雄真の姿を見た瞬間、僕は恐怖に震えた。

雄真の目から光が消えていた。

「浩介がやらないんなら……………」

「な!?!」

雄真は僕が持つ剣を強引にひったくった。

「俺がやる!!」

「雄真!?! やめるんだ!」

「邪魔するな!」

僕の声はもはや雄真には届かなかった。

(こつなつたらやるしかないか)

僕は覚悟を決めた。

前の借りを返すために。

たったそれだけのために、僕は掛ける雄真の前方に回った。

雄真は、僕が前にいるのをお構いなしに剣を構えて走る。

そして……………

ザクッ

「がふ!?!」

体に鋭い痛みが走った。

雄真の持っていた剣は、僕の体を貫いていた。そして、今度はそれを無理やり引き抜いた。

「ぐッ！」

ガチャン！

次の瞬間、何かを落とすような音が聞こえた。見れば、それは雄真が持っていた剣だった。

（正気を取り戻したんだ）

僕はほっと胸を撫で下ろした。

S i d e o u t

「そ、そんな……」

俺は目の前の光景が信じられなかった。

俺はただ

前にいた障害物をどけたはずなのに……
今俺の前にいたのは……

「雄真……正気に……戻ったんだな」

体から血を流している浩介だった。
それだけで、俺は自分のした事を感じてしまった。

「浩介！ 気にすんな え？」

「これは、暴走した僕を止めようとして付けた物だ。良いな？」
「でも いいな？ ……わかった」

俺は浩介の言った事に頷いた。

なんで浩介がそんな事を言ったのかは、全く分からなかった。

「さて……そろそろだな」

浩介が何事もなかったように立ち上がると、ドアが勢い良く開かれた。

「大臣！ 被疑者を取り押さえに……って、どうしたんですか！？
その血は……！」

入ってきた神代さんが浩介の体を見て、慌てるように叫んだ。

「ただの自損事故だ！ それよりも、早くこいつを連れてけ！」
「は、はい！ すぐに医療班を呼びます……！」

神代さんはそう言うと、彼女たちを拘束して連れて行った。

「さて、僕もやらないとな」

「何をするんだ？ と言うより、そんな状態で動かない方が……」
「眠ってるやつらに、スタークスターを掛けないと……あの魔法は時間が経てば勝手に死ぬようになってるんだ。だから早くやらな
いと……」

俺は浩介の言葉に、驚きを隠せなかった。
今ここで浩介の治療を優先したら、春姫達の命が危ない。
だけど、春姫達を助けたら、浩介は……

「大丈夫。僕は成すべき事を終わらせるまでは倒れないよ。だから、頼む！雄真」

「……………分かったよ」

浩介の表情は真剣だった。

だからこそ、俺は浩介の頼みを聞き入れたのだ。

「それじゃ、病院に、転送！！」

そして、俺達は病院へと転送したのだった。
いつ倒れるかもしれない浩介と共に。

第107話 皆を助けるために（前書き）

今回は閲覧注意にしようかどうかを迷いましたが、しませんでした。ただ人によっては嫌な気分になる可能性もあるのでご注意ください。

第107話 皆を助けるために

「よし、到着つと」

俺と浩介は病室の前に転送していた。

「……………」

浩介は目を閉じると、魔王の力を覚醒させた。

「それじゃ、雄真達はここで待っていてくれ」

「……………分かった。頑張れよ」

俺は浩介に何を言っても無駄だと悟り、応援をする事で送りだすことにした。

浩介達の無事を祈りながら…………

その力の先にあるもの 第107話「皆を助けるために」

浩介Side

「6人部屋に個室が4つ…………計5回使わないといけないのか」

僕は最初の病室に入るとそう呟いた。

僕の使うスタークラスターは12時間で1回のみしか使えないのだ。

それ以上使おうとすると身の破滅を迎えるからだ。

しかし、12時間も待つ余裕なんて、今は無かった。

(とにかく、無理をしてもやるぞ)

僕は心の中で気合を入れると、クリエイトを構えた。

「全ての命を司りし星達よ。かの者らの意識を取り戻したまえ……」

その言霊に呼応するように、地面に大きく広がった魔法陣が輝き出す。

「魔王、高月浩介が命じる。皆の目を覚まして！ スタークラスター……」

そして、その言葉と同時に辺りは光に包まれ、やがてはそれが薄らいで行った。

(よし、成功だ。次に行かないと)

僕は準さん、水園にすもも、小雪さんに上条さん、信哉の6人に治療魔法を掛けると、病室を後にした。

「ッ!? どうだったんだ?」

「ああ、滞りなく成功だ。少し経てば目を覚ますだろう」

部屋を出てきた僕に八子と雄真が詰め寄って聞いて来たので、僕はそう答えた。

「そうか……浩介、ありがとう」

「ど、どういたしまして……それじゃ、次に行くな」

ハチが珍しくお礼を言ってきたので、若干怖くなりながら、僕は次の病室へと向かうのだった。

「はあ……はあ……ここで、最後……か」

あれからどのくらいの時間が、立ったのかが分からなかった。

僕はあれから残る3人の病室を回っては、治癒魔法を掛けていた。それは、限度を超えていた物だった。

(くそ！ 目の前がぼやけて見える)

既に体に力が入りずらくなっていた僕は、今動いていて不思議な物だった。

もうすでに、血と言う血は全て流れ出てしまった。
なのに僕はこうして動ける。

これが魔族の最終能力”最後の晚餐”なのだろう。

本人のやり残した事を成し遂げるまで朽ち果てないこの能力は、今僕にとつて嬉しいほど役に立っていた。

だからこそ、僕はやり遂げなければいけないんだ。

「行くぞ……最後のスタークスターを！」

僕は気合を入れ、最後の一人……杏璃に治癒魔法を掛けた。

「よし……これで終わった」

僕がそう呟いた途端だった。

ガタン

僕は力なく地面に崩れ落ちた。

「はは。もう限界か」

こんな時にでも笑える自分に、少しだけうらやましいと思いつつ、力を振り絞り杏璃の眠るベッドの端に手を掛けて、杏璃の顔を見た。

「せめて……杏璃の目が覚めるまでも ツゲホッ!? ゴホッ!

」

僕の呟きを否定するように、体の中で何かが無くなり始めた。

(持ってあと5分か)

「……………」

「杏璃!?!」

そんな時だった。

杏璃の意識が戻ったのだ。

「浩……介？」

「ああ、そつだよ。浩介だよ！」

僕は杏璃に笑顔で答えた。

これほど嬉しい事は無かった。

「あれ？ あたし、部屋にいて……それで」

杏璃は、何故自分が病室にいるのかを、必死に思いだしていた。

「良かった……本当に良かった」

「な、なにが何だか分からないけど、涙でも拭いたらどう？」

「え？」

杏璃に指摘された僕は、片手で頬を触った。

すると、水のような物が手に付いたのを感じた。

（そつか……泣けるんだな。僕も）

「杏璃、だいじよ ツ！？」

自分が代わった事に実感を持った僕は、杏璃に声をかけようとした。

しかし、すでに僕の体はそれを許してはくれなかった。

「ど、どうしたの！？ 浩介！ ……っ！！？ ちょっと、何でこんなに血が付いてるのよ！？」

ベッドから崩れるようにして落ちた僕を心配するように見てきた杏璃は、服にこびりつく血を見て声を荒げていた。でも、僕にはもう答える事は出来なかった。

(杏璃の声が聞けたからいいか)

僕はそれだけで満足だった。

「浩介！？　しっかりして！　ねえ、浩介！！！！！！」

杏璃の悲痛な叫び声を最後に、僕の意識は無くなった。

S i d e o u t

第7章「地に堕ちた魔法使い」　完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2721q/>

その力の先にあるもの

2011年12月11日16時53分発行